兵庫県文化財調査報告　第336冊

朝来市山東町所在

柿坪遺跡

－本文編－

平成２０年３月

兵庫県教育委員会

朝来市山東町所在

柿坪遺跡

－本文編－

一般国道483号北近畿自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成２０年 ３ 月

兵庫県教育委員会

例　　言

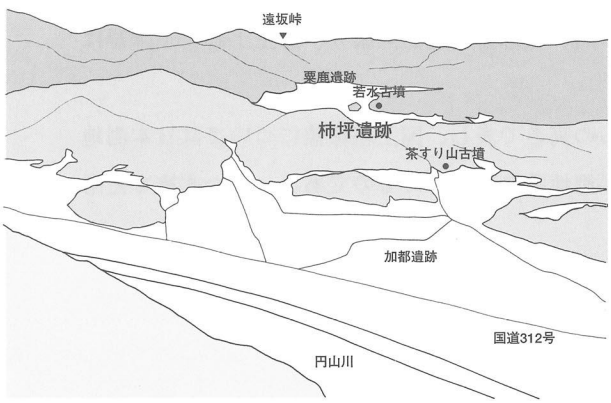
1．本書は朝来市山東町大月に所在する柿坪遺跡の発掘報告である。
2．発掘調査は国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所が行う一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業に伴って実施したものである。
3．発掘調査にあたっては、兵庫県教育委員会と豊岡河川国道事務所が委託契約を締結し、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・兵庫県立考古博物館が実施したものであり、本発掘調査・整理調査に係る経費は豊岡河川国道事務所が負担した。
4．遺物写真の撮影は外部委託で実施した。
5．本書の執筆は本文目次に記したとおりに分担し、編集は吉識雅仁が行った。
6．本発掘調査で作成した写真・図面等の記録類と出土した遺物類は全て兵庫県立考古博物館で保管している。
7．本発掘調査に際しては、関係各機関をはじめ、以下の方々に御教示、御協力を頂いた。御芳名を記して深謝の意を表する。（以下、五十音順敬称略）

青木哲哉（立命館大学）・青柳泰介（奈良県立橿原考古学研究所）・加賀見省一（日高町教育委員会）・谷本進（八鹿町教育委員会）・田畑基（朝来郡広域行政事務組合）・中島雄二（朝来郡広域行政事務組合）・松井章（奈良文化財研究所）・宮本長二郎（東北芸術工科大学）・山根実生子（養父郡広域行政事務組合）

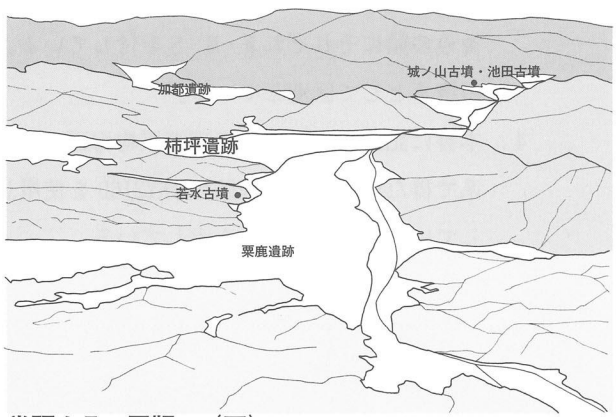
凡　　例

1．本報告での遺構番号は、調査時の遺構番号に地区番号を付して５桁としたものであり、５桁目が地区番号、下４桁の内の正数が調査時の遺構番号である。
2．遺構図の内、網掛け部分は焼土、及び炭化物を表現している。
3．遺物には通し番号を付し、土器・土製品は区別なく通し番号とし、木製品・金属製品・石製品には番号の頭にそれぞれＷ・Ｍ・Ｓを付している。土器の内、須恵器は断面黒塗り、弥生土器・土師器は白抜きとして区別している。
4．本書に記述した標高は東京湾平均海面（T.P.）からの高さで表し、国土座標値については日本測地系で得た値を国土地理院のTKY2JGDを使用して世界測地系に変換したものである。また本書で使用している方位は座標北を示している。

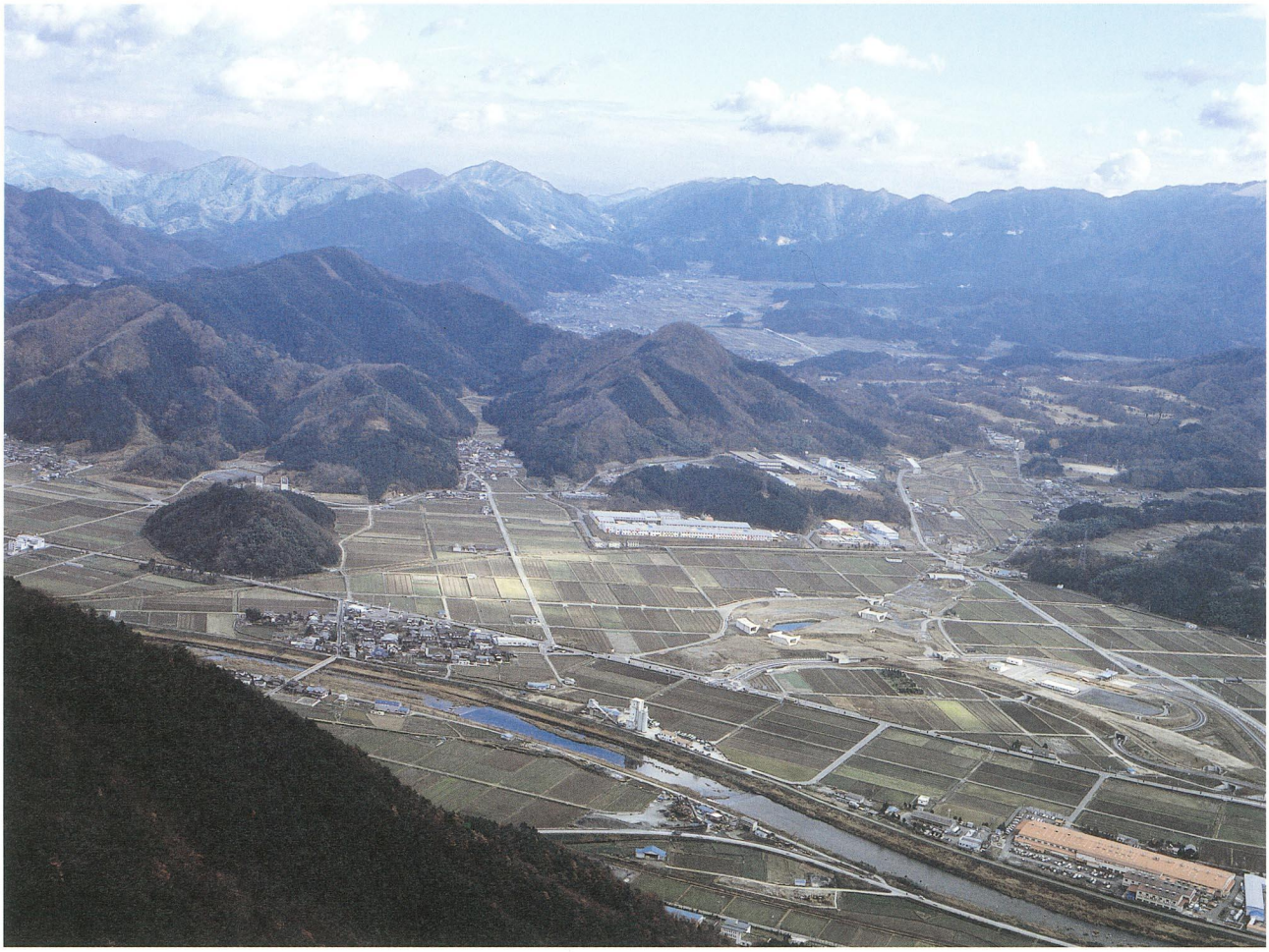
遺跡の位置



巻頭カラー図版１（上）



巻頭カラー図版１（下）



遺跡遠景（西から）

遺跡遠景（東から）

遺跡遠景（西から）

遺跡遠景（北から）

遺跡近景（北から）

遺跡近景（東から）

Ⅰ・Ⅱ区 全景（西から）

Ⅱ区 主要掘立柱建物群（西から）

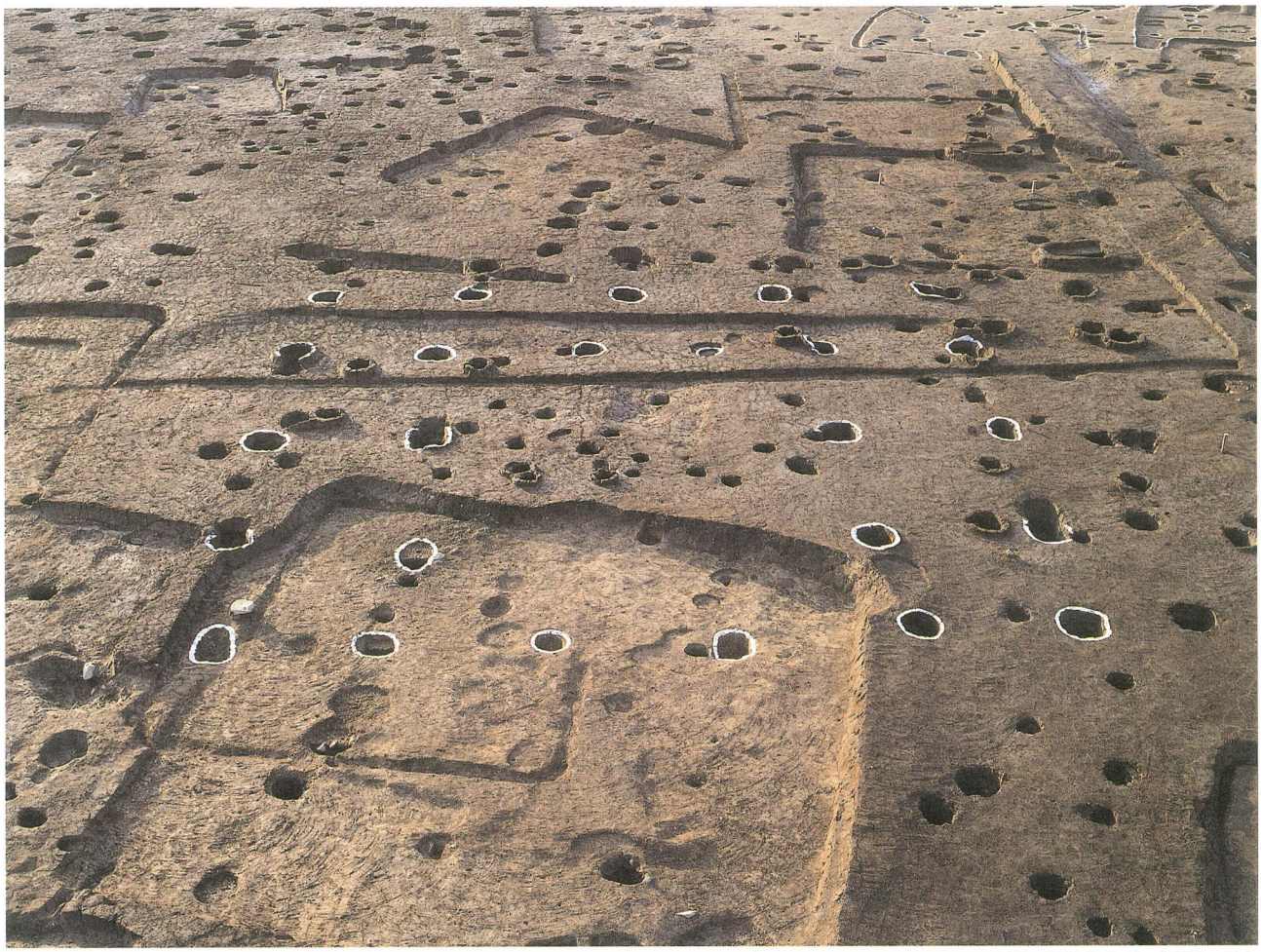
Ⅲ区 全景（南から）

Ⅳ区 全景（北西から）

SB20005（西から）

SB20005 北棟持柱柱穴（西から）

SB20016（南から）



SB20019（南から）

SB20012（東から）

SB20008（東から）

SB20001（東から）

SB20002（南から）

SH20018（東から）

SH20018 竈（東から）

SH30031 竈（東から）

SH30031 竈焚口想定復元

SD30001 突出部（SK20018）（北から）

SD10001（北から）

SK20026 出土土器

SK30008 出土土器

SH20035 出土土器

SH30011 出土土器

SH30001 出土土器

SB20005 出土土器

SD10001 出土土器

SH20001 出土土器

211

248

左）土師器角杯（SH20003 出土）
右）須恵器台付鉢（SH20017 出土）

須恵器壷（SD10001A 出土）

34

須恵器甕（SD10001A 出土）

36

陶質土器甕（SH30005 出土）

製塩土器

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と環境（吉識）
第１節　遺跡の位置 …… 1
第２節　遺跡の環境 …… 2
１．歴史的環境 …… 2
２．地理的環境 …… 10
第３節　遺跡の範囲 …… 12
第２章　調査に至る経緯と経過（吉識）
第１節　調査に至る経緯 …… 15
第２節　調査の経過と体制 …… 16
第３章　遺構（吉識）
第１節　Ⅰ区の遺構 …… 23
第２節　Ⅱ区の遺構 …… 27
第３節　Ⅲ区の遺構 …… 59
第４節　Ⅳ区の遺構 …… 75
第４章　遺物（池田　征宏）
第１節　土器 …… 84
１．弥生土器・土師器の型式分類 …… 84
２．Ⅰ区出土の土器 …… 88
３．Ⅱ区出土の土器 …… 101
４．Ⅲ区出土の土器 …… 128
５．Ⅳ区出土の土器 …… 150
第２節　木製品・石製品・金属製品・自然遺物 …… 154
第５章　自然科学的分析
第１節　木製品の樹種 …… 157
第２節　出土種子の同定 …… 162
第３節　木材年代測定 …… 164
第６章　まとめ
第１節　遺物について（池田） …… 167
第２節　遺跡の変遷（吉識） …… 183
第３節　竪穴住居の類型と変遷（吉識） …… 193
第４節　掘立柱建物の検討（吉識） …… 199

巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版１
（上）遺跡遠景（西から）
（下）遺跡遠景（東から）
巻頭カラー図版２
（上）遺跡遠景（西から）
（下）遺跡遠景（北から）
巻頭カラー図版３
（上）遺跡近景（北から）
（下）遺跡近景（東から）
巻頭カラー図版４
（上）Ⅰ・Ⅱ区全景（西から）
（下）Ⅱ区主要掘立柱建物群（西から）
巻頭カラー図版５
（上）Ⅲ区全景（南から）
（下）Ⅳ区全景（北西から）
巻頭カラー図版６
（上）SB20005（西から）
（下）SB20005 北棟持柱柱穴（西から）
巻頭カラー図版７
（上）SB20016（南から）
（下）SB20019（南から）
巻頭カラー図版８
（上）SB20012（東から）
（下）SB20008（東から）
巻頭カラー図版９
（上）SB20001（東から）
（下）SB20002（南から）
巻頭カラー図版 10
（上）SH20018（東から）
（下）SH20018 竈（東から）
巻頭カラー図版 11
（上）SH30031 竈（東から）
（下）SH30031 竈焚口想定復元
巻頭カラー図版 12
（上）SD30001 突出部（SK20018）（北から）
（下）SD10001（北から）
巻頭カラー図版 13
（上）SK20026 出土土器
（下）SK30008 出土土器
巻頭カラー図版 14
（上）SH20035 出土土器
（下）SH30011 出土土器
巻頭カラー図版 15
（上）SH30001 出土土器
（下）SB20005 出土土器
巻頭カラー図版 16
（上）SD10001 出土土器
（下）SH20001 出土土器
巻頭カラー図版 17
（上左）土師器角杯（SH20003 出土）
（上右）須恵器台付鉢（SH20017 出土）
（中）須恵器壷　（SD10001A 出土）
（下）須恵器甕　（SD10001A 出土）
巻頭カラー図版 18
（上）陶質土器甕（SH30005 出土）
（下）製塩土器

付図・挿図目次

付図　遺跡全体図

第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 4
第 2 図　遺跡の位置と南但馬の大型古墳 …… 6
第 3 図　遺跡の微地形 …… 11
第 4 図　遺跡の範囲と調査歴 …… 13
第 5 図　第 2 次本発掘調査風景 …… 17
第 6 図　第 2 次本発掘調査
　　雪に埋もれた調査区 …… 17
第 7 図　本発掘調査区の配置図 …… 18
第 8 図　第 2 次本発掘調査風景 …… 19
第 9 図　第 3 次本発掘調査風景 …… 19
挿 10 図　第 4 次本発掘調査風景 …… 20
第 11 図　第 5 次本発掘調査風景 …… 20
第 12 図　整理調査作業風景 …… 22
第 13 図　整理調査作業風景 …… 22
第 14 図　SB20016 推定図 …… 51
第 15 図　SP30094 …… 73
第 16 図　弥生土器・土師器の分類（1） …… 84
第 17 図　弥生土器・土師器の分類（2） …… 85
第 18 図　弥生土器・土師器の分類（3） …… 86
第 19 図　弥生土器・土師器の分類（4） …… 87
第 20 図　土器の変遷（1） …… 168
第 21 図　土器の変遷（2） …… 169
第 22 図　土器の変遷（3） …… 172
第 23 図　土器の変遷（4） …… 173
第 24 図　土器の変遷（5） …… 174
第 25 図　土器の変遷（6） …… 175
第 26 図　土器の変遷（7） …… 178
第 27 図　土器の変遷（8） …… 179
第 28 図　土器の変遷（9） …… 180
第 29 図　土器の変遷（10） …… 181
第 30 図　遺跡変遷図 ……191・192
第 31 図　竪穴住居変遷図 1 …… 194
第 32 図　竪穴住居変遷図 2 …… 195
第 33 図　掘立柱建物類型図 …… 201
第 34 図　四面庇状施設付大型建物 …… 204
第 35 図　SB20005 柱配置方法想定図 …… 206
第 36 図　SB20019 柱配置方法想定図 …… 209
第 37 図　掘立柱建物 A 群 …… 212

表目次

表 1　遺跡地名表 …… 5
表 2　発掘調査年次表 …… 21
表 3　整理調査年次表 …… 21
表 4　掘立柱建物と他遺構の先後関係 …… 186
表 5　竪穴住居類型別変遷表 …… 198
表 6　古墳時代四面庇状施設付
　　掘立柱建物一覧表 …… 206
表 7　掘立柱建物一覧表 …… 215
表 8　竪穴住居一覧表 …… 216 ～ 219
表 9　土器観察表 …… 220 ～ 238

図　版　目　次

図版 1　Ⅰ区全体図
図版 2　Ⅰ区北壁の土層
図版 3　Ⅰ区氾濫原と遺構形成面下の土層
図版 4　SH15001　SH15001　遺物出土状況
図版 5　SH10001・SH10002
図版 6　SD10001
図版 7　SD10002・10003断面図
図版 8　Ⅱ区全体図
図版 9　Ⅱ区北壁の土層
図版 10　Ⅱ区東壁の土層
図版 11　Ⅱ区西壁の土層
図版 12　SH20001
図版 13　SH20003・SH20004・SH20005・SH20032
図版 14　SH20003
図版 15　SH20004
図版 16　SH20006
図版 17　SH20007・SH20008
図版 18　SH20009
図版 19　SH20010・SH20011
図版 20　SH20014
図版 21　SH20015
図版 22　SH20016
図版 23　SH20017・SH20058
図版 24　SH20018
図版 25　SH20019
図版 26　SH20020
図版 27　SH20021　SH20026
図版 28　SH20022
図版 29　SH20023　SH20024
図版 30　SH20025　SH20030
図版 31　SH20027
図版 32　SH20028
図版 33　SH20029
図版 34　SH20031
図版 35　SH20033
図版 36　SH20034　SH20041
図版 37　SH20035　SH20035　遺物出土状況
図版 38　SH20036
図版 39　SH20037
図版 40　SH20038　SH20039
図版 41　SH20040　SH24064
図版 42　SH20042　SH20043　SH20044　SH20046
図版 43　SH20047　SH20048
図版 44　SH20051　SH20052　SH20053
図版 45　SH20055
図版 46　SH20057
図版 47　SH20059
図版 48　SH20060・SH20061
図版 49　SH25063
図版 50　SB20001　SB20003
図版 51　SB20002　SB20004　SB20009　SB20014
図版 52　SB20005
図版 53　SB20005　棟持柱柱穴
図版 54　SB20005　身舎側柱柱穴
図版 55　SB20005　南北面庇柱穴
図版 56　SB20005　西面庇柱穴
図版 57　SB20005　東面庇柱穴
図版 58　SB20006　SB20007　SB20010　SB20013
図版 59　SB20008
図版 60　SB20011　SB20015　SB20017　SB20020
　　SB20023
図版 61　SB20012
図版 62　SB20016
図版 63　SB20016　身舎柱柱穴
図版 64　SB20016　南面庇と孫庇柱穴
図版 65　SB20016　東西面庇柱穴
図版 66　SB20018　SB20022
図版 67　SB20019
図版 68　SB20021
図版 69　SK20002　SK20010　SK20016
図版 70　SK20026　SK20033
図版 71　SK20035　SK20037

図版 72　その他の土壙断面図 (SK20034・20036・20038・20038・20039・20040)
SX20003・20004
図版 73　SD20004　SD20005　SD20006
SD20011 断面図
図版 74　Ⅲ区全体図
図版 75　Ⅲ区北壁の土層
図版 76　Ⅲ区西壁の土層
図版 77　SH30001　SH30002
図版 78　SH30001　SH30002　遺物出土状況
図版 79　SH30001　SH30002　竈と屋内土壙
図版 80　SH30003
図版 81　SH30004・SH30025
図版 82　SH30005　SH30005　遺物出土状況
図版 83　SH30006・SH30007
図版 84　SH30008・SH30023
図版 85　SH30009
図版 86　SH30010
図版 87　SH30011
図版 88　SH30012・SH30022
図版 89　SH30013　SH30014
図版 90　SH30015　SH30017
図版 91　SH30016
図版 92　SH30018
図版 93　SH30019・SH30036
図版 94　SH30020
図版 95　SH30020　竈と屋内土壙
図版 96　SH30021・SH30026
図版 97　SH30024
図版 98　SH30027
図版 99　SH30028　SH30029
図版 100　SH30029　竈と屋内土壙
図版 101　SH30030　SH30031
図版 102　SH30031　竈と竈復元想定図
図版 103　SH30032
図版 104　SH30033・SH30034
図版 105　SH30035
図版 106　SK30001　SK30002　SK30014
図版 107　SB30001　SB30002　SB30003　SB30004
図版 108　SB30005　SB30006　SB30007　SB30008
図版 109　SB30009　SB30010
図版 110　SD30001 断面図　SD30001 上面の集石
図版 111　Ⅳ区全体図
図版 112　Ⅳ区北壁の土層
図版 113　SH40001・SH40020
図版 114　SH40004
図版 115　SH40005
図版 116　SH40006・SH40007
図版 117　SH40008・SH40025　SH40014
図版 118　SH40009・SH40010・SH40011
図版 119　SH40009　竈と屋内土壙
図版 120　SH40010　竈と屋内土壙
図版 121　SH40011
図版 122　SH40012　SH40013
図版 123　SH40015
図版 124　SH40016　SH40017
図版 125　SH40018
図版 126　SH40024　SK43010
図版 127　SB40001　SB40002
図版 128　Ⅰ区出土土器 (1)
図版 129　Ⅰ区出土土器 (2)
図版 130　Ⅰ区出土土器 (3)
図版 131　Ⅰ区出土土器 (4)
図版 132　Ⅰ区出土土器 (5)
図版 133　Ⅰ区出土土器 (6)
図版 134　Ⅰ区出土土器 (7)
図版 135　Ⅰ区出土土器 (8)
図版 136　Ⅰ区出土土器 (9)
図版 137　Ⅰ区出土土器 (10)
図版 138　Ⅰ区出土土器 (11)
図版 139　Ⅱ区出土土器 (1)
図版 140　Ⅱ区出土土器 (2)
図版 141　Ⅱ区出土土器 (3)
図版 142　Ⅱ区出土土器 (4)
図版 143　Ⅱ区出土土器 (5)
図版 144　Ⅱ区出土土器 (6)
図版 145　Ⅱ区出土土器 (7)
図版 146　Ⅱ区出土土器 (8)

図版 147　Ⅱ区出土土器 (9)
図版 148　Ⅱ区出土土器 (10)
図版 149　Ⅱ区出土土器 (11)
図版 150　Ⅱ区出土土器 (12)
図版 151　Ⅱ区出土土器 (13)
図版 152　Ⅱ区出土土器 (14)
図版 153　Ⅱ区出土土器 (15)
図版 154　Ⅱ区出土土器 (16)
図版 155　Ⅱ区出土土器 (17)
図版 156　Ⅱ区出土土器 (18)
図版 157　Ⅱ区出土土器 (19)
図版 158　Ⅱ区出土土器 (20)
図版 159　Ⅱ区出土土器 (21)
図版 160　Ⅱ区出土土器 (22)
図版 161　Ⅲ区出土土器 (1)
図版 162　Ⅲ区出土土器 (2)
図版 163　Ⅲ区出土土器 (3)
図版 164　Ⅲ区出土土器 (4)
図版 165　Ⅲ区出土土器 (5)
図版 166　Ⅲ区出土土器 (6)
図版 167　Ⅲ区出土土器 (7)
図版 168　Ⅲ区出土土器 (8)
図版 169　Ⅲ区出土土器 (9)
図版 170　Ⅲ区出土土器 (10)
図版 171　Ⅲ区出土土器 (11)
図版 172　Ⅲ区出土土器 (12)
図版 173　Ⅲ区出土土器 (13)
図版 174　Ⅲ区出土土器 (14)
図版 175　Ⅲ区出土土器 (15)
図版 176　Ⅲ区出土土器 (16)
図版 177　Ⅲ区出土土器 (17)
図版 178　Ⅲ区出土土器 (18)
図版 179　Ⅲ区出土土器 (19)
図版 180　Ⅲ区出土土器 (20)
図版 181　Ⅳ区出土土器 (1)
図版 182　Ⅳ区出土土器 (2)
図版 183　Ⅳ区出土土器 (3)
図版 184　Ⅳ区出土土器 (4)
図版 185　木製品 (1)
図版 186　木製品 (2)
図版 187　木製品 (3)
図版 188　木製品 (4)
図版 189　木製品 (5)
図版 190　木製品 (6)
図版 191　木製品 (7)
図版 192　木製品 (8)
図版 193　木製品 (9)
図版 194　木製品 (10)
図版 195　石製品 (1)
図版 196　石製品 (2)
図版 197　石製品 (3)
図版 198　金属製品他

写真図版目次

写真図版１　Ⅰ区の遺構(１)
　全景(航空撮影)
写真図版２　Ⅰ区の遺構(２)
　(上) Ⅰ区西半（東から）
　(中) SH10001（南から）
　(下) SH10002（南から）
写真図版３　Ⅰ区の遺構(３)
　(上) SH15001　土器出土状況（西から）
　(中) SH15001（北から）
　(下) SD10001　断面（南から）
写真図版４　Ⅰ区の遺構(４)
　SD10001 全景（北から）
写真図版５　Ⅰ区の遺構(５)
　(上) SD10001A　護岸状況（南から）
　(中) SD10001A　護岸状況（南から）
　(下) SD10001A　護岸状況（南から）
写真図版６　Ⅰ区の遺構(６)
　(上) SD10001A　護岸状況細部（南から）
　(中) SD10001A　護岸状況細部（南から）
　(下) SD10001A　護岸状況細部（北東から）
写真図版７　Ⅰ区の遺構(７)
　(上) SD10001A　護岸板材細部（南西から）
　(中) SD10001A　護岸板材細部（北西から）
　(下) SD10001A　護岸南端杭列（北東から）
写真図版８　Ⅰ区の遺構(８)
　(上) SD10001A　護岸状況細部（西から）
　(中) SD10001A　護岸状況細部（西から）
　(下) SD10001A　護岸状況細部（西から）
写真図版９　Ⅰ区の遺構(９)
　(上) SD10001A　土器出土状況（北西から）
　(中) SD10001A　土器出土状況（北西から）
　(下) SD10001A　木製品出土状況（北から）
写真図版10　Ⅰ区の遺構(10)
　(上) SD10001　　馬歯骨出土状況
　(中) SD10001　　馬歯骨出土状況
　(下) SD10001　　完掘状況（北から）
写真図版11　Ⅰ区の遺構(11)
　(上) 堰跡（西から）
　(中) 堰跡（北から）
　(下) 堰跡（南から）
写真図版12　Ⅰ区の遺構(12)
　(上) SD10002・SD10003（南から）
　(中) SD10002　断面（南から）
　(下) SD10003　断面（南から）
写真図版13　Ⅱ区の遺構(１)
　全景（航空撮影）
写真図版14　Ⅱ区の遺構(２)
　(上) 全景（西から）
　(下) 南半遺構群全景（西から）
写真図版15　Ⅱ区の遺構(３)
　(上) 北半遺構群全景（西から）
　(下) 第４次調査区全景（西から）
写真図版16　Ⅱ区の遺構(４)
　(上) 主要建物群配置状況とSD10001・SD30001
　(下) 主要建物群全景（東から）
写真図版17　Ⅱ区の遺構(５)
　(上) SH20001（東から）
　(中) SH20001　竈（東から）
　(下) SH20003（西から）
写真図版18　Ⅱ区の遺構(６)
　(上) SH20003　土器出土状況（東から）
　(中) SH20004（東から）
　(下) SH20004　竈（東から）
写真図版19　Ⅱ区の遺構(７)
　(上) SH20032（北から）
　(中) SH20005（南から）
　(下) SH20005　竈（南から）
写真図版20　Ⅱ区の遺構(８)
　(上) SH20006（南から）
　(中) SH20007・SH20008（東から）
　(下) SH20007　竈（東から）

写真図版 21　Ⅱ区の遺構 (９)
（上）SH20009（東から）
（中）SH20011（西から）
（下）SH20015（東から）
写真図版 22　Ⅱ区の遺構 (10)
（上）SH20015　竈（東から）
（中）SH20016（西から）
（下）SH20017（南から）
写真図版 23　Ⅱ区の遺構 (11)
（上）SH20018（南東から）
（中）SH20018　竈（南東から）
（下）SH20019（東から）
写真図版 24　Ⅱ区の遺構 (12)
（上）SH20019　竈（東から）
（中）SH20020（北東から）
（下）SH20021（北から）
写真図版 25　Ⅱ区の遺構 (13)
（上）SH20022（東から）
（中）SH20022　竈（東から）
（下）SH20023（東南から）
写真図版 26　Ⅱ区の遺構 (14)
（上）SH20024（東から）
（中）SH20024　竈（東から）
（下）SH20025（南から）
写真図版 27　Ⅱ区の遺構 (15)
（上）SH20026（北から）
（中）SH20026（東から）
（下）SH20026　土器出土状況（北から）
写真図版 28　Ⅱ区の遺構 (16)
（上）SH20027（東から）
（中）SH20028（東から）
（下）SH20028　竈（東から）
写真図版 29　Ⅱ区の遺構 (17)
（上）SH20028　土器出土状況（東から）
（中）SH20029（南東から）
（下）SH20030（南東から）
写真図版 30　Ⅱ区の遺構 (18)
（上）SH20031（東から）
（中）SH20033（東から）
（下）SH20033　中央土壙（東から）
写真図版 31　Ⅱ区の遺構 (19)
（上）SH20034（南西から）
（中）SH20035（北東から）
（下）SH20035　土器出土状況（北東から）
写真図版 32　Ⅱ区の遺構 (20)
（上）SH20036（東から）
（中）SH20036　竈（東から）
（下）SH20037（東から）
写真図版 33　Ⅱ区の遺構 (21)
（上）SH20037　竈（東から）
（中）SH20038（南から）
（下）SH20039（南から）
写真図版 34　Ⅱ区の遺構 (22)
（上）SH20041（東から）
（中）SH20042（南から）
（下）SH20043（南東から）
写真図版 35　Ⅱ区の遺構 (23)
（上）SH20046（東から）
（中）SH20046　竈（東から）
（下）SH20047・SH20048（南東から）
写真図版 36　Ⅱ区の遺構 (24)
（上）SH20051（東から）
（中）SH20053（南東から）
（下）SH20054（南から）
写真図版 37　Ⅱ区の遺構 (25)
（上）SH20055（南東から）
（中）SH20055　竈（南東から）
（下）SH20055　竈（南東から）
写真図版 38　Ⅱ区の遺構 (26)
（上）SH20057（南東から）
（中）SH20057　竈（南東から）
（下）SH20058（南東から）
写真図版 39　Ⅱ区の遺構 (27)
（上）SH20058　竈（南東から）
（中）SH20059　（東から）
（下左）SH20059　竈（北東から）
（下右）SH20059　土器出土状況（東から）

写真図版 40　Ⅱ区の遺構 (28)
（上）SH20060（東から）
（中）SH20061（南から）
（下）SH20062（南から）
写真図版 41　Ⅱ区の遺構 (29)
（上）SH25063（北から）
（中）SH20040・SH24064 北半（北西から）
（下）SH20040・SH24064 北半（北西から）
写真図版 42　Ⅱ区の遺構 (30)
（上）SH24064 南半（南東から）
（中）SH20040・SH24064 北半（北から）
（下）SH20065（東から）
写真図版 43　Ⅱ区の遺構 (31)
SB20005（西から）
写真図版 44　Ⅱ区の遺構 (32)
（上）SB20005　P20294　断面（東から）
（下）SB20005　P20294　完掘状況（南から）
写真図版 45　Ⅱ区の遺構 (33)
（上）SB20005　P20295　断面（東から）
（下）SB20005　P20295　完掘状況（南から）
写真図版 46　Ⅱ区の遺構 (34)
（上）SB20005　P20085　断面（南から）
（中）SB20005　P20085　完掘状況（南から）
（下）SB20005　P20084　断面（南から）
写真図版 47　Ⅱ区の遺構 (35)
（上）SB20005　P20084　柱痕検出状況（南から）
（中）SB20005　P20084　完掘状況（南から）
（下）SB20005　P20071　断面（南西から）
写真図版 48　Ⅱ区の遺構 (36)
（上）SB20005　P20071　断面細部（南から）
（中）SB20005　P20071　柱痕検出状況（南から）
（下）SB20005　P20071　柱痕と柱アタリ検出状況
（南から）
写真図版 49　Ⅱ区の遺構 (37)
（上）SB20005　P20071　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20128　断面（南西から）
（下）SB20005　P20128　断面細部（南から）
写真図版 50　Ⅱ区の遺構 (38)
（上）SB20005　P20128　柱痕跡（南から）
（中）SB20005　P20128　柱アタリ（南から）
（下）SB20005　P20215　断面（南から）
写真図版 51　Ⅱ区の遺構 (39)
（上）SB20005　P20215　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20210　断面（南から）
（下）SB20005　P20210　柱痕検出状況（南から）
写真図版 52　Ⅱ区の遺構 (40)
（上）SB20005　P20210　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20205　断面（南から）
（下）SB20005　P20205　柱痕検出状況細部
（南から）
写真図版 53　Ⅱ区の遺構 (41)
（上）SB20005　P20205　柱痕検出状況（南から）
（中）SB20005　P20200　断面（南から）
（下）SB20005　P20200　完掘状況（南から）
写真図版 54　Ⅱ区の遺構 (42)
（上）SB20005　P20200　柱アタリ（南から）
（中）SB20005　P20089　断面（南から）
（下）SB20005　P20089　完掘状況（南から）
写真図版 55　Ⅱ区の遺構 (43)
（上）SB20005　P20091　断面（南から）
（中）SB20005　P20091　柱痕検出状況（南から）
（下）SB20005　P20091　完掘状況（南から）
写真図版 56　Ⅱ区の遺構 (44)
（上）SB20005　P20093　断面（南から）
（中）SB20005　P20093　柱痕検出状況（南から）
（下）SB20005　P20093　完掘状況（南から）
写真図版 57　Ⅱ区の遺構 (45)
（上）SB20005　P20095　断面（南から）
（中）SB20005　P20095　柱痕検出状況（南から）
（下）SB20005　P20095　完掘状況（南から）
写真図版 58　Ⅱ区の遺構 (46)
（上）SB20005　P20070　断面（南西から）
（中）SB20005　P20070　断面細部（南から）
（下）SB20005　P20070　柱痕検出状況（南から）

写真図版 59　Ⅱ区の遺構 (47)
（上）SB20005　P20070　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20069　断面（南から）
（下）SB20005　P20069　完掘状況（南から）
写真図版 60　Ⅱ区の遺構 (48)
（上）SB20005　P20066　断面（南から）
（中）SB20005　P20066　柱痕検出状況（南から）
（下）SB20005　P20066　完掘状況（南から）
写真図版 61　Ⅱ区の遺構 (49)
（上）SB20005　P20293　断面（南から）
（中）SB20005　P20293　完掘状況（南から）
（下）SB20005　P20250　断面（南から）
写真図版 62　Ⅱ区の遺構 (50)
（上）SB20005　P20250　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20244　集石（南から）
（下）SB20005　P20244　断面（南から）
写真図版 63　Ⅱ区の遺構 (51)
（上）SB20005　P20244　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20246　断面（南から）
（下）SB20005　P20246　完掘状況（南から）
写真図版 64　Ⅱ区の遺構 (52)
（上）SB20005　P20190　断面（南から）
（中）SB20005　P20190　完掘状況（南から）
（下）SB20005　P20184　断面（南から）
写真図版 65　Ⅱ区の遺構 (53)
（上）SB20005　P20184　柱痕検出状況（南から）
（中）SB20005　P20184　完掘状況（南から）
（下）SB20005　P20196　断面（東から）
写真図版 66　Ⅱ区の遺構 (54)
（上）SB20005　P20196　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20292　断面（東から）
（下）SB20005　P20292　完掘状況（東から）
写真図版 67　Ⅱ区の遺構 (55)
（上）SB20005　P20291　断面（東から）
（中）SB20005　P20291　完掘状況（南から）
（下）SB20005　P20212　断面（東から）
写真図版 68　Ⅱ区の遺構 (56)
（上）SB20005　P20212　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20214　断面（東から）
（下）SB20005　P20214　完掘状況（南から）
写真図版 69　Ⅱ区の遺構 (57)
（上）SB20005　P20290　断面（東から）
（中）SB20005　P20290　完掘状況（南から）
（下）SB20005　P20289　断面（東から）
写真図版 70　Ⅱ区の遺構 (58)
（上）SB20005　P20289　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20288　断面（南から）
（下）SB20005　P20288　完掘状況（南から）
写真図版 71　Ⅱ区の遺構 (59)
（上）SB20005　P20287　断面（南から）
（中）SB20005　P20287　柱痕検出状況（南から）
（下）SB20005　P20287　柱痕検出状況（南から）
写真図版 72　Ⅱ区の遺構 (60)
（上）SB20005　P20287　完掘状況（南から）
（中）SB20005　P20286　断面（南から）
（下）SB20005　P20286　完掘状況（南から）
写真図版 73　Ⅱ区の遺構 (61)
（上）SB20005　P20285　断面（南から）
（中）SB20005　P20285　完掘状況（南から）
（下）SB20005　P20285　柱アタリ（南から）
写真図版 74　Ⅱ区の遺構 (62)
（上）SB20008（東から）
（下）SB20012（東から）
写真図版 75　Ⅱ区の遺構 (63)
SB20016（南から）
写真図版 76　Ⅱ区の遺構 (64)
（上）SB20016　P21905　断面（南から）
（中）SB20016　P21905　柱痕検出状況（南から）
（下）SB20016　P21906　断面（南から）
写真図版 77　Ⅱ区の遺構 (65)
（上）SB20016　P21907　断面（南から）
（中）SB20016　P21907　柱アタリ（南から）
（下）SB20016　P21903　断面（南から）
写真図版 78　Ⅱ区の遺構 (66)
（上）SB20016　P21903　柱痕検出状況（南から）
（中）SB20016　P21903　柱アタリ（南から）
（下）SB20016　P21903　完掘状況（南から）

写真図版 79　Ⅱ区の遺構 (67)
（上）SB20016　P21904　断面（南から）
（中）SB20016　P22072　断面（南から）
（下）SB20016　P22072　完掘状況（南から）
写真図版 80　Ⅱ区の遺構 (68)
（上）SB20016　P22073　断面（南から）
（中）SB20016　P22073　柱痕検出状況（南から）
（下）SB20016　P22073　完掘状況（南から）
写真図版 81　Ⅱ区の遺構 (69)
（上）SB20016　P21981　完掘状況（南から）
（中）SB20016　P21908　断面（南から）
（下）SB20016　P21908　完掘状況（南から）
写真図版 82　Ⅱ区の遺構 (70)
（上）SB20016　P21908　底面の状況（南から）
（中）SB20016　P21909　断面（南から）
（下）SB20016　P21909　完掘状況（南から）
写真図版 83　Ⅱ区の遺構 (71)
（上）SB20016　P21909　柱アタリ（南から）
（中）SB20016　P21910　断面（南から）
（下）SB20016　P22071　断面（南から）
写真図版 84　Ⅱ区の遺構 (72)
（上）SB20016　P22071　柱アタリ（南から）
（中）SB20016　P21273　完掘状況（東から）
（下）SB20016　P21273　底面の状況（南から）
写真図版 85　Ⅱ区の遺構 (73)
（上）SB20016　P20401　柱痕検出状況（西から）
（中）SB20016　P20401　完掘状況（南から）
（下）SB20016　P20372　完掘状況（南から）
写真図版 86　Ⅱ区の遺構 (74)
（上）SB20016　P22074　完掘状況（南から）
（中）SB20016　P22074　柱アタリ（西から）
（下）SB20016　P21902　断面（南から）
写真図版 87　Ⅱ区の遺構 (75)
（上）SB20016　P21901　断面（南東から）
（中）SB20016　P21901　完掘状況（南から）
（下）SB20016　P21840　断面（南から）
写真図版 88　Ⅱ区の遺構 (76)
（上）SB20016　P21840　柱痕検出状況（西から）
（中）SB20016　P21840　完掘状況（東から）
（下）SB20016　P21840　柱アタリ（東から）
写真図版 89　Ⅱ区の遺構 (77)
（上）SB20019（東から）
（下）SB20021（南から）
写真図版 90　Ⅱ区の遺構 (78)
（上）SB20021　P21845　断面（南から）
（中）SB20021　P21845　完掘状況（南から）
（下）SB20021　P22002　断面（南から）
写真図版 91　Ⅱ区の遺構 (79)
（上）SB20021　P22002　完掘状況（南から）
（中）SB20021　P22003　断面（南から）
（下）SB20021　P22003　完掘状況（南から）
写真図版 92　Ⅱ区の遺構 (80)
（上）SB20021　P21846　断面（北から）
（中）SB20021　P21846　完掘状況（南から）
（下）SB20021　P21847　断面（南から）
写真図版 93　Ⅱ区の遺構 (81)
（上）SB20021　P21847　完掘状況（南から）
（中）SB20021　P21844　断面（南から）
（下）SB20021　P21844　柱痕検出状況（南から）
写真図版 94　Ⅱ区の遺構 (82)
（上）SB20021　P22007　断面（南から）
（中）SB20021　P22006　断面（南から）
（下）SB20021　P22006　完掘状況（南から）
写真図版 95　Ⅱ区の遺構 (83)
（上）SB20021　P22005　断面（南から）
（中）SB20021　P22004　断面（南から）
（下）SB20021　P22004　完掘状況（南から）
写真図版 96　Ⅱ区の遺構 (84)
（上）SB20001（南東から）
（中）SB20002（南から）
（下）SB20003（北から）
写真図版 97　Ⅱ区の遺構 (85)
（上）SB20004（東から）
（中）SB20006（東から）
（下）SB20007（東から）
写真図版 98　Ⅱ区の遺構 (86)
（上）SB20009（南から）

（中）SB20010（南から）
（下）SB20011（東から）
写真図版99　Ⅱ区の遺構(87)
（上）SB20013（東から）
（中）SB20014（南から）
（下）SB20015（北から）
写真図版100　Ⅱ区の遺構(88)
（上）SB20017（東から）
（中）SB20018（東から）
（下）SB20020（南東から）
写真図版101　Ⅱ区の遺構(89)
（上）SK20026　土器検出状況（東から）
（中）SK20026　土器検出状況（東から）
（下）SK20035（西から）
写真図版102　Ⅲ区の遺構(1)
全景（航空撮影）
写真図版103　Ⅲ区の遺構(2)
（上）全景（東から）
（中）全景（西から）
（下）全景（西から）
写真図版104　Ⅲ区の遺構(3)
（上）SH30001（東から）
（中）SH30002（東から）
（下）SH30002　竈（東から）
写真図版105　Ⅲ区の遺構(4)
（上左）SH30003　竈（南東から）
（上右）SH30003　土器出土状況（南東から）
（中）SH30003（東から）
（下）SH30004・SH30025（東から）
写真図版106　Ⅲ区の遺構(5)
（上）SH30025　竈（東から）
（中）SH30005（南西から）
（下）SH30005　土器出土状況（南東から）
写真図版107　Ⅲ区の遺構(6)
（上）SH30005　土器出土状況（北から）
（中）SH30006（南東から）
（下）SH30006　竈（南東から）
写真図版108　Ⅲ区の遺構(7)
（上）SH30007（南から）
（中）SH30008（東から）
（下）SH30009（東から）
写真図版109　Ⅲ区の遺構(8)
（上）SH30009　竈（東から）
（中）SH30010（東から）
（下）SH30010　竈（東から）
写真図版110　Ⅲ区の遺構(9)
（上）SH30011（東から）
（中）SH30011　SK30033（西から）
（下）SH30012・SH30022（北西から）
写真図版111　Ⅲ区の遺構(10)
（上）SH30013（南東から）
（中）SH30013　竈（南東から）
（下）SH30014（南東から）
写真図版112　Ⅲ区の遺構(11)
（上）SH30014　竈（南東から）
（中）SH30015（南から）
（下）SH30016（南西から）
写真図版113　Ⅲ区の遺構(12)
（上）SH30017（西から）
（中）SH30017　SK30012（西から）
（下）SH30018（東から）
写真図版114　Ⅲ区の遺構(13)
（上）SH30019・SH30036（南東から）
（中）SH30020（南から）
（下）SH30020　竈（南から）
写真図版115　Ⅲ区の遺構(14)
（上）SH30021・SH30026（東から）
（中）SH30024（北西から）
（下）SH30027（南西から）
写真図版116　Ⅲ区の遺構(15)
（上）SH30028（西から）
（中）SH30029（北東から）
（下）SH30029　竈（北東から）
写真図版117　Ⅲ区の遺構(16)
（上）SH30031（南東から）
（中）SH30031　竈（南東から）
（下左）SH30031　竈（南東から）
（下右）SH30031　竈復元（南東から）

写真図版 118　Ⅲ区の遺構 (17)
（上）SH30030（東から）
（中）SH30032（南東から）
（下）SH30032　土器・礫（南東から）
写真図版 119　Ⅲ区の遺構 (18)
（上）SH30033（南西から）
（中）SH30034（南から）
（下）SH30035（東から）
写真図版 120　Ⅲ区の遺構 (19)
（上）SB30001（北東から）
（中）SB30002（北西から）
（下）SB30003（西から）
写真図版 121　Ⅲ区の遺構 (20)
（上）SB30004（北西から）
（中）SB30005（北東から）
（下）SB30006（西から）
写真図版 122　Ⅲ区の遺構 (21)
（上）SB30008（西から）
（中）SB30009（南東から）
（下）SK30002（東から）
写真図版 123　Ⅲ区の遺構 (22)
（上）SK30031（北から）
（中）SD30001（西から）
（下）SD30001 突出部（北から）
写真図版 124　Ⅲ区の遺構 (23)
（上）SD30001　断面（南西から）
（中左）SD30001　上面石列（北から）
（中右）石製品出土状況（北から）
（下左）勾玉出土状況（東から）
（下中）鉄鏃出土状況（北から）
（下右）鉄刀出土状況（北西から）
写真図版 125　Ⅳ区の遺構 (1)
全景（航空撮影）
写真図版 126　Ⅳ区の遺構 (2)
（上）全景（東から）
（下）全景（西から）
写真図版 127　Ⅳ区の遺構 (3)
（上）SH40001・SH40024（南東から）
（中）SH40001　竈（南東から）
（下）SH40002（南から）
写真図版 128　Ⅳ区の遺構 (4)
（上）SH40004（東から）
（中）SH40005（東から）
（下）SH40005　竈（東から）
写真図版 129　Ⅳ区の遺構 (5)
（上）SH40006（西から）
（中）SH40006 ～ SH40008・SH40023（西から）
（下）SH40006　竈（東から）
写真図版 130　Ⅳ区の遺構 (6)
（上）SH40007（西から）
（中）SH40008（南東から）
（下）SH40008・SH40023（西から）
写真図版 131　Ⅳ区の遺構 (7)
（上）SH40009 ～ SH40011（南東から）
（中）SH40009　竈（南東から）
（下）SH40009　SK40001（西から）
写真図版 132　Ⅳ区の遺構 (8)
（上）SH40010　竈（東から）
（中）SH40011（東から）
（下）SH40011　竈（東から）
写真図版 133　Ⅳ区の遺構 (9)
（上）SH40012（南東から）
（中）SH40013（東から）
（下）SH40014（東から）
写真図版 134　Ⅳ区の遺構 (10)
（上）SH40015 ～ SH40017（南東から）
（中）SH40015　竈（南東から）
（下）SH40018（南東から）
写真図版 135　Ⅳ区の遺構 (11)
（上）SH40018　竈（南東から）
（中）SH40024（西から）
（下）SD40001・SD40002（北西から）
写真図版 136　Ⅰ区出土土器 (1)
写真図版 137　Ⅰ区出土土器 (2)
写真図版 138　Ⅰ区出土土器 (3)
写真図版 139　Ⅰ区出土土器 (4)
写真図版 140　Ⅰ区出土土器 (5)
写真図版 141　Ⅰ区出土土器 (6)

写真図版 142　Ⅰ区出土土器(7)
写真図版 143　Ⅰ区出土土器(8)
写真図版 144　Ⅰ区出土土器(9)
写真図版 145　Ⅰ区出土土器(10)
写真図版 146　Ⅰ区出土土器(11)
写真図版 147　Ⅰ区出土土器(12)
写真図版 148　Ⅰ区出土土器(13)
写真図版 149　Ⅰ区出土土器(14)
写真図版 150　Ⅰ区出土土器(15)
写真図版 151　Ⅱ区出土土器(1)
写真図版 152　Ⅱ区出土土器(2)
写真図版 153　Ⅱ区出土土器(3)
写真図版 154　Ⅱ区出土土器(4)
写真図版 155　Ⅱ区出土土器(5)
写真図版 156　Ⅱ区出土土器(6)
写真図版 157　Ⅱ区出土土器(7)
写真図版 158　Ⅱ区出土土器(8)
写真図版 159　Ⅱ区出土土器(9)
写真図版 160　Ⅱ区出土土器(10)
写真図版 161　Ⅱ区出土土器(11)
写真図版 162　Ⅱ区出土土器(12)
写真図版 163　Ⅱ区出土土器(13)
写真図版 164　Ⅱ区出土土器(14)
写真図版 165　Ⅱ区出土土器(15)
写真図版 166　Ⅱ区出土土器(16)
写真図版 167　Ⅱ区出土土器(17)
写真図版 168　Ⅱ区出土土器(18)
写真図版 169　Ⅱ区出土土器(19)
写真図版 170　Ⅱ区出土土器(20)
写真図版 171　Ⅱ区出土土器(21)
写真図版 172　Ⅱ区出土土器(22)
写真図版 173　Ⅱ区出土土器(23)
写真図版 174　Ⅱ区出土土器(24)
写真図版 175　Ⅱ区出土土器(25)
写真図版 176　Ⅱ区出土土器(26)
写真図版 177　Ⅱ区出土土器(27)
写真図版 178　Ⅱ区出土土器(28)
写真図版 179　Ⅱ区出土土器(29)
写真図版 180　Ⅲ区出土土器(1)
写真図版 181　Ⅲ区出土土器(2)
写真図版 182　Ⅲ区出土土器(3)
写真図版 183　Ⅲ区出土土器(4)
写真図版 184　Ⅲ区出土土器(5)
写真図版 185　Ⅲ区出土土器(6)
写真図版 186　Ⅲ区出土土器(7)
写真図版 187　Ⅲ区出土土器(8)
写真図版 188　Ⅲ区出土土器(9)
写真図版 189　Ⅲ区出土土器(10)
写真図版 190　Ⅲ区出土土器(11)
写真図版 191　Ⅲ区出土土器(12)
写真図版 192　Ⅲ区出土土器(13)
写真図版 193　Ⅲ区出土土器(14)
写真図版 194　Ⅲ区出土土器(15)
写真図版 195　Ⅲ区出土土器(16)
写真図版 196　Ⅲ区出土土器(17)
写真図版 197　Ⅲ区出土土器(18)
写真図版 198　Ⅲ区出土土器(19)
写真図版 199　Ⅲ区出土土器(20)
写真図版 200　Ⅲ区出土土器(21)
写真図版 201　Ⅲ区出土土器(22)
写真図版 202　Ⅲ区出土土器(23)
写真図版 203　Ⅲ区出土土器(24)
写真図版 204　Ⅲ区出土土器(25)
写真図版 205　Ⅲ区出土土器(26)
写真図版 206　Ⅳ区出土土器(1)
写真図版 207　Ⅳ区出土土器(2)
写真図版 208　Ⅳ区出土土器(3)
写真図版 209　Ⅳ区出土土器(4)
写真図版 210　木製品(1)
写真図版 211　木製品(2)
写真図版 212　木製品(3)
写真図版 213　木製品(4)
写真図版 214　木製品(5)
写真図版 215　木製品(6)
写真図版 216　木製品(7)
写真図版 217　石製品(1)
写真図版 218　石製品(2)
写真図版 219　金属製品他

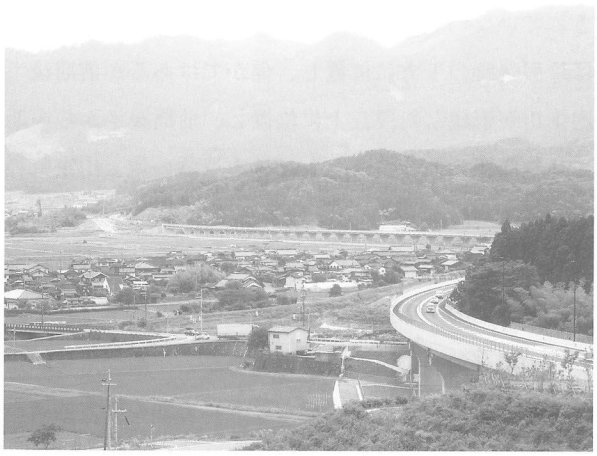
第１章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置

遺跡の位置する朝来市は兵庫県北部の但馬地方の南東隅部にあたり、東に遠阪峠を越えれば丹波、南に円山川を遡り生野峠を越えれば播磨に至る地域である。朝来市は和田山町・山東町・朝来町・生野町の４町が平成17年に合併し市制が引かれた。市は南北に長く、北は豊岡市に、東は京都府福知山市と丹波市・多可町に、南は神河町、西は宍粟市・養父市に接する。総面積約403㎢で、約34,791人が暮らす市である。

市域の地形は中国山地東部の北斜面と、そこから北に派生する低山地帯、夜久野高原などの浸食が進んだ丘陵地帯であり、山の多い地域である。山地からはかつて銀が産出され、生野鉱山等が設けられていた。市域南端の山地は日本海に注ぐ円山川と瀬戸内海に注ぐ市川の源流域であり、兵庫県の南北の分水嶺となっている。市川流域の市域は南端の一部のみであり、大部分は円山川とその支流域に広がる。平野部は円山川とその支流域に細長く広がって盆地状となり、円山川沿いは和田山盆地と、円山川の支流である与布土川流域は山東盆地と称される。

市域はかつてから但馬の玄関口と言われるほど、古代から交通の要衝の地域であり、主要な交通路は、細長い平野部を河川沿いに走る。鉄道はＪＲ山陰線と播但線であり、山陰線は市域を東西に走り、京都・鳥取方面に連絡する。播但線は和田山駅で山陰線から分かれて、円山川沿いを南に向かって播磨に入り、姫路駅で山陽線に合流する。道路は山陰線と平行して東西に延びる国道９号、国道９号と交差して市域を南北に縦貫して但馬北部に延びる国道312号、国道９号から分岐して遠阪峠を越えて大阪方面に向かう国道427号等が主要な道路網である。山陰地方や但馬北部から京阪神・山陽地方へ向かう、あるいは逆に京阪神や山陽側から但馬北部・山陰地方へ向かう人・物資・情報輸送の重要な道路となっている。平成12年には国道312号沿いに播但連絡道路が、平成18年には国道427号から国道９号沿いに北近畿豊岡自動車道が、といふうに高規格道路が相次いで開通し、中心街近くの和田山ジャンクションで２本の道路が合流し、ますます但馬の玄関口としての位置を高めつつある。



道路完成後の遺跡遠影

道路完成後の遺跡近影

第２節　遺跡の環境

１．歴史的環境

遺跡の位置する山東盆地は但馬地方の南東隅、南但馬地域の東端にあたる。南但馬地域の平野部は山東盆地（旧山東町）、和田山盆地（旧和田山町）、朝来盆地（旧朝来町）、生野盆地（旧生野町）と呼ばれる四盆地で構成され、遺跡数の多い地域である。特に山東盆地、和田山盆地は極めて遺跡密度が高く、両盆地内での遺跡数は現在約1,500ヶ所が知られている。

しかし、この内に旧石器時代に属する遺跡は知られておらず、人類が痕跡を残すのは縄文時代以降である。縄文時代の遺跡としては和田山町側に加都遺跡（154）・片引遺跡（152）・ムクノ木遺跡(114)・高瀬遺跡（176）等があり、完新世段丘に位置する加都遺跡では平成14年度の調査において埋甕が検出され、所謂黒ボク層の中から後期の土器や打製石斧等の石器が出土している。山東町側では粟鹿遺跡(45）で縄文時代中期から後期の土器が出土している他、本遺跡でも遺構面を構成する黒灰色シルト等から後期の土器が僅かながら出土している。

弥生時代に入ると遺跡数も増加し、遺構の検出された遺跡数も増加はしてくるが、まだ集落構造等が把握できるような状況にはない。弥生前期の遺跡としては前期後半の和田山町片引遺跡、加都遺跡伊豫田地区（153）・新水北地区(154)、ムクノ木遺跡があり、片引遺跡は沖積低地に位置し、住居等は検出されていないものの、土器とともに彩色された木製壺等が出土している。加都遺跡伊豫田・新水北地区は片引遺跡の下方に位置し、僅かではあるが前期後半の土器が出土している。和田山町ムクノ木遺跡は円山川が形成した段丘上に位置し、前期後半から中期にかけての土器が出土している。

弥生時代中期の遺跡としては本遺跡の他、山東町の芝ケ端遺跡(19)・仲田遺跡（231)、和田山町岡田遺跡(207)等がある。芝ヶ端遺跡は本遺跡とは三保川を挟んで対峙するように、三保川東岸の丘陵斜面から段丘上にかけて位置する遺跡である。北近畿豊岡道に伴って調査を実施し、丘陵斜面から畿内第Ⅲ様式併行期の円形竪穴住居や段状遺構が検出されている。仲田遺跡は粟鹿川と柴川の合流点付近の沖積地内の微高地に位置する遺跡であり、中期後半に限定された遺跡である。これまでの調査では畿内第Ⅳ様式併行期の円形竪穴住居とともに方形の竪穴住居が検出され、分銅形土製品や磨製石剣といった特徴的な遺物が出土し、土器には播磨地方の影響がみられるとされている。本遺跡でも昭和52年の調査において、中山丘陵に近い遺跡南端から、播磨地方の影響がみられる畿内第Ⅲ様式の壺が柱穴内から出土している。このように弥生時代中期には竪穴住居等の遺構が検出されているが、まだ断片的であり、集落立地や集落実態が把握できるような状態ではない。ただ土器類には、地理的な条件からみれば当然ではあるが、播磨の影響が看取できる。

後期前半の集落には、本遺跡の他、山東町粟鹿遺跡、和田山町大盛山遺跡（200）・宮ノ本遺跡（188）等がある。粟鹿遺跡は土石流性の堆積物が段丘化した段丘上に広範囲に広がる遺跡で、この時期の遺構としては竪穴住居15棟と方形貼石墓が検出されている。本遺跡でも土器がピットあるいは溝等から出土しているが、竪穴住居としては検出されていない。和田山町大盛山遺跡は後期前半の遺跡で、丘陵突端を二重の濠で囲み、入り口部に柵を立て、極めて防御性の高めた遺跡であるが、内部には竪穴住居1棟だけが設けてられている。二重濠の下方にも尾根と切り離す濠を設け、この間に竪穴住居２～３棟が設けられている。極めて特殊な遺跡であり、高地性集落としての性格が与えられている。宮ノ本遺跡では円形・方形の竪穴住居と方形周溝墓が検出され、円形住居は碧玉等を使用した玉造工房跡とされている。

後期前半の墓制には平野部で木棺や土器棺墓・方形貼石墓・方形周溝墓を配した遺跡と、丘陵上に木棺や土器棺を埋納した墳墓群が営まれ始める。前者には粟鹿遺跡・宮ノ本遺跡があり、粟鹿遺跡では木棺・土器棺の他、方形貼石墓が構築されている。宮ノ本遺跡では竪穴住居廃絶後に方形周溝墓が営まれている。後者には、山東町芝花古墳群弥生墳墓群（18）や和田山町梅田東古墳群（129）の墳墓群がある。芝花墳墓群では木棺18基と土器棺３基が検出されており、副葬品として破砕土器の他、鉄鏃・鉄剣等とガラス製や碧玉製の小玉が出土している。梅田東古墳群の墳墓群は狭い尾根上に木棺17基と土器棺１基が埋納され、副葬品には破砕土器の他、鉄鏃・鉄剣の茎、ガラス製の小玉・管玉等がみられる。この他にも和田山町筒江中山古墳群内でも当該期の土器棺が検出されている。両墳墓群とも明確な区画は伴わない。

土器様相の点で言えば、この段階までの土器には播磨地方や丹波地方の影響が看取でき、畿内から搬入されたものも存在している。

後期後半から古墳時代にかけての集落遺跡は今のところ見当たらない。山東町粟鹿遺跡が後期前半で終焉して途切れ、大盛山遺跡も終焉する。本遺跡でも流路等から土器は出土しているが、竪穴住居等は検出されていない。同様に加都遺跡伊豫田地区でも土器のみが出土している。

古墳時代に入ると集落遺跡は盆地内の平野部や沖積地に臨む段丘上に継続的に大規模に展開されるようになる。その代表的な遺跡としては本遺跡の他、山東町粟鹿遺跡、和田山町加都遺跡の二遺跡がある。本遺跡については後述するが、庄内併行期の居住域は昭和52年の調査時に遺跡南端の中山丘陵に近い地区で円形の竪穴住居が検出されていることから、その付近に求められるが、この段階ではそれほど大規模には展開されていない。本遺跡で広範囲に集落が営まれ始めるのは布留式段階以降であり、それ以後古墳時代を通じて集落の営みが継続され、TK217段階で終焉する。そして、その内の９・10段階には200㎡を超す大型掘立柱建物を含む掘立柱建物群が規則的に配置されるのである。粟鹿遺跡は今のところ弥生時代後期後半で途絶えた後、庄内併行期に再度集落の営みが開始され、本遺跡同様古墳時代を通じて営まれ、TK217段階に終焉している。庄内併行期の段階はまだ点在的であり、中期末から後期中頃にかけての時期が最も盛行するようである。加都遺跡は宮ケ田地区で古墳時代集落が検出され、今のところ本遺跡や粟鹿遺跡より遅れた布留式段階から集落が営まれ始め、TK209段階で終焉を向かえている。

これらの大規模に展開される集落遺跡が存在する一方、森向山遺跡（92）のように前期の限定された期間に竪穴住居が営まれる遺跡や、中山遺跡（148）のように丘陵上に竪穴住居が営まれるという遺跡も存在している。また筒江大垣遺跡（146　調査報告書では筒江浦石遺跡）では庄内併行期の粘土採掘坑が検出され、土器類とともに鋤等の木製品が出土している。

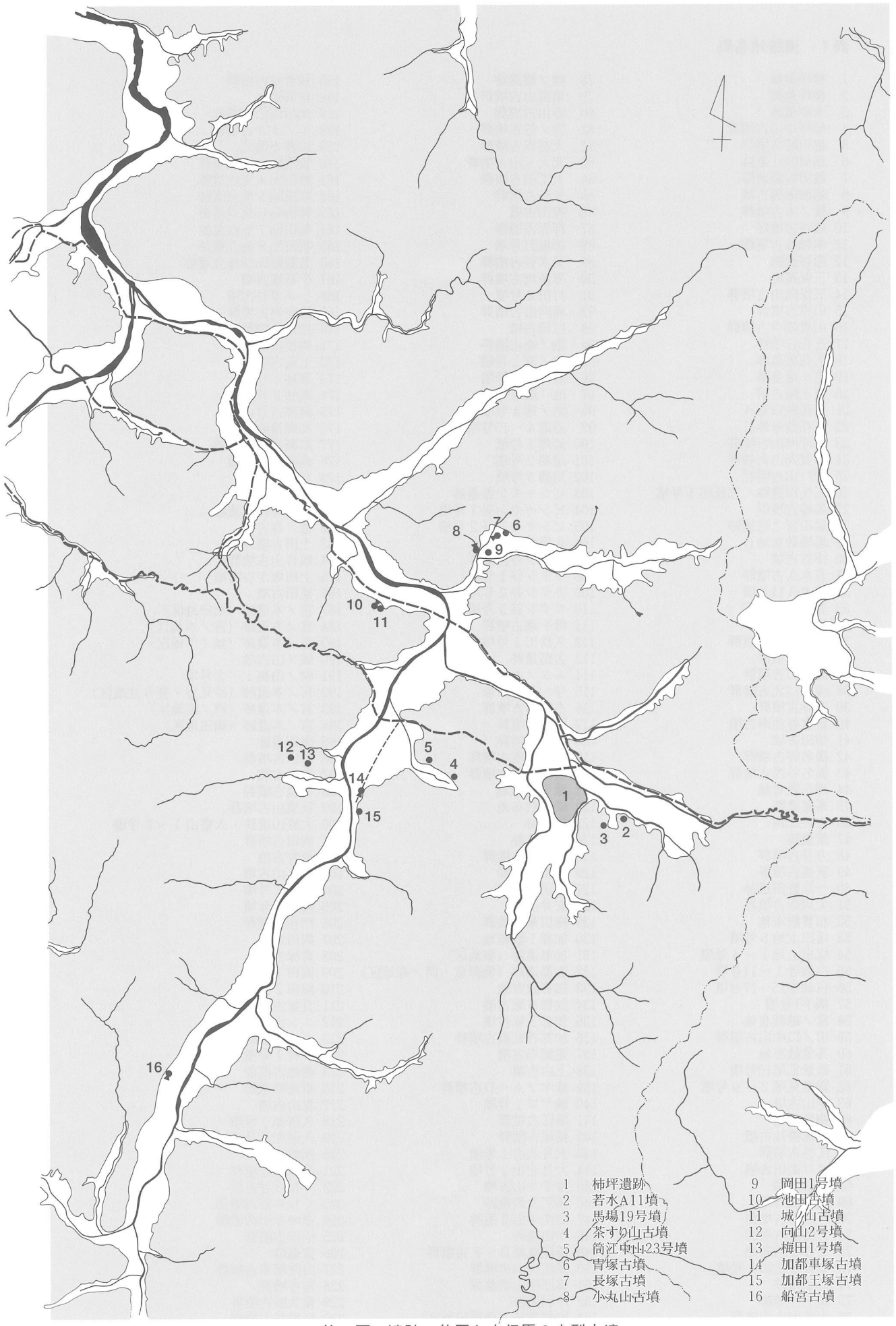
一方、古墳の方では、山東盆地・和田山盆地・朝来盆地を含めた地域は但馬最大の池田古墳をはじめとして、但馬における地域首長墓の変遷が追える地域である。現在では若水古墳（32　旧若水A11号墳）・城ノ山古墳（190）・池田古墳（186）・茶すり山古墳（145）・船宮古墳（第４図16）・長塚古墳（211）と変遷し、その後は古墳規模が縮小して岡田古墳群の宵塚古墳（208）や岡田2号墳（210）等を経て小丸山古墳（203）の順に変遷すると考えられている。

若水古墳は唯一山東盆地に位置する首長墓と考えられている古墳である。平成13年度の調査では、丘陵頂部を整形して墳丘を造り出した径40ｍの円墳で、木棺小口に丁寧な石積みを施した木棺から、飛禽鏡・連弧文鏡が出土している。

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

表１　遺跡地名表

1 柿坪遺跡
2 柿坪遺跡
3 永徳遺跡
4 柿坪中山古墳群
5 越田段古墳群
6 越田四辻遺跡
7 越田塚脇遺跡
8 越田塚脇古墳
9 椎ノ木古墳群
10 越谷古墳群
11 南越谷古墳群
12 恋谷遺跡
13 三保遺跡
14 三保向山古墳群
15 山根古墳群
16 山根畑中古墳群
17 芝花古墳群
18 芝花墳墓群
19 芝ヶ端遺跡
20 芝ヶ端古墳
21 芝花散布地Ａ
22 芝花散布地Ｂ
23 柿坪向山古墳群
24 和賀向山古墳群
25 切戸山古墳群
26 五反田遺跡・五反田１号墳
27 馬場古墳群
28 越田宮之前遺跡
29 馬場散布地Ｂ
30 持谷古墳
31 若水Ａ古墳群
32 若水Ａ11号墳
33 若水Ｂ古墳群
34 堀所古墳群
35 大谷口北古墳群
36 西谷古墳群
37 滝ノ口古墳群
38 滝ノ口北古墳群
39 石寺古墳群
40 新堂谷池南古墳
41 畑田古墳
42 櫛名谷古墳群
43 櫛名谷西古墳群
44 押花散布地
45 粟鹿遺跡
46 方谷遺跡
47 柴遺跡
48 方谷古墳群
49 宮裏古墳群
50 一品野田遺跡
51 大同寺古墳群
52 和賀散布地
53 塩田上地５号墳
54 塩田上地１～４号墳
55 白仙寺１～14号墳
56 白仙寺15～17号墳
57 縄手1号墳
58 宮ノ越散布地
59 田ノ口中山古墳群
60 茶堂散布地
61 新堂見尾10号墳
62 新堂見尾２～９号墳
63 空山古墳
64 鞠散布地
65 石部神社古墳
66 江谷古墳群
67 ブロ山田古墳
68 水谷古墳
69 上竹散布地
70 ハス子古墳群
71 大師山古墳群
72 楽音寺散布地
73 楽音寺北山１号墳
74 梶原遺跡
75 梅ヶ作遺跡
76 大月向山古墳群
77 城ノ越古墳群
78 城ノ越遺跡
79 東南山古墳群
80 寺山古墳群
81 宮ノ谷古墳群
82 大将軍古墳群
83 北大工山古墳群
84 大工山古墳群
85 矢谷古墳群
86 庵山古墳
87 押坂古墳群
88 押坂21号墳
89 又木谷古墳群
90 喜多垣古墳群
91 打田２号墳
92 森向山古墳群
93 打田古墳
94 池ノ端古墳群
95 池ノ端１号墳
96 池ノ端２号墳
97 池ノ端３号墳
98 池ノ端４号墳
99 迫間４～15号墳
100 迫間１号墳
101 迫間２号墳
102 迫間３号墳
103 ビシャモン谷遺跡
104 ビシャモン谷１号墳
105 ビシャモン谷２号墳
106 北屋敷古墳
107 カクシ谷古墳群
108 カクシ谷１号墳
109 カクシ谷２号墳
110 カクシ谷３号墳
111 静ヶ瀬古墳群
112 久世田１号墳
113 大路遺跡
114 ムクノ木遺跡
115 与一谷散布地
116 古城山古墳群
117 段山古墳群
118 臼谷古墳群
119 日尻尾池古墳群
120 清水ヶ谷古墳群
121 殿Ⅰ散布地
122 殿Ⅱ散布地
123 殿遺跡
124 矢別遺跡
125 市条寺古墳群
126 向山古墳群
127 梅田古墳群
128 安井遺跡
129 梅田東古墳群
130 加都Ⅰ散布地
131 加都遺跡（桜地区）
132 加都遺跡（焼御堂・岡ノ森地区）
133 加都散布地
134 加都車塚古墳
135 加都王塚古墳
136 加都神社裏古墳群
137 連願寺古墳
138 上山古墳
139 城ヤブＡ～Ｄ古墳群
140 城ヤブ１号墳
141 筒江古墳群
142 長尾古墳群
143 大月北山１号墳
144 大月北山２号墳
145 茶すり山古墳
146 筒江大垣遺跡
147 筒江中山Ⅱ遺跡
148 中山遺跡
149 筒江梶原Ｂ～Ｆ古墳群
150 筒江中山古墳群
151 筒江中山墳墓群
152 片引遺跡
153 加都遺跡（伊豫田地区）
154 加都遺跡（宮ヶ田･新水北地区）
155 長者谷古墳群
156 日向遺跡
157 比治向山古墳群
158 イノオク古墳群
159 法興寺遺跡
160 牧田№３地点遺跡
161 牧田№４地点遺跡
162 牧田№５地点遺跡
163 牧田№６地点遺跡
164 牧田№７地点遺跡
165 牧田№８地点遺跡
166 芳賀野№18地点遺跡
167 千石塚古墳
168 シメガ谷古墳
169 梅が迫古墳群
170 投山古墳群
171 岡投山古墳
172 上地古墳
173 東林１号墳
174 東林２号墳
175 高瀬吉竹古墳
176 高瀬遺跡
177 高瀬家の上古墳
178 高瀬東谷古墳
179 宮田１号墳
180 宮田２号墳
181 光明寺付近遺跡
182 椿ノ森古墳
183 土田古墳群
184 観音山古墳群
185 土田塚が谷古墳
186 池田古墳
187 宮ノ本遺跡（池田地区）
188 宮ノ本遺跡（宮ノ本地区）
189 宮ノ本遺跡（城ノ下地区）
190 城ノ山古墳
191 城ノ山裏１・２号墳
192 宮ノ本遺跡（妙見谷・登り立地区）
193 宮ノ本遺跡（岡ノ段地区）
194 宮ノ本遺跡（細田地区）
195 恵谷遺跡
196 西山古墳群
197 寺谷古墳
198 林垣古墳群
199 秋葉山古墳群
200 大盛山遺跡・大盛山１～３号墳
201 岡田古墳群
202 更杵古墳
203 小丸山古墳
204 柳原１号墳
205 柳原２号墳
206 門在古墳群
207 岡田遺跡
208 冑塚古墳
209 岡田１号墳
210 岡田２号墳
211 長塚古墳
212 ニシ山遺跡１
213 ニシ山遺跡２
214 野村１号墳
215 西地古墳群
216 東河原遺跡
217 堂山古墳
218 久田和１号墳
219 久田和２号墳
220 岡崎古墳
221 池の谷古墳群
222 くねり谷古墳
223 くねり谷古墳群
224 春の木田古墳群
225 小川古墳群
226 宮遺跡
227 白井塚本古墳群
228 宮古墳群
229 夜久野古墳群
230 岩屋谷古墳群
231 仲田遺跡



第２図　遺跡の位置と南但馬の大型古墳

城ノ山古墳は径36mの円墳で、墳丘は若水古墳同様に丘陵尾根突端を削り造り出している。主体部は箱形木棺であり、三角縁神獣鏡を含む6面の鏡や石釧といった副葬品を出土している。

池田古墳は但馬最大の前方後円墳であり、全長141m、葺石・埴輪を伴い、周囲には盾形の周濠を巡らしている。後世に削平を受け、主体部等は消失しているが、北西に所在する高田長持形石棺残欠が池田古墳の埋葬施設に使用されていた可能性が指摘されている。

茶すり山古墳は和田山盆地の東端に位置し、本遺跡とは間に低い峠を挟むが直線距離で西方に約1.7kmの距離である。墳丘は径90mの円墳で、尾根先端を二段に削って墳丘とし、頂部と段のテラスに埴輪を樹立している。主体部は長大な木棺で、製盤龍鏡・仿製神獣鏡・舶載連弧文鏡の3面の鏡とともに多量の武器・武具類が副葬品として出土している。

船宮古墳は朝来盆地に位置する全長91mの前方後円墳で、くびれ部に造り出しを設け、周濠を巡らす。主体部等は不明であるが、牛形埴輪等が出土している。

これ以降、首長系譜の古墳は盆地北部の岡田古墳群に移り、全長70mの前方後円墳である長塚古墳、全長56mの小丸山古墳、径30mの円墳である冑塚古墳等が築造されている。

この後、首長系譜の古墳は和田山盆地の南部に移り、加都車塚古墳・加都王塚古墳が最後に築かれる。加都車塚古墳は全長52mの前方後円墳と推定され、後円部の墳頂部に石室が存在する。加都王塚古墳は円墳あるいは造り出し付きの円墳とされ、墳頂部に平滑に加工された蓋石を使用した石室が存在している。

こうした首長系譜の古墳が築かれる一方、但馬地方では尾根を削って墳丘を造り出した中小規模の古墳が庄内併行期頃から築造され，横穴式石室が導入される後期後半まで継続的に築かれている。山東盆地・和田山盆地とも相当数の古墳が築かれており、本遺跡周辺の丘陵上でも柿坪中山古墳群（4）・柿坪向山古墳群（23）・芝花古墳群（17）・東南山古墳群（79）・寺山古墳群（80）宮ノ谷古墳群（81）等、列挙するには暇がないほどに築かれている。特に山東盆地では本遺跡周辺や東方の丘陵地帯、和田山盆地では筒江中山（現和田山工業団地周辺）、梅田東古墳群から市条寺古墳群にかけての丘陵地帯、枚田集落背後の丘陵地帯、城ノ山古墳・池田古墳背後の丘陵地帯、秋葉山古墳群の丘陵地帯などに集中しており、墓域選定と管理、集落との関係等が窺われる。これら小規模古墳を概して言えば、庄内併行期から布留式段階頃までは平坦な尾根や尾根頂部を溝で区画し、墳丘を削りだしたものが多く、複数の主体部を納めており、家族墓的な性格を有する。埋葬施設には木棺や土器棺とともに竪穴式石棺とでも呼ぶような石棺を採用するものが多い。その中で、和田山町梅田東10号墳（129）や梅田16号墳（127）のように裾部にテラスを造りだして方形の墳丘を明確に築造し、所謂方形台状墓となる古墳も存在する。先に首長墓とした若水古墳や城ノ山古墳も墳形や規模に大きな差はあるが、築造方法から言えばこれらの古墳と同様である。これらの前期小規模古墳の中で、山東町馬場19号墳（27）では方格規矩鏡が、馬場17号墳（27）では子持ち勾玉が、東南山2号墳（79）では殊文鏡が、東南山3号墳（79）では石釧が、和田山町向山2号墳（126）では破砕された連弧文鏡が副葬されており、小規模古墳の中ではやや突出した存在である。

5世紀前半に入るとこうした古墳の中に和田山町筒江中山23号墳（150）・梅田1号墳（127）のように長大な木棺を埋葬施設とし、鏡や琴柱形石製品を副葬したものが現れる。これらの古墳は尾根先端部や頂部を平坦にして埋葬施設を設け、梅田1号墳では墳丘は多少整形するが、筒江中山23号墳ではほとんど加工しない。したがって墳丘規模は不明瞭となるが、これは横からの視覚を考えたものであり、言わば横から見た目の大きさを考慮した占地であり、築造方法と考えられる。首長墓の一つである茶すり

山古墳も尾根先端を溝によって切り離し、尾根全体をほぼ円形に加工しているが、尾根との切り離しは浅く、多分に横からの視覚を考慮した古墳の一つである。またこの段階頃から一墳丘一埋葬となるようであり、この原則はこうした小規模古墳が消滅するまで貫かれる。

5世紀後半以降は小規模な古墳は増加する傾向がみえ、須恵器が副葬される様になる。古墳の立地は平坦な尾根上より、尾根筋から平野部に落ちていく傾斜のある支尾根に占地するようになる。これは築造方法の変化によるもので、尾根背後を削り、出た土を前面に押し出して墳丘とし、背後の削平面と墳丘の間に直線あるいは弧状の周溝を設けるという築造方法に変化する。古墳の築造方法としては極めて省力化に成功した方法である。この築造方法はこうした小規模古墳が終焉するまで継続する。基本的には一墳丘一埋葬を原則とするが、6世紀前半以降には複数の埋葬施設を納めたものも存在している。ただ、複数の埋葬施設を有する梅田23･27号墳では埋葬ごとに古墳を拡張しており、複数埋葬の場合はこうした点にも注意を要する。

横穴式石室が採用されると古墳の立地は大きく変わり、谷筋を入った山麓や谷間に位置するものが多くなる。これは石室構築のための石材がより入手しやすい場所に古墳の立地を移した結果と考えられる。山東盆地では本遺跡から南に入った三保・喜多垣・森・溝黒・迫間といった所に迫間古墳群（99～102）をはじめとする古墳群が、粟鹿遺跡の南方では谷筋を入った粟鹿山山麓の谷筋に西谷古墳群（36）をはじめとする多くの横穴式石室の古墳が所在している。和田山盆地では枚田地区の周囲にも若干存在するが、筒江集落の周囲に城ヤブ古墳群（139・140）・長尾古墳群（142）等が築造されており、この区域に集中するような傾向がある。その中では金銅装太刀を出土した長尾古墳（142）や比較的大規模な石室構築している城ヤブ1号墳（140）等が存在する。金銅装の遺物は朝来盆地側でも三町田古墳・山内仲田古墳等で出土している。さらに和田山盆地から円山川を下った糸井地区の春日古墳、宮内地区の宮内中山6号墳は金銅装太刀三口を出土している。今のところ山東盆地側ではこうした金銅装の遺物は知られておらず、円山川本流地域が優位となっている。

須恵期の窯跡としては和田山盆地北部の岡田窯跡群が知られているが、すでに消滅している。この他、朝来盆地には松谷窯跡が存在する。

古墳時代の土器類では庄内併行期には畿内・丹波・丹後以外にも山陰地方の影響が強く見られるようになり、布留式段階まで残る。須恵器はTK73段階から導入されてはいるが、TK208段階までは量的には少なく、この段階では土師器が主流であり、中でも高杯が最も多く見受けられる器種である。TK23～47段階で増加する傾向にはあるが、集落遺跡での使用はまだ限定的であり、古墳の副葬品としての使用が主流である。集落遺跡ではまだ土師器が主流であり、高杯が多用されている。須恵器が集落遺跡において確実に増加してくるのは、MT85型式以降であり、この段階で土師器高杯が占める割合は減少してくる。

律令期、山東盆地・和田山盆地・朝来盆地は但馬国朝来郡に編入される。倭名類聚抄では朝来郡には山口・桑市・伊由・賀都・枚田・東河・朝来・粟賀・磯部の9郷が記され、山口・桑市・伊由の三郷は朝来盆地内に、賀都・枚田・東河は和田山盆地内とその北部に、粟賀・磯部は山東盆地に、朝来も不確かながらも記述順から山東盆地に比定されている。群衙の所在地については和田山町筒江地区の東側に、朝来郷が山東盆地に比定されるとして山東盆地の入り口に近い谷の山裾の段丘上に求める説もあるが定かでない。

山東盆地・和田山盆地内には古代の山陰道が通過し、粟鹿駅が置かれている。現在山陰道については遠坂峠から山東盆地に入り、柴川に沿って下り、そのまま国道9号沿いに進むルートや、山東町末歳か

ら南に折れ、楽音寺から峠越えで和田山盆地に入り、さらに和田山盆地から山間を進むルート等が言われている。粟鹿駅については遠阪峠の但馬側の口に求めることでは一致しているが、詳細な場所では一致していない。最近は山東町柴遺跡の成果から柴集落付近に求める説が有力になってきている。また和田山盆地側の加都遺跡からは、播磨と但馬を繋ぐであろう「但馬道」と仮称される律令期の道路遺構が約600mに渡って検出されている。

古墳時代に大規模に発展した本遺跡や粟鹿遺跡・加都遺跡は7世紀前半には相次いで終焉し、律令期には継続しない。これ以降、律令期には平野部の中央で大規模に集落遺跡が展開されることはなく、居住遺跡は盆地縁辺の谷間に、まるで一軒単位とも採れるような小規模で展開することになる。山東盆地側では柴遺跡（47）・方谷遺跡（46）・三保遺跡（13）・越田宮ノ前遺跡（28）・梶原遺跡（74）・梅ヶ作遺跡（75）・和賀散布地（52）がある他、一旦途絶えた粟鹿遺跡の西端には粟鹿神社と関連があるとされる建物が検出されている。和田山盆地側では筒江大垣遺跡（146）・加都遺跡がある程度である。柴遺跡は極めて湿潤で狭小な谷間に位置する小規模な遺跡であるが、「駅子」の記載がある木簡が出土し、粟鹿駅との関連が言われている。また方谷遺跡・梶原遺跡・筒江大垣遺跡等も、やはり湿潤で狭小な谷間に位置する極めて小規模な遺跡にも係わらず施釉陶器を出土している。粟鹿遺跡では溝で区画した内部に奈良時代初頭の掘立柱建物が検出されている。流路内から墨書土器が出土しており、中に「神部」と判読できるものが含まれている。加都遺跡では道路遺構が約600mに渡って検出され、道路の側には井戸も確認されている。木簡が出土しており、荷札と見られる木簡には「山口里」、習書木簡には「郡」・「長」という字が記載され、他にも「神部」と判読できそうな文字を含む耕地に関する木簡があるなど、郡衛との関連を考えさせる遺物が出土している。

朝来町釣坂遺跡でも木簡が出土しているが、釈読が困難なものである。墨書土器を多数出土しており、中には「郷長」と記載されたものが含まれている。この他、筒江大垣遺跡でも木簡と墨書土器が出土しており、方谷遺跡でも墨書土器が出土している。

寺院跡は山東盆地側では知られていないが、和田山盆地側で法興寺跡（159）が、朝来盆地では立脇廃寺が建立されている。この内、法興寺は伽藍配置は明らかになっていないものの、古新羅系の素弁蓮華文軒丸瓦を出土し、独自色の強い寺跡とされている。長尾古墳で出土した金銅装太刀には唐草文を透かし彫りした金具が使用されており、関連している可能性も考えられる。

2．地理的環境

遺跡の位置する南但馬地域は中国山地から北に伸びる山地と、山地間を流下する河川沿いの谷部からなり、河川沿いの谷部には狭小ではあるが平野部が形成され、円山川流域には和田山盆地が、円山川の支流である与布土川流域には山東盆地が形成されている。遺跡は山東盆地側に位置する。

山東盆地は与布土川が和田山盆地へと流れ出る北西部のみが開口し、西・南・東を標高962mの粟鹿山を最高峰とする朝来群山とそこから北に派生する標高400m以上の山地に、北は東西に連なる標高約400m級の山地によって画される。山地の麓には標高150～300mまでの低平な丘陵地帯が北から南に延び、「山東マサ」と呼ばれる真砂土の採掘場となっている。丘陵の平野部に臨む尾根突端には古墳時代後期以前の古墳群が多く築かれる丘陵地帯でもある。

盆地内には与布土川と支流である粟鹿川、粟鹿川の支流である三保川・磯部川・柴川等の中小の河川が流れ、流域に平野部を形成する。与布土川は盆地内では最も大きな河川であり、粟鹿山西麓に発し、盆地西端を北流して、盆地開口部で西に向きを変え、和田山盆地内に流れ込む。粟鹿川と柴川は粟鹿山北麓に発し、谷部の南端と北端をそれぞれ北西流して一本の河川となり、途中磯部川も合流した後、盆地の開口部で与布土川に合流する。三保川は粟鹿山山塊の西端付近に発し、与布土川の東に広がる平野部の東端を北流して、粟鹿川に合流する小河川である。

盆地内の平野部はこれらの河川の流域に広がり、大きくは与布土川と三保川に挟まれた南北に伸びる平野部と、粟鹿川と柴川に挟まれた北西―南東方向の平野部で形成され、二つの平野部が合流する付近では比較的幅広い平野部となる。

遺跡はこの合流部から南にかけての平野部に広がる。この平野部は与布土川の形成した扇状地であり、沖積平野とは崖状となって画されることから、扇状地が段丘化したものとみている。Ⅰ区では段丘基盤層の中に火山灰層が確認されている。

平野部の上面は南西側が高く、そこから北東方向にほぼ330mで10m下降する傾斜であり、傾斜角度は約1.4°となる。平野部両端の河川沿いには与布土川と三保川の形成した旧河道とみられる浅く細い谷筋が形成され、それに沿うように細長い微高地が形成されている。平野部中央にはそうした明瞭な谷筋はみられない。ただ南側丘陵の西側からは北東方向に２本の高まりが直線的に延び、また与布土川沿いの細い谷筋の東側に沿って北西方向に延びる高まりが確認できる。これらの高まりの間には浅い谷部が形成されている。こうした微起伏は今回の調査区内にも伸びており、検出される遺構や遺構密度に影響している。遺構密度が最も高かったⅡ区は最も東の高まり上に、住居遺構が検出されたⅢ区からⅣ区東半は中央の高まり上に、Ⅳ区西端は細い谷筋の東に沿った高まりの東端にあたる。そしてⅢ区で検出された自然流路と思われるSD30001・30004は東側と中央の高まりに挟まれた谷部を流下しており、Ⅳ区で検出された遺構が営まれていない谷部も、中央と西端の高まりに挟まれた浅い谷部であることから、住居遺構が営まれなかったものと思われる。こうしてみると、本遺跡においても段丘上の微起伏を利用し、制限されて、遺構が営まれたものと言える。

第３図　遺跡の微地形

第３節　遺跡の範囲

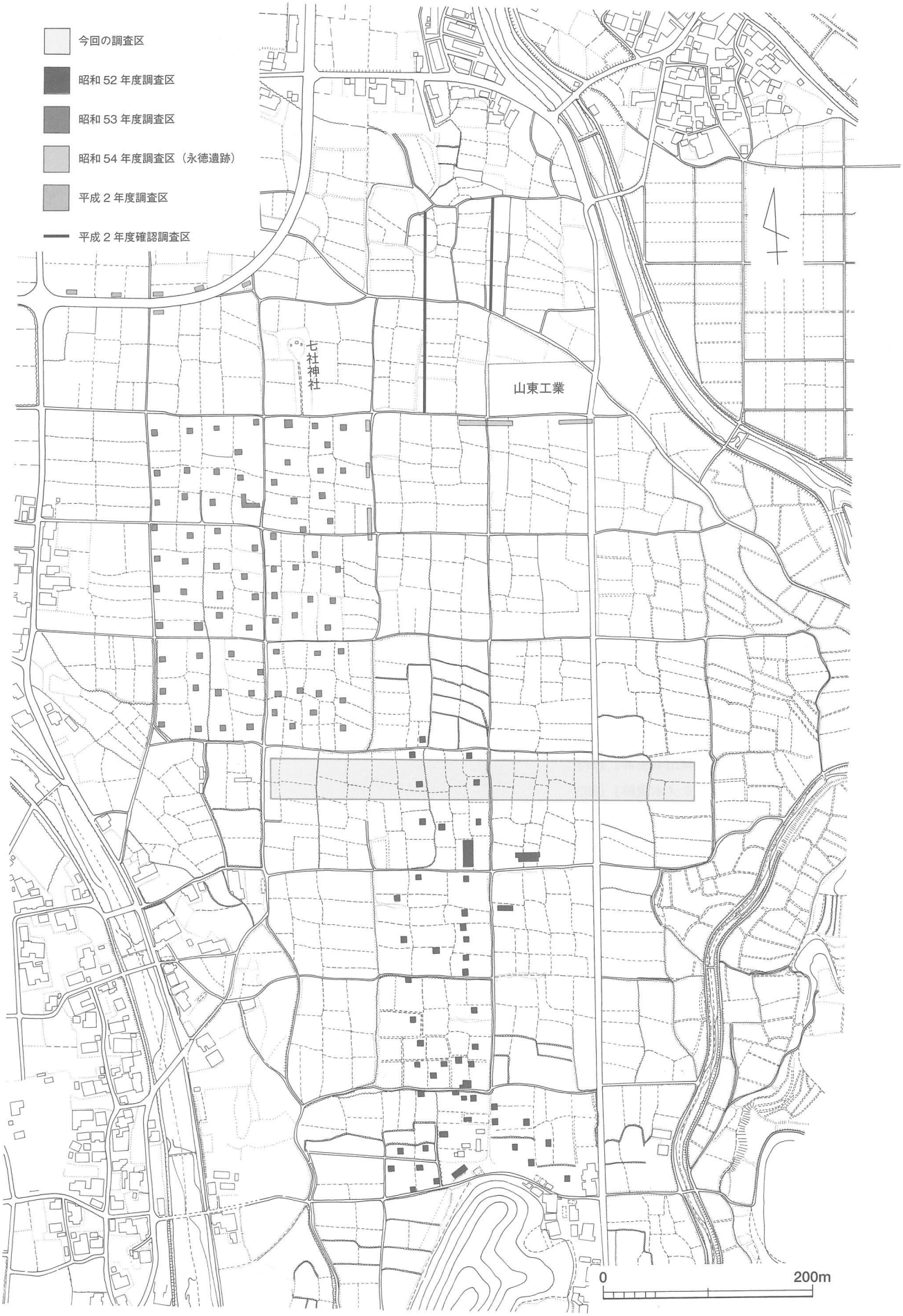
山東町街南方の与布土川と三保川に挟まれた平野部は、与布土川によって形成された扇状地が段丘化したものであり、段丘上は南西から北東方向に緩やかに傾斜し、扇状地端にあたる町道末歳三保線の東側から山東工業北側の里道沿いを経由して、七社神社北側に至る段丘崖が形成されている。

平野部上には現在、柿坪遺跡と永徳遺跡の両遺跡が所在している。柿坪遺跡は平野部の南東部から北西部にかけて広がり、昭和51年の分布調査において、山東町柿坪から大月にかけての平野部に広がる散布地として発見され、大字名から柿坪遺跡と命名された。そして、昭和52年には圃場整備に伴う確認調査が遺跡の中央から南東部側にあたる柿坪地区と大月地区で実施された。確認調査ということで、２×２ｍのグリッドによる調査であったが、弥生時代中期から古墳時代全般にかけての竪穴住居跡等が検出され、圃場整備による削平が大きい地区についてはグリッドの範囲を広げた調査も実施されている。つづく、昭和53年には同じ圃場整備に伴う確認調査が遺跡の中央から北西部側の大月地区で実施され、南東部側と同様に古墳時代を中心とする竪穴住居跡が確認されたほか、古墳時代後期の鍛冶遺構も検出されている。さらに南東部側では見られなかった縄文土器の出土や中世の遺構が検出されている。従来の柿坪遺跡の範囲はこの両調査の範囲とされている。

永徳遺跡は柿坪遺跡の北方、平野部の中央から北東側に広がり、昭和54年、圃場整備事業の排水路工事に伴う確認調査・本発掘調査が行われ、古墳時代後期の竪穴住居跡が検出されている。この調査区は昭和52年の調査範囲からは約200ｍの距離であり、その間に地形的な変化もない。平成２年度には、平野部の北西隅で、県道浅野山東線の歩道設置工事に伴う確認調査が「永徳遺跡」として実施された。この調査範囲は七社神社裏から連続してきた段丘上と沖積地にあたり、遺構は確認できなかったものの、遺物が出土している。特に段丘上にあたる地区では弥生時代・古墳時代・中世の土器が多量に出土しており、この近辺に遺跡が存在すると結論付けられている。遺跡が近辺に所在するとされた段丘上にあたる地区は昭和53年の調査範囲とは約100ｍしか離れておらず、近辺に所在する遺跡は柿坪遺跡である可能性は高い。また、同じ平成２年には山東町教育委員会によって農村総合整備事業の排水路工事に伴い、延長が100ｍ以上に及ぶトレンチによる調査が実施された。この調査は昭和54年の調査区の北側で実施されたものであり、地形的には段丘上から段丘下の沖積地にあたる地区で実施されたものである。調査の結果、段丘上にあたるトレンチの南半部で遺構が確認され、段丘下の沖積地に当たる地区では遺物は出土するものの遺構は確認されていない。永徳遺跡の北限にあたるとされている。

以上、山東町街の南部の平野部に位置する柿坪遺跡と永徳遺跡の調査歴と調査結果をみてきた。前述のとおり、柿坪遺跡は弥生時代中期から古墳時代全般にわたる集落遺跡であり、永徳遺跡は古墳時代後期を中心とする集落遺跡である。古墳時代後期には柿坪遺跡と永徳遺跡が至近距離で併存していたことになり、両遺跡間に地形的な隔絶もないことから、両遺跡は同一遺跡として把握する方が妥当であろう。

したがって、柿坪遺跡の範囲は南を柿坪中山丘陵裾、北を七社神社裏、東を町道末歳三保線の東側、西は与布土川の範囲となり、ほぼ南北１㎞、東西400ｍ、総面積にして約400,000㎡の広大な遺跡ということになる。但馬地方の古墳時代集落は加都遺跡・粟鹿遺跡等で明らかにされているが、面積的には南但馬のみならず兵庫県下でも最大規模であり、遺跡の内容でも但馬の最も有力な集落といえる。



第 4 図　遺跡の範囲と調査歴

引用・参考文献

田畑　基　「考古学からみた和田山町」『和田山町史　上巻』　和田山町史編纂委員会2004

生田隆・足立裕　『古道と城・邑・神社』2005

別府洋二　「加都遺跡」『木簡研究20』1998

岸本一宏・甲斐秋光「加都遺跡」『木簡研究21』1999

中島雄二　「釣坂遺跡」『木簡研究21』1999

西口圭介　「柴遺跡」『木簡研究22』2001

兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』2004

兵庫県教育委員会『梅田古墳群Ⅰ』1999

兵庫県教育委員会『梅田古墳群Ⅱ』2003

兵庫県教育委員会『梅田東古墳群』2002

兵庫県教育委員会『筒江浦石遺跡』2007

兵庫県教育委員会『粟鹿遺跡』2007

兵庫県教育委員会『加都遺跡Ⅰ』2005

兵庫県教育委員会『加都遺跡Ⅱ』2007

兵庫県教育委員会『向山古墳群・市条寺山古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡』1999

兵庫県教育委員会『“古墳王国”但馬の夢を語る』和田山町教育委員会発行2004

山東町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会『西谷古墳群・迫間古墳群』1979

山東町教育委員会『柿坪中山古墳群第１集』1975

山東町教育委員会『柿坪中山古墳群第２集』1978

山東町教育委員会『永徳遺跡』1979

山東町教育委員会『三保東山古墳』1981

山東町教育委員会『持谷古墳群発掘報告書』1988

和田山町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会『和田山町の古墳』1993

和田山町教育委員会『城ノ山古墳・池田古墳』1972

和田山町教育委員会『秋葉山墳墓群』1978

和田山町教育委員会『ムクノ木遺跡』1992

和田山町教育委員会『大盛山遺跡』1995

和田山町教育委員会『宮ノ本遺跡宮ノ本地区　宮ノ本遺跡第３次発掘調査現地説明会資料』1999

朝来町教育委員会『船宮古墳』

朝来町教育委員会『朝来町歴史探訪　朝来町史上巻』1977

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

兵庫県の中央には東西に中国山地が連なり、この山地によって地勢や気象条件が大きく異なる。中国山地南側は気象も温暖少雨であり、瀬戸内海という船舶航路に恵まれ、早くから重工業を中心とした産業が発達し、物資輸送のための高速道路あるいは自動車専用道路の整備が進められてきた。現在では、東西に名神高速道路・山陽自動車道・中国自動車道といった高速道路、阪神高速道路や第二神明道路等の自動車専用道路、南北にも県東部に北近畿自動車道、中央部に播但連絡道路等が整備され、現在でも第二名神や加古川南北道路等の計画・整備が進められている。

一方、中国山地北側の但馬地域は山がちな地方であり、高速道路・自動車専用道といった高規格道路の整備は遅れ、国道９号・312号といった一般国道が物資輸送の基幹道路の役割を荷ってきた。播磨と但馬を繋ぐ播但連絡道も但馬の南端で止まり、それ以北は計画のみが存在するというような状態で、物資輸送の点では大きく遅れをとっていた。

そのため、国土交通省は兵庫県とともに但馬地域の高規格道路の整備を進めることとし、国土交通省は北近畿自動車道舞鶴若狭道の七日市インターチェンジから但馬北部の豊岡市を結ぶ北近畿豊岡自動車道を計画、兵庫県では播但連絡道の和田山までの延伸を決め、和田山にジャンクションを建設し北近畿豊岡自動車道と連結する計画を作成した。早くから高規格道路の整備を熱望していた沿線の市町も期成同盟を結成して、早期実現を目指していた。そこに、平成７年の阪神淡路大震災で、非常時における物資輸送の確保が問題となり、これらの計画も、その実現が急務となった。

国土交通省では北近畿豊岡自動車道計画の内、七日市インターから和田山ジャンクションまでの間を北近畿自動車道春日和田山道路Ⅱとして先行実施することを計画し、氷上郡側を兵庫国道工事事務所（当時）が、朝来郡側を豊岡国道工事事務所（当時）が担当して実施することになった。

計画が具体化し、現地に用地杭が打設された平成５年に兵庫県教育委員会では分布調査を実施、その結果、計画用地の実に80％に埋蔵文化財が存在する可能性がありと判断され、その取り扱いが重要課題となった。北近畿豊岡自動車道の建設推進は兵庫県の重要施策であり、教育委員会でも重点的な取組みが必要であると判断し、計画が本格的に始動し始めた平成９年に調査条件が整った箇所から確認調査を実施した。

柿坪遺跡は昭和52・53年の調査で弥生時代から古墳時代の集落遺跡であることが明らかにされており、道路計画は柿坪遺跡の中央を横断する形で進められ、平成10年に確認調査実施の準備が整えられた。そこで兵庫県教育委員会では遺跡の取り扱いに関するデータや本発掘調査計画を作成するためのデータを得ることを目的に確認調査を実施した。この確認調査によって東西400ｍについて本発掘調査が必要と判断し、その実施に向けて豊岡工事事務所と協議を重ね、道路建設用地・側道建設用地を対象とする調査は平成11年４月に実施の運びとなった。しかし、調査を実施する教育委員会の発注の関係から、調査は対象区を２分割して実施することとなり、平成11年５月にまず東半分を（第１次本発掘調査）、残る部分については同年９月から実施した（第２次本発掘調査）。この調査時に実施が不可能だった地区については平成12年度に実施（第３次本発掘調査）、さらに道路排水溝に伴う調査は道路建設工事に合わせて平成14年度に実施した（第４次・第５次本発掘調査）。

第２節　調査の経過と体制

１．概略

北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱに伴う柿坪遺跡の本発掘対象地は、本道建設予定地と建設後に町道となる側道予定地の部分とを合わせ東西400ｍ・南北40ｍ、面積にして16,000㎡の広さである。

確認調査の結果からは、東端に沖積地の氾濫原が含まれるものの、残る300ｍ以上の地区は竪穴住居跡等を中心に相当数の遺構が検出されるであろう、さらに遺構面は黒色・黒褐色、遺構の埋土も黒色・黒褐色の色調であるという結果が出ており、調査には相当の時間を要することが予測された。

しかし、兵庫県教育委員会では発掘調査の作業部分を「発掘調査工事」として発注するシステムを採っており、全体を一括発注すると、入札を実施し、契約を締結するまでに相当の時間を要する。そのため、平成11年度内に柿坪遺跡全体の本発掘調査を行うだけの期間が確保できない事態となる。そこで、遺跡を２分割して請負工事の発注をする方法をとり、平成11年度の５月に「柿坪遺跡発掘調査工事その１」として業者発注し（第１次本発掘調査）、同年９月に「柿坪遺跡発掘調査工事その２」として発注し（第２次本発掘調査）実施した。これら２回の調査で遺跡は古墳時代の豪族と関連する大型掘立柱建物を内蔵する大規模集落であることが判明し、柿坪遺跡の重要性があらためて認識された。

ただ、これら第１次・第２次の本発掘調査の際に、調査対象区の内の南端には、すでに作付けが行われており、調査の実施は不可能であった。そこで豊岡工事事務所と協議し、作付け部分は調査の対象からは除外して、作付けが終了した時点で行うこととし、実施できたのは翌平成12年度であった（第３次本発掘調査）。

柿坪遺跡の重要性は豊岡工事事務所側でも認識され、その後に北近畿豊岡自動車道の路面からの排水対策としての排水路工事施工の協議を受け、道路建設工事の進捗に合わせ、平成14年度に２回の本発掘調査を実施した（第４次・第５次本発掘調査）。

なお、柿坪遺跡の本発掘調査予定地内には、東から町道三保末歳線、町道与布土15号線、農道が横断しており、当初これらの道路下については調査を実施しない予定であった。そこでこれらの道路を利用して地区割りし、調査対象地を東からⅠ～Ⅳ区として調査を実施した。後に三保末歳線以外の道路下については道路を除去して調査を実施したため、Ⅱ区とⅢ区の境が不明瞭な形となったが、道路下はⅢ区として扱い、Ⅱ区から連続する遺構についてはⅡ区の遺構として扱っている。Ⅲ区とⅣ区の間には道路を撤去しても排水路が残ったため、これを境界にしている。

２．確認調査の経過と体制

予定地の80％が埋蔵文化財包蔵地と判明した北近畿豊岡自動車道に伴う確認調査は平成９年度から調査条件が整った箇所から随時実施してきたが、平成10年度には山東町（現朝来市山東町）域の平野部についてほぼ調査条件が整備されて調査が可能になった。そこで分布調査において第106・107・107-2・108・118・120-2地点と呼ばれた埋蔵文化財包蔵地について確認調査を実施した。確認調査は平成10年10月９日から対象包蔵地の最も東側の106地点から開始し、順次西に進めて、12月18日に終了した。多地点が調査対象であり、最終的な調査面積は2,605㎡にのぼった。

柿坪遺跡は北近畿豊岡自動車道の分布調査では第118地点とされていたが、昭和52年の圃場整備事業に伴う確認調査において、すでに遺跡の存在は明らかにされており、圃場整備事業で大きく削平を受け

る箇所については調査区を広げての遺構の調査も行われている。

道路予定地は遺構の調査が行われた地点に隣接しており、予定地内に遺跡が存在することは充分予測された。そこで確認調査の実施にあたっては遺跡の東西への広がり、遺構面の深さ、遺構の密度など、本発掘調査実施に向けてのデータを得ることを目的に実施した。そのため、確実に遺構が存在するであろう地区では粗く、東西の端に比較的密にトレンチを設定した。

調査の結果、町道三保末歳線と三保大月七社神社線間の300ｍの範囲では竪穴住居跡や柱穴等の遺構が多く確認され、町道三保末歳線の東側は氾濫原ではあるが完形に近い土器が含まれていることから、本発掘調査が必要と判断された。

調査体制

調査担当機関　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

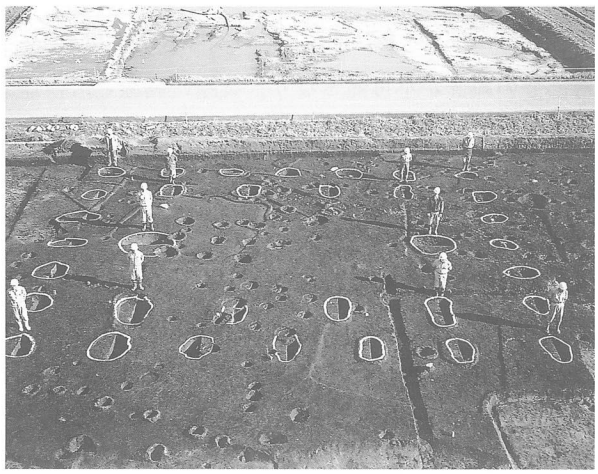
調査担当者　　調査第２班　吉識雅仁　佐々木俊彦　仁尾一人

３．第１次本発掘調査の経過と体制

第１次調査は本発掘調査予定地のⅠ・Ⅱ区の内、道路本体建設予定地5,700㎡を対象とし実施する予定であったが、先のような用地の事情があり、実際に実施したのはⅠ区2,691㎡、Ⅱ区2,596㎡、計5,287㎡であった。

調査は平成11年５月21日よりⅡ区から開始し、耕土・床土等を機械力で除去した後、人力で遺構面を精査し、遺構の検出、遺構の掘削を行った。しかし、遺構面は黒色、検出する遺構の埋土も黒色ということで、遺構の検出では難渋した。それでも大部分ではなんとか黒色の遺構面上で検出できたが、一部どうしても検出が困難な箇所があり、その部分では下層の黄色を呈する基盤層上まで下げて検出した。

Ⅱ区での遺構掘削が進展していく中、調査期間のこともあり、７月５日からⅠ区の機械力による掘削を開始し、７月20日からは両地区並行で包含層や遺構掘削を人力で進めた。こうした調査の結果、Ⅰ区では初期須恵器を含む護岸溝、Ⅱ区では数多くの竪穴住居や大型掘立柱建物等が検出された。



第５図　第２次本発掘調査風景（SB20005）

第６図　第２次本発掘調査　雪に埋れた調査区

こうした遺構が検出されたことから古代建築を専門とする東北芸術工化大学教授（当時）の宮本長二郎氏に現地指導をお願いし、建築学的見地からの教示を得た。

検出した遺構は８月27日に空中写真撮影を行い、これにより平面図等を作成した。この他の部分的な

詳細図や断面図等の作成は人力で行った。

兵庫県教育委員会のシステムでは発掘調査工事は兵庫県出納室の中にある検査室の工事検査を受ける必要があり、９月10日に工事検査を受け、発掘調査は９月15日に終了した。

調査の体制

調査担当機関　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者　　調査第２班　　吉識雅仁　池田征弘

戸田真美子

現場事務員及び室内作業員　　奥　和美　松岡京子

安達まゆみ　田中美樹

４．第２次本発掘調査の経過と体制

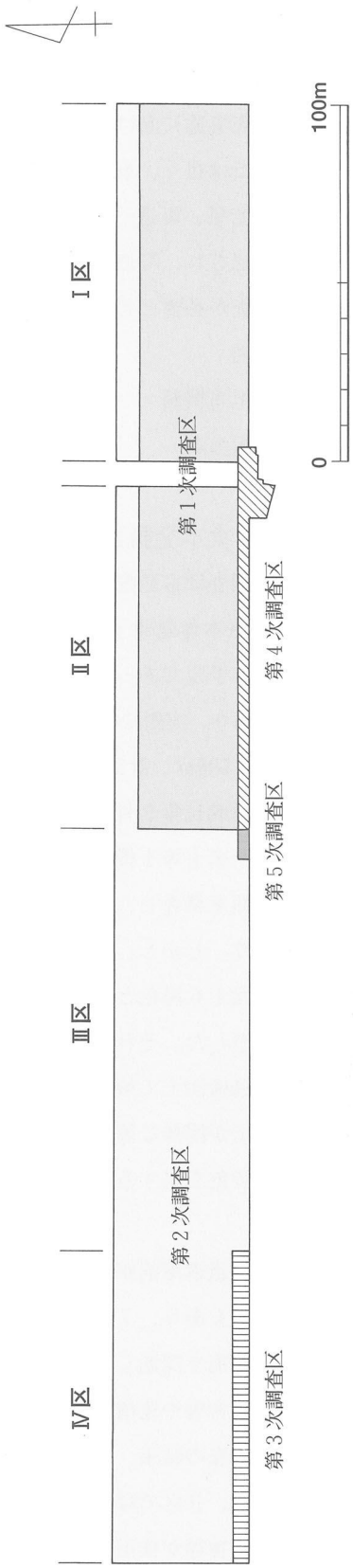
第２次調査は本発掘調査予定地のⅠ・Ⅱ区の内の側道部分と、Ⅲ・Ⅳ区全体の8,930㎡を予定していたが、用地の都合でⅣ区南端部分の調査が不可能となり、実際に実施したのはⅠ区780㎡、Ⅱ区836㎡、Ⅲ区3,925㎡、Ⅳ区2,846㎡、計8,387㎡であった。

第２次調査は第１次調査に継続して実施しできるように、豊岡工事事務所と契約協議をし、平成11年９月13日から開始した。調査の方法は第１次調査と同様に、耕土・床土等を機械力で除去した後、人力で遺構面を精査し、遺構の検出、遺構の掘削を行った。

調査途上で調査区を横断する道路下の調査も必要となり、その調査について豊岡工事事務所と協議を行い、三保末歳線は生活道路として利用され、道路下には町の上水道が埋設されていることや、道路本体工事にも含まないことからも調査は困難となった。しかし与布土15号線と農道について撤去し調査することは可能となり、調査の実施方法について協議をしたが、最終的にはこの調査の中で行うことになり、12月に道路を撤去して、第２次調査区の中に含めた。

検出した遺構の平面図作成は空中写真撮影測量により行い、第１回目を12月15日にⅡ区とⅢ区対象として行い、第２回目を平成12年２月13日にⅣ区とⅠ区を対象として、ともにヘリコプターによる撮影を行った。これにより、あとは調査終了予定の２月23日に向けて残る作業を実施する予定であった。

しかし、ヘリコプターによる空中写真撮影が済んだ日の夜から但馬地方は記録的な大雪に見舞われ、翌日・翌々日と降った雪は現場での積雪量が90㎝となった。幹線道路は除雪が間に合わずに大渋滞、但馬地方は大混乱となった。現場も空測日には雪はまったくなかったが、一晩で大型掘立柱建物の径２ｍの棟持柱も雪に



第７図　本発掘調査区の配置図

埋まって見えない状態になった。雪が止んでもなかなか解けず、遺構をすべて掘削し、あとは個々の遺構の写真撮影を残す状態では機械力を入れて雪かきも出来ず、さりとて9,000㎡近い面積を人力で雪かきも出来ず、手をこまねいているのもと思い、温風器・火炎放射器等、さまざまな方法で除雪を試みたが、悲しいかな雪は頑として解けず、自然の力にはかなわないと、やむなく調査を一時中断して、自然による融雪を待つことにし、調査期間を1ヶ月延長した。

第8図　第2次本発掘調査風景（SB20016）

この中止している間の2月24日に記者発表、2月27日に大型建物の部分だけを雪かきをし、現地説明会を実施した。記者発表・現地説明会にあたっては、再度宮本長二郎氏に大型建物群や柿坪遺跡の評価をお願いし、貴重なコメントを頂いた。こうしている間に雪は徐々に溶け、3月13日から調査を再開し、写真撮影・断ち割り作業などを行い、調査が終了したのは3月23日であった。

調査の体制

調査担当機関　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者　　調査第2班　　吉識雅仁　池田征弘　戸田真美子

現場事務員及び室内作業員　　奥　和美　松岡京子　安達真由美　田中美樹

5．第3次本発掘調査の経過と体制

第2次調査で実施ができなかったⅣ区の南端を対象とした調査であり、調査区は長さ84m・幅3m弱の細長く、調査面積にして226㎡の狭小なものである。

調査は平成12年11月27日より開始し、第1次・第2次調査と同様に機械力によって耕土・床土等を除去し、包含層掘削、遺構検出、遺構掘削は人力で行った。検出した遺構の記録はすべて調査員自らが行い、調査が終了したのは12月13日であった。

調査の体制

調査担当機関　兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所

調査担当者　調査第3班　長浜誠司
上田健太郎

第9図　第3次本発掘調査風景

6．第４次本発掘調査の経過と体制

北近畿豊岡自動車道の排水施設の施工工事に伴う調査として実施したものであり、工事の進捗に合わせて実施した。工事は南からの排水及び道路面からの排水を受けるため、Ⅱ・Ⅲ区の南端を自動車道に沿って排水路を設置し、町道三保末歳線下はサイフォン方式でⅠ区に渡り、そこからはオープンで東進させて三保川に排水するものである。このため、Ⅱ・Ⅲ区の南側とⅠ区南側の内の西端部分では調査が必要と判断し、工事が開始されるⅠ区南側の西端とⅡ区南側について平成14年７月23日から調査を実施した。調査にあたっては町道から西側の排水路設置部分を水路区、町道西側のサイフォン部分を西区、町道下の部分を中央区、町道東側のサイフォン部分を東区として実施したが、整理段階で水路区と西区及び中央区は隣接するⅡ区に、東区はⅠ区に含めた。なお、町道の側溝を切り替えるための仮設水路については立会し、掘削が遺構面に及ぶことが確認されたため西区に含めて調査を実施した。

第10図　第４次本発掘調査風景

この調査は工事の進捗に合わせて実施したため、まず仮設水路部分からかかり、水路区に移り、仮設水路が完成後に西区を実施し、そこで工事の関係から一旦調査は中断した。そして９月16日からは中央区、東区の調査を実施し、全体の調査が終了したのは10月11日であった。調査面積は計300㎡となった。なお、調査は機械力で盛土・床土を除去し、遺構の検出・遺構の掘削は人力で行い、写真撮影・実測図の作製も人力で行った。

調査の体制

調査担当機関　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者　調査第１班　　吉識雅仁

7．第５次本発掘調査の経過と体制

第１次・第２次本発掘調査のⅡ区とⅢ区の境の南側に隣接し、第4次調査の水路区の西に連続する。集水枡と水路部分が調査対象であったが、調査面積は37㎡である。

調査は平成15年１月21日から開始し、耕土・盛土を機械力で除去し、遺構の検出、遺構の掘削は人力で行った。遺構の写真撮影・実測図の作成は調査員が行い、調査は１月23日に終了した。

第11図　第５次本発掘調査風景

調査の体制

調査担当機関　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者　　調査第３班　　池田征弘

表２　発掘調査年次表

	担　当　者	調査面積(㎡)	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
確認調査	吉識雅仁　佐々木俊彦　仁尾一人	140					
第１次調査	吉識雅仁　池田征弘　戸田真美子	5,287					
第２次調査	吉識雅仁　池田征弘　戸田真美子	8,387					
第３次調査	長浜誠司　上田健太郎	226					
第４次調査	吉識雅仁	300					
第５次調査	池田征弘	36					
調査面積計		14,236					

表３　整理作業年次表

作業内容	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
水洗い					
ネーミング					
接合・補強					
実測・拓本					
復元					
写真撮影					
写真整理					
図面補正					
トレース					
レイアウト					
分析鑑定					
保存処理					
報告書印刷					

8．整理調査の経過と体制

整理作業は平成15年度から開始し、当初は平成18年度までの４ヵ年で終了する予定であったが、調査記録が膨大なことから平成19年度までの５ヵ年で行った。また担当機関も平成15～18年度までは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行い、最終の平成19年度は組織名変更により、埋蔵文化財調査事務所は、兵庫県立考古博物館調査部となったため、そちらで行った。

各年次の作業内容は表３の通りである。出土した遺物の水洗い作業は発掘調査と並行して一部を実施したが、現地での調査期間中に洗いが終了しなかったものについては整理作業の中で実施した。

水洗いからレイアウトまでの整理作業の実務は埋蔵文化財調査事務所及び県立考古博物館で雇用する嘱託職員が行った。実測作業は接合された遺物の中から担当職員が抽出したものを嘱託職員が図化し、それを担当職員がチェックして完成させた。遺構図面の補正、トレース原図の作成は担当職員が行い、トレース作業については嘱託職員が行った。

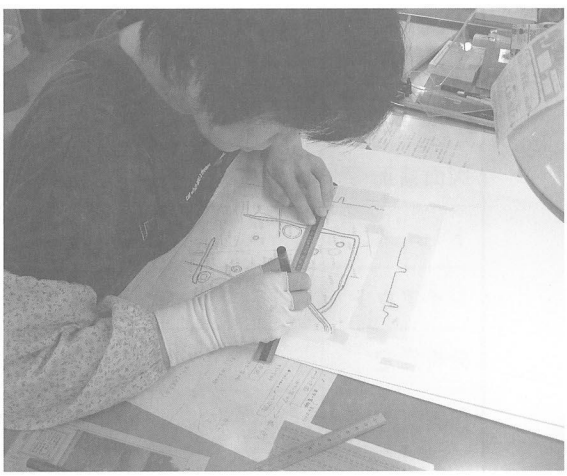
この他、写真撮影については株式会社タニグチ・フォトに委託し、木製品の樹種同定及び出土種子の同定はパリノ・サーヴェイ株式会社、木材の年代測定は加速器分析研究所に委託、木製品及び金属製品の保存処理は埋蔵文化財調査事務所及び県立考古博物館の担当職員が行った。

整理調査体制

担当職員　吉識雅仁　池田征弘　岡本一秀

嘱託職員　八木和子　垣本明美　長川加奈子
川村由紀　池田悦子　島田留里
村上京子　前川悦子　加藤裕美
岡田祥子　栗山美奈　大前篤子
藤井光代　三島重美　香川フジ子
真子ふさ恵　西口由紀　木村淑子
中田明美　島村順子　小野潤子
宮野正子　三好綾子
前田千栄子　奥野政子　又江立子
早川有紀　荒木由美子
藤池かづさ

第12図　整理調査作業風景



第13図　整理調査作業風景

第３章　遺構

第１節　Ｉ区の遺構

１．概要

調査対象とした地区の東端にあたる調査区であり、調査区の西端から約45ｍまでは完新世段丘上にあたり、そこから東は三保川の形成した氾濫原にあたる。段丘の末端は氾濫の影響を受け、沖積層の堆積や自然流路の痕跡が確認されている。段丘上の遺構面はにぶい黄褐色シルト上であり、遺構面直上までは圃場整備時の盛土であることや遺構面上にキャタピラが残っていたことから、圃場整備時に大きく削平や攪乱を受けたことが窺える。特に調査前に水田が一段低くなっていた北端約７ｍは遺構面も約30㎝の段をなして低くなり、その部分では遺構は全く検出されなかった。削平により全て消失してしまったものと思われる。氾濫原については時間的な制約から充分な調査は行えていないが、砂礫層や砂層が堆積し、図版３でみられるように流路跡が錯綜している。これらの流路は現在平野部の東端を流れている三保川の影響によるものと思われる。確認調査ではこれらの流路跡の一部から庄内期の土器が出土している。また砂礫層の堆積や流路の影響がほぼ治まった段階の図版２第43層の灰色細砂～粗砂上からは水田の畦畔の一部が検出されたおり、氾濫がほぼ治まって以降は水田として利用されたようである。ただ下層から古墳時代以降の須恵器片が出土しており、水田畦畔は少なくとも律令期以降の所産と考えられる。

検出された遺構は竪穴住居跡３棟・柱穴133個・溝３条であり、Ⅱ・Ⅲ区と比較すると、遺構は少なく、分布密度も低い。これは圃場整備時に削平された影響が考えられ、調査区西端の僅かな範囲は遺構面が比較的よく残っており、高い密度で柱穴が検出されていることからすれば、少なからず削平により消失した遺構が存在したことが推測される。ただ削平されたにしてもSH10001の柱穴底は標高約109.3ｍであり、竪穴住居等が多ければSH10001やSH10002の周囲にはもう少し柱穴が遺存していてもよいように思われ、Ｉ区が遺跡の東縁にあたることやSD10001やSD10002・SD10003に起因して、元来から竪穴住居等の分布は低かった可能性がある。

竪穴住居跡SH10001とSH10002は約0.7ｍの間隔で東西に並行して検出されている。２棟が同時に並存していた可能性が考えられる。溝類は段丘と氾濫原の境付近で検出されたが、SD10001以外は人工的なものとも自然の流路とも判断がつかなかった。SD10001は最終段階では板材による護岸が施され、初期須恵器等の土器類とともに馬歯や臼玉が出土しており、祭祀が執り行われた溝の性格を有するものである。Ⅱ区には4面庇付独立棟持柱建物SB20005を中心とした大型掘立柱建物群が存在しており、関連が注目される。

２．遺構

竪穴住居跡

SH15001（図版４、写真図版３）

第４次の北近畿道の排水路工事に伴う調査において、Ｉ区の南西隅から検出された竪穴住居跡である。

SH15002を切った状態で検出され、住居廃絶後には土師器を中心とする土器類が投棄されていた。

住居の規模は東西5.0m以上・南北3.55m以上であり、北半分の壁や床面は削平により消失し、主柱穴のみが遺存していた。また東壁は調査区外となっている。壁は最高20cm遺存し、壁下には壁溝が全周し、壁溝は幅約15cm・深さ8cmを測る。主柱穴と見られる柱穴は3本が検出され、配置から見て本来は主柱穴4本の構造とみられる。主柱穴は径30～35cm・深さ25～50cmであり、南西側の主柱穴では径15cmの柱痕跡が確認された。

住居内からは廃絶後に投棄された須恵器高杯(1)・椀(2)・甕(3)、土師器壺(21・22)・甕(17～20)・高杯(4～16)・椀(23)・把手(24)、製塩土器(25)が出土しており、第9期に相当する。

SH10001（図版5、写真図版2）

SH10002の西側で検出された小型の竪穴住居跡であり、北半部については壁か壁溝が遺存していたが、南半部については壁も壁溝も削平により消失した状態で検出された。

東壁が5cmのみ遺存しており、東西が約3.25m測る。南北規模は壁も壁溝も遺存していないため不明であるが、遺存していた部分では2.8m以上となる。検出された柱穴を中心に折り返せば南北規模は約3.2mとなり、住居はほぼ正方形プランとなる。一方、焼土を中心に折り返せば南北は4mとなって、やや南北に長い長方形の住居となる。

床面からは径20～25cmの2本の柱穴が検出されたが、いずれも深さは浅いものである。床面の南東隅にあたる位置から検出されたP10165は径約40cm・深さ18cmを測り、屋内土壙にあたる可能性もある。

SH10002（図版5、写真図版2）

すでに削平を受けて、壁はほとんどを消失していたが、床面がかろうじて遺存し、焼土や壁溝が検出されたことから竪穴住居跡と判断できた住居跡である。SH10001とは約70cmの間隔で東側にほぼ平行した状態で検出されている。

住居の規模は東西が約5.2mと判断できたが、南北は北壁側が攪乱によって壁溝も検出されないことから、北側の土壙をコーナー部の屋内土壙と判断すれば、住居規模は約5.1mとなる。床面中央の焼土を中心に南側壁溝を折り返せば約5.0m前後の規模となることから、住居の南北規模はほぼこの5.1mと判断してよいものと思われる。

検出された壁溝は西壁下部分では幅約6～20cm・深さ3cmであった。南壁下と東壁下部分では極一部が検出されたのみである。床面の中央には浅い窪みを伴う焼土が3ヶ所で検出された。

主柱穴は4本と見られるが、東側の2本以外は不明確である。東側2本は径約45cm・深さ30～57cmであり、内部から15cmの柱痕跡が確認された。

東壁際にあたる位置に2基の土壙が検出されており、屋内土壙にあたる可能性がある。遺物は小片のみが出土している。

溝

SD10001（図版６・７、写真図版３～11）

段丘崖と沖積低地との境付近で検出された南北走向の溝であり、この溝の西側には沖積層の堆積はみられず、東側は段丘を構成する層が下がって洪水の影響を受けた土層が堆積する。溝はやや蛇行しながら38mに渡って検出され、西肩部は段丘崖にあたるため比較的一定しているが、東肩部は洪水の影響やSD10002やSD10003の影響等により一定していない。そのため溝幅は一様ではないが、溝全体としては幅５～６ｍを測る。底も流れによる凹凸があり、そのため深さも一様ではないが約50cmを測る。

断面の観察では、溝内で幅２～３ｍ程度の流路が６回流れを変えていることが観察され、こうした流路変更の結果として溝幅が最大６ｍになったことが判明している。これら６回の流路変更の内、最終段階の流路には護岸が施されており、この段階をSD10001Ａ、SD10001Ａの下層をSD10001Ｂとして区別した。ただ、SD10001Ａが明確に把握できなかった護岸から北側とSD10001Ａが検出されるまでの調査段階をSD10001としている。

SD10001Ａ　SD10001の最終段階の流路で、最も西岸を流れる。幅は約３ｍ、深さは西岸からは30cmを測り、断面形状は浅い皿状を呈する。西岸は段丘の明黄褐色細砂で形成され安定しているためか、特別な施設は設けられていない。しかし東肩部側では調査区南壁から20mまでは杭列や板材が連なった状態で検出されており、東岸には護岸が施されていたものとみられる。板材の北端から調査区北壁までの間にはそうした施設は認められなかった。護岸施設は調査区南壁から３ｍまでの間は多くの杭を打ち込んで構築し、板材は認められなかった。３ｍから20mまでの間は板材が溝の西肩に並行するように連続した状態で検出され、南半と北端では板材の溝内部側を杭留めしている状態が確認でき、一部では溝外側にあたる板材の東側にも杭を打ち込んだ状態が確認された。この部分での護岸施設は最高８cmまでしか遺存していなかったが、板材の幅からみて本来は30cm以上の高さがあったものと推測される。北半では杭止め等は確認されず、板材がほぼ水平な状態に倒れており、板材の下に杭と思われる棒状の木材が板材と直交して認められたことから、これらの板材は溝内側に倒れているものと判断している。護岸施設の板材には長さ4.09mと長大なもの、幅が35cmを越すもの、厚さが３cmを越す厚いものも使用されている。板材には枘穴が穿たれたものや片面を手斧によるハツリ調整しているものがみられることから、壁板等を転用したものが含まれているものと思われる。溝の埋土は１～７層の有機質を含んだ黒褐色・暗褐色・褐灰色の極細砂～細砂であり、内部からは初期須恵器を含む第９～10期の土器類（30～84）が多量に出土した他、木製品等も多く出土している。

SD10001Ｂ　SD10001の内、SD10001Ａの下層を呼称したものである。したがって、SD10001に護岸が施されるまでの段階であり、溝の規模や埋土の堆積状況はSD10001と変わりはない。出土遺物には土器類（85～97）・木製品・馬歯骨があり、土器類ではSD10001Ａとそれほど大きな差はないが、やや時期的に遡るものが含まれる。馬歯骨はSD10001Ａ南端の杭列の間から出土しており、取り上げ時はSD10001Ａとして扱ったが、出土レベルからこれはSD10001Ｂに伴うものと判断している。

SD10002・10003（図版７、写真図版12）

SD10001の東側では段丘末端を削り込んで南東から北東に走向する自然流路や土壙状の抉り込みが検出された。そのうち比較的明瞭に検出された流路で、内部から遺物を出土したものをSD10002・10003

とした。ただ、SD10002とSD10003では両流路を繋ぐような流れの痕跡等がみられることなどから、同じ流れが流路を変更としたものと捉えている。

SD10002は調査区南壁から25ｍに渡って検出され、それ以北は氾濫により削平され消失していた。壁は上部の流路から抉りを受けていたり、自然流路ということもあって凹凸が激しい。そのため、溝幅は一定しないが、２～４ｍを測る。西肩と東肩とでは高さの違いが15cmあり、深さは測る位置によって異なるが、西肩部からでは約50cmを測る。内部からは第２・３期段階の土師器や弥生土器（147～156）が出土している。

SD10003はSD10002の東側に並行するように検出された南東から北東に走向する自然流路である。調査区南壁から20ｍに渡って検出され、それ以北は氾濫により削平されて消失していた。SD10002同様壁の凹凸が激しく幅は一定しないが１～2.8ｍ、深さは26～42cmを測る。断面観察ではSD10002の埋土上から切り込まれていることが確認されており、SD10002がSD10003に変わったものと思われる。内部からは４期古相の土師器や弥生土器（162～177）が出土している。

土壙状遺構（図版１）

段丘末端のSD10002西側ではほぼ円形や不整形な形状を呈する深さ９～35cmの土壙状の落ち込み13基が検出された。調査途上ではこれらは自然流路による抉り込みと判断していたが、その中にはSD10002の西岸南半で、SD10002と切りあうような形で検出された落ち込みのように多数の細い板材が入れられているものもあり、粘土採掘壙のような遺構になる可能性も考えられる。

畦畔遺構（図版１）

調査区北東隅付近の沖積層上で検出されたもので、最長14ｍに渡って検出されたものもあるが、水田区画を検出するまでには至らなかった。

堰状遺構（図版１、写真図版11）

SD10001の東側で検出された東西方向の堰状のもので、西端はやや北に振れている。総延長は4.9ｍを測り、西側2.25ｍまでは板材を杭止めしており、高さは23cmを測る。板材から東は杭のみが確認されている。この堰状以降に伴う流路は明確に検出できていないが、護岸状の施設である可能性も考えられる。

氾濫原（SR10001、図版１・３）

SD10002・10003以東は段丘が途切れ、氾濫原となる。氾濫原については全掘による調査を行わず、トレンチによる調査のみを行った。その結果、氾濫原は図版３にみられるように多くの旧河道が入り乱れて形成されており、段丘形成層である図版３の46～48層を削って、46～48層東面には崖面が形成されている。氾濫原から古墳時代の土器を中心に飛鳥時代までの土器（178～180）が出土している。

第２節　Ⅱ区の遺構

１．概要

町道三保末歳線から町道与布土15号線の間の調査区である。検出された遺構数は多く、遺構密度が高い上、検出された遺構も重要なものが多い。今回の調査区の中では中心となる調査区であり、遺跡全体の中でも中心となるような調査区である。

調査前の状況は２枚の水田であり、調査区の北壁から約10m南には調査区と平行する東西の畦畔が存在し、この畦畔を境に北側の田が約30cm低い状況であった。

調査では弥生時代中・後期と古墳時代の遺構が多数検出された。これらの遺構の検出面は基本的には黒褐色砂質シルト面上である。ただ調査区の南西隅部と調査区北側の一段低い水田部では砂質シルトを基本とする黄褐色系の色調を呈する土層上が遺構の検出面であった。この土層は黒色砂質シルトの下層の堆積土であることや、この面上から検出される竪穴住居跡の壁がほとんど遺存していない等の状況から、本来の遺構面は黒色砂質シルト系の土層上であったが、その面が削平により消失した結果、黄褐色系の色調を呈する土層上が遺構の検出面になったと思われる。またSH20039付近では遺構検出面である黒色砂質シルト面上で、竪穴住居の埋土と思われる多量に焼土を含む土層が確認できたが、遺構として検出することが困難であったため、下層の黄褐色シルト面まで下げて遺構を検出した。遺構検出面までの土層は耕土や床土、盛土といった人為的な堆積であった。

検出した遺構は弥生時代と古墳時代の遺構であるが、大部分は古墳時代に属する遺構である。弥生時代に属する遺構は竪穴住居跡２棟の他はピットや土壙、溝類があり、後期末を中心とするが、中期末まで遡るものも存在している。竪穴住居には円形と方形のものがあり、床面中央には中央土壙を有する。

古墳時代の遺構は古墳時代全般に渡って営まれており、掘立柱建物跡23棟、竪穴住居跡約65棟、土壙18基、溝16条のほか、柱穴は1,807個と多数が検出されている。これだけ多数の柱穴を掘立柱建物として復元することは困難であり、また恣意的なものに陥りやすくなると判断し、掘立柱建物の復元は多数の柱穴の中から、埋土や大きさ、深さといった特徴的なものを採り出して行った。したがって、復元した以外にも掘立柱建物として復元できるものが存在する可能性が高いことは承知しているが、柿坪遺跡の特徴的な掘立柱建物は復元できたと考えている。

掘立柱建物は規模的には床面積が200㎡を超えるものが１棟、あるいはそれに匹敵する規模が想定されるものが２棟あるほか、小規模で床面積4.94㎡というものまで存在している。構造的には総柱建物、側柱建物、屋内棟持柱のある建物、切妻屋根に4面庇がつく錣入母屋造りの建物など、極めてバラエティに富んでいる。また掘立柱建物には一定の方向性が読み取れ、意図的な配置を窺わせている。

古墳時代の竪穴住居跡は約65棟が調査区全体から検出された。住居の平面形は方形を呈するものがほとんどであるが、長方形を呈するものも２棟が存在している。床面の構造では中央土壙はなくなり、床面の中央に焼土、壁際に土壙が存在する構造を採る。主柱穴は不明確なものもあるが、４本柱構造が多く、小規模なものには２本柱構造のものも存在する。住居規模では床面積11㎡前後の小規模なものから、50㎡を越える大規模のものが存在している。壁際に竈を伴うものと伴わないものが存在し、伴うものは西壁際に設けられたものが圧倒的に多い。ただし、南壁際、東壁際、北壁際に設けられたものも少数ではあるが存在している。

2．遺構

竪穴住居跡

SH20001（図版12、写真図版17）

SH20016・SH20044を切り、SB20001に切られた状態で検出され、方位をN16°Eとする竈が付設された竪穴住居跡である。住居跡規模は東西6.25m、南北6.0mで、床面積は37.5㎡を測る。壁は最高15cm遺存していた。床面中央のやや東よりに径約45cm・深さ約5cmの炉が設けられ、内部の壁は焼土化していた。床面周囲の壁下には幅10～18cm・深さ８cmの壁溝が設けられていた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径20～33cm・深さ25～55cmを測る。柱穴の内部から径約18cmの柱痕跡が確認された。竈は西壁際に設けられ、竈の規模は奥行き約1.15m、幅約55cm、壁は約16cmの高さまで遺存していた。壁の一部は焼土化していた。焚き口の幅は約40cmであり、床面は屋外に向けて上がっていく。焚き口から約30cm入った付近の床面は焼土化していた。

床面等からは第14期に相当する須恵器杯(182･183)、土師器椀（188)･甕（191・192）が遺存していた。

SH20003（図版13・14、写真図版17・18）

SH20004･SH20005･SH20032及びSB20001に切られ、SH20006・SD20011を切った状態で検出された、方位をほぼ正方位とする竪穴住居跡である。平面形は南北に長い長方形を呈し、住居規模は南北7.65m・東西6.5m、床面積49.7㎡を測る大形の竪穴住居である。壁は最高20cm遺存し、SH20004に切られた南東隅を除く壁下には幅12～20cm･深さ約6cmの壁溝が全周する。主柱穴は４本であり、柱間は南北に長く、東西は短い配置になっている。柱穴は径25～40cm・深さ32～45cmであった。東壁中央と南東コーナー部に屋内土壙が設けられており、東壁際の土壙は長軸80cm･短軸65cm・深さ25cmで、長軸は壁と平行する。南東コーナー部の土壙は径58cm・深さ20cmであり、SH20004の竈と屋内土壙に切られていた。

内部からは須恵器壷（193)、土師器壺（193～195)･甕(197～200)･高杯(201～208)･鉢(196)･角杯(211)･甑(209)･竈(210)の第８期新相の土器が出土している。

SH20004（図版13・15、写真図版18）

SH20003・SH20005・SH20032を切った状態で検出された、方位をN6.5°Eとする、竈が付設された竪穴住居跡である。平面形はほぼ正方形を呈し、住居規模は南北5.5m・東西5.85m、床面積32.2㎡を測る。壁は最高22cm遺存していた。床面中央のやや東よりに径40cm・深さ８cmの炉が設けられ、内部の壁は焼土化していた。床面北半の壁下には幅12～25cm・深さ４～８cmの壁溝が設けられていた。床面南半の壁下では壁溝は一部しか検出できていないが、本来は全周していたものと思われる。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径20～33cm・深さ48～65cmを測る。竈は西壁際に設けられ、竈の規模は奥行き約70cm、焚き口幅約40cm、壁は約22cmが遺存していた。壁の一部は焼土化していた。床面はほぼ平らで、奥壁が急に立ち上がって屋外に抜ける構造を採る。焚き口は浅く窪み、焚き口から約60cmの範囲の床面が焼土化していた。南東コーナー部と竈の右横に屋内土壙が設けられ、南東コーナー部の土壙は深さ約30cm、内部から土師器高杯や甕が出土している。平面形は不整形で、楕円形の土壙２基が重なりあっているようにも見受けられ、SH20005の南東コーナーにあたることから、SH20005の屋内土壙と重なりあっ

ている可能性がある。竈右横の土壙は長径1.1m・短径0.8mの楕円形を呈し、深さは約38cmであった。

内部からは第14期の土器（212～219）が出土している。

SH20005（図版13、写真図版19）

SH20004・SH20032・SB20001に切られ、SH20003を切った状態で検出された、方位をほぼ正方位とする竈が付設された竪穴住居跡である。平面形は南北に長い長方形を呈し、住居規模は南北7.5m・東西6.35m、床面積は47.6㎡である。壁は最高16cmが遺存していた。床面はSH20004によりほとんどが壊されていた。遺存していた部分では壁溝は設けられていない。主柱穴は4本と思われるが、南西の柱穴は検出できなかった。検出できた柱穴の大きさは径23～30cm・深さ26cmを測る。竈は短辺側の北壁際に設けられ、竈の規模は奥行き約1.15m、焚き口幅約45cm、壁は約12cmが遺存していた。壁の一部は焼土化していた。床面はほぼ平らで、奥壁が急に立ち上がって屋外に抜ける構造を採る。ほぼ床面の中央が焼土化していた。

埋土から9期の初期須恵器甕（220）が出土している。

SH20006（図版16、写真図版20）

SH20003・SB20005に切られた状態で検出された、方位をN18.5°Eとする竪穴住居跡である。北壁が短く平面形は台形状となる隅丸方形を呈する。住居規模は南北5.25m・東西4.6m、床面積24.2㎡を測る。壁は最高39cm遺存していた。床面中央のやや南よりから切りあった2ヶ所の炉が検出された。長径約60cm・短径約47cm・深さ約5cmの炉が長径約45cm・短径約30cm・深さ約6cmとやや小形の炉に作り替えられている。ともに内部の壁は焼土化していた。壁下の床面上には幅7～18cm・深さ3～6cmの壁溝が設けられていた。主柱穴は4本であり、柱穴の大きさは径25～40cm・深さ48～65cmを測る。東壁際の中央には屋内土壙が設けられており、土壙は上端の平面形は不整形であるが、方形プランの南壁が崩壊したものと思われる。土壙の大きさは一辺が約90cm、深さは約18cmであり、掘り方は底近くで二段となり、下段は方形を呈する。

内部からは第7期の土師器壺（221～223）・甕（224～226）が出土している。

SH20007（図版17、写真図版20）

SH20008・SB20019を切り、SH20001の北側に約1.0mの間隔を開け、平行して築かれた竪穴住居跡である。方位をN15°Eとし、西壁際に竈が付設されていた。平面形はやや歪であるが方形を呈し、住居規模は南北7.0m・東西7.4m、床面積51.8㎡を測る。壁は最高28cm遺存していた。床面中央のやや東よりから切りあった2ヶ所の炉が検出された。当初の炉は径45cm・深さ8cm、第2次段階の炉は径約35cm・深さ約8cm、内部の壁は焼土化していた。床面南半の壁下には幅10～20cm・深さ1～7cmの壁溝が設けられていた。床面北半の壁下では壁溝は検出できなかった。主柱穴は4本であり、柱穴の大きさは径30～35cm・深さ36～45cmを測る。竈は西壁際に設けられ、竈の規模は奥行き約1.21m、焚き口幅約58cm、壁は約13cmが遺存していた。壁の一部は焼土化していた。床面は焼土から奥側がやや下がり、奥壁が急に立ち上がって屋外に抜け、焚き口から約40cm入った径30cmの範囲の床面は焼土化していた。北東コーナー部には径約90cm・深さ約10cmの屋内土壙が設けられていた。

内部からは第14期の須恵器杯（227・228）・提瓶（229）や土師器高杯（230）が出土している。

SH20008（図版17、写真図版20）

SH20007・SB20019に切られた状態で検出された、方位をほぼ正方位とする竪穴住居跡である。SB20007によって西壁と北壁西半を消失しているため不明な点もあるが、平面形はほぼ正方形に近い方形を呈し、住居規模は一辺4.7m、床面積22.1㎡を測る。壁は最高18cm遺存し、東壁際の中央には径約45cm・深さ約20cmの屋内土壙が設けられていた。主柱穴や床面中央の炉は検出できなかった。

SH20009（図版18、写真図版21）

SB20005に切られた状態で検出された、方位をＮ９°Ｅとする竪穴住居跡である。平面形は南北に長い長方形を呈する。住居規模は南北5.5m・東西4.55m、床面積25.0㎡を測る。壁はほとんど遺存していなかったが、壁溝は全周して検出された。壁溝は幅12～25cm・深さ約10cmを測る。床面のほぼ中央には径約46cm・深さ約5cmの浅い炉が設けられており、炉の内部は焼土化していた。西壁際中央の床面上にも径約15cmの焼土が認められた。主柱穴は２本であり、中央の炉を挟み、長辺側の壁に平行するように配置されている。中央炉との間隔は北側主柱穴とは約20cm、南側主柱穴とは約50cmを測る。柱穴の大きさは径35～40cm・深さ25～38cmを測る。東壁際の中央には径約68cm・深さ24cmの屋内土壙が設けられていた。

内部からは第８期古相の土師器壺（231）と高杯（232）が出土している。

SH20010（図版19）

調査区南東隅で方形住居の南西コーナー部だけが検出されており、全容は不明である。西壁3.5m、南壁1.5mが検出され、壁は最高20cmが遺存していた。床面から径約25cmの柱穴１個が検出できたが、深さが浅く、主柱穴になり得るかどうかは不明である。

SH20011（図版19、写真図版21）

平成11年度の調査時に西壁が検出され、平成14年度の調査時に南壁が検出されたが、全体としては住居跡の南西コーナー部が検出されたにすぎない。検出できた部分は西壁２m、南壁2.5mで、南壁下には幅約10cm・深さ約８cmの壁溝が設けられていた。調査区北壁際の床面上には炭化米が散乱していた。床面上から浅い柱穴１個が検出された他、壁溝状の細い溝が検出されており、他の住居跡と切りあっている可能性もある。

SH20012（図版８）

SB20005・SD20004に切られた状態で検出された、南北５m・東西４m以上・深さ５cmの落ち込みである。調査時には竪穴住居跡として扱ったが、定かではない。

内部から第４期古相の弥生土器甕（233～235）・器台（236）が出土している。

SH20014（図版20）

SB20004・SB20005に切られた状態で検出された、方位をＮ19°Ｅとする竪穴住居跡である。平面形は隅丸方形を呈する。住居規模は南北5.2m・東西4.8m、床面積25.0㎡である。壁は約21cm遺存し、壁溝は認められなかった。床面のほぼ中央には径約60cm・深さ約６cmの浅い土壙が検出されており、炉である可能性が高い。主柱穴は４本で、柱穴の大きさは径22～45cm・深さ30～45cmを測る。

内部からは第４期古相の弥生土器甕（237～239）が出土している。

SH20015（図版21、写真図版21・22）

SH20033を切り、SD20011の埋没後に営まれた竪穴住居跡である。方位をＮ18°Ｅとし、西壁際に竈が付設されていた。平面形はやや東西に長い方形を呈し、住居規模は南北3.85ｍ・東西4.5ｍ、床面積17.3㎡を測る。壁は最高30cm遺存していた。床面中央には径約20cm・深さ５cmの炉が設けられ、北西コーナー部を除く壁下には壁溝が設けられていた。壁溝は幅８～15cm・深さ５～10cmを測る。床面から柱穴は検出できたが、明確に主柱穴になりうるものはなく、南側の２本が主柱穴になる可能性を持つ。２本の柱穴の大きさは径30～35cmであるが、深さは10cm前後と浅い。竈は西壁際の中央に設けられ、煙道を屋外に約60cm伸ばしていた。屋内の竈の規模は奥行き約80cm、焚き口幅約35cm、壁は約18cmが遺存していた。壁の一部は焼土化していた。床面は焚き口から支脚奥側まではほぼ平らで、そこから煙道に向けて上がっていた。煙道はほぼ水平に伸びた後、上方に立ち上がっていた。焚き口から約30cm入った床面には高杯の脚裾部を打ち欠いてを逆転させた支脚が据えられていた。この支脚の手前側までの床面が焼土化していた。

第11期の土師器甕（240）・高杯（242）・椀（241）が出土している。

SH20016（図版22、写真図版22）

SH20001に切られた状態で検出された、方位をＮ8.5°Ｅとする高床部をもつ竪穴住居跡である。平面形は方形を呈し、住居規模は一辺6.9ｍ、床面積47.6㎡である。壁は14cm遺存し、壁下には全周して壁溝が設けられていた。壁溝は幅10～22cm・深さ8～11cmを測る。床面のほぼ中央には径約70cm・深さ約17cmの規模で、北西隅が突出した不整形な中央土壙が設けられていた。主柱穴は４本で、柱穴の大きさは径28～35cm・深さ45～50cmを測る。床面周囲の高床部は幅68～111cm・高さ約６cmを測り、東西の中央が途切れ、北西側が幅広くなっている。

内部からは第５期の土師器甕（243・244・245）・高杯（246・247）が出土している。

SH20017（図版23、写真図版22）

SH20058・SB20006・SB20016に切られた状態で検出された、方位をＮ９°Ｅとする竪穴住居跡である。北壁をSH20058に切られて消失しているが、平面形は方形を呈し、住居規模は南北6.1ｍ・東西5.9ｍ、床面積36.0㎡である。壁は16cm遺存し、東壁下の北半を除いては壁溝が設けられていた。壁溝は幅12～18cm・深さ４～８cmを測る。床面のほぼ中央には径約42cm・深さ約４cmの炉が設けられており、炉の底から壁は焼土化していた。主柱穴は４本で、柱穴の大きさは径30～35cm・深さ75～90cmを測る。

内部からは第９期の初期須恵器台付鉢（248）や土師器高杯（250・251）・椀（249）が出土している。

SH20018（図版24、写真図版23）

SB20006に切られて検出された竈をもつ竪穴住居跡である。方位をＮ39°Ｅとし、平面形は南隅が膨らんだ不整形な方形を呈し、住居規模は南北4.85ｍ・東西5.35ｍ、床面積25.9㎡を測る。壁は最高15cm遺存していた。床面中央には切りあった状態で中央炉が検出され、大きさは北側が径約30cm、南側が東西に長く約50cm・南北約30cm、深さは北側が約８cm、南側が約４cmであった。ともに底面が焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径28～40cm、深さは55～62cmを測る。竈は西壁際の中央に

設けられ、中央が膨らみ、焚き口が窄まった形状を呈する。規模は奥行き約85cm、焚き口幅約23cm、中央が約43cmであり、壁は約14cmが遺存していた。壁の一部は焼土化していた。床面は焚き口から支脚付近まではほぼ平らで、そこから屋外に向けて緩く上がっていた。焚き口から約42cm入った床面には裾部を欠いた高杯を逆転させた支脚２個が両壁に沿って据えられていた。焼土は焚き口にのみ遺存していた。

床面の南壁際には高杯を中心とした土器群が遺存した。第12期の須恵器高杯（257）、土師器甕（258・259）・鉢（260）・高杯（261～267）が出土している。

SH20019（図版25、写真図版23・24）

SB20014に切られて検出された竈をもつ竪穴住居跡である。方位をN5.5°Eとし、平面形は方形を呈する。住居規模が南北4.5m・東西4.15m、床面積18.7m²の極めて小形の住居である。壁は最高18cm遺存していた。床面中央には径約38cm、深さは約５cmの炉が設けられ、底面から壁が焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径20～25cm、深さは55～62cmを測る。竈は西壁際の中央に設けられ、北側の焚き口付近の壁は消失していたが、奥行き約95cm、焚き口幅約70cmであり、焚き口が外に広く、焚き口から奥側が窄まって約40cmとなり、屋外に煙道が約15cm伸びていた。床面は焚き口から支脚付近までが浅く窪み、支脚付近で膨らんで、奥壁側に向かって僅かに下がっていた。竈のほぼ中央からは10cm大の河原石が転倒した状態で出土しており、これが支脚に使用されていたものと思われる。焚き口の径約50cmの範囲が焼土化していた。

第10期と思われる須恵器高杯（268）、土師器高杯（269）とともに薄手の製塩土器（270）が出土している。

SH20020（図版26、写真図版24）

平成11年度の調査では調査区の南壁際で北隅と主柱穴１本が検出され、その後の平成14年の調査で床面の中央部や東西の隅が検出された竪穴住居跡である。平成11年の調査では壁溝が平行して３本検出されたことから建て替えが行われたと判断していたが、平成14年の調査ではそうした建て替えの痕跡は認められていない。両者をうまく整合することはできないが、ここでは両調査の成果を尊重し、北側にのみ拡張した建て替えが行われたと考えておく。

住居の方位をN22.8°Wとする竪穴住居跡で、南隅は調査区外となって検出されていない。平面形は方形を呈し、当初の住居規模は一辺5.4m、床面積29.2m²、その後に拡張が行われて一辺約5.7m、床面積32.5m²となり、再度の拡張で一辺約5.85m、床面積34.2m²となっていた。壁はほとんど遺存せず、当初も２回の拡張後も、西隅を除く壁下には壁溝が設けられていた。壁溝は当初も拡張後もほぼ同規模で、幅８～25cm・深さ２～11cmを測る。床面のほぼ中央には径約30cm・深さ約３cmの炉が設けられており、炉の底から壁は焼土化していた。主柱穴は４本と思われるが南隅のものは検出できていない。また西隅の柱穴は位置が中央に寄っており、主柱穴に成り得るかどうか定かではない。確実な２本の柱穴の大きさは径24～30cm・深さ43～56cmを測る。北隅の主柱穴からは径約14cmの柱痕跡が確認された。

内部からは第５期と思われる土師器甕（271）等が出土している。

SH20021（図版27、写真図版24）

平成11年と平成14年の調査で、それぞれ一部が検出され、南壁から南西隅を除く部分が検出されてい

る。北西隅を消失していたが、住居の方位をN22.8°Eとし、平面形は方形を呈する。住居規模は南北4.5m、東西3.9m以上であるが、主柱穴や中央炉の位置からみて、東西に長い形状になるものと思われる。壁はほとんど遺存していなかった。壁溝は幅12～17cm・深さ3～6cmを測る。床面の中央から南に寄った位置に径約50cm・深さ約6cmの浅い土壙が検出されており、炉にあたるものと思われる。主柱穴として確実なものは北隅の1本だけであり、その他は深さが浅いため、主柱穴とするには疑問が残る。確実な主柱穴の大きさは径28cm・深さ47cmを測る。北隅の主柱穴からは径約14cmの柱痕跡が確認された。

第6期の土師器甕（272）・器形不明品（273）が出土している。

SH20022（図版28、写真図版25）

Ⅱ区の北西隅付近から検出された竈を伴う竪穴住居跡で、他の竪穴住居跡や建物跡と切りあってはいない。方位をN21.5°Eとし、平面形は方形を呈する。住居規模が南北4.8m・東西4.5m、床面積21.6㎡の小形の住居である。壁は最高16cm遺存していた。床面中央の2ヶ所に炉が設けられており、西側の炉は径約30cm、深さは約5cm、東側の炉は径約30cm、深さは約7cmであり、ともに底面から壁が焼土化していた。主柱穴は4本であり、柱穴の大きさは径15～31cm、深さは50～54cmを測る。南側2本の柱穴から径13～15cmの柱痕跡が確認された。東壁中央付近の床面と南西隅・竈南側には屋内土壙が設けられ、東壁際の土壙は長軸約70cm・短軸約40cmの不整形な楕円形を呈し、深さは約13cmを測る。南西隅の土壙は径約64cmの円形を呈し、深さ約25cmであり、内部から土師器甕（281）が出土している。竈は西壁際の中央に設けられ、奥行き約70cm、焚き口幅約60cmであり、煙道が屋外に約37cm伸びていた。袖部の壁は最高約11cmが遺存していた。床面の中央には裾部を欠いた高杯が支脚として据えられていたが、床面からは浮いた位置に据えられており、この竈は修繕された可能性が高い。焚き口付近の床面が焼土化していた。

第11期の須恵器杯（276）・高杯脚部（277）・鉢（278）、土師器壺（279）・甕（280・281）・高杯（282～286）・椀（287・288）、製塩土器（289）が出土している。

SH20023（図版29、写真図版25）

SH20024に切られた状態で検出された、方位をN55°Eとする竪穴住居跡である。平面形は長方形を呈し、当初の住居規模は東西5.15m・南北3.35m、床面積17.3㎡で、その後に西壁はそのままとして、三方に拡張した改築が行われ、拡張後の住居規模は東西5.9m・南北4.0m、床面積は約23.6㎡となる。壁は20cm遺存し、当初も拡張後も壁下には全周して壁溝が設けられていた。壁溝は幅11～21cm・深さ3～11cmを測る。拡張後の壁溝内に細長い形状の河原石5個がまとめて入れられていた。主柱穴は当初、拡張後も2本で、当初の柱間は約1.35mが拡張に伴い、東側の柱を東に約50cm移動させて、柱間を約1.85mに広げていた。柱穴の大きさは径26～37cm・深さ48～54cmを測る。

西壁際の床面上から土師器甕（291）が転倒して出土した他、第5期の土師器鉢（292）・器台（293）が出土している。

SH20024（図版29、写真図版26）

SH20023を切り、SB20008に切られた状態で検出された竈をもつ竪穴住居跡である。方位をN13°Eとし、平面形は方形を呈する。住居規模が一辺4.45m、床面積19.8㎡の小形の住居である。壁は最高13cm

遺存していた。床面中央に径約20cm・深さ約５cmの炉が設けられ、底面から壁が焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径22～45cm、深さは32～47cmを測る。東壁際中央付近の床面には屋内土壙が長軸を壁に平行させて設けられており、土壙の大きさは長軸約90cm・短軸約65cm・深さ約25cmを測り、平面形は不整形な楕円形を呈する。内部からは土師器甕等が出土した。竈は西壁際の中央に設けられ、奥行き約100cm、焚き口幅約40cmを測る。床面の中央には河原石が転倒しており、これが支脚に使用されていたものと思われる。この河原石から焚き口にかけての床面が焼土化していた。

第13期の須恵器杯身（294）、土師器甕（295）・高杯（296・297）・椀（298）が出土している。土師器甕（295）と椀（298）は屋内土壙からの出土である。

SH20025（図版30、写真図版26）

SH20027とは約２ｍの間隔を開けて南に平行する形で検出された竪穴住居跡である。方位をＮ4.5°Ｅとし、平面形は歪な方形を呈する。住居規模が南北4.35ｍ・東西3.75ｍ、床面積16.3㎡の小形の住居である。壁は最高８cm遺存していた。床面中央の径約13cmの範囲が焼土化しており、掘り込みはないものの、炉跡とみられる。壁溝は壁下の一部にのみ検出された。主柱穴は４本であったと思われるが、北東隅の柱穴は後の柱穴によって失われており検出できていない。検出された３本の大きさは径25～30cm、深さは41～47cmを測る。東壁際中央付近の床面には屋内土壙が長軸を壁に平行させて設けられており、土壙の大きさは長軸約45cm・短軸約30cm・深さ約15cmを測り、平面形は楕円形を呈する。西壁際中央の径約23cmの範囲に焼土が認められ、これを竈としているが、焼土が床面からは浮いた状態であること、壁際であること、袖部が明瞭には検出できなかったことから、竈とは異なるものと思われる。この焼屋内土壙から第13期と思われる土師器甕片（299）が出土している。

SH20026（図版27、写真図版27）

調査区南端で、第１次本発掘調査区と第４次本発掘調査区にまたがって検出された竪穴住居跡である。方位をＮ6.2°Ｗとし、平面形は隅丸方形を呈し、住居規模は東西5.2ｍ・南北2.5ｍ以上を測る。壁は最高30cm遺存し、壁下には壁溝が全周して設けられていた。壁溝は幅７～18cm・深さ３～６cmの規模であり、西壁下の周溝が細く設けられていた。床面は中央まで検出されていないためか、焼土はみられず、主柱穴と思われる柱穴が２本が検出された。柱穴の規模は径が28・40cm、深さが30・35cmであり、内部には径15・19cmの柱痕跡が確認できた。

床面からは第５期の土師器壺（307）・甕（300・301・304）・鉢（308・309）・椀（310）が出土しているが、住居の埋没過程に廃棄された土器類と思われる。

SH20027（図版31、写真図版28）

SH20025とは約２ｍの間隔を開けて北に平行する形で検出された竈をもつ竪穴住居跡である。方位をＮ25°Ｅとし、平面形は方形を呈するが、南西・南東の隅は隅切りされた丸い形状を呈する。住居規模は一辺5.05ｍ、床面積25.5㎡を測る。壁は最高８cm遺存していた。床面中央の２ヶ所に焼土が認められ、掘り込みは認められなかったが、中央炉にあたるものと思われる。主柱穴は４本であり、東西に対して南北の柱間隔が狭く配置されている。柱穴の大きさは径25～37cm、深さは34～45cmを測る。南東隅部と西壁際の竈南側の２ヶ所に屋内土壙が設けられていた。ともに歪な楕円形を呈し、南東隅部の土壙は長

軸約93cm・短軸約65cm・深さ約29cm、竈南側の土壙は長軸約72cm・短軸約70cm・深さ約22cmを測る。竈は西壁際の中央に設けられ、奥行き約75cm、焚き口幅約40cmを測る。焚き口の両袖には高さ約20cmに川原石が立てられ、北側は焚き口内側の壁にも川原石が貼られていた。竈床面は住居の床面から約６cm浮いていることや、焚き口の石も住居床面からは浮いていることから、この竈は修繕された可能性が考えられるが、住居床面が土層断面の第３層上であり、貼り床されて、床面上で柱穴等が確認し難かったことから、床面が下がりすぎてしまった結果とも考えられる。焼土は焚き口の一部にのみ遺存していた。

第13期の須恵器杯（312～314）、土師器甕（315～316）・椀（317）・甑（318～321）が出土している。

SH20028（図版32、写真図版28・29）

SH20027とは約4.5mの間隔を開けて北西に平行する形で検出された竈をもつ竪穴住居跡である。SB20009に切られた状態で検出された。方位をＮ３°Ｅとし、平面形は方形を呈するが、南西・南東の隅は隅切りされた丸い形状を呈する。住居規模は南北4.5m・東西4.35m、床面積19.6㎡を測る。壁は最高17cm遺存していた。床面中央に焼土は認められていない。主柱穴は４本であり、東西に対して南北の柱間隔が狭く配置されている。柱穴の大きさは径32～37cm、深さは52～55cmを測る。北西隅を除く３本の柱穴の内部に径約17cmの柱痕跡が確認された。竈北側の北西隅部に近い位置に屋内土壙が設けられ、大きさは径約65cm・深さ約38cmを測る。竈は西壁際の中央に設けられ、奥行き約70cm、焚き口幅約60cmを測り、袖部は最高約15cmが遺存していた。竈奥の床面から約７cm高くなった位置から屋外に向けて煙道が伸ばされている。竈中央の床面が焼土化していた。

第15期の須恵器杯（322・323）と土師器甕（324・325）が出土している。土師器甕（325）は屋内土壙付近の床面に遺存していた。

SH20029（図版33、写真図版29）

調査区南西隅付近でSB20010・SB20017に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。圃場整備による削平を受けて壁と壁溝の一部は消失していた。検出された壁溝から、住居の方位はＮ29.5°Ｅであり、平面形は方形を呈する。住居規模は南北約6.7m・東西約6.8m、床面積45.6㎡を測る。壁溝は南西隅部から東壁下部にかけてを消失しているが、検出できた部分では幅17～25cm・深さ約５cmであった。床面中央の２ヶ所に炉が設けられており、西側の炉は径約45cm・深さ約６cm、東側の炉は長径約55cm・短径40cm・深さ約６cmであり、ともに底面から壁が焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径35～40cm、深さは25～60cmを測る。南側の柱穴が浅くなっている。また北側柱穴の外側には平行する２本の柱穴が検出されており、拡張が行われた可能性があるが、壁溝にはそうした痕跡が認められず、拡張されていたとしても、拡張後の規模は不明である。東壁際中央にあたる位置から、径約83cm・深さ約28cmの土壙が検出されており、屋内土壙にあたるものと思われる。

第５期と思われる土師器甕（326）が出土している。

SH20030（図版30、写真図版29）

圃場整備による削平を受けて北半部の壁を消失し、南壁と西壁が検出された竪穴住居跡である。住居の方位はＮ44°Ｅであり、平面形は方形を呈する。住居規模は東壁と北壁を消失しているため判然としないが、一辺5.4m、床面積29.2㎡を推定している。壁は最高約20cm遺存し、壁溝は検出できなかった。

柱穴の大きさは径25～40cm、深さは26～35cmを測る。

第10期と思われる土師器甕（327）と第４期の器台（328）が出土している。

SH20031（図版34、写真図版30）

Ⅱ区からⅢ区にまたがって検出され、SB20017に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。圃場整備による削平を受けて壁と壁溝の大部分は消失していた。検出された南東隅部の壁溝から、住居の方位はＮ９°Ｅであり、平面形は方形を呈するものと判断できる。検出できた北壁と東壁の部分で壁溝は二重になっており、北側と東側に拡張が行われたものとみられる。壁溝は幅15～25cm・深さ４～８cmを測る。この壁溝や主柱穴とみられる柱穴の位置から、住居規模は当初が南北5.2m・東西5.5m、床面積28.6㎡、建て替え後は南北6.3m・東西6.5m、床面積41㎡と推定される。床面中央には長辺約100cm・短辺約90cm・深さ約49cmで、二段に掘られた中央土壙が設けられていた。二段目は径約40cmで、埋土には炭化物が含まれていた。南壁際にも長軸約1,4m・短軸約1.15m・深さ約60cmの二段に掘られた土壙が検出されたが、屋内土壙とすればピットと切りあっている可能性が高い。また他の竪穴住居跡の中央土壙の可能性も考えられるが、これに組み合う柱穴がなく、ここでは屋内土壙としておく。主柱穴は４本と考えられるが、北西隅の主柱穴はかなり外に突出し、また建て替え後の主柱穴もうまく検出はできなかった。検出した主柱穴の大きさは径26～45cm、深さは25～70cmを測る。南側の柱穴が浅くなっている。

第５～６期の土師器甕（329）と第４期の鉢（330）が出土している。

SH20032（図版13、写真図版19）

SH20004・SH20005に切られた状態で検出された竈をもつ竪穴住居跡である。方位をＮ8.3°Ｅとし、平面形は方形を呈する。住居規模は南北7.4m・東西7.2m、床面積53.3㎡を測る。壁は最高26cm遺存していた。床面はSH20004・SH20005によって大半を失い、東・南壁際に僅かに残る程度であり、床面中央の焼土や主柱穴は確認できなかった。東壁北半の壁下には幅約15cm・深さ約５cmの壁溝が設けられていた。竈は南壁際の中央に設けられていたが、遺存状態が悪く、不明な部分が多い。推定で奥行き60cm・幅40cmの大きさで、中央には支脚の可能性のある河原石が認められた。

第13期の須恵器杯（331・332）と土師器甕（334）・椀（333）が出土している。

SH20033（図版35、写真図版30）

SH20015に切られて検出された竪穴住居跡である。床面の中央から北東側は床面・壁ともSH20015によって切られ消失している。住居方位はＮ17.5°Ｅであり、平面形は隅丸方形を呈する。住居規模は南北4.4m・東西4.55m、床面積19.8㎡を測り。壁は最高13cm遺存していた。床面中央には径約48cm・深さ約42cmの中央土壙が設けられ、床面が残る中央土壙の南側には幅約20cm・高さ約９cmの周堤が設けられていた。本来は全周に設けられていたものと思われる。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径25～46cm、深さは33～55cmを測る。内部に径15～20cmの柱痕跡が確認できた。

第４期の土師器甕（335・336）や鉢（338）・器台（337）が出土している。

SH20034（図版36、写真図版31）

田の段落ち部にまたがり、SB20035に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。住居の方位はＮ

22° Eであり、平面形は方形を呈する。住居規模は南北5.45m、東西は4.3m、床面積23.4㎡を測る。西壁はSH20035によって、北壁も圃場整備による削平を受けてほとんど消失し、壁溝が遺存するのみであった。壁溝は東・南・北壁下で検出でき、幅12～23cm・深さ約６cmであった。床面中央には長軸60cm・短軸40cm、約５cmの中央炉が設けられ、底面から壁が焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径20～36cm、深さは35～45cmを測る。柱穴内部からは13～18cmの柱痕跡が確認された。東壁際の中央には径約75cmの土壙が検出されたが、深さが13cmと浅い。

第４期の土師器鉢（339)･蓋（340）が出土している。

SH20035（図版37、写真図版31）

田の段落ち部にまたがり、SH20034・SH20061を切り、SH20060に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。住居の方位はN31° Wであり、平面形は方形を呈する。住居規模は南北4.4m、東西4.25m、床面積18.7㎡を測る。壁は最高13cm遺存していた。北壁はSH20060に切られてほとんど消失し、壁の痕跡と壁溝が部分的に遺存するのみであった。東・南・西壁下では壁溝が検出でき、壁溝は幅12～17cm・深さ約５～８cmであった。床面中央には長軸45cm・短軸32cm、深さ約５cmの中央炉が設けられ、底面から壁が焼土化していた。主柱穴は２本であり、壁と平行し、中央炉を挟んで設けられていた。柱穴の大きさは径22～28cm、深さは40～47cmを測る。東壁際の中央には屋内土壙が設けられていた。土壙は壁と平行して二段に掘られており、全体の深さは60cmを測る。土壙の上段は長方形を呈し、長辺73cm・短辺47cm・深さ約10cmを測る。その中央やや北寄りの位置から下段が設けられ、下段は長辺40cm・短辺32cmの隅丸方形であり、深さは50cmであった。

床面からは住居廃絶後に投棄されたとみられる、第５期の土師器壺（341～342)･甕（344～357）･高杯（358･359･361)･鉢(343･363～367)･器台（360･368･369)･ミニチュア土器（371）が出土している。

SH20036（図版38、写真図版32）

SB20022切られた状態で検出された竈をもつ竪穴住居跡である。方位をN16° Eとし、西壁が短いため、平面形は台形状の方形を呈する。住居規模は南北3.5～4.3m・東西4.3m、床面積16.8㎡を測る。壁は最高27cm遺存していた。東壁下から西壁南半の壁下にかけて壁溝が検出でき、壁溝は幅12cm・深さ約３cmであった。床面中央には径45cm、深さ約７cmの中央炉が設けられ、底面が焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径23～50cm、深さは42～55cmを測る。竈は西壁の中央壁際に設けられ、奥行き80cm・焚き口幅40cmの大きさで、袖部は最高20cmまで遺存していた。焚き口の床面が焼土化していた。東壁際の中央には屋内土壙が設けられており、土壙規模は径84cm・深さ25cmを測る。

第10期の須恵器杯（372)･高杯（373)、土師器高杯（374)、製塩土器（375）が出土している。

SH20037（図版39、写真図版32・33）

SH20042を切り、SB20022に切られた状態で検出された竈をもつ竪穴住居跡である。方位をN５° Eとし、平面形は南北に長い長方形を呈する。住居規模は南北5.7m・東西5.0m、床面積28.5㎡を測る。壁は最高19cm遺存し、壁溝は認められなかった。床面中央には長軸35cm･短軸30cmの楕円形で、深さ約５cmの中央炉が設けられ、壁や底面は焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径20～30cm、深さは45～55cmを測る。北側柱列の外側に並行する２本の柱穴があり、この住居跡は、南側の柱位置をそのまま

にして、北側に拡張された可能性が高い。竈は西壁の中央からやや南に寄った壁際に設けられ、奥行き72cm・焚き口幅52cmの大きさで、袖部は最高19cmまで遺存していた。袖部の内側壁面は焼土化していた。竈の中央から焚き口にかけての床面が円形に窪み、窪みのほぼ中央から焚き口側の床面が焼土化していた。

第12期の須恵器杯（376・377）が出土している。

SH20038（図版40、写真図版33）

SB20012に切られ、SB20007の南側に、SB20013の東側に並行する状態で検出された竪穴住居跡である。特に住居の西壁はSB20007の西桁通りとほぼ揃っており、両者は並存していた可能性が考えられる。住居の方位はＮ４°Ｗであり、西壁が短いため、平面形は台形状の方形を呈する。住居規模は南北3.0～3.35m、東西3.7m、床面積11.8㎡を測る。壁は最高17cm遺存していた。壁下には全周して壁溝が検出され、壁溝は幅10～15cm・深さ３～８cmで、幅が狭く、断面はＶ字形を呈していた。床面中央に焼土は認められなかった。主柱穴は２本であり、柱穴の大きさは径29～35cm、深さは50～55cmを測る。柱穴の内部には径12cmの柱痕跡が確認された。南東隅部の床面上には屋内土壙が設けられ、土壙は長軸61cm・短軸47cm・深さ30cmの規模で、長軸を東壁に平行するように設けられていた。土壙の埋土上層からは土師器甕（378）が出土した。

その他、第７期の土師器壺（383）・甕（379～382）・高杯（384）が出土している。

SH20039（図版40、写真図版33）

他の竪穴住居跡と同様に黒褐色細砂上で焼土が確認されたために、その面で検出に努めたが、明瞭な形では検出できず、黒褐色細砂を掘り下げて、にぶい黄橙色シルト上で検出した竪穴住居跡である。そのため壁は検出できなかったが、中央土壙とそれを囲む６本の主柱穴を検出した。その面では他にも柱穴が検出できたが、この竪穴住居跡に伴う柱穴は規模や深さから区別が可能であった。主柱穴の配置からみて、この竪穴住居跡の平面形は円形であったと想定され、規模は７m以上と推定される。６本の主柱穴は西側２本の間隔が2.05mと狭く、他は2.65～3.3mで配置されていた。西側の狭い部分に入り口が想定できる可能性がある。柱穴の大きさは径25～31cm、深さは西側の狭い柱間隔の２本が24cmと浅く、他が41～45cmとなっていた。中央土壙は柱穴に切られて不整形になっているが、本来は円形で、規模は径約65cm・深さ29cmを測る。中央土壙の南側では長軸1.05m・短軸0.55m・深さ12cmの、細長く浅い土壙が検出された。やや幅が広いが、この土壙は中央土壙に隣接して設けられる細長い土壙にあたるものと思われる。

第３期の弥生土器高杯（385）・鉢（386）、土師器鉢（387）が出土している。

SH20040（図版41、写真図版41・42）

北近畿道に伴う第1次の本発掘調査では壁溝が「く」の字状に僅かに検出されただけであったが、北近畿道の排水路工事に伴う第４次本発掘調査で、ほぼ全容が解明した竪穴住居跡である。実際には第１次本発掘調査で検出した部分は調査終了後に工事が施工されて壊されており、第４次本発掘調査段階では遺存していなかったため、第１次と第４次で記録された図面を合成して復元した。

SH24064に切られた状態で検出され、住居の方位はＮ18.5°Ｅとする、平面形が長方形を呈する竪穴住居跡である。住居規模は南北5.7m、東西4.3m、床面積24.5㎡を測る。SH24064によって南壁と東西壁の南端は消失していたが、遺存の良い部分で壁は最高25cm遺存していた。検出された壁下には壁溝が

検出され、壁を失った部分でも南東隅部を除き壁溝は検出された。壁溝は幅13～22cm・深さ約４～７cmであった。床面中央に焼土は認められなかった。主柱穴は２本で、柱は抜き取られていた。

第６期の土師器甕（388)･鉢（390)･器台（389）が床面上に遺存していた。

SH20041（図版36、写真図版34）

第１次の本発掘調査では壁溝の一部とみられる細溝が検出されたことから、SH20041としたが、第４次本発掘調査においては、細溝を壁溝とする竪穴住居跡は検出されず、細溝とは異なった方向の竪穴住居跡が検出された。そのため、第１次調査の細溝の住居番号は破棄し、住居番号は第４次調査の竪穴住居跡に振り替えた。

幅1.6ｍの細い調査区で検出されたため不明な点が多いが、壁は最高18cm遺存し、検出できた壁から復元すれば、住居跡は方形を呈し、規模は一辺4.3ｍと推定される。床面からは径28cm・深さ６cmの中央炉と主柱穴２本が検出された。主柱穴は配置からみて４本と推定される。主柱穴の大きさは径25cm・深さ42cmであり、内部に径12cmの柱痕跡が確認できた。

第９期の土師器壺（392)･甕（391)･高杯（393・394）が出土している。

SH20042（図版42、写真図版34）

SH20037に切られた状態で検出され、壁は後世の削平によって消失していたが、中央炉とみられる焼土とそれを囲んで４本の主柱穴が検出されたことから、竪穴住居跡と判断した住居跡である。主柱穴の配置から住居の平面形は方形と想定され、壁を消失していることから規模は不明であるが、主柱穴の間隔から住居規模は３ｍ前後と推定される。中央炉とみられる焼土は20cmの範囲でみられ、柱穴の検出面より５cm程度浮いた状態で検出されている。主柱穴４本は径33～45cm・深さ52～67cmを測る。南西隅の主柱穴は他の柱穴に切られていた。

SH20043

SH20023・SH20024を切った状態で検出され、SB20008とも切りあい関係があるが、柱穴に重なりがなく、前後関係は不明である。壁は完全に消失し、中央炉とみられる焼土とそれを囲む４本の主柱穴が検出されたことから、竪穴住居跡と判断した。主柱穴の配置から住居の平面形は方形と想定され、壁を消失していることから規模は不明であるが、４ｍ以上、５ｍ未満の規模が推定される。中央炉はSH20024の壁際で検出され、長軸40cm・短軸28cmの不整形な楕円形を呈し、中央が深さ6cm窪んでいた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径25～36cm・深さ28～43cmであった。

第14期と思われる土師器椀（395）が出土している。

SH20044（図版42）

SH20001・SH20007・SH20008・SH20003、SB20001に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。そのため住居の壁は完全に消失しているものの、壁溝が途切れながらも検出でき、焼土・主柱穴が検出されたため、竪穴住居跡と判断した。壁溝から住居跡は方位をＮ39°Ｗとし、平面形は方形と判断でき、規模は一辺3.7ｍ、床面積は13.7㎡を測る。壁溝は北壁から西壁にかけてのほとんどを消失し、北東・南西の隅部と東・南の壁下で途切れた状態で検出され、幅は10～16cm、深さ1～５cmを測る。主柱穴は

２本であり、柱穴の大きさは径25～32cm・深さ20～35cmを測る。南西隅部の床面上には屋内土壙とみられる土壙が検出されている。土壙は二段に掘られ、全体の深さは29cmを測る。上段は不整形な楕円形を呈し、大きさは長軸1.37m・短軸0.75m・深さ17cmを測る。下段は上段の南半だけを楕円形に掘り下げており、大きさは長軸87cm・短軸65cm・深さ12cmを測る。この他、床面西半の中央で、径約50cmの範囲に焼土が検出され、床面中央には竪穴住居跡の壁溝と思われる細溝が検出された。焼土については床面西半中央という位置から、この竪穴住居跡に伴うものである可能性が高い。細溝についてはこれに伴う中央炉や主柱穴が確認できなかったことから竪穴住居跡と断定することはできなかった。

第８期古相の土師器高杯（396・397）が出土している。

SH20046（図版42、写真図版35）

一段下がった北側の水田部で、SB20021を切った状態で検出された竈をもつ竪穴住居跡である。水田の段落下の水路によって、南半を消失している。方位をＮ17°Ｅとし、平面形は方形を呈する。住居規模は南北2.7m以上・東西3.65mを測る。水路を越えた部分でも住居の南壁は検出されなかったことから、南壁は水路内にあったと判断でき、南北の規模は４mを超えないでほぼ東西規模に近いものであったと推定できる。遺存していた部分でも壁は最高10cm残る部分もあったが僅かに痕跡を留める程度であった。壁溝や主柱穴は確認できなかった。中央北寄りの床面が焼土していた。竈は西壁際に設けられ、奥行き80cm・焚き口幅35cmで、袖部は10cmが遺存していた。焚き口の床面は焼土化していた。東壁沿いには長軸1.2m以上・短軸0.7m・深さ13cmの隅丸長方形を呈する土壙が認められ、規模が大きいが、位置関係から、この住居に伴う屋内土壙とみられる。

第10～11期の土師器甕（399)・高杯脚部（400）が出土している。

SH20047（図版43、写真図版35）

調査区の北壁際で検出された竪穴住居跡で、SH20048・20049・SB20021・SD20011を切った状態で検出された。調査区の壁際ということもあって、切りあい関係が十分に把握できなかったため、SH20047の規模は東西6.8m以上・南北4.8mの長方形の竪穴住居跡として検出しているが、断面観察ではSH20047の南北規模は約３mであることが確認され、上記の２棟以外にもう数棟が西側に重なっていた可能性が高い。SH20047の壁は10cm遺存し、床面はSH20049の埋土中となっている。床面や下層のSH20049の床面から柱穴は確認されたが、この住居跡の主柱穴となりえるものは認められなかった。

第15期の須恵器杯（401・402）が出土している。

SH20048（図版43、写真図版35）

SH20047に切られた状態で壁のみが検出されたものであり、必ずしも竪穴住居跡と断定できないが、壁の状態や床面の状態から、竪穴住居跡と判断したものである。平面形や規模等は不明である。

SH20049（図版８）

SB20021を切り、SH20047に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。平面形は方形を呈し、壁は最高17cm遺存していた。住居規模は南北・東西とも３m以上を測る。床面はSH20047の下層となっており、柱穴等が検出できたが、主柱穴は確認できなかった。

第13期の須恵器高杯脚部（403）が出土している。

SH20051（図版44、写真図版36）

SB20016に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。方位をＮ11.5°Ｅとし、平面形は西壁が短く、東西が長くなった台形状の長方形を呈する。住居規模は南北2.25～3.15m・東西3.6m、床面積9.7㎡を測る。壁は最高５cm遺存し、壁溝は壁下に部分的に認められた。床面中央炉や主柱穴は設けられていない。床面積が10㎡を切る極めて小型の、主柱穴もない、特殊な竪穴住居跡である。

床面には土師器甕（404・405）・鉢（406）・器台（407）が遺存していた。

SH20052（図版44）

調査区の北壁際で南東隅部だけが検出された竪穴住居跡である。壁は最高12cm遺存し、壁溝は認められなかった。床面は中央が高くなっていた。

SH20053（図版44、写真図版36）

SB20016を切った状態で検出された竪穴住居跡である。南東隅部の壁は既に消失していたが、方位をＮ22.5°Ｅとし、平面形は東西が長くなった台形状の長方形を呈する。住居規模は南北3.05m・東西3.9m、床面積11.9㎡を測る。壁は最高４cmしか遺存せず、壁溝は認められなかった。床面中央のやや東寄りに中央炉が設けられ、中央炉はSB20016のP21901上で検出された。大きさは径25cm・深さ６cmを測り、底面及び壁面と周囲の床面が焼土化していた。床面には土師器甕（408）と土師器高杯の脚柱部が遺存していた。

SH20054（写真図版36）

調査区北壁際で焼土が確認され、竪穴住居跡が存在している可能性が高いとして検出に努めたが、結果的には住居壁を検出することができず、焼土と主柱穴と見られる柱穴２本を検出した住居跡である。焼土は北壁際の径約70cmの範囲に広がり、主柱穴の配置からみると、やや西にずれた位置となっていた。

第12期以降の土師器壺（409）・高杯（410）・鉢（411～413）が出土している。

SH20055（図版45、写真図版37）

調査区中央の北壁際で、SH20057を切った状態で検出された竈をもつ竪穴住居跡である。北西隅部は調査区外となって検出できなかったが、住居の方位はＮ23°Ｅであり、平面形は方形を呈する。住居規模は南北・東西とも5.4m、床面積29.2㎡を測る。壁は最高15cm遺存し、壁下に壁溝は認められなかった。床面中央には中央炉が４ヶ所とその西側で床面が焼土化しているのが確認された。床面北半の中央でも焼土が２ヶ所で確認されている。中央炉は最も大きいものが37×30cmの楕円形で、深さは６cm、他の３ヶ所は径25cm・深さ５cmで、重なりあっていた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径16～25cm、深さは40～60cmを測る。柱穴の内部には径13cmの柱痕跡が確認された。床面からはこの４本以外にも柱穴が確認されており、北東隅の主柱穴を除く３本の主柱穴の外側には、並行するような位置に柱穴が存在している。このことから、この住居は南と西側に拡張されている可能性が高い。竈は西壁の中央壁際に設けられ、奥行き1.00m、中央部の幅50cm、焚き口幅25cmと、焚き口が窄まった構造となっている。

また竈の構築は床面上の黒褐色シルト質極細砂上から行われており、そのため床面からは一段高くなっていた。袖部は最高17cm遺存し、竈奥側にも袖部と同様の褐灰色土が貼られていた。竈内部には川原石や土師器甕（418）が落ち込んだ状態で遺存していた。竈反対側の東壁際の中央には屋内土壙が設けられており、土壙は長軸64cm・短軸46cm・深さ32cmで、楕円形を呈し、長軸を壁と並行させて設けられていた。

第12期の須恵器杯（414・415）、土師器甕（418～420）・高杯（416・417）・椀（421）・甑（422）が出土している。

SH20057（図版46、写真図版38）

調査区中央の北壁際で、SH20061を切り、SH20055に切られた状態で検出された竈をもつ竪穴住居跡である。床面上からは壁溝と考えられる細溝が検出されており、SH20061以外の住居跡も切っている可能性が高いが、この細溝は竪穴住居跡として捉えきれなかった。北壁から北西隅部は調査区外となって検出できず、東壁は南東隅部を残す以外はSH20055に切られて消失していた。そのため、多少不明瞭な点もあるが、住居の方位はＮ21°Ｅとし、平面形は方形を呈する。住居規模は南北5.0ｍ以上・東西5.45ｍ、床面積27.3㎡以上を測る。壁は最高17cm遺存し、壁下に壁溝は認められなかった。床面中央には中央炉が２ヶ所で検出された。東側の中央炉は径15cm・深さ５cmで、底面及び壁面と周囲の床面まで焼土化していた。西側の中央炉は径約25cmの不整形な円形を呈し、深さ５cmで、底面と壁面が焼土化していた。主柱穴は４本で、東西の柱間隔が南北より広くなっており、４本の柱配置は長方形を呈する。柱穴の大きさは径29～42cm・深さ41～53cmを測る。北東側の柱穴の内部から径20cmの柱痕跡が確認された。竈は西壁の中央壁際に設けられ、奥行きは95cmで、屋外に向けて煙道が16cmまで確認された。焚き口は遺存状況が悪いため判然としないが、現状での袖部の間隔は63cmを測る。ただ焼土が袖部とはかなり離れており、焼土の範囲からすると、焚き口の幅は40cmまでになるものと思われる。竈の床面は３面あり、第１面の床面は焚き口から支脚部分までほぼ水平であり、支脚の奥側から緩い傾斜で上がり、そのまま沿道に繋がる。支脚として裾部を打ち欠いて杯部から脚柱部とした高杯を反転させて据えていた。第２面は支脚から奥側は第１面とほぼ変わりがないが、焚き口から支脚下部までを掘り窪めている。第３面の床面は焚き口が掘り窪められ、そこから壁に向けて緩く上がった後、奥壁が急激に立ち上がる。袖部は最高17cmまで遺存していたが、水平な堆積土の上に盛られており、床面同様に改修が行われたものとみられる。

第11期の須恵器杯（423）・土師器甕（424）・高杯（425）・椀（426）と製塩土器（427）が出土している。

SH20058（図版23、写真図版38・39）

SH20017の北側で竈が検出され、竪穴住居跡の存在が予想されたため検出に努めたが、圃場整備による削平、第１次調査と第２次の本発掘調査区に跨っていたこと、SH20017と切りあっている等の悪条件があり、整然とした形状では検出できなかった。竈は奥壁側を圃場整備により削り取られ、焚き口と袖部のみが遺存していた。比較的残りの良い左袖部は48cmであり、焚き口の幅は45cmを測る。焚き口が掘り込まれる構造となっている。竈内部には土師器甕片が落ち込んでおり、焚き口の前面や竈の西側床面等に第11～12期の須恵器高杯（252）・土師器甕（254～256）が遺存していた。

SH20059（図版47、写真図版39）

一段下がった調査区北端で検出された竈が付設された竪穴住居跡である。他の竪穴住居跡や掘立柱建

物跡と切りあうことはない。住居の方位はＮ９°Ｅとし、平面形は方形を呈する。住居規模は南北4.7ｍ・東西4.35ｍ、床面積20.4㎡を測る。壁は最高20㎝遺存し、東壁際中央の屋内土壙部分と西壁際中央の竈部を除いた壁下には壁溝が設けられていた。壁溝は幅12～20㎝・深さ６～９㎝であった。床面中央には中央炉が設けられており、中央炉は長軸65㎝・短軸40㎝の不整形な楕円形を呈し、深さ６㎝の浅いものであった。形状から掘り直されている可能性が高い。主柱穴は４本で、柱穴の大きさは径24～34㎝・深さ30～48㎝を測る。南東側の柱穴を除く３本の柱穴の内部から径12～18㎝の柱痕跡が確認された。竈は西壁の中央壁際に設けられ、奥行き98㎝・焚き口幅50㎝を測る。床面の焼土は焚き口の右袖部寄りにみられ、左袖部寄りには認められなかった。左袖部の遺存状態が悪かったこともあり、焚き口の左袖部はより焼土に近い部分であった可能性がある。袖部は最高13㎝遺存しており、竈下に一層堆積した上に構築されている。左袖部下には浅い土壙が検出されたことからみて、この竈も一回は改修されている可能性が高い。竈北側と東壁際中央には屋内土壙が設けられており、竈左袖部下の土壙もこの住居跡に伴う屋内土壙であった可能性がある。竈北側の土壙は長軸52㎝・短軸40㎝・深さ18㎝であり、竈に沿うように設けられていた。東壁際の土壙は径62㎝・深さ23㎝で、壁側が住居壁にあわすように直線的な形状となっていた。左袖下の土壙は径25㎝・深さ７㎝の浅いものである。

竈北側の土壙上から壁溝上にかけて第12期の土師器甕（428・429）・高杯（430・431）が出土し、他に製塩土器（432）も出土している。

SH20060（図版48、写真図版40）

田の段落ち部から一段下がった調査区北端部にかけて検出され、SH20035・20061を切った状態で検出された竈を伴う竪穴住居跡である。南東隅部が上手く検出できていないが、方位をＮ3.5°Ｅとし、平面形は方形を呈する。住居規模は南北・東西とも4.75ｍ、床面積22.6㎡を測る。壁は最高28㎝遺存していたが、南東隅部以外の一段下がった部分では極めて遺存状況が悪く、壁は僅かに痕跡を留める程度であった。壁溝は南壁から西壁下にかけて設けられ、幅７～10㎝・深さ５㎝を測る。西壁北半の壁下では断続的となっていた。床面中央の３ヶ所に焼土が認められ、掘り込みは伴っていない。主柱穴は４本で、柱穴の大きさは径24～34㎝・深さ30～40㎝を測る。北西側の柱穴を除く３本の柱穴の内部から径15～17㎝の柱痕跡が確認されており、南側２本の柱痕跡は楕円形となっていた。竈は西壁の中央壁際に設けられ、奥行き50㎝・焚き口幅53㎝を測るが、極めて遺存状況が悪く、袖部は僅かに５㎝の高さであった。焚き口の中央床面が焼土化していた。

埋土中から土師器甕（433）・甑（437）が出土している。

SH20061（図版48、写真図版40）

SH20035・SH20057・SH20060に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。遺存状況が悪く、壁ははっきりしなかったが、方位をＮ28.5°Ｅとし、平面形は方形を呈する。住居規模は南北３ｍ以上、東西は6.5ｍ、床面積22.6㎡を測る。壁溝・中央炉とも認められなかった。主柱穴は４本で、大きさは径22～27㎝・深さ22～32㎝であった。北側２本の柱穴内部で径16㎝の柱痕跡が確認された。東壁中央の壁際には屋内土壙が設けられ、SH20035の屋内土壙に切られているため判全としない部分もあるが、大きさは径約65㎝・深さ13㎝を測る。

埋土中から須恵器の杯（434・435）が出土している。

SH20062（図版８、写真図版40）

調査区の北壁際で、南東隅部から南壁が検出され、住居の大半は調査区外となっている竪穴住居跡である。SB20024に切られる。検出できた部分では東西2.5m・南北0.75m、壁は最高30cm遺存していた。南東隅部の壁下に壁溝が設けられており、壁溝は幅12cm・深さ６cmを測る。

製塩土器(436)が出土している。

SH25063（図版49、写真図版41）

第４次本発掘調査で町道下部から検出された竪穴住居跡である。住居のほぼ中央は水道管埋設により切断されていた。住居は２棟が重なり、SH20011を切った状態で検出された。重なった２棟は壁がほぼ平行していることからすれば、住居拡張による同一場所での建替えを考えたが、東壁部分はかつての道路側溝で切られて明瞭ではないが、西側壁部分では内側住居の壁が外側住居埋土上まで立ち上がっていることから、建て替えではなく、切りあい関係と捉えている。

内側住居は方形で、方位をＮ1.5°Ｅとし、住居規模は南北2.9m以上・東西4.6m、床面積13.3㎡以上を測る。検出された部分では壁下を全周して壁溝が設けられており、壁溝は幅７～15cm・深さ７～13cmを測る。中央炉は水道管埋設の掘削により壊されているが、深さ５cmほど掘り窪めており、底面や壁が焼土化していた。主柱穴は４本と見られるが、北東側を除く３本が検出された。ただ、南側２本は配置された位置から主柱穴と断定できるが、北西側の柱穴は北東側の主柱穴が検出されていないことや、やや寄っている感があって断定できない。不確かな北西側も含めた主柱穴の大きさは径20～23cm・深さ42～53cmである。柱穴内には径10～12cmの柱痕跡が確認された。

上面からは第９～10期の須恵器高杯（448)、土師器壺（449)･高杯（450～452・456)･鉢（453)・器台（455）が出土している。

SH24064（図版41、写真図版41・42）

SH20040を切った状態で検出された竪穴住居跡である。方位をＮ29.5°Ｗとし、平面形は南壁が短くなった台形状の方形を呈する。住居規模は南北3.8～4.7m・東西4.1m、床面積17.4㎡を測る。壁は最高20cmまで遺存し、北壁東半と東壁中央の屋内土壙の部分を除く壁下には壁溝が検出され、壁溝は幅７～20cm・深さ３～６cmを測る。床面中央の中央炉は径25cm・深さ７cmで、底面から壁面及び周囲の床面が焼土化していた。主柱穴は４本で、柱穴の大きさは径20～32cm・深さ50～58cmを測る。西側２本の柱穴内部で径10～17cmの柱痕跡が確認された。屋内土壙は東壁際の中央に設けられていたが、屋内土壙の北側には土手状の高まりが設けられており、長さ1.2m・幅33cm・高さ2.0cmを測る。屋内土壙は二段に掘られ、全体では深さ69cmを測る。一段目は一辺70cmの方形に深さ7cmまで掘られ、一段目の北西隅に二段目が径40cm・深さ63cmの大きさに掘られていた。

この住居跡では床面から浮いた埋土中に炭化材を含む炭化物が多く認められた。特に住居南東隅部から中央にかけて手中的に認められ、北半ではまばらな状態であったことから、住居廃絶後に木材を焼却処分したものと判断している。

第10期の須恵器高杯（438)･甕（439)、土師器甕（440～442)･高杯（443～445)･椀（446)、製塩土器（447）が出土している。

SH20065（図版８、写真図版42）

第４次本発掘調査で検出された竪穴住居で、北西隅から北壁が検出されたが、東壁は検出されていない。検出できた部分での規模は南北0.85m・東西３mを測る。北壁が最高19cmまで遺存し、壁下には幅12cm・深さ４cmの壁溝が設けられていた。

第６期の土師器高杯（456)･器台（454・455）が出土している。

掘立柱建物跡

SB20001（図版50、写真図版96）

SH20001・SH20003・SH20005・SH20032・SH20044、SD20011を切った状態で検出された側柱建物跡である。棟方位をＮ27°Ｅとし、棟行３間（6.0m）・梁行３間（6.1m)、面積36.6㎡を測る、ほぼ正方形の側柱建物である。妻側の柱間は両妻とも東から1.8m・2.3m・2.0mと揃っており、中央の柱間が広くなっている。桁行の柱間は西桁行が北から1.7m・2.2m・2.1m、東桁行が1.6m・1.8m・2.7mとなっており、西桁行は妻側の柱間に近くなっているが、東桁行は南端の柱間が広くなっている。建物の出入り口に想定できるのかもしれない。柱穴の掘形は円形ないし不整形な楕円形を呈し、大きさは径40～70cm、深さは22～50cmを測り、18～22cmの柱痕跡が確認された。第14期の須恵器杯片（457）が出土している。

SB20002（図版51、写真図版96）

SB20005を切った状態で検出された総柱建物跡である。方位をＮ25.5°Ｅとし、南北２間（2.1m)・東西２間（2.1m)、面積4.4㎡の、極めて小規模な建物である。柱間はほぼ1.05mで揃っており、柱穴の掘形は円形ないし不整形な楕円形を呈し、柱穴の大きさは径40～77cm、深さは34～50cmを測る。内部に20cm前後の柱痕跡が確認された。

SB20003（図版50、写真図版96）

SD20011を切った状態で検出された側柱建物跡で、調査区外に延びる。方位をＮ20.7°Ｅとし、SB20001とは約5.5mの間隔で並行する。東西３間（5.7m）・南北１間以上（1.8m)、面積10.3㎡以上を測り、柱穴は径50～60cm・深さ22～50cmを測る。柱穴内部からは20～22cmの柱痕跡が確認された。

SB20004（図版51、写真図版97）

SH20014・SB20005を切った状態で検出された総柱建物跡である。方位をＮ16°Ｅとし、南北２間(2.6m)･東西２間（2.5m)、面積6.5㎡の、小規模な建物である。柱間は南北1.3m、東西が1.25mでほぼ揃っているが、建物中央の柱がやや南にずれた位置となっている。柱穴は柱の抜き取りをされたものが多く建築当初の形状を留めていないが、柱痕跡が確認された３本の柱穴は掘形が円形ないし不整形な楕円形を呈し、柱穴の大きさは径48～60cm、深さは35～38cmを測る。内部に18cm前後の柱痕跡が確認された。SP20222から第15期以降の土師器甕（458）がほぼ完形で出土している。

SB20005（図版52～57、写真図版44～73）

SH20006･SH20009･SH20014･SB20005を切り、SB20002･SB20004･SD20004に切られた状態で検出された、四面

庇の掘立柱建物跡である。身舎の棟持柱が僅かに外にはみ出た近接棟持柱であることから、身舎の屋根構造は切妻造りとなり、その四面に庇が付くことから、建物全体の屋根構造は錣入母屋造りと考えられる建物である。

棟方位をN5.5° Eとし、庇部分も含めた建物全体の規模は桁行・梁行とも6間で、桁行15.4m・梁行13.1m、床面積201.7㎡を測る大規模な建物である。

身舎は桁行3間（9.45m）・梁行2間（8.7m）・床面積82.2㎡を測る。棟持柱は妻の中央外側に正確に配され、両棟持柱間は約10.05m、梁行柱間は約4.36mとなっている。棟持柱の身舎妻側面からの出は両棟持柱とも約30cmであり、棟持柱分だけが外に出るような形をとっている。身舎桁行の柱間は両桁行とも315cmの等間であり、柱穴は相対する位置に正確に配置されている。

庇は南面と北面の出が305cm、東面と西面の出が218cmであり、南北側の出が長く、東西側の出が短くなっている。南・北面の出は身舎の桁行の柱間と同じ寸法であり、東・西面の出は梁行の1/4、梁行柱間の1/2にあたる。

庇の柱穴の配置は、南北面は身舎の棟と桁の延長上に配し、できた2間の中央に柱穴を配して両桁間を正確に4等分している。これにより柱間は梁行の1/4となり、梁行8.7mであることから柱間は218cmとなる。東西面側は身舎の両妻の外側に合うように配置し、この間に3本の柱穴を配置して4等分しており、この間の柱間は約245cmなっている。このように配置しているため、身舎桁側の柱とは整合していない。庇4隅の柱穴は庇東西面と柱筋が通り、東西面の身舎外側に配置された柱との柱間は約270cmとなっている。庇南北面の出は305cmであることから南北面とは柱筋は通らず、やや内側に寄った位置となっている。別の言い方をすれば、庇四隅の柱穴は棟・桁の延長から配置された南北面の柱筋の柱一本分内側に配置されているということができる。これからすれば庇としたが縁という可能性もある。

棟持柱の柱穴は柱の抜き取りが行われて両側とも平面形は不整形となっていたが、北側は径2m、深さは98cmを測り、掘形は2段に掘られ、下段は梁方向に長い長方形となっていた。南側は径約1.5m・深さ約66cmであり、掘形は北側と同様に2段に掘られていたが、下段は僅かに梁方向に長い楕円形となる程度であった。

身舎の柱穴は、基本的には棟と直角方向となる東西に伸びた形状を呈し、規模は南北が80～130cm・東西が1.0～2.0mとなっていた。柱穴規模の内、棟と同方向となる南北は、西桁行の北隅だけが抜き取りのためか130cmと広がっていたが、それ以外は80～90cmとほぼ揃っていた。西桁行北隅の柱穴も上端では広がっているが、下端では65cmとなっており、他の柱穴の下端と差が無いことから、建築時はほぼ揃っていたものと思われる。これに対し、棟と直角方向の東西は東桁の北隅と北から2本目は長さ1.0～1.2mで僅かに長い長方形と楕円形となる程度であったが、残る6本は1.5～2.0mと極めて長く伸びた長楕円形となっていた。柱穴の深さは、66～92cmを測り、南東側の2本が比較的浅く、その他は88～92cmと揃っていた。柱穴掘形は身舎内側寄りとなる部分が深くなるように2段に掘られ、柱穴の底には柱あたりとみられる地山が円形に変色している箇所が確認できた。柱穴埋土は柱抜き取りのため乱されているものが多かったが、西桁の南側3本では遺構面を形成する黒褐色極細砂や段丘の基盤層である黄褐色極細砂ブロックを含んだ層の単位が看取できた。確認できた柱痕跡は径28～32cmである。

庇部分の柱穴は形状が方形・円形・楕円形と様々であり、柱穴下端も方形や楕円形になるものが混在している。柱穴規模は身舎の柱穴より一回り小さくなる。深さは66～80cmを測り、相対的には東側の桁方向が浅くなっている。柱穴の埋土は基本的には身舎の柱穴と変化は無かったが、南・東側の柱穴の中には礫が多く混じるものが存在した。その付近では基盤の礫が高くなっており、これが混入した結果と

思われる。柱穴内で確認された柱痕跡は24～30cmであり、身舎よりやや細くなる程度であった。

柱穴内からは須恵器の高杯（459)･甕（460）や土師器壺（462)･高杯（461）が出土した。特に462の土師器壺は完形であり、南側の棟持柱の柱穴の柱抜き取り跡から出土したものである。

SB20006（図版58、写真図版97）

SH20017・SH20018、SB20019を切った状態で検出された側柱建物跡である。方位をN10°Eとし、南北３間（4.1m）・東西３間（3.6m）、面積14.8㎡の、やや歪で小規模な建物である。北妻側の東から２本目の柱穴が検出できていないが、梁行の柱間は南妻側で1.2mの等間となっており、桁行は中央と北側が1.4m、南側1間は1.3mとやや狭くなっている。柱穴は基本的には円形で、大きさは径40～56cm、深さは32～56cmであり、四隅の柱穴が深くなっていた。柱が抜き取られていた柱穴も存在したが、確認できた柱痕跡は径15～18cmであった。土師器甕の小片（463・464）が出土している。

SB20007（図版58、写真図版97）

SH20038の北側で、SB20012・SK20026を切った状態で検出された側柱建物跡である。SH20038・SB20013とも近接しており、上部構造では切りあっていた可能性があるが、直接的な切りあいがなく確認できなかった。方位をN0.5°Wとし、桁行３間（3.2m）・梁行２間（3.2m）、面積10.2㎡の、やや歪な正方形に近い小規模な建物である。桁行の柱間は不揃いで短く92～120cmを測り、中央の間が狭くなっている。梁行の柱間は160cmの等間であり、南北とも揃っている。柱穴は径40cmの円形で、深さは24～30cmであり､内部に径15cmの柱痕跡が確認できた｡須恵器の小片（465)･土師器甕（466）が出土している。

SB20008（図版59、写真図版74）

SH20024を切った状態で検出された屋内に棟持柱を立てる側柱建物跡である。西側1.6mにはこの建物に並行する柵SA20001があり、関連する可能性がある。建物方位はほぼ正方位であり、桁行３間（7.6m）・梁行３間（6.4m）、床面積48.6㎡を測る。桁と妻はそれぞれには並行するが、桁と妻が直交しないため、平面形は平行四辺形になる。屋内棟持柱は２本であり、妻の中央の屋内に入った位置に配されている。妻からの入りは北側が125cm、南側が128cmであり、差は僅かで、妻からの入りはほぼ同じとみてよいであろう。棟持柱の間隔は約4.3mを測る。桁行の柱間は西側が248～260cmで比較的揃っているが、東桁行の柱間は北側２間が240cm、南端が280cmであり、建物南東隅の柱間がやや広くなっている。梁行の柱間は200～220cmを測る。

柱穴は屋内棟持柱と側柱の柱穴との間で大きな差は無く、平面形状は円形・楕円形・方形のものがみられ、大きさは56～68cm、深さは32～60cmを測る。南棟持柱が深くなっているが、北側棟持柱は側柱と大差が無く、棟持柱を意図的に深くしたということはなさそうである。柱穴内からは20～28cmの柱痕跡が確認され、隅柱の柱痕跡がやや太くなっていた。土師器甕の口縁部片（467・468）が出土している。

SB20009（図版51、写真図版98）

SH20028を切った状態で検出された総柱建物跡である。方位をN18°Eとし、南北２間（2.5m)･東西２間（2.5～2.9m）、面積6.8㎡の小規模な建物である。北辺と南辺では長さが異なっているため、歪な形状となっている。そのため、柱間は西・北・東辺では120～135cm、南辺では135cmと160cmとなってい

る。柱穴は円形で、径45～55cmの大きさであり、深さは24～30cmを測る。中央の柱穴は15cmと浅く束柱の可能性がある。４本の柱穴から径17～24cmの柱痕跡が確認された。

SB20010（図版58、写真図版98）

SH20029を切った状態で検出された側柱建物跡である。地区の中では最も大きく削平を受けた南西隅で検出されており、柱穴の遺存状況も悪い。建物は棟方位をＮ76°Ｅとし、本遺跡ではまれな東西棟の建物である。棟行３間（3.7m）・梁行２間（3.3m）、床面積12.2㎡を測り、平面形は平行四辺形状となる小規模な建物である。桁行の柱間は北側がほぼ125cmと揃っており、南側は東側２間が約110cm、西側が約145cmとやや広くなっている。梁行の柱間は東妻ではほぼ165cmの等間になっているが、西妻は北側が狭く約145cm、南側が185cmと広くなっている。柱穴の掘形は円形を呈し、柱穴の大きさは径32～50cm、深さは16～25cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

SB20011（図版60、写真98）

Ⅱ区の西端で検出された側柱建物跡である。西半は削平のためやⅢ区のSD30001上となって検出できなかった。棟方位をＮ21°Ｅとし、棟行５間（8.4m）・梁行２間（4.1m）以上、床面積34.4㎡以上を測る。桁行の柱間はほぼ168cmで揃っており、梁行の柱間もほぼ205cmで揃っている。柱穴の掘形は円形を呈し、柱穴の大きさは径40～55cm、深さは20～30cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

この建物については、桁行の北側から２本目と３本目の柱穴からほぼ直角に折れ、約２m進んだ位置に２本の柱穴があることから、南北２間の建物２棟が並行している状態にも復元できるが、桁行の柱間が揃っていることや、現場での判断を優先的に考えて、ここでは１棟として復元した。

SB20012（図版61、写真図版74）

SH20038・SB20007を切った状態で検出された屋内に棟持柱を立てる側柱建物跡である。SB20013とも重なり合うが柱穴に切りあいがなく、前後関係は不明である。建物方位はＮ4.5°Ｗであり、桁行３間（6.2m）・梁行３間（5.8m）、床面積36㎡を測る。屋内棟持柱は２本であり、棟持柱の間隔は2.0mを測る。東桁からは2.96m、西桁からは2.8mの間隔で、北から２本目と３本目の梁から僅かに内側に入った屋内に、桁と並行して配されている。柱間は桁行が184cm～228cmであり、東西とも中央の柱間がやや広くなっている。梁行の柱間は180～208cmを測る。柱穴は棟持柱と側柱の間で差は認められず、掘形には円形・楕円形・方形の３種があり、大きさはばらつきが大きい。深さは32～60cmを測る。柱穴内からは20cm前後の柱痕跡が確認できた。

土師器甕口縁の小片（469）と高杯脚端部（470）が出土している。

SB200013（図版53、写真図版99）

SH20038の西側で、SB20007・SB20012と重なった状態で検出されたが、直接的な切り合いがなく、前後関係は不明である。方位をＮ2.5°Ｅとし、桁行２間（3.4m）・梁行２間（2.9m）・面積9.9㎡の小規模な側柱建物である。桁行の柱間は東西とも北から160cm・176cmを、梁行の柱間は136～144cmを測る。柱穴は円形で、大きさは径25～40cm、深さは17～20cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

土師器甕の口縁（471）と高杯（472）が出土している。

SB20014（図版51、写真図版99）

SH20019を切った状態で検出された総柱建物跡である。方位をN5.5°Eとし、南北２間（2.4m）・東西２間（2.6m）、面積6.2㎡の小規模で正方形に近い建物であるが、北辺と南辺の長さが異なっているため、歪な形状となっている。柱間は南北が94～104㎝、東西は128～152㎝となっている。柱穴は円形で、大きさは径40～50㎝、深さは20～30㎝を測る。中央の柱穴が小さく、深さも浅いことから束柱の可能性がある。柱穴内部では径15㎝前後の柱痕跡が確認された。

須恵器杯片（473）と土師器製塩土器（474）が出土している。

SB20015（図版60、写真図版99）

調査区南端で３個の柱穴が検出され、深さは浅いものの周辺の柱穴より径が大きいことから、柱穴列と判断し、間隔が２間であり、柵とは考え難いことから掘立柱建物としたものである。ただ第４次本発掘調査では調査区が細かったためか検出できなかった。方位をN0.5°Wとし、東西２間（4.0m）、柱穴は円形で、大きさは径60～95㎝、深さは10～20㎝を測る。柱痕跡は確認できなかった。

SB20016（図版62～65、写真図版75～88）

調査区中央の北端で検出され、建物の北半は調査区外となって全容は検出できなかった。SH20017・SH20051を切り、SH20053に切られて検出された他、SH20052とも重なっているが柱穴に切りあい関係がなく、またSH20058とも切りあいが考えられるが、SH20058が削平のためほとんど床面まで消失状態であったため、切りあい関係は不明である。全容が検出できなかったため、細部は不詳であるが、検出できた部分では棟方位をN4.2°Wとし、近接棟持柱付きの身舎に、東西と南の３面に庇が付き、南面庇のさらに外側に孫庇かあるいは縁もしくは柵と思われる付随施設が付く掘立柱建物跡である。後述するが建物規模を推定すると床面積が147.3㎡もしくは最大で161㎡となる大型の掘立柱建物である。

身舎は桁行１間以上（約4.2m）・梁行２間（6.0m）・床面積25.2㎡以上の規模を測る。棟持柱は妻の中央に正確に配され、東西の桁との間は約3.75mとなっている。棟持柱の妻側面からの出は約20㎝であり、棟持柱分だけが外に出るような構造を採っている。

庇は南面が４間（10.6m）、東西面が３間（7.5m）以上であり、庇を含めた建物規模は79.5㎡以上となる。庇の出は３面とも約210㎝であり、南面の柱間は約264㎝、東西両面の柱間は約252㎝で、ともに等間となっている。柱配置は南面では棟の背後となる柱穴は棟の通りと合っているが、それ以外は身舎とは柱筋が合わされていない。東西の端から２本目の柱穴は２本とも桁を延長した線より身舎内側に寄せられている。東西面も身舎とは柱筋が合わされず、南から２本目の柱穴は東西面とも身舎の妻を延長した線より北にずらされて、身舎の内側になるように配置されている。これらの４本の柱穴は、意図的に身舎の内側になるように配置されたのか、あるいは庇四隅を決定し、その間を等分した結果、偶然生じたのかは定かではない。庇四隅の柱穴は庇東西面と柱筋が通る位置に配され、南面の柱筋とは揃わず、柱一本分内側に配置されている。これはSB20005・SB20019と同様の柱配置方法であり、身舎外側の柱穴列が縁ないし床があった可能性も考えられる。

南面庇のさらに南側には南面とは間隔1.3mで並行する柱穴列が存在する。柱穴列は４間（10.2m）を測り、柱間は約255㎝を測る。柱穴列や構成する柱穴の位置からみて、庇とは無関係に存在しているものでないことは明らかであるが、柱穴の配置は必ずしも全てが庇の柱穴と合致しない。合致するのは

棟背後にあたる柱穴だけであり、棟の延長線上に配され、棟持柱と棟背後の庇柱とこの柱穴列の中央の柱が直線上に並ぶ。その他は庇の柱とは柱一本分ほど内側にずらして配置している。これは偶然と言うより意図的に配置されたと考えるのが自然であり、庇との結合方法に関係する柱配置であろう。

棟持柱の柱穴は上部を攪乱されたため、小さく深さも浅くなっていたが、平面形は不整形な方形で、東西1.1m・南北1.02m・深さ92cm、下端は東西80cm・南北60cmの長方形となっていた。深さについは柱穴底のレベルが深さ1mのP21903より10cm低いところにあることから、本来は最低でも1.1mを越していたものと思われる。埋土は基本的には黒褐色ないし黒色を呈する極細砂～細砂に基盤層の黄褐色土が混じるものであり、一部は黄褐色土に黒色極細砂が混じっていた。柱穴内には長辺を妻方向に向けた長辺52cm・短辺15cm以上の長方形の柱痕跡が確認された。断ち割りの際に確認されたため、残念ながら短辺の長さを明らかにできなかったが、下端からみて25cmを越すことはないものと思われる。こうした長方形の柱は五平柱と呼ばれ、藤原宮東方官衙地域下層や極楽寺ヒビキ遺跡でも使用されている。

他の身舎の柱穴は方形ないしは不整形な方形に掘られ、大きさは70～90cm、深さは64cm～1.0mであり、南側が深さも浅く、底のレベルも高い位置となっていた。身舎南東の隅柱は上部を大きく攪乱され、僅かに柱穴底付近が残っていたものである。柱穴の埋土は棟持柱と大差なく、柱穴内からは径22～24cmの円形に柱痕跡が確認された。また柱穴の底の柱痕跡下部にあたる部分には柱の重みで生じたと思われる円形の変色が確認されている。このことから棟持柱以外の身舎の柱は円形であったとみて間違いないものと思われる。

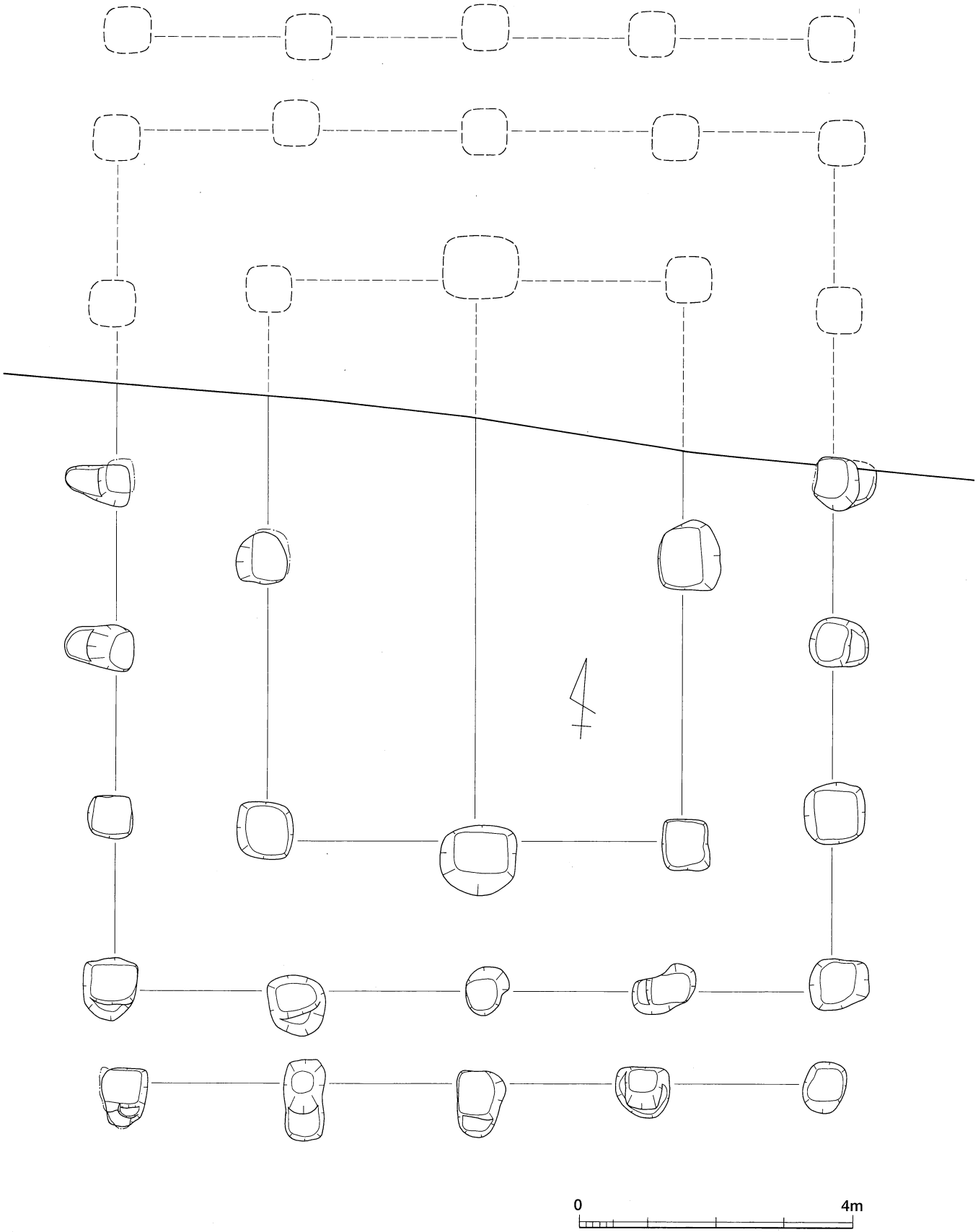
庇の柱穴は、上端は方形もしくは楕円形を呈するが、下端は方形となるものが多い。柱穴の大きさは90～110cm、深さは50～82cmであり、身舎の柱穴より一回り小さく、深さも浅くなっているが、東西面とも北側の2本は棟と直交方向に長い楕円形を呈し、身舎よりが深くなるよう2段に掘られている。柱穴内の柱痕跡は断ち割り段階では円形として検出したが、柱穴内の土を全て除去したところ、柱穴の底に柱あたりによるとみられる地山の変色が認められ、P21909では長さ32cm・幅16cmの長方形状に認められている。その他の庇柱の柱穴でも長方形柱のあたりと見られる変色が確認でき、庇柱は長方形であった可能性が高い。

南面庇の外側の柱列の柱穴は掘形に統一性はなく、平面形は楕円形・長方形・不整方形を呈する。大きさは70cm以上であるが、長方形のものでは長辺が100cmを超している。深さは72～80cmを測り、庇の柱穴とほぼ同じ深さとなっている。この柱穴列では柱穴の底の変色が庇ほど明瞭ではなかったが、それでもP20401では妻桁方向に長い長方形の柱あたりと見られる長さ26cm・最大幅12cmの変色が確認されている。

須恵器高杯（475）や土師器高杯（476・477）が出土している。

以上がSB20016の概略であるが、掘立柱建物である以上、検出できた部分から全体をある程度復元することは可能であり、SB20005を参考に復元を試みてみる。

まず身舎部分であるが、北側柱列の中央に棟持柱が検出できなかったことから、棟がさらに北に延びることは確実である。桁行の柱間は4.2mであり、三面の庇は東西面・南北面でそれぞれ等間となっていること、SB20005の身舎桁行の柱間も等間であることから、この建物も身舎桁行の柱間は等間として、桁行を延ばして復元する。まず身舎の桁行を2間とした場合、桁行は8.4mとなり、桁行と梁行の比率は1.4:1となる。SB20005の比率は1.09：1であり、SB20016の方が桁行方向に長い建物となる。次に庇の出が三面とも2.1mであることから、北側の庇もあるとすれば同じ出と考えられ、身舎の桁の長さに南北両面の出4.2mをプラスすると建物全体の長さは12.6mとなる。庇の柱間は2.52mであり、建物の長さ12.6mは庇5間分に相当し誤差はでない。庇の柱穴の配置も北妻通りにくる柱が身舎の内側よりにずれ、南妻通りの柱配置と同様になり、身舎中央の側柱を中心に折り返せば左右対称の柱配置となる。



第14図　SB20016推定図

仮に身舎の桁行を３間とした場合、身舎桁行は12.6ｍとなり、桁行と梁行の比率は2.1：１であり、検出された他の掘立柱建物にない南北に長い建物になる。また南北両側の庇の出4.2ｍをプラスすると建物全体の長さは17ｍになり、柱間2.52ｍの庇は７間分では50㎝短く、これを柱間で均等に解消しようとすると、検出できている南３間は2.52ｍであることから、北側の４間分で解消して柱間を12～13㎝狭くするか、あるいは1間だけを50㎝狭くするかする必要がある。このように身舎の桁行を３間とすると不自然さが生じ、やはり桁行２間とする方がより自然であろう。

仮に身舎の桁行を２間とすると、身舎は桁行8.4ｍ・梁行6.0ｍ・床面積50.4㎡、庇は東西面が５間12.6ｍ、南北面が４間10.6ｍであり、庇を含めた床面積は133.6㎡となる。これに南面庇南側の孫庇もしくは縁を加えると建物の全長は13.9ｍであり、床面積は147.3㎡、北側にも同様の施設が付設されているとすれば全長は15.2ｍとなり、床面積は161㎡となる。北側の孫庇あるいは縁と思われる施設は付設されていないことも考えられるため、この建物の規模は147㎡は確実であり、最大で161㎡になる可能性があるとしておく。

SB20017（図版60、写真図版100）

調査区の西端付近でSH20029・SH20031を切って検出された建物跡である。１間四方の建物であり、棟方位は不明であるが、南北方向を棟として計測すると、方位はＮ21°Ｅとなる。建物はほぼ正方形で、規模は南北・東西とも2.7ｍ、床面積は7.3㎡を測る。柱穴は円形ないし不整形な楕円形を呈し、大きさは径36～56㎝、深さは28～40㎝を測る。検出された付近は調査区内では最も削平された部分であり、切り合っている竪穴住居跡も壁をほとんど消失している。この建物跡も壁から床面までを消失してしまった竪穴住居跡の可能性はあるが、竪穴住居跡と断定することもできないことから、掘立柱建物として扱った。

SB20018（図版66、写真図版100）

調査区の南西隅付近で、SH20025とSH20041に挟まれるようにして検出された側柱建物である。方位をＮ７°Ｗとし、建物規模は桁行３間（約6.1ｍ）・梁行３間（4.5ｍ）・床面積は27.5㎡を測る。桁と梁行の比率が約1.36となる、長方形の建物である。柱穴の通りは東側桁行ではほぼ揃っているが、西側桁行は北から２本目が柱一本分外に飛び出る。妻側は隅柱を直線で繋げば中央の２本は外に飛び出し、特に北側２本の飛び出しが大きい。柱間は東桁行が南から248・176・176㎝、西桁行が南から176・224・200㎝となって、両桁とも一定していない。特に東桁行の南端の柱間が広くなっている。梁行は南妻側が152㎝でほぼ揃っており、北妻側は西から144・136・168㎝となって、ややばらつきがみられる。柱穴の掘形はほぼ円形で、大きさは径36～50㎝・深さ８～20㎝を測る。柱穴内部に柱痕跡は確認できなかった。

SB20019（図版67、写真図版89）

調査区の中央付近、SB20005の正面西側で、SH20008・20023を切り、SH20007に切られた状態で検出された、壁の内側に近接棟持柱の付く四面庇付き建物で、北と西側に孫庇もしくは縁と思われる施設が付設された建物である。孫庇あるいは縁と思われる施設を含めた建物全体の床面積は110㎡を測る大型の掘立柱建物である。

身舎は棟方位をＮ2.5°Ｅとし、建物規模は桁行３間（5.7ｍ）・梁行１間（5.4ｍ）・床面積30.8㎡を測る。身舎の桁行と梁行の比率は1.07であり、正方形に近い建物である。身舎の妻中央には妻通りから約10㎝内側に寄せた近接棟持柱があり、棟持柱間は約5.4ｍ、棟持柱と桁間は270㎝を測る。身舎の西側

柱の柱間は一定ではなく南側から195・210・165cmとばらつきがみられる。東側柱はSH20007に切られて消失しているため柱間は不明である。棟持柱の柱穴は妻と並行する方向に長い楕円形を呈し、大きさは長軸で北側が62cm、南側が約70cmを測る。深さは北側が24cm、南側が30cmであり、建物を構成する他の柱穴よりとりたてて深いというわけではない。身舎側柱の柱穴は南東隅だけが楕円形に掘られ、他はすべて円形である。柱穴の大きさは径32～50cmであり、深さは20～35cmを測る。南西隅の柱穴内部に円形で径20cmの柱痕跡が確認された。

四周の庇は身舎と並行し、南北面は4間（9.0m）であり、身舎からの出はともに約205cmを測る。東西面の身舎からの出はともに約175cmであり、庇の長さは9.5mを測り、身舎を含めた建物規模は85.5m²を測る。西面では庇長9.5mを4間とし、東面は5間としている。西面の柱間は南2間が192cm、北2間が北側から250cm・230cmとなっている。東面の庇の柱間は南2間と北端が185cm、中央が165cm、中央の北側が230cmとなっている。

庇の柱配置をみると、庇の4隅の柱穴は身舎の対角線上に配置され、身舎隅柱との庇隅柱の間隔は四隅とも270cmに揃えられている。南北面の柱配置は棟持柱の背後にきっちり配置している。しかし桁の延長上にくるものは内側に入る。この柱穴は4本ともが切りあっており、切りあった柱穴の内、内側の柱穴を採れば、南北面とも柱間は225cmの等間となる。外側を採れば柱間は不均等になるようにみえるが、庇隅柱との柱間は4ヶ所とも190cm、棟背後の柱穴との柱間も4ヶ所ともに260cmと揃っている。こうした現象が偶然とは考えにくく、4ヶ所で切りあう計8本の柱穴も建物に付随したものと考えられる。しかし、4ヶ所の切りあう柱穴の前後関係は、南西・南東・北東の3ヶ所では外側の桁の延長上に近い柱穴が内側の柱穴を切っていると把握されており、内側が古く、外側が新しいことになる。ところが北西側では逆に内側の柱穴が外側の柱穴を切っていると把握されており、内側が新しく外側が古いことになり、他とは矛盾した結果となっている。こうした結果から断定しがたい部分もあるが、3ヶ所の結果を優先し、北西側については調査の稚屈さから生じたこととすると、庇の桁延長上にくる柱穴は建築時には内側に配置され、その後に修繕が行われ、桁に近い位置に配置されたものとみられる。したがって、南北面は建築時には庇の長さ9mを4等分した柱間225cmで柱穴が配され、修繕時に桁側の壁面の内側に沿うように配置し直され、中央の柱間260cm、両端の柱間190cmとなったものと解釈できる。また、北西隅柱の柱穴にも切りあいがあり、修繕時に外側に広げられた可能性がある。また建築当初の南北面の柱配置は庇四隅の隅柱より柱一本分が外側になるように配置されており、こうした柱配置の方法はSB20005・SB20016と共通している。

西面庇の柱穴配置は庇長を2等分し、南側はさらにそれを2等分している。北側では2等分より少し南にずれた位置に配置されている。東面の柱配置は南2間と北1間とを同じ間でとり、残りを2：3の割合に分割している。また妻を東に延長した位置に来る柱穴は妻外側となっている。

庇を構成する柱穴のうち、東面の中央の柱間とその北側の柱間とを区切る柱穴は径25cm・深さ40cmであり、他の庇の柱穴より細くて深く、底は尖り気味になっている。その他の柱穴は南東隅、北西隅、北側の棟持柱背後の3本が楕円形あるいは隅丸長方形であり、これら以外の柱穴は円形を呈する。柱穴の大きさは形状による違いは認められず、径31～50cmの範囲に納まっている。深さは18～40cmを測る。修繕時と考えた柱穴が他の柱穴よりは大きく、深さも深い。

西面庇と北面庇のさらに外側には建物と並行する西面5間11.0m、北面4間10mの柱穴列が存在する。北面は4間であるが、西端の柱間が他の倍になっていることから、本来5間であった可能性がある。北

面と庇との間は134cm、西面と庇の間隔は128cmが空けられ、北面の東端は東面庇の柱通りに、西面の南端は南面庇の柱通りに揃えられている。またこの柱穴列の北西隅柱は身舎の対角線を延長した線上にあり、庇隅柱との間隔は180cmを測る。

この柱穴列の柱配置は北面では北面長を５等分している。ただ、西端の二つの柱間を一つにして４間とした可能性もある。西面の柱配置は南から３間までは西面庇の柱と対になるように配置し、残りを２等分して配置している。この柱穴列を構成する柱穴も大きさ・深さとも身舎や庇を構成する柱穴と変わりはない。

SB20020（図版60、写真図版100）

調査区の北東端で検出された、方位はＮ32°Ｅとする、南北１間（2.6m）・東西1間（2.8m）・床面積7.3㎡の小型の建物である。南北の柱間は中央に小柱穴を入れ２等分している。柱穴は円形を呈し大きさは径40～50cm、深さは30cmを測る。南北の柱間を等分する柱穴は20～30cm、深さ28cmを測る。第11期もしくは第12期の須恵器高杯脚部片（478）が出土している。

SB20021（図版68、写真図版89～95）

調査区の北東隅付近で、SH20049を切り、SH20047・20048に切られた状態で、建物の南端だけが検出された建物である。大半が調査区外となり全体の規模や建物構造等ははっきりしないが、柱穴の深さから、方位をＮ4.8°Ｅとし、身舎の南・東・西の３面に庇が付設された建物で、建物の南と西の外側に柵が設けられた建物と理解している。

身舎は梁行２間（5.8m）であり、桁行は調査区外となって不明である。妻中央の柱は妻通りの柱列に乗っている。柱穴は中央が不整形で長軸長70cm以上、東端が65×50cm、西端が円形で径65cmであり、中央が一回り大きくなっている。深さは西端が68cm、中央が64cm、東端が56cmである。柱穴内からは径20～25cmの柱痕跡が確認できた。

庇は南面が４間（10.7m）、東面と西面は１間（2.5m）以上であり、南面の柱間は約214cmの等間となっている。庇の身舎からの出は南面が232cm、東面と西面が256cmであり、東西面の出が南面の出より大きい。南面の柱配置は妻中央の棟持柱の背後となる柱穴は棟通りと揃うが、それ以外は身舎とは揃わず、桁通りにくる柱穴は柱一本分内側となっている。それによりできた間を２等分している。庇の柱穴は方形ないし楕円形で、大きさは50～80cmを測る。南面では両端の庇隅柱の柱穴が大きく、その間はやや小型の柱穴となっている。東面の柱穴は隅柱の柱穴とほぼ同規模である。柱穴の深さは南西隅の柱穴が65cmと深く、その他は20～35cmとなっている。身舎の柱穴よりは浅く掘られている。柱穴内からは径20～25cmの柱痕跡が確認されており、身舎の柱痕跡との間に大きな差はない。

庇の南面と西面の外側には、庇との間隔112cmを空けて並行する柱穴列が存在する。柱穴列は南北１間以上（2.6m以上）、東西４間（10.2m）であり、東西の柱間隔は256cmであり、南北方向の柱間とほぼ揃っている。柱穴列の南西隅は身舎・庇の南西隅柱を結ぶ線の延長上にほぼ揃い、庇の隅柱との間隔は約160cmを測る。この柱穴列を構成する柱穴の大きさは南西隅の柱穴と西面の柱穴が不整形ではあるが約60cmと大きく、南面の柱穴が40cm前後と小さくなっている。深さは30～55cmを測る。この柱穴列と建物との関係は不明と言わざるを得ないが、柱穴列が建物と並行していること、隅が建物南西隅の延長上にあることから、建物と有機的な関係を持つものと考えられる。しかし東端が庇とは揃えられていないことから、建物を取り囲む柵状の施設と考えている。

SB20022（図版66）

SH20036を切り、SH20037に切られた状態で検出された屋内棟持柱を持つ総柱建物跡である。方位をＮ３°Ｅとし、桁行３間（6.0m）・梁行３間（5.2m）、面積31.2㎡を測る。

棟持柱は北側棟持柱が北妻から80cm内側に、南棟持柱が南妻から95cm内側に入った位置に配され、棟持柱間は525cmを測る。棟持柱と桁間は北棟持柱が東西桁とは260cmを測り、ほぼ中央となっている。南棟持柱の柱穴はやや西にずれているが、梁行の中央である260cmは柱穴内におさまることから、東西桁のほぼ中央に配されているものとみられる。

棟持柱以外の柱穴は径30～60cmとばらつきが大きく、深さも20～40cmとばらつきが大きい。また側を構成する柱穴と内部を構成する柱穴との間には大きな差は認められない。

第10期の土師器甕口縁部片（479）が出土している。

SB20023（図版60）

北側半分を圃場整備により消失してしまったものとし、方位をＮ55°Ｅとする、桁行２間以上（3.5m）・梁行１間（約4.2m）、床面積14.7㎡以上の側柱建物として復元しているが、棟持柱を有しない建物としては梁行が広すぎ、疑問も残る。柱穴は円形で、径30～40cm、深さ32cmを測る。柱穴内に径20cmの柱痕跡が確認されたものも存在する。

SB20024（図版８）

調査区の北端でSH20062を切って検出された建物跡である。２本の柱穴だけが確認されており、全体の規模や形状は不明である。２本の間隔は2.8mであり柱穴の大きさは一辺40～60cm・深さ27～47cmを測る、比較的大型の部類に属する。

柵列

SA20001（図版８）

SB20008の西側に検出された南北方向の柵で、P30879・30883～30888を結ぶ。SH20025を切り、竈を持つSH20027とも切りあっていたと思われるが、直接的な切り合いがなく、前後関係は不明である。柵の方位はＮ1.5°Ｗで、SB20008とは1.50mの間隔を開けて並行する。南北６間分（14m）に渡って設けられており、柱間隔は220～265cmと少しバラつきがある。柱穴は円形で、径32～50cm・深さ16～22cmを測る。

現地調査の段階では柱穴等の特徴から南北６間分と判断したが、南はP30667まで、北はP330967・30971・30977まで連続し、南北10間分（24.3m）が直線的な柵となる可能性もある。ただ、P30961・30971・30977の間隔が2.80mとなって、他の間隔に比べて広くなる。

またP30667と調査区の間は2.4mであることから、南端はさらに調査区外にも伸び、北端も圃場整備の削平による段までの距離が2.2mであることから、柱間からみてさらに北に延び、調査区をほぼ横断していた可能性も考えられる。

こうした推測が正しければ、この柵列から西側には大型掘立柱建物はみられないことから、棟持柱をもつ大型の建物で構成された一画を区画する柵の可能性も考えられる。

土壙群

SK20002（図版69）

SH20009の南東隅に接するようにして検出された土壙である。長軸1.42m・短軸1.08mの楕円形を呈し、深さは33cmを測る。埋土の観察では西端に上部からの切込みが確認でき、平面形も西端が出っ張った形状を呈していることから、柱穴と切り合っていた可能性が高い。埋土は黒褐色から灰黄色の極細砂であった。

SK20010（図版69）

SH20009の南側で検出された径約1.0mの円形の土壙である。深さは約20cmを測り、埋土は下層に青灰色の礫を多く含む層であり、その上面は不自然に凹凸があり、埋め戻された可能性が考えられる。土壙の上面から第１期の弥生土器甕（489）が出土している。

SK20012（図版８）

SH20020を切って検出された長さ3.0m・90cm・深さ24cmの不整形な土壙である。東端が出っ張った形状であり、柱穴と切りあっている可能性がある。埋土は黒褐色極細砂の一層であった。第８期の須恵器器台片（490）と土師器甕口縁部（492・493・494）・高杯脚部（491）が出土している。

SK20016（図版69）

SH20009の南西隅付近で検出された不整形な円径の土壙である。北壁側が２段に掘られ、上段は東西1.7m・南北1.45m・深さ10cmを測る。北壁から27cm内側から下段が掘られ、下段は南北1.15m・東西1.7mの楕円形を呈し、深さは15cmを測る。したがって土壙全体の深さは25cmを測る。埋土は黒褐色極細砂の一層であった。土壙の底からやや浮いた状態で、第１期の弥生土器甕（495・496）が出土している。

SK20017（図版８）

SH20023の東側で検出された不整形な楕円形の土壙であり、長軸1.5m・短軸1.1m・深さ15cmを測る。埋土は黒褐色極細砂の一層であり、土壙の底からやや浮いた状態で、第12期の須恵器杯（497）が出土している。

SK20026（図版70、写真図版101）

SB20007・20012・20013に切られた状態で検出された隅丸方形の土壙である。一辺約1.5m、深さ13cmを測り、埋土は黒褐色極細砂の一層であった。土壙上面から第４期古相の弥生土器壺（498～500）・甕（501）・手焙り形土器（502）が出土している。

SK20033（図版70）

調査区の南東隅付近で検出された不整形な土壙で、長軸2.15m・短軸1.15m・深さ22cmを測る。土壙底は中央付近で段状となって西側が高くなっており、形状からも２基の土壙が切りあっていた可能性が高い。埋土は黒褐色極細砂の一層であり、切りあいは把握できなかった。土壙の上面から比較的多くの土器が出土したが、図化できたものは第４期の弥生土器甕口縁部（503）・底部（504）であった。

SK20034（図版42・72）

SH20046の東壁沿いに検出された長方形を呈する土壙である。南端は攪乱によって切り取られており、全体の規模は不明であるが、長辺1.7m以上・短辺1.2m・深さ29cmを測る。土壙底は中央南よりが深く、その部分に向かって縁辺から下がっていく形状となっている。埋土は黒褐色シルト質極細砂と灰黄色細砂であった。

SK20035（図版71、写真図版101）

SB20005に切られた状態で検出された不整形な土壙で、北端は圃場の段落ちで切られ消失している。形状が極めて不整形なため規模も場所によって異なるが、大略長軸2.05m・短軸1.65m・深さ15cmを測る。埋土は黒褐色シルト質極細砂の一層であり、内部から礫とともに第4期新相に属する土師器甕（505～510）・高杯（512）・鉢（513～515）が出土している。

SK20036（図版72）

調査区の北東隅付近で検出された長方形の土壙で、規模は長辺1.65m・短辺1.3m・深さ25cmを測る。埋土の上層は灰褐色、下層は黒褐色を呈する細砂であり、内部に礫が含まれていた。

弥生土器甕（516）が出土している。

SK20037（図版71）

調査区北東隅付近の北壁際で、SH20047・SH20048に切られて検出された土壙である。調査区外に伸びており、全体の形状は不明であるが、検出できた部分での規模は東西1.65m・南北0.65m以上・深さ25cmを測る。埋土は黒褐色シルト質極細砂の一層であり、床面からは浮いた状態であったが壁際から第4期に属する弥生土器壺（518）・甕（517）が出土している。

SK20038（図版48・72）

SH20060に切られて、SH20060の床面から検出された楕円形の土壙である。SH20060に切られたSH20061の西壁の延長が土壙の傍になることから、SH20061の屋内土壙の可能性もあるが、確認できないため、別個に扱っている。土壙の規模は長軸80cm・短軸70cm・深さ20cmを測る。埋土は黒褐色極細砂の一層であり、土師器椀（519）とミニチュア土器（520）が出土している。

SK20039（図版48・72）

SK20038と同様、SH20060に切られ、SH20060の床面から検出されたやや楕円形の土壙であり、規模は長軸90cm・短軸80cm・深さ10cmを測る。土壙底は中央が膨れた形状となり、埋土は地山土を含む黒褐色細砂一層であった。須恵器高杯（521）が出土している。

SK20040（図版48・72）

SK20038・20039と同様、SH20060に切られ、SH20060の床面から検出された円形の土壙であり、規模は径70cm・深さ23cmを測る。埋土は大きく二層に分かれ、上層は黒褐色シルト質極細砂、下層は灰黄褐色シルト質極細砂であった。

SX20003（図版72）

長さ86cm・幅20cm・深さ11cmの細長い形状を呈する土壙である。断面は逆台形であり、壁が焼土化している。埋土は黒褐色のシルト質極細砂一層であったが、内部に焼土や炭化物が含まれていた。

SX20004（図版48・72）

長さ96cm・幅25cm・深さ13cmの細長い形状を呈する土壙である。断面は半円形を呈する。埋土の最上層は炭化物と焼土の混層であり、下層は黒褐色のシルト質極細砂であった。第14期の須恵器杯（543）土師器甕（544）が出土している。

溝群

SD20001

SH20032に切られた状態で検出された幅60cm・深さ９cmの溝である。等高線とほぼ並行してSH20032から東に約８m伸び、削られた形で途切れていた。埋土は粗い砂や礫を含む黒褐色シルト質極細砂一層であった。内部から第１期の壺（522）と甕（523）が出土している。

SD20004（図版73）

SB20005を切られた状態で検出された、等高線と直交して南北走向する溝である。幅80cm・深さ20cmを測り、断面は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルト質極細砂一層であった。埋土から土師器甕（524）が出土している。

SD20005（図版73）

調査区東壁際で検出された南北走向の溝で、南端は東に屈曲して調査区外に伸びる。幅約70cm・深さ10cmの浅いもので、断面は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルト質極細砂一層であったが、礫の集中する箇所がみられた。埋土からは第２期の弥生土器壺（526）・底部（525）が出土している。

SD20006（図版73）

SB20019に切られた状態で検出された南北走向の溝で、長さ約５mに渡って検出された。幅70cm・深さ17cm、断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色シルト質極細砂一層であり、一部から土器が集中して出土している。出土した土器は弥生土器甕（527～529）・器台（530）であり、第４期新相に属する。

SD200011（図版73）

第１・２次調査区内を少し蛇行しながら南北走向する溝で、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に切られるが、溝が切った竪穴住居跡や掘立柱建物跡は検出されていない。溝は長さ約36mに渡って検出され、幅は1.5～3.0m、深さは北端で45cm、南端で30cmを測る。埋土は黒褐色極細砂が基本であり、深い部分ではその下に褐灰色極細砂・灰黄褐色極細砂の堆積がみられた。第４次本発掘調査では検出されていない。

埋土中より弥生時代中期の壺（531・532）・甕（533・534）、土師器甕（535）等が出土している。

第３節　Ⅲ区の遺構

１．概要

東端を与布土15号線の東法面裾、西端を農業用排水路とする東西約113m、幅37.7ｍの調査区であり、道路排水路に伴って実施した第５次本発掘調査の調査区が南東隅に飛び出した形で取り付く。調査前の現況は圃場整備によって、南端、中央、北端と段をなして低くなる３枚の水田に整備されていた。

このため、遺構面には調査区南壁から約1.5ｍの位置には東西に高さ約15cmの段が、北壁から約6.5ｍの位置には最高約30cmの段が形成されていた。遺構面の標高は南西側が高く約110.7m、北東側が約110.1ｍと低く、標高差約0.6ｍとなっている。遺構面を形成する土層は基本的には黒褐色ないし紫黒色を呈する極細砂～細砂であり、Ⅱ区と変化はない。遺構面までの土層はほとんどが圃場整備による盛土であった。

検出された遺構は竪穴住居跡36棟、掘立柱建物跡10棟、土壙６基、溝６本、柱穴631個と多いが、Ⅱ区に比べると遺構密度は低くなり、特に調査区西半は遺構密度が低くなって空白域が多くなっている。この空白域は削平により遺構が消失した可能性もあるが、遺構面が一段高く遺存していた部分でも遺構は少なく、この区域は本来から遺構が少なかったものと思われる。

竪穴住居跡はすべて古墳時代のものであり、弥生時代に属するものはみられない。竪穴住居の平面形はすべて方形であり、一辺が７ｍを超えるような大型のものと、４ｍ未満の小型のものが存在している。また竈が設けられたものが13棟と1/3以上を占め、その内、西壁際に設けたものが11棟と大多数である。掘立柱建物跡は大型のものは存在せず、小型のものだけが存在している。

これらの遺構は調査区南壁中央付近から調査区北東隅を北走向するSD30001の両岸で検出され、一部SD30001の埋没した肩を切るものも存在するが、基本的にはSD30001を避けて営まれている。SD30001の途中から分岐する形のSD30004は、その上面にも竪穴住居等が営まれており、完全に埋没した後に集落の営みが開始されたことが窺える。

２．遺構

竪穴住居跡

SH30001（図版77～79、写真図版104）

調査区西端で検出された方位をＮ12.5°Ｅとする竈が付設された竪穴住居跡である。後世の溝によって分断されているが、住居跡規模は東西5.4ｍ、南北5.8ｍで、床面積は31.3㎡を測る。壁は最高18cm遺存し、壁溝は設けられていない。床面中央の炉は溝により半裁されているが、円形で径約50cm・深さ６cm、底が焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径40～60cm・深さ20～50cmを測る。柱穴の内部には径約20cmの柱痕跡が確認された。竈は西壁際に設けられ、竈の規模は奥行き約1.25ｍ、幅約60cmを測る。袖部は最高16cmが遺存し、壁の一部は焼土化していた。焚き口の幅は約65cmであり、床面は奥壁に向かって徐々に上がり、奥壁は急激に立ち上がる。竈の中央には支脚として裾部を打ち欠いた高杯を逆転した状態で据えており、周辺から甕の体部片が出土している。この高杯の前面から焚き口の付近の床面が焼土化していた。竈反対側の東壁際中央には屋内土壙が設けられていた。屋内土壙は２段に掘られ、１段目は長軸1.0ｍ・短軸0.65ｍの規模で、長軸を壁に並行させ、深さ13cmまで掘られて

いた。２段目は１段目の中央を径55cmの円形に深さ25cmまで掘られており、屋内土壙全体の深さは38cmを測る。屋内土壙の南側には床面からやや浮いた状態であったが、白色粘土が置かれていた。竈横の床面には土師器甑（579）が、屋内土壙南側には土師器甕（564）・高杯（573）・鉢（576・577）が遺存していた。第９期に相当するものである。

SH30002（図版77～79、写真図版104）

SH30001とは約1.5ｍの間隔で東に並行して検出された竪穴住居跡で、北壁をSH30001の北壁と揃えており、両住居跡には有機的な関連が考えられる。住居方位はＮ11°Ｅとし、竈が付設された竪穴住居跡である。平面形は方形を呈し、住居規模は南北4.2ｍ・東西4.65ｍ、床面積19.5㎡を測る。SH30001より一回り小型の竪穴住居跡である。壁は最高約10cm遺存し、壁溝は設けられていない。主柱穴は４本であり、柱間隔は東西が2.4ｍ、南北1.4ｍと、東西に長い配置を採っている。柱穴は径15～32cm・深さ15～17cmであった。竈は西壁際に設けられ、袖部は最高14cmが遺存していた。竈の規模は奥行き約0.9ｍ、幅約62cm、焚き口の幅約62cmであり、床面は奥壁に向かって徐々に上がり、奥壁は急激に立ち上がる。竈の中央には支脚として川原石を立てていた。川原石は幅約10cmであり、床面に小穴を穿って立て、床面からの立ち上がりは15cmであった。支脚の周辺から甕の体部片が出土している。竈前面の床面にも川原石が廃棄されており、これらの石は竈焚き口に使用されていた可能性がある。内部からは第９～10期の須恵器壺（580）・甕（581）、土師器甕（582・583）・鉢脚部（584）・甑（585）、製塩土器（586～590）が出土している。

SH30003（図版80、写真図版105）

SH30004・30007・30025を切った状態で検出された、方位をＮ6.5°Ｅとする、竈が付設された竪穴住居跡である。平面形は方形を呈し、住居規模は南北6.3ｍ・東西6.5ｍ、床面積41㎡を測る。壁は最高10cm遺存していた。東壁から南壁、西壁南端の壁下には幅13～23cm・深さ６cmの壁溝が設けられていた。床面中央のやや東よりに径約45cm・深さ約16cmの土壙が検出された。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径30～33cm・深さ20～25cmを測るが、柱穴の検出のため床面をかなり掘り下げており、本来の柱穴の深さは40cm近くあったものと思われる。竈は西壁際に設けられ、竈の規模は奥行き100cm、焚き口幅70cmを測り、壁は12cmが遺存していた。竈とは反対側の東壁際中央には長軸を壁と並行する方向に置いた、長軸1.2ｍ・短軸0.9ｍ・深さ32cmの屋内土壙が設けられていた。

竈南側の床面上からは小形の鉢形土器がまとまって出土した他、第11期の須恵器杯（591）、土師器高杯（592～597）・鼈形土器（598）、ミニチュア土器（599～604）、製塩土器（605～607）が出土している。

SH30004（図版81、写真図版105）

SH30003・30025に切られた状態で検出された方位をＮ22.5°Ｅとする竪穴住居跡である。平面形は長方形を呈し、住居規模は南北7.1ｍ・東西7.2ｍ、床面積51.1㎡の大規模な住居跡である。壁は最高13cmが遺存していたが、北壁側は僅かに痕跡が残る程度であった。壁下には壁溝が全周して検出され、壁溝は幅12～28cm・深さ１～７cmを測る。この壁溝と約30cmの間隔で、内側に並行する壁溝状の細溝が検出されており、この住居跡は一度拡張されたものと思われる。床面中央はSH30025により壊され、中央の炉や主柱穴は検出できなかった。第10期頃の土師器甕（608・609）・高杯（610）が出土している。

SH30005

SH30003の南東側で検出された竪穴住居跡で、SH30003とは20cmほどの間隔であり、上部構造は切りあっていた可能性が高いが、直接的な切りあいがなく、前後関係は不明である。ただ出土遺物から見ればSH30004より先行するものである。住居方位をN43.5°Wとし、住居規模は南北3.65m・東西3.75m、床面積13.7㎡を測る。壁は最高20cm遺存し、南壁下と西壁下の南半には壁溝が設けられていた。壁溝は幅13cm・深さ10cmを測る。主柱穴は4本であり、柱穴の大きさは径20～33cm・深さ15～25cmを測る。南壁際の中央には屋内土壙が設けられており、土壙の平面形は不整形でU字形状を呈するが、長軸55cm、壁溝と取り付く部分の幅は50cm、深さは20cmを測る。住居跡の埋土には多くの礫が含まれ、埋められたものと思われる。西壁際の中央からやや北寄りの位置から土師器甑（642）が正位置で立てられた状態で出土しており、埋め戻しの際に置かれた可能性が高い。この他、住居跡からは第9期の須恵器杯（621）・甕(624)・器台（622・623)、土師器壺（632・633)・甕（624～631)・高杯（634～641)、陶質土器甕（643）が出土している。

SH30006（図版83、写真図版107）

SH30003・30006・30007・30008・30023の5棟が切りあった状態であったため、切りあい関係の把握や個々の住居跡の検出が困難で充分な調査を行い得ていないが、この住居跡はSH30007・30008を切った状態であると認識している。住居方位をN27°Eとし、西壁際に竈が付設されていた。平面形はやや歪な方形を呈し、住居規模は南北4.6m・東西4.7m、床面積21.6㎡を測る。壁は最高17cm遺存していた。南壁と東壁の壁下には幅12～26cm・深さ4～7cmの壁溝が設けられていた。主柱穴は北側の2本が検出されたが、南側の2本は検出できなかった。柱穴の大きさは径31～35cm・深さ14～21cmを測る。竈は西壁際に設けられ、竈の規模は奥行き約85cm、焚き口幅約45cmであり、壁は約15cmが遺存していた。中央には幅5cmの方柱状の川原石を立て、支脚としていた。支脚は竈床面に径10cmの小穴を穿って、その中に立てていた。支脚の床面からの立ち上がりは13cmを測る。床面は焚き口から奥側50cmまでは平らで、そこから奥壁側は屋外に向かって高くなり、煙道が屋外に7cm伸ばされていた。焚き口から支脚までの間の床面に焼土化が認められた。内部からは第9期の須恵器器台（644）や土師器壺（645・646)・高杯(647～649)・椀（650)、製塩土器（651）が出土している。

SH30007（図版83、写真図版108）

SH30008を切り、SH30003・SH30006に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。方位をN3°Wとし、平面形は歪な方形を呈する。住居規模は南北6.5m・東西6.1m・床面積39.7㎡を測る。壁は最高約25cm遺存し、北東隅部と西壁南半を除く壁下には壁溝が設けられていた。壁溝は幅10～18cm・深さ6cmを測る。主柱穴は判然としないが、床面から2本の柱穴が検出されており、主柱穴の内の南側2本となる可能性がある。柱穴の大きさは径35～48cm・深さ20～30cmを測る。第6期の土師器甕（652)・高杯(653・654)・器台（655）が出土している。

SH30008（図版84、写真図版108）

SH30023を切り、SH30006・SH30007に切られた状態で検出された、方位をN19°Wとする竪穴住居跡である。平面形は東西に長い長方形を呈し、住居規模は南北5.3m・東西6.3m、床面積33.4㎡を測る。壁は最

高13cmが遺存し、北西隅部と北壁東半を除く壁下には壁溝が設けられていた。壁溝は幅10～26cm・深さ3～10cmを測る。床面上からは柱穴4個と浅い土壙が検出された。柱穴の内、主柱穴とみられるのは3本であり、南東隅の主柱穴は検出できなかった。また北東隅の主柱穴としてP30430を該当させているが、内側のP30431になる可能性もある。柱穴の大きさは径23～33cm・深さ8～10cmを測る。床面のほぼ中央から長軸1.15m・短軸0.95m・深さ10cmの不整形な土壙が検出されている。床面上には第5期の土師器甕（656・657・659・660・668)・高杯（670)・器台（671)・椀（674）が遺存していた他、(658・661～667・669・671～673・675～677）までの土師器類が出土している。

SH30009（図版85、写真図版108・109）

SH30010を切った状態で検出された、方位をN4°Wとする竪穴住居跡である。平面形は方形を呈し、住居規模は南北6.0m・東西5.4m、床面積32.4m²を測る。壁は最高15cm遺存していた。壁下に壁溝は設けられていなかった。床面の中央は径80cmの範囲が浅い皿状に窪み、内部に焼土が2ヶ所で検出された。窪み内には灰や炭化物が堆積し、中央炉と思われる。主柱穴は4本であり、柱穴の大きさは径28～40cm・深さ25～45cmを測る。竈は西壁際に設けられ、竈の規模は奥行き約75cm、焚き口幅約42cmであり、袖部は13cmの高さまで遺存していた。第16期の須恵器杯（678）が出土している。

SH30010（図版86、写真図版109）

SH30009に切られた状態で検出された、方位をN14.5°Eとする竪穴住居跡である、平面形は方形を呈し、西壁中央に竈が設けられていた。住居規模は南北7.0m・東西6.3m、床面積44.1m²を測る。壁は最高30cmが遺存し、北壁下には壁溝が設けられていた。壁溝は幅12cm・深さ13cmを測り、断面はV字形を呈す。床面中央の2ヶ所では中央炉が検出され、北側のものは歪な円形を呈し、大きさは径40cm・深さ6cmを測る。南側のものは楕円形を呈し、長軸35cm・短軸20cm・深さ5cmを測る。ともに内部から肩部周辺の床面が焼土化していた。主柱穴は4本であり、柱穴の掘形は楕円形及び円形であり、大きさは長軸が47～55cm・深さ41～62cmを測る。内部に径15cmの柱痕跡が確認された。竈は西壁際に設けられ、竈の規模は奥行き約1.15m、焚き口幅約60cmであり、壁は約18cmが遺存していた。竈の奥からは煙道が屋外に向けて50cm伸び、そこから先はSH30009に切られていた。東壁際中央には楕円形の土壙と不整形な土壙が検出され、土壙と壁の間からは土器類が落ち込んだ状態で出土している。楕円形の土壙は長軸70cm・短軸52cm・深さ24cmを測る。不整形な土壙は楕円形の土壙2基が切りあったような形状を呈するが、断面観察でも切りあいは確認されていない。長軸1m・深さ27cmを測る。竈前面左側の床面や屋内土壙と東壁の間から、第10期古相の須恵器杯（679～681)・甕（682)、土師器甕（683・684)・壺（685)・高杯（686)、製塩土器（687･688）が出土している。

SH30011（図版87、写真図版110）

SH30010の南側で検出された方位をN3.5°Eとする方形の竪穴住居跡である。住居は一度拡張が行われており、当初の住居規模は南北5.9m・東西5.35m、床面積31.6m²、拡張後は南北6.25m・東西6.05m・床面積37.8m²となっている。床面は拡張後が拡張前より10cm高く、拡張後の壁は約20cmが遺存していた。したがって、拡張前の壁の高さは約30cmとなる。拡張前・拡張後も壁溝は認められなかった。床面は中央から北西側に昭和52年度の確認調査坑があり、これにより中央炉の北半は消失していた。遺存

していた中央炉は東西90cm・南北50cm以上・深さ８cmの土壙状に窪み、その内部の20cmの範囲が焼土化していた。柱穴は２個が一対となった状態で８個が検出され、拡張に伴い柱穴も外側に配置し直されたことが窺える。当初の主柱穴４本は南北2.6m・東西2.0mの柱間隔で配置され、柱穴の大きさは径23～30cm・深さ25～40cmを測る。拡張後の主柱穴は南北3.35～3.65m・東西３mの間隔で配置され、柱穴の大きさは20～43cm・深さ10～15cmを測る。拡張前の東壁際中央には２段に掘られた屋内土壙が設けられており、土壙の規模は上段が東西・南北とも１m、深さ９cmを測り、下段は内部の径60cm・深さ17cmを測り、上段底面の南西隅に設けられている。屋内土壙の周囲には最大16cmまでの礫を使用した礫敷が施されていた。第８期古相の土師器壺(691～695)・甕(689～690)・高杯(696～698)、土製紡錘車(699)が出土している。

SH30012・SH30022（図版88、写真図版110）

調査区中央付近の南端で検出された竪穴住居跡であり、SH30022を外側に拡張したものがSH30012であるが、SH30022からSH30012にかけては４回の改築・拡張が行われている。この内、３回目の拡張は床面を埋めて外側に拡張しており、床面が一段高くなっている。この床面が一段高くなった段階以降をSH30012としている。

SH30022は長方形２本柱を構造で、方位をＮ23°Ｅとする。当初の住居規模は南北5.05m・東西4.2m、床面積21.2m²を測る。その後、北側に２回拡張されているが、両方とも壁溝一本分ほどが拡張されたにすぎず、1回目の拡張で南北5.2m・床面積21.8m²、２回目の拡張で南北5.3m・床面積26.8m²となっている。壁は最高12cmが遺存していたが、SH30012の壁を合わせると当初の壁は25cm程度となる。南壁と西壁南端の壁下を除く壁下には壁溝が設けられており、壁溝は当初が幅18cm・深さ６cm、1回目の拡張に伴う壁溝が幅７cm・深さ５cm、２回目の拡張に伴う壁溝は幅７～20cm・深さ５～９cmを測る。床面では主柱穴２本、台石、焼土が検出された。主柱穴は中央の２本であり、２回の拡張時においても主柱穴は当初のままとしている。主柱穴の柱間隔は２mを測り、柱穴の大きさは径42～50cm・深さ27～46cmを測る。焼土は南主柱穴の南東側の床面上と中央から西よりの床面上で確認された。北側主柱穴南側の焼土はSH30012に伴う可能性が高い。台石は北側主柱穴の東側と西壁際で確認された。第６期の土師器壺(704)・甕（705・706)・鉢（707・708)・椀（709)・山陰型甑（710・711）が出土している。

SH30012はSH30022の３回目と４回目の拡張にあたり、３回目の拡張は南北と西側に行われて、住居規模は南北6.6m・東西5.25m・床面積34.7m²となり、平面形は長方形となる。4回目の拡張は東側に行われて、住居規模は東西5.85m・床面積38.6m²となって、平面形は隅丸方形に近くなる。床面はSH30022より浅くなり、壁は13cmが遺存していた。南東・南西の隅を除く壁下には壁溝が設けられており、３回目の拡張に伴う壁溝は幅12～25cm・深さ６～10cm、４回目の拡張に伴う壁溝は幅15cm・深さ６cmを測る。床面上からは主柱穴４本、焼土、黄色粘土、台石が検出され、主柱穴は３回目の拡張から４本となる。主柱穴の間隔は東西・南北とも2.35mであり、柱穴の大きさは径約20～55cm・深さ35～40cmを測る。４回目の拡張に伴う主柱穴は３回目の主柱穴がそのまま使用されたものと考えているが、南側２本の主柱穴に並行する柱穴が外側に存在しており、これらが４回目の主柱穴になっていた可能性は考えられる。台石は南東隅の床面上で確認されている。第６期の土師器壺（702～703）・甕（701）・鉢(700)が出土している。

SH30013（図版89、写真図版111）

方位をＮ39.5°Ｅとする竈付きの竪穴住居跡である。平面形は方形を呈し、住居規模は一辺3.95m、

床面積15.6㎡を測る。壁は25cmが遺存し、壁溝が設けられていない。床面のほぼ中央は長軸1.75m・短軸1.05mの楕円形に窪み、その上面で焼土が確認された。焼土の範囲は径約65cm・深さ約８cmであり、中央炉と思われる。主柱穴は４本で、柱穴の大きさは径30cm・深さ30～40cmを測る。柱穴の内部には径15～17cmの柱痕跡が確認された。竈は西壁際中央に設けられ、奥行き75cm・焚き口幅45cmを測る。壁は11cmが遺存し、中央には床面から３～５cm浮いた状態で焼土が認められた。竈北側の住居北西隅付近からは長軸65cm・短軸45cm・深さ７cmの楕円形を呈する土壙が検出されている。竈北側から土師器椀（712）が出土している。

SH30014（図版89、写真図版111・112）

SH30019の南側で検出された方位をN35°Eとする竈付きの方形竪穴住居跡である。住居規模は南北4.5m・東西4.0m、床面積18.0㎡を測り、壁は最高20cm遺存していた。壁溝は設けられていない。床面の中央には長軸45cm・短軸25cmの不整形な楕円形を呈する中央炉があり、内部から周囲の床面までが焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径30～35cm・深さ25～41cmを測る。柱穴の内部には径15～18cmの柱痕跡が確認できた。竈は西壁際中央に設けられ、奥行き85cm・焚き口幅45cmを測る。壁は15cmが遺存し、中央から焚き口にかけての範囲が焼土化していた。竈とは反対側の東壁際中央には壁と並行に屋内土壙が設けられ、土壙の規模は長軸68cm・短軸26cm・深さ18cmを測る。
内部からは第12期の須恵器杯（713）が出土している。

SH30015（図版90、写真図版112）

SH30019を切った状態で検出された、方位をN5.5°Wとする方形の竪穴住居跡である。住居規模は南北3.45m・東西3.6m、床面積12.4㎡を測る。壁は最高12cmが遺存していた。南壁下と西壁下、それに東壁の北半に壁溝が設けられており、壁溝は幅10～17cm・深さ５cmを測る。床面中央には径37cm・深さ５cmの中央炉が設けられており、内部は焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径26～35cm・深さ32～50cmを測る。北東隅部には楕円形の屋内土壙が設けられ、土壙の規模は長軸72cm・短軸67cm・深さ35cmを測る。第12期の須恵器杯（714）が出土している。

SH30016（図版91、写真図版112）

SB30011を切った状態で検出されたが、SB30011とSH30019・SH30020との切りあい関係からみると、本来はSB30011がこの住居を切っていたものと思われる。方位をN28.8°Eとし、住居規模は南北6.55m・東西6.85m、床面積44.9㎡を測る。壁は最高15cmが遺存していた。一部南壁下中央で途切れるが、壁下をほぼ全周して壁溝が設けられており、壁溝は幅10～25cm・深さ５～７cmを測る。東壁側で壁溝が二重になっており、拡張が行われたものと思われる。床面中央には中央炉と思われる焼土が３ヶ所で確認された。北側の中央炉は不整形な円形で径40cm・深さ３cm、東側の中央炉は長軸55cm・短軸38cmの楕円形の範囲が焼土化し、中央が僅かに窪む程度で掘り込みはみられない。これらの中央炉は床面から４cm浮いて検出されており、同じ面では中央から南西よりと西壁よりの床面で焼土が確認されている。南側の中央炉は北・東の中央炉の下層で検出され、径20cm・深さ３cmであり、底面が焼土化していた。床面からは多くの柱穴が検出されたが、この住居に伴う主柱穴は４本と考えている。主柱穴の平面形は南２本は円形、北２本は楕円径を呈し、大きさは南２本が径34～40cm・深さ36～42cm、北側２本が長軸47～55

cm・短軸36～40cm・深さ55cmを測る。柱穴内には径15～20cmの柱痕跡が確認された。屋内土壙は東壁際中央と北西隅の２ヶ所に設けられ、東壁際の土壙は径77cm・深さ17cmを測り、断面観察では東壁際に柱穴が重なっていることが確認された。北西隅の土壙は円形で、径72cm・深さ38cmを測る。この他、床面上では焼土が混じる黄色粘土塊が確認された。床面からは浮いた状態であったが、第９期と思われる須恵器壺（715）、土師器椀（716）、高杯（717・718）が出土している。

SH30017（図版90、写真図版113）

SB30008を切った状態で検出された、方位をＮ8.5°Ｅとする方形の竪穴住居跡である。住居規模は南北4.2m・東西3.6m、床面積15.1㎡を測り、壁は最高16cmが遺存していた。壁溝は壁下を全周して設けられており、幅７～12cm・深さ５cmを測る。床面中央には径40cm・深さ５cmの中央炉が設けられており、底面は焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径26～40cm・深さ15～25cmを測る。北西隅の柱穴の内部には径17cmの柱痕跡が確認された。屋内土壙は東壁際中央に設けられ、壁とはやや方向を違えているため台形状の平面形を呈し、長軸93cm・短軸70cm・深さ13cmの規模を測る。土壙内部の北壁際からほぼ完形の土師器甕(720)が横位置の状態で出土している。この他、床面上や床面から浮いた状態で川原石が認められた。先の土師器甕の他、第８期古相の土師器壺(723)・甕(721)・高杯(724～726)が出土している。

SH30018（図版92、写真図版113）

SD30004を切った状態で検出された、方位をＮ10°Ｅとし、方形の竈付き竪穴住居跡である。住居規模は南北4.7m・東西4.8m、床面積22.6㎡を測る。遺存状況は悪く、壁は最高でも７cmが遺存していたにすぎない。特に竈が設けられた西壁はほとんど遺存せず、遺構検出面で竈床面の焼土が検出される状況であった。壁溝は設けられていない。床面の中央から東よりの位置には楕円形を呈する中央炉が設けられ、中央炉の大きさは長軸55cm・短軸45cm・深さ５cmを測り、内部が焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径25～43cm・深さ36～51cmを測る。竈は西壁際の中央に設けられ、袖部はほとんど遺存していなかった。住居の西壁や焼土の範囲から、規模は奥行き70cm、焚き口幅70cmを想定しているが、もう少し外に伸びていた可能性が考えられる。焚き口の床面は焼土化し、焚き口前には炭化物が多く認められた。遺存状況が悪いこともあり、図化できるような遺物は出土していない。

SH30019・30036（図版93、写真図版114）

SH30020・SH30015、SB30011に切られた状態で検出された方位をＮ23.5°Ｅとする方形の竪穴住居跡である。SH30019内部の中央から南寄りにおさまる形でSH30036があり、切りあいとも考えられるが、壁がほぼ並行することから拡張と捉えている。

SH30036は住居規模が南北4.85m・東西5.0m、床面積24.3㎡を測り、SH30019の内部ということで、壁は最高３cmが遺存していたのみである。壁溝が北壁際にだけ設けられており、幅10～25cm・深さ３cmを測る。床面は硬化し、中央には中央炉が設けられていた。中央炉は径95cm・深さ３～５cmの浅い窪みであり、内部の２ヶ所に焼土が認められた。この窪みに切られる形で西側には径50cm・深さ２cmの窪みが検出されており、これも中央炉になる可能性がある。主柱穴は４本で、径26～40cm・深さ30～55cmを測る。南東隅だけが楕円形を呈し、その他は円形を呈する。深さは北側２本が浅く、南側２本が深くなっていた。北西隅を除く柱穴内には径16～24cmの柱痕跡が確認された。屋内土壙は東壁際中央に設けられ、

土壙規模は長軸75cm・短軸60cm・深さ25cmを測る。この他、北西隅付近では焼土を含む径35cmのピットが検出され、周囲の床面の一部が焼土化していた。SH30019との遺物の区別は困難であるが、第10～11期の土師器高杯（733～735）が出土している。

SH30019は東壁がSH30020との切りあいもあって検出できていないが、住居規模は南北6.5m・東西6.5m以上・床面積42.3㎡以上を測り、壁は最高25cmが遺存していた。SH30036を南へ約30cm、西へ約70cm、北へ1.3m、東へ80cm以上拡張した形となる。壁溝は設けられていない。中央炉はSH30036と同一場所とみられる。主柱穴についてはSH30036の主柱穴の外側に想定して検出に努めたが、深さ10～15cmの浅い柱穴３本が検出されただけであり、これらが主柱穴になりえるかどうかは判断できない。

第11期の須恵器杯（727)･高杯（728)、土師器甕（729・730)･高杯（731)･椀（732）が出土している。SH30036には甕がみられず、SH30019には良好な状態の高杯がみられない。

SH30020（図版94・95、写真図版114）

SH30019・SB30011に切られた状態で検出された、方位をＮ15.5°Ｅとする、竈付きの方形竪穴住居跡である。住居規模は南北7.3m・東西7.0m・床面積51.1㎡を測る大規模な住居跡であり、壁は最高11cmが遺存していた。竈部を除く壁下には壁溝が設けられ、壁溝は幅15cm・深さ５～６cmを測る。床面中央には長軸65cm・短軸55cm・深さ４cmの中央炉が設けられており、床面は焼土化していた。主柱穴は４本であり、大きさは径30～42cm、深さは13～28cmを測る。柱穴の内部には径13～15cmの柱痕跡が確認された。柱間隔は南北3.65m・東西3.75mを測る。竈は北壁際の中央に設けられ、奥行き1.2m・焚き口幅60cmであり、壁は12cmの高さまで遺存していた。焚き口は深さ４cmに浅く窪んで、内部に焼土が充満し、焚き口の壁は焼土化していた。袖は上部幅が10cmであり、1.1mの長さまで遺存していた。竈内部から土師器甑（750）が出土している。竈の北側に接して不整形な屋内土壙が設けられ、土壙の規模は約１m・深さ20cmを測る。土壙底からは浮いた状態であるが土師器甕（743)･壺（740)･高杯（745）が出土している。床面上では他に、南東主柱穴横で長軸50cm・短軸40cm・深さ３cmの掘り込みを伴う焼土が検出され、竈前面にはSK30014が検出されたが、本住居に伴わないものとして別項に扱っている。

床面上や屋内土壙から第10期の須恵器杯（736・737)･壺（738)･甕（739)、土師器壺（740)･甕（741～744)･高杯（745～748)･椀（749)･甑（750）が出土している。

SH30021・SH30026（図版96、写真図版115）

SD30001の南側で検出された方位をＮ7.5°Ｗとする方形の竪穴住居跡である。両住居跡の関係については明確ではないが、検出時には切りあい関係は確認できず、壁をそのまま延長したような形状であることから、SH30026を拡張したものがSH20021と捉えている。

SH20026は北西隅部を消失しているが、南北4.8m、東西5.55m・床面積26.6㎡の規模であり、壁は最高23cmが遺存していた。検出できた壁の壁下を全周して壁溝が検出され、壁溝は幅15～30cm・深さ６cmであった。床面上からは柱穴５個が検出されたが、配置から主柱穴となりえるものは３本であり、南東隅の柱穴は外にずれており、主柱穴ではない可能性が高い。主柱穴と思われる柱穴の大きさは径30cm・深さ17～26cmを測る。床面上から高杯（754）が出土している。この他、住居跡内からは第９期の土師器甕（752)･高杯（753～756)･椀（757・758）が出土している。

SH30021はSH30026を南側に約１m拡張したもので、住居規模は南北約6.55m・東西5.55m・床面積

36.4㎡を測る。壁は20cmが遺存し、壁下に壁溝はみられない。床面はSH30026に向かって緩く下がり、南西隅には屋内土壙が設けられていた。土壙の規模は径64cm・深さ36cmを測る。

SH30023（図版84）

SH30008に切られて検出された方位をN10°Wとする方形の竪穴住居跡である。住居規模は南北4.4m・東西2.0m以上であり、壁は最高14cmが遺存していた。遺存していた壁下には壁溝が全周し、壁溝は幅15cm・深さ5～7cmを測る。床面からは中央炉や主柱穴は検出できなかった。SH30008に付設された張り出し部の可能性もある。

SH30024（図版97、写真図版115）

圃場整備によって東壁から北壁を失っており、床面東端から東壁は攪乱壙によって壊されている。住居方位をN22.5°Wとする方形の竪穴住居跡である。住居規模は定かでないが、南北4.15m以上・東西5.0mの規模が想定される。壁は最高13cmが遺存し、南壁と西壁の壁下には壁溝が設けられている。壁溝は幅15～23cm・深さ2～5cmである。床面の中央には長軸65cm・短軸40cm・深さ3cmの中央炉が設けられており、中央炉の内部は焼土化していた。主柱穴は4本であり、柱穴の大きさは径27～40cm・深さ20～35cmを測る。南壁際の中央には屋内土壙が設けられ、土壙の規模は長軸70cm・短軸46cm・深さ16cmであり、長軸を住居壁に並行させて設けている。北西隅の主柱穴の外側には長辺60cm・短辺50cm・深さ20cmの土壙が検出されたが、これは住居に付随しないものである可能性もある。土師器壺(751)が出土している。

SH30025（図版81、写真図版105・106）

SH30004を切り、SH30003に切られた状態で検出された住居方位をN16.3°Eとする竪穴住居である。平面形はやや歪な方形を呈し、住居規模は南北5.15m・東西5.3m、床面積27.3㎡を測る。壁は最高25cmが遺存していた。東壁南半と竈部分を除く壁下には幅8～25cm・深さ2～6cmの壁溝が設けられていた。床面中央の中央炉は径32cm・深さ9cmを測る。主柱穴は4本と思われるが、南東隅の柱穴は検出できなかった。柱穴の大きさは径26～30cmを測り、深さは北西隅が19cmであったが、それ以外は極めて浅い。竈は西壁際に設けられ、南袖部が上手く検出できていないが、竈の規模は奥行き120cm、焚き口幅60cmを測る。壁は8cmが遺存していた。竈焚き口から高杯の杯部が逆転した状態で出土しているが、位置的には支脚の状態ではなく、支脚として使用されたものが動かされた可能性が高い。高杯の南側の狭い範囲が焼土化していた。

床面等から第9～10期の土師器甕（612・613）・高杯（614～617）・椀（618～620）が出土している。

SH30027（図版98、写真図版115）

SD30001の西側で、SH20039とは約70cmの間隔で並行するように検出された、方位をN38.5°Eとする方形の竪穴住居跡である。住居規模は南北5.7m・東西6.0m・床面積30.0㎡を測る。遺存状況は悪く、北東隅部を消失し、壁も最高6cmまでしか遺存していなかった。壁溝は設けられていない。床面中央には長軸40cm・短軸25cm・深さ8cmの不整形な楕円形の掘り込みを伴う中央炉が設けられており、中央炉の内部から周辺の床面が焼土化していた。主柱穴は4本であり、柱穴の大きさは径26～38cm・深さ30～40cmを測る。柱穴の内部からは径13cmの柱痕跡が確認された。東壁際とやや内側に入った位置から土壙3基が検出されている。SK30038は東壁際中央からやや東に寄った位置に設けられ、長軸75cm・短軸70cm・深さ10cmの規模である。SK30037はSK30038の北壁を切って設けられたもので、不整形であるが径

70cm・深さ20cmを測り、内部から土師器甕（761）が落ち込んだ状態で出土している。SK30018は住居壁からやや内側に入った、径63cm・深さ30cmの円形の土壙であり、土壙底は中央がやや膨れ、壁際が下がる構造になっていた。床面上や土壙内から第９期の須恵器杯（759)･甕（760)、土師器甕（761・762)・高杯（763～765）が出土している。

SH30028（図版99、写真図版116）

SD30001の西岸で検出された方形の竪穴住居跡である。方位をＮ9.5°Ｅとし、住居規模は南北3.65m・東西3.25m、床面積11.9m²の小形の住居である。壁は最高20cmが遺存していた。床面にはなんらの施設もなく、竪穴住居とは断定しがたいが、柱穴などを伴わない竪穴住居と考えている。第15期の須恵器杯(766)が出土している。

SH30029（図版99・100、写真図版116）

SD30001の西肩を切って検出されてはいるが、SD30001が完全に埋没後に営まれたものではなく、埋没途中の段階で営まれたものである。住居方位をＮ38°Ｅとし、平面形は方形を呈する。住居規模は南北・東西とも3.6m、床面積13.0m²を測る小形の住居である。壁は最高40cmが遺存していた。南壁を除く壁下には壁溝が設けられ、壁溝は幅10～13cm・深さ３～５cmを測る。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径24～35cm、深さは14～32cmを測る。竈は南壁際中央に設けられ、奥行68cm・幅52cmの大きさで、袖部は最高35cmまで遺存していた。両袖部とも焚き口の壁面は石で補強されていた。床面は焚き口から55cmまでは平らであり、35cmの位置に方形の石を立てて支脚としていた。支脚の石は床面を６cm掘り込んだ小穴に根元を入れて立てられていた。竈奥壁が７cm立ち上がったところに煙道が取り付き、屋外に55cmが伸びていた。煙道部は最大25cmの幅であり、奥壁との接合部では橋状に黄色粘土が確認されており、煙道が暗渠風になって取り付いていた可能性がある。支脚から焚き口側の床面や、袖部の壁面に焼土化が認められた。また竈の構築にあたっては円形状に２～３cm掘り下げた上で構築している。屋内土壙は竈の西側と竈とは反対側の北壁際の中央に設けられており、竈西側の屋内土壙は規模が大きく、竈の西袖部脇から南西隅部にまで至っている。長軸1.15m・短軸0.7m・深さ10cmを測る。北壁際の屋内土壙は北壁から5cmほど離れた位置に設けられ、大きさ径50cm・深さ28cmを測る。北壁際の屋内土壙から土師器高杯（773）が出土した他、竈周囲の床面等から第10期の須恵器甕腹片（767)、土師器甕（768・769)･壺（770)･高杯（771・772）が出土している。

SH30030（図版101、写真図版118）

SD30004の東岸で検出された竪穴住居であるが、削平により大部分の壁を失い、南壁と東壁南半がかろうじて検出された。検出できた壁から、住居の平面形は方形であり、住居方位はＮ14°Ｅを計測できる。住居規模については南北４m以上・東西3.8m以上としか計測できず、詳細な規模は不明である。壁は最高12cmが遺存し、床面が検出できた部分では壁溝は設けられていない。主柱穴は４本で、柱穴の大きさは径27～38cm・深さ22～52cmを測り、検出面からの深さでは、南２本が深く、北２本が浅くなっているが、底のレベルは109.4～109.45mの範囲にあり、ほぼ揃っている。また南側２本の主柱穴内では径17cmの柱痕跡が確認された。

SH30031（図版101・102、写真図版117）

調査区北壁にかかって検出された竈付きの方形竪穴住居である。住居方位をＮ23°Ｅとし、住居規模は南北3.7m以上・東西4.1m・床面積15.2㎡以上を測る。壁は最高12cmが遺存し、南壁下と東壁下には壁溝が設けられている。壁溝は幅15～22cm・深さ２～８cmを測る。中央炉は東西方向ではほぼ中央の位置に設けられているが、南北方向では中央から南に寄った位置に設けられていた。大きさは径40cm・深さ４cmで、底面が焼土化していた。主柱穴は４本であり、大きさは径30～45cm・深さ14～22cmを測る。柱穴内には径12～15cmの柱痕跡が確認できた。竈は西壁に設けられており、竈と住居南西隅の間は1.4mを測る。仮に西壁が東壁の3.7以上と同じ長さとすれば、竈は中央よりかなり南に寄った位置に設けられていることになる。中央炉も南に寄せられて竈正面にくる位置となっており、これには床面北半を広くとるような目的が考えられ、床面の使い分けがされていた可能性がある。

竈の大きさは奥行70cm・焚き口幅48cmを測り、奥壁が10cmほど住居壁の外側に出るような構造になっていた。袖部は最高20cmが遺存し、住居壁より８cm高く遺存していた。焚き口の袖部正面には頂部が10cm大の川原石を小穴を穿って袖石として立てていた。袖石の焚き口床面からの高さは19cmを測り、内に傾けて立てられていた。床面は平らであり、奥壁は急激に立ち上がる。焚き口から34cm入った床面には小穴を穿って頂部が７cmの川原石を立て、支脚としていた。支脚石の床面から高さは13cmを測る。焚き口床面と袖部内面壁は焼土化し、袖石の内面にも火を受けた痕跡が確認できた。竈焚き口には火を受けた川原石２個が袖石に連続するように廃棄されていた。この２個の石は接合でき、火が舐めた痕跡が確認できたことから、焚き口の天井石ではないかと、袖石に乗せたところ、一部欠損があるものの、焚き口幅と火を受けた痕跡が一致し、図版102のように竈焚き口が復元できた。復元できた焚き口は下幅43cm・上幅37cm・高さ18cmを測る。屋内土壙は東壁際の中央に設けられており、竈や中央炉のように南に寄せられてはいない。屋内土壙の大きさは径60cm・深さ13cmであった。床面上からは第９期の土師器壺（774）・高杯（775～778）が出土している。

SH30032（図版103、写真図版118）

調査区中央の北端で検出された方位を住居方位をＮ26°Ｅとする方形の竪穴住居である。住居規模は南北5.9m・東西5.55m・床面積32.7㎡を測り、壁は最高26cmが遺存し、西・北壁下と東壁北端下には壁溝が設けられていた。壁溝は幅13～25cm・深さ３～５cmを測る。床面のほぼ中央には中央炉が設けられており、中央炉の大きさは径40cm・深さ６cmを測る。底面は焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径25～35cm・深さ30～47cmを測る。柱穴内には径13cmの柱痕跡が確認された。屋内土壙は東壁際中央に設けられ、平面形は隅丸長方形、規模は長辺85cm・短辺75cm・深さ28cmを測る。

住居廃絶後には礫が多く投棄されていた。住居床面等から第９期の初期須恵器の甕口縁部片（779）、土師器甕（780・781）・高杯（782～784）・椀（785）が出土している。

SH30033（図版104、写真図版119）

SD30004上で検出され、SH30034・SH30035と壁の切りあいはないが、両住居の主柱穴が床面から検出されており、SH30033が両住居を切っているものと判断している。住居方位をＮ43°Ｅとし、平面形は方形を呈する。住居規模は北半が調査区外となっているため、南北5.7m以上・東西5.7mまでしか計測できないが、中央炉や主柱穴の位置からすると、南北も現在の数字からそれほどは大きく伸びることは

ないと思われる。壁は最高８cm遺存し、東壁北半の壁下には壁溝が設けられている。壁溝は２本あり、内側が幅17cm・深さ３cm、壁際は幅15cm・深さ３cmを測る。また南壁上にも壁溝状の細溝が検出されており、壁溝の状態からみて、この住居は一度改築された可能性がある。中央炉は２個が検出されており、南側の中央炉が北側の中央炉を切っている。南側の中央炉の大きさは径32cm・深さ３cmを測るが、やや南北に長い楕円形を呈する。北側の中央炉は径55cm・深さ３cmを測る。主柱穴は３本が検出されたが、配置から見てこの住居の主柱穴は４本になるものと思われる。柱穴の大きさは径34～37cm・深さ37～40cmを測る。屋内土壙は南壁中央の壁際からやや内に入った位置に設けられている。上面での径は85cmを測り、全体の深さは38cmを測るが、断面では上面から10cmの深さまでが階段状となる。そこから下は径45cmの円形になり、深さ28cmまで掘り込まれている。主柱穴内からは土師器甕（788）が、屋内土壙からは土師器壺（787）が出土した他、須恵器高杯（786）も出土している。これらは第10期に相当する。

SH30034（図版104、写真図版119）

壁溝と主柱穴になると思われる柱穴２本が検出された竪穴住居である。主柱穴がSH30033の床面で検出されたことから、SH30033には切られているものと判断している。SH30035とは切りあってはいるが、この住居が床面だけが遺存する状況であり、主柱穴や壁溝に切りあい関係がないことから前後関係は不明である。検出された壁溝から住居方位はＮ5.5°Ｅであり、平面形は方形を呈するものと思われる。壁溝は幅20～28cm・深さ４～７cmを測る。主柱穴は２本が検出されているが、柱穴間が3.9ｍもあり、少し長すぎるきらいがある。柱穴は径25～30cm・深さ６～36cm。その他の床面施設は検出されていない。

SH30035（図版105、写真図版119）

SH30033・SH30034と切りあって、壁・壁溝の一部と中央土壙、主柱穴が検出された竪穴住居である。壁は最高24cmまで遺存していたが、検出できたのは南壁の一部のみである。その他の壁はすでに消失していた。検出できた南壁下には壁溝が設けられており、壁溝は幅15～18cm・深さ３cmを測る。床面は壁溝の北側部分のみが遺存していただけであり、大部分の床面は削平を受け壁溝の底より10cm低くなっていた。床面中央と思われる位置には土壙が存在し、いわゆる中央土壙にあたるものと捉えている。中央土壙は径72cmの円形であり、深さ43cmを測る。断面観察では２回程度掘り直されている。主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは径35～52cm・深さ24～42cmを測る。東側２本の主柱穴内には径18cmの柱痕跡が確認できた。また北西の主柱穴は柱の抜き取りが行われており、抜き取り後に土師器壺（789）が入れられていた。この他、中央土壙から第５期の土師器底部（791）が出土した他、土師器鉢（792）が出土している。

掘立柱建物跡

SB30001（図版107、写真図版120）

SB30007に切られて検出された南北２間（3.15ｍ）・東西２間（2.8ｍ）床面積8.8㎡の小形の側柱建物である。南北長が長いことから南北が棟方向と考えられ、棟方位はＮ35°Ｅとなる。桁行の柱間は南から1.65・1.50ｍ、梁行の柱間は1.40ｍの等間となっている。柱穴は不揃いで、円形が４本、東桁中央と南西隅の柱穴が方形、北妻中央と西桁中央の柱穴は長方形あるいは長楕円形となっている。柱穴の大きさは円形が30～38cm、方形が30～40cm、長方形が長辺52cm、長楕円形が長軸74cmを測る。深さはいずれ

も浅く10～23cmを測る。土師器甕の口縁部片（793）が出土している。

SB30002（図版107、写真図版120）

SB30001の東側で検出された南北２間（2.7m）・東西２間（2.5m）・床面積6.8㎡の小形の側柱建物である。南東隅柱の柱穴は調査区内のサブトレンチによって消失させてしまって検出できず、西桁行中央の柱穴は何度か精査を試みたが検出できなかった。南北が長いことから南北方向に棟を置く建物と考えられ、棟方位はＮ46.5°Ｅとなる。桁行の柱間は北側が150cmを測り、南側は120cmと推測される。梁行の柱間は不揃いであり、南妻側では東から140・110cm、北妻側では150・100cmとなっている。柱穴は円形あるいは方形に掘られ、両妻の柱穴が大きく、桁行中央の柱穴が小さく、両妻の柱穴は一辺あるいは径が50cm、桁行中央の柱穴は径35cmとなっている。柱穴は深さの点でも規則性に乏しく、北西隅と南妻中央にの柱穴が深く25cm、その他は18cm前後となっていた。

SB30003（図版107、写真図版120）

調査区中央で円弧状に並ぶ竪穴住居群の中央で検出された、南北２間（2.4m）・東西２間（2.4m）・床面積5.7㎡の小形の総柱建物である。南北・東西が同規模であるため、棟方位は判明しない。そのため棟方位は測りえないが、とりあえず南北方向で計測するとＮ７°Ｅとなる。柱間は北面が120cmの等間、南面が東から100・140cm、東面は120cmの等間、西面が北から125・115cmとなっている。柱穴は隅柱の柱穴が大きく径40～45cmを測り、北西と北東の隅柱は不整形な形状を呈している。各面の中央の柱穴と建物中央の柱穴は小さく径25～28cmとなっている。深さは径の大小に関係なく22～46cmを測る。柱穴内部に柱痕跡は確認できず、北東隅の柱穴のように柱抜き取り穴がみられることから、柱はすべて抜き取られたものとみられる。

SB30004（図版107、写真図版121）

SD30001の西岸で検出された南北２間（3.6m）・東西２間（2.9m）・床面積10.4㎡の小形の総柱建物である。建物長は南北に長いことから、棟は南北方向に想定でき、棟方位はＮ34.5°Ｅとなる。柱間は桁行が180cmの等間、梁行も145cmの等間となっている。建物中央の柱は桁行中央の柱通りとは揃っているが、妻中央の柱通りとは揃わず、やや東に寄った位置となっている。柱穴の大きさは径35～55cmを測るが、北東隅と東桁行中央の柱穴が小さく、その他は40～55cmの大きさとなっている。柱穴の深さは16～33cmであり、東桁行中央の柱穴と、建物中央の柱穴では内部に16～18cmの柱痕跡が確認できた。その他の柱穴では柱の抜き取りが行われている。

SB30005（図版108、写真図版121）

SB30004の西側で、SB30004と北妻を揃えるようにして検出された、南北２間（3.0m）・東西２間（2.9m）・床面積8.7㎡の小規模な総柱建物である。建物長は南北に長いことから、棟は南北方向に想定でき、棟方位はＮ40°Ｅとなる。柱間は桁行が150cmの等間、梁行も145cmの等間となっている。建物中央の柱は桁行中央・妻中央の柱通りとは揃っている。柱穴は円形あるいは楕円形を呈し、大きさは径32～58cmとバラつきが大きくなっている。断面観察では柱抜き取りが確認されており、そのため柱穴の大きさに違いがでているものと思われる。建物中央の柱穴は径25cmと小さくなっている。柱穴の深さは24～38cm

であり、西桁行中央の柱穴内には径20cmの柱痕跡が確認できた。

SB30006（図版108、写真図版121）

SD30001を切った状態で検出された南北２間（3.0m）・東西２間（2.8m）・床面積8.4㎡の小規模な総柱建物である。建物長が南北に長いことから、棟は南北方向に想定でき、棟方位はＮ19°Ｅとなる。柱間は桁行が150cm、梁行が140cmとなっている。東桁行の中央と南東隅の柱穴は検出できていない。建物中央の柱は桁行中央・妻中央の柱通りとは揃っている。柱穴は円形を呈し、大きさは径36～44cm測る。建物中央の柱穴もこの範囲に入り、大きさに違いはない。柱穴の深さは26～42cmであり、内部には径14～19cmの柱痕跡が確認できた。P30387から土師器高杯の杯部（794）が出土している。

SB30007（図版108）

SB30001・SK30002を切った状態で検出された南北２間（2.5m）・東西２間（2.5m）・床面積6.3㎡の小規模な建物である。建物中央の柱穴はトレンチで消失してしまった可能性があり、総柱の建物になるのか側柱の建物になるかは不明である。建物の平面形は正方形であり、棟方位は不明であるが、仮に南北を棟方位として計測するとＮ23°Ｅとなる。柱間は東西・南北とも125cmである。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、大きさは径30～36cm測る。柱穴の深さは20～26cmとなっているが、P30762はSK30002の深さを考慮すると40cmとなる。P30762では底面に柱による沈み込みが確認された。

SB30008（図版108、写真図版122 ）

SH30017に切られた状態で検出された桁行３間（4.6m）・梁行２間（3.8m）・床面積約17.5㎡の側柱建物である。棟方位はＮ12.5°Ｅとし、南側の妻中央の柱穴が外側に柱一本分飛び出しており、近接棟持柱になる可能性がある。柱間は西桁行側が北から140・140・180cm、東桁行側では北から160・220・80cmとなっており、中央の柱間が南に広げられている。梁行は南妻側が190cmの等間となっている。北妻側は北西隅柱の柱穴が西に振れているため、西側の間が広くなっているが、190cmの柱間であれば柱穴内にはおさまり、ここでは190cmの等間としておく。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、大きさは径30～46cmを測る。深さは22～37cmを測るが、SB30017に切られた分を考慮すると、南妻中央の柱穴は約60cmとなり、かなり深くなっている。ただ、北妻中央の柱穴は深さ22cmと浅く、両妻中央の柱穴が棟持柱になるのかは判然としない。

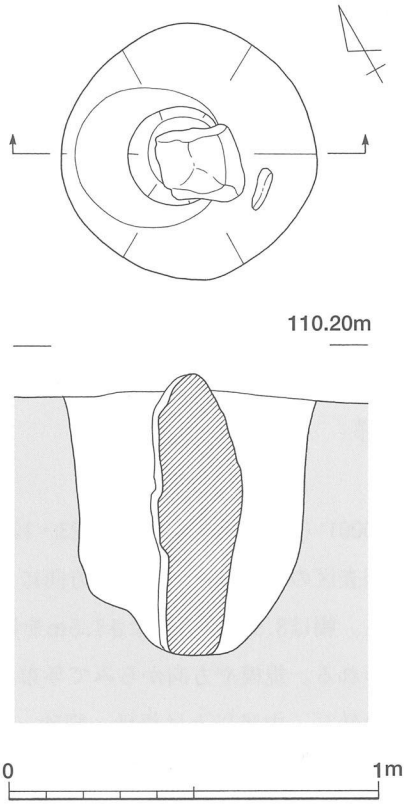
SB30009（図版109、写真図版122）

調査区中央の北壁にかかって検出された南北１間以上（1.8m）・東西３間(5.1m)の総柱建物である。南北方向で方位計測するとＮ19°Ｅとなる。柱間は東西が170cmの等間、南北は180cmを測る。柱穴は円形を呈し、大きさは径32～50cm、深さは15～30cmを測る。側柱の柱穴内では径13～16cmの柱痕跡が確認できた。

SB30010（図版109）

SH30016に切られた状態で検出されているが、SH30019・30020を切った状態でも検出されており、本来はSH30016も切った状態であったものと思われる。桁行４間（6.4m）・梁行４間（6.0m）・床面積約38.4㎡の側柱建物で、棟方位はＮ26°Ｅとする。柱間は西桁行側が北から150・160・140・190cm、東桁

行側では北から160cmの等間となっている。梁行の柱間は北妻側で東から140・200・130・130cm、南妻側では東から160・160・140・140cmを測る。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、大きさは径22～53cmを測る。柱穴の深さは20～36cmを測り、内部には径14～19cmの柱痕跡が確認できた。



第15図　P30094

その他の柱穴

柱穴はⅢ区全体で631個が検出されたが、特徴的な柱穴を抽出して掘立柱建物を復元したこともあり、建物跡として復元できなかった柱穴は438個が残った。その中にはP30162・30256のように比較的径が大きく内部に礫が詰め込まれたものも存在している。中でも特徴的なP30094について記述しておく。

P30094はSH30010とSH30019の間で検出された柱穴で、径34cmと比較的小型の部類に属する。深さは36cmを測り、内部には一辺が10cmで、長さが38cmの方柱状の石が立てられていた。石の頂部は尖り気味であり、先端は検出面に飛び出した形であった。おそらく柱の抜き取り跡に入れられたものと思われる。同様の例は和田山町加都遺跡でも知られている。

土壙群

SK30001（図版106）

調査区南西隅の遺構面が一段高い部分から検出された楕円形の土壙である。長軸75cm・短軸65cm・深さ27cmの規模であり、埋土は黒色シルトを基本とするものであった。

第10期の須恵器杯身（796）が出土している。

SK30002（図版106）

SB30007に切られた状態で検出された不整方形の土壙である。南北2.58mを測り、東西は壁をトレンチで壊してしまっているため不明であるが、検出できた部分では2.3mを測る。東壁をトレンチの東側では検出できなかったことから、土壙の東壁はトレンチ内でおさまるものと思われる。そこから規模を推定すれば東西は2.7mとなる。土壙内部には35cm大の山石を含む礫が投棄されていた。

第11期の須恵器杯蓋（797・798）、土師器甕（799）・高杯（800）が出土している。

SK30014（図版106）

SH30020の上面で検出された径約80cmの円形土壙である。深さは約26cmを測り、埋土の上層には40cm台の山石が入れられており、下層は青灰色の礫を多く含む層であったが、その上面は不自然に凹凸があり、埋め戻された可能性が考えられる。

SK30031（写真図版123）

SH30012の東壁を切った状態で検出された長軸1.05m・短軸0.7m・深さ22cmの楕円形の土壙である。埋土は黒色砂質シルトであり、上面には川原石が入れられていた。東端が出っ張った形状であり、柱穴と切りあっている可能性がある。埋土は黒褐色極細砂の一層であった。

SK30032（図版74）

SH30014の東壁を切った状態で検出された長軸1.00m・短軸0.95m・深さ26cmの隅丸方形の土壙である。黒色砂質シルトを基本とする埋土であった。

溝群

SD30001（図版110、写真図版123・124）

調査区の中央付近から北東方向に走向し、僅かに東に向きをかえた後、大きく蛇行して北方向に走向する。幅は8.5～13m、深さ1.5mを測るが、幅や深さは一定せず、蛇行して流れることから自然流路と思われる。規模や方向からみて与布土川が関係している可能性が高い。埋土は下層に礫を多く含む土層が堆積し、中層以上は粗砂・細砂・極細砂といった砂が堆積していた。ただ図版110の２層には礫を含む粗砂の混じりがみられることから、その段階まで水の流れがあったことは確実である。第１層下には長さ４m・幅１mの範囲に礫が集中しているのが認められた。出土した遺物は一部が第１期に属するが多くは第５期以降のものであり、最も新しい時期のものは律令期に属する。この段階まで流路の痕跡があったものとみられる。

北東方向から北に向きをかえる部分では東壁側が幅５m・長さ11mの大きさで突出し、SD30001を幅1.5m・深さ30cmの溝によって分流し、突出部分の南端から引き込み、北端で元の流れに戻すような形がとられている。この突出した部分はⅡ区の調査時には道路が存在し、SD30001とは切り離されていたためSK20018と呼称した部分である。この突出部の最下層からは第５期の土師器壺（824・828・830)・甕（843～847・849)・椀（868・869)、ミニチュア土器(874)が出土した他、突出部として採り上げている土器の中には須恵器杯蓋（802)・高杯（812)・甕（818）がみられる。

この突出部の対面のSD30001西壁では川原石の集中が認められたが、調査がⅡ区・Ⅲ区・その間の農道下と分けて実施したため、人為的に集中させたのか、自然に集中したかは判断がつかなかった。

SD30004が分岐する形となるが、時期的な関係から、SD30001の古い段階の流れがSD30004であると判断している。

SD30004（図版74）

調査区に流入してきたSD30001が東に向きをかえる部分から分岐するような形で北東走向する。溝上からはSH30018・SH30033・SH30034が検出されている。溝は幅４～５m・深さ1.1mを測り、埋土は中層から下層が多くの礫が混じった粗い堆積物で構成され、上層は粗砂～細砂といった比較的細かい堆積物で構成される。出土遺物からすると明らかにSD30001に先行するものであるが、検出できた部分以外はSD30001によって削り取られてしまったと思われる。

第４節　Ⅳ区の遺構

１．概要

調査対象とした地区の西端にあたり、Ⅲ区とは農業用排水路によって隔てられ、西は町道三保大月七社神社線によって画された調査区である。調査前の状況は他地区と同様に３枚の水田が段をなして北に下がっていく状況であり、平成11年度の第２次本発掘調査は作付けの関係から北側２枚の水田について行い、残った南端の水田部は平成12年度の第３次本発掘調査で実施した。

遺構検出面は調査区中央から東半が黒褐色砂混じりシルト上、西半が黄橙色砂質シルト層上であったが、こうした東半と西半の遺構面検出面の違いは、西半では黒褐色砂混じりシルトが削平により消失してしまったため、下層の黄橙色砂質シルト層上で遺構が検出される結果となったものと判断している。遺構の検出面は中央が浅い谷部となっており、標高でみると西端が約110.80m、中央が110.30m、東端が110.55mであり、西端と中央の谷部とでは比高差約50cmを測る。

遺構検出面までの土層の堆積状況は、中央谷部で盛土・旧耕土・床土下に暗褐灰色シルト質砂や黒褐色礫混じりシルトが堆積し、遺物の包含が認められた。東端や西端は圃場整備によって改変を受けており、遺構検出面まで盛土であった。

また東半から中央部の黒褐色礫混じりシルトは極めて土壌化が進んでいたため、遺構の検出は困難を極めた。そこで第２次本発掘調査では本来の遺構検出面をかなり削りこんで遺構の検出を行った。また調査区南端は作付けの関係から平成12年度に第３次本発掘調査として実施したことや、遺構の検出の困難さから、第２・３次で検出された同じ竪穴住居等の整合が上手く出来ていないことをあらかじめ断っておく。

検出された遺構の分布密度は東半ではⅢ区とほぼ同程度となっているが、中央から西半が極めて少なくなっている。特に調査区の中央には竪穴住居跡や柱穴といった遺構は存在せず、溝のみが存在するといった状況である。西端では竪穴住居跡が検出されているが３棟であり、削平を受けて消失したとも考えられるが、他に柱穴等の遺構もないことから、本来から竪穴住居等の遺構の分布は少なかったものとみられる。

検出された遺構はⅡ・Ⅲ区と同様の古墳時代の竪穴住居跡19棟・掘立柱建物跡２棟・柱穴174個の他、律令期に属する溝が検出されている。竪穴住居跡19棟は全て方形であり、竈を伴うものが８棟あり、８棟とも住居の西壁際に設けられている。掘立柱建物は他地区より棟数が減少し、規模も小さなものである。律令期の溝はⅢ区から連続するものであり、直線的に約75mに渡って検出された。Ⅲ区部分も合わせると延長約105mが検出されたことになる。この溝は竪穴住居跡を切って設けられており、集落の廃絶後の遺跡地の土地利用を示すものである。

２．遺構

竪穴住居跡

SH40001・40020（図版113、写真図版127）

調査区の西端で検出された方形の竪穴住居跡で、２基が切りあうが、壁が平行することから、竈を伴わないSH40020から竈を伴うSH40001への拡張と考えている。SH40020は方位をＮ42°Ｗとし、規模は東西・

南北とも5.8m・床面積33.6m²を測る。壁は最高13cmが遺存し、北壁から東壁北半にかけての壁下と南壁下の一部には壁溝が設けられている。壁溝は幅７～15cm・深さ３～５cmを測る。床面中央には径45cm・深さ３cmのやや楕円形を呈する浅い中央炉が設けられ、中央炉の内側は焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴間の長さは南北280cm、東西270cmを測る。柱穴の大きさは径30～45cm・深さ25～30cmであり、柱痕跡は確認できなかった。東壁下中央のやや南よりには屋内土壙が設けられていた。屋内土壙はやや楕円形の平面形を呈し、長軸1.0m・短軸0.9m・深さ22cmを測る。埋土は黒褐色シルト一層であり、その中に明黄褐色砂質シルトが混じっていることからSH40020への拡張段階に埋め戻されたものと思われる。

SH40001の壁は最高でも５cmしか遺存しておらず、南壁や東壁では僅か１cm程度の部分もあった。そのため住居規模は壁下で計測するような状態になるが、SH40020を外側に0.6m広げており、南北7.4m・東西7.0m・床面積51.8m²の規模を測る。壁下に壁溝は設けられていなかった。主柱穴は４本であるが、西側の２本はSH40020の柱穴をそのまま使用したとみられる。東側２本はやや外側に配置され、柱穴間の距離は3.0mを測る。柱穴の大きさは径35～55cm・深さ26～30cmを測る。竈は西壁際の中央に設けられ、焚き口はSH40020の壁上となっていた。大きさは奥行き95cm・幅43cmであり、壁は最高で７cmが遺存していた。竈内面の壁は全体が焼土化していた。竈内には礫を含んだ黒褐色シルトが堆積し、焼土も混じっていたが、竈床面は小礫混りということもあって顕著な焼土化は確認できなかった。

拡張後の竪穴住居に伴う遺物としては竈北側の床面上から第15期以降の須恵器高杯(922)が出土している。

SH40002（図版111）

調査区西半の北壁際で南壁だけが検出された方形の竪穴住居跡である。全体の規模や構造は不明であり、検出できた部分での規模は東西４m・南北１mを測る。壁は28cmまで遺存し、南壁下には壁溝が設けられている。壁溝は２本あり、外側の壁溝が内側の壁溝を切り、住居は改築された可能性がある。外側の壁溝は幅６cm、深さは最大６cmを測り、内側の壁溝は幅10～16cm、深さは３～５cmであった。

SH40003（図版111）

SH40004の南で、「コ」の字状の溝が検出され、その内部に焼土が認められたため、現地調査時には竪穴住居跡として扱ったが、溝を区画する内部が平坦ではなく起伏があること、溝に他の溝が合流していることから、整理段階で竪穴住居跡から除外した。

SH40004（図版114、写真図版128）

調査区北東隅で検出された竪穴住居跡で、北壁は調査区外となっている。方位をN10.5°Eとし、住居規模は南北5.4m以上・東西6.5m・床面積35.1m²以上を測る。壁は最高26cmが遺存し、東壁と南壁下には壁溝が設けられている。壁溝は幅12～20cm・深さ３～５cmを測る。床面の中央には径40cm・深さ７cmの中央炉が設けられ、内部が焼土化していた。この中央炉の東側の床面も南北90cm・東西40cmの範囲は焼土化していた。主柱穴としては４本を検出しているが、北西隅の柱穴は位置がややずれており、北西隅の主柱穴は調査区外に存在している可能性もある。北西隅を除く確実な３本で計測すれば、柱穴間の距離は東西330cm・南北315cmを測る。柱穴の大きさは径23～42cm・深さ23～40cmを測り、柱穴の内部には16～20cmの柱痕跡が確認できた。屋内土壙は東壁際中央に設けられ、土壙の平面形は楕円形であり、長軸が壁と平行するように設けられている。土壙の規模は長軸67cm・短軸44cm・深さ22cmを測る。

埋土からは第16期の須恵器杯（924・925）・韓式土器（926）が出土している。

SH40005・40026（図版115、写真図版128）

調査区東半の竪穴住居群の中で検出されたものであるが、東壁の検出が極めて困難であり、今のところSH40026の西に1.9m移動してSH40005になったとみているが、極めて不確かである。またSH40005の床面からは竈以外の施設は明瞭には検出できなかった。

SH40005は方位をN31°Eとし、住居規模は南北6.75m・東西5.9m・床面積39.8m²を測る。壁は最高18cmが遺存し、壁下に壁溝は設けられていない。前述したように床面上からは中央炉や主柱穴は検出できず、竈付近の柱穴も浅いもので、主柱穴の一部になるものではない。竈は西壁際の中央に設けられており、奥行き75cm・焚き口幅60cmを測る。袖部は最高13cmが遺存し、南袖部の壁面は一部が焼土化していた。竈の床面は焚き口がほぼ平坦で、焚き口から奥側が徐々にあがり、奥壁が急激に立ち上がる。焚き口の床面は焼土化していた。支脚を立てるための小穴は認められていないことから、高杯等を支脚にしていたことが考えられる。第9～10期と思われる土師器甕（927）が出土している。

SH40026は壁が最高11cm遺存し、床面の施設は何も検出できなかった。床面はSH40005の床面より約12cm高くなっており、諸施設はSH40005に壊された可能性が高いが、柱穴等については本来からなかった可能性もあり、SH40005が位置を西にずらす形で構築された可能性がある。

SH40006（図版116、写真図版129）

竈が付設された方形の竪穴住居跡である。SH40007と切りあっていたものと推測されるが、調査時には東・北壁を消失していたため、切りあい関係を直接的に確認することができなかった。出土遺物からSH40007に先行する竪穴住居跡である。第2次本発掘調査では、西壁から北西隅部が検出され、第3次本発掘調査では南壁にあたる壁が検出されてはいるが、西壁に対して極めて長く、全体をこの住居に伴う壁とするのは不自然である。第3次本発掘調査で検出されている壁は途中で屈曲しており、この付近までがSH40006の壁にあたり、それ以東は別の遺構の壁になる可能性が考えられる。

したがって屈曲部以西をSH40006の壁とすると、この竪穴住居は方位をN26°Eとし、南北3.3m・東西2.8m以上・床面積9.2m²以上の極めて小規模な方形の竪穴住居となる。床面上からは中央炉や柱穴等は検出できなかった。竈は西壁際中央に設けられ、奥行き65cm・焚き口幅48cmの大きさで、袖部は最高6cmまで遺存していた。竈の奥に近い床面には高杯を逆転させた支脚が据えられ、支脚から口側の焚き口の床面が焼土化していた。

支脚に利用されていた高杯（928）は第9～10期に相当するものである。

SH40007（図版116、写真図版129・130）

出土遺物からみればSH40006を切って構築されたと考えられる方形の竪穴住居跡である。第2次本発掘調査区と第3次本発掘調査区に跨って大部分が検出されたが、南東隅部は調査区外となって検出できていない。住居は方位をN31.5°Eとし、南北6.0m・東西6.7m・床面積40.2m²を測る。壁は最高11cmが遺存し、南壁の東半から東壁にかけての壁下には壁溝が設けられている。壁溝は幅17cm・深さ3～7cmを測る。床面からは多数の柱穴が検出されたが、主柱穴となる柱穴は南西隅を除く3本が検出されている。主柱穴の配置はやや壁よりとなっており、主柱穴間の距離は南北295cm・東西355cmを測る。柱穴

の大きさは径36～56cm・深さ50～56cmであり、内部には径16～18cmの柱痕跡が確認できた。検出できた部分では竈は認められず、付設されていなかったものと思われる。

内部からは第17期の須恵器杯（929・930）、土師器甕（932）・椀（933）と移動式竈片（934）が出土している他、第18期の須恵器杯（931）が埋土から出土している。

SH40008（図版117、写真図版129・130）

第２次本発掘調査区と第３次本発掘調査区に跨って、SH40025に切られた状態で検出された竪穴住居跡である。住居は方位をＮ30.5°Ｅとし、住居規模は南北6.0m・東西5.8m・床面積34.8㎡を測る。壁は最高18cmが遺存し、壁溝は設けられていない。床面からは幾つかの柱穴が検出されたが、確実に主柱穴となりえる柱穴は検出されていない。

SH40009（図版118・119、写真図版131）

調査区東半の竪穴住居群の西端で、切りあって検出された３基の竪穴住居跡の内の最後に構築されたもので、SH40010を切った状態で検出された竈付きの方形竪穴住居跡である。方位をＮ21°Ｅとし、住居規模は南北3.85m・東西4.25m・床面積16.4㎡を測る。壁は最高40cmが遺存し、壁溝が設けられていない。住居床面は厚さ６cmの貼床がされていた。床面の中央には径22cm・深さ６cmの中央炉が設けられ、内部は焼土化していた。中央炉の北東側にも中央が僅かに窪んだ不整形な焼土があり、これも中央炉であったものと思われる。主柱穴は４本であり、柱穴間の距離は190cmを測る。柱穴の大きさは径24～45cm・深さ23～40cmを測る。柱穴の内部には径12～14cmの柱痕跡が確認された。竈は西壁際中央に設けられており、奥行き77cm・幅65cmを測る。袖部は最高17cmが遺存していた。廃棄時の竈床面はほぼ平らで、中央には支脚として完形の土師器高杯を逆転させて据えていた。この支脚下から焚き口にかけての床面が焼土化しており、支脚は置き直されたものと考えられる。また構築当初の竈は床面が住居床面より一段深く掘られた構造であり、土層堆積状況からみると、廃棄時までに少なくとも２回以上の改修が行われた可能性がある。屋内土壙は竈反対側の東壁際中央、南西主柱穴の外側、南東主柱穴の外側の３ヵ所に設けられている。東壁際の屋内土壙の周囲は住居床面より土手状に８cm高くしている。この土手状の施設はにぶい黄橙色の砂質シルトを積んで構築しており、貼床との間に黒褐色シルトが堆積している。黒褐色シルトには炭化物も含まれることから、この土手状施設も改修されている可能性がある。土手状施設内部の屋内土壙SK40001は２段に掘られ、上段は長軸94cm・短軸60cmで、長軸を壁に並行させて設けている。下段は長軸52cm・短軸42cmで、上段とほぼ並行する形で掘られている。上段からの土壙全体の深さは32cmを測る。南西主柱穴外側の屋内土壙SK40003は楕円形を呈し、規模は長軸84cm・短軸58cm・深さ34cmを測る。この土壙も２段に掘られ、深さ10cm付近からは径40cmの円形に掘られている。南東主柱穴外側の土壙SK40002は径55cmのほぼ円形を呈し、深さは38cmを測る。南西・南東主柱穴の外側に配された土壙は屋内土壙としてこの住居に伴わない可能性もあるが、配置が似通っていることから、屋内土壙としている。

竈内からは第12期の土師器高杯（939）が出土し、屋内土壙から土師器甕（936）・高杯脚部（940）・製塩土器（941）が出土した他、床面等から須恵器杯（935）、土師器甕（937～938）が出土している。

SH40010（図版118・120、写真図版131・132）

SH40009に切られ、SH40011を切った状態で検出された竈をもつ方形の竪穴住居跡である。住居は方位

をＮ25°Ｅとし、住居規模は南北・東西とも4.9ｍであり、床面積は24.0㎡を測る。壁は最高40cmが遺存し、壁溝は設けられていない。住居床面は厚さ６cmの貼床がなされており、床面の中央には中央炉が２ヶ所で確認された。２つの中央炉は切りあっており,南側の中央炉が北側の中央炉を切る。中央炉の大きさは南側が径26cm・深さ５cm、北側が径34cm・深さ４cmを測り、ともに内部は焼土化していた。主柱穴は４本であり、柱穴間は南北240cm・東西230cmを測る。南東の主柱穴はSH40009の主柱穴に切られている。柱穴の大きさは径22～32cm・深さ24～38cmを測る。竈は西壁際中央に設けられ、奥行き110cm・幅70cmを測る。袖部は10cmの高さまで遺存し、焚き口から50cm入った床面上には土師器の高杯を逆転させた支脚２個が据えられ、支脚間は27cmを測る。両支脚の周囲からは土師器甕腹が出土している。この竈の床面も地山面からは浮いており、当初の竈は貼床面から少し掘り込んでいたものと思われる。焼土面は狭く、支脚から離れた焚き口に認められた。屋内土壙は北西隅からやや北壁側に寄った位置に設けられ、平面形は円形を呈し、規模は径67cm・深さ50cmを測る。

竈の支脚に使用されていた土師器高杯（946・948）の他、住居の床面等からは第11期の須恵器高杯(942)、土師器高杯（947)･甕(943～945)が出土している。

SH40011（図版118・121、写真図版131・132）

SH40010・SD40001・SD40002に切られた状態で検出された竈をもつ方形の竪穴住居跡である。住居は方位をＮ22°Ｅとし、住居規模は南北・東西とも4.1ｍであり、床面積は16.8㎡を測る。壁は最高30cmが遺存していたが、南西隅部は壁の傾斜が緩やかになっていた。床面は大半がSH40010に壊されており壁溝・中央炉は検出できなかった。壁溝は遺存していた床面の周囲でも検出されなかったことから、設けられていなかった可能性が高い。埋土の下層には貼床と思われる厚さ６cmの黄褐色を呈する層や黄橙色ブロックを含む層が認められた。主柱穴は４本であり、柱穴間は南北155cm・東西165cmを測る。柱穴の大きさは径20～36cm・深さ30～46cmを測る。竈は西壁際中央に設けられ、奥行き100cm・幅50cmを測る。袖部は６cmの高さまで遺存していた。焚き口の床面が焼土化し、竈内には土師器甕片や礫が落ち込んでいた。屋内土壙は東壁際中央と北東隅に設けられ、住居規模の割には土壙の規模が大きく、土壙間は40cmしか開いていない。東壁際中央の土壙は長軸85cm・短軸75cmの長方形状であり、下端の形状はほぼ長方形となっている。深さは20cmを測り、断面観察から掘り直しが行われた可能性が考えられる。北東隅の土壙は屋内土壙としては規模が大きく、深さも深く、貯蔵穴状のものである。平面形は径1.0ｍの円形に近い形状を呈し、深さは72cmを測る。

竈南側の床面上から第11期の須恵器杯（951）が出土した他、須恵器杯（953)、土師器高杯（952）が出土している。

SH40012（図版122、写真図版133）

調査区東端で農業用排水路に切られて検出された。当初は２棟が切りあった状態であると判断して進めたが、中央炉は１ヶ所しか検出できず、主柱穴も４本しか検出できなかったため、最終的には１棟と判断した竪穴住居跡である。しかし主柱穴の配置形状と住居壁の形状が上手く合致できず、検出した壁の正確さには自信が持てていない。したがって、平面形や住居規模は正確には把握できていない。

住居床面の中央炉は円形を呈し、大きさは径30cm・深さ６cmを測り、内部は焼土化していた。主柱穴に囲まれた空間の中央から北側に寄った位置に設けられている。主柱穴は４本であり、柱穴間は南北295

cm・東西250cmを測る。柱穴の大きさは径28～38cm・深さ20～25cmを測る。柱穴内部には径17～20cmの柱痕跡が確認できた。

SH40013（図版122、写真図版133）

SD40012と極めて近接しており、上部構造を考えると切り合っていた可能性が高いが、直接的な切りあいがなく、前後関係は不明である。住居を方位をN26.5°Eとし、住居規模は南北4.7m・東西4.3m・床面積20.2m²を測る。壁は最高11cmが遺存し、壁溝は設けられていない。床面の中央には中央炉が設けられ、中央炉の大きさは長軸60cm・短軸50cmであり、深さは僅かに4cmで、断面形状は皿状となる。主柱穴と考えられる柱穴は北側の2本が検出されたが、南側の2本はかなり追求したが検出できなかった。このため、北側の2本も主柱穴とは断定できない。

埋土からは第16期の須恵器杯（954・955）や土師器甕（956）・甑（957）が出土している。

SH40014（図版117、写真図版133）

SD40001・SD40002に切られて検出された竪穴住居跡である。住居は方位をN5.5°Eとし、住居規模は南北4.3m・東西3.4m・床面積14.6m²を測る。壁は最高10cmが遺存し、壁溝は設けられていない。床面からは幾つかの柱穴が検出されたが、確実に主柱穴となりえる柱穴は定かでない。床面東半で検出されたP40030・P40032が主柱穴になりえる可能性はあるが、主柱穴2本とするには東に寄っており、主柱穴4本とするには西半に対応する柱穴がないことから、主柱穴とは断定できない。

床面からは第10期の土師器高杯（958・959）が出土している。

SH40015（図版123、写真図版134）

SD40016・SD40017を切って検出された竈をもつ方形の竪穴住居跡である。方位をN27.5°Eとし、住居規模は南北4.7m・東西4.2m・床面積約19.7m²を測る。壁は最高23cmが遺存し、壁溝が設けられていない。中央炉は楕円形で、長軸42cm・短軸36cm・深さ5cmを測り、内部は焼土化していた。主柱穴は4本であり、柱穴間は南北が220cm、東西は195cm・220cmを測る。柱穴の大きさは径32～40cm・深さ30～50cmであり、柱穴内部には径13cmの柱痕跡が確認できた。竈は西壁際中央に設けられ、奥行き100cm・幅58cmを測る。竈奥壁が住居外に伸びており、煙道が設けられていたものと思われる。袖部は黄色系の粘土を積み上げて構築されており、20cmの高さまで遺存していた。袖部の焚き口壁面は袖内に石を埋め込んで保護していた。床面は平らであり、焚き口から40cmの位置に、上部の一辺が6cm程度の方形礫を立てて支脚としていた。礫は径20cmの小穴の中に8cm埋めて立てられていた。支脚の周囲には土師器甕が散乱し、支脚上にも破片が乗った状態であった。屋内土壙は東壁際中央と北西隅の2ヵ所に設けられており、ともに平面形は円形を呈し、規模は北西隅の土壙が径1.1m・深さ50cm、東壁際中央の土壙が径85cm・深さ25cmを測る。

竈内からは出土したのは土師器甕(960)であり、それ以外に第9期の土師器高杯(961)が出土している。

SH40016（図版124、写真図版134）

SD40015に切られて検出された方形の竪穴住居跡である。方位をN29.5°Eとし、住居規模は南北3.9m・東西3.6m・床面積約14.0m²を測る。壁は最高27cmが遺存し、壁溝が設けられていない。中央炉は径60cmと大きく、深さも8cmと中央炉としては深くなっていた。内部は焼土化していた。主柱穴は4本であり、柱穴

間は南北が155cm・180cm、東西は160cmを測る。柱穴の大きさは径33～36cm・深さ20～34cmであり、柱穴内部には径14～16cmの柱痕跡が確認できた。屋内土壙は東壁際中央に設けられており、平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長軸60cm・短軸50cm・深さ23cmを測る。第10期の土師器高杯(962・963)が出土している。

SH40017（図版124、写真図版134）

SD40015に切られて検出された方形の竪穴住居跡である。方位をN19°Eとし、住居規模は南北4.7m・東西4.3m・床面積約20.2m²を測る。壁は最高27cmが遺存し、壁溝は設けられていない。中央炉は長軸1.0m・短軸60cm・深さ6cmと大きく、内部は焼土化していた。北東の柱穴はSH40015の屋内土壙に壊されたためか検出できていないが、主柱穴3本が検出されており、本来の主柱穴は4本と思われる。柱穴間は南北が200cm、東西は175cmを測る。柱穴の大きさは径38～42cm・深さ30～45cmであり、柱穴内部には径10cmの柱痕跡が確認できた。屋内土壙は東壁際中央に設けられており、平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長軸85cm・短軸65cm・深さ29cmを測る。埋土から第9期もしくは第10期の土師器甕(964・965)・高杯（966)・椀（967）が出土している。

SH40018（図版125、写真図版134・135）

竈をもつ方形の竪穴住居跡で、方位をN35°Eとし、住居規模は南北4.0m・東西3.8m・床面積約15.2m²を測る。壁は最高23cmが遺存し、壁溝が設けられていない。中央炉は径36cm・深さ4cmを測り、内部の焼土化はそれほど顕著ではなかった。主柱穴は4本と思われるが、南東隅の柱穴がかなり西に寄った配置となっている。そのため、柱穴間は南北が125cm・135cm、東西は150cm・120cmとなっている。柱穴の大きさは径が20～37cmであり、深さは12～23cmと極めて浅くなっている。柱穴内部には径16cmの柱痕跡が確認できた。竈は西壁際中央に設けられ、奥行き90cm・幅60cmを測る。袖部は黄色系の粘土を積み上げて構築されており、23cmの高さまで遺存していた。床面は焚き口部分は平らであり、支脚から奥壁に向けて徐々に上がって、奥壁側が7cm高くなっていた。焚き口から50cm入った床面上には支脚として土師器高杯を逆転させて立てていた。支脚から焚き口部分にかけての床面は焼土化していた。竈内の支脚とされていたのは(971)の高杯であり、それ以外に第11期もしくは第12期に相当する土師器甕(968)・高杯(970)・甑(969)が出土している。

SH40024（図版126、写真図版127・135）

第3次本発掘調査において北西隅部のみが検出された。隅部のみであるため方位・規模・構造等は不明である。検出できた部分は東西5.8m・南北1.5mであり、壁は13cmが遺存していた。壁溝は設けられておらず、調査区壁にかかって焼土が確認された。

SH40025（図版117）

調査区南端の第3次本発掘調査区で、SH40008を切った状態で検出された竪穴住居跡である。住居の大半は調査区外となっているため、構造等については不明な点が多い。住居は方位をN22.5°Wとし、住居規模は南北2.8m以上・東西4.5m・床面積12.6m²以上を測る。壁は最高33cmが遺存し、検出できた部分では壁溝は設けられていない。床面からは多くの柱穴が検出されたが、確実に主柱穴となりえる柱穴は定かでない。床面では部分的に貼り床が確認されているが、床面を一段掘り込んで埋める形であり、貼り床とするには疑問が残る。内部から第17期の須恵器高杯（972）が出土している。

掘立柱建物跡

SB40001（図版127）

竪穴住居群のほぼ中央で検出された棟方位をＮ71°Ｗとする東西棟の近接棟持柱付側柱建物である。建物規模は桁行２間（3.9m）・梁行２間（2.9m）・床面積11.3㎡であり、桁行の長さは南桁行が2.9m、北桁行が4.0mと北桁行がやや長くなっている。梁行も東梁行が2.8m、西梁行が2.9mであり、建物全体としてはやや歪な形状となっている。両妻の外側に近接した位置に棟持柱が付き、妻からの棟持柱の出は15cmであり、棟持柱間は4.3mを測る。桁行の柱間は南桁行が東から190cm・200cm、北桁行が東から210cm・190cmである。柱穴は棟持柱と四隅の隅柱の柱穴が大きく、棟持柱は径が38cm、深さが20cmの大きさであり、隅柱は径が30～42cm、深さが18～20cmの大きさである。桁行中央の柱穴は径22～32cm・深さ15cmであり、隅柱より径も小さく、深さも浅くなっており、桁の補助的な柱になっているようである。棟持柱の柱穴内からは径15cmの、隅柱の柱穴内からは12～14cmの、桁行中央の柱穴内からは14cmの柱痕跡が確認されており、特に大きな差は無いが、棟持柱がやや太く、その他は隅柱も桁行中央の柱も同じような太さであったものと思われる。

SB40002（図版127）

SB40001の東側で、SB40001とは直交するような形で検出された、棟方位をＮ22°Ｅとする南北棟の近接棟持柱付側柱建物である。建物形状は、南妻が３m、北妻が3.35mの長さになっているため、平面形は台形となっている。そのため、建物規模は中央で計測したが、桁行２間で4.0m、梁行２間で3.2m、床面積は13.3㎡を測る。棟持柱は北妻側だけが外に飛び出しており、出は15cmを測る。南妻側は中央の柱の径が大きく、深さも深くなっていることから、妻の柱通りと揃ってはいるが、これも棟持柱としてよいものと思われる。とすると棟持柱間は4.3mを測る。西側桁行中央の柱穴が検出できなかったため、柱間は東桁行で計測するが、南から210cm・195cmとなっている。柱穴は棟持柱が径も大きく深さも深くなっており、径が45～55cm、深さが25cmを測る。北棟持柱の柱穴内部からは径17cmの柱痕跡が確認された。隅柱は径26～40cm、深さ14～20cmの大きさであり、棟持柱の柱穴より径が小さく、深さも浅い。内部から径15cmの柱痕跡が確認された。桁行中央の柱穴は径32cm・深さ14cmであり、隅柱より浅いものになっている。SB40001と同様に桁の補助的な柱になっていたようである。

土壙・溝群

SK43010（図版126）

SH40008・40024に切られた状態で検出された楕円形の土壙である。規模は長軸95cm・短軸78cm・深さ38cmであり、埋土は黒褐色シルトと褐色シルトの２層であった。

SD40001（図版111、写真図版135）

Ⅲ区の南西隅から連続する東西方向の直線的な溝であり、Ⅲ区を合わせると検出された総延長は105mに及ぶ。この内、Ⅳ区では東端でやや乱れるものの75mに渡って直線的に検出されており、東端の乱れた部分からはⅢ区のSD30008に連続する浅い溝が直角に分岐する。溝幅は0.5～2.0mを測り、最も遺

存状況のよい部分では幅1.0mであることから、本来の溝幅はこの数字が示すぐらいであったものと思われる。西端で溝幅は広くなって幅1.2～2.0mとなるが、この部分はSD40002と重なりあっているものと考えている。深さは、総じて東端が浅く、西端ほど深くなっていたが、最も残りのよい部分では27cmを測る。

埋土は２層であり、上層は灰褐色シルト質極細砂、下層が黒色シルト質極細砂であった。上層と下層の間には鉄分層が確認された部分もあった。

溝内からは第18期の須恵器杯Ｂ蓋（973）が出土している。

SD40002（図版111、写真図版135）

SD40001に切られ、SD40001の南側にほぼ並行する形で検出された溝で、途中で断絶したり、西端では土壙が連続するような状態となっているが、45mに渡って検出されている。西端の土壙が連続するような状態は溝掘削時の痕跡とみている。最も遺存状況のよい部分では溝幅80cm・深さ14cmを測る。溝埋土は黒色シルト質極細砂の一層であった。

SD40001・SD40002の間も溝の埋土であり、SD40001・SD40002は本来同一の溝で、改修され、上部が削平された結果、検出されたような状態になったものと判断している。

溝内からは第16期に相当する土師器甕（974）が出土している。

SD40004（図版111）

調査区中央の浅い谷部の中を南北に走向する溝であり、肩部が定まらないことから、自然の流路とみている。幅は0.6～4.0m、深さ４～28cmを測る。埋土は黒色シルト質極細砂の一層であった。

溝内からは須恵器杯（975）、土師器甕（976）・高杯（977）が出土している。

第4章　遺物

第1節　土器

土器は数多く検出された竪穴住居跡から出土したものが多く、その他SD10001やSD30001からも比較的多くの土器が出土している。検出面のほとんどは圃場整備で削平を受けているため包含層から出土した土器は多くない。よって、竪穴住居跡をはじめとする遺構出土のものを中心に取り上げ、包含層出土のものは遺構から出土の少ない器形の須恵器や良好に残っている弥生土器・土師器などにとどめている。

以下に土師器の型式分類を行ったのち、出土遺物の説明を行う。

1．弥生土器・土師器の型式分類

壺、甕、高杯、器台、小型丸底鉢、椀、台付鉢については以下のとおり型式分類を設定し、それに基づいて記述をすすめる。このほか、鉢、手焙形土器、小型丸底壺、甑、竈、甑、製塩土器、ミニチュア土器などが出土している。

壺

壺は広口壺、長頸壺、短頸壺、二重口縁壺、直口壺に分かれる。

広口壺　口縁が大きく開く壺。

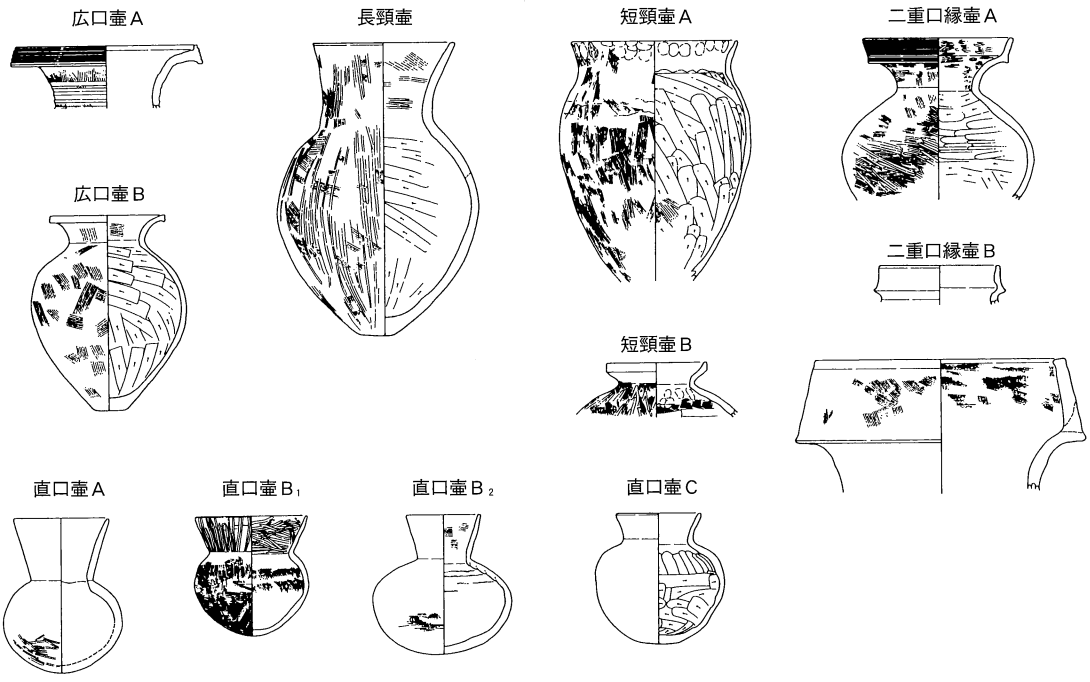
広口壺A　口縁部や頸部に加飾がなされる。口縁部が拡張しているものが多い。

広口壺B　口縁部や頸部に加飾がなされない。口縁部は拡張しない。

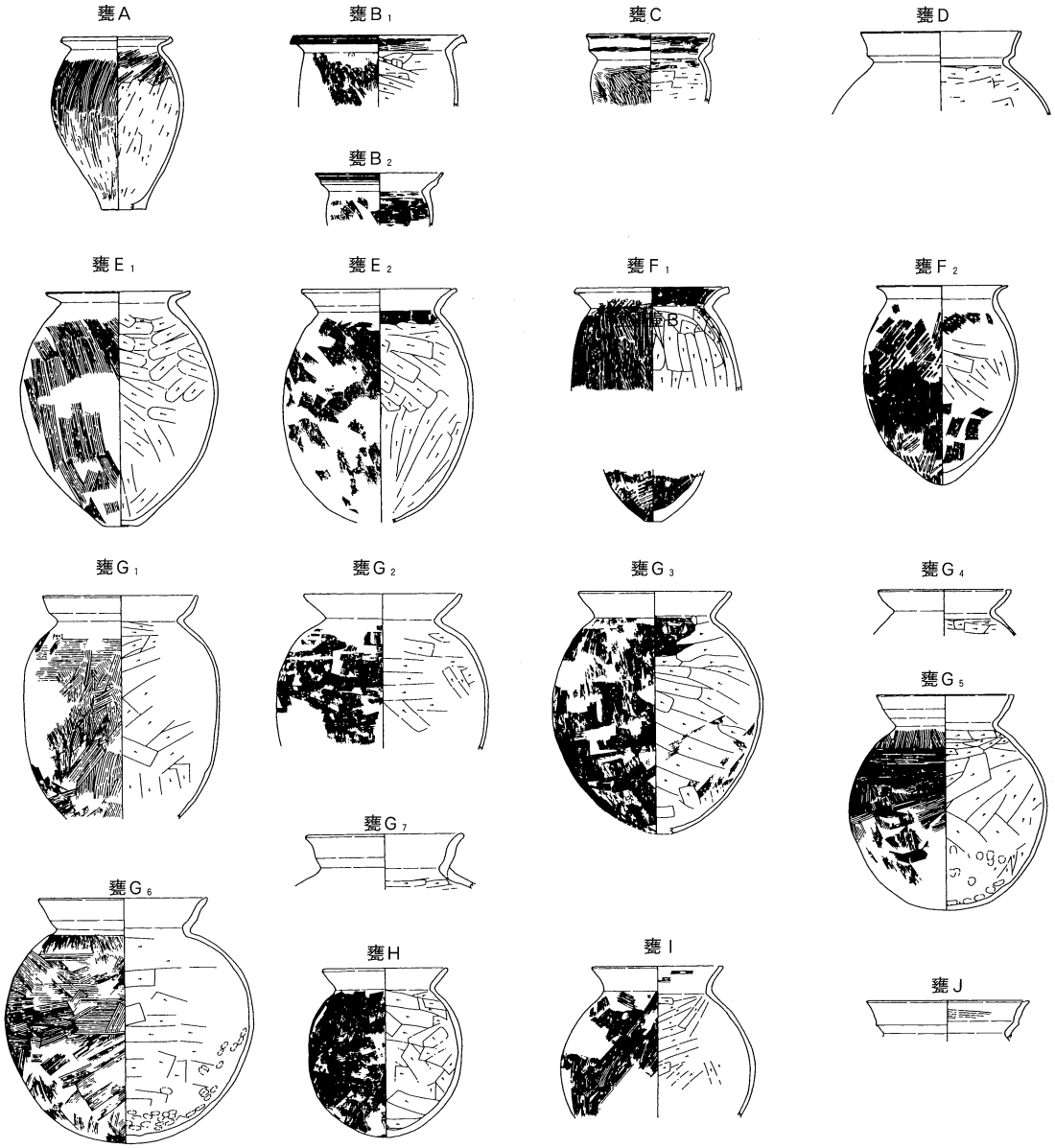
長頸壺　頸部は長くやや外反気味である。

短頸壺　頸部が短い壺。

短頸壺A　頸部が太いもの。



第16図　弥生土器・土師器の分類（1）



第17図　弥生土器・土師器の分類（２）

短頸壺Ｂ　頸部が細いもの。

二重口縁壺　口縁が二重口縁を呈する壺。

二重口縁壺Ａ　２次口縁が外反するもの。

二重口縁壺Ｂ　２次口縁が内傾するもの。

直口壺　口縁部が直線的に延びる壺。

直口壺Ａ　口縁部が長く延びるもの。

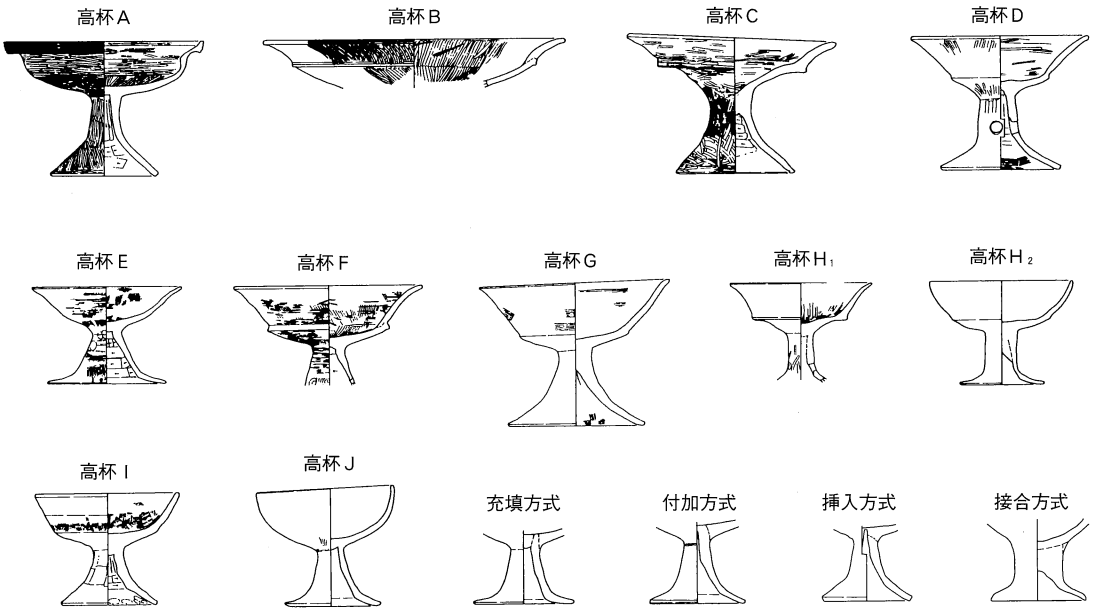
直口壺Ｂ　頸部が短いもの。Ｂ１は口径が大きいもの、Ｂ２は口径が小さいもの。

直口壺Ｃ　頸部がごく短いもの。

甕

甕Ａ　口縁がくの字に折れ曲がる甕。口縁部に施文されない。

甕Ｂ　口縁部がくの字に曲がる。口縁部に擬凹線が施される。Ｂ２類は口縁部が上方に拡張され、二



第18図　弥生土器・土師器の分類（３）

重口縁状になるもの。

甕Ｃ　口縁部が二重口縁で、２次口縁が短いもの。口縁部に擬凹線は施されない。

甕Ｄ　口縁部が二重口縁で、２次口縁が長いもの。

甕Ｅ　口縁部が外反し、外面にタタキ調整がみられないもの。底部が平底のもの（甕Ｅ１）、底部が丸底のもの（甕Ｅ２）がある。

甕Ｆ　口縁部が外反し、外面にタタキ調整がみられるもの。底部が平底のもの（甕Ｆ１）、底部が丸底のもの（甕Ｆ２）がある。

甕Ｇ　口縁部が内彎するもの。口縁端部が尖り気味のもの（甕Ｇ１）、口縁端部に外傾する端面をもつもの（甕Ｇ２）、口縁端部に丸味をもつもの（甕Ｇ３）、口縁端部が内面に肥厚するもの（甕Ｇ４）、口縁端部に水平な面をもつもの（甕Ｇ５）、口縁端部に内傾する面をもつもの（甕Ｇ６）、Ｇ６の内傾する面がなくなったもの（甕Ｇ７）に分かれる。

甕Ｈ　口縁部が直線的に延びるもの。

甕Ｉ　口縁部が外反し、端部に水平な面をもつもの。

甕Ｊ　口縁部が二重口縁を呈し、端部に水平な面をもつもの。

高杯

高杯Ａ　杯部が浅い鉢形のもの。

高杯Ｂ　杯部は浅い皿形で、稜をもち、口縁部が外反するもの。

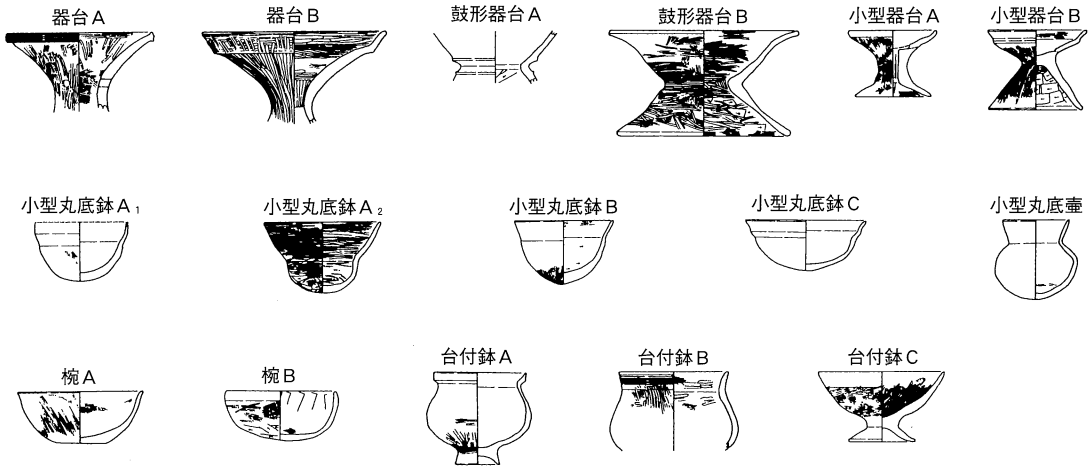
高杯Ｃ　杯部の底部が外反し、口縁部が外反する。器台Ｂの底を閉じたもの。

高杯Ｄ　杯部に稜をもち、口縁部が外反するもの。高杯Ｆ・Ｇに比べると底径が小さい。

高杯Ｅ　杯部に稜をもたず口縁部が外反するもの。

高杯Ｆ　杯部に段状の稜をもち、大型のもの。

高杯Ｇ　杯部に稜をもち、大型のもの。



第19図　弥生土器・土師器の分類（４）

高杯Ｈ　杯部に段状の稜をもつもの。口縁部が外反するもの（高杯Ｈ１）、口縁部が内彎するもの（高杯Ｈ２）に分かれる。

高杯Ｉ　杯部に稜をもつもの。

高杯Ｊ　杯部に稜をもたず、椀形を呈するもの。

器台

器台Ａ　口縁部が拡張しない。

器台Ｂ　口縁部が拡張する。

鼓形器台

鼓形器台Ａ　胴部に突帯をもつもの。

鼓形器台Ｂ　胴部に突帯をもたないもの。

小型器台

小型器台Ａ　杯部の底部に孔が開くもの。

小型器台Ｂ　杯部の底部に孔が開かないもの。

小型丸底鉢

小型丸底鉢Ａ　口縁が内彎するもの。口縁部が短いもの（小型丸底鉢Ａ１）、口縁部が長い（小型丸底鉢Ａ２）に分かれる。

小型丸底鉢Ｂ　口縁が直線的である。

小型丸底鉢Ｃ　口縁部が二重口縁である。

椀

椀Ａ　底部が平底のもの。

椀Ｂ　底部が丸底のもの。

台付鉢

台付鉢Ａ　鉢部が甕形のもの。

台付鉢Ｂ　鉢部がグラス形を呈するもの。

台付鉢Ｃ　鉢部が椀形もしくは漏斗形を呈するもの。

２．Ｉ区出土の土器

SH15001（図版128・129、写真図版136・137）

２～24は床面、１・25は埋土から出土したものである。

１は須恵器高杯である。裾部は二重口縁状に屈曲している。

２は須恵器椀である。２条の凹線の間にやや乱れた波状文が施されている。底部外面にはナデが施されている。

３は須恵器甕である。口縁部の端面に面をもち、口縁部外面の突帯の下に波状文をもっている。

４は土師器高杯Ｇである。杯部は外面に緩やかな稜をもっている。底部が小さく、口縁部が大きく開いている。表面には化粧土が塗られている。内面はヨコナデ後やや斜めに傾く放射状の暗文、外面はヨコナデが施されている。脚部の接合は挿入で、脚柱部の上端に棒状工具による刺突がなされている。

５は土師器高杯Ｆである。内面は粗いタテハケの後、放射状の暗文が施されている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、底部外面はタテハケが施されている。脚部の接合は充填方式である。

６は土師器高杯Ｉである。外面に緩やかな稜をもっている。内面はナデ、口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。

７は土師器高杯Ｈである。外面には緩い稜をもち、端部はやや外反している。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はナデが施されている。脚部との接合は付加方式と思われる。

８は土師器高杯Ｊである。外面はタテハケ、口縁部端部外面から口縁部内面はヨコナデ、底部内面はナデが施され、内面にはヘラミガキが入れられている。

９は土師器高杯である。口縁部は強く内湾し、端部に内傾する面をもっている。表面は摩滅している。

10は土師器高杯である。脚柱部は筒状で、脚裾部で大きく開いている。表面は摩滅している。杯部との接合は充填方式である。

11は土師器高杯である。脚柱部は緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。外面はナデ、脚裾部内面はユビオサエが施され、脚柱部内面は円錐形にヘラケズリがなされている。杯部との接合は挿入方式と思われ、脚柱部上端には刺突状の凹みがあるが、粘土板を巻いて脚柱部を作った時にできた隙間と思われる。

12は土師器高杯である。大型高杯の脚部である。脚柱部は上端部に凹みをもっている。脚柱部は緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。脚裾部の端部に面をもっている。脚柱部外面はナデ、脚裾部外面はヨコナデ、脚裾部内面はヨコハケが施され、脚柱部内面は円錐形にヘラケズリがなされている。

13は土師器高杯である。杯部と脚部の接合は付加方式である。杯部外面はタテハケ、杯部内面はやや摩滅しているためよく分からないがヘラミガキが施されている可能性が高い。脚柱部は上半が中実で緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。脚裾部の端部に面をもっている。脚部外面はナデ、脚裾部内面はヨコナデが施され、脚柱部内面は円錐形にヘラケズリがなされている。

14は土師器高杯である。杯部と脚部の接合は付加方式である。杯部外面はタテハケ後ヘラミガキ、杯部内面はやや摩滅しているためよく分からないがヘラミガキが施されている可能性が高い。脚柱部は上端が中実で緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。脚裾部内外面はヨコナデ、脚柱部外面はタテハケ後ヘラミガキが施され、脚柱部内面は円錐形にヘラケズリがなされている。

15は土師器高杯である。脚柱部は上半が中実で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部外面はタテハケ、

脚裾部内外面はヨコナデが施され、脚柱部内面は円錐形にヘラケズリがなされている。脚柱部上端には杯部との接合のために浅く刺突がなされている。

16は土師器高杯である。脚柱部は中実で、裾部が円盤状に広がっている。表面は摩滅している。

17は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開き、端面は上方を向いている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後斜め方向に軽くナデられている。体部外面はタテハケ後肩部にヨコハケ、体部内面はヘラケズリ後粗くナデが施されている。外面は体部上端を輪状に残して、ススが付着している。

18は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反しながら開き、端部は丸味をもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

19は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、外端縁が外方へ突出している。端面は上方を向いている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、頸部内面はヨコハケ後ナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

20は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反しながら開き、端部は丸味をもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

21は土師器直口壺である。口縁部は内湾し、端部のみ外反させている。口縁部内面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施され、外面は摩滅している。

22は土師器小型丸底壺である。口縁部は頸部から緩く外反している。体部外面はタテハケ及び斜め方向のハケが施されている。体部内面はヘラケズリが施されているが、頸部下には粘土紐の接合痕が認められる。

23は土師器椀Ｂである。口縁部は外反している。表面はほとんど摩滅しているが、底部内面に放射状暗文がかろうじて残存している。

24は土師器把手である。牛角状の把手の表面はナデが施され、本体との接合部のみハケが用いられている。本体の外面はナデ、内面はヨコハケ後ナデが施されている。

25は土師器製塩土器である。器壁は1.8㎜程度である。焼成はやや軟質で、表面は摩滅している。

P10165（図版129、写真図版137）

26・27は住居内のピットより出土したものである。

26は土師器製塩土器である。器壁は1.5㎜前後である。内面には貝殻条痕、外面にはナデが施されている。胎土には径1㎜以下の砂粒が目立ち、焼成は硬質である。

27は土師器甑である。底部付近の破片で、外面はナデ、内面はヘラケズリが施されている。蒸気孔は桟渡しの可能性が高い。

P10035（図版129、写真図版137）

28は須恵器杯身である。受け部の立ち上がりは低く、底部外面はヘラケズリが施されている。

P10095（図版129、写真図版137）

29は須恵器杯身である。受け部は薄く、端部に面をもたない。底部外面はヘラケズリが施されている。

SD10001（図版130～137、写真図版138～147）

SD10001は当初のSD10001Bの部分と西端部に護岸を設けて分水したSD10001Aの部分とに分かれている。

SD10001A　出土土器は多く、初期須恵器などを含んでいる。

30は須恵器杯蓋である。稜は鋭く外へ突出し、口縁部は低い。端部は外反し、内傾する面をもっている。

31は須恵器杯身である。口縁部は内傾して立ち上がり、端面は内傾している。底部は平坦で、外面にヘラ記号をもっている。

32は須恵器蓋である。天井部と口縁部の境はなだらかに稜をなすが、鋭くはない。口縁端部に内傾する面をもっている。天井部外面には回転ナデ、天井部内面にはナデが施されている。

33は須恵器甕である。頸部外面と体部中位に波状文が施され、体部の波状文の上下には凹線が入れられている。底部外面はナデが施されている。色調は断面がやや赤紫色である。

34は須恵器壺である。口縁部を欠くものの有蓋壺と考えられる。頸部は上方に立ち上がり気味に開き、２条の突帯を持っている。突帯間と下の突帯の下に櫛描き波状文を持ち、突帯間の櫛描き波状文は中央部に一度波状文を回してから、さらにその上下にそれぞれ波状文を廻らしている。肩部よりやや下がった位置に４条１単位の櫛描き直線文を３条廻らし、櫛描き直線文間に波状文を廻らしている。体部下半部に細かめの平行タタキが残存し、体部中位には平行タタキの上にカキ目が残存している。内面は底部付近がナデで、その他は回転ナデである。色調は断面が赤紫色である。

35は須恵器甕である。口縁端部は水平に近いくらいまで大きく開いている。口縁部直下に鋭く突き出た突帯をもっている。色調は断面中央付近のみがやや赤紫色である。

36は須恵器甕である。中型の甕である。頸部外面に２条の突帯、口縁部外面に１条の突帯をもち、頸部の突帯はシャープでない。頸部の突帯の上下に櫛描き波状文を廻らしている。口縁部は先端部に向かって細くなり、端部は丸みをもっている。外面は自然釉がかかった部分が多い。体部は平行タタキが施され、体部中位より上ではカキ目が施されている。内面は口縁部から体部上位までが回転ナデ、体部中位以下がナデである。突帯と波状文の構成はTK83号窯、TK87号窯と似ている。

37は須恵器甕である。外面には１辺2.5㎜前後の格子タタキが施され、内面には同心円当て具が残存している。

38は須恵器甕である。口縁部は拡張せず、外傾する面をもち、口縁部下に低い三角状の突帯をもっている。頸部には二条の凹線をもち、その上下に波状文が施されている。体部外面には平行タタキが施され、体部内面には同心円当て具痕の後ナデが施されている。同心円はナデによりほとんど消えてしまっている。

39は土師器二重口縁壺Ａである。口縁部は２次口縁部の外面下端に垂下部を貼り付けて、縁帯を広くしていたと考えられる。口縁直下に竹管文を連続させ、縁帯部の中央付近では爪形状のスタンプ３つ以上を単位として断続的に施文している。外面及び２次口縁部内面はヨコナデ、１次口縁部内面はヨコハケが施されている。

40は土師器二重口縁壺Ａである。口縁は二重口縁で、稜は外方へ突出している。２次口縁部は大きく開いている。内面及び２次口縁外面はヨコナデ、１次口縁部外面はヨコハケ後ヨコナデが施されている。

41は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁は二重口縁で、稜は外方へ突出している。２次口縁部は高く、やや内傾し、端面は上方を向いている。１次口縁部内面はヨコナデ、２次口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヨコハケが施されている。口縁部内面はタール状

に黒くすすけている。

42は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁は二重口縁で、稜は外方へ突出しているが稜は鈍い。２次口縁部は上方へ延びているが低い。端面は上方を向き、外縁が外方へ突出している。２次口縁部外面はヨコナデ、１次口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ後肩部のみヨコハケ、体部内面はヨコハケ及び斜め方向のハケ、底部外面はナデ、底部内面はユビナデが施されている。１次口縁部の２次口縁部との接合面にはヨコハケが施されている。頸部付近から体部の内面には黒色の付着物が部分的に残存している。

43は土師器直口壺Ｂである。口縁部はやや外反しながら上方へ延びるが、あまり高くはない。体部外面下半にはススが付着している。口縁部外面はヨコナデ後縦方向のヘラミガキ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面上位～中位はヨコハケ後縦方向のヘラミガキ、体部外面下位はナデ、体部内面下位はタテハケ、体部外面中位は縦方向のヘラナデが施され、体部内面上位には粘土紐の接合痕が残存している。

44は土師器小型丸底壺である。口縁部外面はヘラミガキ、体部外面上半はタテハケ後ヘラミガキ、体部外面下半はヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部内面はヘラミガキ、体部内面はヘラナデが施されている。

45は土師器小型丸底壺である。体部中位が張り出している。体部外面はナデ、底部外面はヘラケズリ後ナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

46は土師器小型丸底壺である。体部の器壁は８㎜と厚い。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面上位はタテハケ後ヨコナデ、体部外面中位以下はハケ、体部内面はヘラナデが施されている。

47は土師器甕Ｅ２である。口縁部はやや外反しながら開き、端部に丸味をもっている。体部は球形である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ、体部外面中位はヨコハケ、体部外面下位はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。口縁部外面から体部外面中位にかけてススが付着している。

48は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反しながら開き、口縁端部に丸味をもっている。口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はタテハケ後ヨコハケ、体部外面はタテハケ後斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

49は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反しながら開き、口縁端部に丸味をもっている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

50は土師器甕Ｉである。口縁部は直線的に開き、端面は上方を向いている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面中位はヘラケズリが施されている。体部内面上位はナデが施され、指頭痕が残存している。

51は土師器甕Ｉである。口縁部は直線的に立ち上がり、あまり開かない。端面は上方を向いている。口縁部は内外面にヨコナデ、体部外面はヨコハケ、底部内面はヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

52は土師器Ｇである。口縁部は直線的に開き、外端縁が外方へ突出している。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はタテハケ後中位以下はヘラケズリが施されている。口縁部及び体部中位の外面にはススが付着している。

53は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がり、端部に内傾する面をもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。口縁部外面と体部外面中位にはススが付着している。

54は土師器甕Ｊである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部はやや外反し、端面は上方を向いている。

口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ及び斜め方向のハケ後肩部のみヨコハケ、体部内面上半はヘラケズリ、体部内面下半はハケが施されている。体部外面にはススが付着している。

55は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、外端縁が外方へ突出し、端面は上方を向いている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

56は土師器甕Ｅ２である。口縁部は緩く外反しながら開き、端面は外方を向いている。体部は球形に近い。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラナデ及びナデが施されている。口縁部の一部と体部中位以下の外面にはススが付着している。

57は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁部は二重口縁である。２次口縁部は外反するが、大きくは開かない。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上半はナデ、体部外面下半はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

58は土師器直口壺Ｂである。口縁部は内湾気味で、体部はやや肩が張っている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。底部外面にはススが付着している。

59は土師器高杯Ｇである。杯部の口縁端部と脚部の裾端部に面をもっている。杯部は口縁部内面にヨコハケ、底部内面にナデ、口縁部外面にタテハケ後ヨコナデ、底部外面にヘラナデが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。脚部は脚柱部外面にヘラナデ、脚裾部外面にナデ、脚裾部内面にヨコハケが施されている。

60は土師器高杯Ｇである。裾端部に面をもっている。杯部は口縁部内面にタテハケ後ナデ、底部内面に放射状のヘラミガキ、外面にタテハケが施されている。脚部は脚柱部外面上半にタテハケ、脚柱部外面下半から脚裾部外面にナデ、脚裾部内面にヨコハケが施されている。脚柱部内面上方に棒状工具による刺突、脚柱部内面下端に爪形圧痕、脚裾部内面に布目をもっている。

61は土師器高杯Ｆである。杯部に鋭く突出した稜をもっている。裾端部には凹線状の面をもっている。杯部は内外面ともヨコナデが施されている。脚柱部は上半が中実で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部外面は縦方向のヘラナデの後ヨコナデ、脚裾部は内外面ともヨコナデが施されている。

62は土師器高杯Ｈ１である。杯部にやや緩やかな稜をもっている。脚柱部は上端が中実で、杯部と脚部の接合は挿入と思われる。口縁部内面はヨコナデ、底部内面はナデが施された後、底部内面には放射状暗文、口縁部内面には斜め方向の螺旋状の暗文が施されている。口縁部外面にヨコナデ、底部外面にナデ、稜下部にヘラケズリ、脚接合部付近にタテハケが施されている。外面はさらに縦方向の暗文が粗く入れられている。

63は土師器高杯Ｅである。杯部が浅く、口縁部は緩やかに開いている。口縁端部に面をもっている。脚部は脚裾部で大きく開き、端部に面をもっている。２方の円形透かしが入れられている。杯部と脚部の接合は充填方式である。杯部は口縁部内面にヨコハケ、口縁端部内外面にヨコナデ、口縁部外面から底部外面にナデ、脚部との接合部にヘラケズリが施されている。内面には放射状の暗文が比較的密に入れられている。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキ、脚裾部外面はナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はヨコナデが施されている。

64は土師器高杯Ｅである。杯部が笠形で、杯部と脚部の接合は充填である。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部外面はタテハケ、底部内面はナデが施されている。

65は土師器高杯Ｅである。口縁が直線的に外へ開いている。脚柱部は筒状で、脚裾部で大きく開いて

いる。杯部は内面から口縁部外面にヨコナデ、底部外面にナデが施されている。杯部と脚部の接合は充填方式と思われる。脚部は脚柱部外面にナデ、脚裾部外面上位にヘラナデ、脚裾部外面下位から脚裾部内面下位にヨコナデ、脚柱部内面から脚柱部内面上位にヘラケズリが施されている。

66は土師器高杯Ｊである。杯部の内底面が平坦で、口縁部は直線的に開いている。脚柱部は筒状で、脚裾部を大きく開いている。脚裾部の端部に面をもっている。杯部は底部内面にナデ、口縁部内面に斜め方向のハケ後ヨコナデ、外面にタテハケ後口縁部外面のみヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。脚部外面はナデが施されているが、化粧土がダマになっており、あまりきれいではない。脚裾部内面はヨコハケが施されている。

67は土師器高杯Ｊである。口縁部が内湾し、端面が内傾している。脚部は脚柱部から脚裾部に向かって緩やかに開き、端部に面をもっている。杯部は底部内面にナデ、口縁部内外面にヨコナデ、底部外面にナデ、底部外面下端にタテハケが施されている。内面には放射状の暗文が入れられている。底部外面には部分的にひび割れが見られる。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。脚部は脚柱部外面にヘラナデ後ナデ、脚裾部内外面にナデ、脚柱部内面にヘラナデが施されている。脚柱部内面上端には棒状工具による刺突がなされている。

68は土師器高杯Ｈ２である。杯部に段状の稜をもち、口縁部が内湾している。杯部の底部内面にナデ、口縁部内外面にヨコナデ、底部外面にナデが施されている。杯部と脚部の接合状況はよくわからないが、接合部の外面にハケが施されている。脚柱部外面には縦方向のヘラナデ、脚柱部内面から裾部内面にはヘラケズリが施されている。

69は土師器高杯Ｈ２である。杯部に段状の稜をもち、口縁部は内湾し、端面は内傾している。杯部の底部内面にナデ、口縁部内外面にヨコナデ、底部外面にナデが施されている。杯部と脚部の接合状況はよくわからない。

70は土師器高杯Ｊである。口縁端部外面を面状にくぼませている。脚柱部は裾部に向かって緩やかに開いている。脚端部に面をもっている。杯部は底部内面にハケ、口縁部内面にヨコハケ、口縁部外面にヨコナデ、底部外面にナデが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われ、杯部外面の接合部付近には脚部をねじ込んだ時の螺旋状の皺が見られる。脚部は脚柱部外面にヘラミガキ、脚裾部外面にナデが施されている。脚裾部内面はヘラナデが施されているが、裾端部付近にはわずかに布目が残っている。脚柱部内面上方に棒状工具による刺突、脚柱部内面と脚裾部内面の境付近に爪形圧痕をもっている。

71は土師器高杯Ｊである。口縁端部のみわずかに外反させている。脚端部に面をもっている。杯部と脚部の接合は挿入と思われる。杯部は底部内面にナデ、口縁部内外面にヨコナデが施され、内面には放射状の暗文が入れられている。杯部の底部外面から脚柱部の外面にかけてはヘラナデが施され、杯部と脚部の接合部には凹線が入れられている。脚裾部外面はナデ、脚裾部内面はヨコハケが施されている。脚柱部内面上方に棒状工具による刺突をもっている。

72は土師器高杯Ｊである。杯部が半球状を呈し、脚部は脚柱部から脚裾部に向かって緩やかに開いている。杯部は口縁部内面にハケ後ヨコナデ、口縁部外面にヨコナデが施されている。底部外面はナデが施されているが、表面にひび割れが多く見られる。杯部と脚部の接合部付近にのみタテハケが施されている。脚部は脚柱部外面に縦方向のヘラミガキ、脚裾部外面にヘラミガキ、脚裾部内面に布目後ヨコハケが施されている。

73は土師器高杯Ｊである。杯部がやや浅い半球形を呈し、口縁部は上方に向いている。杯部は底部内

面にナデ、口縁部内面から口縁部外面にヨコナデが施されている。底部外面はナデが施されているが、表面のひび割れが顕著である。接合部付近にはタテハケが施されている。杯部と脚部の接合は挿入方式で、脚部内面上方に竹管状の刺突が施されている。

74は土師器高杯Ｊである。杯部の内底面が平坦で、口縁の端面が上方を向いている。杯部は内面から口縁部外面と底部外面下位にヨコナデ、底部外面上位にナデが施されている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。

75は土師器高杯Ｊである。杯部の底部付近がやや直線的で、口縁部付近で丸味をもっている。杯部は底部内面にヨコハケ、口縁部内面から口縁端部外面にヨコナデ、底部外面にナデが施されている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。脚柱部は上半が中実で、脚裾部はゆるやかに開いている。脚柱部外面はナデ、脚裾部内外面はヨコナデ、脚柱部内面はヘラケズリが施されている。

76は土師器高杯Ｊである。杯部がやや深手で、底部から口縁部にかけてかなり丸味をもっている。杯部は内面にナデ、口縁部内面から口縁部外面にヨコナデ、底部外面にナデが施されている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。脚柱部は中実で、底部にわずかな窪みをもつ程度である。接合時に面取りが施され、そのまま杯部底部外面にまでヘラケズリが及んでいる。脚裾部は円盤状に広がっている。内外面ともヨコナデが施され、脚柱部下端の面取り上にまで及んでいる。

77は土師器高杯Ｊである。杯部がやや深手で半球形に近い。杯部は底部内面にナデ、口縁部内面から底部外面にヨコハケ、が施されている。杯部内面には凹線状の放射状暗文が入れられている。杯部と脚部の接合は接合方式と思われる。脚柱部は非常に太く、上半部が中実で、裾部はゆるやかに開いている。脚柱部外面にタテハケ後ナデ、脚裾部内面にヨコハケが施されている。

78は土師器高杯の脚部である。杯脚柱部上半が中実で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部外面は面取り状のヘラナデの後ヨコナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。脚裾部は脚柱部に斜め方向の刻み目を入れたところに接いで作られている。

79は土師器高杯の脚部である。脚柱部が中実で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部の上端部の剥離面に凹みをもち、脚裾部内面を大きく円錐形に抉っている。脚柱部外面はナデ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。

80は土師器小形器台Ｂである。杯部は底部内面にナデ、口縁部内外面にヨコナデ、底部外面にナデ、脚柱部は外面にナデ、内面にヘラケズリが施されている。

81は土師器小型丸底鉢Ｂである。内面はヘラミガキ、口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。

82は土師器椀Ｂである。底部は丸底である。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

83・84はミニチュア土器である。83は平底である、内外面ともナデが施されている。外面にはひび割れが顕著である。84は内外面とも指頭痕を残している。

SD10001B　土師器甕・高杯・小型丸底壺・小型器台などが出土し、須恵器は出土していない。

85は土師器Ｈである。口縁部が単純なくの字口縁で、端部に丸味をもっている。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面に板ナデ、体部内面にヘラケズリが施されている。体部外面にはススが付着している。

86は土師器甕Ｅ２である。口縁部が頸部から緩やかに外反しながら開き、端部は丸味をもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヨコハケ後ヘラケズリが施されている。

87は小型丸底壺である。大きく開く口縁部をもち、端部はわずかに内湾している。体部外面中位～口縁部外面・口縁部内面～体部内面上位はヘラミガキ、体部外面下位はナデ、底部内面はヘラナデが施されている。

88は土師器台付鉢Ｂである。内外面ともヘラミガキが施されている。

89は土師器高杯Ｉである。杯部底部と口縁部と間に稜をもち、口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がっている。脚柱部は筒状で、裾部は円盤状に広がっている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。杯部は底部内面にナデ、口縁部内面にヨコハケ、底部外面にナデ、底部外面の稜付近から口縁部外面下半にタテハケ、口縁部外面上半にヨコナデが施されている。脚柱部外面から脚裾部外面はナデ、脚裾部内面はヨコハケ、脚柱部内面はヘラケズリが施されている。

90は土師器高杯Ｊである。杯部の内底面が平坦である。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、底部内面はナデが施されている。

91は土師器高杯Ｊである。杯部の外面にタテハケ、内面にヘラナデが施されている。口縁部外面にはひび割れが目立っている。杯部と脚部の接合は挿入と思われる。脚柱部内面には棒状工具による刺突がなされている。

92は土師器高杯Ｊである。杯部がやや器高の低い椀形を呈している。内面から口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデ、底部と脚部の接合部付近はタテハケが施されている。底部内面には放射状暗文、口縁部内面には斜め方向の暗文が入れられている。杯部と脚部の接合はよく分からない。

93は土師器高杯Ｉである。杯部外面にゆるい稜線をもっている。杯部は底部外面にヨコナデ、底部内面に放射状のヘラミガキが施されている。脚部は脚柱部から脚裾部に向かって緩やかに開いている。脚柱部上半は中実で、脚柱部下半の内面を大きく円錐形に抉っている。脚柱部外面はナデ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。

94は土師器高杯の脚部である。脚柱部から脚裾部にかけて緩やかに開いている。脚裾部の端部に面をもっている。表面はほとんど摩滅しているが、脚裾部内面の端部付近に布目が付着している。95の脚部とほぼ同様の製作技法と考えられる。

95は土師器高杯の脚部である。脚柱部から脚裾部にかけて緩やかに開いている。脚柱部上半は、棒状工具により穿孔されている。脚柱部外面は面取り上のヘラナデ、脚裾部外面はナデ、脚裾部内面はナデが施されている。脚柱部外面の上端と脚裾部内面の端部付近に布目が付着している。

96は土師器高杯の脚部である。脚柱部が緩やかに開く筒状で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部外面はナデ、裾部内外面はヨコナデ、脚柱部内面はヘラケズリが施されている。

97は小型器台Ａである。受部は底部内面から口縁部内面にヘラミガキ、口縁端部内外面にヨコナデ、底部外面にタテハケが施されている。脚部は円形の透かし孔をもっている。外面にはタテハケ、内面にはヘラケズリが施されている。

SD10001　Ａ・Ｂどちらか区別できないで取り上げられたものである。

須恵器蓋杯（98～101）・甕（102～105）、土師器壺・甕などが出土している。

98～100は須恵器杯蓋である。98は天井部が平坦で、外面は灰をかぶっている。天井部外面の約９割がヘラケズリされている。99は天井部外面の約９割がヘラケズリされている。100は稜がやや甘く、天井部外面の８割弱がヘラケズリされている。天井部内面に漆が付着している。

101は須恵器杯身である。口径はやや小さく復元されているが、ひずんでいる可能性が高い。口縁部は高く、端面は水平を向いている。

102・103は須恵器甕である。口縁端部外面に1条の突帯をもっている。102の端部は丸味をもっている。103の端部は尖り気味で、口縁部外面に波状文をもっている。断面は赤紫色を呈している。

104は須恵器甕である。頸部に2条の突帯をもっている。突帯は稜をもたず、丸味をもっている。突帯の上位には波状文が施されている。断面は赤紫色を呈している。

105は須恵器甕である。口縁部は肥厚し、外面に突帯と波状文をもっている。突帯は低いが、稜は鋭い。

106は二重口縁壺Bである。口縁部の稜が外側に突出している。2次口縁部は内部傾し、端面は上方を向いている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

107は二重口縁壺Aである。口縁部内面～体部外面上端にヨコナデ、体部外面にヨコハケが施されている。体部内面はヘラケズリが施されているが、上端部には粘土紐の接合痕が残っている。外面にはススが付着している。

108・109は土師器小型丸底壺である。108は口縁部外面にヨコナデ、体部外面上位にタテハケ後ヨコナデ、体部外面下位にハケ後ヘラナデ、口縁部内面にヨコハケ後ヨコナデ、体部内面にヘラケズリが施されている。

109は体部最大径の部分が張っている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面から底部外面はナデ、体部内面から底部内面はヘラケズリが施されている。底部外面には指頭圧痕が認められる。

110・111は土師器直口壺Aである。口縁端部はやや外側に折れ、先端は尖り気味である。口縁部外面はヨコナデ後縦方向のヘラミガキ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面は横方向のヘラミガキが施されている。110ではヘラミガキ前のタテハケがわずかに残存している。体部内面はナデが施されている。

112は土師器甕Hである。口縁部はやや上方へ延び、口縁端部はやや尖り気味である。内外面ともヘラミガキが施されている。

113は土師器甕E2である。口縁部は外反しながら開き、端部は丸味をもっている。口縁部は内画面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ後ナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

114は土師器甕E2である。口縁部が直線的に外上方へ延び、端部は丸味をもつがやや尖り気味である。口縁部内面はヨコナデ、口縁部外面から体部上位はタテハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコハケが施されている。体部内面はハケの後ヘラケズリが施されているが、強くは削られていない。外面にはススが付着している。

115は土師器甕Hである。外面にススが付着している。口縁部は外反し、端部に丸味をもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は縦及び斜め方向のハケ後体部上位のみナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

116は土師器甕E2である。口縁部は外反しながら開き、端部はやや丸味をもった面となっている。口縁部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

117は土師器甕Cである。口縁部は二重口縁で、稜は鋭い。端部は丸味をもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はナデ、体部外面はヘラケズリ後ナデが施されている。

118は土師器甕Dである。口縁部は二重口縁で、稜は鋭く外側に突出している。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

119は土師器二重口縁壺Bである。口縁部は受け口状で、外面の稜はなだらかである。屈曲部の内面は凹線状に強く窪んでいる。端部はやや丸味をもった面となっている。口縁部は内外面ともヨコナデが

施されてる。

120は土師器甕Ｃである。口縁部はやや受け口状で、外面の稜はなだらかである。端部は丸味をもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にススが付着している。

121は土師器甕Ｇ４である。口縁部は内湾気味に立ち上がっている。端部は内側に巻き込むように肥厚させ、端面は上方を向き、やや丸味をもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。表面にはススが付着している。

122は土師器高杯Ｊである。杯部は内底面が平坦である。底部外面はタテハケ、口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、底部内面はナデ、口縁部内面は斜め方向のハケ後ヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は挿入方式である。

123は土師器高杯Ｊである。杯部は内底面が平坦である。底部外面はタテハケ、口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、底部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は充填方式で、充填粘土の下端に櫛状工具による刺突がなされている。

124は土師器高杯Ｊの脚部である。脚柱部は筒状で、脚裾部で大きく開いている。脚裾端部に面をもっている。脚柱部上端の剥離面は平坦で、杯部と脚部の接合は付加方式と考えられる。脚柱部外面にはヘラナデ後ナデが施され、杯接合時に付いたハケの痕跡が残存している。脚柱部外面はナデ、脚裾部外面はナデが施されている。脚柱部上方には棒状工具による刺突がなされている。脚裾部内面にはヨコハケが施され、爪形圧痕が認められる。

125は土師器高杯Ｊである。杯部に稜をもたず、口縁部はやや内湾している。杯部は脚柱部上半が中実で、脚裾部は緩やかに開いている。裾端部に面をもっている。杯部は底部内面にナデ後ヘラミガキ、口縁部内面にタテハケ後ヨコナデが施されている。脚柱部上端から口縁部内面にかけてタテハケが施された後口縁部外面にヨコナデが施されている。脚部は脚柱部外面にヘラミガキ、脚裾部内外面にヨコハケ後タテハケが施されている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。

126は土師器高杯Ｈ２である。杯部に稜をもち、口縁部は内湾している。脚部は脚柱部上半が中実で、脚裾部は円盤状である。杯部は底部内面にナデ、口縁部内外面にヨコナデ、底部外面にナデ及びヘラナデが施されている。脚部は脚柱部外面にヘラナデ後ナデ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。脚柱部内面は円錐状に削られている。杯部と脚部の接合は付加方式と思われる。

127は土師器高杯Ｈ２である。杯部は口縁部と底部に境が粘土紐の接合痕状に窪み、口縁部は内湾している。脚部は脚柱部上半が中実で、脚裾部は円盤状である。杯部は底部内面にナデ、口縁部内外面にヨコナデ、底部外面にナデ及びヘラナデが施されている。脚部は脚柱部外面にナデ、脚裾部内外面にヨコナデが施され、脚裾部外面にはさらに縦方向のナデが施されている。脚柱部内面は円錐状に削られている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。

128は土師器高杯Ｈ２である。杯部は椀形で、わずかな稜をもっている。杯部は内面にハケ、口縁部外面にヨコナデ、底部外面にナデが施されている。脚柱部上半は中実で、裾部に向かって緩やかに開いている。脚柱部外面はタテハケ後ナデ、脚柱部内面はヘラケズリが施されている。杯部と脚部の接合は挿入方式と考えられる。

129は土師器高杯の脚部である。脚柱部は中実で、脚柱部の底部側に窪みをもち、脚裾部は円盤状に広がっている。脚柱部外面にはヘラナデ、脚裾部内外面にはヨコナデが施されている。脚裾部内面中央

付近にはハケ目がわずかに残存している。

130は土師器高杯の脚部である。脚柱部は中実で、裾部で大きく開くものと思われる。裾部には4方の円形透かしをもっている。脚柱部外面はナデが施されている。杯部の残存部分のみ脚部と比べて摩滅が著しく、破損後にすりこぎとして利用された可能性が考えられる。

131は土師器高杯H2である。小型で器壁が非常に薄い。杯部に稜をもっている。杯部と脚部の接合は充填方式と考えられる。杯部は底部内面から口縁部内面下位・底部外面から口縁部外面下位にヘラミガキ、口縁部内外面上位にヨコナデ、脚部は外面・裾部内面にヘラミガキ、脚柱部内面にヘラケズリが施されている。

132は土師器高杯である。脚部は低く杯部との接合部から大きく開いている。杯部内面はタテハケ後ヘラミガキ、杯部外面から脚部外面上半はタテハケ、脚部外面下半はタテハケ後ヘラミガキ脚部、脚部内面上位はナデ、脚部内面中位はヨコハケ、脚部内面下位はヨコナデが施されている。

133は土師器器台である。脚裾部の接地面に面をもっている。外面はヘラミガキ、内面上位はナデ、内面下位はヨコハケ後ヨコナデが施されている。

134は土師器小型丸底鉢Bである。口縁部は直線的に外側へ開き、端部は丸味をもっている。内外面ともヘラミガキが施されているが、口縁部外面には及んでいない。

135は土師器椀Bである。口縁部は短く、器高が低い。内面にはナデ、口縁部外面にはヨコナデ、底部外面にはヘラケズリが施されている。小型丸底鉢の系統のものと考えられる。

136は土師器椀Aである。底部は平底で、口縁部は内湾している。内面はヘラナデ、外面はナデが施されている。

137は土師器椀Bである。底部は平底で、口縁部は内湾している。器壁が薄い。内外面ともヘラミガキが施され、体部外面には一部タテハケが残存している。

138は土師器椀Bである。底部は丸底で、口縁部は内湾している。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラケズリが施されている。内面にはやや密に放射状暗文が入れられている。

139・140は土師器台付鉢である。杯部内外面と脚部外面にヘラミガキ、脚部内面にヨコナデが施されている。140は作りが粗雑で、内外面ともナデが施されている。

141は土師器蓋である。内外面ともヘラミガキが施されている。

142～144は土師器製塩土器である。器壁は1.8～2.4㎜と薄く、焼成は硬質である。内外面ともナデが施されている。

145・146はミニチュア土器である。145は平底である。外面にはナデが施されているが、ひび割れが顕著である。内面はヘラナデが施されている。146は半球形で、内外面ともナデが施されている。

SD10002（図版137、写真図版147・148）

SD10003より相対的に古いものと考えられる。

147は弥生土器二重口縁壺Aである。口縁部内面にはヘラミガキが施され、2次口縁部の外面には、上部に擬凹線、下部にコンパス状に施文された波状文が施されている。

148は弥生土器広口壺Bである。口縁部は外反しながら開くがあまり大きくは開かない。端部には面をもつが、拡張はしていない。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面上位はタテハケ、体部外面中位はヨコハケ、体部外面下半はヘラミガキ、底部外面はナデ、内面はヘラケズリが施されている。

149は弥生土器甕Ｂである。口縁端部を上下にやや拡張し、端面に２条の凹線をもっている。体部内面はヘラケズリ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデが施されている。口縁部外面はヨコナデの後、体部外面のタテハケが及んでいる。

150は弥生土器甕Ｂである。口縁は二重口縁で、不明瞭な擬凹線が施されている。頸部はほとんどくびれない。口縁部内面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

151は弥生土器甕Ｃである。口縁部は内外面ともヨコナデが施されている。

152は弥生土器高杯Ａである。杯部は二重口縁で、端部はやや内湾している。内外面ともヘラミガキが施されている。

153は弥生土器高杯Ｂである。杯部は口径が大きく、浅い。縁部がやや垂下する稜をもち、口縁部は強く外反している。杯部の内面及び底部外面には縦方向のヘラミガキが密に施され、口縁部外面には網目状に交差してヘラミガキが施されている。

154は弥生土器器台である。上下３段に３方の円形透かしが穿たれている。外面はタテハケ後ヘラミガキ、受部内面はヘラミガキ、脚柱部内面はヘラケズリが施されている。

155・156は土師器蓋である。155は外面にヘラミガキ、内面にヨコハケが施されている。156は小型で、縁部が円盤状である。外面にはヘラミガキ、内面にはナデが施されている。

SD10002・10003（図版137、写真図版148・149）

SD10002とSD10003の合流している部分から出土したものである。

157は土師器二重口縁壺Ａである。外面及び口縁部内面～頸部内面にはヘラミガキ、体部内面にはヘラケズリが施されている。

158は土師器台付鉢Ｂである。杯部は強く内湾し、端部のみ短く外反している。内外面ともヘラミガキが施されている。

159は高杯の脚部である。脚柱部筒状で短く、内部には粘土が充填されている。脚裾部は大きく開いている。裾部上端には一方向の円形透かしが入れられている。外面にはヘラミガキ、脚柱部内面にはヘラケズリ、脚裾部内面にはヨコハケが施されている。

160は台付鉢Ｃである。杯部内面にはヘラミガキ、杯部外面と脚部内外面にはナデが施されている。

161はミニチュア土器である。平底で器壁が薄い。口縁部内面にヨコハケ、底部内面及び外面にナデが施されている。

SD10003（図版138、写真図版149）

SD10002よりは相対的に新しいものと考えられる。

162は土師器甕Ｆ１である。口縁部は頸部からなだらかに外反して開いている。口縁端部に面をもち、外縁がやや突出している。口縁部内外面にはヨコナデ、体部外面には平行タタキの後タテハケ、体部内面にはヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

163は土師器甕Ｅである。口縁部は頸部で屈曲して外に開いている。口縁端部に面をもち、外縁がやや突出している。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコナデが施され、その上に下方からのタテハケが一部及んでいる。口縁部内面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

164・166は土師器甕Ｃである。口縁部外面上半をやや強くナデることにより、口縁部外面に緩い稜が

付いている。164は口縁部外面にヨコハケ、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にタテハケ、体部外面にヘラケズリが施されている。頸部外面には指頭痕が顕著である。166は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面に粗いナデ、体部内面にヘラケズリが施されている。いずれも外面にススが付着している。

165は土師器甕Cである。口縁部は二重口縁で、端部外面に擬凹線をもっていない。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

167・168は弥生土器甕の底部である。底部の平底の径は小さい。167は体部外面にタテハケ、内面にヘラケズリ、底部外面にナデが施されている。外面にはススが付着している。168は体部外面及び底部外面に平行タタキが、内面にタテハケが施されている。

169は土師器高杯Aである。口縁部内外面はヘラミガキ、底部外面はハケ後ヘラミガキが施されている。底部内面は剥離が激しい。

170は土師器高杯の脚部である。脚柱部は筒形で短く、裾部は大きく開いている。杯部と脚部の接合は充填方式と考えられる。小さい3方の円形透かしが空けられている。外面にはヘラミガキ、脚裾部上位にヘラケズリ、脚裾部内面にヨコナデが施されている。

171は土師器器台Bである。受け部は外反しながら開き、口縁部は2重口縁である。内外面ともヘラミガキが施されている。

172は土師器台付鉢である。底部内面は放射状のナデ、口縁部内外面はヨコナデ、底部外面及び脚部内外面はナデが施されている。

173・174は土師器有孔鉢である。173は外面に板ナデ、底部内面にヘラミガキ、体部内面及び口縁部内面にヘラケズリが施されている。174は体部外面にタテハケ、口縁部外面にヨコハケが施されている。内面はヘラケズリが施されているが、口縁部付近には一部ヨコハケが残存している。

175は土師器椀Aである。底部は平底で、体部は椀形である。口縁部外面から体部外面上位はヘラミガキ、体部外面下位はタテハケ、口縁部内面はヘラナデ、底部内面はヘラケズリが施されている。

176・177はミニチュア土器である。176は器壁が薄く、平底である。内外面ともヘラミガキが施されている。177は壺形で、外面はナデが施されているがひび割れが見られ、内面にはヘラナデが施されている。

氾濫原（SR10001）（図版138・写真図版150）

須恵器杯身、土師器甕・小型丸底壺が出土している。

178は須恵器杯身である。底部外面にヘラケズリが施され、内面に漆が付着している。

179は土師器甕である。器壁は厚く、器形はやや寸胴で、口縁部は短い。内面はヨコハケ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、底部外面はヨコハケが施されている。外面にススが付着している。

180は土師器小型丸底壺である。二重口縁の屈曲は鋭く、器壁は比較的薄い。口縁部は内外面にヨコナデ、体部外面上半はタテハケ後ヨコナデ、体部外面下半はハケ、体部外面上半はヘラケズリ、体部外面下半はヘラケズリ後ナデ・ユビオサエが施されている。

Ⅰ区包含層（図版138、写真図版150）

包含層からは遺構から出土した土器と同じく弥生時代から古墳時代の土器が多く出土しているが、遺構出土のもの以上に良好なものは存在しない。遺構からの出土がない律令期の須恵器のみを報告する。

181は須恵器杯B蓋である。天井部は板状で、縁部もほとんど屈曲しない。天井部外面は回転ヘラケ

ズリ、縁部内外面は回転ナデが施されている。天井部内面の中央付近は硯として利用されたかのごとく平滑である。

3．Ⅱ区出土の土器

SH20001（図版139、写真図版151）

182・183・185・188は床面、191・192は竈、184・186・187・189・190は埋土からの出土である。

182は須恵器杯蓋である。稜はほとんど突出せず、口縁部内面の端面は凹線状である。

183・184は須恵器杯身である。底部は平坦で、口縁端部に面をもたない。184は底部外面にヘラケズリが施されているが、183は回転ヘラ切り後粗いナデが施されている。183の焼成は硬質であるが、還元されておらず、色調は橙色である。

185は須恵器有蓋高杯蓋である。口径が大きく、稜線は凹線状になっている。口縁端部に内傾する面をもっている。

186は須恵器甕である。外面には１辺２㎜程度の格子タタキ後ナデ、内面にはナデが施されている。

187は須恵器器台である。裾部は緩く外反し、端面は外方を向いている。透かしは６方の長方形透かしと考えられる。透かし下には２条の突帯が廻り、その直上には波状文が施されている。

188～190は土師器椀Ｂである。188・189は器壁が厚い。口縁部外面にはヨコナデ、底部外面には手持ちヘラケズリ、内面にはナデが施され、放射状の沈線が入れられている。190は188・189に比べて器壁がやや薄く、器高が高い。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部外面は手持ちヘラケズリ、底部内面はナデが施されている。

191は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内面はヨコハケ、頸部内面は斜め方向のハケ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。口縁部外面にはススが付着している。

192は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SH20003（図版139・140、写真図版152・153）

195・199・202・204～206・209・211は床面、200はSK20035 、193・194・196～198・201・203・207・208・210は埋土から出土したものである。

193は須恵器壺もしくは甕と考えられる。体部上端に列点文が施されている。

194・195は土師器小型丸底壺である。194は頸部がなだらかで、口縁部はやや内湾している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面上位・中位はナデ、体部内面下位は指頭痕が施されている。195は体部外面下半にはハケ、体部内面上位にはナデ、体部内面中位にはタテハケ、体部内面下位にはタテハケ後ナデが施され、体部外面上半は剥離が著しい。外面と頸部内面には化粧土が塗られている。

196は土師器甕である。表面は摩滅している。

197は土師器甕Ｅ２である。口縁部はわずかに外反するが、あまり開かない。端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

198は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナ

デ、頸部内面はヨコハケ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリである。

199は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開き、端部に上方を向く面ををもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面上位はヨコハケ、体部外面中位は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

200は土師器甕Ｉである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面上位はヨコハケ、体部外面中位は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

201・202は土師器高杯Ｈ１である。稜はしっかりと張り出し、口縁部は外反している。脚部は筒状で、３方の円形透かしが穿たれている。杯部と脚部の接合は充填方式である。杯部は口縁部内外面及び底部外面にヨコナデ、底部内面にナデ、脚部は脚柱部外面にヘラミガキが施されている。杯部内面には放射状暗文が入れられている。

203は土師器高杯の脚部である。脚柱部は筒状で、脚裾部は円錐形に開いている。３方の円形透かしが穿たれている。表面は摩滅している。

204・205は土師器高杯Ｇである。稜は段状を呈している。口縁部はやや内湾し、端部のみ外反している。脚部は上端が閉じ、裾部に向かって緩やかに開いている。表面はほとんど摩滅しているが、205では口縁部内外面にヨコハケ、裾部内面にハケがわずかに確認できる。

206は土師器高杯Ｇである。杯部に稜をもたない。脚柱部は上端部が閉じ、棒状工具による刺突痕がある。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデ、底部外面にタテハケが施されている。脚柱部は外面にナデ、脚裾部外面にヘラナデ、脚裾部内面にヨコナデが施されている。

207は土師器高杯の脚部である。脚柱部は上端が中実で、裾部で大きく開いている。杯部と脚部の接合は挿入と思われる。脚柱部外面はナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部外面はヨコナデ後ナデ、脚裾部内面はヨコナデが施されている。

208は土師器高杯の脚部である。脚柱部は筒状で、脚裾部は大きく円盤状に開いている。脚裾部外面はナデ、脚柱部内面下端はヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。

209は土師器甑である。底部は丸底で、円形の蒸気孔が中央に１つと周囲に６つ穿たれている。内面にはタテハケが施され、外面は摩滅している。

210は土師器竈である。天井部と体部の境に突帯をもっている。天井部外面はタテハケ、体部外面はヨコハケ、内面はヨコハケ、突帯裏のみナデが施されている。

211は土師器角杯である。先端部は平坦で、3.5cm×3.0cmの楕円形を呈し、円筒部に粘土を充填して閉塞している。調整は内外面ともにほとんど摩耗しているが、外面は丁寧なナデが施されているようである。胎土は白色砂粒が目立っている。

SH20004（図版141、写真図版154）

215はSK20029 、216・219はP20040、212～214・217・218は埋土から出土したものである。

212は須恵器高杯蓋である。口径が大きく、天井部につまみをもっている。稜は丸味をもち、稜下が凹線状に窪んでいる。口縁部内面に内傾する面をもっている。天井部外面にはヘラケズリ、天井部内面には仕上げナデが施されている。

213は須恵器高杯蓋である。口径が小さく、天井部につまみをもっている。天井部と口縁部の境に稜

をもたない。口縁部外面にカキ目が施され、口縁部内面に内傾する面をもっている。天井部外面にはヘラケズリ、天井部内面には仕上げナデが施されている。

214は須恵器高杯の脚部である。脚柱部は筒状で、緩やかに開き裾部で大きく開いている。脚柱部には3方の円形透かしが穿たれ、その下には低い突帯が廻っている。脚柱部外面はカキ目、裾部外面は回転ナデ、内面は回転ナデが施されている。焼成は軟質で、還元されていない。

215は土師器甕Ｅ２である。口縁部は短く、外反している。端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヨコハケが施されている。外面はススが付着している。

216は土師器甕である。頸部はなだらかで、体部は球形に近いがややいびつである。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。被熱を受けているようではあるがあまり外面にススは付着していない。

217は土師器椀Ｂである。底部はやや平底気味である。内面はナデ、外面は手持ちヘラケズリ、口縁端部内外面のみヨコナデが施されている。

218は土師器高杯Ｊである。杯部は底部があまり丸味をもたず、口縁端部のみ外反している。脚柱部は上半が中実である。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデ、底部外面にヘラケズリ、脚部は脚柱部外面にヘラケズリ後ヘラミガキ、脚柱部内面にヘラケズリが施されている。

219は土師器高杯の脚部である。脚柱部は上端が閉じ、裾部で大きく開いている。外面は摩滅している部分が多いが、裾部内外面はヨコナデが施されている。

SH20005（図版141、写真図版154）

220は埋土から出土したものである。

220は須恵器甕もしくは壺の口縁である。口縁端部は丸味をもち、外面の端部直下に突帯をもっている。断面の色調は赤紫色である。

SH20006（図版141、写真図版154）

いずれも埋土から出土したものである。

221は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁は二重口縁で、２次口縁部は上方へ立ち上がっている。稜は鋭く外側へ突出している。端面は上方を向き、端縁は外側へ突出している。内外面ともヨコナデが施されている。

222は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁は二重口縁で、２次口縁部は上方へ立ち上がっている。稜はなく、なだらかである。端面は上方を向き、端縁は外側へ突出している。内外面ともヨコナデが施されている。

223は土師器小型丸底壺である。体部外面上半はタテハケ後ヨコナデ、体部外面下半はヨコハケが、体部内面はヘラナデが施されている。

224は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデが施されている。内面は摩滅している。

225は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

226は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端部に内傾する面をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ後ヨコハケ、体部外面中位はタテハケ及び斜め方向のハケ、体部内面は

ヘラケズリが施されている。

SH20007（図版141、写真図版155）

228は床面、227・229～230は埋土から出土したものである。

227は須恵器杯蓋である。稜は鋭いが、天井部のヘラケズリの範囲は1/2強と狭くなっている。口縁端部に内傾する面をもっている。

228は須恵器杯身である。口縁端部に面をもたない。底部外面のヘラケズリの範囲はは2/3強である。

229は須恵器提瓶である。背面は回転ヘラケズリが施されている。

230は土師器高杯の脚部である。脚柱部上半は中実で、裾部で大きく開いている。脚柱部外面はヘラミガキ、脚柱部内面は円錐状にヘラケズリ、裾部内面はヨコナデが施されている。

SH20009（図版142、写真図版155）

231はP20307、232は周壁溝から出土したものである。

231は土師器直口壺Ｂである。口縁部は直線的に開き、端部は尖り気味である。口縁部内外面にはヨコナデ、体部外面にはナデ、体部内面上位にはヘラナデ、体部内面中位にはヘラケズリが施されている。表面にはススが付着している。

232は土師器高杯Ｆである。稜は明瞭に段をなし、端部に面をもっている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、底部内面はヘラミガキ、底部外面はナデが施されている。底部中央は棒状工具により穿孔がなされているが、充填粘土が剥離している可能性もある。

SH20012（図版142、写真図版155）

いずれも埋土から出土したものである。

233～235は弥生土器甕Ｃである。234・235は短く外反する二重口縁で、縁帯部に擬凹線をもたない。

235は甕底部である。体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリ、底部外面は板ナデが施されている。

236は弥生土器器台Ａである。口縁部は上下に拡張され、縁帯部には擬凹線が施されている。口縁部内外面にはヘラミガキが施されている。

SH20014（図版142、写真図版155）

いずれも埋土から出土したものである。

237・238は弥生土器甕Ｃである。つまみ出した程度の二重口縁で、縁帯部に擬凹線をもっていない。

239は弥生土器甕Ｂである。短く外反する２次口縁で、縁帯部に擬凹線をもっている。

SH20015（図版142、写真図版155）

241は床面、240は埋土から出土し、242は竈の支脚として用いられたものである。

240は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開いている。端面は上方を向き、外端縁を外側に突出させている。口縁部内外面及び体部外面上端はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

241は土師器椀Ｂである。口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデ、底部外面にヘラミガキが施さ

れている。内面にはやや乱れた放射状暗文が入れられている。

242は土師器高杯Ｈ２である。杯部は外面に緩い段をもち、底部は平坦である。脚部は上端が閉じ、裾部で大きく開いている。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内外面にナデが施され、内面に放射状暗文が入れられている。脚部は外面はナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はヨコハケされる。

SH20016（図版142、写真図版156）

いずれも埋土から出土したものである。

243は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端部に内傾する面をもっている。口縁部内外面及び体部外面上端はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

244は土師器甕Ｇ４である。口縁部はわずかに内湾気味で、端部は内側に丸く折り返されている。内外面ともヨコナデが施されている。外面にはススが付着している。

245は土師器甕Ｃである。外反する二重口縁をもっている。内外面ともヨコナデが施されている。

246は土師器高杯である。体部は内湾し、口縁端部のみ外反している。体部外面はヘラミガキ、口縁部外面及び内面はヨコナデが施されている。

247は土師器高杯の脚部である。脚柱部は緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。杯部との接合は充填方式である。脚柱部外面はタテハケ、脚柱部上端外面はタテハケ後ヨコナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。

SH20017・20058（図版143、写真図版156）

248・250・251はSH20017床面、249はSH20017埋土から出土したものである。255・256はSH20058床面、252・254はSH20058竈、253はSH20058埋土から出土したものである。SH20017はほとんどSH20058に切られているため両者のどちらに属するのかはよくわからない。250がSH20017に属する可能性が高い。

248は須恵器台付鉢である。体部は球状で、３条の突帯をもち、突帯の間に波状文が施されている。口縁部外面から見込みにかけて灰をかぶっていることから、蓋は存在しない可能性が高い。脚部は脱落しているが、残存する取り付け位置からみて脚柱部が細く透かしが大きい５方透かしであったと考えられる。脚の貼り付けは横方向に櫛目を回した後に直交して脚設置位置だけでなく、全周に櫛目を施しているものと思われる。

249は土師器椀Ｂである。底部は丸底で、口縁部は外反している。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面は手持ちヘラケズリ、底部内面はナデが施されている。

250は土師器高杯Ｈ１である。杯部は稜をもち、口縁部は外反している。脚部は脚柱部から脚裾部に向かって緩やかに開いている。表面は摩滅している。

251は土師器高杯Ｊである。杯部は口縁部が外反している。脚部は脚柱部が緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデ、底部外面にタテハケ後ナデが施されている。内面には放射状暗文が密に入れられている。脚部は脚柱部外面にタテハケ後ナデ、脚裾部外面にナデ、脚柱部内面にヘラナデ、脚裾部内面にユビオサエが施されている。

252は須恵器無蓋高杯である。外面の突帯は段状で、突帯の下に波状文が入れられている。

253は須恵器筒形器台である。外面の突帯は鋭く、突帯間には波状文が２段にわたって入れられている。透かしは長方形である。

254は土師器甕Ｅ２である。口縁部は短く外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ及び斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

255は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開き、端面は上方を向いている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

256は土師器甕Ｊである。口縁部は二重口縁で、端部が外反している。口縁部内面に凹み状の面をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SH20018（図版143、写真図版157）

258・259・266は東壁際の床面、257・260・263～265・267は埋土から出土したもので、261・262は竈の支脚として用いられたものである。

257は須恵器高杯の脚部である。透かしは３方の長方形透かしである。脚柱部外面にカキ目が施されている。

258は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

259は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。体部は球形で、下半にススが付着している。口縁部内外面はヨコハケ、体部外面上位はタテハケ、体部外面中位は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。底部外面は摩耗のためか調整ははっきりしない。

260は土師器鉢である。底部は平底で、体部から口縁部に向かって内湾している。内外面にはナデ、底部外面には粗いナデが施されている。

261～263は土師器高杯Ｈ２である。杯部外面に緩やかな稜をもっている。脚部は上端が閉じ、裾部で大きく開いている。杯部は口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ後ヨコナデ、底部内面にハケ後ナデ、底部外面に板ナデ後ヘラミガキが施されている。杯部内面の暗文は261が上下に往復して施され、262では斜め方向に施されている。脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合部は板ナデ後ナデが施されている。

264は土師器高杯Ｈ２である。外面の稜はやや段状をなしている。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、底部内面はハケ後ナデ、口縁部外面はヨコナデ、底部外面はユビオサエ後脚部との接合部付近のみハケが施されている。脚部との接合は充填方式である。

265は土師器高杯Ｈ２である。杯部外面に緩やかな稜をもっている。口縁部内面は斜め方向のハケ後ヨコナデ、底部内面はハケ後ナデ、口縁部外面はヨコハケ後ヨコナデ、底部外面はナデが施されている。脚部との接合は充填方式である。

266は土師器高杯Ｊである。杯部は外面に稜をもたないようである。脚柱部上半は中実で、脚柱部内面は円錐形に削り取られている。脚裾部は大きく開き、接地面が水平である。杯部は底部内面にナデ、底部外面に板ナデ後ヘラミガキが施されている。内面にはやや乱れた放射状暗文が入れられている。脚部との接合部付近にはヘラナデが施されている。脚部は外面にナデ、裾部内面にヨコナデが施されている。

267は土師器高杯Ｊである。口縁部なだらかに内湾して立ち上がり、端部は尖り気味である。脚部は脚柱部が中実で、下方より棒状工具により刺突がなされている。脚裾部は円盤状で、底部は丸く窪んでいる。杯部は口縁部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施されている。脚部は脚柱部外面にヘラミガキ

もしくはヘラナデ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。

SH20019（図版144、写真図版157）

268は床面、269はP21723、270は竈から出土したものである。竈からは他に製塩土器が10数片出土している。

268は須恵器無蓋高杯である。断面は赤紫色を呈している。外面には稜が丸味を帯びた低い突帯が廻り、その下には列点文、上には波状文が施されている。内面には自然釉が付着している。文様構成上は器台がいちばん近いが、径が小さいことから高杯と考えられる。

269は土師器高杯Ｊである。杯部の器高は高く、外面になだらかな稜をもっている。底部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。脚部との接合は挿入方式と考えられる。

270は製塩土器である。厚みは２㎜前後で、焼成はやや軟質である。内面は平滑にナデられ、外面のナデは粗い。

SH20020（図版144、写真図版158）

271はP26020より出土した土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反するが、あまり開かない。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデが施されている。

SH20021（図版144、写真図版158）

いずれも埋土から出土したものである。

272は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端面は上方を向いている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

273は土師器の器形不明品である。頸部に突帯をもつ壺状のものか、鼓形器台のようなものかが考えられる。外面はヨコナデ、内面はヨコナデ後タテナデが施されている。

SH20022（図版144、写真図版158・159）

274・278～280・285～290は床面、281・283はSK20025、275～277・284は埋土から出土したもので、282は竈の支脚として用いられたものである。

274・275は須恵器杯蓋である。274は天井部が平坦で、稜は鋭く、稜下は凹線状に窪んでいる。端面は水平である。275は稜が鋭く、端面は内傾し、沈線状に窪んでいる。

276は須恵器杯身である。

277は須恵器高杯の脚部である。脚端部の稜はにぶい。

278は須恵器甕である。体部最大径の位置に波状文を廻らせ、その上下に凹線が施されている。下の凹線は非常に浅い。頸部にも波状文が廻らされている。底部外面はナデが施されている。

279は土師器壺である。表面は摩耗しており、内面には粘土紐の接合痕が残存している。

280は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的で、端部は丸味をもっている。口縁部内外面及び体部外面上位はヨコナデ、体部外面中位はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。口縁部外面及び頸部外面にススが付着している。

281は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開いているが、端部のみやや外反させ、端縁を外方に

突出させている。端面は上方を向いている。口縁部内面はヨコナデ、口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。明瞭なススの付着は認められない。

282は土師器高杯Ｈ２である。杯部外面ににぶい稜をち、口縁部はやや内湾している。表面は摩滅している部分が多いが、杯部は口縁部外面にヨコナデ、底部外面にナデ、脚部は脚柱部内面にヘラケズリが施されている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。

283は土師器高杯Ｈ２である。外面に稜をもたない椀形高杯である。口縁端部まで内湾している。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は粗いナデが施されている。脚部との接合は挿入方式で、脚柱部には棒状工具による刺突がなされている。

284・285は土師器高杯の脚部である。284は脚柱部は上端が閉じ、脚裾部は円盤状である。脚柱部外面はナデ、脚柱部内面は円錐形にヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。285は脚柱部上半が中実で、裾部が円盤状である。脚柱部外面はヘラミガキ、脚裾部外面はタテハケ後ヨコナデ、脚裾部内面はハケ後縁辺部のみヨコナデが施されている。杯部との接合は接合方式と思われる。

286は土師器高杯である。稜をもつタイプである可能性が高い。脚部は筒形であるようだが、下から粘土が充填されていてはっきりしない。表面は摩滅している。

287・288は土師器椀Ｂである。287は口縁部内面にヘラミガキ、底部内面にヘラナデ後ヘラミガキが施されている。外面は摩滅している。288は内面にハケ後ナデが施されている。まばらに放射状の沈線が入れられている可能性がある。外面は摩滅している。

289は土師器製塩土器である。厚さは約２㎜で、焼成は軟質である。

290は土師器竈である。甕と同様な口縁部をもち、２次口縁部は外反している。口縁部内外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施され、体部外面はタテハケ後鍔が貼り付けられていたようである。内面下端と外面の鍔の下がすすけている。

SH20023（図版145、写真図版159）

291・292は床面、293は埋土から出土したものである。

291は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。体部はラグビーボール形で、底部は尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向のナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面下位にはススが付着している。

292は土師器台付鉢Ｂである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。脚部内面以外はヘラミガキが施されている。脚部内面は中央部にハケ、縁部にヨコナデが施されている。

293は土師器小型器台Ｂである。口縁端部はやや垂下している。脚部には３方の円形透かしをもっている。口縁部内外面はヨコナデ、脚部外面はヘラミガキ、脚部内面はヨコハケ後ヨコナデが施されている。体部内面は表面が剥離している。

SH20024（図版145、写真図版159）

295・298はSK20023、294・296・297は埋土から出土したものである。

294は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは低く、内傾する面をもっている。断面は赤紫色を呈している。

295は土師器甕Ｇである。口縁部は内湾し、端部のみ外反している。口縁部内外面はヨコナデ、体部

外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

296は土師器高杯Ｈ２である。口縁部外面直下に粘土接合痕状のくぼみをもっている。底部内面は平坦である。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は粗いナデが施されている。脚部との接合は挿入方式と考えられる。

297は土師器高杯の脚部である。脚柱部は中実で、裾部で大きく開いている。表面は摩滅している。

298は土師器椀Ｂである。内面はナデ、口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。

SH20025（図版145、写真図版159）

299はSK20031から出土したものである。

299は土師器甕Ｉである。口縁部はわずかに外反する程度であまり開かない。端部は内側に丸く巻き込むような感じである。口縁部内外面及び頸部外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SH20026（図版145、写真図版160）

300・301・304・306～310は床面、302・303・305・311は埋土から出土したものである。

300は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。体部は倒卵形を呈している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面上位はハケ、体部内面中・下位はヘラケズリが施されている。体部下半にはススが付着している。

301は土師器甕Ｆ２である。口縁部はやや外反しながら開き、端部は尖り気味である。体部は倒卵形を呈し、底部は尖り気味である。口縁部外面は平行タタキ後ヨコナデ、体部外面上位は平行タタキ後ナデ、体部外面中・下位はナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部内面はヨコハケ後ナデが施されている。体部下半には黒斑が付き、その上にはススが付着しているものと思われる。

302は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はハケ後ヘラケズリが施されている。体部外面中位のハケ目は体部外面上位及び体部内面のハケ目より細かい原体を使用している。

303は土師器甕Ｇ４である。口縁部は内湾し、端部は内側に巻き込んでいる。端面は上を向くが、やや丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部の器壁は２㎜弱と他の土器に比べてかなり薄い。

304は土師器甕Ｇ１である。口縁部はやや内湾気味に開き、端部をやや上方につまみ出している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ後上端のみヨコナデ、体部内面はヘラケズリ後ナデである。

305は土師器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、１次口縁部は短く外反し、２次口縁部は立ち上がっている。２次口縁部外面下端は凹線状に窪んでいる。内外面ともヘラミガキが施されている。

306は弥生土器甕底部である。内面はヘラケズリ、体部外面は平行タタキ、底部外面はナデである。

307は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁部は二重口縁で、１次口縁部は頸部から強く外反し、２次口縁部は緩く外反して開いている。２次口縁部下の稜は鋭く突出している。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面はタテハケ後カキ目状のヨコハケが施され、さらに波状文が廻らされている。

308は土師器小型丸底鉢である。体部外面はナデ、底部外面はハケ、口縁部内面はヨコハケ、体部内面はハケが施されている。体部外面にはひび割れが顕著である。

309は土師器有孔鉢である。尖底で、直径７㎜の円孔が穿たれている。外面はナデ、内面はヘラケズリが施されている。

310は土師器椀Ａである。平底で、体部は内湾して立ち上がっている。体部外面はヨコハケ、底部外面はナデ、内面はヨコハケ後ヘラミガキが施されている。

311は土師器鼓形器台Ｂである。胴部外面に段をもたない。外面はタテハケ後ヘラミガキ、受け部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラケズリ後ヘラミガキで裾端部内面のみヨコハケが施されている。

SH20027（図版146、写真図版161）

312は床面、315はP21570、316はSK20027、321は竈、313・314・317～320は埋土から出土したものである。

312は須恵器杯蓋である。鈍い稜の下が凹線状に窪んでいる。口縁部内面の稜は凹線状に窪んでいる。火ぶくれが生じており、器形はひずんでいる。

313・314は須恵器杯身である。口縁部の端面は弱く窪む程度である。

315は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデが施されている。

316は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部はやや尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、頸部内面は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

317は土師器椀Ｂである。底部は丸底と考えられるが、器形はやや丸味を欠いている。口縁部外面はヨコナデ、底部外面は手持ちヘラケズリ、内面はハケ後ヘラミガキが施されている。

318～321は土師器甑である。口縁部はわずかに外反する程度で、端部はやや尖り気味である。底部はつつぬけで、320では棒の桟を渡すための孔があけられている。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリされている。321の牛角把手は短い。

SH20028（図版146、写真図版161）

322・324・325は床面、323は埋土から出土したものである。

322・323は須恵器杯蓋である。いずれも稜をもたない。322は端部に面をもたず、323は口縁部内面に凹線状の窪みをもっている。

324は土師器甕Ｅ２である。頸部がしまらず、口縁部は短く外反している。表面は摩滅している。

325は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリ、体部内面上端のみヨコハケが施されている。体部外面にはススがあまり付着していない。

SH20029（図版146、写真図版161）

326はP21171から出土したものである。

326は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端部のみ外側につまみ出している。端面は上方を向いている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SH20030（図版147、写真図版162）

いずれも埋土から出土したものである。

327は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端部を外側につまみ出している。端面は上方を向いている。口縁部内外面はヨコナデが施されている。

328は土師器器台Ａである。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヘラミガキ、体部内面はヨコハケ後ヘラミガキが施されている。

SH20031（図版147、写真図版162）

329・330はSK20047から出土したものである。

329は土師器甕Ｇ３である。口縁部は内湾し、端部は丸味をもち、内側に肥厚している。内外面ともヨコナデが施されている。

330は土師器大型鉢である。口縁部はやや外反しながら開くが、胴は膨らまない。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケ後ヘラケズリが施されている。

SH20032（図版147、写真図版162）

334はP21230、331～333は埋土から出土したものである。

331・332は須恵器杯身である。331は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁部内面がわずかに端面をなしている。332は口縁端部に面をもたず、底部内面中央に同心円当て具痕を残している。底部外面にはヘラ記号が入れられている。

333は土師器椀Ｂである。底部は平底気味であるが、いびつである。内外面ともナデが施され、指頭痕が認められる。底部外面には板状圧痕が付いている。

334は土師器甕Ｇ７である。口縁部は内湾している。端部は丸味をもち、外反している。口縁部内外面及び体部外面上端はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SH20033（図版147、写真図版162）

337はP20339、338はP21635、335・336は埋土から出土したものである。

335は土師器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、端部は丸味をもっている。口縁部内外面ともヨコナデが施されている。

336は土師器二重口縁壺Ａである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は直線気味である。端部は丸味をもっている。口縁部内外面ともヨコナデが施されている。

337は土師器器台Ａである。口縁部の端面は拡張し、下縁は下方に垂下している。内面はナデ、口縁部外面は板ナデ後ヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキが施されている。

338は土師器有孔鉢である。底部は尖底で、穿孔されている。外面上半はタテハケ、外面下半はナデ、内面はヘラケズリが施されている。

SH20034（図版147、写真図版162）

340はP21448、339は埋土から出土したものである。

339は土師器小型丸底鉢Ｂである。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、体部

外面はハケ後手持ちヘラケズリ、体部内面はヘラケズリが施されている。

340は土師器蓋である。表面は摩滅している。

SH20035（図版148・149、写真図版163～165）

SH20060に切られていない東半部で多くの土器が床面に残存していた。341～356・358～366・369・371は床面、367はSK20045、357・368・370は埋土から出土したものである。

341は土師器直口壺Ａである。口縁部は直線的に上方へ延び、端部は尖り気味である。底部は尖り気味である。体部外面下半に付着した黒斑部にのみヘラミガキが残存し、体部内面はナデが施されている。その他の表面は摩滅している。

342は土師器直口壺Ｂである。口縁部は直線的に上方へ延び、端部は丸味をもっている。口縁部外面はヨコナデ後縦方向のヘラミガキ、口縁部内面はヨコナデが横方向のヘラミガキ、体部外面上端はタテハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ後体部中位付近のみヨコハケ、体部内面上は斜め方向のハケ、体部内面下半はナデが施されている。

343は土師器小型丸底鉢Ａである。口縁部は内湾し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はナデが施されている。

344は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。体部は長胴形である。口縁部外面は斜め方向のハケ後ヨコナデ、体部外面上位はヨコハケ、体部外面中位以下はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部下半にススが付着している。

345は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開き、端部は尖り気味である。体部は球形に近い。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上端はタテハケ後ヨコナデ、体部外面上位はタテハケ及び部分的にヨコナデ、体部外面中位以下はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にススがまばらに付着している。

346は土師器甕Ｅ２である。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味である。底部はやや尖り気味である。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面上位はヘラケズリ、体部内面下位は斜め方向のハケが施されている。体部下半にススが付着している。

347・348は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。347は底部がやや尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後体部中位のみヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面にはススが付着している。348は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面上半にヨコハケ後タテハケ、体部外面下半にタテハケ、体部内面にヘラケズリが施されている。体部内面上端部にヨコハケがケズリ残された部分がある。体部外面下位にススが付着している。

349は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開き、端部は尖り気味である。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、体部外面はヨコハケ後タテハケ、体部内面はヘラケズリで体部内面上端のみヨコハケが施されている。

350は土師器甕Ｈである。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。口縁部内外面及び体部外面上端はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

351は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

352は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸味をもっている。口縁部外面にはヨコナデ、口縁部内面にはヨコハケ、体部外面にはタテハケ、体部内面にはヘラケズリが施されている。

体部外面にはススが付着している。

353は土師器甕Ｇ３である。体部外面下半にススが付着している。口縁部は直線的に開き、端部がわずかに内側へ肥厚している。体部は倒卵形である。口縁部内外面はヨコハケ、体部外面上半はタテハケ、体部外面下半はタテハケ後ヨコハケ、体部内面はハケ後ヘラケズリが施されている。体部下半にススが付着している。

354は土師器甕Ｇ２である。口縁部は内湾し、端部に外傾する面をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上端はタテハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコハケ、体部内面はヘラケズリされる。

355は土師器甕Ｇ２である。口縁部は内湾し、内側に肥厚している。口縁部内外面及び体部外面はヨコナデが施されている。体部内面はヘラケズリが施されている。

356は土師器甕Ｇ１である。口縁部は二重口縁で、１次口縁部が短く外反し、２次口縁部は内湾気味に立ち上がっている。稜と端部は丸味をもっている。体部は長胴形である。口縁部内外面及び体部外面上端はヨコナデ、体部外面上位はヨコハケ後タテハケ、体部外面中位以下はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

357は土師器甕Ｄである。口縁部は二重口縁である。１次口縁部は短く外反し、２次口縁部は高く立ち上がっている。稜は鋭く突出している。口縁部内外面及び体部外面上端はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

358は土師器高杯Ｃである。杯部は大きく開き、大きく開く二重口縁がつくものと思われる。内面はナデ、外面はヘラミガキが施されている。

359は土師器高杯の脚部である。上端部は閉じ、脚部は脚柱部から脚裾部へゆるやかに開いている。３方の円形透かしをもっている。脚部外面にヘラミガキ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内面に斜め方向のハケ後ナデが施されている。

360は土師器器台Ａである。脚柱部から脚裾部へゆるやかに開いている。透かし孔は配置が不均一であるが３方の円形透かしと考えられる。表面は摩滅気味であるが、外面にはヘラミガキが施されている。

361は土師器高杯Ｄである。杯部に段状の稜をもち、口縁部は外反して大きく開いている。脚部は脚柱部が筒状で、裾部で大きく開いている。脚柱部に２方の円形透かしをもっている。杯部は口縁部内外面及び底部外面にヘラミガキが施されている。底部内面は剥離している。脚部は脚柱部外面にヘラミガキ、脚裾部外面にヨコナデ、脚柱部内面にヘラナデ、脚裾部内面にヨコハケが施されている。

362は土師器有孔鉢である。底部は丸味をもち、上方から穿孔がなされている。体部外面はタテハケ、底部外面は平行タタキ、内面はタテハケ後ナデが施されている。

363は土師器台付鉢Ｃである。脚部は大きく開いている。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヨコハケ、体部内面にヘラミガキが施されている。脚部は内外面にヨコナデが施されている。

364は土師器台付鉢Ｃである。脚部は短くあまり開かない。杯部は内面にナデ、外面にヨコナデ、脚部は内外面にヨコナデが施されている。

365は土師器台付鉢Ｃである。脚部は大きく開き、端部に面をもっている。杯部内面にナデ、脚部内外面にヨコナデが施されている。

366は土師器台付鉢Ｃである。脚部は短いが、端部は水平に開いている。杯部は皿状になると思われる。杯部は底部内面にナデ、脚部は外面にヨコナデが施されている。

367は土師器小型丸底鉢Ｂである。体部から口縁部にかけて非常になだらかである。口縁部内外面は

ヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、体部内面はヘラナデが施されている。

368は土師器小型器台Ａである。口縁部はつまみ上げられている。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はヘラミガキ、底部外面はナデが施されている。

369は土師器鼓形器台Ａである。脚部の稜は突出している。外面はヨコナデ、脚部内面はヘラケズリが施されている。受部の内面は摩滅している。

370は土師器の器形不明製品である。口縁部は二重口縁で、１次口縁部・２次口縁部とも外反し、端部は丸味をもっている。１次口縁部外面はタテハケ、２次口縁部外面はヨコナデ、内面はヘラミガキが施されている。壺の口縁の可能性があるが、器壁が非常に厚い。

371は土師器ミニチュア土器である。内面及び口縁部外面はナデ、体部外面及び底部外面は平行タタキが施されている。

SH20036（図版150、写真図版165）

372はSK20022、373～375は埋土から出土したものである。

372は須恵器杯身である。底部は平坦である。

373は須恵器高杯である。３方の円形透かしが穿たれている。透かしの下には稜が鋭い突帯が廻り、端部は上下に拡張した外傾する面をもっている。

374は土師器高杯Ｈ２である。底部は平坦で、口縁部は内湾して立ち上がる。杯部の器高は低い。杯部と脚部の接合は付加方式である。表面は摩滅している。

375は土師器製塩土器である。外面は平行タタキ、内面はナデが施されている。

SH20037（図版150、写真図版165）

いずれも埋土から出土したものである。

376は須恵器杯蓋である。稜はやや甘く、稜下は凹線状に窪んでいる。口縁部内面に内傾する面をもっている。

377は須恵器杯身である。口縁は高く立ち上がり、端部は丸味をもっている。口径は小さく復元しているが、小破片であることから、ひずんでいるのかもしれない。

SH20038（図版150、写真図版166）

378はSK20021、383はP21445、379～382・384は埋土から出土したものである。

378は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。体部は倒卵形を呈している。口縁部内外面及び体部外面上端はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。表面にはススが付着している。

379は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

380は土師器甕Ｈである。口縁部は内湾し、端部は尖り気味である。口縁部内外面はナデ、体部外面上位はヨコナデ、体部外面中位は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面・口縁部内面・頸部内面に丹が塗られている。

381は土師器甕Ｇ３である。口縁部は内湾し、端部は丸味をもっている。内外面はヨコナデされる。

382は土師器甕Ｊである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は外反している。端面は上方を向いている。内外面ともヨコナデが施されている。外面はヨコナデ、内面はヨコハケ後ヨコナデが施されている。

383は土師器小型丸底壺である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

384は土師器高杯Ｅである。口縁部は直線的に開いている口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はナデが施されている。脚部との接合は充填である。

SH20039（図版150、写真図版166）

385・387はSK20013、386はP21377から出土したものである。

385は弥生土器高杯Ａである。口縁部は上下に拡張し、端面に擬凹線を施す。表面は摩滅している。

386は弥生土器鉢である。口縁部は二重口縁で、２次口縁部外面に擬凹線が施されている。内面及び体部外面はヘラミガキ、口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。

387は弥生土器台付鉢である。脚部は短く外反している。体部外面はタテハケ後ヘラミガキ、体部内面はヘラミガキ、脚部はナデが施されている。

SH20040（図版150、写真図版166）

388～390は床面から出土したものである。

388は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾している。端面は水平で、端部内縁は内側に突出している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後体部中位にヨコハケ、肩部にカキ目状のヨコハケ、体部内面上・中位はヘラケズリが施され、体部内面下位は指頭痕が残存している。体部外面下半にはススが付着している。

389は土師器小型器台Ｂである。389は体部が皿状である。表面はほとんど摩滅しているが、口縁部外面にハケ目がわずかに残存している。

390は土師器台付鉢Ｃである。脚部が短い。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ、脚部内面はナデ、脚部外面及び底部内面はユビオサエが施されている。

SH20041（図版151、写真図版167）

391・393・394は床面、392は埋土から出土したものである。

391は土師器甕Ｅ２である。口縁部はわずかに内湾気味で、端部のみ外反し、端面は外傾している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

392は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部はやや内傾気味に立ち上がっている。端面は内傾している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリされる。

393は土師器高杯Ｇである。杯部の外面に甘い稜をもっている。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は外反している。脚部は上端が閉じ、裾部で大きく開いている。杯部と脚部の接合は付加方式である。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内外面にナデが施されている。脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。

394は土師器高杯である。脚部は上端が閉じ、脚裾部で大きく開いている。脚裾部の端部に面をもっている。杯部と脚部の接合は挿入で、脚柱部内面には棒状工具による刺突がなされている。杯部は内外

面にナデが施されている。杯部と脚部の接合部にはタテハケが施されている。脚部は脚柱部外面にヘラミガキ、脚裾部外面にヨコハケ後ヘラミガキ、脚裾部内面にヨコハケが施されている。脚裾部内面には布目が付着している。

SH20043（図版151、写真図版167）

395は炉から出土したものである。

395は土師器椀Ｂである。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

SH20044（図版151、写真図版167）

396はSK20034、397はP21727から出土したものである。

396は土師器高杯Ｆである。杯部の稜は鋭く、段状を呈している。口縁部は外反して大きく開いている。脚柱部は上端が閉じ、緩やかに開いている。３方の円形透かしをもっている。脚部は上端が閉じ、脚裾部で大きく開いている。脚裾部の端部に面をもっている。杯部は内外面にタテハケ後ヘラミガキ、脚柱部外面はタテハケ後ヘラミガキ、脚柱部内面はヘラケズリが施されている。

397は土師器高杯Ｅである。口縁部はなだらかに内湾しながら開き、端部は外反して大きく開いている。脚柱部はなだらかに開き、脚裾部は円盤状を呈している。杯部は底部内面にハケ、口縁部内面にヨコハケ、口縁部外面にヨコナデ後ヘラミガキ、底部外面にタテハケが施されている。脚部は脚柱部外面にタテハケ後ヘラミガキ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。

SH20045（図版151、写真図版167）

398は埋土から出土したものである。

398は弥生土器二重口縁壺Ａである。口縁部は外反して開き、端部は上下に拡張している。体部は算盤玉状で、大きくひずんでいる。外面はタテハケ後ヘラミガキ、口縁部内面はヨコナデ後ヘラミガキ、体部内面上半はヨコナデ、体部上半は体部下半はハケが施されている。

SH20046（図版151、写真図版167）

399はSK20034、400は埋土から出土したものである。

399は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾している。端部は外側につまみ出され、端面は水平である。内外面ともヨコナデが施されている。

400は土師器高杯である。脚柱部は上端が閉じ、裾部が円盤状に開いている。杯部と接合は付加方式である。外面はナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はヨコナデが施されている。

SH20047（図版151、写真図版168）

いずれも埋土から出土したものである。

401は須恵器杯蓋である。口縁部内面に内傾する面をもっている。

402は須恵器杯身である。

SH20049（図版151、写真図版168）

403は埋土から出土したものである。

403は須恵器高杯である。３方の長方形透かしをもっている。

SH20051（図版151、写真図版168）

405・406は床面、404・407は埋土から出土したものである。

404は土師器甕Ｉである。口縁部は外反し、端面は水平である。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、口縁部外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、体部外面はタテハケ、体部外面上端は平行タタキが施されている。体部外面下半にはススが付着している。

405は土師器甕Ｇ５である。口縁部はやや内湾し、端面はやや丸味をもっている。口縁部内外面及び体部外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

406は土師器小型丸底鉢Ａ２である。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は尖り気味である。口縁部外面及び体部外面上半はヘラミガキ、体部外面下半はヘラケズリが施されている。口縁部内面はヨコナデ、体部内面はナデが施されている。

407は土師器鼓形器台Ｂである。頸部は鋭角的である。受部内面はヘラミガキ、外面はヨコナデ、脚部内面はヘラケズリが施されている。

SH20053（図版152、写真図版168）

408は床面から出土したものである。

408は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ後タテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SH20054（図版152、写真図版168）

411～413は床面、409・410は埋土から出土したものである。

409は土師器二重口縁壺Ａである。口縁部は２次口縁である。２次口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内面に波状の沈線文をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面はヨコナデ後部分的にヘラミガキ、頸部内面はヘラミガキが施されている。

410は土師器高杯である。脚柱部は筒状で、脚裾部で大きく開いている。円形の透かしが穿たれているが、個数はわからない。外面はタテハケ後ヘラミガキ、脚柱部内面はナデ、脚裾部内面はヨコハケが施されている。

411は土師器小型丸底鉢Ｂである。口縁部は直線的に開くが短い。頸部はほとんどしまらず、底部は尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上半はナデ、体部外面下半はハケ、体部内面はナデが施されている。

412は土師器小型丸底鉢Ａである。口縁部は高く内湾気味に開いている。口縁部内外面及び体部外面上半はヘラミガキ、体部外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、体部内面はナデ後ヘラミガキが施されている。

413は土師器小型丸底鉢Ｃである。器高は低く、口縁部は二重口縁である。表面は摩滅している。

SH20055（図版152、写真図版169）

416・420・422はSK20049、418・421は竈、414・415・417・419は埋土から出土したものである。

414は須恵器杯蓋である。稜は鋭く、稜下は凹線状に窪んでいる。口縁端部は外方に曲がり、内側に内傾する面をもっている。

415は須恵器杯身である。受け部の先端や口縁部の端面は鋭い。

416・417は土師器高杯である。416は脚柱部の上端が閉じ、脚裾部が大きく開いている。外面はナデ後、脚裾部外面にヨコナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はヨコナデが施されている。417は表面がほとんど摩滅している。

418は土師器甕Ｇ６である。口縁部は内湾気味に開き端部のみ外反させている。体部は球形を呈している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ後ヨコハケ、体部外面中位・下位はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施され、底部内面には指頭痕が顕著である。体部外面にはススが付着している。

419は土師器甕Ｇ７である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

420は土師器甕Ｇ７である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

421は土師器椀Ｂである。口縁部まで内湾しながら立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はヘラナデ、体部外面はハケが施されている。

422は土師器甑である。蒸気孔は中央に板状の桟を渡すタイプのものと考えられる。口縁部は緩やかに外反し、端部は尖り気味である。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面は斜め方向のハケ後ヨコナデ、体部外面上半はタテハケ、体部外面下半はタテハケ後ヘラミガキが施されている。体部内面はタテハケ後ヘラケズリが施され、部分的にヘラミガキが施されている。

SH20057（図版153、写真図版169）

426は竈、423・424・427は埋土から出土したもので、425は竈の支脚として用いられたものである。

423は須恵器杯蓋である。稜は鋭く、口縁部端部内面の面は凹線状である。

424は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開き、端面は水平である。端部は外側につまみ出されている。口縁部内外面はヨコナデが施されている。

425は土師器高杯Ｊである。杯部は底部が平坦で、口縁部は内湾している。脚柱部は上半が中実で、裾部で大きく開いている。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にヘラミガキ、底部外面にナデが施されている。脚部は脚柱部外面がナデ、脚柱部内面がヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデされる。

426は土師器椀Ｂである。口縁部が外反している。表面は摩滅している。内面は黒く、ススか漆が付着しているものと思われる。

427は土師器製塩土器である。厚さは２㎜で、焼成は軟質である。表面は摩滅している。

SH20059（図版153、写真図版170）

428～431は竈北側の床面、432は埋土から出土したものである。

428は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。体部は胴が張っている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上半はタテハケ後ナデ、体部外面下半はナデ、体部内面はヘラケズリ

が施されている。外面にはススが付着している。

429は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に上方へ延び、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面にはススが付着している。

430は土師器高杯Ｊである。杯部は底部が平坦で、口縁部は内湾している。脚柱部は上半が中実で、裾部で大きく開いている。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にヘラミガキ、底部外面にナデが施されている。脚部は脚柱部外面がナデ、脚柱部内面がヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデされる。

431は土師器高杯である。脚柱部は中実で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部外面はナデ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。

432は土師器製塩土器である。厚さは２㎜で、焼成はやや軟質である。

SH20060（図版153、写真図版170）

いずれも埋土から出土したものである。

433は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸みをもっている。口縁部内外面は横ナデ、体部外面上端は横ナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

437は土師器甑である。体部外面下端に円孔が穿たれ、棒を差し込んで桟としていたと考えられる。外面はタテハケ、内面はヘラケズリが施されている。

SH20061（写真図版170）

いずれも埋土から出土したものである。

434・435は須恵器杯蓋である。434の稜は鋭く、435の稜は丸味をもっている。

SH20062（図版153、写真図版170）

436は埋土から出土したものである。

436は土師器製塩土器である。厚さは２㎜で、焼成は軟質である。表面は摩滅している。

SH24264（図版153、写真図版170・171）

438、443～445は床面、441はP25010、439・440・442・446・447は埋土から出土したものである。

438は須恵器有蓋杯である。杯部は口縁部が高く立ち上がり、底部外面にはカキ目が施されている。脚部は３方の円形透かしが穿たれ、透かしの下に稜の鋭い突帯が廻っている。杯部の脚部との接合面にはクシ目が円形に施されている。

439は須恵器甕である。口縁部外面に突帯をもち、端面はやや丸味をっている。

440・441は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。440は口縁部外面にタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ後ヨコナデ、体部外面にタテハケ、体部内面にヨコハケが施されている。441は口縁部内外面にヨコナデが施されている。

442は土師器甕Ｊである。口縁部は二重口縁で、端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

443は土師器高杯Ｅである。杯部は稜をもたず、口縁部は外反している。口縁部内外面はヨコナデ後ヘラミガキ、底部外面はタテハケ後ヘラミガキ、底部内面はヘラミガキが施されている。脚部との接合

は充填方式である。

444は土師器高杯Ｇである。杯部は稜をもっている。脚柱部は緩やかに開き、脚裾部は円盤状である。表面は摩滅している部分が多いが、脚柱部外面はナデ、脚柱部内面はヘラナデ、脚裾部外面はヨコナデが施されている。

445は土師器高杯である。脚部は脚柱部から脚裾部に向かって緩やかに開いている。表面は摩滅している部分が多いが、脚柱部内面はヘラナデが施されている。脚部との接合は充填方式である。

446は土師器椀である。口縁部は内湾し、端部は丸味をもっている。口縁部外面上半はヨコナデ、口縁部外面下半はヨコハケ、底部外面は手持ちヘラケズリ、口縁部内面はヘラナデ、底部内面はハケ後ナデが施されている。

447は製塩土器である。３点出土しているが、焼成は軟質で厚さは１～２㎜である。

SH25063（図版154、写真図版171）

いずれも埋土から出土したものである。

448は須恵器高杯である。脚部の透かしが大きいか多いタイプのものである。端部は玉縁状に丸味をもっている。胎土の断面は赤紫色を呈している。

449は土師器直口壺Ｂである。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、口縁端部内面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はナデ及びユビオサエが施されている。

450は土師器高杯Ｊである。杯部はやや浅い椀形で、脚部は裾部で大きく開いている。脚柱部上方は棒状工具による刺突がなされ、裾部端面は面をもっている。杯部は外面にハケ後ナデ、内面にナデ後ヘラミガキが施されている。脚部は外面にナデ、脚柱部内面にヘラナデ、脚裾部内面にハケ後ナデが施されている。

451は土師器高杯Ｊである。底部は平坦で、口縁部は直線的に開いている。杯部と脚部の接合は挿入で、脚柱部上方には棒状工具による刺突がなされている。杯部は外面にタテハケ、口縁部外面にヨコナデ、底部内面にヨコナデ、口縁部内面に斜め方向のハケ後ヨコナデが施されている。

452は土師器高杯である。脚裾部で大きく開き、端部に面をもっている。脚柱部上端には棒状工具による刺突が２つ横並びに穿たれている。脚柱部外面はナデ、脚裾部外面はハケ後ナデ、脚柱部内面はヘラナデ、脚裾部内面はナデが施されている。

453は土師器台付鉢である。脚部は短く、強く外反している。表面は摩滅している。

SH25065（図版154、写真図版171）

いずれも埋土から出土したものである。

454は土師器小型器台Ｂである。杯部は浅い皿状でである。杯部と脚部の接合は付加方式である。杯部は内外面ともヘラミガキが施されている。

455は土師器器台である。口縁部は外反して開き、口縁部下端に水滴形の透かしが穿たれている。内外面ともヘラミガキが施されている。篠山市西木之部遺跡に類例がある。

456は土師器高杯である。脚柱部は中実で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部外面はヘラナデ、脚裾部外面はヨコナデが施されている。

SB20001（図版154、写真図版172）

457はP20052より出土した須恵器杯身である。

SB20004（図版154、写真図版172）

458はP20222より出土したものである。

458は土師器甕Ｅ２である。口縁部は短く外反し、体部は球形である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上半はタテハケ、体部外面下半ヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SB20005（図版154、写真図版172）

459はP20294、460はP20215、461・462はSP20295から出土したものである。

459は須恵器高杯の脚部である。

460は須恵器甕である。外面は平行タタキ、内面はヨコナデが施されている。断面は赤紫色を呈している。

461は土師器高杯Ｈ２である。杯部は段状の稜をもち、口縁部はやや内湾している。杯部と脚部の接合は充填である。表面は摩滅している。

462は土師器直口壺Ｂである。口縁部は直線的に開き、端部は尖り気味である。体部は肩が張っている。口縁部外面はヘラミガキ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面上端はヨコナデ、体部外面上半はヘラミガキ、体部外面下半は板ナデ後ナデ、体部内面は板ナデが施されている。体部外面下半にはススが付着している。

SB20006（図版154、写真図版172）

463はP20426、464はP20427から出土したものである。

463は土師器甕Ｅである。口縁部はやや外反し、端部は丸味をもっている。内外面ともヨコナデが施されている。

464は土師器甕Ｇ５である。口縁部はやや内湾し、端面は上方を向いている。端部外面に沈線状の凹みをもっている。内外面ともヨコナデが施されている。

SB20007（図版154、写真図版172）

465はP20632、466はP20635から出土したものである。

465は須恵器杯蓋である。端部に内傾する面をもっている。

466は土師器甕である。底部が平底気味で、器壁が非常に厚い。体部外面上端はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面中・下位はヘラケズリが施されている。体部内面上位はハケ後ヨコナデが施されているが、粘土紐の接合痕が顕著である。体部外面下半にはススが付着している。

SB20008（図版154、写真図版172）

467はP20700、468はP20708から出土したものである。

467は土師器甕Ｇ１である。口縁部は内湾し、端部は丸味をもっている。内外面ともヨコナデが施される。

468は土師器甕Ｅである。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。内面はヨコナデ、外面はタテハケ後ヨコナデが施されている。

SB20012（図版154、写真図版172）

469はP20611、468はP21217から出土したものである。

469は土師器甕Ｅである。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。内外面ともヨコナデである。

470は土師器高杯である。内外面ともヨコナデが施されている。

SB20013（図版154、写真図版172）

471・472はP20629から出土したものである。

471は甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、端部は丸味をもっている。外面はヘラミガキ、口縁部内面はヘラミガキ、体部内面はヘラケズリが施されている。

472は土師器高杯Ｉである。杯部は稜をもたず、口縁部はわずかに外反する。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、底部外面はヨコハケ後ナデ、底部内面はハケ後ナデが施され、口縁部内面は摩滅している。

SB20014（図版155、写真図版172）

473はP20485、474はP20490から出土したものである。

473は須恵器杯蓋である。口縁端部に内傾する凹線状の面をもっている。

474は土師器製塩土器である。厚さは1.0㎜程度である。焼成は軟質で、表面は摩滅している。

SB20016（図版155、写真図版172）

475はP21907上面、476・477はP21905から出土したものである。

475は須恵器無蓋高杯Ｈ２である。外面には２条の段状の沈線の間に波状文が入れられている。杯部の底部外面にはヘラケズリが施されている。

476は土師器高杯である。杯部の外面に稜をもち、口縁部はやや内湾している。底部外面はタテハケ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキが施され、口縁部外面は摩滅している。杯部と脚部の接合は充填方式と思われる。

477は土師器高杯Ｊである。口縁部は内湾し、端部は尖り気味である。表面は摩滅している。

SB20020（図版155、写真図版172）

478はP21802より出土したものである。須恵器高杯である。脚部に小さい方形の透かしをもつと思われる。脚柱部外面にはカキ目が施されている。

SB20022（図版155、写真図版172）

479はP21457より出土したものである。

479は土師器甕Ｇ５である。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は直線的に延びている。端面は上方を向いている。口縁部内外面ともヨコナデが施されている。

P20001（図版155、写真図版173）

480は弥生土器甕Ａである。口縁端部は上方につまみ上げられている。口縁部内外面及び頸部内外面はヨコナデ、体部内面上半はタテハケ、体部内面下半はヘラケズリが施されている。体部外面上半はヨコハケ及び左上がりのハケが施された後右上がりのハケが施され、体部下半はタテハケが施されている。外面にはススが薄く付着している。

P21050（図版155、写真図版173）

481は縄文土器深鉢である。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味である。外面の端部直下にＤ字形のキザミ目の突帯をもっている。

P21135（図版155、写真図版173）

482は弥生土器甕Ｆ１である。口縁部は外反し、端部に面をもっている。ユビによる成形の為か凹凸がある。口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。口縁部外面には部分的に平行タタキの痕跡が残存している。外面にはススが薄く付着している。

P21364（図版155、写真図版173）

483は弥生土器広口壺Ａである。口縁端部に格子文、口縁部内面に扇形文が施されている。

P21724（図版155、写真図版173）

484は弥生土器把手付き甕Ａである。口縁端部は上方につまみ上げられている。把手は体部に孔を空けて差し込まれている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、体部内面はヘラケズリが施されている。

P22024（図版155、写真図版173）

485は土師器甑である。肩部に穿孔されている。体部外面上半はタテハケ、体部外面下半はヨコハケ、体部内面はヘラナデが施されている。

P24014（図版155、写真図版173）

486は土師器甕である。底部がわずかに平底気味である。内面はヘラケズリが施され、外面は摩滅している。

P26007（図版155、写真図版173）

487は須恵器鉢である。口縁部は内湾し、端部は丸味をもっている。

P26027（図版155、写真図版173）

488は土師器ミニチュア土器である。

SK20010（図版156、写真図版173）

489は弥生土器甕Ａである。口縁端部は上方につまみ上げられている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上部はヨコハケ後タテハケ、体部外面中部・下部はタテハケ、体部内面上部はタテハケ、体部内面中・下部はヘラケズリが施されている。体部外面下半にススが付着している。

SK20012（図版156、写真図版173）

490は須恵器器台の脚部である。３角形の透かしが穿たれている。

491は土師器高杯である。脚柱部上半は中実で、裾部で大きく開いている。裾部内面に指頭痕による凹凸があり、裾端部に面をもっている。杯部との接合は付加方式と思われる。脚柱部外面はタテハケ後ヘラミガキ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部外面はハケ後ナデ、脚裾部内面はナデが施されている。

492土師器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、端部にやや内傾する面をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はナデが施されている。

493は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後不整方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

494は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SK20016（図版156、写真図版174）

495・496は弥生土器甕Ａである。口縁部は少し上につまみ上げられている。495は口縁部内外面及び体部外面上端にヨコナデ、体部外面上半にタテハケ、体部外面下半にヘラミガキ、体部内面上位にハケ、体部内面中・下位にタテハケが施されている。体部外面にはススが付着している。496は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にタテハケ、体部内面にナデが施されている。

SK20017（図版156、写真図版174）

497は須恵器杯蓋である。稜はやや甘く、口縁端部に内傾する面をもっている。

SK20026（図版156、写真図版174）

498は弥生土器二重口縁壺Ａである。２次口縁部は高く立ち上げられ、縁帯部には擬凹線が施されている。口縁部内面には竹管によるスタンプ文が１ヶ所押されている。口縁部外面はタテハケ後ヘラミガキ、口縁部内面はヘラミガキ、体部外面はハケ後ヘラミガキ、体部内面はヘラケズリが施されている。

499は弥生土器壺である。体部外面上半はハケ後ヘラミガキ、体部外面下半はヘラミガキ、底部外面はナデ、体部内面上位はハケ、体部内面中位・下位はナデが施されている。

500は弥生土器二重口縁壺Ａである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部外は反して開き、端部は丸味をもっている。内面及び口縁部外面はヨコナデ、頸部外面はタテハケが施されている。

501は弥生土器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部はやや外反し、端部は丸味をもっている。外面及び口縁部内面はヘラミガキ、体部内面はヘラケズリが施されている。

502は弥生土器手焙形土器である。鉢部は平底で、口縁部は二重口縁を呈している。体部の突帯は底部から滑らかに続き、稜は鋭く尖っている。鉢部の上には覆部が乗っている。鉢部と覆部の接合部は突

帯が廻り、覆部の開口部に沿う耳まで続いている。鉢部は口縁部内外面及び体部内外面にヨコナデ、底部内面にナデ、底部外面はハケに施されているが、底部外面中央部は使用により平滑になっている。覆部は外面にハケ、内面にナデが施されているが、内面には粘土紐の接合痕が認められる。内外面とも火を焚いたような痕跡は認められない。

SK20033（図版157、写真図版175）

503は弥生土器甕である。口縁部は２重口縁で、１重口縁は短く外反し、２重口縁部は高く立ち上がっている。口縁端部は丸味をもっている。表面は摩滅しているが、体部内面はヘラケズリが施されている。

504は弥生土器甕である。底部は小さい平底である。体部外面は平行タタキ、底部外面はナデ、内面はヘラケズリが施されている。

SK20035（図版157、写真図版175）

505は弥生土器甕Ｅ２である。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ後ヘラミガキが施され、体部内面は摩滅している。

506は弥生土器甕Ｅ２である。口縁部は外反して開き、端部に面をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

507は弥生土器甕Ｆ２である。口縁部は外反して開き、端部は尖り気味である。底部は尖っている。体部外面は平行タタキ後中位のみタテハケ、体部内面はタテハケ後中位のみヘラケズリが施されている。体部外面下半には薄くススが付着している。

508は弥生土器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、１次口縁部は短く外反し、２次口縁部は高く立ち上がっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

509は弥生土器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、１次口縁部は短く外反し、２次口縁部は外反している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

510は弥生土器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、１次口縁は緩く開き、２次口縁部は凹凸をもちながら外反している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

511は弥生土器底部である。底部は大きな平底で、中央が窪んでいる。内面はヘラミガキ、体部外面はナデ後ヘラミガキ、底部外面はナデが施されている。

512は弥生土器高杯である。脚部は脚柱部から緩やかに開き、円形の３方透かしをもっている。杯部は外面にタテハケ、内面にナデ、脚部は内外面ともハケが施されている。

513・514は弥生土器台付鉢Ｃである。513は鉢部の口縁部外面にタテハケ、脚部の脚柱部外面にユビオサエ、脚裾部外面にハケ、脚裾部内面にナデが施されている。514は鉢部の体部外面にナデ、体部内面にハケ、脚部の表面にユビオサエが施されている。

515は弥生土器有孔鉢である。底部には径１㎝の孔が開けられている。体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SK20036（写真図版176）

516は弥生土器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は直線的に短く開いている。口縁部は

内外面ともヨコナデが施されている。

SK20037（図版157、写真図版176）

517は土師器甕Cである。口縁部には外傾する端面をもつが、側面から端面はなだらかに移行している。端面には擬凹線が施されている。口縁部は内外面ともヨコナデが施されている。

518は弥生土器壺である。底部は小さく、胴は大きく張り、口縁部は大きく開いている。口縁部外面及び体部外面はハケ、底部外面はナデ、体部内面上・中位はヨコハケ、体部内面下位はナデが施されている。

SK20038（図版158、写真図版176）

519は土師器椀Bである。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。体部内面はヘラナデが施され、工具痕が見られる。

520は土師器ミニチュア土器である。

SK20039（図版158、写真図版176）

521は須恵器高杯である。口縁部は体部から屈曲して外反し、屈曲部に凹線をもっている。凹線の下端の稜は鋭い。

SD20001（図版158、写真図版176）

522は弥生土器広口壺Aである。口縁端部は上下に大きく拡張し、端部に4条の凹線が施されている。頸部にも4条以上の凹線が施されてる。外面はタテハケ後ヨコナデ、内面はヨコナデが施されている。

523は弥生土器甕Aである。口縁端部は上方につまみ上げられている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はタテハケ後ナデが施されている。

SD20004（図版158、写真図版176）

524は土師器甕Eである。口縁部は短く外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

525は弥生土器甕である。体部外面はヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ、底部外面はナデが施されている。体部外面にはススが付着している。

SD20005（図版158、写真図版176）

526は弥生土器短頸壺Aである。長頸壺の系統であるが、頸部はかなり短くなっている。体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。口縁部は外面にタテハケ、内面にはナデが施されているが、内外面とも指頭痕が顕著である。外面にはススが付着している。

SD20006（図版158、写真図版177）

527～529は弥生土器甕Fである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。527は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面上半に平行タタキ、体部外面下半にタテハケ、体部内面にヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。528は口縁部外面にタテハケ、口縁部内面にヨコハケ、体部

外面に平行タタキ後タテハケ、体部内面にヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

529は弥生土器甕Ｅ１である。非常に小さく、底部も狭い平底である。表面は剥離している部分が多いが、体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

530は土師器小型器台Ａである。口縁端部はわずかに上方へ折り曲げられている。杯部外面及び脚柱部外面はタテハケ、脚裾部外面はナデ、脚裾部内面はヨコハケが施されている。

SD20011（図版158、写真図版177）

531は弥生土器広口壺Ａである。口縁端部が上方に拡張され、口縁部内面と端面に波状文が施されている。

532は弥生土器広口壺である。体部外面に櫛描波状文と櫛描直線文が施されている。

533は弥生土器甕Ｂである。口縁端部は上下に拡張され、端部に擬凹線が施されている。

534は弥生土器甕Ｂである。口縁端部は拡張されず、端面には擬凹線が施されている。口縁部内面にはカキ目状のヨコナデが施されている。

535は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は板ナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面にはススが付着している。

536は弥生土器底部である。体部外面はヘラミガキ、体部内面はタテハケ、底部内外面はナデが施されている。

537は弥生土器底部である。体部外面はタテハケ、内面はハケ後ヘラケズリ、底部外面はナデである。

538は弥生土器脚部である。器壁が非常に厚い。４方の円形透かしが開けられている。

539は弥生土器脚部である。杯部内面及び外面はヘラミガキ、脚柱部内面はナデである。

SD24001（図版159、写真図版177）

540・541は弥生土器甕Ｃである。540は口縁部が２重口縁を呈している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。541は口縁部が下方にやや拡張している。

542は弥生土器底部である。底部は狭い平底である。体部外面に斜め方向のハケ、体部内面にハケ後ヘラケズリが施されている。

SX20004（図版159、写真図版177）

543は須恵器杯身である。底部のヘラケズリは1/2程度である。

544は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。内外面ともヨコナデされている。

包含層（図版159・160、写真図版178・179）

552・554・555はSH20039上でまとまって出土しており、住居跡の土器である可能性がある。

545は須恵器杯蓋である。

546は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは低いが、鋭い。

547は須恵器高杯である。脚柱部外面にはカキ目が施され、脚柱部下端の突帯の下は凹線状に窪んでいる。透かしは３方の長方形透かしと考えられる。

548は須恵器直口壺である。口縁部外面に２条の突帯をもっている。

549は須恵器甕である。口縁端部と端部直下の突帯が一体となっている。

550・551は須恵器器台である。550は突帯の稜は鋭く、断面が赤紫色を呈している。551は体部に組紐文が施され、文様下の突帯は断面台形である。

552は弥生土器甕Ｅ１である。口縁部は外反し、端部に面をもっている。体部は中位が張り、ラグビーボール形である。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヘラミガキが施されている。体部外面は概ねタテハケが施されているが、体部中位付近には部分的にヨコハケが施されている。体部内面はヘラケズリが施されているが、上位には部分的にヘラミガキが施されている。体部外面にはススが付着している。

553は土師器直口壺である。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は高く上方へ延びている。内外面ともヘラミガキが施されている。

554は弥生土器高杯Ａである。杯部は体部が内湾し、口縁部で外反している。口縁端部は上方へつまみ上げられ、端面には擬凹線が施されている。脚柱部は筒状で、脚裾部で大きく開いている。杯部は内外面ともヘラミガキ、脚部は外面にヘラミガキ、内面に板ナデが施されている。

555は弥生土器器台Ａである。口縁部端面に擬凹線をもっている。脚柱部に円形透かし孔をもっている。外面はタテハケ後ヘラミガキ、口縁部内面にヘラミガキ、脚柱部内面にハケが施されている。

556は土師器小型器台Ａである。受け部の底部は穿孔され、端部は二重口縁となっている。脚部は直線的に開き、円形の透かし孔をもっている。受け部内外面と脚部外面はヘラミガキ、脚部内面はハケが施されている。

557は土師器鉢である。体部は椀形で、口縁部は直線的に開いている。底部には高い輪高台をもっている。口縁部及び体部は内外面ともヘラミガキ、高台部は内外面ともナデが施されている。

558は土師器有孔鉢である。漏斗形で、底部に穿孔がなされている。外面は平行タタキ、内面上半はハケ、内面下半はナデが施されている。

559・560は土師器台付鉢Ｃである。559は杯部が浅い。杯部は外面にハケ、内面にナデ、脚部は内外面ともナデが施されている。560は杯部が深く、内外面とも摩滅している。

561は土師器蓋である。天井部中央に穿孔がなされている。縁部外面はハケ、縁部内面はハケ後ナデ、つまみ外面はナデ、つまみ内面はハケが施されている。

562は土師器竈である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。甕と同様の形態である。逆凹字形に庇が付けられていたが、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケが施されている。体部内面はハケ後ヘラケズリが施されているが、粘土紐の接合痕が部分的に残存している。剥離している。内面にはススが薄く付着している。

563は土師器竈である。体部から底部にかけての破片である。底部より19㎝上に円形の透かし孔が認められる。外面はハケ及び板ナデが施されている。内面はナデが施されているが、粘土紐の接合痕が顕著である。

４．Ⅲ区出土の土器

SH30001（図版161・162、写真図版180・181）

564～569・572・573・575～577・579は床面、571は竈、574・578はSK30035から出土したもので、570

は竈の支脚として利用されたものである。

564は土師器甕Ｅ２である。口縁部は直線的に開き、端面は上方を向いている。体部はやや寸胴の倒卵形を呈している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面上半はヘラケズリ、体部内面下半はナデが施されている。体部外面中位・下位にはススが付着している。

565は土師器甕Ｅ２である。口縁部はやや外反し、端面は上方を向いている。口縁部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケ後ナデ、体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

566は土師器甕Ｅ２である。口縁部はやや外反して開き、端部は丸味をもつ。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、体部外面はハケ後ナデ、体部内面はヘラケズリされる。

567は土師器甕Ｆ２である。口縁部は直線的に開き、端部を外側につまみ出している。体部は球形を呈している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上端はヨコナデ、体部外面は平行タタキ後ナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面にはススが付着している。

568は土師器甕Ｆ１である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。底部は平底である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上半はタテハケ、体部外面下半はヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ、底部外面は平行タタキが施されている。外面はススが付着している。

569は土師器小型丸底壺である。口縁部は直線的に開き、体部はやや俵状を呈している。器壁が非常に厚い。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデが施されている。

570は土師器高杯Ｈ２である。杯部に明瞭な稜をもっている。口縁部は内湾し、端部に内傾する面をもっている。脚部は脚柱部上半が中実である。脚柱部から緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。３方の円形透かしをもっている。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部外面にナデ、脚柱部外面にヘラミガキ、脚柱部内面にヘラケズリが施されている。

571は土師器高杯Ｈ２である。杯部に明瞭な稜をもっている。口縁部はやや内湾し、端部は丸味をもっている。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内外面にナデが施されている。脚部との接合は充填方式である。

572は土師器高杯Ｈ２である。杯部に明瞭な稜をもっている。口縁部は内湾し、端部は丸味をもっている。杯部は外面にナデ、内面にヘラミガキが施されている。

573は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形である。内面及び口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。脚部との接合は充填方式である。

574は土師器高杯である。脚柱部は中実で、脚裾部で大きく開いている。表面は摩滅している。

575は土師器高杯である。脚部は脚裾部で大きく開き、端部に面をもっている。脚柱部は棒状工具により穿孔されている。脚柱部外面はヘラミガキ、脚裾部外面はナデ、脚裾部内面はヨコハケされる。

576は土師器鉢である。底部は平底で、口縁部はやや外反している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面及び底部外面はヘラケズリ、体部内面はヨコナデ、底部内面はナデが施されている。

577は土師器鉢である。底部は平底で、体部は内湾し、端部のみ外反している。表面は摩滅している。脚部上端の挿入部と充填粘土が認められることから大型高杯の転用品の可能性がある。

578は土師器椀Ａである。底部が平底で、口縁部は強く内湾している。端面は内傾している。外面はナデが施されている。

579は土師器甑である。底部は丸底で、体部に牛角把手をもっている。蒸気孔は円孔の周りに楕円孔が５つ開けられている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面上半はヘラケズリ、体部内面下半はヘラケズリ後ナデが施されている。

SH30002（図版162、写真図版181）

583～585・589は床面、581・586～588は竈、580・582・590は埋土から出土したものである。

580は須恵器壺である。頸部に波状文が施されている。

581は須恵器甕である。外面は平行タタキが施され、内面には同心円当て具痕が残っている。

582は土師器甕Ｅ２である。口縁部は短く外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

583は土師器甕Ｇ５である。口縁部はやや内湾し、端部は外側につまみだされ、端面は上方を向いている。口縁部内外面はヨコナデが施されている。

584は土師器脚部である。台付鉢の脚部と思われる。外面はタテハケ後ナデ、内面はナデ及びユビオサエが施されている。

585は土師器甑である。底部は丸底で、楕円形の蒸気孔がわずかに残存している。体部に牛角把手をもっている。外面はタテハケ、口縁部内面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

586～590は土師器製塩土器である。焼成は硬質で、厚さは1.5～２㎜程度である。586～589は胎土に白色砂粒が目立っている。

SH30003（図版163、写真図版182）

592～603は床面、604～607は埋土、591は上層の攪乱土から出土したものである。

591は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりが高い。

592は土師器高杯Ｈ２である。杯部は椀形で、緩い稜をもっている。口縁部は端部のみ巻き込むように外反している。口縁部内外面はヨコナデ椀底部内面は板ナデ、底部外面はナデが施されている。杯部内面には放射状暗文が入れられている。

593は土師器高杯Ｈ２である。杯部は椀形で、緩い稜をもっている。脚柱部は上端が閉じ、脚裾部で大きく開いている。表面は摩滅している。

594は土師器高杯Ｈ２である。杯部は椀形で、緩い稜をもっている。口縁部内外面はナデ、底部内面はナデ、底部外面は板ナデが施されている。内面には比較的密に放射状暗文が入れられている。

595・596は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形である。脚柱部は上半が中実で、脚裾部で大きく開いている。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にハケ、底部外面にタテハケ、脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。

597は土師器高杯の脚部である。脚柱部は上半が中実で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部外面は板ナデ後ナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。杯部との接合は挿入方式と考えられる。

598は土師器鼓である。胴張りで、やや尖り気味の底部は須恵器の器形と類似している。体部外面上半はヨコナデ、体部外面下半はヘラケズリ後ナデ、体部内面下半はヘラケズリが施され、体部内面上半には粘土紐の接合痕が残存している。

599～604は土師器ミニチュア土器である。599～603は半球形で、器壁が厚い。604は小型で、口縁部をつまみ上げたのみである。

605～607は土師器製塩土器である。厚さは１～２㎜で、焼成は605が硬質、606・607が軟質である。

SH30004（図版163、写真図版182）

いずれも埋土から出土したものである。中央をSH30025に切られていることから、SH30025に属する可能性もある。

608は土師器甕Ｅ２である。口縁部はわずかに外反し、端部は丸味をもっている。内外面ともヨコナデが施されている。

609は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開き、端面は上方を向いている。口縁部内外面ともヨコナデが施されている。

610は土師器高杯Ｈ２である。杯部は稜をもっている。口縁部内湾するが、端部のみ外反している。外面及び口縁部内面はヨコナデ、底部内面はナデが施されている。

SH30025（図版163、写真図版182・183）

611～613・615～617・619・620は埋土から出土し、618は床面、614は竈の支脚として使用されていたものである。SH30004の中央を切っていることから、SH30004に属する土器が含まれている可能性がある。

611は須恵器高杯の脚部である。側面の縁は内外面とも面取りがなされている。

612は土師器甕Ｈである。口縁部はやや内湾気味で、端部は尖り気味である。表面は摩滅している。

613は土師器甕Ｅ２である。口縁部は緩く外反し、端部に面をもっている。口縁部内外面ともヨコナデが施されている。

614は土師器高杯Ｅである。底部は丸味をもつが、口縁部は直線的である。口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。内面は摩滅している。脚部との接合は充填方式である。

615は土師器高杯Ｈ２である。杯部は椀形であるが、かなり歪んでいる。表面は摩滅している部分が多いが、底部外面はタテハケ、口縁部内面はハケ後ヨコナデが施されている。脚部との接合は充填方式もしくは付加である。

616は土師器高杯である。杯部は底部外面にタテハケ、底部内面に放射状の暗文が入れられている。脚部は外面にタテハケ、脚柱部内面にヘラナデ、杯部と脚部の接合は充填方式である。

617は土師器高杯の脚部である。脚柱部は上端が閉じ、脚裾部で大きく開いている。脚柱部外面はナデ、脚裾部外面はヨコナデ、脚柱部内面はヘラナデ、脚裾部内面はヨコハケが施されている。外面及び脚裾部内面には化粧土が塗られている。

618は土師器椀Ｂである。底部は丸味をもち、口縁部まで内湾している。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はハケが施されている。

619は土師器椀Ｂである。底部は平底気味で、口縁部は内湾している。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はハケが施されている。内面には放射状の暗文が入れられている。

620は土師器椀Ｂである。底部は丸味をもち、口縁部は内側に折れて外反している。内面及び口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。他の土師器と異なり表面の色調が非常に黒っぽい。いわゆる須恵器模倣型の杯である。

SH30005（図版164・165、写真図版183～185）

住居廃絶直後に多量の土器がまとまって廃棄されたものと思われる。

621は須恵器杯蓋である。稜は鋭く突出している。

622は須恵器器台である。段状の突帯の間に波状文が施されている。623・644と同一個体の可能性が高い。

623は須恵器器台である。段状の突帯の下には列点文、上には波状文が施され、脚部上端には突帯が２条廻らされている。杯部の底部外面は平行タタキ後カキ目、底部内面はナデが施されている。622・644と同一個体の可能性が高い。

624は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。体部は球形である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部下半にススが付着している。

625は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

626は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ、体部外面上位は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

627は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端面は上方を向いている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上端はタテハケ、体部上半は斜め方向のハケが施されている。体部外面下半にはススが付着する。

628は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ、体部外面中位はヨコハケ及び斜め方向のハケが施されている。体部内面はヘラケズリが施されている。

629は土師器甕Ｈである。口縁部は短く直線的で、端部は丸味をもっている。口縁部内外面及び体部外面上位はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

630は土師器甕Ｅ２である。口縁部は短く外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケが施されている。

631は土師器甕Ｊである。口縁部は二重口縁で、１次２次とも口縁の外反は弱い。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

632は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁部は受け口状に内湾し、端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はナデが施されている。

633は土師器二重口縁壺Ａである。口縁部は二重口縁部で、２次口縁部はほとんど外反しない。体部は球形である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上半はヨコハケ、体部外面下半はタテ及び斜め方向のハケが施されている。体部内面はヘラケズリが施されている。

634は土師器高杯Ｆである。杯部に段状の稜をもち、口縁部はやや内湾し、端部のみ外反している。端部に面をもっている。脚部との接合は充填である。表面は摩滅している。

635は土師器高杯Ｊである。底部から口縁部にかけて内湾し、端部のみ外反している。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、底部外面はタテハケ、底部内面はナデが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。

636は土師器高杯Ｊである。杯部は底部から口縁部まで内湾している。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面はヘラミガキ、底部内面はナデが施されている。脚部との接合は充填方式である。

637・638は土師器高杯Ｊである。杯部は底部から口縁部まで内湾している。かなり歪んでいる。脚柱

部は緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。脚部との接合は充填方式である。表面はほとんど摩滅している。638は杯部の内面に放射状暗文が入れられている。

639は土師器高杯である。脚柱部は緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。杯部は底部内面にヘラミガキ、底部外面にナデが施されている。脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラナデ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。

640は土師器高杯である。大型の脚部である。表面は摩滅している。

641は土師器高杯である。大型の脚部である。脚柱部上端面には接合のための刺突がなされている。脚柱部外面はナデ、脚裾部内面は円錐形にヘラケズリが施されている。

642は土師器甑である。底部は丸底で、口縁部に向かって緩やかに開き、端部は水平の面をもっている。胴部に２方に牛角把手をもっている。底部の蒸気孔は円孔の周りに４つの楕円孔をもっている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部内面はヨコハケ後ヘラケズリ、底部内面はナデが施されている。

643は陶質土器甕である。甕の体部下位の破片と考えられる。外面には縦方向の縄蓆文が施されている。縄蓆文の縄目の幅は１㎜、間隔は1.5～２㎜である。タタキの後、部分的に横方向のナデが見受けられる。下部はナデが施されているが、格子タタキがわずかに残存している。格子の大きさは１辺が２㎜弱である。内面は横方向のナデの後、縦方向にナデ上げられている。焼成は硬質で、表面が灰色、断面がにぶい赤褐色を呈している。胎土には白色の砂粒（長石・石英か）が目立っている。下植野南遺跡（京都府）出土例に類似する。

SH30006（図版165、写真図版185）

647・648・650・651は竈、644～646・649は埋土から出土したものである。648は竈の袖中から出土したものである。

644は須恵器器台である。断面は斜め方向の層状をなしており、内傾接合の可能性が高い。622・623と同一個体の可能性が高い。

645は土師器無頸壺である。口縁部が非常に短く、わずかに外反する程度である。外面はナデ、内面下半はハケが施されている。646は土師器小型丸底壺である。口縁部が直立している。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデが施され、内面は粘土紐の接合痕が明瞭に残存している。

647は土師器高杯Ｈ１である。杯部に稜をもっている。口縁部は内湾し、端部のみ外反している。脚柱部は筒状で、裾部で大きく開いている。杯部は口縁部外面にタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面にハケ後ヨコナデ、底部内面にハケ、底部外面にナデが施されている。脚部は外面にナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面にヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は充填と考えられる。

648は土師器高杯Ｈ２である。杯部に緩い稜をもっている。口縁部は内湾している。外面はヨコナデが施され、内面は摩滅している。脚部との接合は接合方式と考えられる。

649は土師器高杯Ｇである。大型の有稜高杯である。口縁部内外面はハケ後ヨコナデ、底部外面はナデが施され、内外面とも化粧土が塗られている。脚部との接合は接合方式と考えられる。

650は土師器椀である。底部は丸底で、口縁部まで内湾している。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

651は土師器製塩土器である。外面には平行タタキが施されている。焼成はやや硬質で、厚さは２㎜

である。

SH30007（図版166、写真図版186）

いずれも埋土から出土したものである。住居跡に切れ合いがあることから、SH30006の土器が混入している可能性がある。

652は土師器甕Ｄである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部が直立し、端面は水平である。

653は土師器高杯Ｅである。杯部に緩い稜をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、底部内外面はナデが施されている。

654は土師器高杯である。脚部は脚柱部から脚裾部にかけて緩やかに開いている。脚柱部外面はヘラナデ、脚裾部内外面はナデが施され、脚柱部内面には曲げしわが認められる。

655は土師器鼓形器台Ａである。表面は摩滅している。

SH30008（図版166、写真図版186・187）

656・657・659・660・668・670・671・674は床面、658・661～667・669・672・673・675～677は埋土から出土したものである。

656は土師器甕Ｅ２である。口縁部は内湾し、端部に面をもっている。体部は長細く、体部外面にはススが薄く付着している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ、体部外面上端はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

657は土師器甕Ｇ４である。口縁部は内湾し、端部は内側に肥厚している。表面は摩滅している。

658は土師器甕Ｇ４である。口縁部は内湾し、端部は内側に丸く巻き込まれている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

659は土師器甕Ｇ２である。口縁部は内湾し、端部に面をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後カキ目状のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

660は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面上端はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

661は土師器甕Ｇ２である。口縁部はわずかに内湾し、端面をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上端はタテハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ及び斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

662は土師器甕Ｇ１である。口縁部は内湾し、端部は尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

663は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端部は外側につまみ出されている。口縁部内外面はヨコナデが施されている。

664は土師器甕Ｄである。１次口縁部は短く外反し、２次口縁部はやや外反している。内外面ともヨコナデが施されている。

665は土師器二重口縁壺Ｂである。１次口縁部は外反して稜が鋭く飛び出し、２次口縁部はやや内側へ倒れている。口縁部内外面にヨコナデが施されている。

666は土師器二重口縁壺Ａである。２重口縁部外面には擬凹線が施されている。口縁部及び頸部内外面にはヨコナデが施されている。

667は土師器短頸壺である。口縁部は短く外反している。口縁部内外面はユビオサエ、体部内外面はヘラケズリが施されている。

668は土師器底部である。体部の下半は尖り気味にすぼまり、底部は丸味をもった平底である。体部外面はハケ、体部内面はハケ後ナデ、底部内外面はナデが施されている。

669・670は土師器高杯Ｃである。杯部は皿状で、口縁部が外反している。脚部は脚柱部から緩やかに開いている。杯部は内外面ともヘラミガキ、脚柱部外面はタテハケ、脚裾部外面はヘラミガキ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はヨコナデが施されている。杯部と脚部の接合は充填方式である。

671は土師器器台である。受部内外面はヘラミガキ、脚部外面はタテハケ後ヘラミガキ、脚部内面上半はヘラケズリ、脚部内面下半はタテハケが施されている。

672は土師器小型器台Ｂである。口縁部は底部から屈曲して外反している。脚部はハの字形に開いている。杯部は内面にヘラミガキ、口縁部外面にヨコナデ、底部外面にタテハケ、脚部は外面にタテハケ、脚裾部外面にヨコナデ、内面にヘラケズリが施されている。

673は土師器台付鉢Ｃである。表面は摩滅している。

674は土師器椀Ａである。底部は平底である。内外面ともヘラミガキが施されている。

675は土師器小型丸底鉢Ａである。口縁部は内湾している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面はナデが施されている。

676は土師器ミニチュア土器である。底部は平底である。体部外面はユビオサエ、体部内面はハケ、底部外面はナデが施されている。

677は土師器ミニチュア土器である。底部は丸底である。内外面ともナデが施されている。表面は摩滅している。

SH30009（図版167、写真図版187）

678は埋土から出土したものである。

678は須恵器杯身である。底部はヘラ切り未調整である。

SH30010（図版167、写真図版188）

684・685は床面、686はSK30034、679～683・687・688は埋土から出土したものである。

679は須恵器杯蓋である。稜は突出し、天井部外面のヘラケズリはほぼ前面にわたっている。

680は須恵器杯身である。口縁端部に面をもたない。

681は須恵器蓋である。体部の高さが低く、稜は突帯状に突出している。

682は須恵器甕である。口縁部は直線的に開き、口縁端部外面に突帯をもち、端面は水平である。

683は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ及び斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

684は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端部は外側に突出している。端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

685は土師器直口壺Ｃである。体部は肩が張り、底部は丸底である。体部内面下半はヘラナデが施され、体部内面上半は粘土紐の痕跡が残存している。

686は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形で、底面が平坦である。脚部は脚柱部が中実で、脚裾部で大

きく開いている。杯部と脚部の接合は付加方式である。表面はほとんど摩滅している。

687・688は土師器製塩土器である。687は口縁部がやや鉢形に開き、端部は鋭く尖っている。焼成は軟質で、砂粒を非常に多く含んでいる。厚さは４㎜である。688はコップ形の製塩土器である。やや軟質で、厚さは１㎜である。

SH30011（図版167、写真図版188・189）

696・699は床面、689～695・697・698は埋土から出土したものである。

689は土師器甕Ｇ２である。口縁部は内湾している。端部に面をもち、わずかに内面に肥厚している。口縁部内外面及び体部外面上端はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

690は土師器甕Ｉである。口縁部は直線的に開き、端部はやや内側に肥厚している。表面はほとんど摩滅しているが、化粧土がわずかに残存している。

691は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁部は二重口縁で、内傾して立ち上がり、端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

692は土師器直口壺Ｃである。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面上半はヘラナデ、体部内面下半はヘラケズリが施されている。体部外面下半にはススが付着している。

693～695は土師器小型丸底壺である。口縁部は直線的に開いている。693は口縁部が長い。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にはヘラナデが施されている。694は体部内面にナデが施され、外面は摩滅している。695は器形が扁平である。外面はほとんど摩滅しているが、わずかにハケが残存している。体部内面下半にヘラケズリが施され、体部内面上半には指頭痕が見られる。

696は土師器高杯Ｆである。杯部の稜は鋭く段状に突出している。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、底部内外面はナデ、脚部との接合部はタテハケが施されている。

697・698は土師器高杯の脚部である。697は脚柱部が筒状で、脚裾部に向かって緩やかに開いている。円形透かしは１ヶ所のみである。表面は698は脚柱部が中実で、脚裾部で大きく開いている。表面は摩滅している。

699は土師器紡錘車である。表面はナデが施されている。重量は46ｇである。

SH30012（図版168、写真図版189）

703はP30027、700～702は埋土から出土したものである。SH30022と重複していることから、SH30022に属するものが含まれている可能性がある。

700は土師器鉢である。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。内外面ともヘラミガキが施されているようである。

701は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端部は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

702は土師器二重口縁壺Ａである。１次口縁部は頸部から大きく開き、２次口縁部は直線的に開いている。口縁端部は丸味をもっている。２次口縁部外面及び内面はヨコナデ、１次口縁部外面はタテハケが施されている。

703は土師器二重口縁壺Ａである。２次口縁部は外反し、２重口縁部の稜は突出している。口縁部外

面には吹きこぼれ状の痕跡が認められる。

SH30022（図版168、写真図版189）

705～709は床面、704・710・711は埋土から出土したものである。SH30012と重複していることから、SH30012に属するものが含まれている可能性がある。

704は土師器二重口縁壺Ａである。１次口縁部は頸部から大きく開き、２次口縁部はやや外反して開いている。口縁端部は丸味をもっている。２次口縁部内外面はヘラミガキ、１次口縁部内外面はヨコナデが施されている。

705は土師器甕Ｈである。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ、体部内面はハケ後ヘラケズリが施されている。

706は土師器甕である。口縁部は直線的に開き、端部は丸味をもっている。体部は球形である。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ及び斜め方向のハケ、体部内面はナデが施されている。体部下半にはススが付着している。

707は土師器台付鉢Ｃである。表面はナデが施されている。

708は土師器小型丸底鉢Ｂである。口縁部は短い。体部内外面はヘラミガキが施されている。

709は土師器椀Ａである。平底の皿状の器形である。表面はナデが施され、体部外面にはひび割れが多く認められる。

710・711は土師器山陰型甑である。710は突帯の幅が広いが、剥離している。内外面ともヨコナデが施されている。711は突帯の幅が狭い。突帯下外面はタテハケ、内面はハケが施されている。710より小型の器形と考えられる。

SH30013（図版168、写真図版190）

712は竈東側の床面から出土したものである。

712は土師器椀Ｂである。底部は丸底で、口縁端部のみやや外反している。表面はほとんど摩滅しているが、内面はヘラミガキが施されているようである。

SH30014（図版168、写真図版190）

713は竈から出土したものである。

713は須恵器杯蓋である。稜は甘く、口縁部の端面は凹線状に窪んでいる。天井部のヘラケズリは狭

SH30015（図版168、写真図版190）

714は床面から出土したものである。

714は須恵器杯蓋である。稜は鋭く突出しており、天井部のヘラケズリは2/3程度である。口縁部の端面は内傾している。

SH30016（図版168、写真図版190）

716～718は床面、715・719は埋土から出土したものである。

715は須恵器壺である。口縁部は屈曲し、器壁が薄い。口縁部外面に波状文が施されている。

716は土師器椀Ｂである。底部は丸底で、口縁部にかけて強く内湾し、口縁部端部のみ外反させている。口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はヨコナデ、体部内面は板ナデが施され、体部外面は摩滅しているが、ヘラケズリが施されているようである。

717は土師器高杯Ｊである。杯部は深い椀形で、口縁端部は外反気味である。脚部は脚柱部が中実で、脚裾部で大きく開いている。杯部は口縁部外面にヨコナデ、底部外面にハケ、内面にヨコナデ後螺旋状のヘラミガキが施されている。脚部は脚柱部外面にヘラミガキ、脚裾部外面にハケ後ナデ、脚裾部内面にヨコハケが施されている。

718は土師器高杯Ｇである。稜は段状を呈している。表面は摩滅している。

719は土師器不明品で、壁土状の破片である。胎土にスサや径３㎜以下の砂粒を多く含む。厚さは1.5㎝である。

SH30017（図版169、写真図版190）

723は床面、720・725はSK30012、721・722・724・726は埋土から出土したものである。

720は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。体部は球形である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面下半にはススが付着している。

721は土師器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は外反している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

722は土師器底部である。底部は非常に厚い。体部外面はナデ、底部外面はハケ後ナデ、底部内面はハケが施されている。

723は土師器壺である。体部はやや肩の張った球形である。体部内面下半はナデが施されているが、縦方向にヒビ割れが見られる。外面は摩滅している。

724は土師器高杯Ｆである。杯部の稜は段状を呈している。杯部の底部には口縁部との接合のためにキザミ目が入れられている。脚部との接合は充填方式である。

725・726は土師器高杯の脚部である。脚柱部は筒状で、脚裾部で大きく開いている。裾部内外面はヨコナデが施されている。726は３方の円形透かしが入れられている。

SH30019（図版169、写真図版191）

いずれも埋土から出土したものである。SH30036と重複していることから、SH30036に属するものも含まれている可能性がある。

727は須恵器杯身である。口縁部は高く立ち上がり、端面はやや内傾している。

728は須恵器無蓋高杯である。杯部は体部が内湾し、口縁部が外反している。端部は尖っている。体部外面には波状文が廻らされている。

729は土師器甕Ｉである。口縁部は外反し、端部はわずかに内側へ肥厚している。体部は球形である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面にはススが付着している。

730は土師器甕Ｇ５である。口縁部は２次口縁部が外反している。端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデが施されている。

731は土師器高杯の脚部である。脚柱部の上端は粘土が充填されて閉じられている。脚柱部外面はヘラミガキが施されている。

732は土師器椀Ｂである。底部は平底で、体部から口縁部にかけては内湾している。体部内面はハケ後ナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

SH30036（図版169、写真図版191）

734・735は床面、734は埋土から出土したものである。SH30019と重複していることから、SH30019に属するものも含まれている可能性がある。

733･734は土師器高杯Ｈ２である。杯部にゆるい稜をもち、口縁部は内湾している。表面はほとんど摩滅しているが、脚柱部内面はヘラケズリが施されている。734は脚柱部上端に粘土が充填されている。

735は土師器高杯Ｊである。杯部は稜をもたずやや鉢形である。脚柱部上端は棒状工具による刺突がなされている。表面は摩滅している。

SH30020（図版170、写真図版191・192）

741・747～749は床面、742・744はSK30013、740・743・745はSK30015、750は竈、736～739・746は埋土から出土したものである。

736は須恵器杯蓋である。体部は高く、稜は突帯状に突出している。

737は須恵器蓋である。天井部中央は平坦で、小ぶりのつまみが付いている。

738は須恵器壺である。口縁部外面には波状文が施されている。

739は須恵器甕である。口縁部直下と頸部に突帯をもち、頸部の突帯の上下に波状文が入れられている。波状文はやや乱れている。

740は土師器直口壺Ｂである。体部はやや肩が張っている。体部外面上半はヨコナデ、体部外面下半はハケ、体部内面下半はナデが施されている。体部内面上半には粘土紐の接合痕が明瞭である。

741・743は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開き、端部を外側につまみ出している。端面は水平である。体部外面はタテハケ及び斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。741は口縁部内外面にヨコナデ、743は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面上端にヨコハケが施されている。

742は口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にハケ後ヨコナデが施されている。

744は土師器甕である。口縁部は外反し、端部はわずかに内側へ肥厚している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

745～747は土師器高杯Ｈ２である。杯部は稜をもち、口縁部は内湾している。脚部は脚裾部で大きく開いている。いずれも表面は摩滅気味である。745は脚柱部上端が粘土で充填されている。746は脚柱部の上半が中実である。747は杯部と脚部の接合が充填方式である。

748は土師器高杯である。脚部は脚柱部から緩やかに開いている。脚柱部内面にはヘラケズリが施されている。

749は土師器椀Ｂである。底部は平坦で、口縁部は内湾している。表面はほとんど摩滅している。

750は土師器甑である。口縁部は緩く外反している。体部に牛角把手をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコナデが施されている。

SH30024（図版170、写真図版192）

751は埋土から出土したものである。

751は土師器短頸壺Ｂである。口縁部は内湾し、端部は尖り気味である。外面はヘラミガキ、口縁部内面はヨコナデ、体部内面はハケが施されている。

SH30026（図版171、写真図版193）

754は床面、752・753・755～758は埋土から出土したものである。

752は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開き、端部はやや内傾している。口縁部外面はヨコハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

753は土師器高杯Ｇである。杯部の稜は口縁部から底部におおい被さるようになっている。表面はほとんど摩滅しているが、底部内面にはハケが施されている。

754は土師器高杯Ｆである。杯部の稜は段状である。口縁部内外面はハケ後ヨコナデ、底部外面はナデが施されている。底部内面はハケ後ナデが施され、放射状の暗文が入れられている。脚部との接合は充填方式である。

755は土師器高杯Ｅである。杯部は底部から内湾し、口縁部は外反している。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、底部外面はタテハケ後ナデ、底部内面はナデ、脚柱部外面はタテハケが施されている。

756は土師器高杯である。脚柱部上半は中実で、脚裾部で大きく開いている。外面はナデ、脚柱部内面はヘラケズリが施されている。

757は土師器椀Ａである。底部は平底で、口縁部に向かって内湾している。口縁部内面はハケ後ナデ、底部内面はナデ、口縁部外面はタテハケ、底部外面はナデが施されている。

758は土師器椀Ａである。底部は平底で、口縁部は直線的に開いている。口縁部内外面はヨコナデ、底部内外面はナデが施されている。

SH30027（図版171、写真図版193）

759・763は床面、762はSK30018、761はSK30037、760・764・765は埋土から出土したものである。

759は須恵器杯身である。口径は小さく、立ち上がりは高い。口縁端部は丸味をもっている。

760は須恵器甕である。口縁部及び頸部に突帯をもっている。頸部に突帯の上に波状文、下に列点文が施されている。

761は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開き、端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

762は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部に面をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

763は土師器高杯Ｈ２である。杯部に緩やかな稜をもち、口縁部は直線的である。口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデ、内面はヘラミガキが施されている。杯部との接合は充填方式である。

764は土師器高杯Ｊである。口縁部内面はハケ後ヨコナデ、口縁部外面はヨコナデ、底部内外面はナデが施されている。脚柱部上端には竹管状の刺突がなされている。

765は土師器高杯である。脚部は脚柱部から脚裾部に向かって開いている。杯部と脚部の接合は充填

方式である。

SH30028（図版171、写真図版194）

766は埋土から出土した須恵器杯蓋である。天井部外面はヘラ切り未調整と思われる。

SH30029（図版172、写真図版194）

769は床面、773はSK30017、767・768・770～772は埋土から出土したものである。

767は須恵器甕である。外面は平行タタキ、内面はナデが施されている。

768は土師器甕Ⅰである。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

769は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端面は水平である。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

770は土師器直口壺Ｂである。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ後ヨコナデ、体部内面下半はヘラナデが施されている。体部内面上半はユビオサエが施されているが、粘土紐の痕跡が明瞭である。

771は土師器高杯Ｈ２である。杯部の稜は段状で、口縁部は内湾している。口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデ、内面は摩滅している。

772は土師器高杯Ｊである。表面はほとんど摩滅しているが、杯部と脚部の接合部付近はタテハケが施されている。脚柱部上端は粘土が充填されている。

773は土師器高杯Ｊである。脚柱部は筒状で、脚部から緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。表面は摩滅している。

SH30031（図版172、写真図版194）

774～776・778は床面、777は埋土から出土したものである。

774は土師器直口壺Ｂである。口縁部は直線的に立ち上がるがやや短い。体部もやや扁平である。外面及び口縁部内面はヘラミガキ、体部内面上位はヨコハケ、体部内面下位は板ナデが施されている。体部外面下半にはススが付着している。

775は土師器高杯Ｇである。大型の有稜高杯である。口縁部は外反して開き、端部に面をもっている。内面はヨコナデ、外面はタテハケ後ヨコナデが施されている。

776は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形で、底面は平坦である。脚部は筒状で、脚裾部で大きく開いている。杯部は口縁部内面にヨコハケ後ヨコナデ、口縁部外面にタテハケ後ヨコナデ、底部内面にナデ、底部外面にタテハケ後ナデが施されている。脚部は脚柱部外面にタテハケ、脚裾部外面にナデ、脚裾部内面にヨコハケが施されている。脚柱部と脚裾部の接合部の内面には指頭痕が残り、脚柱部の内面には曲げシワが見られる。脚柱部内の上端には太い棒で刺突された後に細い棒で刺突がなされている。杯部と脚部の接合は挿入方式と思われる。

777は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形で、底部から口縁部にかけて緩やかに内湾している。脚部は筒形で、脚裾部から緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。杯部は口縁部外面にヨコナデ、底部外面にナデ、口縁部内面にヨコナデ後放射状暗文、底部内面にヘラミガキが施されている。脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラナデ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。

778は土師器高杯Ｊである。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面はナデが施され、底部内面は剥離している。脚部との接合は挿入方式で、脚柱部上端に棒状の刺突がなされている。

SH30032（図版172、写真図版195）

780～782・784・785は床面、779・783は埋土から出土したものである。

779は須恵器甕である。口縁部は外反し、口縁部の端面は丸味をもっている。口縁端部外面に低い突帯をもっている。焼成は軟質である。

780は土師器甕Ｊである。口縁部はやや内湾し、端部のみ外反している。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

781は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面上半はヨコハケ及び斜め方向のハケ、体部外面下半はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

782は土師器高杯Ｈ１である。杯部がやや小さい。表面はほとんど摩滅しているが、底部内面にはタテハケが施されている。脚部との接合は挿入方式である。

783は土師器高杯の脚部である。脚柱部は筒状で、脚裾部で大きく開いている。３方の円形透かしをもっている。脚柱部外面はナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。

784は土師器高杯の脚部である。脚柱部は上半が中実で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部内面は円錐形にヘラケズリがなされている。表面はほとんど摩滅している。

785は土師器椀Ａである。底部は平底である。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、底部内面はハケ後ナデ、底部外面はユビオサエが施されている。

SH30033（図版173、写真図版195）

787はSK30020、788はP30724、786は埋土から出土したものである。

786は須恵器無蓋高杯である。杯部は深く、外面に波状文をもっている。

787は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は外反しながら上方に立ち上がっている。端面は内傾している。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデが施されている。

788は土師器甕Ｅ２である。口縁部はやや外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ後ヨコハケ、体部内面上位はヨコハケ、体部内面中位はヘラケズリが施されている。

SH30035（図版173、写真図版195・196）

791はP30709、789・790はP30719、792はSK30021から出土したものである。

789は土師器二重口縁壺Ｂである。口縁部は二重口縁で、大きく外反した１次口縁部の上にやや内傾して立ち上がる２次口縁部が乗っている。１次口縁部内外面はヨコナデ、２次口縁部外面はタテ及び斜め方向のハケ後ヨコナデ、２次口縁部内面はヨコハケが施されている。内面にはタール状の付着物がわずかに残存している。

790は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部口内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

791は土師器底部である。小型の鉢の可能性がある。底部は平底で、体部は半球形である。内外面ともナデが施されている。

792は土師器小型丸底鉢Ａ１である。頸部のしまりは弱く、口縁部は内湾している。口縁部内面はヨコナデ、頸部内面にヨコハケが施されている。

SB30001（図版173、写真図版196）

793はP30177から出土したものである。

793は土師器甕Ｅである。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。内外面ともヨコナデされる。

SB30006（図版173、写真図版196）

794はP30387から出土したものである。

794は土師器高杯Ｈ２である。杯部に緩い稜をもち、口縁部は内湾している。

P30185（図版173、写真図版196）

795は土師器ミニチュア土器である。平底でコップ形を呈している。内外面ともナデが施されている。

SK30001（図版173、写真図版196）

796は須恵器杯身である。立ち上がりは高く、端面はやや内傾している。受部の下に突帯状の盛り上がりが認められる。

SK30002（図版173、写真図版196）

797は須恵器杯蓋である。体部は高く、端面は外傾している。

798は須恵器杯蓋である。稜は突帯状に突出している。

799は土師器甕Ｉである。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。体部内面にはヘラケズリが施されている。

800は土師器高杯Ｈ２である。杯部は弱い稜をもち、口縁部は内湾している。表面は摩滅している。脚部との接合は充填方式である。

SD30001（図版174～178、写真図版196～202）

SD30004の流路が変更した後の古墳時代前期から７世紀末頃までの遺物が多く含まれ、SD30004の時期の遺物も含まれている。

801・802は須恵器杯蓋である。稜は明瞭で、端部に内傾する面をもっている。802は天井部のヘラケズリがやや狭い。

803～808は須恵器杯身である。803は底部内面に同心円当て具痕が認められる。807は底部外面にヘラ記号をもっている。808は口径が大きく、立ち上がりが低い。

809・810は須恵器杯である。809の底部はヘラ切り後ナデが、810の底部は回転ヘラ削りが施されている。

811は須恵器杯Ｂ蓋である。天井部内面に墨が付着していることから、転用硯として使用されたと考えられる。

812は須恵器高杯である。脚部は高いが、透かしは入れられていない。

813～815は須恵器甕である。体部が大きいもの（813）と小さいもの（814・815）が出土している。

814は肩部にヘラケズリが施されている。

816～822は須恵器甕である。816は口縁部の端面が丸味をもち、口縁部外面の突帯は上からヘラを差し入れるようにして作られている。同様なものはSH24064で出土している。817は口縁端部に丸味をもち、818は口縁部が方形で、819は口縁部がやや上方に拡張し、820・821は端面が玉縁状に膨らんでいる。821は頸部にヘラ記号をもっている。822は外面に１辺５㎜の格子タタキ、内面にカキ目状のナデが施されている。色調はやや赤みを帯びている。

823は弥生土器広口壺Ａである。口縁部内面と端面に円形浮文が貼り付けられ、櫛描きの斜格子文が施されている。口縁部内外面はタテハケが施されている。

824は土師器二重口縁壺Ａである。頸部は直立して立ち、口縁部は二重口縁である。１次口縁部は短く外反し、２次口縁部は直線的に大きく開いている。外面及び口縁部内面はヨコナデ、頸部内面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

825は土師器壺である。体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。肩部には１ヶ所だけ竹管文が３つ並んで押されている。

826は土師器壺である。肩部の破片である。内外面とも斜め方向のハケが施されている。ヘラ描直線文の上下に矢羽根状の列点文が施され、その上下には櫛描直線文が施されている。

827は土師器直口壺Ｂ２である。口縁部は直線的に上方へ延び、端部は尖り気味である。体部はやや扁平である。色調は赤みを帯び、表面は摩滅している。

828～831は小型丸底壺である。828は頸部がしまり、口縁部が高く延びている。口縁部内外面及び体部外面上端はヨコナデ、体部外面上半はタテハケ、体部外面下半はハケ、体部内面上位・下位はユビオサエ、体部内面中位は板ナデが施されている。829は口縁部が弱く外反している。口縁部外面はヨコハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ、体部内面はナデが施されている。830は口縁部が直線的に開いている。器壁は厚い。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ及びユビオサエ、体部内面はヘラミガキが施されている。831は口縁部が二重口縁である。２次口縁部外面に刺突文、頸部外面及び１次口縁部内面に竹管文状の文様が施されている。竹管文状の文様はひとつひとつ円形を描線しているようである。内面の文様は途中で途切れている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。

832は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上端はタテハケ、体部外面はハケ、体部内面はハケ後ヘラケズリが施されている。

833は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

834は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

835は土師器甕Ｇ５である。口縁部はやや内湾し、端部を外方へつまみ出している。端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後肩部のみヨコハケ、体部内面はヘラケズリされる。

836は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

837は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸味をもっている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ､体部外面はタテハケ､体部内面はヨコハケ後ヘラケズリが施されている。

838は土師器甕Ｇ７である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部の中位が膨らんでいる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

839は土師器甕Ｇ７である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部の中位が膨らんでいる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

840は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。底部は尖っている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ナデ、体部内面上半はハケ、体部内面下半は板ナデが施されている。体部外面下半にはわずかにススが付着している。

841は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデされる。

842は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端面はわずかに外傾している。体部はやや縦長である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ後ナデ、体部内面は板ナデ及びナデが施されている。

843は土師器甕Ｇ４である。口縁部は内湾し、端部は内側に巻き込むように肥厚している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後肩部のみヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部内面下半には指頭痕がわずかに残存している。体部外面下半にはススが付着している。

844は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

845は土師器甕Ｇ３である。口縁部は内湾し、端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後肩部にのみヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

846は土師器甕Ｇ４である。口縁部は内湾し、端部は内側に巻き込むように肥厚している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後カキ目状のヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

847は土師器甕Ｄである。口縁部は二重口縁で、稜は突出するが丸味をもっている。２次口縁部は高く立ち上がり、端面は水平である。体部外面はタテハケ後上位のみカキ目状のヨコハケ、体部内面はヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。

848は土師器甕Ｄである。口縁部は二重口縁で、稜は鋭く突出している。２次口縁部は高く立ち上がり、端面はやや外傾している。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面上位はカキ目状のヨコハケ、体部外面中位はヨコハケ及び斜め方向のハケ、体部外面下位はタテハケが施されている。体部外面下半にはススが付着している。

849は土師器甕Ｄである。口縁部は二重口縁で、稜は突出するが丸味をもっている。２次口縁部は高く立ち上がり、端面は水平である。体部外面はタテハケ後上位のみカキ目状のヨコハケ、体部内面はヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。

850は土師器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、１次口縁部から２次口縁部にかけてなだらかに連続している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上位はタテハケ後ヨコナデ、体部外面中位・下位はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

851は土師器甕である。底部は平底である。体部外面及び内面はヘラケズリ、底部外面はナデが施されている。残存部の下1/2程度にススが付着している。

852は土師器高杯Ｆである。杯部は段状の稜をもち、口縁部は外反している。脚部は筒状で、脚柱部から緩やかに開き、脚裾部で大きく開いている。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部外面にナデ、脚

部は脚柱部外面にタテハケ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。

853は土師器高杯である。口縁部は強く内湾し、端部のみ外反させている。内面及び口縁部外面はヘラミガキ、底部外面はハケ後ヘラミガキが施されている。

854は土師器高杯Ｅである。杯部は浅く皿状で、口縁部が外反している。端部は面をもち、端部内面に凹みがある。表面は摩滅している。脚部との接合は挿入方式と思われる。

855は土師器高杯Ｅである。杯部は浅く皿状で、口縁部が外反している。脚柱部は筒状で、脚裾部で大きく開いている。表面は摩滅しているが、脚柱部外面にはヘラミガキが施されている。脚部内面には脚柱部と脚裾部の接合痕が認められる。脚部との接合は充填方式である。

856は土師器高杯Ｅである。杯部は椀形で、口縁部はやや外反している。脚部はやや低く、脚柱部から緩やかに開いている。表面は摩滅しているが、脚柱部内面にはヘラケズリが施されている。脚部との接合は付加方式である。

857は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形で、口縁部にかけて内湾している。脚柱部は中実で、脚裾部は円盤状である。杯部は口縁部端部内外面にヨコナデ、口縁部外面に板ナデが施されている。脚柱部下端部内面には棒状工具により穿孔がおこなわれている。

858は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形で、口縁部にかけて内湾している。脚柱部上半は中実で、脚裾部で大きく開いている。杯部は口縁部内面にヨコナデ、底部内面にナデ、脚部は外面にナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内面にヨコナデが施されている。

859は土師器高杯Ｊである。杯部はやや浅い椀形で、口縁部に面をもっている。脚柱部は上端が閉じ、脚裾部は円盤状である。杯部は外面に手持ちヘラケズリ、口縁端部内外面にヨコナデ、内面にヘラミガキ、脚部は脚柱部外面にヘラミガキ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。

860は土師器高杯である。杯部は椀形で、外面に稜のあまい突帯をもっている。脚部は須恵器と同様な形態で、長脚の３方１段透かしである。表面は摩滅している。

861は土師器高杯の脚部である。脚部は筒状で、脚柱部から脚裾部にかけて緩やかに開いている。杯部は底部内面にナデ、底部外面に粗いハケ、脚部は脚柱部外面にハケ後ナデ及びユビオサエ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内外面にハケ後ヨコナデが施されている。杯部との接合は充填方式である。

862は土師器器台Ｂである。口縁部は二重口縁で、１次口縁部の端部が段状に突出している。脚柱部内外面にヘラケズリが施されている。

863は土師器器台Ｂである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は縁帯状に拡張している。口縁部内外面はヨコナデ、受部内面はハケ後ナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、受部外面及び頸部外面はタテハケ後ヘラミガキが施されている。

864は土師器小型器台Ａである。口縁部は二重口縁で、脚部はハの字状に開いている。口縁部外面はヨコナデ、受部外面はタテハケ、脚柱部外面はヘラミガキ、脚裾部外面はタテハケ後板ナデ、脚柱部内面はナデ、脚裾部内面はヨコハケ後ナデが施されている。

865は土師器小型器台Ｂである。受部は皿形で小さく、口縁部は短くつまみ上げられている。口縁部内外面はヨコナデ、受部内面はナデ、受部外面は板ナデが施されている。

866は弥生土器口縁部である。器台の口縁部と思われる。口縁部は縁帯状に拡張している。縁帯部の上部にはキザミと擬凹線、下部には列点文が施されている。キザミは内面側の縁にも施されている。

867は土師器鉢である。底部は丸底で、口縁部に面をもっている。口縁端部内外面はヨコナデ、口縁

部外面はハケ、底部外面及び内面はヘラミガキが施されている。

868は土師器椀Ｂである。底部は平底気味で、口縁部はわずかに内湾している。内面は板ナデ及びナデ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

869は土師器椀Ａである。底部は平底気味で、口縁部が高く立ち上がっている。口縁部内外面及び体部外面はヨコナデ、底部内面は板ナデが施され、底部外面は摩滅している。

870は土師器椀Ｂである。底部は丸底で、口縁部はやや高く立ち上がっている。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

871は土師器小型丸底鉢Ｂである。器高は低く、口縁部は直線的に開いている。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面はヘラミガキ、底部内面は板ナデ及びナデが施されている。

872は土師器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、１次口縁部は短く、２次口縁部は外反している。内外面ともヘラミガキが施されている。

873は土師器台付鉢Ｃである。底部は平高台状で、凹み底である。口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はハケ後ナデ、底部内外面はナデが施されている。

874・875は土師器ミニチュア土器である。底部は平底である。874は内面及び底部外面にナデ、口縁部外面にユビオサエ及びナデが施されている。875は内外面ともナデが施されている。

SD30004（図版178～180、写真図版202～205）

SD30004はSD30001に流路が変更され埋没したことから、ほぼ弥生時代末頃までの遺物に限られている。

876は弥生土器広口壺Ａである。口縁部は拡張せず、端部に１条の凹線が入れられている。頸部には３条以上の凹線が施されている。内面及び口縁部端部外面はヨコナデ、口縁部外面はタテハケされる。

877は弥生土器短頸壺Ｂである。球形の体部に小さい口縁部が付くものと思われる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後ヘラミガキ、体部内面上端はユビオサエ及びナデ、体部内面はヨコハケ後ヘラケズリが施されている。

878は弥生土器広口壺Ｂである。口縁部は外反して開くがやや小さい。口縁端部内外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はタテハケ、体部外面上半は不定方向のハケ、体部内面はヘラケズリ、底部外面はナデが施されている。体部外面下半は摩耗しているが、タテハケ後ヘラミガキが施されている可能性が高い。

879は弥生土器長頸壺である。口縁部は体部から緩やかに外反して開き、端部のみ内湾気味である。外面はタテハケ、口縁端部内外面はヨコナデ、口縁部内面はナデ、体部内面はヘラケズリが施される。

880は弥生土器長頸壺である。口縁部は外反して立ち上がり、体部はラグビーボール形である。口縁部内外面及び体部外面はハケ後ヘラミガキ、底部外面はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。底部外面にはヘラ記号が入れられている。

881は弥生土器長頸壺である。頸部にヘラ記号が入れられている。外面はハケ後ヘラミガキ、頸部内面はヘラミガキ、体部内面はヘラケズリが施されている。

882は弥生土器短頸壺Ａである。口縁部は体部から緩やかに外反するが、ほとんど開いていない。口縁端部内外面はヨコナデ、口縁部外面はタテハケ、体部外面はヘラミガキ、口縁部内面はヨコハケ後ナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

883は弥生土器短頸壺Ａである。口縁部は短く上方へ立ち上がる。体部外面はタテハケ後ヘラミガキ、

体部内面はヘラケズリが施されている。

884は弥生土器甕Ｂ１である。大型の甕である。口縁部は上方へやや拡張し、端面に擬凹線が施されている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面はハケ後ヘラケズリが施されている。体部外面にはススが付着している。

885は弥生土器甕Ｂ１である。口縁部はやや外側へ拡張し、端面に擬凹線が施されている。口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にはススが付着している。

886は弥生土器甕Ｂ１である。口縁部は外反して開き、端部は拡張しない。端面には擬凹線が施されている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

887は弥生土器甕Ｂ１である。口縁部は上下に拡張し、端面には３条の沈線が施されている。口縁部内面及び体部外面はヘラミガキ、口縁部外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

888は弥生土器甕Ｂ２である。口縁部は大きく上方に拡張し、端面に擬凹線が施されている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

889は弥生土器甕Ｂ２である。口縁部は大きく上方に拡張し、端面に擬凹線が施されている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケが施されている。体部内面はヘラケズリが施されているようであるが、粘土が乾いていない段階で施されているため、粗い沈線状になっている。

890は弥生土器甕Ｅである。口縁部は外反して開き、端部は拡張しない。口縁部内外面はヨコナデが施されている。

891は弥生土器鉢である。大型の甕である。口縁部は短く、端部もあまり拡張しない。口縁部外面はヨコナデ、体部外面及び口縁部内面はヘラミガキ、頸部内面はヨコハケ後ヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。

892は弥生土器甕Ｅ１である。口縁部は短く、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

893は弥生土器甕Ｅである。口縁部は外反し、端面は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

894は弥生土器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は短い。１次口縁部上端に凹線が施されている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

895～897は弥生土器甕Ｃである。口縁部は二重口縁で、２次口縁部は上方につまみ上げられている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

898は弥生土器把手である。

899・900は弥生土器底部である。底部は広い平底である。体部外面はヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ、底部外面はナデが施されている。

901は弥生土器底部である。底部はやや狭い平底である。体部外面は平行タタキ後タテハケ、体部内面はヘラケズリ、底部外面はナデが施されている。

902は弥生土器底部である。底部は狭い平底である。体部外面はタテハケ後ヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ、底部外面はナデが施されている。

903は弥生土器底部である。底部は狭い平底である。体部外面は平行タタキ後タテハケ、体部内面はヘラケズリ、底部外面はナデが施されている。

904は弥生土器高杯である。脚柱部は筒状で高い。杯部と脚部の接合は充填方式である。外面はヘラミガキ、脚柱部内面はヘラナデ、脚裾部内面はナデが施されている。

905は弥生土器高杯の脚部である。脚柱部は中実で、脚裾部は大きく開いている。脚裾部には3方の円形透かしが穿たれている。外面はヘラミガキ、脚裾部内面はヨコハケが施されている。

906は弥生土器高杯の脚部である。脚裾部は大きく開いている。脚裾部には3方の円形透かしが穿たれている。外面はヘラミガキ、脚裾部内面はヨコナデが施されている。

907は弥生土器高杯Aである。杯部は浅い鉢形である。口縁部は二重口縁で、端面には擬凹線が施されている。脚柱部は短く、脚裾部は緩やかに開いている。杯部内外面、脚部外面、脚部内面にはハケが施されている。

908は弥生土器器台である。脚部は脚柱部から広く開いている。外面及び受け部内面はヘラミガキ、脚部内面はナデが施されている。

909は弥生土器器台である。脚柱部は筒状で、太い。外面はハケ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はヨコハケが施されている。

910は弥生土器台付鉢Aである。口縁部は二重口縁で、2次口縁部は上方へつまみ上げられている。体部はやや下ぶくれで、脚部は輪高台状で低い。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面下半はタテハケ後ヘラミガキ、体部内面及び脚部内外面ははナデが施されている。

911は弥生土器台付鉢Bである。口縁部はわずかに外反しながら上方へ立ち上がり、口縁部外面に擬凹線が施されている。体部はやや下ぶくれである。内外面ともヘラミガキが施されている。

912は弥生土器台付鉢の脚部である。脚柱部は細く、脚裾部も小さい。表面は摩滅している。

913・914は弥生土器台付鉢の脚部である。脚部は低く、大きく開いている。913は体部内外面にハケ、脚部内外面はヨコナデに施されている。914は外面及び体部内面にヘラミガキ、脚部内面にヨコナデが施されている。

915は弥生土器鉢である。有孔鉢の口縁部である可能性が高い。体部は砲弾形で、口縁部の端面は水平である。外面はタテハケ、内面はヘラケズリが施されている。

916は弥生土器有孔鉢である。底部は平底で、焼成後に穿孔がなされている。体部外面はヘラミガキ、底部外面はナデ、内面はヘラケズリが施されている。

917は弥生土器有孔鉢である。底部は尖底で、焼成前に穿孔がなされている。体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

918は弥生土器蓋である。外面はタテハケ、内面はナデが施されている。

包含層（図版180、写真図版205）

包含層出土の土器は良好な個体が少なく、出土数の少ない須恵器のみを取り上げる。

919は須恵器杯である。口径は非常に小さく、底部はヘラ切り未調整である。

920は須恵器甕である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部外面の突帯も稜が丸い。断面は赤紫色を呈している。

921は須恵器甕である。口縁端部はわずかに上方へ拡張している。口縁部外面の突帯の稜は丸く、突帯下に波状文が施されている。

5．Ⅳ区出土の土器

SH40001（図版181、写真図版206）

922は竈の北側から出土したものである。

922は須恵器無蓋高杯である。体部外面に１条の凹線が廻らされている。底部は回転ヘラケズリが施されている。

SH40003（図版181、写真図版206）

923は埋土から出土したものである。

923は須恵器杯である。口縁部は直線的立ち上がり、底部は回転ヘラケズリが施されている。

SH40004（図版181、写真図版206）

いずれも埋土から出土したものである。

924・925は須恵器杯身である。立ち上がりは低く、内外面とも回転ナデが施されている。

926は韓式土器である。外面は縄蓆文、内面はヘラケズリが施されている。焼成は軟質である。

SH40005（図版181、写真図版206）

927は竈から出土したものである。

927は土師器甕Ｈである。口縁部は直線的に開いている。口縁部内面はカキ目状のヨコナデ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ後肩部にヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SH40006（図版181、写真図版206）

928は竈の支脚として利用されたものである。

928は土師器高杯Ｊである。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はヨコナデ、底部外面はヨコナデ後タテハケが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。脚部との接合は挿入方式と思われる。

SH40007（図版181、写真図版206）

929は主柱穴、930～934は埋土から出土したものである。SH40006と切れ合いがあることから、SH40006に属するものが含まれている可能性がある。

929は須恵器杯蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。

930は須恵器杯身である。口径は小さく、立ち上がりも低い。底部はヘラ切り未調整と思われる。住居内のピットから出土したものである。

931は須恵器杯Ａである。底部は回転ヘラ切り後板ナデが施されている。

932は土師器甕である。口縁は短く外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。

933は土師器椀Ｂである。器高は低く、口縁部は外反している。表面は摩滅している。

934は土師器竈である。器壁は厚く、底部は内側に向けて分厚くなっている。外面はタテハケ、内面はヘラケズリが施されている。

SH40009（図版181、写真図版206・207）

938は床面、936・940はSK40001、941はSK40005、935・937は埋土から出土したもので、939は竈の支脚として利用されたものである。

935は須恵器杯身蓋である。稜は甘く、口縁端部内面に凹線状の端面をもっている。

936は土師器甕Ｊである。口縁部は二重口縁であるが、反りがほとんどなくなっている。口縁部内面上半はヨコナデ、口縁部外面下半はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面上半はヨコハケ、口縁部内面下半はヨコナデが施されている。

937は土師器甕Ｇ５である。口縁部はわずかに内湾し、端面は水平である。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデが施されている。

938は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。体部は球形である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。外面にはススが薄く付着する。

939は土師器高杯Ｈ２である。杯部は緩い稜をもち、口縁部は強く内湾している。脚部は上端が閉じ、脚裾部で大きく開いている。表面はほとんど摩滅しているが、杯部内面には放射状暗文が施される。

940は土師器高杯の脚部である。脚柱部上部は閉じているが、上端はくぼんでいる。脚裾部で大きく開いている。外面はナデ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はヨコナデが施されている。

941は土師器製塩土器である。厚さは2.5㎜で、焼成は軟質である。内外面ともナデが施されているようである。

SH40010（図版182、写真図版207）

942・947は床面、943・944は竈、945・949・950は埋土から出土し、946・948は竈の支脚として使用されたものである。

942は須恵器有蓋高杯である。脚部は短脚で、端部は玉縁状に膨らんでいない。３方の円形透かしが穿たれている。

943～945は土師器甕Ｇ５である。口縁部は内湾し、端部は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

946は土師器高杯Ｉである。杯部は緩い稜をもち、口縁部は直線的に開いている。脚柱部は上端が閉じ、脚裾部に向かって緩やかに開いている。脚裾部端部に面をもっている。杯部は口縁部内外面上半にヨコナデ、口縁部内面下半及び底部内面にハケ、口縁部外面下半にタテハケ、底部外面にナデが施されている。脚部は脚柱部外面に板ナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内外面にナデが施されている。

947・948は土師器高杯Ｈ２である。杯部は緩い稜をもち、口縁部は内湾している。脚柱部上半が中実で、脚裾部で大きく開いている。947の杯部は口縁部外面にヨコナデ、底部外面にナデ、脚部は外面にナデ、脚裾部内面にヘラケズリが施されている。杯部と脚部の接合は付加方式と思われる。948は杯部の内面に放射状暗文が入れられている。

949・950は土師器製塩土器である。外面には平行タタキが施されている。949の内面には細かい布目がみられ、950の内面はナデが施されている。焼成は軟質で、胎土に砂粒はあまり含まれていない。図化はしていないが、外面にタタキが施されていない個体も出土している。

SH40011（図版182、写真図版208）

951は床面、952は竈から出土したものである。953はSH40009～SH40011のいずれに属するものかはわからない。

951は須恵器杯蓋である。天井部は平坦で、稜は明瞭に突出している。

952は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形であるが、口縁部の内湾は弱い。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面はタテハケが施されている。

953は須恵器杯身である。立ち上がりは高く、端面は内傾している。底部は丸い。

SH40013（図版182、写真図版208）

954・957は中央炉、955・956は埋土から出土したものである。

954・955は須恵器杯身である。立ち上がりは低く、底部は回転ヘラケズリが施されている。

956は土師器甕Ｇ６である。口縁部は二重口縁であるが、反りがほとんどなくなっている。口縁部内面はヨコナデ、体部内面はハケ後ヘラケズリが施されている。外面は摩滅している。

957は土師器甑である。底部は丸底と考えられ、把手の付く位置が低い。外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケ、体部内面はハケ後ヘラケズリが施されている。

SH40014（図版182、写真図版208）

958・959は床面から出土したものである。

958は土師器高杯Ｈ２である。杯部の稜は甘いが段状を呈している。口縁部はわずかに内湾している。脚柱部は筒状で、脚裾部で大きく開いている。脚柱部外面はナデ、脚裾部外面はタテハケ、脚柱部内面はヘラケズリ、脚裾部内面はユビオサエが施されている。

959は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形であるが、口縁部はあまり内湾しない。口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。脚部との接合は挿入方式と考えられる。

SH40015（図版183、写真図版208）

960は竈、961は埋土から出土したものである。

960は土師器甕である。体部は球形に近い。体部外面はハケ、体部内面上端はヨコハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面中位・下位にはススが付着している。

961は土師器高杯Ｆである。杯部は深く、稜は段状である。脚部は筒状で、脚柱部から緩やかに開いている。杯部と脚部の接合は充填方式である。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内外面にナデが施されている。内面には放射状暗文が入れられ、稜のすぐ下には口縁部接合時に付いたと思われる爪形圧痕が認められる。脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内外面はヨコナデされる。

SH40016（図版183、写真図版209）

963はSK40006、962は埋土から出土したものである。

962は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形で、やや浅い。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はハケ後ヨコナデ、底部外面はタテハケ、底部内面はナデが施されている。内面には放射状暗文が入れられている。脚柱内上端には棒状の刺突がなされていたようである。

963は土師器高杯Ｉである。杯部は稜をもち、口縁部はわずかに内湾している。脚柱部上半が中実で、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。杯部は外面及び口縁部内面にヨコナデ、底部内面にナデ、脚部は脚柱部外面にナデ、脚柱部内面にヘラケズリ、脚裾部内画面にヨコナデが施されている。

SH40017（図版183、写真図版209）

いずれも埋土から出土したものである。

964は土師器甕Ｅ２である。口縁部は外反し、端部は尖り気味である。口縁部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコナデ、体部内面はヨコハケ後ヘラケズリが施されている。

965は土師器甕Ｅ２である。口縁部は直線的で、端部に面をもっている。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケが施されている。

966は土師器高杯Ｈ１である。杯部は稜をもち、口縁部は直線的に開いている。口縁部外面はヨコナデ、底部外面はタテハケ後ナデが施されている。

967は土師器椀Ｂである。底部は丸底で、口縁部が直立している。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はヘラケズリ後ナデ、底部外面はナデが施されている。

SH40018（図版183、写真図版209）

970は床面、968・969は埋土から出土したもので、971は竈の支脚として利用されたものである。

968は土師器甕Ｇ５である。口縁部は直線的に開き、端面は水平である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

969は土師器甑である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面は斜め方向のハケ後下半のみヘラケズリが施されている。

970は土師器高杯Ｈ２である。杯部は口縁部と底部の境が粘土の接合痕状に窪んでいる。脚部との接合は挿入であるが、接合部の剥離痕は杏仁形に窪んでいる。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、底部内面はハケ、口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。

971は土師器高杯Ｊである。杯部は椀形で、口縁部は内湾している。脚部は上半が中実で、脚裾部は円盤状である。杯部は口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデ、底部外面に手持ちヘラケズリ、脚柱部外面にヘラミガキ、脚裾部内外面にヨコナデが施されている。脚裾部内面に中央付近のみ脚柱部との接合時のハケ目が残存している。

SH40025（図版183、写真図版209）

972は埋土の上層から出土したものである。

972は須恵器無蓋高杯である。杯部は浅く、脚部も低い。

SD40001（図版184、写真図版209）

973は須恵器杯Ｂ蓋である。口縁部内面にかえりをもっている。

SD40002（図版184、写真図版209）

974は土師器甕Ｊである。口縁部は二重口縁であるが、反りがほとんどなくなっている。口縁部内外

面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

SD40004（図版184、写真図版209）

975は須恵器杯身である。口縁端部は丸味をもっている。

976は土師器甕である。口縁部は頸部から緩やかに外反している。外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施されている。

977は土師器高杯の脚部である。脚部は筒状で上端が閉じている。脚裾部は円盤状である。脚柱部外面はナデ、脚裾部内外面はヨコナデが施されている。脚柱部と脚裾部の境にのみハケ目が残存している。

包含層（図版184、写真図版209）

包含層から出土した土器は良好な個体がほとんどなく、比較的類例の少ない須恵器のみ取り上げる。

978は須恵器甕である。口縁端部は玉縁状に膨らんでいる。口縁部外面はカキ目の後波状文が3段施されている。口縁部内面はヨコナデ、頸部内面はヨコハケが施されている。

979は須恵器樽形瓶である。体部は3条の凹線が入れられ、凹線の間には波状文が廻らされる。

第2節　木製品・石製品・金属製品・自然遺物

1．木製品（図版185～194、写真図版210～216）

木器はいずれもⅠ区の溝から出土したもので、W23がSD10003より出土した以外は、全てSD10001より出土したものである。

W1～9はヘラ状木製品である。柄から身に向かって緩やかに広くなるもの（W1・2）と柄から身にかけて明瞭に広がるもの（W3～6）がある。身の面は扁平で、窪みをもつものは認められない。柄は板状のものが多いが、面取りを施して持ちやすくしたもの（W1・7）などがある。W2・9は焦げ付きが認められる。いずれもスギ材である。

W10・11は槽である。W10は底部に低い方形の脚をもっている。側辺が直線的である。W11は側辺が胴張りである。W10はヒノキ材、W11はスギ材である。

W12は箱状の組物と思われる。木釘の孔が3ヶ所穿たれている。左下に浅い弧状の切れ込みが入れられている。スギ材である。

W13・14は腰掛の脚板である。W13は座板に枘を差し込み栓で止めている。平面は上半が裾広がりで、下半が長方形である。W14はW13と同形であるが、やや幅広と考えられる。いずれもスギ材である。

W15は火鑽臼である。角棒で、3ヶ所の火鑽穴がある。スギ材である。

W16・17は栓である。W16は笠形部が差し込み部に比べて厚い。いずれもスギ材である。

W18～27は用途不明の部材である。W18は丸棒で、端の細くなった部分に枘孔が穿たれている。スギ材である。W19は丸棒で、片側が丸棒形の枘状に細くなっている。スギ材である。W20は曲物の底板状であるが、側面にV字状の切れ込みがなされている。スギ材である。W21は細い板状の部材で、片側が細くなっている。スギ材である。W22は丸棒で、V字状の切れ込みが2ヶ所なされている。スギ材である。W23は楕円形の板材である。表面は焦げている。下部が矩形に凹み、目釘孔付近も厚みが減じられ

ている。上部は弧状の抉りが入れられている。目釘穴には木釘が残っている。スギ材である。W24は柄のある板材である。柄はしっかりとした断面長方形であるが、本体の表面は中央部が平坦にくぼんでおり、裏面は蒲鉾状に膨らんでいる。スギ材である。W25は柄孔をもつ板材である。左側面は面取りがなされている。表面は黒く変色しており、柿渋が塗られている可能性がある。トネリコ材である。W26は抉りと柄孔をもつ板材である。断面方形の短い棒状の材で、下方から弧状の抉りが入れられ、横方向に柄孔が穿たれている。右端は上部に出っ張ている。スギ材である。W27は柄孔をもつ板材である。1方の縁付近に斜め方向に柄孔が穿たれている。この柄孔は一定間隔で並んでいたと推定される。スギ材である。

W28～32は端に切り込みのある部材である。W28は裏面が平坦で、先端部は断面蒲鉾状である。中央部は側面が丸味をもち、表裏面が平坦である。先端部の形状は特異で、筒江片引遺跡（兵庫県朝来市）や布留遺跡（奈良県天理市）に先端部が同様な類例がある。W29は上面側の縁に切り込みを入れている。スギ材である。W30は両側面から切り込みを入れている。スギ材である。W31は先端を細くしている。スギ材である。W32は先端を柄状に細くしている。スギ材である。

W33は部材である。薄い板材で、先端をV字形に尖らせている。スギ材である。

W34は梯子である。厚い板より削り出されている。ヒノキ材である。

W35は柱材である。直径13.6cmの柱材である。底部にはハツリ痕が明瞭で、上部は焼けこげている。トチノキ材である。

W36は建築部材である。長方形の柄孔が連続的に穿たれた板材である。スギ材である。加都遺跡（兵庫県朝来市）で類例が多くみられるが、柿坪遺跡出土例はやや小ぶりである。

W37～44は杭である。断面が長方形のもの（W37～40）と正方形（W41～44）のものとがある。W37・39～44スギ材である。

W45～47は柄孔のある板材である。W46は大小2つの柄孔が穿たれている。いずれもスギ材である。

W48～51は板材である。W48は長さ190cm、幅34cm、厚さ1.5cmである。W49は長さ153cm、幅32cm、厚さ3.5cmである。手斧によるハツリ痕が明瞭である。W50は長さ258cm、幅28cm、厚さ3.0cmである。W51は長さ330cm、幅13cm、厚さ1.5cmである。いずれもスギ材である。この他、出土後分解したため、ここでは取り上げていないが、最大のものは長さ409cmである。

2．石製品（図版195～197、写真図版217・218）

S1は石核である。背面には剥片剥離の痕跡が認められる。安山岩製である。Ⅳ区包含層より出土したものである。

S2は削器である。左側縁に小剥離による刃部が作り出されている。裏面には素材剥片の腹面を大きく残している。安山岩製である。Ⅱ区包含層より出土したものである。

S3は打製石斧の破損したものと思われる。安山岩製である。SH20027埋土より出土したものである。

S4は磨石である。側面がほぼ全面使用され、下の側面が最もよく使用されている。凝灰岩製である。SH30006埋土より出土したものである。

S5～8は砥石である。S5は側面4面が使用されているが、特に相対する2面がよく使われていることから中央がくぼんでいる。S6は4面とも良く使用されていることから、4面とも中央がくぼんで

いる。砂岩製の粗砥石である。Ｓ７は角柱状で、４面が使用されている。砂岩製の粗砥石である。Ｓ８は両側面が非常に平滑である。珪化木製である。Ｓ５はSH20022床面、Ｓ６はSH40010床面、Ｓ７はSH30003床面、Ｓ８はⅡ区包含層より出土したものである。

Ｓ９は勾玉である。頭は膨らまない。表面は丸味をもち、裏面は平坦である。滑石（蛇紋岩？）製である。SD30001より出土したものである。

Ｓ10は臼玉である。滑石製である。SD10001より出土したものである。

Ｓ11は不明石製品である。直径48cmの円盤状を呈している。側面は原面を残し、表裏両面を打ち欠いている。SD30001の南岸部で出土したものである。

３．金属製品（図版198、写真図版219）

住居跡から出土したものもあるが、特にSD30001から出土したものが多い。

Ｍ１は刀である。刀身の残存長は33cm、幅は2.6cmである。SD30001より出土したものである。

Ｍ２～５は刀子である。Ｍ２は関が斜角の片関である。Ｍ３はと柄の部分が残存している。は鉄製の楕円形の円環で、柄は鹿角製と思われる。Ｍ２はⅡ区の確認トレンチ（３－Ｂ）、Ｍ３はSH40007、Ｍ４はSD30001、Ｍ５はSH30014より出土したものである。

Ｍ６～10は鉄鏃である。Ｍ６は三角形鏃で、鏃身に菱形の透かしをもっている。台形関である。Ｍ７は長頸鏃で、鏃身は逆刺をもつ三角形である。Ｍ９・10は台形関である。いずれもはSD30001より出土したものである。

M11～14は薄板状の不明品である。M11～M13は幅２cm前後である。M11は下部の幅が細くなっている。M14は幅1.4cmで、矩形に折り曲げられている。筒状の金具もしくは鏃の可能性がある。M11・13・14はSD30001、M12はSH20001より出土したものである。

M15は円棒状の不明品である。直径は2.7cmで、表面には木質が巻き付けられており、何かの柄の可能性がある。SH20011より出土したものである。

M16は鉄滓である。碗形滓である。SH30006より出土したものである。

４．自然遺物（写真図版219）

SD20001Aからは馬の下顎の臼歯、牛もしくは馬の四肢骨が出土している。（骨の種別の特定については奈良文化財研究所松井章氏の御教示を頂いた。）

馬の下顎の臼歯は５～６才頃の若いものと考えられる。SD20001Aの杭列付近から出土したものである。

第5章　自然科学的分析

第1節　木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

遺跡は、円山川の支流である与布土川と粟鹿川の支流である三保川に挟まれた扇状地性の段丘上に位置する。発掘調査により、三保川の氾濫原上に形成された水田域と、その西側の段丘上に展開した居住域が検出されている。

本報告では、本遺跡における木材利用を明らかにするため、出土した木製品を対象として樹種同定を実施する。

1．試料

試料は出土した木製品54点（試料番号1-54）である。全て切片を封入したプレパラートの状態で送付されてきた。

2．分析方法

生物顕微鏡でプレパラート内の切片を観察し、木材組織の種類や配列等の特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の特徴については、林（1991）、伊東（1995、1996、1997、1998、1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材組織識別データーベースを参考にする。

3．結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹2種類（スギ・ヒノキ）、広葉樹2種類（トチノキ・トネリコ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴を記す。

・スギ（Cryptomeria japonica （L.f.）. Don）スギ科スギ属

軸方向組織は仮導管と樹脂細胞で構成される。仮導管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅はやや広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2 - 4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヒノキ（Chamaecyparis obtusa（Sieb. Et Zucc.）Endlicher　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮導管と樹脂細胞で構成される。仮導管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・トチノキ（Aescuius turbinate Biume）トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面は角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。導管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同姓、単列、1～15細胞高で階段状に配列する。

表１　機種同定結果

番号	調査番号	登録番号	器種	年代	樹種
1	990005	3			スギ
2	990005	9			スギ
3	990005	13			トチノキ
4	990005	14			スギ
5	990005	15			スギ
6	990005	17			スギ
7	990005	18			スギ
8	990005	19			スギ
9	990005	20			スギ
10	990005	21			スギ
11	990005	22			スギ
12	990005	23			トネリコ属
13	990005	24			スギ
14	990005	27			スギ
15	990005	28			スギ
16	990005	29			スギ
17	990005	30			スギ
18	990005	32			スギ
19	990005	35			スギ
20	990005	36			スギ
21	990005	37			スギ
22	990005	39			スギ
23	990005	40			スギ
24	990005	41			ヒノキ
25	990005	42			スギ
26	990005	43			スギ
27	990005	44			スギ
28	990005	45			スギ
29	990005	48			スギ
30	990005	49			スギ
31	990005	51			スギ
32	990005	52			スギ
33	990005	M04			スギ
34	990005	M12			スギ
35	990005	M18			スギ
36	990005	M19			スギ
37	990005	M21			ヒノキ
38	990005	M30			スギ
39	990005	M32			スギ
40	990005	M34			スギ
41	990005	M35			スギ
42	990005	M36			スギ
43	990005	M37			スギ
44	990005	M40			スギ
45	990005	M42			スギ
46	990005	L01			スギ
47	990005	L02			スギ
48	990005	L05			スギ
49	990005	L06			スギ
50	990005	L07			スギ
51	990005	L08			スギ
52	990005	L09-1			スギ
53	990005	L09-2			スギ
54	990005	L09-3			スギ

・トリネコ属（Fraxinus）モクセイ科

環孔材で、孔圏部は１-２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独または２-３個が放射方向に複合し、年輪界に向かって径を漸減させながら配列する。導管壁は比較的厚い。導管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１-３細胞幅、１-20細胞高。

４．参考

木製品は、機種および時期の詳細が不明である。54点中50点がスギであり、他にヒノキ、トチノキ、トネリコ属が認められた。この結果から、木製品にスギが多用されていたことが推定される。スギは、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。スギ以外の樹種では、ヒノキも木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が高い。トチノキは、やや軽軟な部類に入り、加工は容易である。トネリコ属は重硬で強度が高く、加工はやや困難である。

兵庫県内の樹種同定では、但馬地域の遺跡でスギの利用が多い傾向があり（中村2001）、今回の結果も調和的である。スギの多用は、花粉分析でスギ属花粉が多く検出されることとも調和的であり、スギ材の入手が容易な環境が多用された背景にあったと考えられる。なお、但馬地域の袴狭遺跡では、古代の木製品に全体的にスギが多い傾向がみられる点は同様であるが、独楽、円形曲物側板、柱等ヒノキが多く、スギが少ない製品もみられることから、スギとヒノキで器種による使い分けが行われた可能性が推定されている（藤田2006）。

広葉樹のトチノキとトネリコ属は、器種が不明であるが、兵庫県内ではトチノキが臼？、鉢、桶、漆器類（椀・杯・皿・蓋）、トネリコ属が付歯下駄、横杓子に出土した例がある（中村2001）。

現時点では各資料の器種・年代等に関する考古学的調査成果が不明であるため、今回の結果については、それらの成果を踏まえて、稿を改めて報告するようにしたい。木材利用について再度検討したい。

引用文献

藤田　淳2006　「古代の木の利用　兵庫県袴狭遺跡を中心に」　『京都大学生存圏研究所第26回生存圏シンポジュウム　木の文化と科学Ⅴ　-先人に学ぶ木の利用-　講演要旨集』　京都大学生存圏研究所39-42

林　昭三1991　『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

中村　弘2001　「兵庫県における樹種同定資料について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』兵庫県埋蔵文化財調査事務所103－121

伊東隆夫1995　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所81-181

伊東隆夫1996　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所66-176

伊東隆夫1997　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所83-201

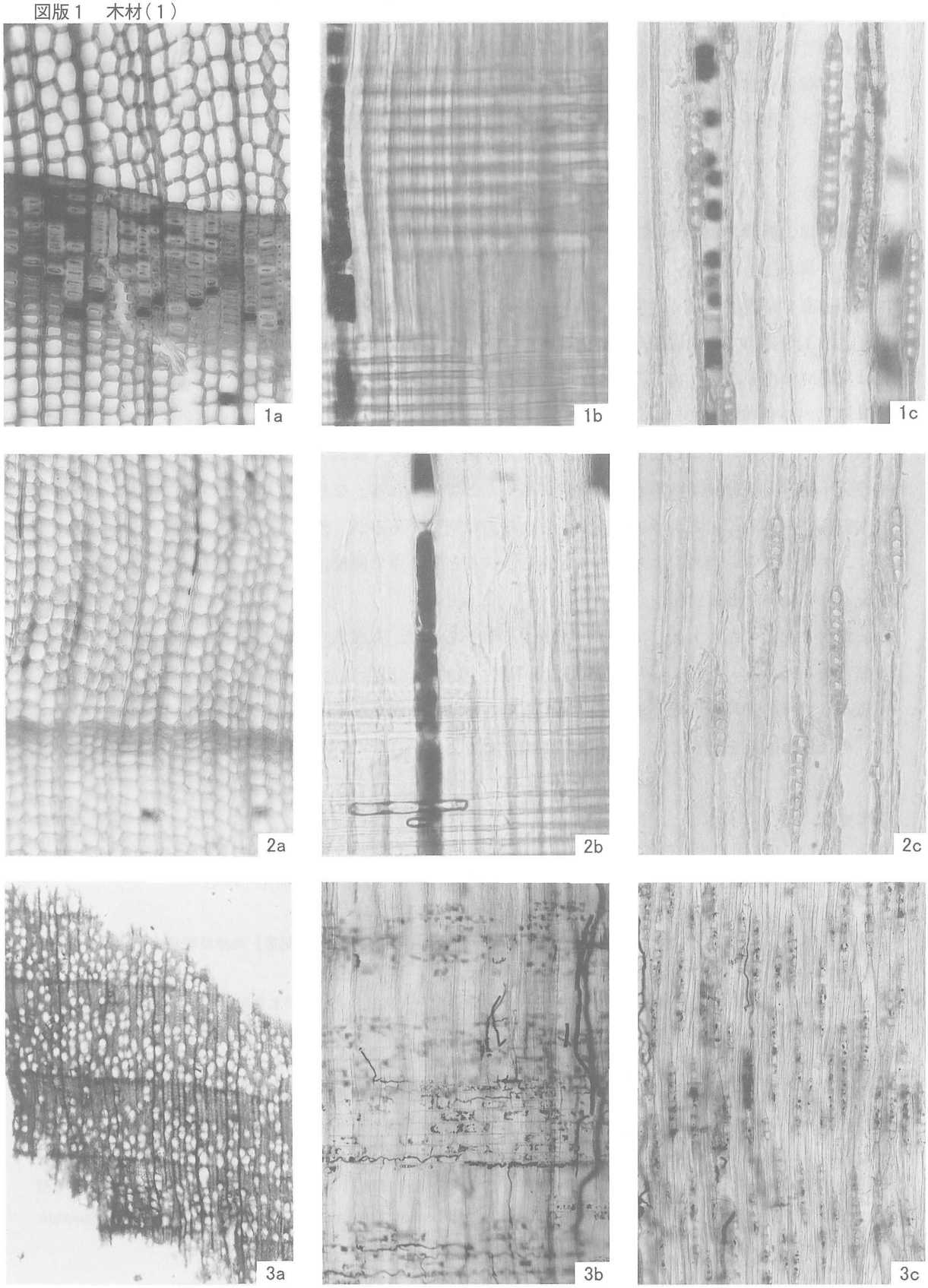
伊東隆夫1998　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所30-166

伊東隆夫1999　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所47-216

島地　謙・伊東隆夫1982『図説木材組織』地球社176

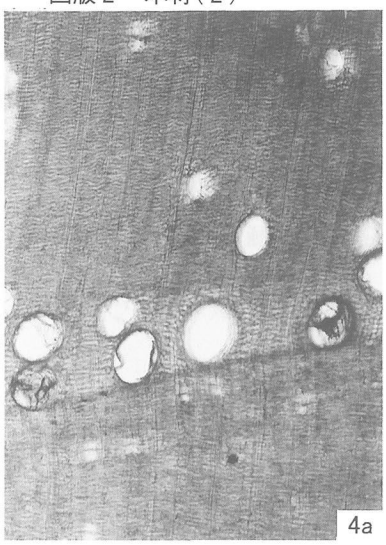
Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E.（編）1998　広葉樹の識別 IAWA によるにょ光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）海青社122　[Wheeler E.A.Bass P.E.(1989)*IAWA List of Microscopic Features for hardwood Identification*]

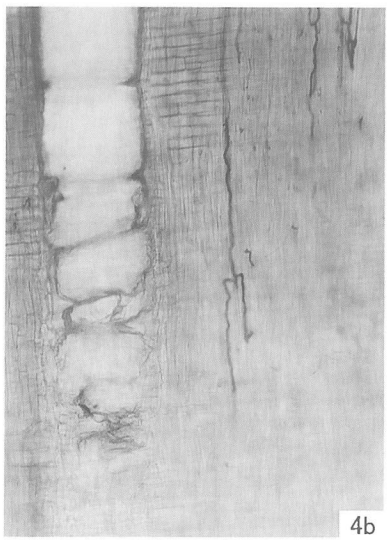
図版1　木材(1)



1. スギ(試料番号36)
2. ヒノキ(試料番号24)
3. トチノキ(試料番号3)
   a:木口, b:柾目, c:板目

図版２　木材（２）


4a


4b

4c

200μm：a
200μm：b,c

4. トネリコ属（試料番号12）
a：木口，b：柾目，c：板目

第２節　出土種子の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

柿坪遺跡は、与布土川によって形成された扇状地面に立地する。これまでの調査により、古墳時代の集落などが検出されている。今回は、古墳時代の溝内（SD10001）から出土した、種実の種類を知り、当時の植物利用に関する情報を得る。

１．試料

試料は、５世紀前半～中半の溝埋土（Ⅰ区 登No.1；調査番号990005）から出土した種実遺体788点である。

２．分析方法

種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川,1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか,2000）等との対照から、種類と部位を同定する。分析後の種実遺体は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

３．結果・考察

種実同定の結果、栽培植物のメロン類の種子729個、落葉籐本のブドウ属の種子59個が同定された。

ブドウ属（Vitis）は、種子が検出された。灰-黒褐色、広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。径4-5㎜程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は柵状である。果実は多汁で、食用となる。まとまって出土していることから、当時食用とされたものが投棄された可能性がある。

メロン類（Cucumis melo L.）は種子が検出された。淡灰褐色、狭倒皮針形で偏平。長さ4.6-9.3㎜、幅2.5-4㎜、厚さ1㎜程度。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。完形種子の多くは、藤下（1984）の基準によるマクワ・シロウリ型の中粒種子（長さ6.1-8.0㎜）に該当するが、小型の雑草メロン型（長さ6.0㎜以下）や、大粒のモモルディカメロン型（長さ8.1㎜以上）も確認される。また、藤下（1984）によれば、各地の遺跡から産出したメロン類種子のうち、古代は大粒のモモルディカメロン型（長さ8.1㎜以上）が多く、古墳時代はそれより小型のマクワ・シロウリ型が多い傾向にあるとされる。今回の結果もこれと調和的である。

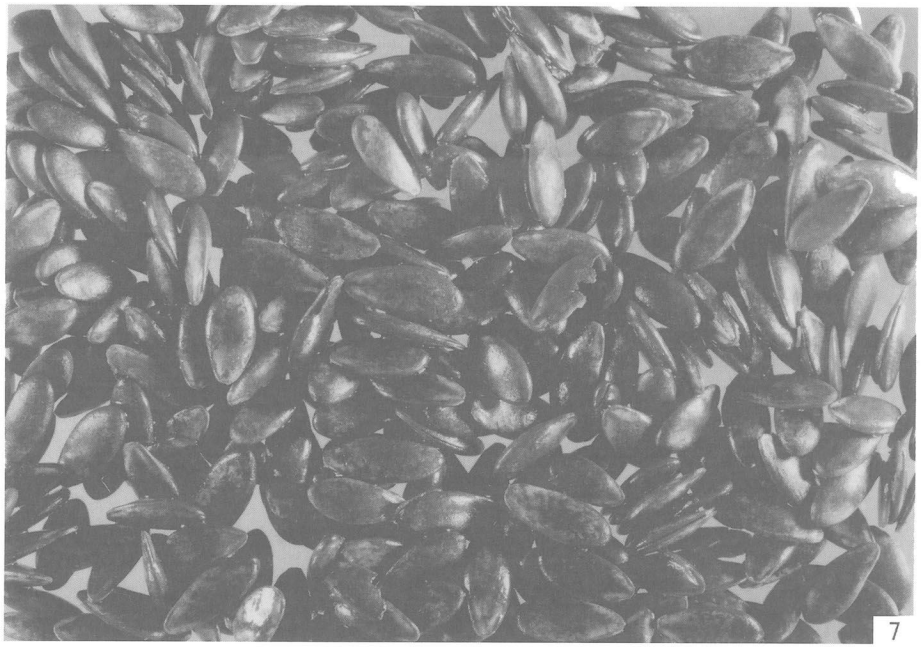
引用文献

藤下　典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.1.

図版1　種実遺体



2mm (1-6)　5mm (7)

1．ブドウ属 種子(990005; I区 登No.1)
2．メロン類 種子(雑草メロン型)(990005; I区 登No.1)
3．メロン類 種子(雑草メロン型)(990005; I区 登No.1)
4．メロン類 種子(マクワ･シロウリ型)(990005; I区 登No.1)
5．メロン類 種子(マクワ･シロウリ型)(990005; I区 登No.1)
6．メロン類 種子(モモルディカメロン型)(990005; I区 登No.1)
7．メロン類 種子(990005; I区 登No.1)

第３節　木材年代測定

Ｉ区氾濫原は幾本もの旧流路が入り乱れており、時間的な関係もあって十分な調査は行っていないが、調査の最後に土層の堆積状況を確認するため、機械力を使用して深く掘り下げた。その結果、一部で古墳時代の土器片なども出土している。この深掘りの際に旧流路にあたる図版３の第20層から木片が出土した。第20層は氾濫原の流路の中では比較的新しいものであり、その木片の年代を知ることは、氾濫原における旧流路の最終形成時期の手がかりとなるため、木片の年代測定を加速器分析研究所に依頼して実施した。その結果報告は以下の通りである。

年代測定結果報告

加速器分析研究所

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。

２）BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。

３）付記した誤差は、次のように算出しています。

複数回（通常は４回）の測定値についてχ^2検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が１つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。

４）$\delta^{13}C$の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定$\delta^{13}C$の値を用いることもあります。$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：（$^{14}C/^{12}C$）S または（$^{14}C/^{13}C$）S

$^{14}A_R$：標準現代炭素の14C濃度：（14C/12C）Rまたは（14C/13C）R

$\delta^{13}C$は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。但し、IAAでは加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、$\Delta^{14}C$は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値です。（１）式の^{14}C濃度を、$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}AN = {}^{14}AS \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2 \quad (^{14}AS\text{として}{}^{14}C/{}^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}AS \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000)) \quad (^{14}AS\text{として}{}^{14}C/{}^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}C = [(^{14}AN - AR)/{}^{14}AR] \times 1000 \ (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \quad (‰)$$

$$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算されます。

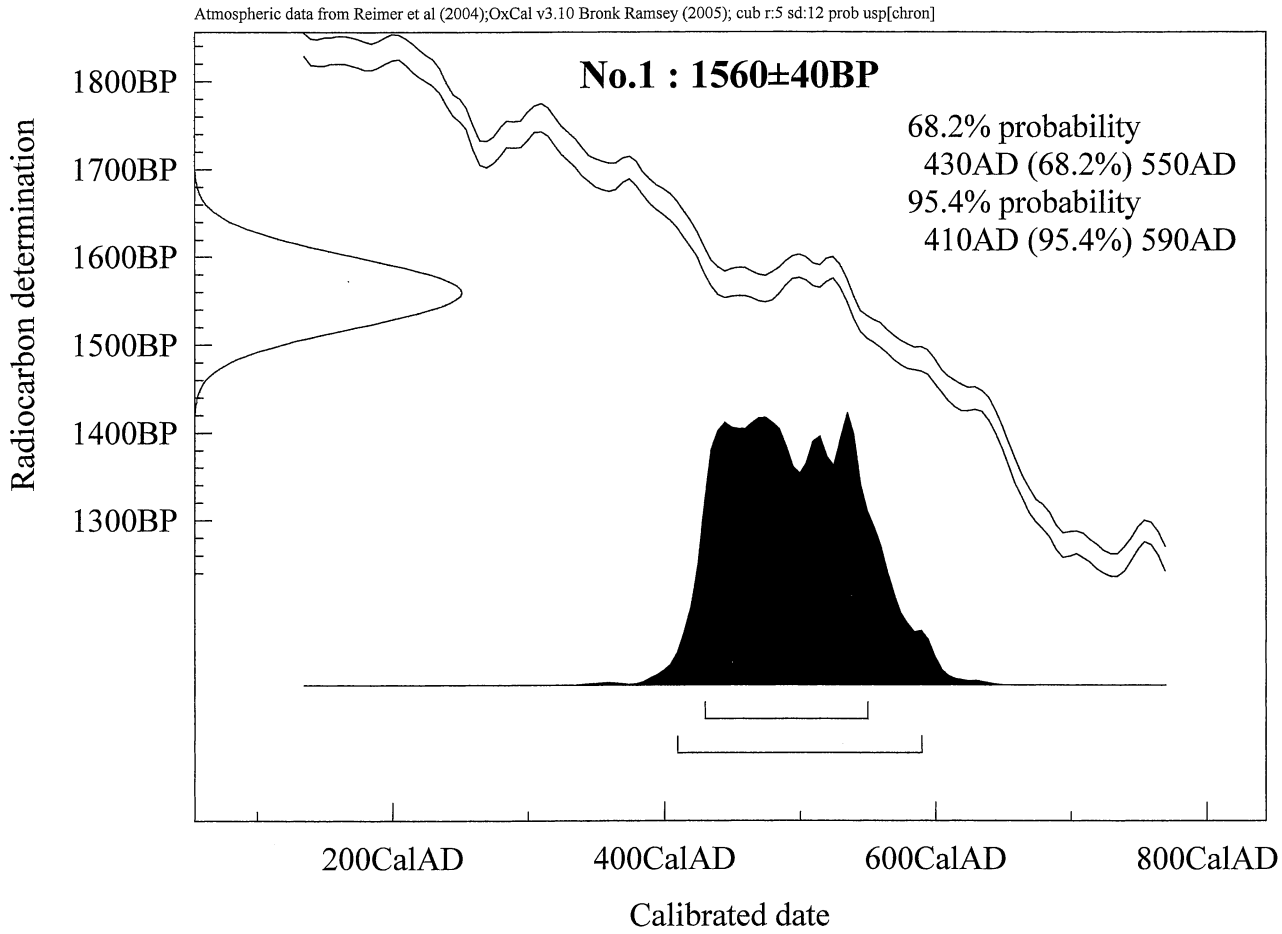
$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC/100)$$

IAA

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-51729	試料採取場所 ：朝来市山東町柿坪	Libby Age（yrBP） ：1,560 ± 40
		$\delta^{13}C$（‰）、（加速器）＝-27.82 ± 0.85
	試料形態 ： 木片	$\Delta^{14}C$（‰） ＝-176.5 ± 3.9
	試料名（番号）：No. 1	pMC（%） ＝ 82.35 ± 0.39
	（参考） $\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$（‰） ＝-181.2 ± 3.6
		pMC（%） ＝ 81.88 ± 0.36
#1113		Age（yrBP） ：1,610 ± 40

【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal　v3.10

第6章　まとめ

第1節　遺物について

1．土器

柿坪遺跡からは弥生時代中期から7世紀後半にかけて、ほぼ継続的に土器が出土している。弥生時代については溝出土のものが多く良好な資料とはいえないが、古墳時代以降は多数検出された竪穴住居跡から出土したものが多い。古墳時代後期の柿坪15期以降は住居跡から出土する土器は少なくなり、その様相を伺うのはかなり困難なものの、古墳時代前期の柿坪5期以降は住居跡から出土したものが質・量ともに良好な資料が多く認められ、南但馬地域における土器の変遷を知るうえで朝来市加都遺跡（兵埋2007a）・朝来市粟鹿遺跡（兵埋2007b）とともに貴重な資料を提供している。

ここでは弥生時代中期から7世紀後半にかけてを18期に分けて述べる。

柿坪1期　土壙・ピット・溝からわずかに出土したものと、溝SD30001やSD30004などにわずかに混入している程度である。甕A・広口壺Aがある。

甕Aは口縁部を上方へつまみ上げている。体部外面下半にヘラミガキが施され、体部内面の調整はヘラケズリが施されるが、上部にハケ目が残されている。484は把手をもっているが、体部外面全体にヘラミガキ、体部内面全体にヘラケズリが施されている。

広口壺Aは口縁部を拡張し、端面には円形浮文・波状文・凹線文などが施されている。頸部には凹線文が施されている。876は口縁部が拡張されないが、1条の凹線文が施されている。

但馬第Ⅳ様式に相当するものと考えられる（谷本1992）。

柿坪2期　溝SD30004などにある程度含まれるのみである。甕B、広口壺B、長頸壺、短頸壺Aがある。

甕B1は口縁部が上方あるいは下方に拡張されるものがみられ、端面に擬凹線が施されている。体部内面はほぼ全面にヘラケズリが施されている。広口壺Bは口縁部の拡張が小さくなり、施文もされない。

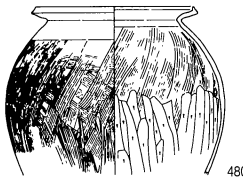
甕B1は但馬第Ⅴ－2様式に相当するものと考えられる。口縁部に擬凹線が施されない但馬第Ⅴ－1様式については柿坪遺跡中では明瞭に指摘できない。

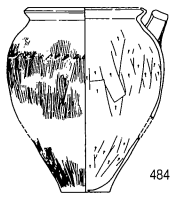
柿坪3期　溝SD30004やSD10002などから出土したものが主体である。住居跡SH20039出土のものも含まれる。甕B2・C、広口壺B、長頸壺、短頸壺A・B、二重口縁壺A、高杯A・B、器台A、台付鉢A・B、蓋など多くの器形のものが見られる。

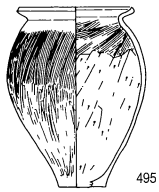
甕B2は口縁部の上方への拡張が大きくなり、端面が外傾している。150のように二重口縁化したものも見られる。甕Cの形態は150に近い。二重口縁壺Aは端面に擬凹線と波状文をもっている。高杯には杯部が鉢形のAと杯部が皿状に広いBがある。広口壺、長頸壺、短頸壺、高杯、器台など外面にヘラミガキが多用されている。

甕B2の口縁二重口縁化や甕Cの存在からSD30004に比べてSD10002が若干新しい様相をもつものと思われる。但馬第Ⅴ－3様式に相当するものと考えられる。

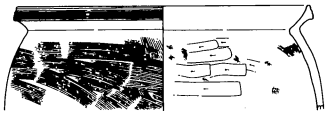
柿坪1期

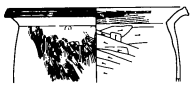

480


484


495

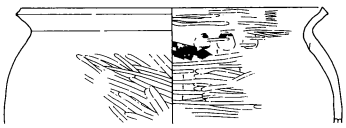
柿坪2期


884


885

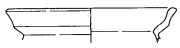
柿坪3期

888

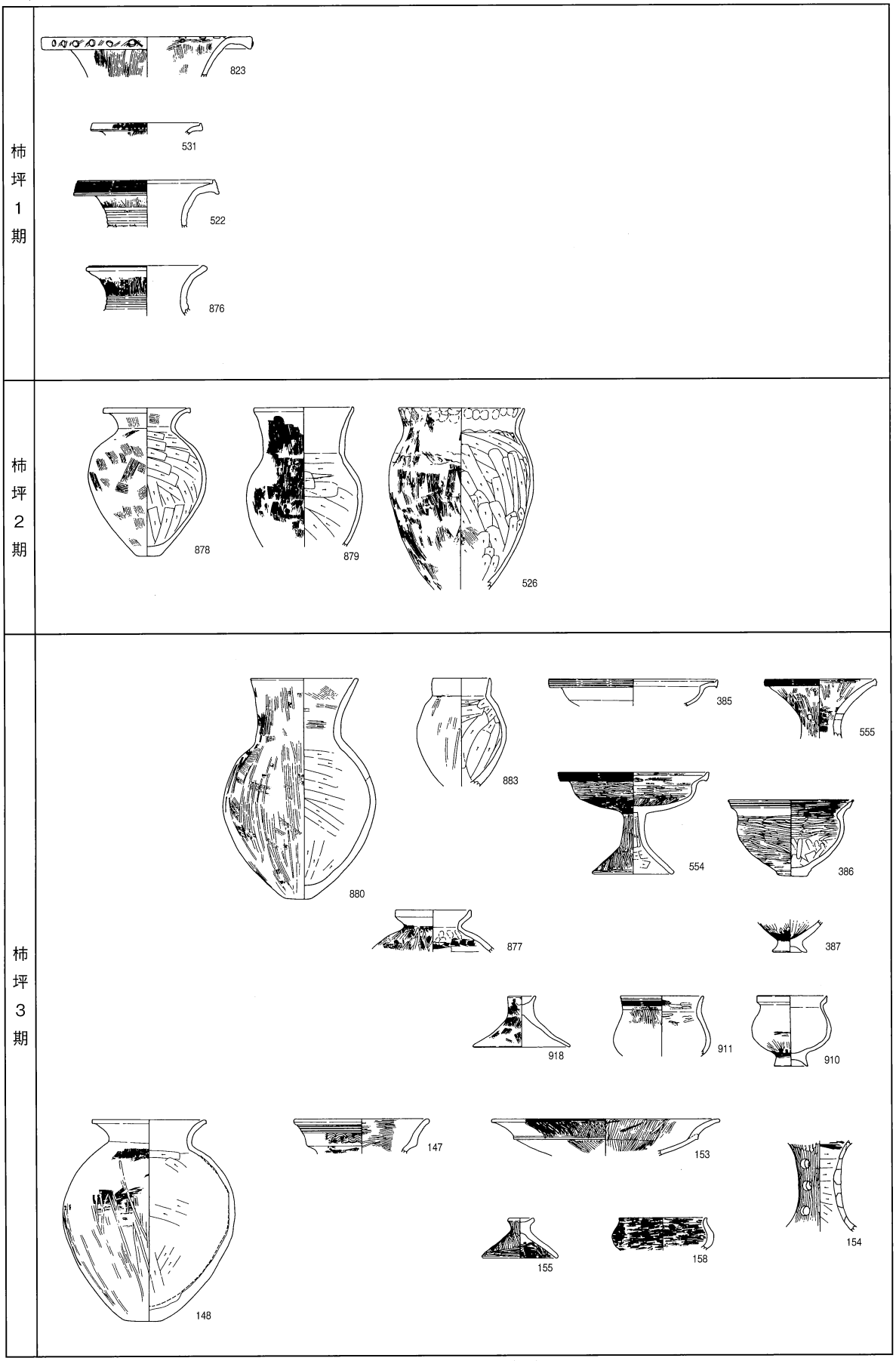

891

889

150


151

第20図　土器の変遷（１）


柿坪1期
823
531
522
876
柿坪2期
878
879
526
柿坪3期
880
883
385
555
554
386
877
387
918
911
910
147
153
154
155
158
148

第21図　土器の変遷（2）

柿坪４期　溝SD30004やSD10003などから出土したものが主体である。土壙SK20026、SK20035や住居跡SH20033などからの出土がある。甕Ｃ・Ｄ・Ｅ１・Ｆ１・Ｆ２、二重口縁壺Ａ、高杯Ａ、器台Ｂ、小型器台Ａ、台付鉢Ｃ、有孔鉢、椀Ａ、ミニチュア土器などがある。４期は時期幅を想定でき、区分はやや不分明ながら、甕に若干の差を認めることができることから古相と新相に分けておく。

甕は口縁に擬凹線をもたない甕Ｃが主体を占め、口縁部が外反する甕Ｅ・Ｆ類が現れる。これまでも指摘されているように外面にタタキをもつ甕Ｆは量が少ない（谷本2000）。底部の平底は狭くなっている。新相では甕Ｃの口縁部の屈曲が弱くなり、底部が尖底化するものがみられる。一般的に擬凹線の施文は行われなくなるが、二重口縁壺Ａや器台Ｂには口縁部に擬凹線が施されるものもある。

４期古相が庄内１・２期、４期新相が庄内３・４期に相当するものと思われる（谷本2000）。

柿坪５期　SH20035、SH30008など住居跡床面出土のまとまった一括遺物を挙げることができる。

甕Ｄ・Ｅ２・Ｆ２・Ｇ１・Ｇ２・Ｇ３・Ｇ４・Ｈ、二重口縁壺Ａ・Ｂ、直口壺Ａ・Ｂ１、高杯Ｃ・Ｄ、鼓形器台Ａ・Ｂ、小型器台Ａ・Ｂ、台付鉢Ａ・Ｃ、小型丸底鉢Ａ１・Ｂ、椀Ａなどがある。

口縁部が内彎する甕Ｇや直線的に延びる甕Ｈが現れる。甕Ｇは口縁部の形態が多様である。甕Ｃ類の存在は不明瞭になり、二重口縁のものは甕Ｄのみになる。甕Ｅ２も底部が明瞭に丸底化し、体部外面がナデ調整されているものがある。甕Ｆ２はこの時期になくなるものと思われる。高杯は器台Ｂと同形態の高杯Ｃと畿内系の高杯Ｄがある。二重口縁壺Ａには前代から引き続くもの（666）に加えて、２次口縁が大きく開くもの（307）がある。その他、直口壺Ａ・Ｂ、二重口縁壺Ｂ、鼓形器台Ａ・Ｂ、小型丸底鉢Ａなどが現れる。

但馬では比較できる資料に乏しい。布留式の甕Ｇ、直口壺、小型丸底鉢など畿内系の器形のものが多く現れることから布留式の前期、丹後地域の霧ヶ鼻式（寺沢編年布留１式）に併行するものと思われる（高野2003）。

柿坪６期　SH20040、SH20051、SH20054、SH30022など各住居から少数の土器しか出土していないことから、全体的な様相はよく分からないが、小型丸底鉢Ａ２が存在するものを主に挙げている。

甕Ｅ２・Ｇ５・Ｈ・Ｉ、二重口縁壺Ａ、高杯、台付鉢Ｃ、小型器台Ｂ、鼓型器台Ｂ、小型丸底鉢Ａ２・Ｂ・Ｃ、椀Ａ、山陰型甑などがある。

バリエーションの多かった甕Ｇは甕Ｇ５のみが目立つようになるようである。甕Ｅとの折衷的な甕Ｉが現れる。小型丸底鉢Ａは口縁部が長いＡ２になる。鼓形器台Ｂが存在するが、鼓形器台Ａも655のような小型のものが存在する可能性高い。

甕や小型丸底鉢に柿坪５期より変化が見られ、小型丸底壺が認められないことから寺沢編年布留２式に併行するものと考えられる（寺沢1986）。

柿坪７期　SH20006、SH20038など小型丸底壺が出土したものを挙げている。甕Ｅ２・Ｇ３・Ｇ５・Ｈ・Ｊ、二重口縁壺Ｂ、高杯Ｅ、小型丸底壺などがある。

甕Ｅ２は５期の291のように体部外面にナデが施されているものが目立っている。高杯Ｅはおそらくこれより前から続くものである。加都遺跡の古墳１期では外面にヘラミガキが施されていない鼓形器台Ｂが認められる。

小型丸底鉢の消失、鼓形器台の粗製化、無稜高杯の盛行などから丹後地域の大田南式・寺沢編年布留３式に併行するものと考えられる。

柿坪８期古相　SH20009、SH20044、SH30011など大型有段有稜高杯の高杯Ｆを含むものを挙げている。甕などに良好な資料がほとんどない。甕Ｇ４・I、直口壺Ｂ１・Ｃ、二重口縁壺Ｂ、高杯Ｅ・Ｆ、小型丸底壺などがある。

加都遺跡の古墳２期では比較的豊富な資料が出土している。甕については６・７期の様相と共通するものが多いようである。

大型有段高杯の出現からするとTG232型式に併行するものと考える（辻1999）。

柿坪８期新相　SH20003の主として床面より出土したものを挙げる。土師器そのものは８期古相のものとほとんど変わらないと思われるが、甑、移動式竈、鬲、角杯など新たな渡来系の器形の存在をもって古相と分ける。

甕Ｅ２・Ｇ５・Ｈ・Ｉ、高杯Ｇ・Ｈ１、小型丸底壺、鬲、甑、移動式竈、角杯、須恵器壺などがある。

甕Ｇはこの時期でＧ５類以外のものはなくなる。甕Ｇ５は口縁部の内彎が弱くなる。高杯Ｈ１は高杯Ｆが小型になったものと考えられる。甑は蒸気孔が多孔式である。須恵器壺は床面出土のものではないことからこの住居の伴う可能性はやや低いが、肩部に列点文を伴う古式の器形であることから、須恵器の存在の可能性を考慮して一応挙げておく。

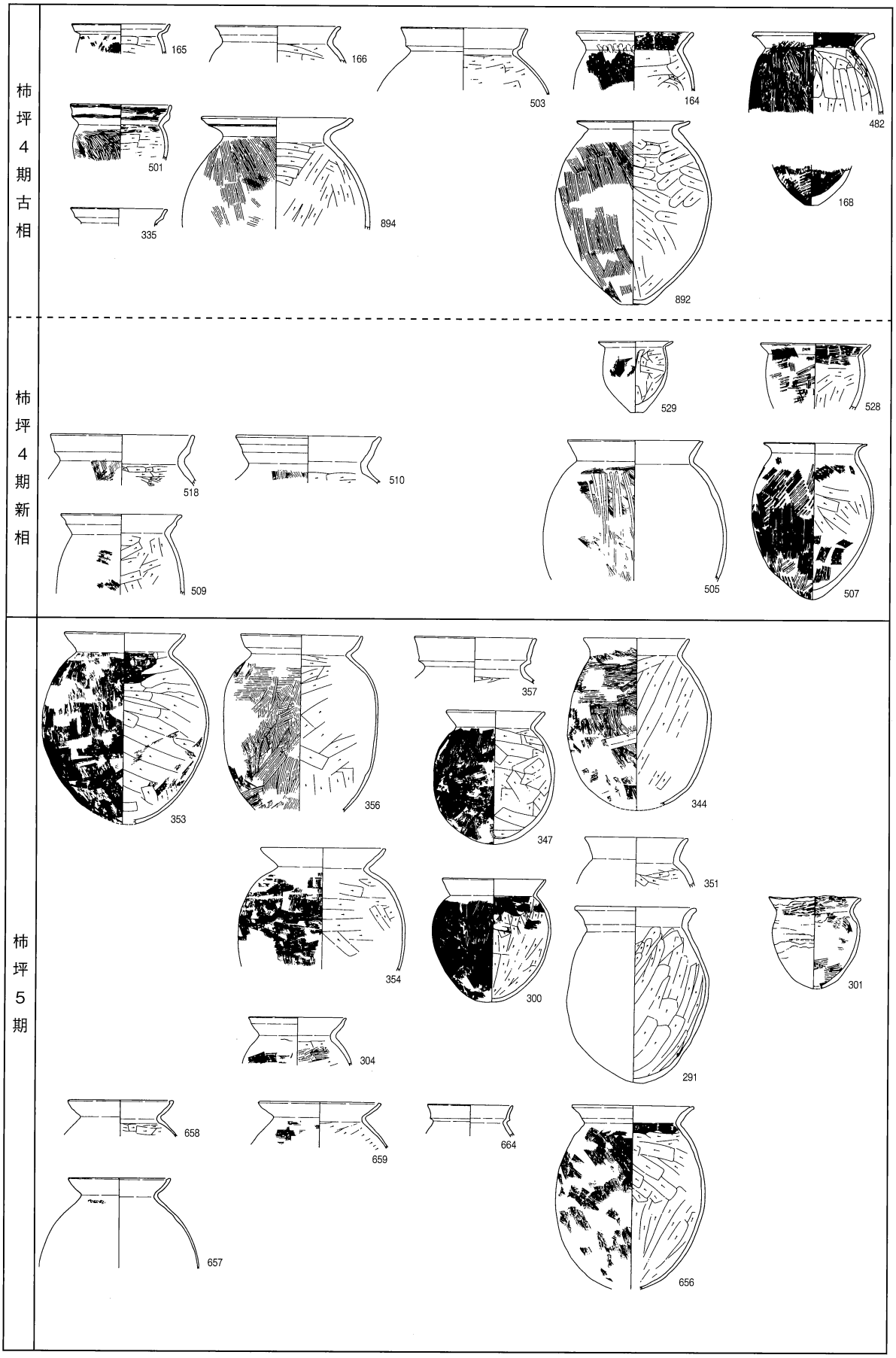
柿坪９期より古く、須恵器の存在を考慮してTG232～TK73型式に併行するものと考える。

柿坪９期　SH15001、SH25063、SH30005、SH30026、SH30032などこの時期の土器が出土した住居跡は比較的多い。またSD10001Aでは９・10期の資料が多く出土している。TK73型式～TK216型式の須恵器が出土している。

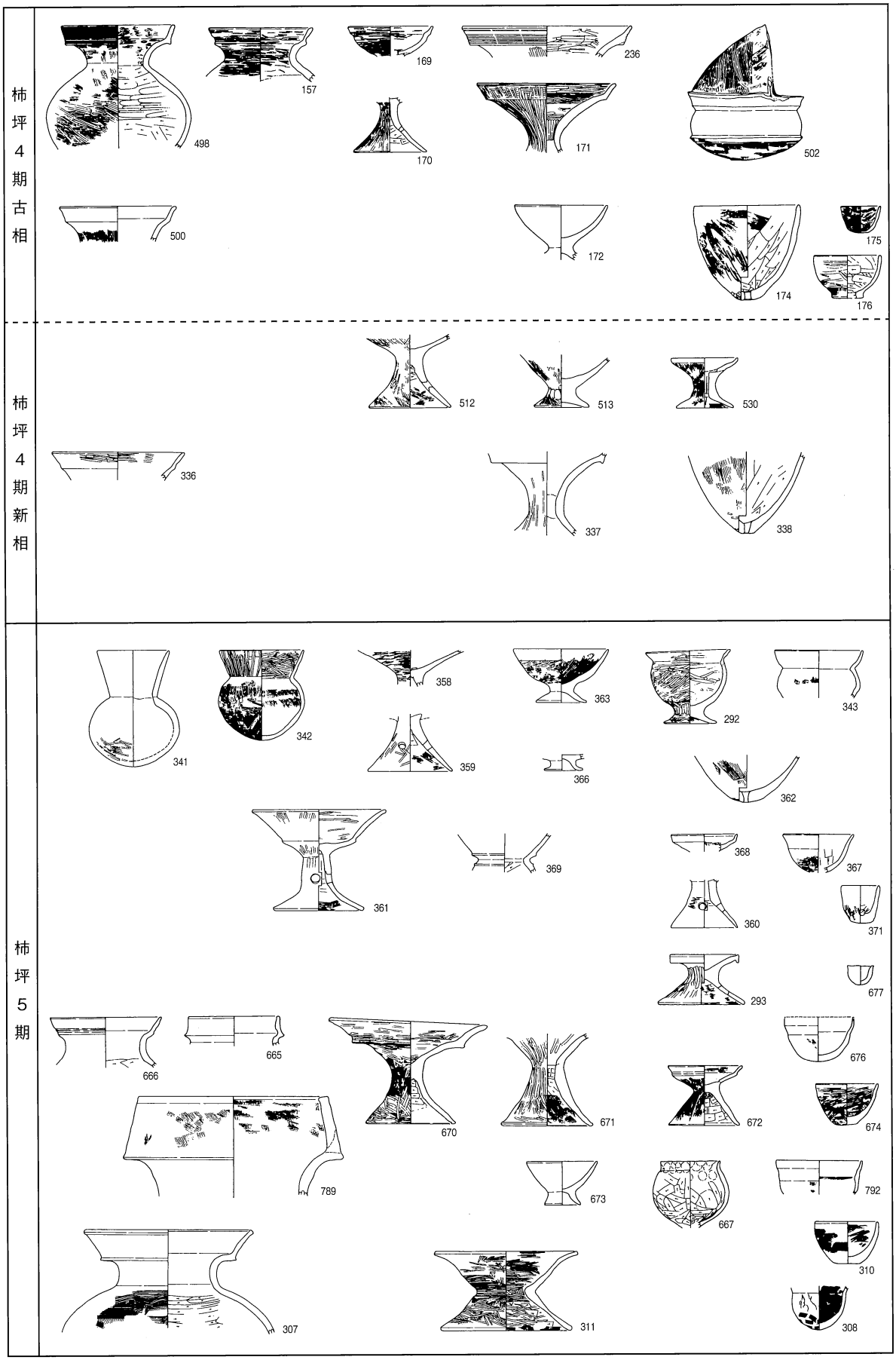
土師器には甕Ｅ２・Ｇ５・Ｈ・Ｉ・J、二重口縁壺Ｂ、直口壺Ｂ１・Ｂ２、高杯Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ１・Ｉ・J、椀Ａ・Ｂ、小型丸底壺、製塩土器、甑などがある。須恵器には須恵器杯蓋・高杯・壺・甕・椀などがある。韓式土器には甕（643）がある。

甕Ｇ５には口縁部がほとんど内彎しないもの（752）と、口縁部が折れるように内彎し、口縁端部外縁が外側につまみ出されているもの（19）がある。高杯は高杯Ｅから入れ替わるように椀形の高杯Ｊが現れる。この時期に高杯の杯部と脚部の接合が充填方式に加えて、付加方式が現れる。椀は平底の椀Ａに加えて丸底の椀Ｂが現れる。９期の椀Ａは４～６期に存在する椀Ａから引き続くものかどうかはよく分からない。甑は多孔式である。須恵器は甕が多く、壺（34）・高杯・器台・台付鉢（248）・椀・樽形鬲（979）など他の時期に比べて多様な器形のものが出土している。韓式土器甕（643）は焼成が硬質で、外面に縄席文が施されている。その他にこの時期の遺構からではないが焼成が軟質のもの（926）も出土している。

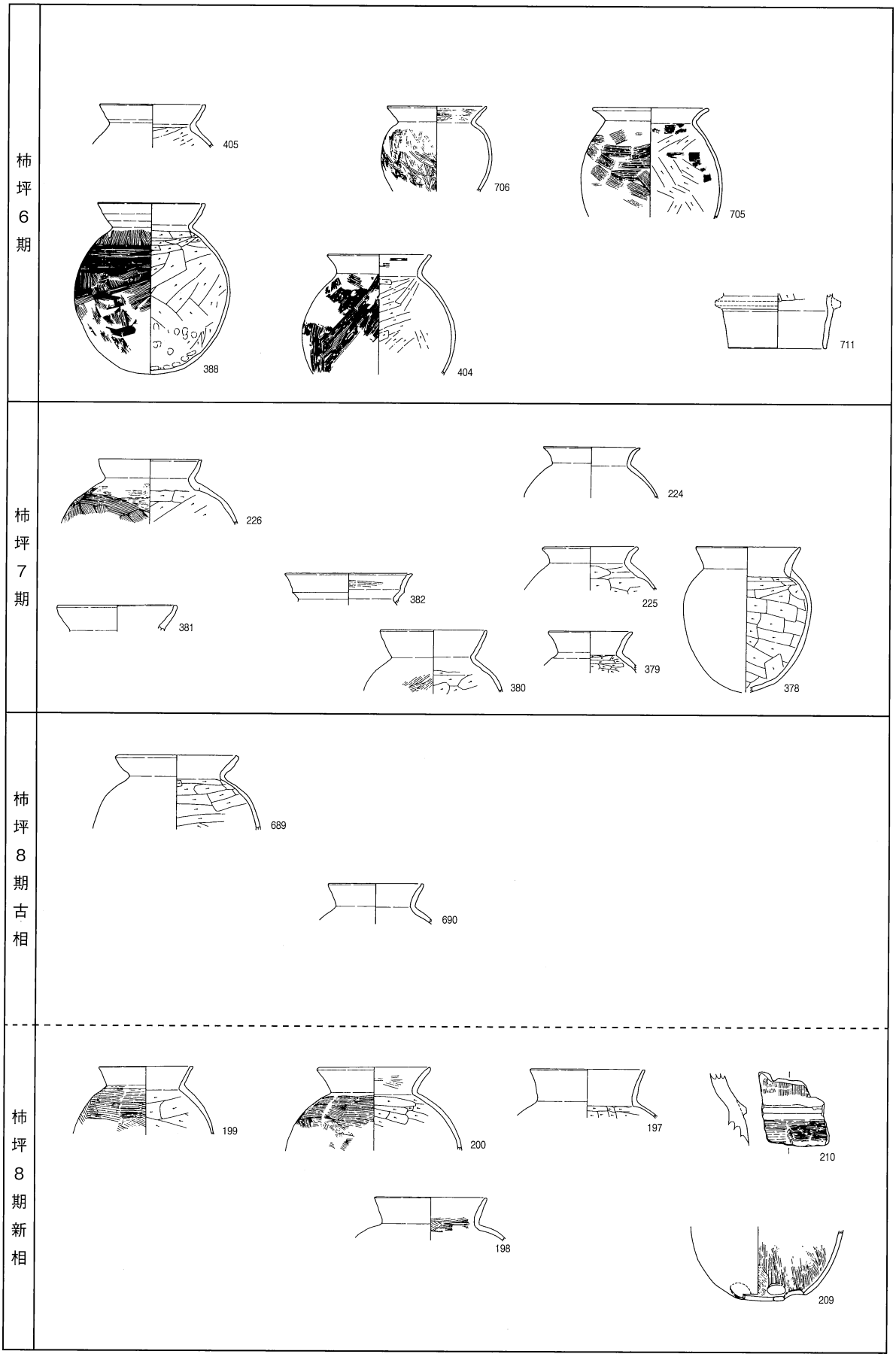
柿坪10期古相　SH30010、SH30029の資料を挙げるが床面出土の土器は少ない。TK216型式の須恵器が出土したもののうち、大型高杯が見られないものである。10期新相とは須恵器の時期が異なるだけで、


柿坪4期古相
165
166
503
164
482
501
894
168
335
892
柿坪4期新相
529
528
518
510
505
507
509
柿坪5期
353
356
357
344
347
351
354
300
301
304
291
658
659
664
657
656

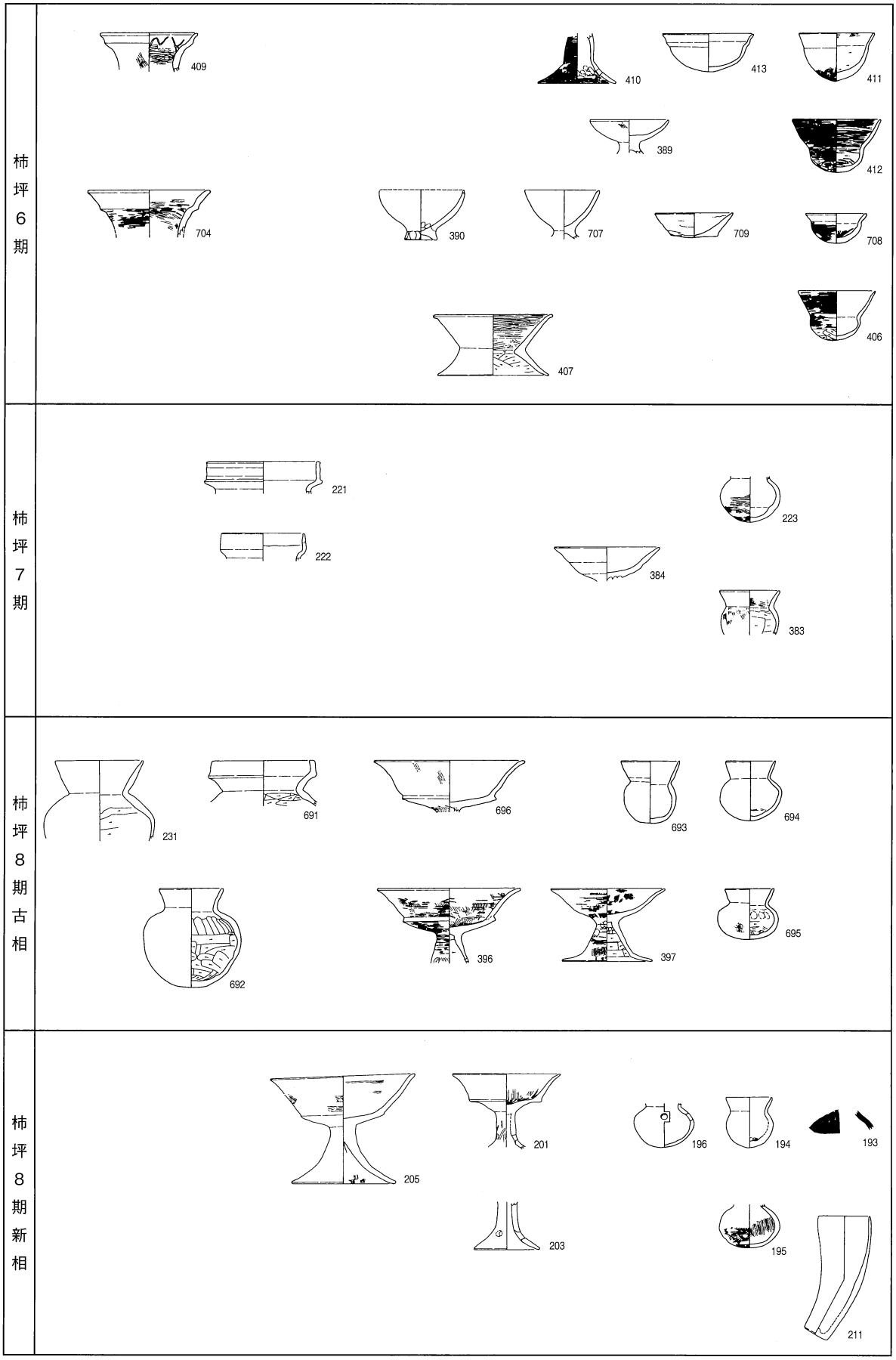
第22図　土器の変遷（3）


柿坪4期古相
柿坪4期新相
柿坪5期
498
157
169
236
170
171
502
500
172
175
174
176
512
513
530
336
337
338
341
342
358
363
292
343
359
366
362
361
369
368
367
360
371
293
677
666
665
676
670
671
672
674
789
673
792
667
310
307
311
308

第23図　土器の変遷（4）


柿坪6期
405
706
705
388
404
711
柿坪7期
226
224
382
225
381
379
380
378
柿坪8期古相
689
690
柿坪8期新相
199
200
197
210
198
209

第24図　土器の変遷（5）


柿坪6期
409
410
413
411
389
412
704
390
707
709
708
406
407
柿坪7期
221
223
222
384
383
柿坪8期古相
231
691
696
693
694
692
396
397
695
柿坪8期新相
205
201
196
194
193
203
195
211

第25図　土器の変遷（6）

土師器そのものにはほとんど違いがないものと思われる。

土師器には甕Ｅ２・Ｇ５・Ｉ、直口壺Ｂ２・Ｃ、高杯Ｈ２・Ｊ、製塩土器、須恵器には杯身、杯蓋、甕などがある。

甕Ｇ５は口縁端部のつまみ出しが顕著になっている。口縁部の内彎が強いものと弱いものがあり。弱いものは口縁部のなかほどが、外側へ肥厚している。高杯Ｈ２類はＨ１類から口縁部が内彎化したものである。

柿坪10期新相　TK208型式の須恵器が出土しているSH24064、SH30020、SH30033などを挙げる。SH30020は住居内の遺構から出土したものが多い。

土師器には甕Ｅ２・Ｇ５・Ｉ・Ｈ、二重口縁壺Ｂ、直口壺Ｂ２、高杯Ｈ２・Ｉ、椀Ｂ、須恵器には杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯などがある。

甕Ｇ５は口縁部が直線的で、口縁部の中ほどが外側に肥厚している。10期には平底の椀Ａは認められなくなるようである。

柿坪11期　TK23型式の須恵器が出土しているSH20022、SH40010、SH40011などを挙げる。SH20022は床面や住居内土壙から比較的多くの遺物が出土している。土師器は10期とさほど変わらない。

土師器には甕Ｇ５・Ｉ・Ｈ、直口壺、高杯Ｈ２・Ｉ・J、椀Ｂ、製塩土器、移動式竈、須恵器には杯蓋、有蓋高杯、甑などがある。

甕Ｇ５は10期と同様に口縁部が強く内彎するものと口縁部が直線的で、口縁部の中ほどが肥厚しているものがある。高杯Ｈ２は口縁部の内彎が強くなっている。杯部と脚部の接合に充填方式がみられなくなるようである。移動式竈は口縁部が甕と同様な口縁で、焚き口のまわりに鍔が付いている。製塩土器は内外面とナデが施されているもの（289）と外面に平行タタキが施され、内面に布目が付いているもの（949）がある。須恵器高杯は円形透かしのものが多い。

柿坪12期　TK47型式の須恵器が出土しているSH20018・SH20055を挙げる。床面や住居内土壙から出土したものが多い。甕Ｇ６・Ｇ７・Ｅ２、高杯Ｈ２・Ｊ、椀Ｂ、鉢、須恵器杯身・杯蓋などがある。

甕Ｇは口縁部の端面が内傾するもの（甕Ｇ６）や口縁部が丸味をもつもの（甕Ｇ７）が現れる。高杯は脚柱部が中実のものが見られるようになる。甑は蒸気孔が粘土による桟を渡すものである。

柿坪13期　MT15型式の須恵器が出土しているSH20024、SH20027を挙げる。床面より出土したものは多くない。

土師器には甕Ｅ２・Ｇ５、高杯Ｈ２・Ｊ、椀Ｂ、須恵器には杯身・杯蓋などがある。

甕Ｅ２は頸部が厚く口縁部が短いものが現れる。甑は蒸気孔が桟渡し用小円孔をもつものである。粟鹿遺跡古墳６期　(MT15型式)　では粘土による桟を渡すものが出土している。

柿坪14期　TK10型式の須恵器が出土しているSH20001、SH20004などを挙げる。床面から出土したものは多くない。土師器には甕Ｅ２・Ｇ６・Ｈ、高杯Ｊ、椀Ｂ、須恵器には杯身、杯蓋などがある。

甕は加都遺跡ではそうでもないが、粟鹿遺跡と同様に甕Ｅ２類が主流になるものと思われる。高杯Ｊ

は杯部の内彎が弱く、口縁部がやや外反している。加都遺跡では古墳５期の後半（TK47型式）、粟鹿遺跡では古墳６期（MT15型式）より口縁部が外反するものが出土しており、その系統の引くものと考えられる。

柿坪15期　MT85型式の須恵器が出土しているSH20028を挙げることができるのみである。土師器は甕Ｅ２、須恵器は杯身、杯蓋がある。

甕Ｅ２は体部が長胴である。加都遺跡では古墳７期（TK10型式）に長胴化したものがみられ、この頃から長胴のものが増えるものと思われる。

柿坪16期　TK209型式の須恵器が出土しているSH40013を挙げることができるのみである。甕Ｇ６、甑、須恵器杯身・杯蓋がある。

甕Ｇ６は口縁部の内彎が弱くなっている。甑は把手の位置が底近くの低い位置に付いている。

柿坪17期　TK217型式の須恵器が出土しているSH40007を挙げることができるのみである。甕Ｅ２、椀Ｂ、須恵器杯身・杯蓋がある。

椀Ｂは口縁部が外反している。

柿坪18期　この時期に属する遺物はごくわずかである。集落廃絶後の溝SD40001から出土したものと柿坪17期のSH40007に含まれていたものである。須恵器杯Ａ・杯Ｂ蓋がある。

須恵器杯Ｂ蓋はかえりをもっている。

小結　土器の様相に大きな変化を見せるのは柿坪５期と柿坪８・９期である。柿坪５期には甕Ｄ・鼓形器台など山陰系の器形や高杯Ｃなど在地系の器形を一部残しながらも、甕・壺など主要な器形のものでは布留式の甕Ｇなど畿内系の器形のものが在地系のものに置き換わっている。このような様相は柿坪遺跡内だけのことかもしれないが、非常に急激である。以後時期を追うごとに在地系の器形は消失してゆく。

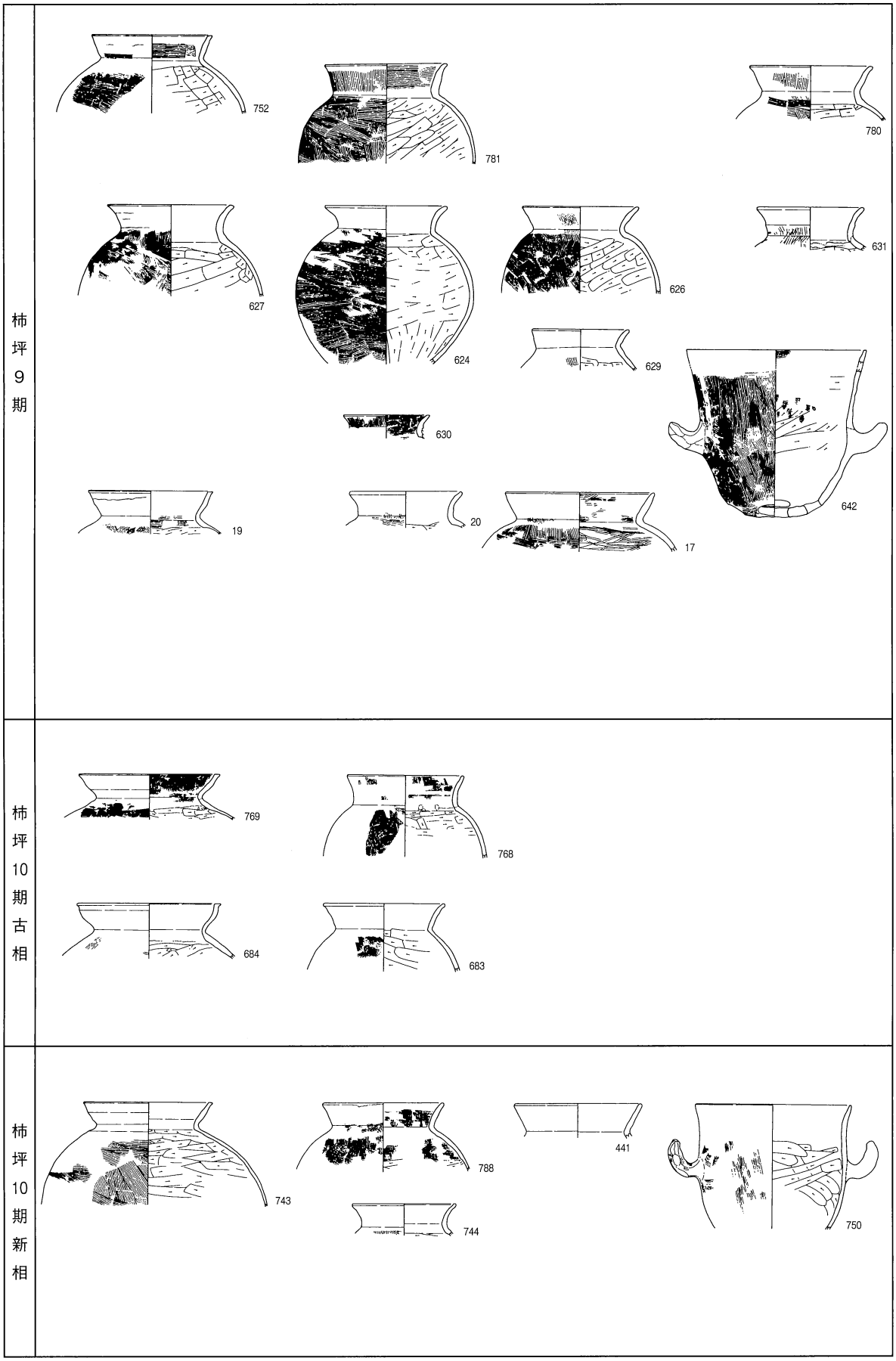
柿坪８期新相で甑・竈・角杯など渡来系の生活文化を色濃く示す遺物がみられ、柿坪９期では多量の初期須恵器や韓式土器の存在が特筆される。土師器も長胴の甕がみられない点を除けば、畿内地域の様相とそれほど変わらない。柿坪９期は大型掘立柱建物跡が展開する時期で、遺物からも最盛期の時期であることがわかる。

このように南但馬地域は北近畿地域のなかでも丹後・山陰地域と比べて畿内地域から、いち早く強い影響を受けている地域とみることができる。

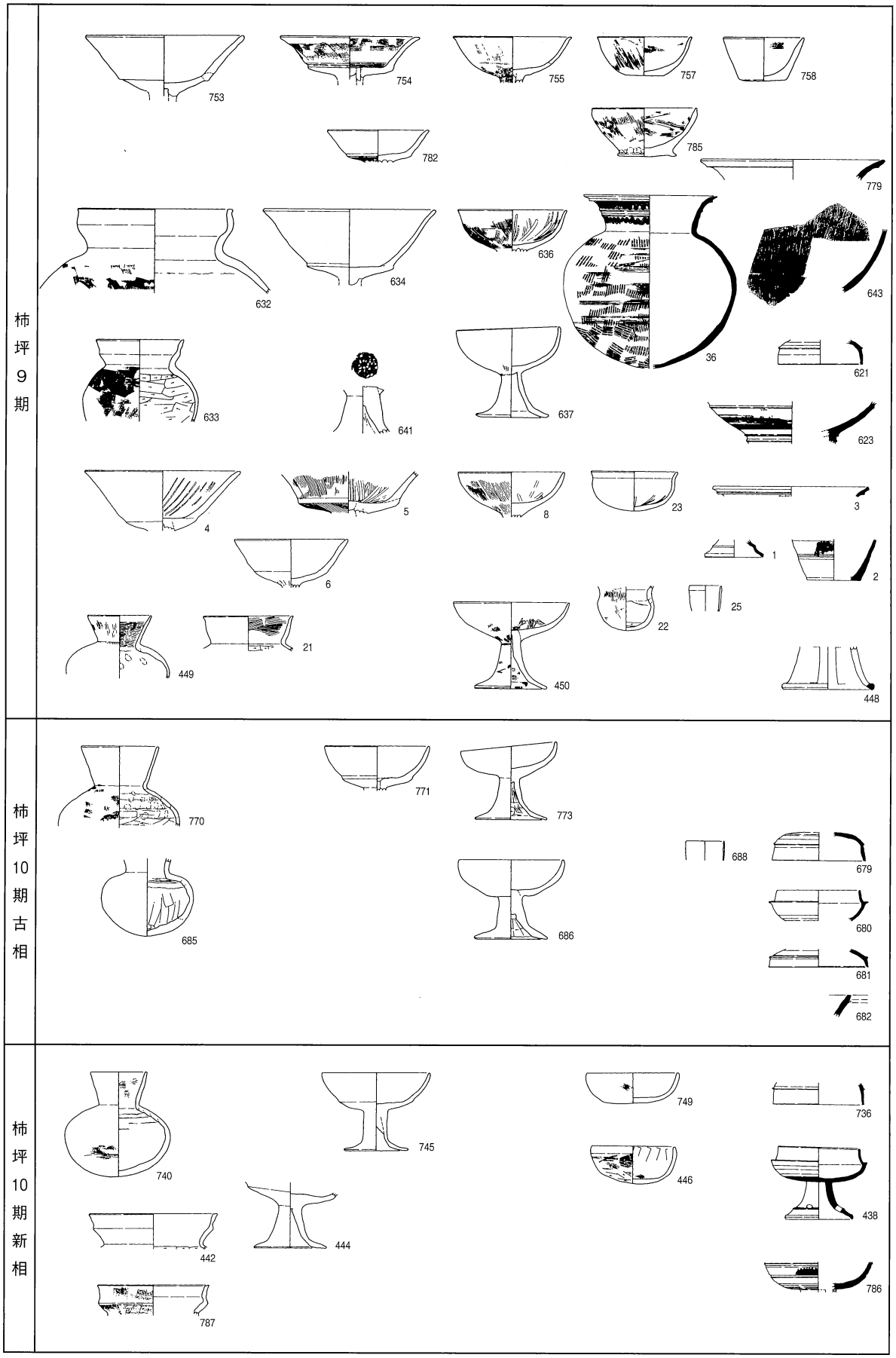
２．木製品について

出土した木製品はほとんどがSD10001より出土したもので、時期はほぼ柿坪９・10期である。約120点を取り上げ、そのうち51点を報告している。報告を行っていないものを含めての内訳は食事具10点、容器２点、雑具５点、加工部材16点、部材10点、建築部材３点、杭45材、板材27点である。

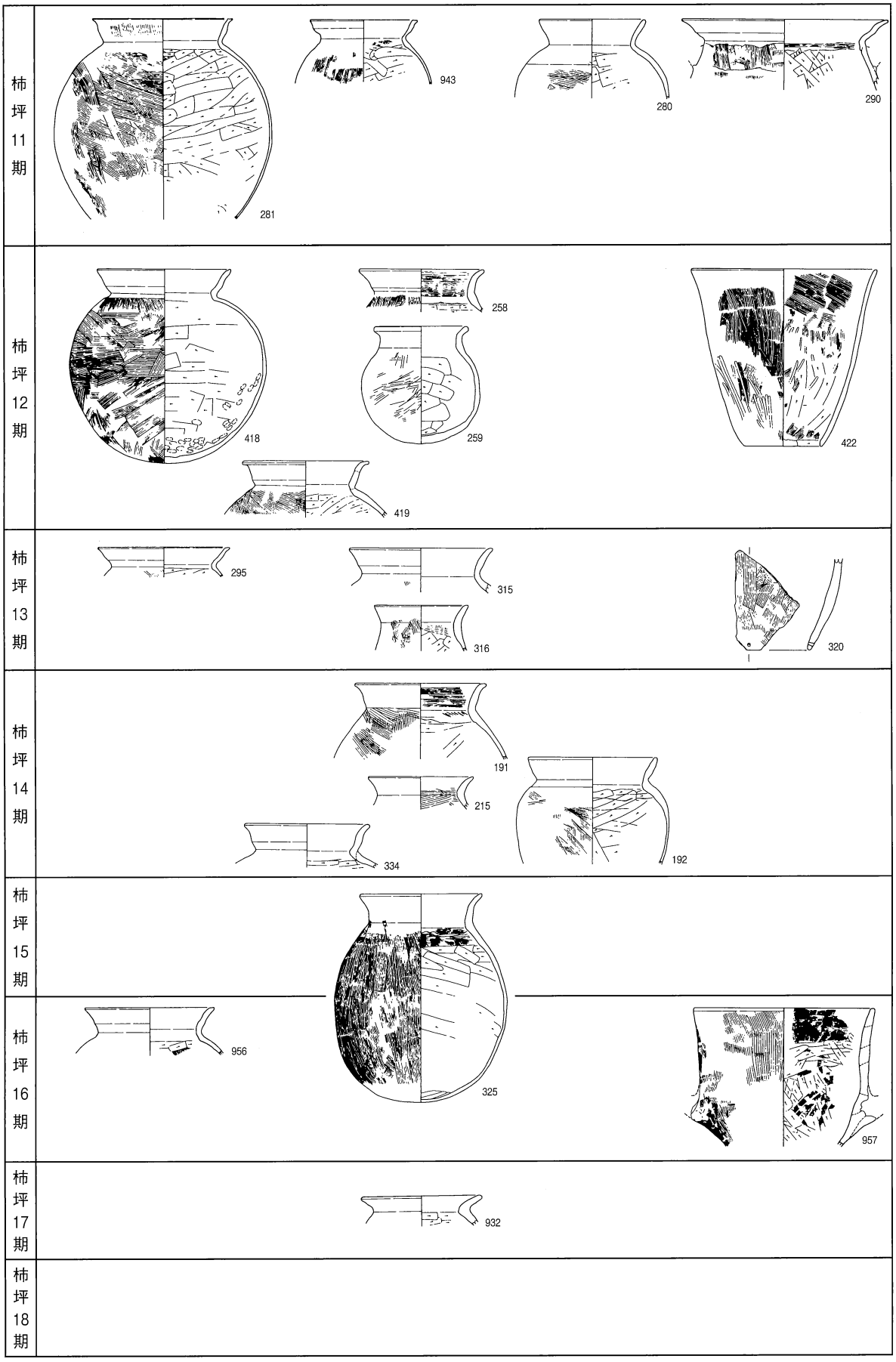
全体の中ではSD10001Aの護岸材として用いられた杭材や板材が多い。古墳時代の集落遺跡である朝


柿坪9期
752
781
780
627
624
626
631
629
630
642
19
20
17
柿坪10期古相
769
768
684
683
柿坪10期新相
743
788
441
744
750

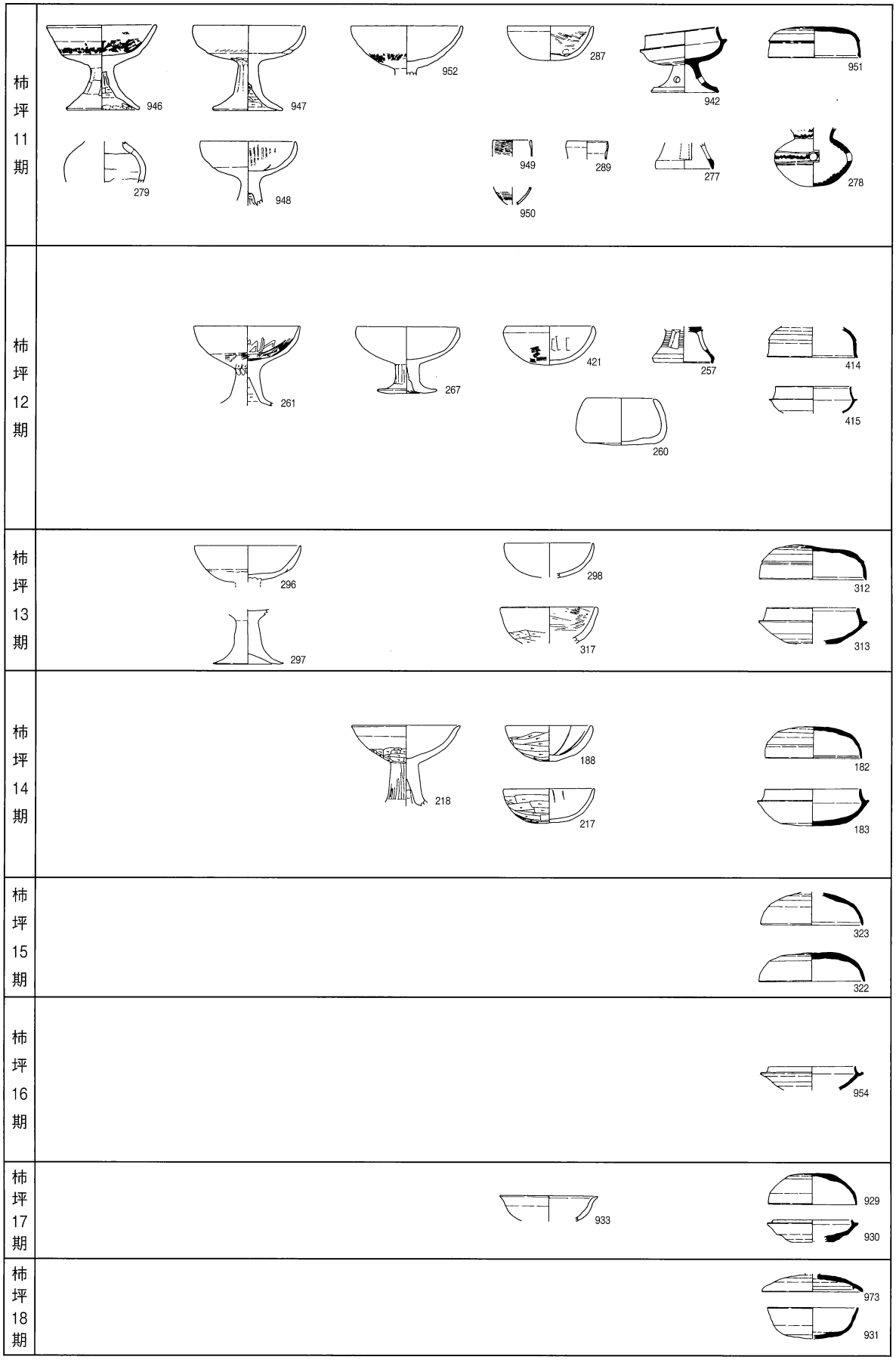
第26図　土器の変遷（7）


柿坪9期
753
754
755
757
758
782
785
779
632
634
636
643
633
641
637
36
621
623
4
5
8
23
3
6
1
2
25
22
449
21
450
448
柿坪10期古相
770
771
773
688
679
685
686
680
681
682
柿坪10期新相
740
745
749
736
446
438
442
444
786
787

第27図　土器の変遷（8）


柿坪11期
281
943
280
290
柿坪12期
418
258
259
422
419
柿坪13期
295
315
316
320
柿坪14期
191
215
334
192
柿坪15期
325
柿坪16期
956
957
柿坪17期
932
柿坪18期

第28図　土器の変遷（9）



第29図　土器の変遷(10)

来市加都遺跡の水田部からは多量の木製品が出土しているが、加都遺跡と柿坪遺跡を比べると加都遺跡では報告点数ではあるものの農具が3割程度を占めているのに対して、柿坪遺跡では農具が出土していない点が特徴的である。木器の構成に農具の割合が低い点では三重県城之越遺跡（三重県埋蔵文化財センター1992）や京都府古殿遺跡（京都府埋蔵文化財調査研究センター1988）などで一般集落と異なる祭祀的な性格が指摘されている。ただし柿坪遺跡ではこの2遺跡とは異なり形代などの祭祀具が出土していない点は異なっている。

柿坪遺跡では護岸材である杭材や板材を除くとヘラ状木製品の存在が非常に目立っている。京都府浅後谷南遺跡（京都府埋蔵文化財調査研究センター2000）でもSD2010（新）でヘラ状木製品が多く出土しているが、この溝は豪族居館を含む集落に接する溝と想定されている点でも柿坪遺跡と同様である。ヘラ状木製品が杓文字のような調理・食膳具だとすれば、食事を伴う行事が大規模もしくは継続的に行われたものと考えられる。

このように木器の構成からみても柿坪遺跡が一般集落と異なる性格をもつことを示している。

参考文献

岩崎仁志　2006「日韓の角杯形土器」『日韓交流史理解促進事業調査研究報告書』

京都府埋蔵文化財調査研究センター　1988『京都府遺跡調査報告書第9冊古殿遺跡』

京都府埋蔵文化財調査研究センター　2000「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報第93冊』

杉井　健　1999「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室

高野陽子　2003「北近畿における弥生後期から古墳時代前期の土器様式」『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』（財）大阪文化財センター

田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

田辺昭三　1981『須恵器大成』平凡社

谷本　進　1992「但馬地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年－山陰・山陽編－』木耳社

谷本　進　2000「但馬における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』22－庄内式併行期の土器生産とその動き－「丹波・丹後・但馬を中心とした庄内式併行期の土器の移動」　庄内式土器研究会

辻　美紀　1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室

寺沢　薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

奈良国立文化財研究所　1985『木器集成図録　近畿古代篇』

奈良国立文化財研究所　1993『木器集成図録　近畿原始篇』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2005『加都遺跡Ⅰ』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2007a『加都遺跡Ⅱ』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2007b『粟鹿遺跡』

三重県埋蔵文化財センター　1992『城之越遺跡』

第２節　遺跡の変遷

１．掘立柱建物の時期について

各地区で検出された遺構の変遷を考える上で、最大の問題となるのが大型掘立柱建物を含む掘立柱建物の時期である。掘立柱建物に伴う土器類は少なく、多数の遺構と切りあっている状況下では、柱穴内から出土した土器類が掘立柱建物の時期決定に使用しえるかどうかは充分に検証しなければならない。そこで、掘立柱建物群を棟方位で分類し、出土した土器類の示す時期、竪穴住居等との切りあい関係から先後関係を考慮した上で、掘立柱建物の時期を決定していきたい。

掘立柱建物の方位については２群に大別できる。Ａ群は棟方位をＮ14°Ｗ～Ｎ5.5°Ｅの間とする群で、Ⅱ区の大形・中形の掘立柱建物を中心とする群である。Ⅱ区を中心に存在し、Ⅲ区に小規模な総柱建物が１棟だけ存在する。Ｂ群は棟方位が大きく東に振れた群で、大型の掘立柱建物は含まれず、小型の掘立柱建物からなる群であり、ほぼ調査区全域に分布する。Ａ・Ｂ群では棟方位の他、掘立柱建物の構造や組み合わせが大きく異なっていることから、Ａ群とＢ群は建築された時期が異なると考えている。

Ａ群はさらに棟方位がやや西に振れた１群、ほぼ南北に近い棟方位の２群、やや東に振れた３群に細分でき、これら３群をＡ１・Ａ２・Ａ３群と呼称して、出土土器や他遺構との切りあい関係から建築時期をみてみる。

Ａ1群には棟方位をＮ14°Ｗ～Ｎ4.5°Ｗとする群で、SB20010・SB20012・SB20016・SB20018の４棟が該当する。これらの中で時期の判別が可能な土器類を出土しているのはSB20016のみであり、柱穴内から９期か10期と思われる高杯（476・477）が出土している。また身舎の南西隅柱穴の上面からは11期か12期と思われる須恵器無蓋高杯（475）が出土している。上面の土器については遺構が削平されていることもあり、遺構の埋土中の土器が露出したか、削平等で移動してきた可能性もあり、遺構の時期判断の資料として使用するにはやや心配なものであるが、出土土器の点ではSB20016は９期か10期から11期か12期までの間に建築された可能性が高い。棟方位が近似している建物が同一時期に存在したとは限らないが、一応出土土器の点からはこの群は9期～12期の間に建築された群としておく。

次に他遺構との先後関係を切りあい関係でみてみると、Ａ１群の掘立柱建物が切るのはSB20010が７期以前のSH20029を、SB20012が７期のSH20038を、SB20016が８期新～９期のSH20017と６期のSH20051をであり、先行するものの中で最も新しい時期は８期新～９期である。したがって、Ａ１群の時期はこれ以降ということになる。逆にＡ１群の建物が切られるのは、SB20016が12期以降のSH20053に、SB20012がSB20007とSB20013に切られる。SB20007は棟方位の上ではＡ２群に含まれる建物であり、内部からは11期か12期に属する須恵器杯蓋を出土している。SB20013との切りあい関係は検出状況に混乱があり断定できない。したがってこの群の建物が切られる遺構の中で、最も古いのは11期もしくは12期である。こうした切りあい関係における先後関係からはＡ１群は９期から12期までの間に建築された可能性が強いことになる。

このように出土土器の点からも、他遺構の切りあい関係の上でも、この群の時期は９期から12期の間に位置づけられ、後述するＡ２群の建物群より先行するものである。

Ａ２群は棟方位をＮ５°Ｗ～Ｎ4.8°Ｅとする群であり、SB20007・SB20008・SB20013・SB20015・SB20019・SB20022の６棟とSA20001が該当する。この内、SB20007・SB20013・SB20022から土器類が出土している。

SB20007からは11期か12期に属する須恵器杯蓋（465）が、SB20013からは４期と９期の土師器類（471・472）が、SB20022からは10期の土師器甕（479）が出土している。ただこれらの遺物は柱穴半裁時に出土したものであり、柱穴の柱痕跡内から出土したものか、柱穴埋め土から出土したものかは明らかにできていない。したがって出土遺物の点からは、この群は９期もしくは11期か12期に属するものと思われる。

切りあい関係からは、この群の掘立柱建物群が切るのはSB20007が４期のSK20026と9期～12期のＡ１群に属するSB20012を、SB20019が８期新～9期のSH20017を、SA20001が13期のSH20025を切る。したがって、Ａ２群に切られて先行する遺構の中で最も新しい時期は13期ということになる。次に逆にＡ２群の建物を切って後出するものをみてみると、SB20008が13期のSH20024に、SB20019が14期のSH20007に、SB20022が10期のSH20036と12期のSH20037に切られており、後出する遺構の中で最も古いものは10期の遺構となっている。群全体が同一時期に設けられたものとすると、切りあい関係からの先後関係には、SA20001が13期の竪穴住居を切り、SB20022が10期の竪穴住居に切られるという矛盾が生じている。

この群はSB20019の身舎南妻とSB20007・SB20008の北妻がほぼ揃えられ、SB20008とSB20022は並行し、西桁を揃えている、SA20001とSB20008・SB20022は並行する、SB20008のほぼ中央東側に当たる位置にSB20013が配置される等、比較的建物等が規則的に配置される群であり、有機的な繋がりが想定される群である。したがって時期的に大きな隔たりはないと考えられる群であり、切りあい関係の矛盾点については遺構検出時の混乱に起因して生じていると考えられる。仮にSA20001の切り合い関係に混乱が生じているとしてSB20022の切りあい関係を優先すれば、SB20019が８期新～９期の竪穴住居を切って後出し、SB20022が10期の竪穴住居に切られて先行することから、この群はほぼ９期とするのが妥当ということになる。この場合、SB20007から出土した須恵器は柱痕跡内に落ち込んだものと考えられる。逆にSB20022の切り合い関係が混乱しているとしてSA20001の切りあい関係を優先すれば、SA20001が13期の竪穴住居より後出するのに対し、SB20008が13期の竪穴住居より先行することになる。このように、この仮定では同時期の遺構の中に、先行するものと後出するものが存在していることになり、この群が13期の中の極めて短期間に存在したと理解することも可能ではあるが、Ａ１・Ａ２群との関係からも無理があるように思え、仮定した切りあい関係が成り立たないであろう。したがって、ここではSA20001の切りあい関係が混乱しているとして、問題が残るものの、この群の掘立柱建物群は９期前後に位置づけられるものとしておく。

Ａ３群はSB20005・SB200014・SB20021・SB20024・SB30003の５棟が該当する。この内、SB20005からは柱抜き取り跡等から９～10期に属する土師器（461・462）が出土している他、初期須恵器（459・460）が柱穴内から出土している。またSB20014からは12期に属する須恵器杯蓋が出土しており、出土土器の点からは、この群の掘立柱建物は９～10期もしくは12期以降の所産と考えられる。

切りあい関係の中で、この群の建物が切るのはSB20005が３棟の竪穴住居を切っており、その中で最も新しいものは８期古のSH20009である。SB20014は10期のSH20019を切る。SB20024はSH20062を切るが、SH20062の詳細な時期は不明である。またSB30003は他の遺構との切りあい関係をもたない。次にこの群を切る遺構をみてみると、SB20005が15・16期と思われるＢ群のSB20002・SB20004に切られ、SB20021は13期のSH20049と15期のSH20047・SH20048に切られている。この他、SB20005はSH20003・SH20005等と近接しており、上部構造を考えた場合、切りあい関係があるものと思われるが、柱穴に直接的な切りあい関係はもたない。こうした切りあい関係から、この群は11期以降13期までの年代が与えられる。た

だ、極めて大型の掘立柱建物であるSB20005・SB20021と極めて小形の総柱建物であるSB20014が同時に存在したことは疑問もあり、SB20014は大型掘立柱建物群とは同時存在ではなく、SB30003と同様に竪穴住居群中に存在した建物である可能性が高いと思われる。その場合、SB20005・SB20021の大型掘立柱建物は９期から13期の間に建築されたことになる。

以上のように、出土土器と切りあい関係から、Ａ群の時期についてはＡ１群が９期～12期、Ａ２群が９期、Ａ３群が９期～13期という時期が与えられた。次にこれら３群をそれぞれの関係化からみてみると、Ａ１群の内、SB20012はＡ２群のSB20007・SB20013に切られており、Ａ２群に先行することは明らかである。Ａ２群の９期が正しければＡ１群も９期の中に位置づけられる。Ａ３群はＡ２群とは切りあい関係がなく、その点では先後関係は不明といわざるを得ないが、Ａ２群と切りあうものがないことや、SB20005の正面となるような位置にSB20019が存在しているという配置の関係から、同時に並立していた可能性が考えられる。

次にＢ群であるが、この群は棟方位をＮ10°Ｅ～Ｎ46.5°Ｅの範囲とするもので、Ａ群に比較するとバラつきが大きいが、棟方位をＮ10°Ｅ～Ｎ13°Ｅとする１群、Ｎ16°Ｅ～Ｎ32°Ｅとする２群、Ｎ34°Ｅ～Ｎ46°Ｅとする3群に分けることが可能である。これをＢ１群・Ｂ２群・Ｂ３群と呼称する。

Ｂ１群はSB20006・SB30008が該当し、１棟が単独で存在する形をとる。SB20006は12期のSH20018を切り、SB30008は８期のSH30017を切っている。したがって上限は12期以降の時期が与えられるが、これらの建物を切る遺構は存在しないため、下限については不明である。

Ｂ２群はSB20001・SB20002・SB20003・SB20004・SB20009・SB20011・SB20017・SB20020・SB3006・SB30007・SB30008・SB30009・SB30010・SB40001・SB40002が該当する。棟方位の差が大きく、さらに細分することも可能かとは思うが、建物配置からみて群を構成しており、細分はあまり意味がないよう思われる。

SB20001～SB20004・SB20020はⅡ区の東半にSB20003を中心に直線的に並ぶ群であり、建物同士が切り合うこともなく、ほぼ同時期に存在したと思われる。この群が切る遺構の中で最も新しいものはSB20001が切る14期のSH20004であり、この群は14期以降の時期が考えられる。また、この群の建物は他の遺構に切られることはなく、Ⅱ区では最も後出するものとみられる。出土土器ではSB20004から15期以降と思われる土師器甕（458）が完形に近い状態で出土している。したがってＢ２群の内のⅡ区東半の群は15期以降に位置づけてよいものと思われる。下限年代は18期には遺跡が居住域としての機能を失っていることから17期とでき、この群は15期から17期の間に位置づけられる。

SB20009・SB20011・SB20017はⅡ区の西端の群で、SB20011を中心に配置された群である。時期決定に使用できる土器は出土していないが、SB20009が15期のSH20028を切っており、16期以降に位置づけられる。下限年代はやはり17期であり、Ⅱ区の東半の群よりやや後出するか同時存在が考えられる。

SB30006～SB30010はⅢ区の北半を中心に展開するが、SB20009は西に離れ、SB20007はＢ３群の中に位置している。SB30006からは13期段階の土師器高杯（794）が出土している。また、切りあい関係の上では、この群が切る遺構の中で最も新しいものは11期のSH3002・SH30019であり、これ以降の時期が与えられる。逆にこの群を切って後出する遺構はなく、そのため、この群の下限の年代は不明である。ただ、Ⅲ区では13期から15期の間はほとんど竪穴住居が展開されず、16期になって再び展開されるようになり、それも掘立柱建物群の外側で展開されている。こうしたことから、この群は竪穴住居とほぼ同時に存在としてことが考えられ、16期以降の可能性が高い。また18期は遺跡全体で住居遺構がみられなくなるこ

とから、この群の下限の年代は17期である可能性が高い。

SB40001・SB40002はⅣ区東半の竪穴住居群に囲まれてＬ字形配置された建物群であるが、出土遺物もなく、また他の遺構と切りあうことはないことから、時期を特定することはできない。ただここでも13期から15期の間に竪穴住居は展開されず、16期になって展開されることや、16・17期の竪穴住居と方位を合わせていることから、この群も16期ないしは17期に位置づけられるものであろう。

このように、Ｂ２群についてはⅡ区東半の群が15期から展開されていた可能性があるが、全体としてはほぼ16期から17期に位置づけられる。

Ｂ３群にはSB30001・SB30002・SB30004・SB30005の４棟が該当し、Ⅲ区のSD30001の西岸に、SD30001と方向を合わせた群である。２×２間の小規模な建物で構成され、２棟が一対のような状態で検出されている。出土遺物もなく、他遺構との切りあい関係もないため、時期の特定はできない。可能性としては近接するSH30013・SH30014と方向があっていることからSH30014の12期、もしくはⅢ区のＢ２群と同時存在として16期ないしは17期の時期が考えられる。明確な根拠は示せないが、Ⅲ区の他の掘立柱建物と同様の16期あるいは17期の時期を与えておく。

表４　掘立柱建物と他遺構の先後関係

遺構番号	方位		遺物の時期	先行する遺構		後出する遺構		決定される時期	
				遺構番号	時期	遺構番号	時期		
SB20010	(N14° W)	1-1		SH20029	７期？			７期以降	
SB20018	N7° W	1-1		なし					
SB20016	N4.2° W	1-1	9or10 期	SH2005 1	６期	SH20053	12 期以降	９～ 12 期以前	SH20058 との関係は不明
				SH20017	８～９期				SH20052 との関係は不明
SB20012	N4.5° W	1-1		SH20038	７期	SB20007		７期～	
						SB200013			切っている柱穴と切られている柱穴があり
SB20007	N0.5° W	1-2		SK20026	４期古			４期～	
				SB20012					
SB20015	N0.5° W	1-2							
SB20008	N0°	1-2				SH20024 ？	13 期	13 期まで	SH20024 を切った状態で検出しているが検出段階と掘り下げた段階では形状が異なっている。
SB20013	N2.5° E	1-2	4or9 期	SB20012		SB20012		７期～	切っている柱穴と切られている柱穴があり
SB20019	N2.5° E	1-2		SH20017	８～９期？	SH20007	14 期	８新～ 14 期まで	
						SB20006			
SB20022	N3° E	1-2	９期？			SH20036	10 期	10 期まで	
						SH20037	12 期		
SB20021	N4.8° E	1-3				SH20046?	10 ～ 11 期	10 ～ 11 期まで	
						SH20047･48	15 期		
						SH20049	13 期		
SB20005	N5.5° E	1-3	9or10 期	SH20006	７期	SB20002		８新～ 16 期まで	
				SH20009	８期古	SB20004	15 期以降か		
				SH20014	４期古				
SB20014	N5.5° E	1-3	12 期	SH20019	11 期？			11 期以降	
SB20024	N5.5° E	1-3	９期以降	SH20062	９期以降				
SB20006	N10° E	2-1		SH20017	８～９期			12 期以降	
				SH20018	12 期				
				SB20019	８～ 14 期				
SB20004	N16° E	2-1	16or17 期	SH20014	４期古			15 期以降	
				SB20005	８～ 14				
SB20009	N18° E	2-2		SH20028	15 期			16 期以降	
SB20003	N20.7° E	2-2		SD20011					
SB20011	N21° E	2-2		SH20031?	５～６期			６期以降	
SB20017	N21° E	2-2		SH20031?	５～６期			６期以降	
SB20002	N25.5° E	2-3		SB20005	８～ 14				
SB20001	N27° E	2-3	14 期？	SH20001	14 期			14 期以降	
				SH20003	８期				
				SH20005	９期？				
SB20020	N32° E	2-3	11or12 期						
SA20001	N3° E	1-1				SH20025	13 期	13 期以降	
SB30003	N7.2° E	2-1							
SB30008	N12.5° E	2-2		SH30017	８期			８期以降	
SB30006	N19° E	2-2		SD30004	４期まで				
SB30009	N19° E	2-2							
SB30007	N23° E	2-2		SK30002	11 期				
SB30010	N26° E	2-3		SH30016	９期？			11 期以降	
				SH30019	11 期				
				SH30020	10 期				
SB30004	N34.6° E	2-4							
SB30001	N35° E	2-4							
SB30005	N39.8° E	2-4							
SB30002	N46.5° E	2-4							
SB40001	(N19° E)	2-2							
SB40002	N22° E	2-2							

2．遺跡の変遷

遺跡は南北約１km・東西約400mに広がるものであり、今回の調査は遺跡のほぼ中央に横断するトレンチを入れた形となる。しかしそれでも弥生時代中期後半から飛鳥時代末にわたる竪穴住居123棟、大型掘立柱建物を含む掘立柱建物35棟、柵1基、土壙、溝等の多くの遺構が確認された。これ以外にも検出された柱穴は約3,108個に及び、特徴的な柱穴を中心に掘立柱建物を復元したこともあって、建物として復元できなかった柱穴は2,745個に及ぶ。これらの遺構の内、竪穴住居群は大きくは４群で構成され、SD10001からSD30001の範囲を竪穴住居1群、Ⅲ区ではSD30004沿いに展開される群を竪穴住居２群、Ⅲ区からⅣ区東半にかけての群を竪穴住居３群、Ⅳ区西端の群を竪穴住居４群とする。

前章では遺構から出土した土器類を中心に土器の時期区分を行い、弥生時代中期後半から飛鳥時代末までの18期に、小期を含めると21期に区分された。また前節では掘立柱建物の時期について検討した。これらの結果に基づき、ここでは検出された竪穴住居や掘立柱建物を中心に遺跡の変遷をみていく。

１期　P20001・P21724・SK20016・SD20001が該当する他、SD20011・SD30001・SD30004からも土器が出土している。検出された土壙・柱穴はⅡ区の南東部に集中しており、この付近に存在していた竪穴住居等が削平により消失した可能性がある。この時期の遺構は昭和52年の圃場整備による調査においては、中山丘陵に近い遺跡南端でも確認されており、調査区から南側に広がっているものと思われる。

２期　SD20005が該当し、SD30004からも土器が出土している。ただし、SD30004の土器類は３期の土器とともに出土しており、この時期にはSD30004は存在していなかったものとみられる。また、昭和52年の調査で中山丘陵に近い遺跡南端で、この時期の円形の竪穴住居跡が検出されており、１期同様に調査区から南側に遺跡の中心があった可能性が高い。

３期　SH20039・SD10002・SD30004が該当する。竪穴住居１群が形成され始め、調査区全体でも竪穴住居が初めて確認できる時期である。SH20039については平面プランが検出できなかったが、柱配置から円形の竪穴住居とみられる。Ⅰ区段丘縁のSD10002は自然流路と思われるが、SD30004については人工的な溝か自然の流路かは判断できなかった。

４期　調査区内に本格的に竪穴住居が進出してくる時期である。土器の時期区分では新古に分けられているが、遺構には時期区分が明確にできないものが存在することから、新古には分けないことにする。

SH20012・SH20014・SH20031・SH20033・SH20034・SH20061・SH30035・SK20026・SK20033・SK20035・SK20037・SD10003・SD20006・SD24001・SD30004が該当する。前段階のSD10002はこの時期にはSD10003に流路を変更し、SD30004は前段階からそのまま継続する。この両溝に挟まれる地区に竪穴住居１群の遺構が営まれ、SD30004を超えて西側に展開することはない。前段階に比べ竪穴住居数は増加し、円形だった竪穴住居はこの時期に全て方形となり、これ以後円形の竪穴住居が営まれることはなくなる。SH20031・SH20033・SH30035には中央土壙が設けられ、その他には設けられていないが、新古の関係では捉えられず、両者が混在する形となっている。検出された遺構群は東西の２群に分かれる可能性もあるが、現状では不明と言わざるをえない。

５期　SH20016・SH20020・SH20023・SH20026・SH20029・SH20035・SH30008・SH30023・SD10001・SD30001が該当する。段丘縁の溝はSD10001に変化する。SD30004は埋没してSD30001に流路を変更し、東肩の一部には流れを引き込んだような施設が設けられる。竪穴住居１群ではⅡ区の中央から西半にかけて６棟が群を構成し、中には長方形の竪穴住居も含まれる。SD30001の西側に竪穴住居２群が形成され始める。

6期　SH20021・SH20040・SH20051・SH20054・SH20065・SH30007・SH30012・SH30022・SD10001・SD30001が該当する。SD10001・SD30001は前段階から継続する。竪穴住居1群では前段階の竪穴住居群の東に営まれ、調査区では南北端で検出されている。前段階の竪穴住居を切るものはないが、SH20021は前段階のSH20020に近接しており、上部構造を考えた場合切り合っている可能性もある。SD30001を超えた竪穴住居2群も営みを継続し、長方形の竪穴住居が営まれている。

7期　SH20006・SH20008・SH20038・SD10001・SD30001が該当する。竪穴住居1群は継続するも住居数は減少し、前段階の住居の中央にあたるような位置に営まれる。竪穴住居2群では調査区内に営まれた竪穴住居はみられなくなるが、次の段階ではまた現れていることから、この群が途切れたのではなく、調査区内に営まれた住居がなかっただけのものと思われる。SD10001・SD30001は継続する。

8期古　SH20009・SH20044・SH30011・SH30017・SD10001・SD30001が該当する。竪穴住居1群では前段階の東側にそれぞれが営まれる。竪穴住居2群では大小の2棟が離れて営まれる。竪穴住居では長方形で主柱穴2本の構造のものが、主柱穴4本に変化する。SD10001・SD30001は継続する。

8期新　SH15001・SH20003・SH25063・SH20017・SD10001・SD30001が該当する。SH15001からの出土遺物は9期であるが、住居廃絶後、内部に土層がある程度堆積した後に投棄された土器類であることから、時期差を考え、この段階とした。SH20017においても9期の初期須恵器（248）が出土しているが、埋土からの出土であることから、この段階とした。したがって竪穴住居は4棟が存在したことになり、竪穴住居1群だけが居住活動を営み、5期に営みを開始した竪穴住居2群では調査区内に住居は存在しなくなる。竪穴住居の中ではSH20003は出土遺物に土師器角杯や体部に穿孔のある壷あるいは移動式片竈片などがみられ、大型で長方形を呈するなど、極めて特殊な竪穴住居である。SD10001は継続するが、SD10001A下層から出土した馬歯はこの段階に属する可能性が高く、この段階から祭祀が行われた可能性が考えられる。SD30001は前段階同様継続する。

9期　Ⅱ区に大型掘立柱建物群が出現する段階であり、竪穴住居群3に新たに住居が出現し、居住域が拡大する。掘立柱建物ではSB20005・SB20007・SB20008・SB20010・SB20012・SB20013・SB20015・SB20016・SB20018・SB20019・SB20021・SB20022・SB20024が該当し、竪穴住居ではSH20041・SH30001・SH30002・SH30005・SH30006・SH30026・SH30031・SH30032・SH40015が該当する。前段階からのSD10001・SD30001は継続し、Ⅳ区谷部のSD40004にはこの時期の遺物が投棄されている。掘立柱建物群については後述するが、それまで居住域の中心であった竪穴住居1群の上に大型掘立柱建物が建築され、遺跡は居館的性格を有するようになる。特にSB20019を中心とする掘立柱建物A2群は西側に柵を設け、竪穴住居群とは遮断し、内部にも竪穴住居はみられない。竪穴住居1群は締め出された形で、大型建物群内には存在せず、柵外側のSD30001東岸近くに営む。竪穴住居2群では多くの竪穴住居が営まれるとともに、竪穴住居3群が新たに営みを開始し、居住域は西に拡大する。竪穴住居内に造り付けの竈が出現する。

一方、5期から継続してきたSD10001はSD10001Aとした板材による護岸が施された溝になり、内部に初期須恵器が多く投棄され、1点ではあるが滑石製の臼玉を出土している。それに対し、SD30001は初期須恵器を出土してはいるが、比率的には僅かであり、前段階と格段の変化もなく継続している。こうした状況からすると、柵からSD10001までの範囲が大型掘立柱建物を中心とする居館域と思われる。

10期古　SH30004・SH30010・SH30016・SH30027・SH30029・SH40005・SH40006・SH40014・SH40016が該当し、他にSH40008もこの時期に属する可能性がある。SD30001の東では竪穴住居はまったくみられず、前段階に出現した大型掘立柱建物群が継続していたものと思われる。竪穴住居2群・3群では前段階に

引き続き活発に集落活動が営まれており、３群では集中して営まれている。竪穴住居の規模には大小が存在し、小規模な竪穴住居は大型の竪穴住居に隣接するように営まれている。SD10001Ａ・SD30001は前段階と同様に継続する。SD10001Ａの中にはこの時期の土器が投棄されている。これは大型掘立柱建物で形成される居館域が機能を失わず存続していた傍証するものであろう。

10期新　SH20019・SH20036・SH24064・SH30018・SH30020・SH30025・SH30033・SH40017が該当し、他にSH20030がこの時期に属する可能性がある。竪穴住居1群はⅡ区の中に戻ってくるが、大型掘立柱建物の跡を避けるように、その縁辺に営まれている。竪穴住居２・３群では前段階に引き続き集落活動が営まれるが、住居数は減少し、竪穴住居３群では小規模な住居１棟のみが取り残されたように存在する。竪穴住居の規模については大小が存在する。大型掘立柱建物群の東端を区画してきたSD10001Ａはほぼ埋没する。これも大型掘立柱建物群が終焉したことを物語るものであろう。SD30001は継続する。

11期　SH20015・SH20022・SH20046・SH20057・SH30003・SH30019・SH30036・SH40010・SH40011・SK30002・SD30001が該当する。竪穴住居数は減少し、特に竪穴住居２群と３群で減少している。竪穴住居の規模の点では竪穴住居２群に比較的規模の大きいものがあり、１群と３群は小規模なものだけとなる。SH30019・SH30036・SH30003は10期の竪穴住居を切っており、またSH20022も上部構造を考えた場合、10期の竪穴住居を切るものである。SD10001はこの段階には埋没していたようで、出土遺物にこの時期のものは見当たらない。SD30001は継続している。また永徳遺跡とされた遺跡北方でもこの時期の竪穴住居が検出されており、この段階に遺跡は調査区から北側に拡大するようである。

12期　SH20018・SH20037・SH20058・SH30014・SH30015・SH40009・SH400018・SD30001が該当し、他にSH20052・SH20053・SH20055・SH20059・SH20060・SH20062も、この時期に該当する可能性がある。またSH20005は埋土から初期須恵器の小片1点を出土するのみで時期的には不明の竪穴住居であるが、13期の竪穴住居に切られており、この時期に属する可能性もある。これらの可能性があるものを含めると竪穴住居は竪穴住居１群に集中し、竪穴住居２・３群では点在するといった観になる。竪穴住居の規模はSH20005以外は中・小規模である。

13期　SH20024・SH20027・SH20032・SH20049・SD30001が該当し、他にSH20025が該当する可能性がある。竪穴住居数は激減し、存在するのは竪穴住居１群のみとなって、竪穴住居２群と３群では住居等の居住を示す遺構は検出されていない。

14期　SH20001・SH20004・SH20007・SD30001が該当する他、SH20025も該当する可能性がある。竪穴住居は前段階のSH20032の上や周辺にのみ営まれ、広がりをみせない。竪穴住居２群と３群では前段階同様、住居は営まれていない。

15期　SH20028・SH20047・SH20048・SD30001が該当する。SD30001はいぜん継続するが、竪穴住居は２棟のみとなる。この段階でも竪穴住居２群と３群では住居は営まれていない。掘立柱建物Ｂ２群とした中のⅡ区東半の群は14期の竪穴住居を切っており、継続性から言えばこの時期に属する可能性もある。

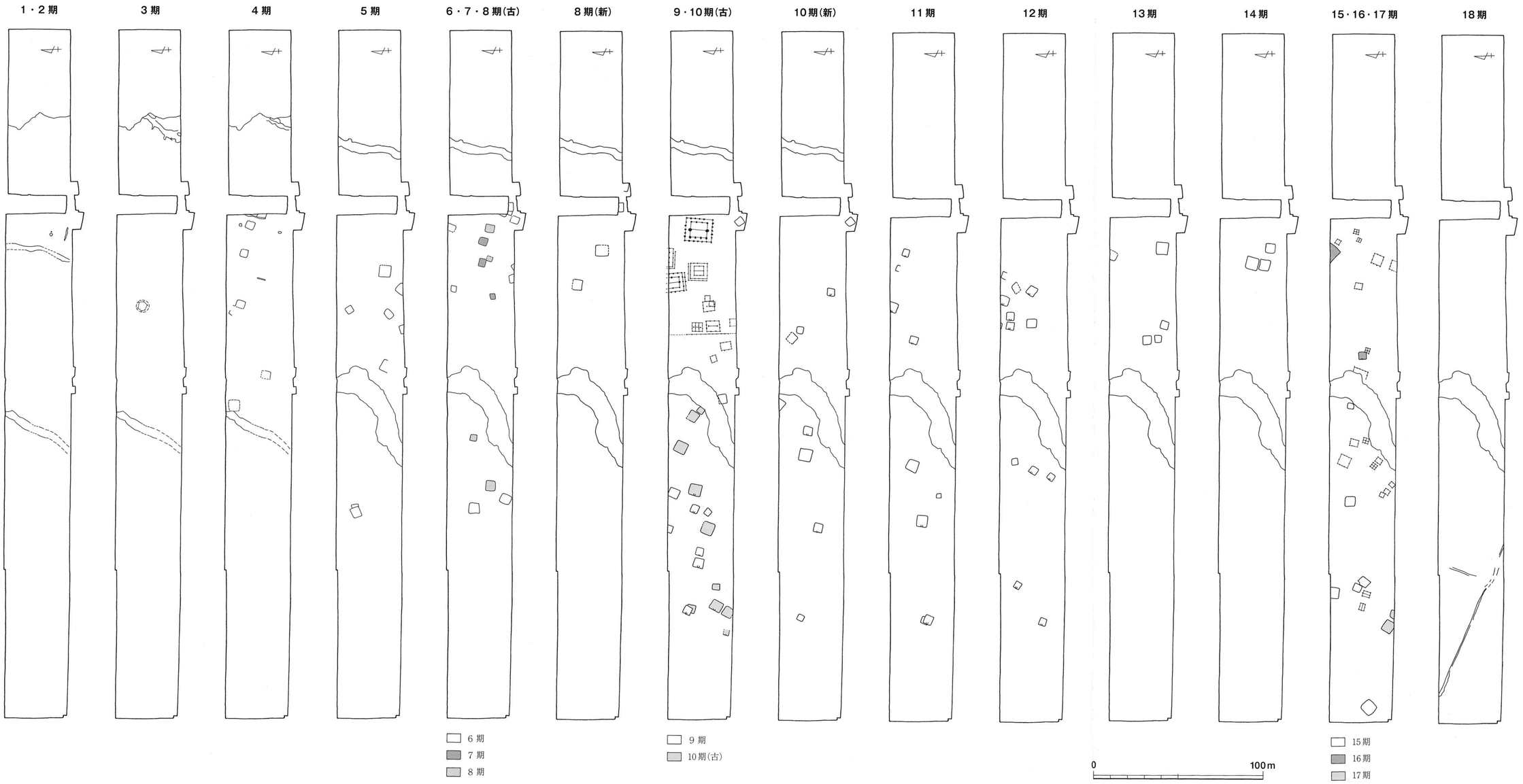
16期　SH30009・SH40001・SH40004・SH40012・SH40013・SH40020・SD30001が該当する。竪穴住居群ではこの時期に最も西端の竪穴住居４群が新たに営みを開始する。これら竪穴住居群の他、棟方位の上からＢ群とした掘立柱建物群は積極的にこの段階に位置づけることは難しく、消極的な理由ではあるが、この時期の竪穴住居と重なりがなく、Ⅱ区では15期まで継続してきた竪穴住居が存在せず、15期の竪穴住居を切って掘立柱建物が建築されていること、Ⅲ区では竪穴住居群の中央に掘立柱建物が存在することといった理由から、この段階に属する可能性が高いものと考えている。この場合、竪穴住居１群はすべ

て掘立柱建物に替わって、東西の２群に分かれ、それぞれの群は側柱建物と小型の倉庫と思われる総柱建物で構成される。竪穴住居２群は掘立柱建物が中心となるが、竪穴住居も存在し、竪穴住居は群の端に位置する。掘立柱建物群は北側に総柱建物が、南に小型の倉庫と思われる総柱建物が配置される。竪穴住居３群は２棟の掘立柱建物跡中心に竪穴住居がその北側に配置される。また、この段階の遺構は次の17期の遺構とはまったく重なることがないことや、全体的な遺構の配置から、16・17期の遺構は同時存在し、竪穴住居の廃棄時期がずれたため、出土土器に差が生じたとみることもできる。

17期　SH40007・SH40025が該当する他、調査時にSH40003としたが、最終的に溝とした遺構も該当する。集落としての遺跡が終焉を迎える時期である。竪穴住居３群に２棟が営まれるが、16期の遺構とは重なることはなく、また配置も掘立柱建物の南側であり、16期の竪穴住居と合わせると、掘立柱建物を中心として竪穴住居が配置されているようになり、この２棟も16期から存続してきた可能性がある。

18期　集落としての遺跡は終焉し、溝だけが検出される段階である。SD30001・SD30007・SD30008・SD40001・SD40002が該当する。SD30007・SD40001・SD40002は本来一本の溝であり、約96mに渡って直線的に伸び、SD30008はそれに直行する溝である。これらの水は農業用水路と思われ、計画的な水田開発に伴う水路と思われる。１期段階はSD30004として、５期段階に流れを変えて、長く継続してきたSD30001も、この時期には浅い窪み状となり、流路としての機能は消失する。

以上、遺跡の変遷を土器編年に基づいて概観したが、要約すると、１・２期は居住を思わせる遺構は存在する程度で、３期から調査区内で竪穴住居が検出されるようになる。当初の居住域はSD10002とSD30004に挟まれた範囲に竪穴住居１群が展開し、４期で竪穴住居跡６棟が営まれるが、８期新段階までは数棟程度の展開である。５期段階には、SD30004がSD30001に変わり、居住域は拡大してSD30001の西側に進出し、竪穴住居２群が形成され始める。この群は６期まで継続するが、２棟程度の小規模な展開である。７期段階は竪穴住居２群では調査区内には住居を営んでいない。９期になると様相は大きく変わり、竪穴住居はSD30001西側で活発に展開され、新たに竪穴住居３群が営みを開始して、竪穴住居数も増加する。竪穴住居１群が占地していたSD10001とSD30001に挟まれた範囲には、西側を柵で遮断し、内部には床面積が200㎡を越すような大型掘立柱建物を中心とした掘立柱建物群が形成され、首長居館の一画としての側面をもつようになる。SD10001Ａは護岸が施された溝になり、居館の東端を区画するものと思われる。竪穴住居は柵外に出される形でSD30001の東岸付近に営んでいる。10期古段階にも大型掘立柱建物群は継続するようであり、SD10001ＡとSD30001に囲まれた範囲に竪穴住居は設けられず、竪穴住居２群・３群は展開の中心となっている。10期新段階には大型掘立柱建物群は終焉し、大型掘立柱建物があった場所にも竪穴住居群が直ちに営まれ始める。しかし、竪穴住居群の展開は８期新以前と同様な状態になり、13期以降15期までは竪穴住居２・３群は活動を中止し、竪穴住居１群のみが数棟単位で展開する。16・17期、竪穴住居１群は掘立柱建物に替わり、東西の群に分かれる。竪穴住居２群と３群でも再び活動が展開されるが、２群は掘立柱建物が中心となり、竪穴住居は付属的となる。３群は掘立柱建物を中央に据えるが、まだ竪穴住居群を中心に展開している。18期には集落としての遺跡は終焉し、水田開発に伴うと思われる直線的に伸びるSD40001と、それに直交するSD30008となる。おそらくは17期に集落移動があり、遺跡地は水田に開発されたと思われる。周辺の律令期の集落遺跡の在り方をみるとこれらの動きに公権力が関わった可能性が高い。


1・2期
3期
4期
5期
6・7・8期(古)
8期(新)
9・10期(古)
10期(新)
11期
12期
13期
14期
15・16・17期
18期
6期
7期
8期
9期
10期(古)
15期
16期
17期
0
100m

第30図　遺跡変遷図

第３節　竪穴住居の類型と変遷

１．竪穴住居の類別

竪穴住居は約120棟が検出されており、弥生時代後期後半から古墳時代の全期間を経て飛鳥時代に至るまでの竪穴住居の変遷を追うことができる。ただ、遺構検出面と竪穴住居の埋土との区別が困難で平面形が正確に検出できていないものや、主柱穴が正確に検出できていないものが存在していることを予め断っておく。

遺跡の変遷でも記したように、本遺跡が居住域として利用されるようになるのは弥生時代中期後半からであるが、１・２期段階では柱穴や土壙は検出されているが竪穴住居は検出されていない。竪穴住居が検出されるようになるのは弥生時代後期後半から庄内併行期にあたる３期からであり、３期の竪穴住居 SH30039は中央土壙と５本の主柱穴の配置から円形の可能性が高いと思われるが、住居壁を検出することができていない。そのため平面形は不明であり、この住居については類別からは除外することにする。また検出時に壁を消失したり、調査区の関係で全容が把握できなかったものについても除外することにする。これらを除外すると、検出された竪穴住居はすべて方形あるいは長方形の平面形を呈するものであり、これらを床面上の施設などと合わせて以下に類別する。まず平面形で大別し、

Ａ類：方形を呈し竈を有さないもの　Ｂ類：方形を呈し竈を有するもの　Ｃ類：長方形を呈するもの

これに床面中央の施設によって細分し、

Ⅰ類：中央土壙を設けるもの　　Ⅱ類：中央炉を設けるもの　Ⅲ類：中央に施設を設けないもの

さらに主柱穴の本数によって細分し、

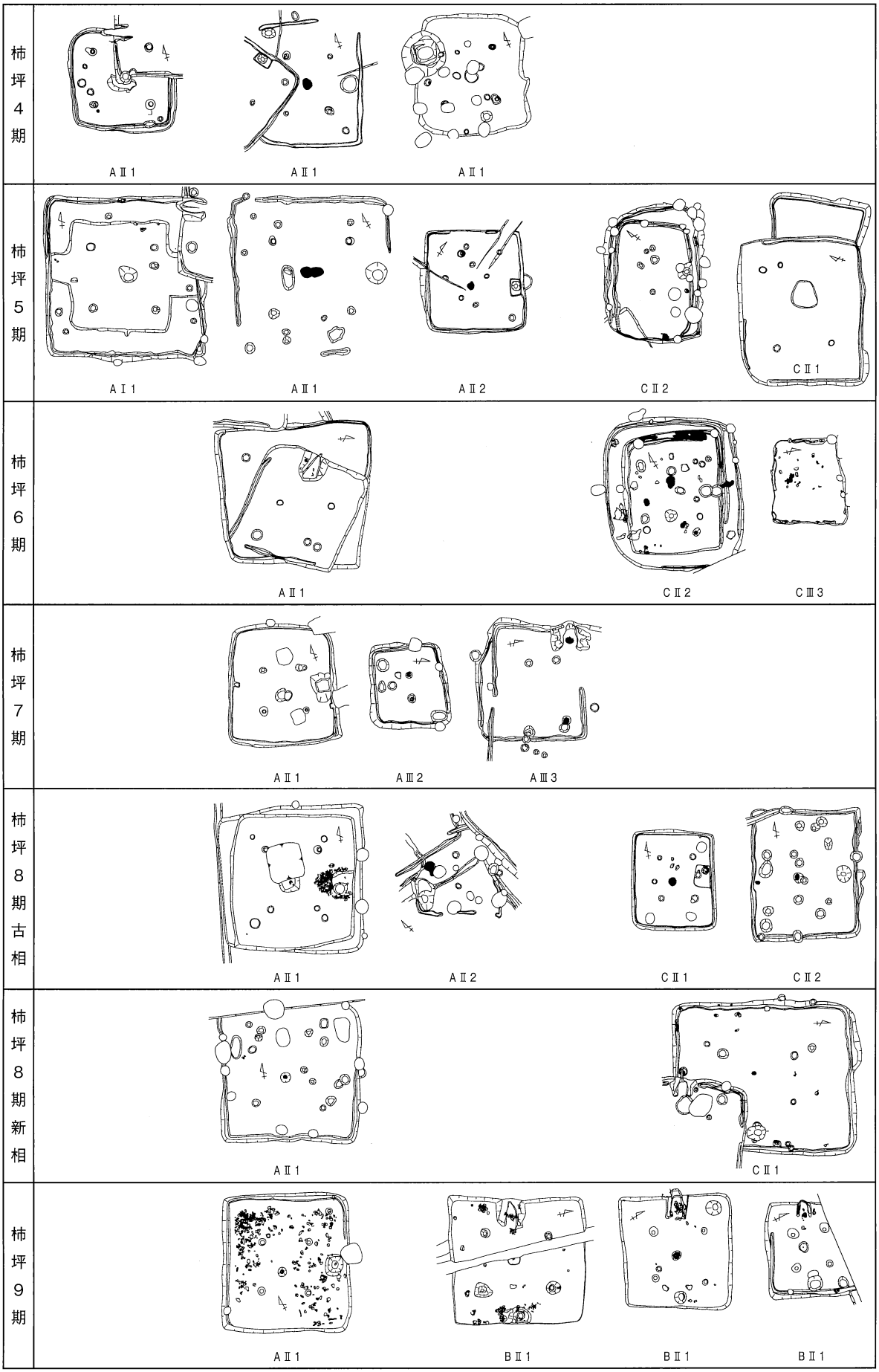
１類：主柱穴が４本のもの、４本と思われるもの　２類：主柱穴が２本のもの　３類：主柱穴がないもの

この３類別を組み合わせて、方形で中央土壙が設けられた主柱穴４本の竪穴住居はＡⅠ１類というように表現する。

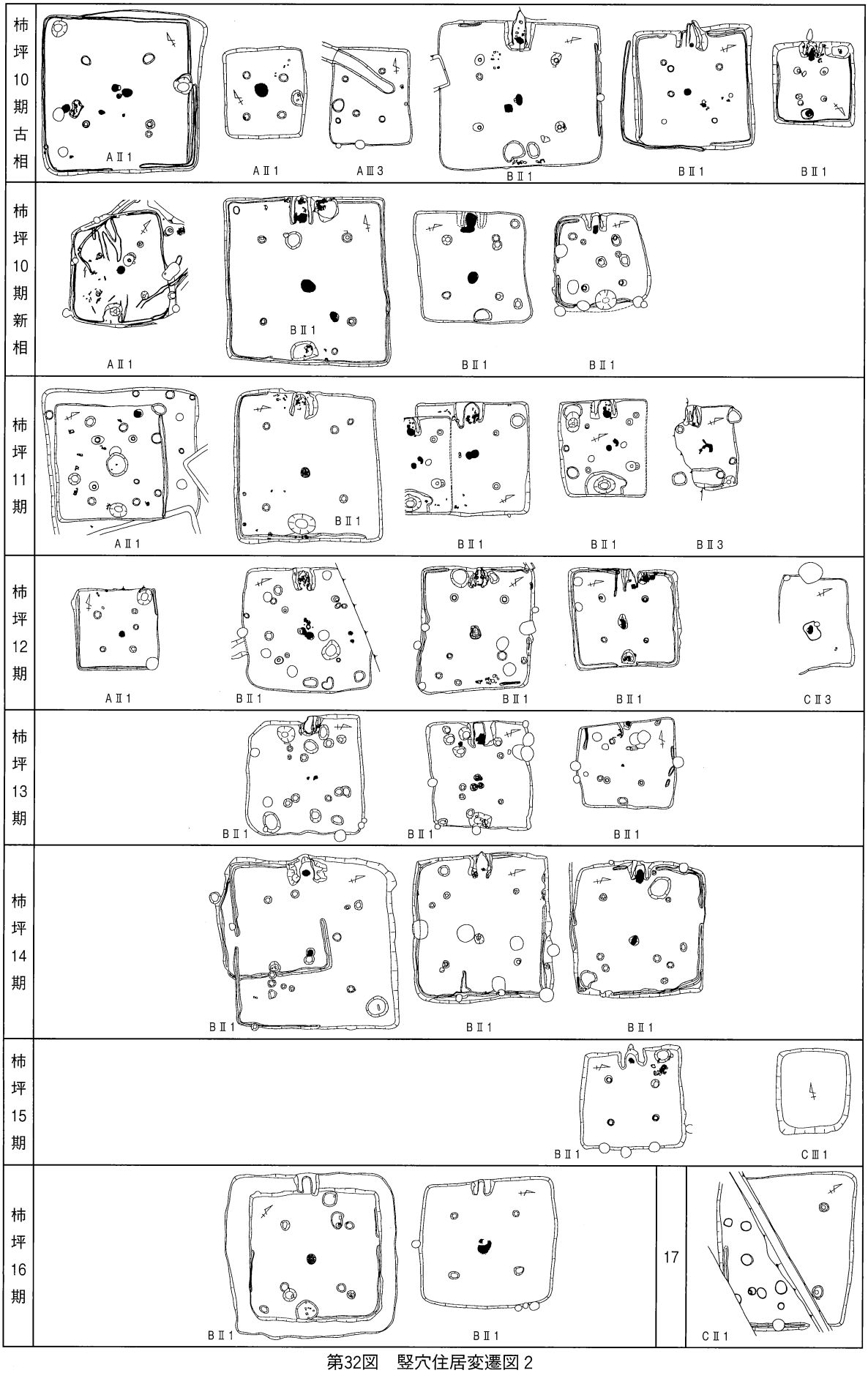
検出された120棟の竪穴住居の内、17棟は壁あるいは床面が遺存していないため類別は不可能であり、残る103棟について類別を行った。

この103棟はＡⅠ１・ＡⅡ１・ＡⅡ２・ＡⅢ１・ＡⅢ２・ＡⅢ３・ＢⅡ１・ＢⅡ３・ＣⅡ１・ＣⅡ２・ＣⅡ３・ＣⅢ２・ＣⅢ３の13種に類別され、ＡⅠ１が４棟、ＡⅡ１が17棟、ＡⅡ１の可能性が高いもの23棟、ＡⅢ１が１棟、ＡⅢ１の可能性のあるもの１棟、ＡⅢ２が１棟、ＡⅢ３が２棟、ＢⅡ１が37棟、ＢⅡ１の可能性が高いもの５棟、ＢⅡ３が１棟、ＣⅡ１が３棟、ＣⅡ１の可能性が高いもの１棟、ＣⅡ２が２棟、ＣⅡ３・ＣⅢ２・ＣⅢ３各１棟が存在している。方形で中央炉がある主柱穴４本のＡⅡ１は可能性の高いものを含める40棟あり、全体の約39％を占め、方形で竈が設けられた主柱穴４本のＢⅡ１は可能性の高いものを含めて42棟あり、全体の約41％を占めている。この両者で竪穴住居の約80％を占めており、本遺跡の竪穴住居の主流となっている。

竈が付くＢ類は43棟が存在するが、２種が認められるだけであり、それもＢⅡ１類が圧倒的であり、それ以外はＢⅡ３類１棟が存在するだけである。これは竈が付く竪穴住居は、中央炉をもち主柱穴４本とすることで定型化していることを示している。それに対し、方形で竈が付かないＡ類は中央炉をもち主柱穴４本のＡⅡ１類が主であるが、それ以外にも少数ではあるが５種が存在する。長方形のＣ類も種



第31図　竪穴住居変遷図1



第32図　竪穴住居変遷図２

別ごとの棟数は少ないが５種が存在している。このようにＡ・Ｃ類では床面や住居構造が異なるものが存在しており、それは時間的な変化と用途に応じての構造の選択によるものと思われる。以下は土器編年に基づいて時期ごとに竪穴住居の変遷をみていく。ただし、竪穴住居が検出されていない１・２期と、円形住居と思われる竪穴住居が検出されてはいるが、平面形が断定できない３期については割愛する。

２．竪穴住居類別ごとの変遷

今回検出された竪穴住居はＡⅠ１・ＡⅡ１・ＡⅡ２・ＡⅢ１・ＡⅢ２・ＡⅢ３・ＢⅡ１・ＢⅡ３・ＣⅡ１・ＣⅡ２・ＣⅡ３・ＣⅢ２・ＣⅢ３の13種に類別できることは前述したとおりであり、ここでは各類別ごとの変遷をみていくことにする。

ＡⅠ１　中央土壙が設けられた主柱穴４本の竪穴住居である。本遺跡で竪穴住居が本格的に検出される４期にはすでに存在し、５期まで継続して、その段階で終焉する。５期のSH20016では高床部が設けられており、但馬では高床部を設けた竪穴住居は５期（布留１）まで残るようである。

ＡⅡ１　中央炉を有する主柱穴４本構造の竪穴住居である。４期にはすでに半数近くが存在しており、この類の出現は３期に遡る可能性がある。竈付きのＢⅡ１類が登場する９期までの竪穴住居の主流であり、９期以後も10期新段階まではＢⅡ１と同数が存在する。11期以降は占める割合が減少するが、16期までは存在が確認できる。ＢⅡ１類が減少する16期以降に再び増加している可能性があるが、竪穴住居数そのものが少なくなり、定かではない。50㎡を超すような大規模なものから12.4㎡の極めて小規模なものまで存在している。

ＡⅡ２　中央炉を有し主柱穴２本の竪穴住居である。５期と８期古の段階にみられ、９期以降には認められない。床面積13～19㎡の小規模なものだけが存在している。

ＡⅢ１　中央炉を有しない主柱穴４本の竪穴住居である。９期に存在し、10期古段階にも可能性のあるものが存在している。この類も床面積13～15㎡の小規模なものだけである。

ＡⅢ２　中央炉を有しない主柱穴２本の竪穴住居である。７期に１棟だけ存在する。これも床面積12㎡の小規模なものである。

ＡⅢ３　中央炉を有さず主柱穴ももたない特殊な竪穴住居である。７期に１棟だけが存在する。床面積22㎡で中規模に近いものである。

ＢⅡ１　造り付けの竈を有する主柱穴４本の竪穴住居である。９期に出現して以降、竪穴住居の主流となるが、10期新段階までは竪穴住居の半数近くを占めるのに止まり、11期以降に大多数に採用されるようになる。盛行するのは15期までのようであり、16期以降は減少する傾向にある。そこには造り付けの竈から移動式竈に変化することが考えられるが、移動式竈の出現は本遺跡では17期であり、やや時間が開く。床面構造では９期から13期までは竈・中央炉・屋内土壙が床面を二分するように直線的に配置される。しかし14期以降はこうした配置を採るものはなくなる。屋内土壙は住居の隅に移動させられたか隅のものだけが残ったようである。竈の規模も14期以降小型化するものが現れ、15期以降はすべてが小型になっている。竈の支脚には９期段階には川原石を使用したものが多く、川原石の使用は11期まで残る。支脚への土師器高杯の使用は９期段階から始まり、11期段階に高杯を使用したものがほとんどとなって、13期まで継続する。しかし14期以降の竈には支脚がみられなくなる。11期・12期には竈内に支脚２本を据えるものがある。竈の焚き口に石を立てて天井石を乗せたり、焚き口の壁に石を貼っているもの

が９期から13期まで少数みられる。床面積では最大53.3㎡とし、50㎡を超えるものが３棟存在する。最小は13㎡であり、この間に大中小が存在している。

ＢⅢ３　竈を有するが、中央炉や主柱穴のないもので、11期に１棟だけが存在している。規模も11.9㎡と極めて小規模なものである。

ＣⅡ１　長方形で主柱穴４本の竪穴住居である。これにはSH30012のようにＣⅢ２類のSH30022が拡張されて変化してきたものと、SH20003やSH30017のように当初からこの類のものがあり、前者は隅丸長方形を呈し、後者は長方形であることから、別にした方がよいのかもしれない。この類は６期から８期新段階までに認められ、隅丸長方形は６期段階に、長方形は８期古と８期新に存在することから、長方形のものが後出するのであろう。８期新のSH20003は極めて特殊な竪穴住居となっている。面積的には床面積50㎡近い超大規模のSH20003や、35㎡のSH30012、小規模なSH30017がある。

ＣⅡ２　長方形で中央炉がある主柱穴２本構造の竪穴住居である。ここでも隅丸長方形と完全な長方形が存在するＣⅡ１類と同様、隅丸長方形のものは６期、長方形のものは８期古段階に出現している。

ＣⅡ３　長方形で中央炉はあるが主柱穴のない竪穴住居である。６期と12期の極めて小規模なものにみられる。

ＣⅢ２　長方形で中央炉がない主柱穴２本の竪穴住居である。１棟だけが存在するが、SH20023は拡張後も同じ構造を採っている。５期にのみ存在している。

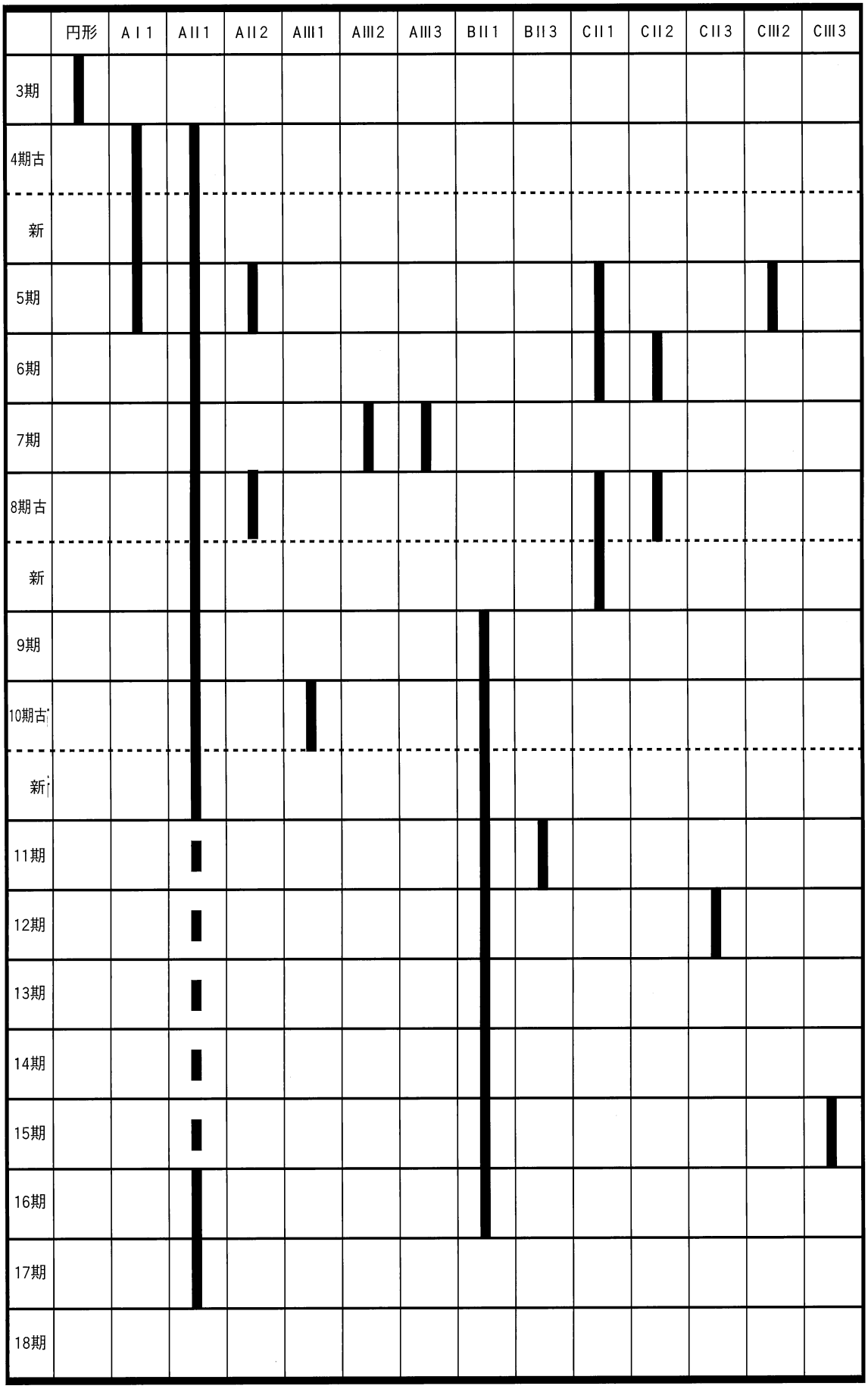
ＣⅢ３　長方形で中央炉も主柱穴もない竪穴住居である。15期に１棟だけが存在する。構造が何もなく、いわば土壙状のものである。床面積は12㎡であり。極めて小規模な竪穴住居と変わりない。

以上が時期別と各類型別の竪穴住居の変遷である。本遺跡の竪穴住居の構造的変遷では３期の画期が認められる。第１は４・５期で確認された弥生時代的な竪穴住居構造から古墳時代的な住居構造への変化である。中央土壙をもつＡＩ１類構造と床面に高床部を設けるという構造の廃棄である。

第２は9期に起こるＢⅡ１類の登場である。その前兆は８期新に現れ、大陸文化の影響を受けた土師器甑や角杯を持ち、長方形の大型竪穴住居SH20003に現れている。８期新までみられた主柱穴２本のＡⅡ２類や長方形のＣ類は９期にはみられなくなる。ＢⅡ１類の導入後、10期段階はＡⅡ１類と半数ずつが存在しているが、11期にはほぼ完全にＢⅡ１類に転換されている。ＢⅡ１類も当初は竈・中央炉・屋内土壙が床面を二分するよう直線的な配置をとるが、14期以降はその配置から屋内土壙が外されている。

第３は16・17期にみられるＢⅡ１類の放棄である。ただし、これについては本遺跡では竪穴住居が少なくなり、また全容が窺えるものも少なくなるため、はっきりと言えない点もあるが、16期ではＢⅡ１類がまだ存続するが、ＡⅡ１類が再び営まれ始め、17期には竈をもたない主柱穴もはっきりしないＡⅢ類が現れる。SH40007では移動式竈が出土しており、この段階に造り付けの竈は放棄されたものと思われる。その背景には竪穴住居を主とした居住形態から掘立柱建物への転換が起こったことにあるものと考えられる。16・17期の竪穴住居は竪穴住居3・４群とした遺跡でも西方に固まり、竪穴住居１群では全く認められず、竪穴住居２群でも１棟が存在するのみとなって、竪穴住居１群の存在した場所には掘立柱建物のＢ１群が、竪穴住居２群の存在した場所にも掘立柱建物群が存在する。これらの掘立柱建物の登場は居住形態が竪穴住居から掘立柱建物へ変化したことを現し、竪穴住居が主たる居住形態でなくなったことがＢⅡ１類の放棄という形で現れたものと考えられる。

表５　竪穴住居類型別変遷表



第４節　掘立柱建物の検討

１．掘立柱建物の類型

掘立柱建物は35棟が検出されており、棟方位からＡ・Ｂ群に大きく分けられることは先述した通りである。ここでは建物を柱配置から以下に分類し、Ａ・Ｂ群の構成をみてみる。

Ⅰ．棟持柱を有し、身舎の四周に庇状の柱穴列を配した建物

Ⅱ．近接棟持柱を有する側柱建物

Ⅲ．屋内棟持柱を有する側柱建物

Ⅳ．側柱建物

Ⅴ．屋内棟持柱を有する総柱建物

Ⅵ．総柱建物

Ⅶ．１間×１間の建物

の７類がある。

Ⅰ類はSB20005・SB20016・SB20019が該当し、建物の南端だけが検出されているSB20021もこの類に含まれるものと思われる。身舎周りに庇あるいは縁となる施設を設けることで大規模な建物としたもので、規模の判明するSB20005は201㎡を測る。SB20019は北面と西面の庇状柱穴列の外側にさらに柱穴列が配されており、この最も外側の柱穴列の見方で面積が変わるが、建物の付属施設とすれば建物規模は110㎡であり、柵等として建物規模から除外すると、建物面積は85.5㎡となる。SB20016は北半分が調査区外となっているが、検出された部分から推測すれば、身舎四周の柱穴列までを建物とした場合は133㎡、さらに南側の柱列までを建物とした場合は162㎡となる。このようにこの類の柱配置を採る建物は85～201㎡の規模であり、大型の掘立柱建物が採る柱配置である。しかしこのような柱配置を採る大型建物も平面形や柱配置方法等に違いがみられ、また各地で検出されている四周に庇状の柱を配置した大型建物との比較においても、本遺跡で検出された大型建物が極めて特徴的なものであることから、これら大型建物の検討は後述する。この柱配置を採る大型建物はＡ群にだけにみられる。

Ⅱ類はSB40001・SB40002が該当し、建物面積が11～13㎡の小規模な建物にみられる柱配置であり、Ｂ群だけにみられる。

Ⅲ類は中柱２本式の屋内棟持柱の側柱建物で、SB20008・SB20012が該当する。SB20008は棟持柱間が4.3ｍと長く、桁行と棟持柱間は約310㎝、妻と棟持柱間が約127㎝であることから、比率は0.41となり、入母屋屋根の構造になる。SB20012は棟持柱間が2.0ｍと短く、棟持柱と桁行側面間が約2.9ｍ、棟持柱と妻間が2.1ｍであることから、その比率は0.72となり、屋根構造は寄棟造となる。面積的にはSB20008が44㎡、SB20012が36㎡であり、この柱配置は中規模の掘立柱建物に採用されている。Ａ群だけにみられる。

Ⅳ類は側柱建物として一つにしているが、この中には桁行と梁行の長さがほぼ等しく正方形を指向したａ類、梁行を２～３間とし、桁行がそれほど伸びないｂ類、梁行３間とし桁行が伸びたｃ類の３種が存在している。ａ類はＢ群の中に存在し、SB20001・SB20020・SB30007・SB30010が該当する。規模には大小が存在し、小規模な建物にはSB20020・SB30007が該当し、面積６～７㎡と極めて小規模であり、竪穴住居の小規模なものより、さらに小規模なものになっている。Ⅶ類とした平地式住居、あるいは梁

間・桁行とも２間の総柱建物と同様の機能を有する建物である可能性が高い。

規模の大きな建物にはSB20001・SB30010が該当し、床面積はSB20001が36.6㎡、SB30010が38.4㎡であり、Ⅲ類とほぼ同規模となっている。建物を正方形に指向することは弥生時代後期に始まり、県下では神戸市郡家遺跡や加都遺跡等の古墳時代の集落で検出されている。郡家遺跡は広大な遺跡であり、遺跡の実体把握が困難であるが、建物は子持勾玉を出土した流路の側で検出されている。加都遺跡では布留式の範疇に入る時期の竪穴住居群の中央で検出されている。

ｂ類はSB20006・SB20007・SB20010・SB20013・SB30001・SB30002・SB30004が該当し、SB20010がＡ群に、その他はＢ群に属する。建物規模は極めて小型で、床面積は６～15㎡であり、竪穴住居の中でも小規模なものと同程度となっている。

ｃ類はSB20018の１棟が該当し、Ａ群に属し、SB20010とＬ字形の配置を採っている。梁行・桁行とも３間であるが、方形は指向せず平面は長方形であり、竪穴住居の中規模と同程度である。

Ⅴ類は屋内棟持柱を有する総柱の建物で、Ａ群に属する。Ⅲ類と同様に棟持柱と妻・桁との位置関係の比率は0.37であり、屋根構造は入母屋造りとなる。床面積は31.2㎡であり、Ⅲ類と比較すると規模は小さくなっているが、総柱建物の中では最大規模である。屋内棟持柱を有する古墳時代の総柱建物は正方形に近い平面形を呈し、大阪府法円坂遺跡・大阪府蛍池東遺跡の大型で高床式建物にみられるが、SB20022に高床を想定するのは無理であり、平屋式の総柱建物に屋内棟持柱を有する稀な例である。

Ⅵ類は総柱建物であり、SB20002・SB20004・SB20009・SB20014・SB30003・SB30005・SB30006・SB30009が該当する。方位的にはSB20014とSB30003はＡ群に近い方位を採り、その他はＢ群に属する。規模的には大小が存在し、SB30009は大部分が調査区外となっているが、一辺5.1ｍであり、総柱建物の中では規模が大きくなることが推定される。その他は床面積が4.4～8.7㎡という小規模なものである。

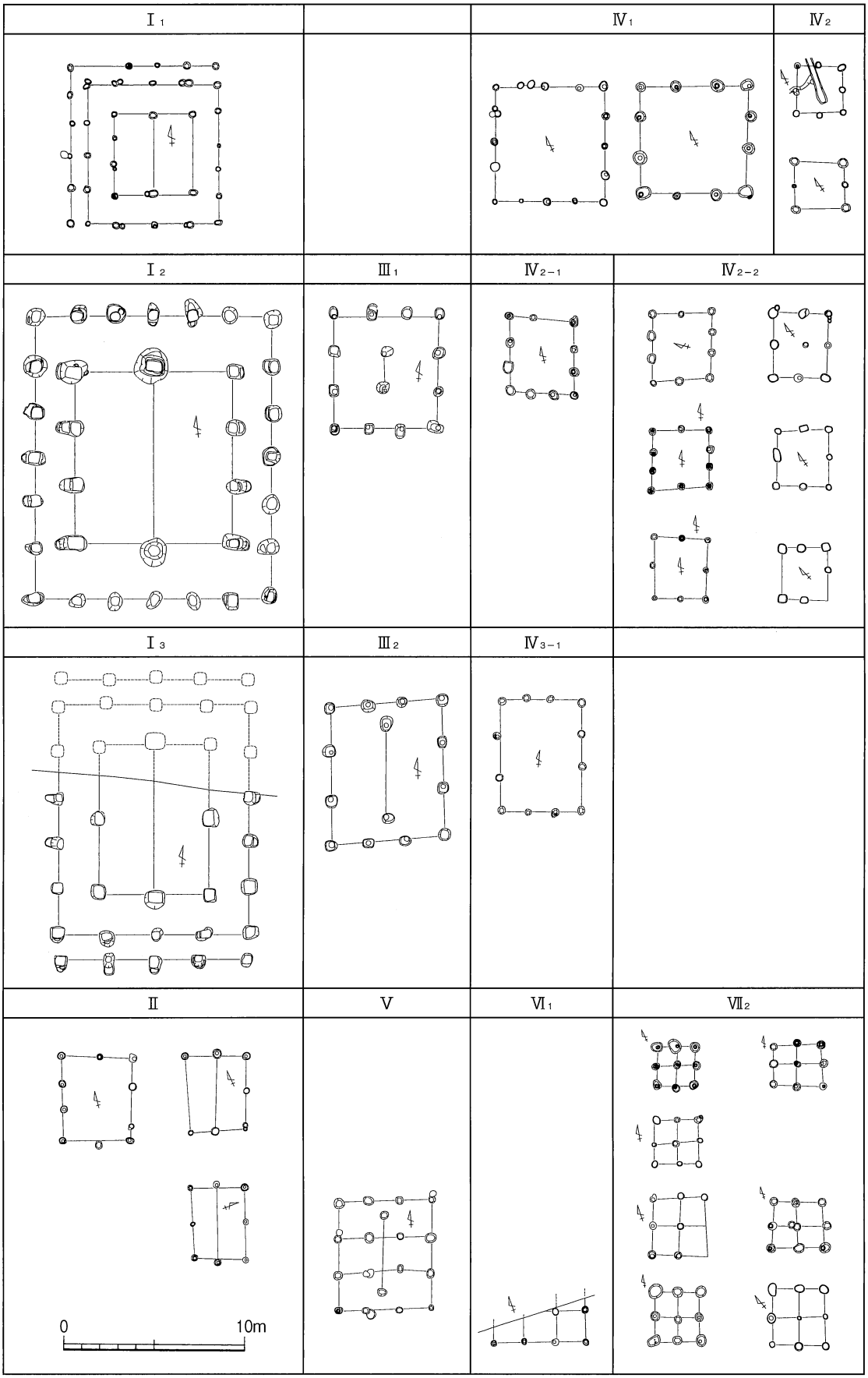
Ⅶ類はSB20017が該当し、方位的にはＢ群に属する。桁行・梁行とも１間であり、床面積も7.3㎡の小規模なものであるが、規模的にはⅣａ類の小規模なものやⅣｂ類・Ⅵ類の小規模の部類に相当する。

３．掘立柱建物群の構成

床面積が200㎡を越す錣入母屋造りのような大型掘立柱建物４棟を含む35棟の掘立柱建物が平面形や柱配置から７類10種の存在を確認した。また、時期決定の際にはこれらの掘立柱建物が棟方位から大きく二大別でき、棟方位を南北近い方向とするものをＡ群、東に振ったものをＢ群とし、それぞれを３群に細別し、掘立柱建物全体を６群に分けた。そしてここではその６群の建物構成を検討する。

Ａ群の構成

SD10001ＡとSD30001の間に存在する群で、棟方位はSB20010だけが東西方向とするが、その他はほぼ南北方向とする。群中には大規模な錣入母屋造り大型掘立柱建物４棟、中規模の屋内棟持柱を有する寄棟造り平屋建物１棟、屋内棟持柱の入母屋造り平屋建物１棟、屋内棟持柱の総柱建物１棟等、小規模な平屋建物４棟が存在し、規模の点でも、建築様式の点でも多様であり、SA20001とともに首長居館の一画を構成すると考えられる建物群である。時期的な検討の結果、ほぼ９期から10期古段階に位置づけられることが判明している。



第33図　掘立柱建物類型図

Ａ１群　棟方位を北からやや西に振った群であり、Ⅰ類のSB20016、Ⅲ類のSB20012、Ⅳｂ類のSB20010、Ⅳｃ類のSB20018の４棟で構成される。SB20016は錣入母屋造りの建物の南面に孫庇を付設した建物で、床面積は最小133㎡～最大172㎡の大型掘立柱建物である。規模的にはSB20005に次ぐ規模であり、この群の中心となる建物である。棟持柱に断面が長方形の「五平」と呼ばれる柱を使用するなど特徴のある建物である。SB20012は中規模で屋内棟持柱の寄棟造り平屋建物である。SB20010・SB20018は小規模な平屋建物であり、２棟でＬ字形の配置をなっている。SB20010とSB20018がSB20016やSB20012のような大型・中型の建物と同時存在するかは疑問の点もあるが、同方位を採りSB20012との間隔は20ｍしか空いていないことや、SB20018の北妻がSB20012の南妻とほぼ揃っていることなどから、ほぼ同時に存在したものとしている。東はSD10001Ａが区画するとしても，西側にはこの方向性をとる柵列等は見出せず、西側区画施設についは不明と言わざるをえない。

Ａ２群　棟方位をほぼ南北とする群で、SA20001とSD10001Ａによる区画を伴う可能性がある。区画内部にはⅠ類のSB20019、Ⅲ類のSB20008、Ⅳb類のSB20007・SB20013、Ⅴ類のSB20022の５棟で構成され、極めて大型の建物は存在しないが、SB20019を中心とした建物配置がみられる。SB20019は錣入母屋造り屋根構造であり、床面積が最小85.5～最大110㎡の建物で、検出された大型掘立柱建物の中では最も規模は小さい。しかし平面形は正方形に近く、各地で検出され祭儀用とされる大型掘立柱建物と共通している。ただ、柱穴規模が小さく高床とは考えにくく、平屋建物と判断される。SB20008は中規模であるが、入母屋造り屋根構造の平屋建物である。Ⅴ類のSB20022は入母屋造りの屋根構造を採る総柱建物であり、総柱建物の中では最も規模の大きなものである。SB20008と西桁を通す形で北側に配置されており、入母屋屋根の建物２棟が並んで存在している。また、SB20019のほぼ真西にあたる。この他、群中には小規模なⅣ類の建物２棟が含まれている。２棟は上部構造で切りあうことは確実であり、１時期には１棟だけが存在することになる。この小規模な建物が大型・中形の掘立柱建物と同時存在することに疑問もあるが、SB20019とSB20008のほぼ中間に配置され、SB20019の身舎南妻とSB20007の北妻が揃うような配置になっていること、SB20013はSB20008の真東に当たるような位置になっていることなどから、同時に存在した可能性は排除できない。

このようにこの群は錣入母屋造り建物を中心に、入母屋造り平屋建物、入母屋造り総柱建物、小規模な平屋建物１棟で構成された群であるが、極めて大規模建物は存在しない。これらの建物と同方位をとる柵列がSB20008・SB20022の西側に存在し、西側は区画されていた可能性が高い。東側についてはSD10001Ａが存在し、これが東端を区画していた可能性が高いが、周辺はかなり削平を受けた地区であり、これ以外にも区画施設として柵が設けられていた可能性が考えられる。小規模な平屋建物もこの群に伴うものとすればＡ１群より後出する群となる。

Ａ３群　棟方位をやや東に振った群であり、Ⅰ類のSB20005・SB20021で構成される。棟方位をほぼ同じくするものには他にⅥ類のSB20014とSB3003が存在するが、SB30003はSD30001を越えた西側に存在することや、SB20014が10期新段階の竪穴住居を切っており、SB20005等と同時存在は考えられないこと等から、この２棟は群中には含めない。SB20005は検出された掘立柱建物の中では最大規模であり、床面積201㎡の錣入母屋造り大型掘立柱建物である。SB20021は南端のみの検出であるため、全容ははっきりしないが、これも錣入母屋造りの建物になると判断している。SB20021の身舎南面の庇は12.7ｍの長さがある。SB20005の東西方向に近い数字であり、この建物も200㎡に近い中海道型の大規模な建物になるものと思われ、この群は錣入母屋造りの大型掘立柱建物２棟で構成された群となる。SB20005の向きは

わからないが、SB20021はSB20005の前面北側もしくは前面西側にあたるような位置に配置されている。Ａ１群とは棟方位に10°近い違いがあり時間的な差が考えられる。Ａ２群とも３°の違いではあるが棟方位が異なることから、時期的に異なるものと思われるが、Ａ１・Ａ２群との前後関係は不明と言わざるをえない。反面Ａ２群とは僅か３°の差であり、切り合いもないことからすれば、同時存在もあるのかもしれない。

Ｂ群の構成

Ａ群でみられたような大型掘立柱建物は含まれず、中型・小型の建物群で構成される。時期的には16～17期とし、一部15期に遡る可能性があるものが含まれる。

Ｂ１群　Ⅳ類の小規模な平屋建物であるSB20006・SB30008が該当する。いずれも単独で存在する形となっているが、SB20006は、方位はＡ２・Ａ３群であるが小規模な建物であるSB20007・SB20013・SB20014とセットとなり、一時期に平屋建物２棟と総柱建物１棟が構成する群を形成する可能性が高い。SB30008もまたＢ２群のSB30006・SB30010とセットで存在していた可能性が高い。

Ｂ２群　Ⅳ類とⅥ類の15棟で構成され、位置関係から、①Ⅱ区東半の群、②SD30001東岸の群、③SD30001西岸の群、④Ⅳ区東半の群に分けられる。

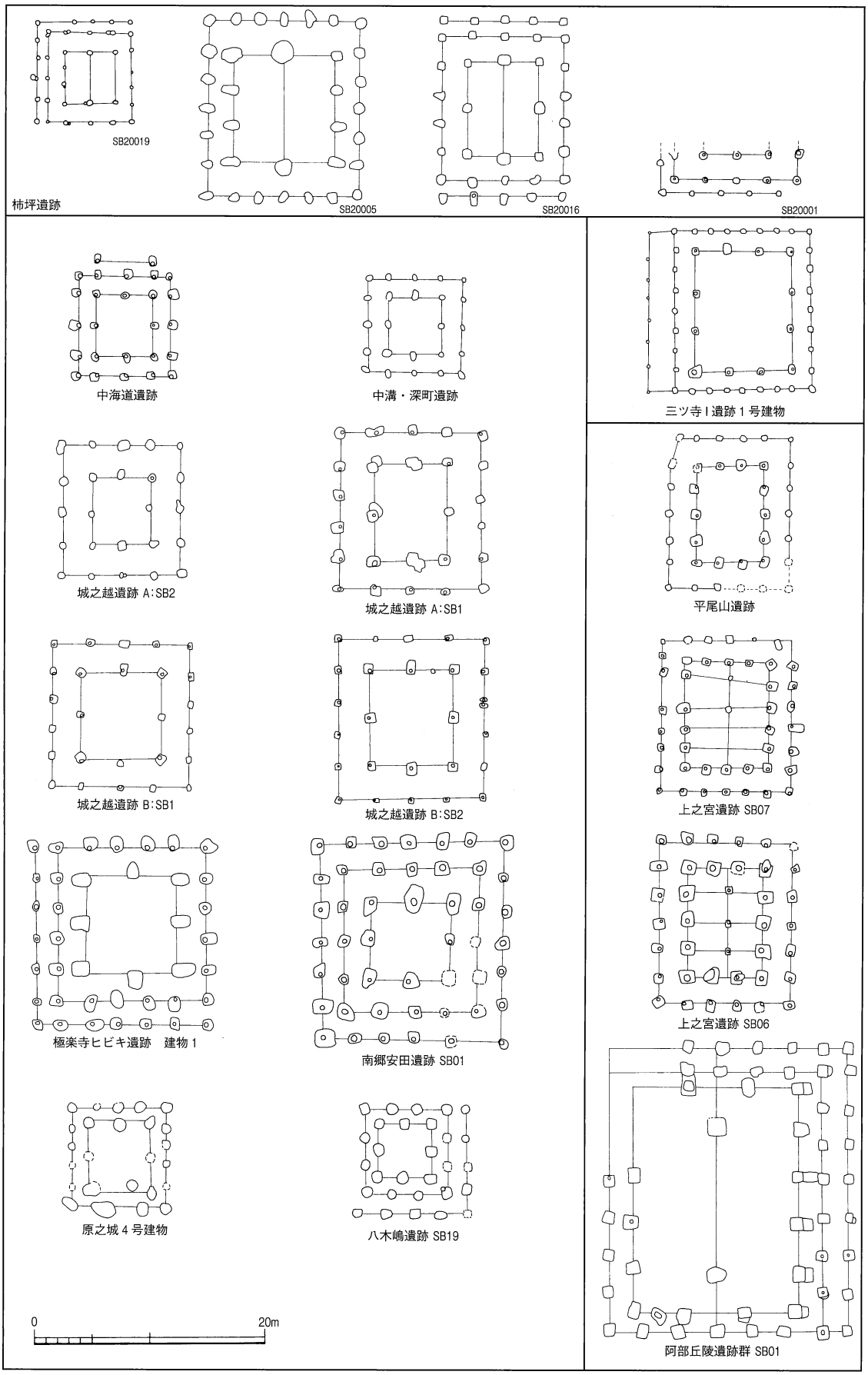
①の群はⅣａ類のSB20001・SB20003・SB20020とⅥ類のSB20002・SB20004の５棟で構成される。SB20001は中規模の正方形に近い平面形の平屋建物であり、南半は検出されていないがSB20003も同様の建物である可能性が高い。SB20002・SB20004は床面積4.4㎡・6.5㎡の小規模な総柱建物である。SB20020は面積が7.3㎡と小規模であり、Ⅵ類の床面積に近い小規模な建物である。中央に柱穴をもたないことからⅣ類としたがⅥ類の総柱建物になるか、あるいは柱配置上ではⅣ類の建物であるが、機能的にはⅥ類と同様の建物である可能性が高い。このようにこの群はⅣ類の中規模な平屋建物２棟、Ⅵ類の総柱建物２棟、Ⅵ類と同様の機能をもつであろうⅣ類の建物で構成される。Ⅳ類の平屋建物２棟は調査区南半に並び、その北側に小型の総柱建物２棟が配置される。小型のⅣ類の建物だけがやや離れて配置されているが、これらの５棟の建物で、中規模の平屋建物を中心とした居宅を構成している可能性が高い。

②の群はⅤ類と思われるSB20011とⅥ類のSB20009、Ⅶ類のSB20017の3棟で構成される。SB20011については、西半が検出できていないため不明な部分があり、南北５間もの規模の建物はＢ群には存在していないことから、南北２間の２棟に分割できる可能性もある。その場合、この群は小規模なⅤ類の建物２棟と小規模な総柱建物、平地式住居かと思われるⅦ類で構成された群となる。

③の群はⅡ類のSB30008、Ⅳ類のSB30010、Ⅵ類のSB30006の３棟で構成される。近接棟持柱をもつⅡ類のSB30008は南妻中央の棟持柱だけがはみ出す構造である。中規模の平屋建物と小規模な平屋建物、小規模な総柱建物がセットで存在しており、これらは小規模な居宅を形成している可能性が高い。

④の群はⅡ類のSB40001・SB40002で構成され、Ｌ字形配置となっている。面積的には11.3㎡と13.3㎡のであり、小規模な平屋建物と思われる。この群には他群でみられた総柱建物は存在しない。２棟は竪穴住居群の中央に位置しており、竪穴住居群との同時存在が考えられる。

Ｂ３群　Ⅳａ類のSB30007、Ⅳｂ類のSB30001・SD30001・SB30004、Ⅵ類のSB30005の５棟で構成される群である。SD30001の西岸南半に存在する群で、SB30001とSB30002、SB30004とSB30005はほぼ並ぶように配置されている。平面形ではⅣ類とⅥ類の間に差はなく、面積的にもⅣ類が6.3～10.4㎡、Ⅵ類のSB30005も8.7㎡であり、Ⅳ類の中に納まっている。このことからすれば、Ⅳ類もⅥ類も同じ用途であり、



第34図　四面庇状施設付大型建物

この群は小規模な倉庫からなる倉庫群を形成している可能性が高い。

35棟の掘立柱建物を棟方位からＡ・Ｂ群に分け、それらをさらに３群に細分して、それぞれの群を構成する掘立柱建物について検討したが、Ａ群とＢ群とでは構成する建物が大きく異なることが判明した。Ａ群は９期から10期古段階に存在し、３群ともが四周に庇状の柱穴群を配した大型掘立柱建物を中心として構成され、Ａ１群・Ａ２群では寄棟造りや入母屋造りの平屋建物・総柱建物が配置されている。Ａ３群では大型掘立柱建物２棟が配置されている。明確な濠等による区画が伴わない群も存在するが、これらは首長居館の一画とみられる建物群である。Ｂ群は早いものは15期に出現した可能性もあるが、16期から17期を中心とし、５群が存在するが、それぞれが小規模な建物で構成され、居宅あるいは小単位を表しているものと思われる。ただ小規模とはいえ倉庫群が形成されていることは興味深い。

２．大型掘立柱建物の検討

大型建物といっても明確な基準はなく、その捉え方は多種多様である。本遺跡で幸いにも検出された35棟の掘立柱建物の中から、規模・構造の点で、極めて傑出した大型掘立柱建物をみいだすのは容易であり、Ｉ類としたSB20005・SB20016・SB20019・SB20019の４棟が大型掘立柱建物として抽出される。これらの４棟は身舎の四周に庇状の柱穴列を配してする点で共通しており、身舎の柱穴群をＡ群、身舎外側の四周に配された柱穴群をＢ群、Ｂ群と平行してさらに外側に配された柱穴群をＣ群と呼称する。

現在、古墳時代において、Ａ・Ｂ群あるいはＡ・Ｂ・Ｃ群の柱列で構成される掘立柱建物は第34図のように15例が知られており、桁行２間、梁行２間の身舎にＢ・Ｃ群の柱列を配置し、正方形を強く指向する「中海道型」、梁行３間以上の身舎にＢ・Ｃ群を配置した律令期以降の宮殿型式の祖形となるタイプ（上之宮型）、三ツ寺Ｉ遺跡の1号建物に代表される身舎に下屋がつくタイプ（三ツ寺型）の３型式が存在している。本遺跡の４棟の特徴を列挙し、これらの類型との比較を試みていく。

SB20005　この建物の特徴は、①身舎は近接棟持柱付きの３×２間であり、身舎の柱穴は長楕円形である。②身舎は桁行9.45m、梁行8.7m、面積82.2㎡の規模を有し、身舎の桁行と梁行の比率は1,18となっている。③Ｂ群とＡ群の間隔は南北面が広く、東西面が狭くなっており、全体として正方形を指向していない。④Ｂ群の南北面の柱筋は中央が外にはみ出した形で配置され、隅柱を結ぶ線は中央の柱の内側になるように配置されている。これらの４点がSB20005のもつ大きな特徴として挙げられる。

まず①であるが、近接棟持柱の身舎にＢ・Ｃ群の柱を配置する例は群馬県中溝・深町遺跡、三重県城之越遺跡のＡSB-１・ＡSB-２・ＢSB-１・ＢSB-２、奈良県南郷安田遺跡SB01の６棟がある他、妻中央の柱は妻通りに揃うが直接棟を支える棟持柱とされる例が、京都府中海道遺跡SB32110、奈良県極楽寺ヒビキ遺跡建物1の２例がある。これらの建物に共通するのは身舎を２×２間とし、その周囲にＢ群あるいはＣ群の柱を配置する点であり、梅本はこうした柱配置の建物を中海道類型としている。

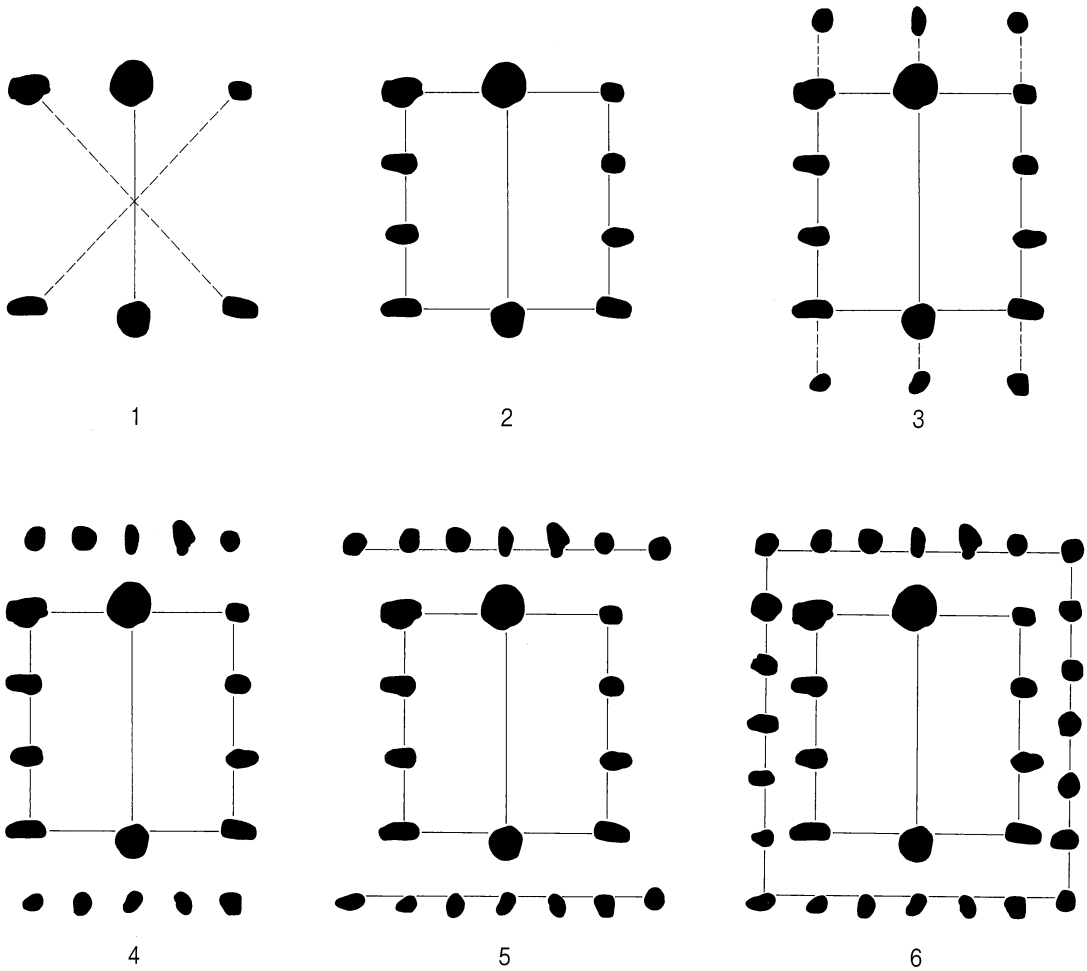
SB20005が身舎を近接棟持柱とする点では中海道類型と共通するが、身舎は３×２間とする点が異なっている。表６のように、中海道類型でみると身舎規模は最大でも極楽寺ヒビキ遺跡の68㎡であるのに対し、SB20005の身舎規模は80㎡を超えており、身舎規模だけでみれば中海道類型を越え、三ツ寺Ｉ遺跡の身舎と同規模としている。このように身舎を３×２間とすることや身舎規模には中海道型にない特徴を持っている。しかし、身舎の平面形を桁行と梁行の比率でみてみれば、SB20005の比率は1.09であり、中海道類型の比率は1.00～1.35となっており、SB20005はその範囲に納まっている。したがって身舎だ

表６　古墳時代四面庇状施設付掘立柱建物一覧表

			総規模				身舎				A-B 間				B-C 間					
			桁行×梁行		面積	比率	桁行×梁行		面積	比率									時期	備考
			間数	規模（m）		桁／妻	間数	規模（m）		桁／梁	東	西	南	北	東	西	南	北		
柿坪遺跡	SB20005	Ⅰ	6×6	15.4×13.1	201.7	1.18	3×2	9.45×8.7	82.2	1.09	2.18	2.18	3.05	3.05						
柿坪遺跡	SB20016	Ⅰ	5？×4	15.2×10.6	161.1	1.43	2×2	8.4×6.0	50.4	1.40	2.10	2.10	2.10	2.10?			1.30			最小133.6㎡（1.19）
柿坪遺跡	SB20019	Ⅰ	4×4？	11.0×10	110.0	1.10	3×2	5.7×5.4	30.8	1.06	1.75	1.75	1.60	1.60		1.10		1.00		最小85.5㎡
柿坪遺跡	SB20021	Ⅰ？	？×4	？×10.7	？		？×2	？×5.8	？		2.56	2.56	2.32			1.12		1.12?		
中海道遺跡	SB32210	Ⅰ	4×4	8.6×7.7	66.2	1.12	2×2	5.3×5.0	26.5	1.06	1.50	1.45	1.70	1.60					4Ｃ前半	
中溝・深町遺跡		Ⅰ	4×4	8×8	64.0	1.00	2×2	4.8×4.5	21.6	1.07	1.85	1.75	1.50	1.55					4Ｃ後半	
城之越遺跡	Ａ：ＳＢ１	Ⅰ	5×4	13.6×12.0	163.2	1.13	2×2	8.4×6.2	52.1	1.35	2.50	2.40	2.40	2.35					5Ｃ	
城之越遺跡	Ａ：ＳＢ２	Ⅰ	4×4	11.3×10.3	116.4	1.10	2×2	5.8×5.0	29.0	1.16	2.70	2.75	2.65	2.65					5Ｃ	
城之越遺跡	Ｂ：ＳＢ１	Ⅰ	5×4	12.5×11.6	145.0	1.08	2×2	7.5×6.8	51.0	1.10	2.75	2.80	2.50	2.60					5Ｃ	
城之越遺跡	Ｂ：ＳＢ２	Ⅰ	5×4	13.7×12.5	171.2	1.10	2×2	8.2×7.1	58.2	1.15	2.70	2.70	2.50	2.75					5Ｃ	
南郷安田遺跡	ＳＢ０１	Ⅰ	6×6	17.0×15.5	263.5	1.10	2×2	7.0×7.0	49.0	1.00	2.50	2.30	2.10	2.20	2.20	2.20	2.20	2.20	5Ｃ	
極楽寺ヒビキ遺跡	建物１	Ⅰ	6×6	15.5×14.5	224.7	1.07	2×2	8.5×8.0	68.0	1.06	2.50	2.40	2.40	2.40	1.92		1.92		5Ｃ	168.8㎡で復元案
原之城		Ⅰ	5×4	8.4×8.1	68.0	1.04	2×2	6.1×5.4	32.9	1.13	1.20	1.00	1.4～1.2						6Ｃ後半	
八木鳴遺跡	SB19	Ⅰ	4×4	7.3×7.0	51.1	1.04	2×2	4.7×4.7	22.1	1.00	1.40	1.50	1.40	1.25	1.60		1.60		6Ｃ末～7C初	
上之宮遺跡	ＳＢ０６	Ⅱ	6×5	13.6×11.4	155.0	1.19	4×3	9.35×6.5	60.8	1.44	2.35	2.50	2.20	2.20					6Ｃ後半～末	
上之宮遺跡	ＳＢ０７	Ⅱ	7×6	12.9×11.1	143.2	1.16	5×4	9.1×7.1	64.6	1.28	1.95	1.95	1.95	2.00					6Ｃ末～7C初	
阿部丘陵遺跡群中山地区	ＳＢ０１	Ⅱ	8×7	22.5×18.5	416.3	1.22	5×3	19.0×14.0	266.0	1.36	1.30	1.65	2.00	2.00	2.10		2.25		6Ｃ末～7C初	
平尾山遺跡		Ⅱ	6×5	12.93×10.44	135.0	1.24	4×3	8.35×5.88	49.1	1.42	2.30	2.30	2.30	2.30					6Ｃ末～7C初	
三ヶ寺Ⅰ遺跡	1号	Ⅲ	8×9	13.53×13.98	189.20	0.98	3×3	10.0×8.2	82.0	1.22	1.65	1.70	1.55	1.70		2.35			5Ｃ後半	

けに限れば、３×２間とする点や規模に相違点はあるが、近接棟持柱とすることや身舎比率の点で中海道類型と共通していると言えるであろう。

しかし、中海道型では強く正方形を指向するとされるのに対し、SB20005にはそうした指向がみられない。中海道類型では身舎Ａ群の柱穴列とＢ群の柱穴列の間隔は四面ともほぼ同じとするか最大でも中溝深町の30cmであるのに対し、SB20005は妻と並行する側の南北面を広く伸ばしており、間隔は３ｍを超えている。桁と並行する側の東西面とでは１ｍ弱の差をつけている。正方形を指向するなら桁と並行する東西面を広げ、妻と並行する南北面は狭く抑えるはずであるが、その逆となることを行っており、そのため、建物全の桁行と妻の比率は1.18となって、中海道型の1.0～1.13を超えて、上之宮型とほぼ同じ比率となっている。そこに正方形を指向するといったものはみられないといえる。古墳時代の身舎



第35図　SB20005柱配置方法想定図

にＢ・Ｃ群を配置した建物では阿部丘陵遺跡中山地区SB01が妻側と桁側で身舎とＢ群の間隔を大きく変えている面も見られるが、桁と並行する側を広く、妻と並行する側を狭くしている。このようにSB20005の身舎とＢ群の間隔は古墳時代の身舎にＢ群を配置する建物にはみられない特徴をもっている。

④の特徴は柱配置方法の特徴であり、Ｂ群の柱穴列の建物構造にも関わる特徴である。この建物におけるＢ群の柱配置方法を第35図のように推定している。まず、身舎の棟・桁の柱穴列を、桁行の柱間と同間隔に延長して南北面に２間を造る。その２間を等分して４間とする。この４間の柱列の内側に合わせて、梁行柱間の1/2の間隔で外に広げ、Ｂ群の隅柱位置を決定する。これにより東西面の長さを決め、その間を６等分することで東西面ができあがっている。

Ｂ群の隅柱を決定する際に、南北面中央４本の柱列の内側に合わせているため、この４本の柱は柱分だけが外にはみ出す形となる。黒田氏は極楽寺ヒビキ遺跡の大型建物の復元で、「床より上に伸びる柱と柱の間に床を張る場合、平安時代以前は柱に添えて立てた束で床を支えるのが一般的であり」とされており、SB20005の南北面中央４本の柱のはみ出しはこれに符合し、添束をたてるための工夫のように思われる。東西面の柱内側正面に添束を立てて隅柱まで通し、南北面にも添束を立てて通す場合、南北面の柱列が通っていると、柱筋が邪魔となって添束を立てることができないため、中央４本を外側にずらして配置したと考えると、極めて合理的に柱位置のずれが解釈できる。仮にＡ・Ｂ群間に床があったとしても、添束は柱を床より高く上げる場合に立てられるとのことであり、Ｂ群の柱は床より高く上げられ、Ａ群とＢ群の柱穴の深さがそれほど変わらないことから、Ｂ群は庇の可能性が高いといえる。

こうしたことから、SB20005は身舎が近接棟持柱の切妻屋根で、四面に庇を付設した錣入母屋造りとなり、可能性として建物全体に床が張られたことも考えられる。しかし、この南北面中央の柱をはみださせる特徴はSB20016やSB20019にもみられる特徴であり、SB20019が床を張られた建物と考えにくいことから、床の存在についての断定はできない。

SB20016　この建物は北半分が調査区外となって検出できていないが、南半部分からある程度が推定でき、第14図のような建物を想定している。その図に基づくこの建物の特徴は、①身舎は近接棟持柱の２×２間であるが平面形は長方形である、②Ｂ群の南面は中央の３本が外側にはみ出す、③南面の外側にＣ群が存在する、④身舎の棟持柱は五平と呼ばれる板状の長方形柱であり、他にＢ群の東西面も同様の板状柱であった可能性がある、の４点が挙げられる。

SB20016は身舎を近接棟持柱の２×２間としており、中海道類型と共通する。しかし、身舎は長方形を呈し、縦横比率が1.40となっている。この比率は中海道類型とされる中で最も長方形の身舎である三重県城之越遺跡Ａ地区SB-1の1.35を超えており，上之宮型に近い比率となっている。身舎とＢ群の間隔は三面ともほぼ同じ間隔とすることもまた中海道類型と共通するが、Ｂ群の縦横比率は1.19となっており、城之越遺跡Ａ地区SB-1の1.13を越え、SB20005と同様に上之宮型に近い値となる。こうした違いがみられるが近接棟持柱の２×２間の身舎にＢ・Ｃ群を配置する点では共通することから中海道類型に含めてよく，その類型の中での平面形が最も長方形となる例としておく。

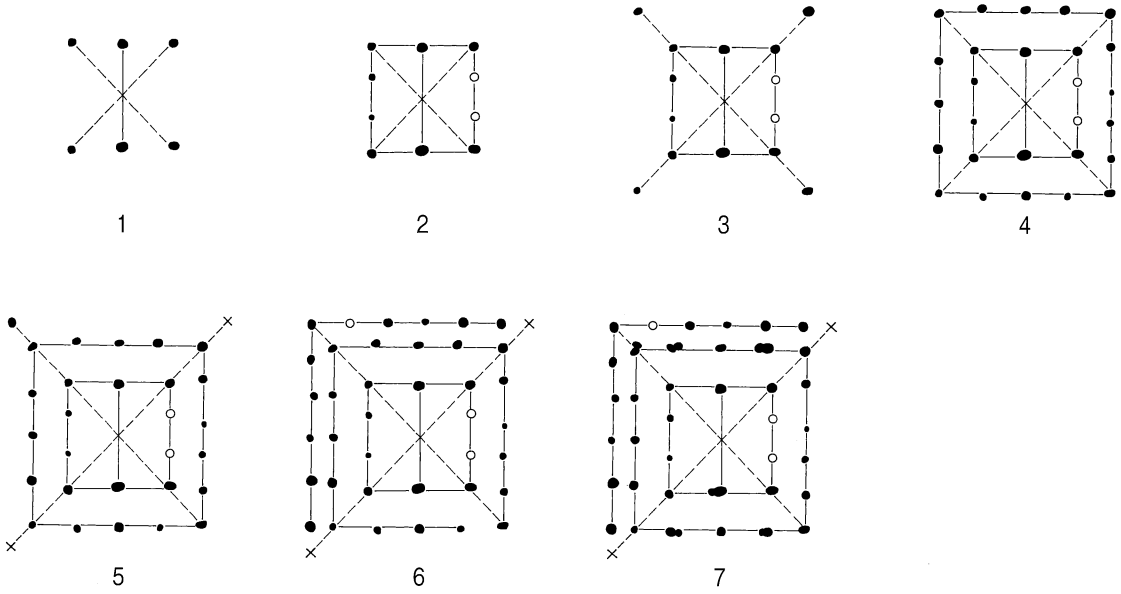
次に②のＢ群南面中央の柱が外にはみ出す形はSB20005にもみられる特徴である。今のところSB20016のＢ群の柱位置の決定方法については提示できないが、SB20016のＢ群で身舎の柱筋と揃うのは棟背後だけであり、その他はすべてＡ群の柱とは対応しない。まずＢ群の隅柱位置を決定し、その間を等分するような方法が採られているものと思われる。こうして柱配置の際に南面中央の柱を外側に配置している。SB20005ではＢ群の柱列を庇として、切妻屋根の身舎に庇を付けた錣入母屋造りの建物で、建物全

体に床が張った構造になる可能性を示したが、この建物も同様であり、さらに棟持柱に板状柱が使用された格式が高い建物であることからすれば、可能性がないわけではないと考えるが断定はできない。

③のＣ群の柱穴列は、中央の棟背後にあたる柱穴は棟の延長上に配置され、Ａ・Ｂ・Ｃ群で通っているが、それ以外はＢ群の柱位置とは対応させていない。４本ともがＢ群の柱の内側になるように配置されている。中海道型の中ではＣ群を四面に設けられたものと二面に設けられたものがあり、四面の例は南郷安田遺跡 SB01に、二面の例は極楽寺ヒビキ遺跡建物１と八木嶋遺跡 SB19がある。南郷安田遺跡 SB01はＣ群を含めた床面積が264㎡の極めて大型の建物であり、２×２間の身舎に４×４間のＢ群が付設され、さらにＢ群の外側に６×６間のＣ群が設けられている。Ａ・Ｂ・Ｃ群はそれぞれでは柱筋が通っているが、Ａ・Ｂ・Ｃ相互には柱筋は通らない。黒田氏はＢ・Ｃ群が床を張るための工夫として位置をずらしているとして、Ｂ群を縁、Ｃ群を落縁とし、建物全体を楼閣風の建物として復元されている。極楽寺ヒビキ遺跡建物１はＣ群を含めた面積が225㎡の大型建物であり、２×２間の身舎の四周にＢ群が付設され、Ｂ群の南面と西面外側にはＣ群が設けられている。この建物ではＡ・Ｂ間では柱筋が通らないが、Ｂ群とＣ群間では柱位置を対応させている。黒田氏の復元ではＣ群を柵とされているが、柵とすればＣ群の柱位置がＢ群の柱位置と対応させる必要性についての疑問がある。

SB20016のＣ群は先にも述べたように、Ｂ群の柱の内側になるように配置されており、この配置は南郷安田遺跡のＢ・Ｃ群と同様であることから、SB20016のＢ・Ｃ群間には床が存在した可能性があることになる。したがって、建物全体では２×２間の身舎に四面庇を設け、南側に縁が設けられて、建物全体に床が張られていたことになる。Ｂ群の柱位置からも床の存在を推定したが、Ｃ群の柱位置からもそうした可能性が示されたことになる。また、Ｃ群の中央３本の柱はＢ群同様に柱通りから僅かに外にはみ出していることから、Ｃ群の柱も床の高さで止まらず上方に立ち上がり、柱穴の深さがＢ群と変わらないことから、Ｃ群の柱はＢ群の柱とそれほど変わらない高さまであった可能性が高い。

④の「五平」と呼ばれる断面が板状の長方形柱は棟持柱において柱痕跡で確認されている他、Ｐ21909のように柱穴の底に色調の変化として残る柱アタリから、Ｂ群の東西面にも使用されていた可能性がある。またＣ群の P20401でも長楕円形の柱アタリが認められており、Ｂ群の東西面ほどはっきりしたものではないが、Ｃ群も五平柱であった可能性がある。仮にＣ群の柱も五平であったとすれば、SB20016では建物の外に面した柱と棟持柱に五平の柱が使用されていた可能性が高いことになる。五平柱を使用した建物の類例としては滋賀県針江北・川北遺跡 SB15、奈良県極楽寺ヒビキ遺跡建物１、奈良県藤原宮東方官衙下層 SB3650に類例が求められる。針江北・川北遺跡 SB15は３×２間の建物で、弥生時代後期と考えられており、矢板列によって楕円形に囲まれた地区の中央に位置する特殊建物とされ、矢板列の外側にする独立棟持柱建物とセットとして捉え、祭儀空間を形成していたとされている。藤原宮東方官衙下層 SB3650は５世紀後半の近接棟持柱をもつ５×３間の棟通りに併行する柱列が存在する特殊な建物である。この種の建物は単独で存在することから性格付けは難しいが、総柱建物、高床住居、祭儀用建物等とする見解がある。これら２例は SB20016とは建物構造が異なる。建物構造の点でも類似するのは極楽寺ヒビキ遺跡建物１である。先ほどから中海道類型の大型掘立柱建物として引用しているが、独立丘陵の先端に位置し、周囲を堀と塀で囲まれた区画の中心建物で、柱すべてが五平である。建物１は黒田氏によって入母屋造り高床建築の四周に縁を設けた構造に復元され、棟持柱には埴輪例を引用して直弧文の彫刻を施している。この遺跡は大和の中央豪族葛城氏との関係が言われる南郷遺跡群を見下ろすような位置にあることから、この遺跡も葛城氏との関係が言われ、建物１は政祭儀礼用の遺跡の中



第36図　SB20019柱配置方法想定図

心施設と考えられている。このように五平柱を使用した建物は豪族や首長が関係するような政祭儀礼用建物に使用されたことが推察されている。

このような例から、SB20016は近接棟持柱の切妻造り身舎の四周に庇を付設した錣入母屋造り構造で、南側に孫庇が設けられた建物と解釈できる。棟持柱には五平柱を使用し、そこには彫刻が施されていた可能性も考えられる。また棟持柱以外にも、外側に面した柱が五平柱であった可能性があり、政祭儀礼用の建物であった可能性も考えられる。

SB20019　３×２間の身舎の四周にＢ群の柱列が配置され、西・北の両面にＣ群が配置された建物である。この建物の特徴としては、①身舎の平面形は正方形に近い近接棟持柱の３×２間であり、身舎の周囲にはＢ・Ｃ群の柱列が付属する。②身舎柱列Ａ群とＢ群間では棟背後の柱穴以外は対応せず、Ｂ群とＣ群では西面の南から４本に対応がみられるが、北面は対応しない、③Ｂ群の桁行と妻との比率は身舎の比率と一致している、④Ｂ群の南北面中央の柱穴が外側にずれ、南北面は柱穴列が通らない、⑤他の建物に比べ柱穴が小規模である、の６点が挙げられる。

①は身舎の桁行を３間とする点ではSB20005と同様であるが、身舎の桁行と梁行の比率は1.06で正方形に近く、中海道類型の範疇で捉えられるものと解釈している。中海道類型はＡ群にＢ群を付設することを基本とし、中には四周や二面にＣ群を設けているものがあり、SB20019も柱配置の上では中海道型として捉えられる。

②と③は柱配置の方法に関連しており、まとめて記述する。このSB20016ではＢ群の棟背後の柱穴のみがＡ群の棟を延長する位置に配されているが、その他はＡ群とＢ群の間に対応関係はまったくみられない。それにも係わらず、身舎の桁と妻の比率1.06に対し、隅柱で計測した場合のＢ群の桁行と妻の比率は1.06とまったく同じ比率となっている。こうしたことから柱配置方法を試みたのが第36図である。まず第１段階として棟持柱の柱穴を配し、その中央を通して対角線を引き、隅柱を繋ぐ線が棟持柱の外側なるように、中央の点から同じ長さを採って身舎隅柱の位置を決定する。第２段階は出来上がった桁行を３等分して、身舎の柱穴配置は完成する。第３段階は身舎の対角線を延長し、身舎の隅柱から同じ

間隔をとってＢ群の隅柱を決定する。これにより身舎とＢ群の平面形は必然的に相似形となり、桁行と妻の比率は同率となる。第４段階は決定したＢ群の隅柱間を南・北・西は４等分して４間とし、東面だけは何らかの理由により、北１間と南２間を同じ柱間でとり、残った柱間をほぼ１対２の割合で分割して、全体で５間とする。これでＢ群の柱配置は完了する。第５段階はＣ群の隅柱の決定である。これもＢ群と同様の方法で行い、南東方向を除く３方向に対角線を延長して、Ｂ群の隅柱から同じ距離を採る。ただし、北東と南西隅は対角線上ではＢ群の柱列からは飛び出すため仮点とし、その仮点と北西隅柱と繋ぎ、Ｃ群の南端と東端をＢ群の柱列に合わせる。これでＣ群の両端が決定する。後は第６段階として、北面は５間に等分し、西面は南から３本をＢ群の柱に対応させて配置し、北端を等分する。これでＣ群の柱配置は出来上がり、建物全体の柱配置は完了する。

こうした配置方法は城之越遺跡の建物でもみられ、B:SB1の身舎隅柱穴は身舎に対し45°となって身舎の中心点に向けたように配置され、穂積氏は「身舎の隅柱と庇の隅柱が一直線に並ぶ」とされ、暗にこうした配置方法を推定されている。身舎対角線とＢ・Ｃ群の隅柱が並ぶ例は他に中海道遺跡や中溝・深町遺跡、極楽寺ヒビキ遺跡、原之城遺跡、八木嶋遺跡の建物にみられるが、中海道型Ⅰ類とされる中海道遺跡と中溝・深町遺跡の建物は身舎とＢ群の柱筋が通っており、柱筋を延長する方法で配置されたことも考えられるが、中海道Ⅱ類とされる原之城遺跡と八木嶋遺跡の建物は身舎とＢ群の柱筋は通らず、こうした方法がとられた可能性が高い。

④のＢ群南北面の中央の柱が北にずらされて配置されるという特徴はSB20005・SB20026にもみられた特徴であり、２棟では外側に位置をずらすことで柱内側の添束が直線的に配置できるという可能性を考えたが、⑤の特徴として挙げたようにSB20016は極めて柱穴が小さく、柱痕跡からも柱の細い建物であったことは確実である。他の中海道型とされる建物は柱穴も大きく、本遺跡でも他の３棟の柱穴は比較にならないほどの大きさとなっている。しかし、この建物は中海道型とされる格式のある型式を採用しているが、柱穴の大きさの点では他の小規模建物とそれほど変わらず、建物としてはSB20005・SB20016・SB20021のような立派な建物にはならないものと思われる。したがって、南北面の中央の柱位置をずらして床を張るための添束を立てたとは考えにくく、位置をずらした目的は不明と言わざるをえない。あるいは平屋建物に低い床を貼るような構造であったのであろうか。

SB20021　この建物は一部が検出されているだけで詳細が不明であるが、身舎は梁行２間であり、身舎の３面にＢ群の柱穴列が配され、Ｂ群の外にＣ群が配されることから、中海道類型に含まれる建物である。

この建物の特徴として①身舎妻中央の柱は妻通りの柱位置と揃っている、②Ａ・Ｂ・Ｃ群の柱列で構成されるが、Ａ・Ｂ群では棟背後の柱穴のみが対応し、その他は対応しない、Ｂ・Ｃ群についても対応がみられない、の２点が挙げられる。

①は中海道型とした錣入母屋造りのSB20005・SB200016・SB20019には見られなかった特徴であるが、中海道遺跡や極楽寺ヒビキ遺跡の建物１では妻中央の柱は妻通りの柱筋と通っており、極楽寺ヒビキ遺跡建物１は棟持柱として復元されている。ただSB20021の妻中央の柱穴は隅柱の柱穴より浅く、柱痕跡も細いものである。こうしたことから、身舎は妻中央の柱は棟持柱であるが、それほど大きく棟を上げない切妻造りの建物であった可能性が考えられる。

②のＡ・Ｂ群間で柱の対応がみられないのはSB20016・SB20019にもみられた特徴であり、ともにこのＢ群は庇とした。ここでもＢ群については庇と考えておく。したがって、この建物も切妻造りの身舎に庇が付設された錣入母屋造りと考えられる。ただSB20005よりは棟が低い建物であった可能性が高い。

次にC群であるが、庇と考えられるB群とはほぼ一定の間隔で南面から西面に配置されているが、C群の折れ点に当たる柱穴は、SB20019にみられたようなA・B群の隅柱の延長上に配置されるというような位置ではなく、ややずれた位置であり、SB20019のような柱配置の方法は採られていない。柱間も南北方向と東西方向がほぼ等間となっており、建物とは関係なく、南西隅の折れ点から同じ間隔で柱を配置していった可能性が高い。これらの点から、C群の柱列は建物を囲む柵である可能性が高い。

以上が今回検出した大型建物の個々についての検討であるが、SB20005・SB20016・SB20019・SB20021の4棟はともに錣入母屋造りの建物であり、SB20005のように大型の身舎で正方形を指向しない点や、SB20019のように身舎を3×2間とし柱穴規模が小さい等、独自色も窺えるが、各地で祭儀用・儀礼用とされる中海道型の大型掘立柱建物とは平面的な柱配置では共通しており、構造的にもほぼ共通する。他遺跡では単独あるいは対となって存在する中海道型建物が、本遺跡では他の中規模建物と群を構成しており、これらの建物は首長居館域の一画を構成する建物と考えられる。

4．掘立柱建物A群の検討

A群は、9・10期古相段階に、ほぼ棟方位を南北とする南北棟の大型掘立柱建物を中心に構成され、建築様式では大規模な錣入母屋造り大型掘立柱建物4棟、中規模の屋内棟持柱を有する寄棟造り平屋建物1棟、屋内棟持柱の入母屋造り平屋建物1棟、屋内棟持柱の総柱建物1棟等、小規模な平屋建物4棟と様々な様式の建物で構成される群である。

掘立柱建物A群が時期的にはほぼ9期から10期古相段階に存在したことは、出土遺物や他の遺構との切りあい関係からほぼ示せたと考えているが、遺跡全体の出土遺物の上でも、9・10期古相段階は遺物量が他段階より遥かに多いことが判明しており、初期須恵器を多量に出土するなど、この間が最も特色ある時期として位置づけられる。このこともまた、大型掘立柱建物を含むA群の時期が9・10期であることを傍証するものと考えている。

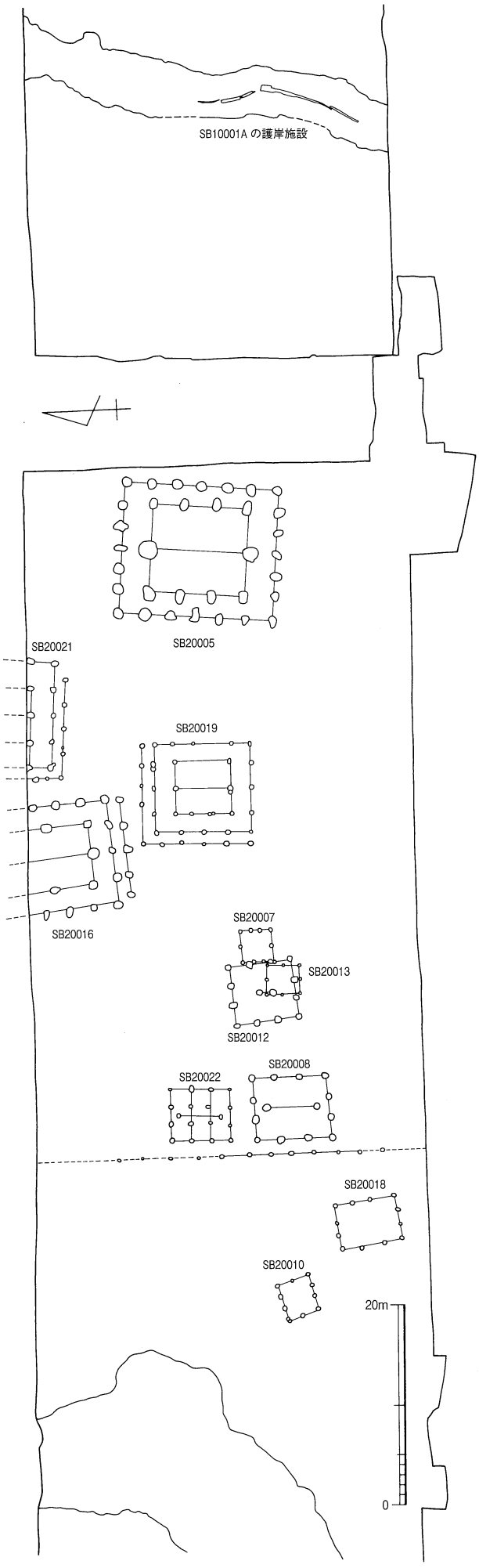
この9・10期古相段階には大型建物群中には竪穴住居はみられない。特にSA20001から東側には竪穴住居まったくみられない。SD30001西側の居住域が竪穴住居で構成されている。それと比較すると規模・建築様式に隔絶した差が認められる。また南但馬地方における古墳時代の集落遺跡である粟鹿遺跡や加都遺跡と比較しても大型掘立柱建物群を中心とする一画は傑出した存在となっている。粟鹿遺跡の集落はほぼ竪穴住居のみで構成され、掘立柱建物は2×2間の小規模な側柱建物1棟が存在するのみである。須恵器の導入はTK208段階からである。加都遺跡はほぼ古墳時代全般に渡る竪穴住居が110棟以上検出されているが、本遺跡の9・10期古相段階にあたる時期は竪穴住居のみで構成されている。須恵器はTK216段階以降に導入されるようであるが量的には少ない。このようにA群の掘立柱建物群は本遺跡の内部のみならず、現在のところ、南但馬の古墳時代集落遺跡の中では極めて傑出しており、須恵器の導入においても、本遺跡がTG232段階に推測され、一早く新しい文化を導入している。そこには南但馬の首長が大きく関与していることが考えられる。

これらA群の囲繞施設については不確かな点が多いが、SD10001Aが板材による護岸が施されていることや初期須恵器を多量に出土することから、このSD10001AがA群の建物群を区画するものと思われる。SB20005東側の町道とSD10001Aの間は大きく削平され、遺構密度が希薄になっているが、SH10001・SH10002の周囲には柱穴が存在しており、これらが柵を構成していた可能性は考えられる。建物群西端

を区画する施設については不確かながらもSA20001がある。仮に東をSD10001Ａ、西を柵SA20001が区画するとすれば、区画の大きさは東西約105ｍ・南北40ｍ以上、面積4,200㎡以上の規模となる。ただこの場合、区画の東西の中心がSB20005の西面庇付近に来るが、Ａ２群の建物群は中心より東にはなく、西によって配置されていることになる。Ａ２群にＡ３群を加えると、区画のほぼ中央に錣入母屋造りの３棟が南北方向に棟を揃え、南に開放された空間を伴って配置され、その西方の柵に沿って入母屋側柱建物、入母屋総柱建物が、大型建物群と柵沿いの建物群の中間に小規模な建物が配置されていることになり、古墳墳頂部における家形埴輪の配置に共通するような配置となって興味深いが、Ａ２・Ａ３群の同時存在を示すものがない現状では推測の域を出ない。また、柵SA20001は方位的にはＡ２群を区画するものであり、Ａ１・Ａ３群については明確にはできていない。建物群の西方には自然流路であるSD30001が存在しており、この流路を利用していた可能性も考えられるが、SD30001の上流側は南西方向に伸びており、その可能性は低い。Ａ２群に柵が存在していることからすれば、Ａ１・Ａ３群にも柵等の区画施設が建物群からSD30001の間に設けられていた可能性は高い。

しかし、遺跡全体を取り囲むような濠等は検出できず、遺跡西端は遺構密度が薄くなって終了する。

このように、本遺跡は遺跡全体を囲繞する施設はなく、集落の一画を区画した中に大型掘立柱建物群を置き、その周囲には竪穴住居跡群を配置している。従来、首長居館は濠や溝、柵等によって、政祭儀空間、経済的空間、生産等の諸施設を取り込んだ区画を創出し、その規模や隔絶性、防御性、内部機能等の観点から論ぜられ、類型化されることが多かったが、近年はこうした居館は北関東地方における地域性として



第37図　掘立柱建物Ａ群

論じられるようになり。辰巳氏は「ハレの空間が明確に指摘される屋敷地こそ、いわゆる豪族居館と認識すべきである」とし、区画をもつハレの空間を核に、周囲に首長と一族の居住空間、工房、倉庫、従者の住まい等の諸施設が配されるものを首長居館とする。青柳氏もまた南郷遺跡群の検討の中で、「豪族居館を構成する個々の要素で一つの遺跡が形成され、それが区画施設のない広大な土地に散らばるという状況がみられる。」とし、諸施設全体を囲繞することのない「居館」を想定している。本遺跡の掘立柱建物Ａ群も居館機能の一つを区画した内部に配置したものと理解し、南北約1.0km・幅約400m以上の遺跡全体で首長居館を構成している可能性が考えられる。

区画内部の意義付けは困難で推測の域をでないが、Ａ群は区画内に四面庇付大型掘立柱建物に中規模・小規模な建物が付随して一つの空間を創出している。古墳時代の四面庇付大型建物は13遺跡16棟が知られているが、単独で存在するものが多く、中・小規模の掘立柱建物を伴って検出されている例は極めて稀であり、建物の在り方が異なるが、極楽寺ヒビキ遺跡では「祭儀や政務を行った公的性格を持った施設」とされ、八木嶋遺跡は空間の意義付けは行われていないが近辺の古墳との関係が考えられ、南丹波地域の首長が関係した遺跡とされている。この遺跡も祭儀的建物とされる中海道型建物と三面庇付建物等が整然と配置されており、祭儀だけではなく政事も含めた政祭儀礼的空間と思われる。上之宮遺跡は四面庇付きでも大型建物の構造が異なり、宮殿との関係が考えられているため、参考にはならないかもしれないが、柵に囲まれた内部に大型建物を主殿、長棟建物を脇殿として配置し、特殊な園池遺構を組み合わせており、政祭儀礼的空間と考えられる。この他、四面庇付きの大型建物ではないものの、三ッ寺Ⅰ遺跡では、北西側区画には大型建物を主屋として、柵沿いに長棟建物、小規模な建物が配置される。区画内には導水施設や石敷きの祭祀場が存在し、辰巳氏は「ハレの空間」と呼び、非日常的祭儀空間としている。このように、大型建物と中小規模の建物がセットになって創出される空間は政祭儀礼の場としての性格が強く読み取れ、本遺跡のＡ群もそうした場を創出していると考えておきたい。

さて、遺跡と南但馬の主要な古墳との関係であるが、南但馬の首長墓は若水古墳、城ノ山古墳、池田古墳、茶すり山古墳、船宮古墳、長塚古墳、小丸山古墳といった変遷が考えられており、掘立柱建物Ａ群を中心として構成される本遺跡の首長居館と最も年代的に近いと考えられるのは茶すり山古墳である。茶すり山古墳は、間に低い峠を挟むが、西方約1.7kmの距離に所在する径90mの円墳であり、長大な主体部から鉄製武具類を中心とした多量の副葬品が出土している。副葬品や埴輪には畿内的様相が強くみられるが、墳丘は盛土ではなく、尾根突端を加工して創り出したものであり、墳丘規模は全く異なるが、但馬地方に伝統的みられる築造法である。主体部は組み合わせ式の箱形木棺で底板のない構造であり、これも在地性が強いとされている。古墳の年代は武具類の型式や組み合わせから陶邑編年のＴＫ73段階の年代が考えられており、本遺跡が最も盛行する時期であり、遺跡の一画に掘立柱建物Ａ群が創出される段階である。大型掘立柱建物の検討でも触れたように、Ａ群を構成する大型掘立柱建物は中海道類型とされる掘立柱建物と共通する点が多いが、身舎を３×２間とする点や、必ずしも正方形を指向しない点等は他地域の中海道類型の建物にはみられない特徴であり、それは地域性という中で理解するしかない。このように本遺跡の大型建物も畿内的様相を持つが在地色の強いものであり、こうした点も茶すり山古墳のもつ特徴と一致している。このように本遺跡が９･10期新相段階にみせる首長居館としての側面は茶すり山古墳の被葬者と深く関係しているものと考えられる。

参考・引用文献

青柳泰介「家形埴輪配置考」『古代学研究141号』古代学研究会1998
小笠原好彦・阿部義平「豪族居館研究と課題」『季刊考古学第36号』雄山閣1991
小笠原好彦「豪族居館が語るもの」『季刊考古学第16号』雄山閣1986
小笠原好彦「首長居館からみた家屋文鏡と囲形埴輪」『日本考古学第13号』日本考古学協会2002
小笠原好彦「家形埴輪の配置と古墳時代豪族の居館」『考古学研究第31巻　第4号』1985
小笠原好彦「住居と倉と井戸」『古墳時代の研究』雄山閣1990
黒田龍二「極楽寺ヒビキ遺跡大型掘立柱建物（建物１）の復元とその諸問題」『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷第29冊』奈良県立橿原考古学研究所2006
坂　靖　「古墳時代の階層別にみた居館」『古代学研究141号』古代学研究会1998
静野勝信「中溝・深町遺跡」『水辺の祭祀』日本考古学協会三重県実行委員会1996
辰巳和弘『高殿の古代学』白水社1990
辰巳和弘「古墳時代の「居館」と大型建物」『日本考古学協会2003滋賀大会発表資料集20003
辰巳和弘「豪族居館と祭祀」『季刊考古学第36号』雄山閣1991
辰巳和弘「古墳時代首長祭儀の空間について」『古代学研究141号』古代学研究会1998
辰巳和弘「中央氏族の本拠とその構造」『季刊考古学別冊14　畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣2004
地村邦夫『王の居館を探る』大阪府立弥生博物館2002
都出比呂志「都市の形成と戦争」『考古学研究第44巻第2号』1997
寺沢　薫「古墳時代の首長居館」『古代学研究141号』古代学研究会1998
橋本博文「古墳時代における首長居宅」『考古学ジャーナルNo289』1988
穂積裕昌「城之越遺跡」『水辺の祭祀』日本考古学協会三重県実行委員会1996
見須俊介「古墳時代の「豪族居館」研究上における問題点と平面類型」『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷第20冊』奈良県立橿原考古学研究所1996
宮本長二郎『日本原始古代の住居』中央公論美術出版1996
浅羽町教育委員会『古新田』1992
伊勢崎市教育委員会『原之城遺跡発掘調査報告書』1987
大津市歴史博物館『近江の古代を掘る』1995
大阪市文化財協会『難波宮址の研究第九』1992
財団法人京都府埋蔵文化財センター「国道478号バイパス関係遺跡　八木嶋遺跡」『京都府遺跡調査概報第56冊』1994
群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『鳥羽遺跡Ｇ・Ｈ・Ｉ区』1986
群馬県教育委員会他『三ツ寺Ｉ遺跡』1988
神戸市教育委員会『松野遺跡発掘調査概報』1983
神戸市教育委員会『松野遺跡発掘調査報告書　第3～第7次』2001
桜井市教育委員会『阿部丘陵遺跡群』1989
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『針江北・針江川北遺跡（Ｉ）』1992
埋蔵文化財天理教調査団『平尾山遺跡発掘調査報告』1989
奈良国立文化財研究所『飛鳥藤原宮発掘調査概報15』1985
奈良県立橿原考古学研究所「井戸遺跡・南郷安田遺跡」『奈良県遺跡調査概報1995年度』
奈良県立橿原考古学研究所「南郷遺跡群」『奈良県遺跡調査概報1997年度』
奈良県立橿原考古学研究所『南郷遺跡群Ⅳ』2000
奈良県立橿原考古学研究所『極楽寺ヒビキ遺跡』2005
奈良県立橿原考古学研究所『葛城氏の実像』2005
財団法人浜松文化協会『佐鳴湖西岸遺跡群』1992
三重県埋蔵文化財センター『城之越遺跡』1992
上野市教育委員会・上野市遺跡調査会『城之越遺跡　（２次）　発掘調査報告』1998
向日市教育委員会・財団法人向日市埋蔵文化財センター『向日市埋蔵文化財調査報告書』1997
守山市教育委員会『守山市文化財調査報告書第63冊』1997
守山市教育委員会『伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ』2004
兵庫県教育委員会『加都遺跡Ｉ』2005
兵庫県教育委員会『加都遺跡Ⅱ』2006
兵庫県教育委員会『粟鹿遺跡』2007

表７　掘立柱建物一覧表

地区	遺構番号	棟方位	方位群	建物構造	柱間数	桁行(m)	梁行(m)	総面積(㎡)	母屋柱間数	桁行(m)	梁行(m)	母屋面積	備考
II区	SB20001	N27.0° E	B 1	側柱	3×3	6.00	6.10	36.60					
II区	SB20002	N25.5° E	B 1	総柱	2×2	2.1	2.1	4.41					
II区	SB20003	N20.7° E	B 1	側柱	3×1以上	5.7	1.8以上	10.26以					
II区	SB20004	N16.0° E	B 1	総柱	2×2	2.6	2.5	6.50					
II区	SB20005	N 5.5° E	A 3	近接棟持柱四面庇付側柱建物	6×6	15.4	13.1	201.74	3×2	9.45	8.65	81.31	錣入母屋造
II区	SB20006	N10.0° E	B 1	側柱	3×3	4.1	3.6	14.76					
II区	SB20007	N 0.5° W	A 2	側柱	3×2	3.2	3.2	10.24					
II区	SB20008	N 0.0°	A 2	屋内棟持柱側柱建物	3×3	7.6	6.4	48.6					入母屋造
II区	SB20009	N18.0° E	B 2	総柱	2×2	2.5	2.72	6.80					
II区	SB20010	N76.0° E	A 1	側柱	3×2	3.7	3.3	12.21					
II区	SB20011	N21.0° E	B 2	側柱	5×2以上	8.4	4.1以上	34.4以上					
II区	SB20012	N 4.5° W	A 1	屋内棟持柱側柱建物	3×3	6.2	5.8	35.96					寄棟造
II区	SB20013	N 2.5° E	A 2	側柱	2×2	3.4	2.9	9.86					
II区	SB20014	N 5.5° E	A 3	総柱	2×2	2.6	2.4	6.24					
II区	SB20015	N 0.5° W	A 2	側柱	2×1以上	4	1.5以上	6以上					
II区	SB20016	N 4.2° W	A 1	近接棟持柱四面庇付側柱建物	5以上×4	7.5以上	10.6	80以上	2×2 ?	8.2以上	6.04	24.9以上	錣入母屋造
II区	SB20017	N21.0° E	B 2	平地式	1×1	2.7	2.7	7.29					
II区	SB20018	N 7.0° W	A 1	側柱	3×3	6.1	4.5	27.45					
II区	SB20019	N 2.5° E	A 2	近接棟持柱四面庇付側柱建物	5×5／6	11	10	110.00	3×2	5.7	5.4	30.78	錣入母屋造
II区	SB20020	N32.0° E	B 2	平地式	1×1	2.8	2.6	7.28					
II区	SB20021	N 4.8° E	A 3	四面庇付側柱建物	5×2以上	10.2	2.6以上	26.5以上	×2	5.8		0	錣入母屋造？
II区	SB20022	N 3.0° E	A 2	屋内棟持柱付総柱建物	3×3	6	5.2	31.20					入母屋造
II区	SB20024		A 3										
III区	SB30001	N35.0° E	B 3	側柱	2×2	3.15	2.8	8.82					
III区	SB30002	N46.5° E	B 3	側柱	2×2	2.7	2.5	6.75					
III区	SB30003	N 7.2° E	A 3	総柱	2×2	2.4	2.4	5.76					
III区	SB30004	N34.5° E	B 3	総柱	2×2	3.6	2.9	10.44					
III区	SB30005	N40.0° E	B 3	総柱	2×2	3	2.9	8.70					
III区	SB30006	N19.0° E	B 2	総柱	2×2	3	2.8	8.40					
III区	SB30007	N23.0° E	B 3	側柱	2×2	2.5	2.5	6.25					
III区	SB30008	N12.5° E	B 2	側柱	3×2	4.6	3.8	17.48					
III区	SB30009	N19.0° E	B 2	総柱	3×1以上	5.1	1.8以上	9.18以上					
III区	SB30010	N26.0° E	B 2	総柱	4×4	6.4	6.0	38.4					
IV区	SB40001	N71.0° W	B 2	近接棟持柱	2×2	3.9	2.9	11.3					
IV区	SB40002	N22.0° E	B 2	近接棟持柱	2×2	4.0	3.2	13.3					

表８　竪穴住居一覧表

地区名	遺構名		長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	主柱穴	類別	周壁溝	竈	竈支脚	中央炉	屋内土坑	竈横土坑	床隅土坑	台石	硬化面	貼り床	時期	特記遺物	備考
Ⅰ区	SH10001	N 2.0° E	3.25	2.8以上			AⅡ3?	○				東?						?		
Ⅰ区	SH10002	N 7.0° W	5.2	5.1	26.5	4	AⅡ?	○			○	×						?		1回建て替え
Ⅰ区	SH15001	N11.0° E	5.0以上	3.55以上		4?	AⅡ1				○	×?						8期新		
Ⅱ区	SH20001	N16.0° E	6.25	6.0	37.5	4	BⅡ1	○	西		○	×			○			14期		
Ⅱ区	SH20003	N 1.0° E	7.65	6.5	49.7	4	CⅡ1	○			○	東						8期新	角杯	
Ⅱ区	SH20004	N 6.5° E	5.85	5.5	32.2	4	BⅡ1	○	西		○	×		南東?				14期		
Ⅱ区	SH20005	N 5.5° E	7.5	6.35	47.6		BⅡ1?		北		?	?						9期?		
Ⅱ区	SH20006	N18.5° E	5.25	4.6	24.2	4	AⅡ1				○	東						7期		
Ⅱ区	SH20007	N15.0° E	7.4	7.0	51.8	4	BⅡ1	○	西		○			北東				14期		
Ⅱ区	SH20008	N11.5° E	4.7	4.7	22.1	0	AⅢ3	○			×	東?						7期		
Ⅱ区	SH20009	N 9.0° E	5.5	4.55	25.0	2	CⅡ2	○			○	東		?				8期古		
Ⅱ区	SH20010	N22.9° E	3.5以上	1.5以上			?											?		調査区外に拡がる
Ⅱ区	SH20011	N15.0° E	2.0以上	2.0以上			?											?		調査区外に拡がる
Ⅱ区	SH20012	N31.5° E	5.0	4.0以上		4?	?											4期古		調査区外に拡がる
Ⅱ区	SH20013	測定不可																?		調査区外に拡がる
Ⅱ区	SH20014	N19.0° E	5.2	4.8	25.0	4	AⅡ1				○	×						4期古		
Ⅱ区	SH20015	N18.0° E	4.5	3.85	17.3	4	BⅡ1	○	西	土器	?	×						11期		煙道が屋外に伸びる
Ⅱ区	SH20016	N 8.5° E	6.9	6.9	47.6	4	AⅠ1	○			×	中央			○			5期		ベッド状遺構
Ⅱ区	SH20017	N 9.0° E	6.1	5.9	36.0	4	AⅡ1	○			○	×						8期新		
Ⅱ区	SH20018	N39.0° E	5.35	4.85	25.9	4	BⅡ1	○	西	土器2	○		両サイド				○	12期		
Ⅱ区	SH20019	N 5.5° E	4.5	4.15	18.7	4	BⅡ1	○	西	石	○	東						10新		
Ⅱ区	SH20020	N41.5° E	5.85	5.85	34.2	4?	AⅡ1	二重			○	×						5期		調査区外に拡がる
Ⅱ区	SH20021	N22.8° W	4.5	3.9以上		4?	AⅡ1?	○			○?	?						6期		調査区外に拡がる
Ⅱ区	SH20022	N21.5° E	4.8	4.5	21.6	4	BⅡ1	○	西	土器	2	東	南	南西				11期		礫が多く入る
Ⅱ区	SH20023	N55.0° E	5.9	4.0	23.6	2	CⅢ2	二重			×	東						5期	台付短頸壺	
Ⅱ区	SH20024	N13.0° E	4.45	4.45	20.3	4	BⅡ1		西		○	東	南?					13期		
Ⅱ区	SH20025	N 4.5° E	4.35	3.75	16.3	4	BⅡ1		北		○	南						13期?		
Ⅱ区	SH20026	N 6.2° W	5.2	2.5以上		4?	AⅡ1?				?	?						5期		調査区外に拡がる
Ⅱ区	SH20027	N25.0° E	5.05	5.05	25.5	4	BⅡ1		西		2	東	南?	南東				13期		竈焚き口に石
Ⅱ区	SH20028	N 3.0° E	4.5	4.35	19.6	4	BⅡ1		西					北西				15期		
Ⅱ区	SH20029	N29.5° E	6.8	6.7	45.6	4	AⅡ1?	○			2	東						5期		
Ⅱ区	SH20030	N44.0° E	5.4	5.4	29.2	4	AⅡ1?											10期新?		
Ⅱ区	SH20031	N 9.0° E	6.5	6.3	41.0	4	AⅠ1	二重				中央 東?						6期		
Ⅱ区	SH20032	N 8.3° E	7.4	7.2	53.3	4?	BⅡ1?		南									13期		
Ⅱ区	SH20033	N17.5° E	4.55	4.4	19.8	4	AⅠ1	○				中央						4期		中央土坑（周堤）

表8　竪穴住居一覧表

地区名	遺構名		長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	主柱穴	類別	周壁溝	竈	竈支脚	中央炉	屋内土坑	竈横土坑	床隅土坑	台石	硬化面	貼り床	時期	特記遺物	備考
II区	SH20034	N22.0° E	5.45	4.3	23.4	4	AII 1	○			○	東						4期		
II区	SH20035	N31.0° W	4.4	4.25	18.7	2	AII 2	○			○	東						5期		土器大量出土
II区	SH20036	N16.0° E	4.3	3.9	16.8	4	BII 1	○	西		○	東						10期新		
II区	SH20037	N 5.0° E	5.7	5.0	28.5	4	BII 1		西		○	×						12期		
II区	SH20038	N 4.0° W	3.7	3.17	11.8	2	AIII 2	○						北東	○			7期		
II区	SH20039	6角形			50.24?	6						中央						3期		中央土坑
II区	SH20040	N18.5° E	5.7	4.3	24.5	2	CII 2				○	?						6期		調査区外に拡がる
II区	SH20041	測定不可	4.3?	4.3?		4?	AII 1?				○							9期		調査区外に拡がる
II区	SH20042	N 1.0° W				4	AII 1?				○	?						?		
II区	SH20043	N 9.5W				4	?				○	?						14期?		
II区	SH20044	N39.0° W	3.7	3.7	13.7	2	AII 2	○				東?						8期古		
II区	SH20046	N17.0° E	3.65	2.7以上		0	BII 3		西		○							11期		
II区	SH20047	N45.5° W					?	4										15期		調査区外に拡がる
II区	SH20048	N46.0° W					?											15期		
II区	SH20049	N28.0° E	3.0以上	3.0以上			?											13期		
II区	SH20051	N11.5° E	3.6	2.7	9.7	0	CII 3				○							6期		
II区	SH20052	N25.0° E					?											110R12期?		調査区外に拡がる
II区	SH20053	N22.5° E	3.9	3.05	11.9	0	CII 3				○							12期以降		
II区	SH20054	N19.3° E									○							6期		調査区外に拡がる
II区	SH20055	N23.0° E	5.4	5.4	29.2	4	BII 1		西		○	東						12期		建替え？調査区外に拡がる
II区	SH20057	N21.0° E	5.45	5.0以上		4	BII 1		西	土	○	?	?					11期		調査区外に拡がる 竈は南より
II区	SH20058	N48.0° E				4?	BII 1?				○							12期		
II区	SH20059	N 9.0° E	4.7	4.35	20.4	4	BII 1	○	西	石?	○	東	北			0		12期		
II区	SH20060	N 3.5° E	4.75	4.75	22.6	4	BII 1	○			3	×						12期		土器図あり
II区	SH20061	N28.5° E	6.5	3.0以上		4?	AII 1?					?						4期		
II区	SH20062	N17.0° E	2.5以上	0.75以上			?	○										110R12期?		調査区外に拡がる
II区	SH20065	N10.5° W	3.0以上	0.85以上			?											6期		
II区	SH24064	N29.5° W	4.25	4.1	17.4		AII 1				○	東						10期新		
II区	SH25063	N 1.5° E	2.9以上	4.6		4?	AII 1?				○	?						8新		
III区	SH30001	N12.5° E	5.8	5.4	31.3	4	BII 1		西	土	○	東				○		9期	甑、製塩土器	
III区	SH30002	N11.0° E	4.65	4.2	19.5	4	BII 1		西	石		×				○		9期	製塩土器	
III区	SH30003	N 6.5° E	6.5	6.3	41.0	4	BII 1	○	西	石	○	東				○		11期	製塩土器	
III区	SH30004	N22.5° E	7.2	7.1	51.1	4?	AII 1?	○										9期		
III区	SH30005	N43.5° W	3.75	3.65	13.7	4	AIII 1	○			×	南						9期	漢式土器?	
III区	SH30006	N27.0° E	4.7	4.6	21.6	4?	BII 1	○	西	石	×?	×				○		9期		
III区	SH30007	N 3.0° W	6.5	6.1	39.7	4?	AII 1?	○			?	?						6期		

表８　竪穴住居一覧表

地区名	遺構名		長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	主柱穴	類別	周壁溝	竈	竈支脚	中央炉	屋内土坑	竈横土坑	床隅土坑	台石	硬化面	貼り床	時期	特記遺物	備考
Ⅲ区	SH30008	N19.0° W	6.3	5.3	33.4	4?	CⅡ１?				?	?						５期		
Ⅲ区	SH30009	N 4.0° W	6.0	5.4	32.4	4	BⅡ１		西		2	×						16期		
Ⅲ区	SH30010	N14.5° E	7.0	6.3	44.1	4	BⅡ１	○	西		2	東						10期古		
Ⅲ区	SH30011	N 3.5° E	5.9	5.35	31.6	4?	AⅡ１				○	東						８期古		
Ⅲ区	SH30012	N23.0° E	6.6	5.85	38.6	4?	CⅡ１				○	×						６期		
Ⅲ区	SH30013	N39.5° E	3.95	3.95	15.6	4	BⅡ１		西		○	?						12期？		
Ⅲ区	SH30014	N35.0° E	4.5	4.0	18.0	4	BⅡ１		西		○	東						12期		
Ⅲ区	SH30015	N 5.5° W	3.6	3.45	12.4	4	AⅡ１	○			○			北東				12期		
Ⅲ区	SH30016	N28.8° E	6.85	6.55	44.9	4	AⅡ１	○			○	東		北西				10期古		
Ⅲ区	SH30017	N 8.5° E	4.2	3.6	15.1	4	CⅡ１	○			○	東						８期古		
Ⅲ区	SH30018	N10.0° E	4.8	4.7	22.6	4	BⅡ１		西		○	東				○		10期新		
Ⅲ区	SH30019	N23.5° E	6.5	6.5	42.3	4?	AⅡ１?				○	?				○		11期		
Ⅲ区	SH30020	N15.5° E	7.3	7.0	51.1	4	BⅡ１	○	北		○	南	東			○		10期新		礫を敷いて建て替え
Ⅲ区	SH30021	N22.6° W	6.55	5.55	36.4	4?	AⅡ１?					?		?				９期		
Ⅲ区	SH30022	N23.0° E	5.3	4.2	26.8	2	CⅡ２	○			○	×						６期		
Ⅲ区	SH30023	N10.0° W	4.4	2.0以上				○										５期？		
Ⅲ区	SH30024	N22.5° W	5.0	4.15以上		4?	AⅡ１?	○			○	南						?		
Ⅲ区	SH30025	N16.3° E	5.3	5.15	27.3	4	BⅡ１		西	土器	○	×						10期古		
Ⅲ区	SH30026	N 7.5° W	6.0	4.8	26.6	4?	AⅡ１?	○						?				９期		
Ⅲ区	SH30027	N38.5° E	6.0	5.7	38.5	4	AⅡ１				○	東				○		10期古		
Ⅲ区	SH30028	N 9.5° E	3.65	3.25	11.9	0	CⅢ３											15期		
Ⅲ区	SH30029	N38.0° E	3.6	3.6	13.0	4	BⅡ１	○	南	石	×?	北	南西					10期古		焚き口も石で保護
Ⅲ区	SH30030	N14.0° E	4.0	3.8		4?	AⅡ１?											?		
Ⅲ区	SH30031	N23.0° E				4	BⅡ１	○	西	石	○	東						９期		焚き口にも石
Ⅲ区	SH30032	N26.0° E	5.9	5.55	32.7	4	AⅡ１	○				東						９期		床面確認すること
Ⅲ区	SH30033	N43.0° E	5.7	5.7	32.5	4?	AⅡ１?	○			○	南						10期新		
Ⅲ区	SH30034	N 5.5° E						○										?		
Ⅲ区	SH30035	N 3.8° E	7.5	5.75	43.1	4	AⅠ１	○			○	中央						４期		
Ⅲ区	SH30036	N23.5° E	5.0	4.85	24.3	4	AⅡ１?	○			○	東						11期		
Ⅳ区	SH40001	N42.0° W	7.1	7.0	51.8	4	BⅡ１		西									16期		
Ⅳ区	SH40004	N10.5° E	5.4	6.5		4?	AⅡ１?				○	東						16期		
Ⅳ区	SH40005	N31.0° E	6.75	5.9	39.8	4?	BⅡ１?		西		×							10期古		
Ⅳ区	SH40006	N26.0° E				4?	BⅡ１?		西	土								10期古		
Ⅳ区	SH40007	N31.5° E				4?	AⅡ１?				×							17期		
Ⅳ区	SH40008	N30.5° E	6.0	5.8	34.8	4?	AⅡ１?				×							９期？		
Ⅳ区	SH40009	N21.0° E	4.25	3.85	16.4	4	BⅡ１		西	土	○	東	南西					12期		

表８　竪穴住居一覧表

地区名	遺構名		長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	主柱穴	類別	周壁溝	竈	竈支脚	中央炉	屋内土坑	竈横土坑	床隅土坑	台石	硬化面	貼り床	時期	特記遺物	備考
Ⅳ区	SH40010	N25.0° E	4.9	4.9	24.0	4	BII 1		西	土２	○	×						11期		
Ⅳ区	SH40011	N22.0° E	4.1	4.1	16.8	4	BII 1		西		○	東	北東					11期		
Ⅳ区	SH40012	N46.5° E				4	AII 1				○							16期		
Ⅳ区	SH40013	N26.5° E	4.7	4.3	20.2	4	AII 1				○							16期?		
Ⅳ区	SH40014	N 5.5° E	4.3	3.4	14.6	4?	AIII 1 ?											10期古		
Ⅳ区	SH40015	N27.5° E	4.7	4.2	19.7	4	BII 1		西	石	○	東	北西					９期		
Ⅳ区	SH40016	N29.5° E	3.9	3.6	14.0	4	AII 1				○	東						10期古		
Ⅳ区	SH40017	N19.0° E	4.7	4.3	20.2	4	AII 1				○	東						10期新		
Ⅳ区	SH40018	N35.0° E	4.0	3.8	15.2	4	BII 1		西	土	○	×						12期		
Ⅳ区	SH40020	N42.0° W	5.8	5.8	33.6	4	AII 1				○	東						16期		
Ⅳ区	SH40024	N25.5° E					?											?		
Ⅳ区	SH40025	N22.5° E					?											17期		
Ⅳ区	SH40026	N31.0° E					?											９期？		

表９　土器観察表

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
1	Ⅰ区	SH15001	埋土	須恵器	高杯	－	(2.4)	(8.05)	底部1/5	88	128	136
2	Ⅰ区	SH15001	床面	須恵器	椀	－	(5.7)	(7.6)	底部1/4	88	128	136
3	Ⅰ区	SH15001	床面	須恵器	甕	(21.5)	(1.4)	－	口縁部若干	88	128	136
4	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯G	21.5	(8.4)	－	口縁部1/6欠損、杯部ほぼ1/1	88	128	136
5	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯F	－	(5.8)	－	杯部下半2/3	88	128	136
6	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯Ⅰ	(15.8)	(6.8)	－	口縁部1/6	88	128	136
7	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯H2	(15.0)	(4.75)	－	口縁部1/3	88	128	136
8	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯J	(14.7)	(6.3)	－	口縁部若干、杯部1/3欠損	88	128	136
9	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯	(12.1)	(5.8)	－	口縁部1/3	88	128	136
10	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯	－	(5.9)	9.6	脚部完存	88	128	136
11	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯	－	(5.75)	10.0	脚部1/1、端部若干欠損	88	128	136
12	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯	－	(8.45)	15.3	脚部2/3	88	128	136
13	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯	－	(7.25)	9.5	底部～脚部1/1、杯部1/3	88	128	136
14	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯	－	(8.3)	(10.85)	底部1/3、杯部1/4	88	128	136
15	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯	－	(7.7)	10.4	脚部1/1、底部ほぼ1/1	88	128	136
16	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	高杯	－	(6.9)	9.6	脚部1/1	89	128	136
17	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	甕H	(20.7)	(8.35)	－	口縁部1/12強	89	129	137
18	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	甕E2	(18.4)	(5.4)	－	口縁部1/2強	89	129	137
19	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	甕G5	(17.2)	(6.0)	－	口縁部～頸部1/3欠損	89	129	137
20	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	甕E2	(15.25)	(5.1)	－	口縁部1/8	89	129	137
21	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	直口壺	12.5	5.0	－	口縁部～頸部1/4	89	129	137
22	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	小型丸底壺	－	(6.3)	腹径7.9	頸部1/8、底部完	89	129	137
23	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	椀B	11.8	5.55	－	口縁部～底部3/4	89	129	137
24	Ⅰ区	SH15001	床面	土師器	把手	－	(11.0)	－	把手のみ	89	129	137
25	Ⅰ区	SH15001	埋土	土師器	製塩土器	(4.3)	(3.6)	－	口縁部～体部上半1/6	89	129	137
26	Ⅰ区	P10165	－	土師器	製塩土器	(4.9)	(6.0)	－	体部1/4	89	129	137
27	Ⅰ区	P10165	－	土師器	甑					89		137
28	Ⅰ区	P10035	－	須恵器	杯身	(13.3)	(3.0)	－	口縁部1/6強	89	129	137
29	Ⅰ区	P10095		須恵器	杯身	(12.0)	(3.45)	－	口縁部～杯部1/6	89	129	137
30	Ⅰ区	SD10001A	中層	須恵器	杯蓋	(13.3)	(4.0)	－	口縁部若干、天井部1/4	90	130	138
31	Ⅰ区	SD10001A	－	須恵器	杯身	11.3	4.5	－	口縁部1/6	90	130	138
32	Ⅰ区	SD10001A	－	須恵器	蓋	11.5	3.7	－	口縁部2/3欠損	90	130	138
33	Ⅰ区	SD10001A	－	須恵器	𤭯	－	(6.7)	腹径(10.9)	底部～体部1/4頸部若干＋体部1/4弱 接合せず	90	130	138
34	Ⅰ区	SD10001A	－	須恵器	壺	－	(26.1)	腹径29.7	頸部全周、体部上半3/4・下半1/6	90	130	138
35	Ⅰ区	SD10001A	－	須恵器	甕	(22.4)	(1.25)	－	口縁部1/8	90	130	138
36	Ⅰ区	SD10001A	－	須恵器	甕	18.6	(24.15)	腹径(24.1)	口縁部1/7、頸部1/7、体部1/3	90	130	138
37	Ⅰ区	SD10001A	－	須恵器	甕	－	(9.6)	－	体部破片	90	130	138
38	Ⅰ区	SD10001A	下層	須恵器	甕	(42.3)	(34.8)	－	口縁部若干、頸部3/4、肩部ほぼ1/1、体部若干	90	130	138
39	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	二重口縁壺A	25.0	(5.4)	－	口縁部1/10	90	131	139
40	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	二重口縁壺A	(39.15)	(9.9)	－	口縁部1/9	90	131	139
41	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	二重口縁壺B	(33.1)	(15.1)	－	口縁部1/12、頸部1/12	90	131	139
42	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	二重口縁壺B	(32.9)	(17.9) (7.35)	(12.65)	口縁部若干、頸部～体部1/4、底部1/2	91	131	139
43	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	直口壺B	8.4	14.35	腹径14.35	完形	91	131	139
44	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	小型丸底壺	－	7.9	腹径9.4	頸部1/5、体部1/1、底部1/1	91	131	139
45	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	小型丸底壺	－	(6.2)	腹径(8.7)	体部1/1、口縁部若干	91	131	139
46	Ⅰ区	SD10001A	中層	土師器	小型丸底壺	(10.4)	(7.95)	－	口縁部1/7、体部1/2弱	91	131	139
47	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	甕E2	(17.8)	(23.9)	腹径(30.0)	口縁部1/4体部1/4弱＋口縁部1/6体部上半1/9＋体部1/5　接合せず	91	132	140
48	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	甕E2	(15.7)	(9.4)	－	口縁部1/4、頸部1/6、体部上半1/6	91	132	140
49	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	甕E2	(16.0)	(5.5)	－	口縁部1/4	91	132	140
50	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	甕Ⅰ	(14.0)	(12.25)	－	口縁部1/4、体部1/2	91	132	140
51	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	甕Ⅰ	(14.1)	(12.8)	－	口縁部1/6	91	132	140
52	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	甕G5	(17.2)	(10.3)	－	口縁部3/4、体部若干	91	132	140

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
53	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	二重口縁壺B	14.6	(11.2)	－	口縁部5/6、体部上半1/2	91	132	140
54	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	甕J	(16.8)	(27.4)	腹径(28.4)	口縁部～頸部1/2、体部1/2弱	91	132	140
55	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	甕G5	(16.45)	(14.15)	－	口縁部1/2+1/4、体部1/4	92	132	140
56	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	甕E2	10.4	9.5	腹径13.7	ほぼ完形	92	132	141
57	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	二重口縁壺B	(9.4)	(14.9)	腹径16.4	口縁部1/5、体部3/10	92	132	141
58	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	直口壺B	－	(14.4)	腹径14.65	体部完、頸部1/3	92	132	141
59	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯G	(22.3)	(16.9)	(13.0)	杯部1/4、脚部1/4	92	133	141
60	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯G	－	(14.6)	(15.2)	杯部・脚部1/2強、底部1/3	92	133	141
61	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯F	(21.9)	(16.0)	(12.7)	杯部1/4強、脚部1/1、底部1/3十口縁部若干	92	133	141
62	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯H1	(15.7)	(6.3)	－	口縁部～杯底部1/2弱	92	133	141
63	Ⅰ区	SD10001A	中層	土師器	高杯E	(16.5)	13.5	10.85	杯部1/2弱、底部1/2	92	133	141
64	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯E	(16.7)	(7.4)	－	口縁部1/12、体部1/3、脚部・底部欠損	92	133	141
65	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯E	(13.85)	11.15	10.8	口縁部1/2強、底部1/4	92	133	142
66	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯J	(14.0)	11.15	(9.25)	口縁部1/2、杯部2/3、脚部1/1、底部1/2強	93	133	142
67	Ⅰ区	SD10001A	中層	土師器	高杯J	(13.0)	11.8	8.9	口縁部3/5、脚部・底部1/1	93	133	142
68	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯H2	14.3	(9.7)	－	口縁部3/4、頸部1/1、底部欠損	93	133	142
69	Ⅰ区	SD10001A	下層	土師器	高杯H2	13.4	(6.3)	－	口縁部1/2	93	133	142
70	Ⅰ区	SD10001A	下層	土師器	高杯J	(14.2)	11.9	9.8	底部～脚部1/1、口縁部1/2弱、杯部1/3	93	133	142
71	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯J	(13.8)	12.9	(9.4)	口縁部5mm、杯部1/6、底部1/3	93	133	142
72	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯J	14.0	11.9	9.7	杯部2/3、脚部2/3	93	133	142
73	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯J	12.7	(4.65)	－	口縁部1/6欠損（杯のみ）	93	133	142
74	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯J	(14.2)	(5.0)	－	口縁部1/3	94	133	142
75	Ⅰ区	SD10001A	中層	土師器	高杯J	(14.1)	11.6	(9.3)	口縁部1/4、杯部1/2強、脚ほぼ1/1、底部1/4	94	134	143
76	Ⅰ区	SD10001A	中層	土師器	高杯J	13.0	11.15	8.8	口縁部若干欠損	94	134	143
77	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯J	14.0	(11.2)	－	杯部～脚柱部まで完存	94	134	143
78	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯	－	(7.1)	8.65	底部2/3、脚部1/1	94	134	143
79	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	高杯	－	(6.9)	9.0	底部3/5、脚部1/1	94	134	143
80	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	小型器台B	9.5	(6.4)	－	口縁部6/7、頸部1/1、脚部1/6	94	134	143
81	Ⅰ区	SD10001A	下層	土師器	小型丸底鉢B	10.7	7.0	－	口縁部1/2、体部2/3	94	134	143
82	Ⅰ区	SD10001A	上層	土師器	椀B	(11.25)	3.45	－	1/2	94	134	143
83	Ⅰ区	SD10001A	－	土師器	ミニチュア土器	(6.45)	4.7	3.95	約1/2、端部若干	94	134	143
84	Ⅰ区	SD10001A	上層	土師器	ミニチュア土器	2.7	4.0	3.8	完形	94	134	143
85	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	甕H	19.1	(19.2)	腹径(23.9)	口縁部2/3、体部1/2強	94	134	144
86	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	甕E2	(18.55)	(8.2)	－	口縁部1/5	94	134	144
87	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	小型丸底壺	9.0	7.75	腹径8.3	口縁端部1/7欠損	94	134	144
88	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	台付鉢B	9.4	(7.0)	－	口縁部2/3、体部1/1、脚部・底部欠損	94	134	144
89	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	高杯I	(15.45)	12.4	8.9	口縁部1/3、脚部1/1、底部4/5	95	134	144
90	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	高杯J	(13.3)	(4.2)	－	口縁部1/3強	95	134	144
91	Ⅰ区	SD10001B	下層	土師器	高杯J	(14.0)	(7.1)	－	口縁部若干、杯部1/4強	95	134	144
92	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	高杯J	14.6	(5.9)	－	口縁部1/18欠損、杯部一部欠損	95	134	144
93	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	高杯I	－	(9.1)	(10.0)	底部1/6、脚部1/1、杯部1/3	95	134	144
94	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	高杯	－	(8.7)	8.9	底部～脚部1/1、杯部若干	95	134	144
95	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	高杯	－	(6.8)	8.8	底部3/4、脚部1/1	95	134	144
96	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	高杯	－	(6.2)	8.75	底部4/5、脚部1/1	95	134	144
97	Ⅰ区	SD10001B	－	土師器	小型器台A	(9.5)	(4.5)	－	受部2/3、脚部1/3	95	134	144
98	Ⅰ区	SD10001	－	須恵器	杯蓋	(11.9)	(4.1)	－	口縁部1/5	95	135	145
99	Ⅰ区	SD10001	－	須恵器	杯蓋	12.7	4.3	－	口縁部1/2、体部1/3	95	135	145
100	Ⅰ区	SD10001	－	須恵器	杯蓋	(12.4)	4.45	－	口縁部1/10、天井部1/3	95	135	145
101	Ⅰ区	SD10001	－	須恵器	杯身	(10.35)	(4.6)	－	口縁部1/5、体部1/4	95	135	145
102	Ⅰ区	SD10001	－	須恵器	甕	(15.0)	(3.35)	－	口縁部1/12	95	135	145
103	Ⅰ区	SD10001	－	須恵器	甕	(21.8)	(2.1)	－	口縁部1/16	95	135	145
104	Ⅰ区	SD10001	－	須恵器	甕					95		145
105	Ⅰ区	SD10001	－	須恵器	甕	(16.35)	(5.9)	－	口縁部1/6	96	135	145
106	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	二重口縁壺B	(13.6)	(7.5)	－	口縁部1/4、頸部1/4	96	135	145
107	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	二重口縁壺A	(11.0)	(7.7)	－	口縁部1/36、頸部1/2、体部？	96	135	145
108	Ⅰ区	SD10001	上層	土師器	小型丸底壺	(7.8)	(6.95)	－	口縁部1/12、体部3/7	96	135	145
109	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	小型丸底壺	－	(6.45)	腹径7.0	口縁部若干(端部なし)、体部1/1	96	135	145
110	Ⅰ区	SD10001	下層	土師器	直口壺A	－	13.45	－	口縁部1/3(端部なし)、体部完存	96	135	145

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
111	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	直口壺A	9.1	16.9	腹径13.2	口縁部若干欠損	96	135	145
112	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	甕H	(8.5)	11.3	腹径11.2	口縁部1/8、体部5/6	96	135	145
113	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	甕E2	(17.0)	(10.7)	－	口縁部7/8、頸部7/8、体部上半1/8	96	135	146
114	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	甕E2	14.4	(16.1)	腹径19.35	口縁部～体部5/6、底部欠損	96	135	146
115	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	甕H	(14.95)	(15.4)	腹径(18.8)	口縁部1/10、体部1/5	96	135	146
116	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	甕E2	(18.1)	(6.2)	－	口縁部1/2、頸部1/4	96	135	146
117	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	甕C	(15.45)	(6.9)	－	口縁部1/10、体部1/4	96	136	146
118	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	甕D	(16.05)	(6.5)	－	口縁部1/5	96	136	146
119	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	二重口縁壺B	(15.9)	(5.0)	－	口縁部1/4強	96	136	146
120	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	甕C	(15.0)	7.95	－	口縁部3/7	96	136	146
121	Ⅰ区	SD10001	下層	土師器	甕G4	(15.7)	(5.9)	－	口縁部1/4、頸部1/4	97	136	146
122	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	高杯J	13.6	(4.35)	－	口縁部1/2、杯部2/3	97	136	146
123	Ⅰ区	SD10001	下層	土師器	高杯J	(11.8)	(4.55)	－	口縁部1/4	97	136	146
124	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	高杯	－	(7.1)	9.4	底部～脚部のみ完存	97	136	147
125	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	高杯J	(13.35)	10.9	8.9	口縁部1/5、底部ほぼ完	97	136	146
126	Ⅰ区	SD10001	上層	土師器	高杯H2	14.8	11.0	(10.0)	口縁部3/4、脚部3/5、底部1/6	97	136	147
127	Ⅰ区	SD10001	上層	土師器	高杯H2	(13.9)	10.3	9.3	口縁部1/8、杯部1/2、脚部ほぼ1/1、底部5/6	97	136	147
128	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	高杯H2	(14.9)	(11.1)	－	口縁部1/4、杯部2/3、脚部ほぼ1/1、底部若干（端部なし）	97	136	147
129	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	高杯	－	(5.5)	9.7	脚部のみ完存	97	136	147
130	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	高杯	－	(6.9)	－	脚柱部のみ完存	98	136	147
131	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	高杯H2	(5.3)	8.95	8.0	口縁部1/18、脚部1/1、底部3/5	98	136	147
132	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	高杯	－	(6.1)	(10.6)	杯部若干、脚部1/1、底部1/2	98	136	147
133	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	器台	－	(6.3)	14.8	脚部ほぼ1/1、底部1/2	98	136	147
134	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	小型丸底鉢B	(12.0)	(5.4)	－	口縁部1/4、体部1/2	98	136	147
135	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	椀B	(9.4)	2.8	－	口縁部1/2、底部完存	98	136	147
136	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	椀A	(8.2)	4.68	3.6	口縁部1/6、底部3/5	98	136	147
137	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	椀B	10.4	4.5	4.15	口縁部1/2、体部3/5	98	136	147
138	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	椀B	12.8	5.3	－	口縁部1/12欠損のみ	98	136	147
139	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	台付鉢C	(8.9)	7.05	(7.5)	1/2	98	137	147
140	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	台付鉢C	(8.9)	7.1	(6.8)	口縁部1/2、底部2/5	98	137	147
141	Ⅰ区	SD10001	下層	土師器	蓋	－	(4.4)	－	つまみ部ほぼ1/1、天井部若干	98	137	147
142	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	製塩土器	(4.4)	(4.3)	－	口縁部1/4、体部1/4	98	137	147
143	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	製塩土器	(3.2)	(3.1)	－	口縁部1/5、体部1/5	98	137	147
144	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	製塩土器	(4.2)	(2.45)	－	口縁部1/5、体部1/5	98	137	147
145	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	ミニチュア土器	(4.7)	3.8	4.05	口縁部若干、底部完存	98	137	147
146	Ⅰ区	SD10001	－	土師器	ミニチュア土器	2.7	1.35	－	ほぼ完形	98	137	147
147	Ⅰ区	SD10002	－	弥生土器	二重口縁壺A	(18.6)	(4.8)	－	口縁部1/9	98	137	148
148	Ⅰ区	SD10002	－	弥生土器	広口壺B	(15.55)	28.35	5.1	口縁部1/2、体部4/5	98	137	148
149	Ⅰ区	SD10002	－	弥生土器	甕B	(17.0)	(4.65)	－	口縁部1/3弱＋1/8＋1/8	99	137	148
150	Ⅰ区	SD10002	－	弥生土器	甕B	(13.3)	(5.95)	腹径(11.1)	口縁部1/6、体部上半1/4	99	137	148
151	Ⅰ区	SD10002	－	弥生土器	甕C	(17.2)	(3.65)	－	口縁部1/5	99	137	148
152	Ⅰ区	SD10002	－	弥生土器	高杯A	(28.0)	(3.95)	－	口縁部1/12	99	137	148
153	Ⅰ区	SD10002	－	弥生土器	高杯B	(31.25)	(5.15)	－	口縁部1/7＋1/6＋1/9＋1/7(接合不可)	99	137	148
154	Ⅰ区	SD10002	－	土師器	器台	－	(12.8)	－	脚部のみ5/6	99	137	148
155	Ⅰ区	SD10002	－	土師器	蓋	10.2	5.65	－	ほぼ完形	99	137	148
156	Ⅰ区	SD10002	－	土師器	蓋	6.7	2.8	－	完形	99	137	148
157	Ⅰ区	SD10002・10003	－	土師器	二重口縁壺A	(14.2)	(7.55)	－	口縁部1/3	99	137	148
158	Ⅰ区	SD10002・10003	－	土師器	台付鉢B	(11.9)	(4.6)	－	口縁部1/4+1/4　接合せず	99	137	148
159	Ⅰ区	SD10002・10003	－	土師器	脚部	－	(7.8)	(13.2)	口縁部3/5、脚部1/1	99	137	148
160	Ⅰ区	SD10002・10003	－	土師器	台付鉢C	(11.1)	5.8	5.35	口縁部1/4、底部完	99	137	148
161	Ⅰ区	SD10002・10003	－	土師器	ミニチュア土器	(4.1)	4.08	3.15	口縁部若干、体部5/6、底部4/5	99	137	148
162	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	甕F1	(15.9)	(7.0)	－	口縁部1/4、体部若干	99	138	149
163	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	甕E	(18.25)	(6.55)	－	1/6＋1/6	99	138	149
164	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	甕C	(16.1)	(8.2)	－	1/5	99	138	149

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
165	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	甕C	(13.4)	(4.2)	－	口縁部1/4	100	138	149
166	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	甕C	(17.1)	(5.1)	－	1/5	99	138	149
167	Ⅰ区	SD10003	－	弥生土器	甕	－	(4.8)	2.7	底部2/3	100	138	149
168	Ⅰ区	SD10003	－	弥生土器	甕	－	(5.7)	1.8	底部1/2	100	138	149
169	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	高杯A	(11.55)	(4.1)	－	1/2	100	138	149
170	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	高杯	－	(7.6)	10.2	脚部・底部1/1	100	138	149
171	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	器台B	(19.1)	(9.7)	－	口縁部1/2、受部全周	100	138	149
172	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	台付鉢C	12.8	(7.6)	－	杯部1/1、底部欠損	100	138	149
173	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	有孔鉢	(18.3)	16.2	－	口縁部1/10、体部2/3	100	138	149
174	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	有孔鉢	(14.45)	13.1	－	1/4	100	138	149
175	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	椀A	(9.05)	6.0	(4.5)	1/4弱	100	138	149
176	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	ミニチュア土器	(5.4)	3.65	3.4	口縁部1/5（端部は若干）、体部ほぼ1/1、底部1/1	100	138	149
177	Ⅰ区	SD10003	－	土師器	ミニチュア土器	－	(5.7)	腹径5.2	底部～頸部1/1、口縁部のみ欠損	100	138	149
178	Ⅰ区	流路	－	須恵器	杯身					100		150
179	Ⅰ区	流路	－	土師器	甕E2	19.4	(19.7)	－	口縁部1/2弱、体部1/3	100	138	150
180	Ⅰ区	流路	－	土師器	小型丸底壺	(8.9)	(7.3)	－	口縁部若干、体部1/3	100	138	150
181	Ⅰ区	包含層	－	須恵器	杯B蓋	(21.7)	(0.7)	－	口縁部～天井部1/10	100	138	150
182	Ⅱ区	SH20001	床面	須恵器	杯蓋	13.3	4.45	－	口縁部2/3	101	139	151
183	Ⅱ区	SH20001	床面	須恵器	杯身	13.35	5.2	－	ほぼ完形	101	139	151
184	Ⅱ区	SH20001	埋土	須恵器	杯身	12.35	4.35	－	口縁部1/5、底部完	101	139	151
185	Ⅱ区	SH20001	床面	須恵器	高杯蓋	15.25	6.25	－	口縁部1/4欠損	101	139	151
186	Ⅱ区	SH20001	埋土	須恵器	甕	－	(1.6)	－	体部破片	101	139	151
187	Ⅱ区	SH20001	埋土	須恵器	器台	－	(6.2)	(18.0)	脚部1/8	101	139	151
188	Ⅱ区	SH20001	床面	土師器	椀B	11.85	5.15	－	口縁部1/4欠損	101	139	151
189	Ⅱ区	SH20001	埋土	土師器	椀B	(12.2)	(5.2)	－	口縁部1/3～底部1/2弱	101	139	151
190	Ⅱ区	SH20001	埋土	土師器	椀B	12.1	5.4	－	口縁部3/4	101	139	151
191	Ⅱ区	SH20001	竈	土師器	甕E2	(18.0)	(10.6)	－	口縁部1/2強	101	139	151
192	Ⅱ区	SH20001	竈	土師器	甕H	(17.5)	(14.9)	－	口縁部1/3	101	139	151
193	Ⅱ区	SH20003	埋土	須恵器	壺or甕	－	(3.2)	－	体部一部	101	139	152
194	Ⅱ区	SH20003	埋土	土師器	小型丸底壺	6.35	7.1	－	口縁部 約1/4欠損	101	139	152
195	Ⅱ区	SH20003	床面	土師器	小型丸底壺	－	(6.1)	腹径(8.5)	体部1/2	101	139	152
196	Ⅱ区	SH20003	埋土	土師器	甕	－	(6.2)	腹径8.4	体部3/4	101	139	152
197	Ⅱ区	SH20003	埋土	土師器	甕E2	(15.8)	(6.78)	－	口縁部1/9、体部若干	101	139	152
198	Ⅱ区	SH20003	埋土	土師器	甕H	(15.4)	(6.0)	－	口縁部1/2弱	101	139	152
199	Ⅱ区	SH20003	床面	土師器	甕G5	13.0	(9.65)	－	口縁部完存、体部1/2	102	139	152
200	Ⅱ区	SH20003	SK20035	土師器	甕Ⅰ	(15.5)	(11.2)	－	口縁部～体部約1/4	102	139	152
201	Ⅱ区	SH20003	埋土	土師器	高杯H1	14.85	(10.6)	－	口縁部1/2、脚柱部完、底部なし	102	140	152
202	Ⅱ区	SH20003	床面	土師器	高杯H1	16.0	(5.35)	－	口縁部3/4	102	140	152
203	Ⅱ区	SH20003	埋土	土師器	高杯	－	(6.7)	9.2	脚柱部～底部完存	102	140	152
204	Ⅱ区	SH20003	床面	土師器	高杯G	－	(12.3)	14.3	脚部ほぼ完存	102	140	152
205	Ⅱ区	SH20003	床面	土師器	高杯G	20.0	15.1	(14.5)	口縁部2/3、底部1/3	102	140	152
206	Ⅱ区	SH20003	床面	土師器	高杯G	－	(10.9)	9.8	底部完　杯部1/6	102	140	153
207	Ⅱ区	SH20003	埋土	土師器	高杯	－	(6.7)	9.65	脚柱部～底部完損	102	140	153
208	Ⅱ区	SH20003	埋土	土師器	高杯	－	(6.1)	(11.0)	底部1/6	102	140	153
209	Ⅱ区	SH20003	床面	土師器	甑	－	10.5	－	底部3/4	102	140	153
210	Ⅱ区	SH20003	埋土	土師器	竈	－	(10.2)	－	体部のみ	102	140	153
211	Ⅱ区	SH20003	床面	土師器	角杯	(6.9)	17.4	－	口縁部2/3欠損	102	140	153
212	Ⅱ区	SH20004	埋土	須恵器	高杯蓋	(15.4)	6.15	－	口縁部1/3	102	141	154
213	Ⅱ区	SH20004	埋土	須恵器	高杯蓋	(11.3)	4.45	－	口縁部1/2弱	102	141	154
214	Ⅱ区	SH20004	埋土	須恵器	高杯	－	(7.5)	(9.4)	底部若干、脚柱部完存	103	141	154
215	Ⅱ区	SH20004	SK20029	土師器	甕E2	(14.5)	(4.5)	－	口縁部1/9	103	141	154
216	Ⅱ区	SH20004	P21240	土師器	甕	－	(16.7)	－	体部約3/4	103	141	154
217	Ⅱ区	SH20004	埋土	土師器	椀B	(12.5)	4.8	－	口縁部～底部約1/2	103	141	154
218	Ⅱ区	SH20004	埋土	土師器	高杯J	(14.8)	(11.2)	－	口縁部～体部2/3	103	141	154
219	Ⅱ区	SH20004	P21240	土師器	高杯	－	(8.15)	(9.4)	底部1/3、脚部完存	103	141	154
220	Ⅱ区	SH20005	埋土	須恵器	甕	－	(1.95)	－	口縁部一部	103	141	154
221	Ⅱ区	SH20006	埋土	土師器	二重口縁壺B	(15.05)	(4.25)	－	口縁部1/18	103	141	154
222	Ⅱ区	SH20006	埋土	土師器	二重口縁壺B	(11.2)	(3.9)	－	口縁部1/6	103	141	154
223	Ⅱ区	SH20006	埋土	土師器	小型丸底壺	－	(6.4)	－	体部完存、口縁部欠損	103	141	154

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
224	II区	SH20006	埋土	土師器	甕 E2	(13.6)	(7.15)	–	口縁部～体部約1/6	103	141	154
225	II区	SH20006	埋土	土師器	甕 E2	(13.0)	(6.2)	–	口縁部1/14、体部1/4	103	141	154
226	II区	SH20006	埋土	土師器	甕 G5	(14.35)	(9.15)	–	口縁部～体部1/3	103	141	154
227	II区	SH20007	埋土	須恵器	杯蓋	(14.4)	4.4	–	口縁部1/2強	104	141	155
228	II区	SH20007	床面	須恵器	杯身	(12.65)	(4.7)	–	口縁部1/4	104	141	155
229	II区	SH20007	埋土	須恵器	提瓶	(8.0)	(7.2)	–	口縁部1/2、体部若干	104	141	155
230	II区	SH20007	埋土	土師器	高杯	–	(11.2)	(11.0)	底部若干	104	141	155
231	II区	SH20009	P20307	土師器	直口壺 B	(12.05)	(11.25)	–	口縁部若干、体部全周	104	142	155
232	II区	SH20009	周壁溝	土師器	高杯 F	(17.9)	(5.6)	–	口縁部1/3	104	142	155
233	II区	SH20012	埋土	弥生土器	甕 C	(16.4)	(2.4)	–	口縁部若干	104	142	155
234	II区	SH20012	埋土	弥生土器	甕 C	(15.5)	(3.2)	–	口縁部1/7	104	142	155
235	II区	SH20012	埋土	弥生土器	甕	–	(5.2)	(5.4)	底部1/2強	104	142	155
236	II区	SH20012	埋土	弥生土器	器台 A	(23.5)	(4.3)	–	口縁部1/8(ただし端部は若干のみ)	104	142	155
237	II区	SH20014	埋土	弥生土器	甕 C	(17.0)	(4.35)	–	口縁部1/9	104	142	155
238	II区	SH20014	埋土	弥生土器	甕 C	(20.15)	(3.2)	–	口縁部1/18	104	142	155
239	II区	SH20014	埋土	弥生土器	甕 B	–	(3.4)	–	口縁部一部	104	142	155
240	II区	SH20015	埋土	土師器	甕 G5	17.8	(6.0)	–	口縁部3/4	104	142	155
241	II区	SH20015	床面	土師器	椀 B	13.6	4.8	–	口縁部3/5、体部完存	104	142	155
242	II区	SH20015	竈	土師器	高杯 H2	14.3	10.8	(10.4)	杯部完、底部1/3	105	142	155
243	II区	SH20016	埋土	土師器	甕 G5	(11.7)	(7.0)	–	口縁部1/9	105	142	156
244	II区	SH20016	埋土	土師器	甕 G4	(19.3)	(4.3)	–	口縁部1/10	105	142	156
245	II区	SH20016	埋土	土師器	甕 C	(14.6)	(3.0)	–	口縁部1/12	105	142	156
246	II区	SH20016	埋土	土師器	高杯	(11.9)	(3.3)	–	口縁部1/8	105	142	156
247	II区	SH20016	埋土	土師器	高杯	–	(8.6)	(11.3)	底部若干	105	142	156
248	II区	SH20017	床面	須恵器	台付鉢	(16.0)	(10.8)	–	口縁部1/4、脚部なし	105	143	156
249	II区	SH20017	埋土	土師器	椀 B	(14.55)	(4.75)	–	1/2弱	105	143	156
250	II区	SH20017	床面	土師器	高杯 H1	(14.2)	11.8	10.15	口縁部1/2、底部3/4	105	143	156
251	II区	SH20017	床面	土師器	高杯 J	15.9	11.35	8.2	口縁部1/3～底部4/5	105	143	156
252	II区	SH20058	竈	須恵器	無蓋高杯	(17.8)	(3.3)	–	口縁部1/16	105	143	156
253	II区	SH20058	埋土	須恵器	筒形器台	–	(4.5)	脚径(10.0)	脚部のみ若干	105	143	156
254	II区	SH20058	竈	土師器	甕 E2	(13.0)	(12.0)	腹径(17.0)	頸部2/5	106	143	156
255	II区	SH20058	床面	土師器	甕 G5	(16.15)	(6.3)	–	口縁部のみ完	106	143	156
256	II区	SH20058	床面	土師器	甕 J	19.15	(7.9)	–	口縁部のみ完	106	143	156
257	II区	SH20018	埋土	須恵器	高杯	–	(5.1)	(8.0)	底部1/18、脚部1/6	106	143	157
258	II区	SH20018	床面	土師器	甕 E2	(17.15)	(5.9)	–	口縁部2/3弱	106	143	157
259	II区	SH20018	床面	土師器	甕 E2	(12.3)	16.4	–	口縁部～体部1/2、底部ほぼ残存	106	143	157
260	II区	SH20018	埋土	土師器	鉢	(9.1)	6.55	9.6	体部～底部完、口縁部ほぼ欠損	106	143	157
261	II区	SH20018	竈	土師器	高杯 H2	14.65	(11.1)	–	口縁部3/4	106	143	157
262	II区	SH20018	竈	土師器	高杯 H2	13.9	11.1	(9.75)	底部1/2欠損	106	143	157
263	II区	SH20018	埋土	土師器	高杯 H2	14.25	(10.0)	–	杯部～脚柱部ほぼ完	106	143	157
264	II区	SH20018	埋土	土師器	高杯 H2	(14.1)	(5.8)	–	口縁部2/3弱	106	143	157
265	II区	SH20018	埋土	土師器	高杯 H2	14.35	(5.5)	–	口縁部一部欠損	106	143	157
266	II区	SH20018	床面	土師器	高杯 J	–	(8.2)	(8.0)	底部1/5、脚部4/5	106	143	157
267	II区	SH20018	埋土	土師器	高杯 J	(14.0)	9.3	(8.3)	口縁部若干、底部1/2強	106	143	157
268	II区	SH20019	床面	須恵器	無蓋高杯	–	(2.9)	–	杯部若干	107	144	157
269	II区	SH20019	P21723	土師器	高杯 J	(14.5)	(5.8)	–	口縁部1/2強	107	144	157
270	II区	SH20019	竈	土師器	製塩土器	–	(4.4)	腹径(5.7)	体部のみ若干	107	144	157
271	II区	SH20020	P26020	土師器	甕 E2	(11.7)	(3.55)	–	口縁部1/6	107	144	158
272	II区	SH20021	埋土	土師器	甕 G5	(15.0)	(5.8)	–	口縁部若干、頸部1/6	107	144	158
273	II区	SH20021	埋土	土師器	不明	(15.4)	(5.6)	–	口縁部1/8	107	144	158
274	II区	SH20022	床面	須恵器	杯蓋	(12.4)	3.9	–	口縁部1/4強	107	144	158
275	II区	SH20022	埋土	須恵器	杯蓋	(12.8)	(3.0)	–	口縁部1/12	107	144	158
276	II区	SH20022	埋土	須恵器	杯身	–	(2.1)	–	受部1/8（受部径13.0）	107	144	158
277	II区	SH20022	埋土	須恵器	高杯	–	(3.8)	(7.95)	底部1/4弱	107	144	158
278	II区	SH20022	床面	須恵器	𤭯	–	(8.3)	–	底部完存	107	144	158
279	II区	SH20022	床面	土師器	壺	(5.3)	(5.8)	–	口縁部～体部1/4	107	144	158
280	II区	SH20022	床面	土師器	甕 H	(14.6)	(11.1)	–	口縁部1/3強	107	144	158
281	II区	SH20022	SK20025	土師器	甕 G5	(19.3)	(28.3)	–	口縁部～体部1/4	107	144	158
282	II区	SH20022	竈	土師器	高杯 H2	14.3	(9.2)	–	口縁部3/4	108	144	158

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
283	II区	SH20022	SK20025	土師器	高杯 H2	(14.4)	(5.7)	–	口縁部3/4	108	144	158
284	II区	SH20022	埋土	土師器	高杯	–	(5.2)	(10.0)	底部1/2強、脚部ほぼ完	108	144	158
285	II区	SH20022	床面	土師器	高杯	5.4	(9.9)	–	底部2/3	108	144	158
286	II区	SH20022	床面	土師器	高杯	–	(9.8)	(11.2)	底部若干	108	144	158
287	II区	SH20022	床面	土師器	椀 B	(11.8)	4.8	–	口縁部1/4	108	144	159
288	II区	SH20022	床面	土師器	椀 B	(13.8)	(4.5)	–	口縁部若干	108	144	159
289	II区	SH20022	床面	土師器	製塩土器	(5.6)	(2.55)	–	口縁部1/8	108	144	159
290	II区	SH20022	床面	土師器	竈	(28.6)	(9.9)	–	口縁部1/12	108	144	159
291	II区	SH20023	床面	土師器	甕 E2	16.5	24.7	–	ほぼ完形、口縁部若干欠損	108	145	159
292	II区	SH20023	床面	土師器	台付鉢 B	(11.6)	10.25	7.4	口縁部1/4、体部3/4	108	145	159
293	II区	SH20023	埋土	土師器	小型器台 B	(9.6)	7.0	(11.7)	口縁部1/2、脚部完、底部3/5	108	145	159
294	II区	SH20024	埋土	須恵器	杯身	(13.0)	(2.9)	–	口縁部若干	108	145	159
295	II区	SH20024	SK20023	土師器	甕 G5	(18.2)	(4.25)	–	1/4弱	108	145	159
296	II区	SH20024	埋土	土師器	高杯 H2	14.7	(5.1)	–	杯部のみ	109	145	159
297	II区	SH20024	埋土	土師器	高杯	–	(7.7)	(9.8)	脚部のみ1/3	109	145	159
298	II区	SH20024	SK20023	土師器	椀 B	(12.25)	(4.8)	–	1/4	109	145	159
299	II区	SH20025	SK20031	土師器	甕 I	(12.5)	(5.45)	–	1/3	109	145	159
300	II区	SH20026	床面	土師器	甕 H	14.4	17.3	丸底	体部若干欠損	109	145	160
301	II区	SH20026	床面	土師器	甕 F2	12.65	13.1	–	口縁部3/4、体部4/5	109	145	160
302	II区	SH20026	上層	土師器	甕 E2	(13.7)	(7.9)	–	口縁部1/10、体部上半1/4	109	145	160
303	II区	SH20026	上層	土師器	甕 G4	(14.2)	(8.8)	–	口縁部～体部上半1/4	109	145	160
304	II区	SH20026	床面	土師器	甕 G1	(13.5)	(6.7)	–	口縁部1/2強	109	145	160
305	II区	SH20026	上層	土師器	甕 C	12.6	(6.3)	–	口縁部1/4欠損、頸部1/2強、体部若干	109	145	160
306	II区	SH20026	床面	弥生土器	甕	–	(2.8)	5.8	底部1/2	109	145	160
307	II区	SH20026	床面	土師器	二重口縁壺 B	(23.2)	(14.7)	–	口縁部1/14、体部上半1/8	109	145	160
308	II区	SH20026	床面	土師器	小型丸底鉢	–	(6.2)	–	口縁部欠損、頸部1/2強、体部1/1	109	145	160
309	II区	SH20026	床面	土師器	有孔鉢					110		160
310	II区	SH20026	床面	土師器	椀 A	(8.7)	(5.9)	(3.3)	口縁部若干、体部4/5	110	145	160
311	II区	SH20026	中層	土師器	鼓形器台 B	(19.7)	11.08	(17.6)	口縁部1/6、脚部1/4	110	145	160
312	II区	SH20027	床面	須恵器	杯蓋	(14.9)	4.65	–	口縁部1/4弱	110	146	161
313	II区	SH20027	埋土	須恵器	杯身	(12.8)	(5.1)	–	口縁部1/18	110	146	161
314	II区	SH20027	埋土	須恵器	杯身	(12.1)	(4.3)	–	1/10	110	146	161
315	II区	SH20027	P21570	土師器	甕 E2	(19.6)	(6.25)	–	口縁部1/12	110	146	161
316	II区	SH20027	SK20027	土師器	甕 E2	(12.8)	(6.5)	–	1/5	110	146	161
317	II区	SH20027	埋土	土師器	椀 B	(13.1)	(5.1)	–	1/4	110	146	161
318	II区	SH20027	埋土	土師器	甑	(19.4)	(8.0)	–	口縁部1/9	110	146	161
319	II区	SH20027	埋土	土師器	甑	–	(10.2)	(13.9)	底部1/5	110	146	161
320	II区	SH20027	埋土	土師器	甑	–	(12.9)	–	底部若干	110	146	161
321	II区	SH20027	竈	土師器	把手	–	(4.0)	–	把手のみ	110	146	161
322	II区	SH20028	床面	須恵器	杯蓋	14.8	4.0	–	口縁部1/2	110	146	161
323	II区	SH20028	埋土	須恵器	杯蓋	(14.2)	4.65	–	1/2弱	110	146	161
324	II区	SH20028	床面	土師器	甕 E2	(27.9)	(5.5)	–	口縁部1/12	110	146	161
325	II区	SH20028	床面	土師器	甕 E2	(16.75)	29.2	–	体部1/3欠損	110	146	161
326	II区	SH20029	P21171	土師器	甕 G5	(16.4)	(5.4)	–	口縁部1/4	110	146	161
327	II区	SH20030	埋土	土師器	甕 G5	(19.3)	(4.0)	–	口縁部1/8	111	147	162
328	II区	SH20030	埋土	土師器	器台 A	(18.9)	(6.85)	–	口縁部1/12	111	147	162
329	II区	SH20031	SK20047	土師器	甕 G3	(13.0)	(3.2)	–	口縁部若干	111	147	162
330	II区	SH20031	SK20047	土師器	鉢	(26.1)	(6.7)	–	口縁部若干	111	147	162
331	II区	SH20032	埋土	須恵器	杯身	(14.8)	(5.6)	–	口縁部3/4弱、体部1/3	111	147	162
332	II区	SH20032	埋土	須恵器	杯身	(11.8)	4.8	–	口縁部～底部約1/2弱	111	147	162
333	II区	SH20032	埋土	土師器	椀 B	12.8	4.9	–	口縁部1/4	111	147	162
334	II区	SH20032	P21230	土師器	甕 G7	(16.8)	(6.1)	–	口縁部1/12	111	147	162
335	II区	SH20033	埋土	土師器	甕 C	(13.15)	(2.5)	–	口縁部1/12	111	147	162
336	II区	SH20033	埋土	土師器	二重口縁壺 A	(18.6)	(3.9)	–	口縁部若干	111	147	162
337	II区	SH20033	P20339	土師器	器台 A	–	(11.7)	–	脚柱部のみ	111	147	162
338	II区	SH20033	P21635	土師器	有孔鉢	–	(11.5)		底部完、体部？	111	147	162
339	II区	SH20034	埋土	土師器	小型丸底鉢 B	13.25	6.55	–	口縁部～体部1/3	111	147	162
340	II区	SH20034	P21448	土師器	蓋	(7.7)	(2.55)	(4.2)	口縁部1/5欠損	112	147	162
341	II区	SH20035	床面	土師器	直口壺 A	(9.95)	16.35	腹径12.6	口縁部1/7、底部完存	112	148	163
342	II区	SH20035	床面	土師器	直口壺 B	11.65	12.7	–	完形	112	148	163

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
343	II区	SH20035	床面	土師器	小型丸底鉢 A	(12.65)	(6.7)	–	口縁部～体部1/6	112	148	163
344	II区	SH20035	床面	土師器	甕 E2	14.7	(23.5)	腹径20.1	口縁部1/2強	112	148	163
345	II区	SH20035	床面	土師器	甕 H	28.6	31.2	腹径30.2	2/3	112	148	163
346	II区	SH20035	床面	土師器	甕 E2	15.1	20.3	–	口縁部1/4、体部5/6	112	148	163
347	II区	SH20035	床面	土師器	甕 H	(13.6)	18.75	–	口縁部1/5、体部3/4強	112	148	163
348	II区	SH20035	床面	土師器	甕 H	(13.5)	(16.8)	–	口縁部・体部一部欠損	112	148	164
349	II区	SH20035	床面	土師器	甕 H	(15.15)	(10.8)	–	口縁部1/2	112	148	164
350	II区	SH20035	床面	土師器	甕 H	14.0	(4.55)	–	口縁部一部欠損	112	148	164
351	II区	SH20035	床面	土師器	甕 E2	(14.2)	(6.9)	–	口縁部1/3	112	148	164
352	II区	SH20035	床面	土師器	甕 H	(11.0)	(6.5)	–	口縁部～肩部2/5	112	148	164
353	II区	SH20035	床面	土師器	甕 G3	16.65	27.0	–	口縁部1/6欠、体部若干欠	113	149	164
354	II区	SH20035	床面	土師器	甕 G2	17.1	(17.0)	腹径(23.5)	口縁部2/3弱	113	149	164
355	II区	SH20035	床面	土師器	甕 G2	(16.0)	(5.8)	–	口縁部～肩部1/8	113	149	164
356	II区	SH20035	床面	土師器	甕 G1	(16.8)	(24.8)	腹径(21.6)	口縁部4/5、体部1/3	113	149	164
357	II区	SH20035	埋土	土師器	甕 D	(16.9)	(6.4)	–	口縁部若干、頸部1/6	113	149	164
358	II区	SH20035	床面	土師器	高杯 C	–	(5.15)	–	口縁部欠損、体部のみ	113	149	165
359	II区	SH20035	床面	土師器	高杯	–	(8.05)	(11.85)	底部1/3	113	149	165
360	II区	SH20035	床面	土師器	器台 A	–	(6.95)	(9.8)	脚部のみ	113	149	165
361	II区	SH20035	床面	土師器	高杯 D	(18.4)	14.2	(11.2)	口縁部1/2弱、底部1/3	113	149	165
362	II区	SH20035	床面	土師器	有孔鉢	–	(6.6)	–	底部1/2？	113	149	165
363	II区	SH20035	床面	土師器	台付鉢 C	(13.2)	7.55	7.1	口縁部1/6、底部ほぼ完	113	149	165
364	II区	SH20035	床面	土師器	台付鉢 C	–	(4.5)	4.6	底部ほぼ完、体部？	113	149	165
365	II区	SH20035	床面	土師器	台付鉢 C	–	(3.9)	(6.6)	底部1/4、脚4/5	113	149	165
366	II区	SH20035	床面	土師器	台付鉢 C	–	(2.4)	(4.2)	脚部のみ	113	149	165
367	II区	SH20035	SK20045	土師器	小型丸底鉢 B	(9.7)	(5.4)	–	口縁部～体部1/4	113	149	165
368	II区	SH20035	埋土	土師器	小型器台	(9.15)	(2.45)	–	口縁部1/4弱	114	149	165
369	II区	SH20035	床面	土師器	鼓形器台 A	–	(5.2)	–	口縁部付近のみ	114	149	165
370	II区	SH20035	埋土	土師器	不明	(17.05)	(4.75)	–	口縁部1/6	114	149	165
371	II区	SH20035	床面	土師器	ミニチュア土器	(5.1)	5.3	–	底部完、体部・口縁部1/4	114	149	165
372	II区	SH20036	SK20022	須恵器	杯身	–	(3.1)	–	底部1/2弱	114	150	165
373	II区	SH20036	埋土	須恵器	高杯	–	(4.05)	(11.2)	脚部破片	114	150	165
374	II区	SH20036	埋土	土師器	高杯 H2	(8.2)	(6.4)	–	口縁部1/3～脚上部のみ	114	150	165
375	II区	SH20036	埋土	土師器	製塩土器	–	(3.9)	腹径(5.0)	体部1/8	114	150	165
376	II区	SH20037	埋土	須恵器	杯蓋	(13.75)	4.55	–	口縁部1/3～体部1/3、天井部7/8	114	150	165
377	II区	SH20037	埋土	須恵器	杯身	(10.2)	(3.15)	–	口縁部若干	114	150	165
378	II区	SH20038	SK20021	土師器	甕 E2	(14.3)	20.6	–	口縁部1/2弱	114	150	166
379	II区	SH20038	埋土	土師器	甕 E2	(11.4)	(5.9)	–	1/4	114	150	166
380	II区	SH20038	埋土	土師器	甕 H	(14.75)	(8.75)	–	1/5	114	150	166
381	II区	SH20038	埋土	土師器	甕 G3	(16.5)	(3.75)	–	1/14	114	150	166
382	II区	SH20038	埋土	土師器	甕 J	(17.5)	(4.5)	–	口縁部若干	115	150	166
383	II区	SH20038	P21445	土師器	小型丸底壺	(8.3)	(6.2)	腹径(8.2)	口縁部1/8	115	150	166
384	II区	SH20038	埋土	土師器	高杯 E	14.45	(4.75)	–	杯部のみ口縁部5/6	115	150	166
385	II区	SH20039	SK20013	弥生土器	高杯 A	(23.6)	(3.4)	–	口縁部1/8	115	150	166
386	II区	SH20039	P21377	弥生土器	鉢	(17.3)	10.75	4.1	口縁部1/18、体部8/9、底部1/1	115	150	166
387	II区	SH20039	SK20013	土師器	台付鉢	–	(4.6)	4.9	底部完、体部1/2	115	150	166
388	II区	SH20040	床面	土師器	甕 G5	15.0	24.0	腹径21.8	口縁部1/4、体部下半1/2 欠損	115	150	166
389	II区	SH20040	床面	土師器	小型器台 B	(10.7)	(4.65)	–	口縁部1/6、杯部1/2、脚部若干	115	150	166
390	II区	SH20040	床面	土師器	台付鉢 C	–	(6.95)	4.6	底部1/1、体部下半1/3	115	150	166
391	II区	SH20041	床面	土師器	甕 E2	(15.75)	(7.0)	–	口縁部1/2	115	151	167
392	II区	SH20041	埋土	土師器	二重口縁壺 B	(15.7)	(8.9)	–	口縁部5/6	115	151	167
393	II区	SH20041	床面	土師器	高杯 G	21.8	15.65	14.0	口縁部1/4欠損、底部1/4欠損	115	151	167
394	II区	SH20041	床面	土師器	高杯	–	(9.25)	(9.2)	底部ほぼ完、杯部1/2	115	151	167
395	II区	SH20043	炉	土師器	椀 B	(13.6)	(5.4)	–	口縁部～体部1/5	116	151	167
396	II区	SH20044	SK20034	土師器	高杯 F	(19.6)	(10.5)	–	口縁部1/8、杯底部1/2、脚柱全周・底部欠損	116	151	167
397	II区	SH20044	P21727	土師器	高杯 E	(15.65)	10.2	(12.6)	口縁部1/10、杯部1/3、脚部2/3、底部1/2	116	151	167
398	II区	SH20045	埋土	弥生土器	二重口縁壺 A	13.7	23	17.1	口縁部3/4～体部1/3～底部5/6	116	151	167
399	II区	SH20046	SK20034	土師器	甕 G5	(21.0)	(4.3)	–	口縁部1/4	116	151	167
400	II区	SH20046	埋土	土師器	高杯	–	(7.2)	10.7	脚部1/5欠損	116	151	167

401	II区	SH20047	埋土	須恵器	杯蓋	(14.7)	4.38	–	口縁部、体部1/2弱	116	151	168
402	II区	SH20047	埋土	須恵器	杯身	(11.5)	(2.8)	–	口縁部1/8	116	151	168
403	II区	SH20049	埋土	須恵器	高杯	–	(4.5)	7.6	脚部完存	117	151	168
404	II区	SH20051	埋土	土師器	甕 I	(13.8)	(16.8)	腹径(21.6)		117	151	168
405	II区	SH20051	床面	土師器	甕 G5	(12.8)	(6.1)	–	口縁部1/4弱	117	151	168
406	II区	SH20051	床面	土師器	小型丸底鉢 A2	10.6	6.85	–	口縁部1/5欠損	117	151	168
407	II区	SH20051	埋土	土師器	鼓形器台 B	16.1	8.5	(15.45)	上半完存、底部若干	117	151	168
408	II区	SH20053	床面	土師器	甕 E2	(18.5)	(8.25)	–	口縁部1/4、頸部3/4	117	152	168
409	II区	SH20054	埋土	土師器	二重口縁壺 A	(15.1)	(5.4)	–	口縁部1/5	117	152	168
410	II区	SH20054	埋土	土師器	高杯	–	(7.0)	(10.95)	底部1/3	117	152	168
411	II区	SH20054	床面	土師器	小型丸底鉢 B	10.35	6.7	–	ほぼ完形	117	152	168
412	II区	SH20054	床面	土師器	小型丸底鉢 A	(12.1)	7.45	–	1/4	117	152	168
413	II区	SH20054	床面	土師器	小型丸底鉢 C	12.5	5.25	–	口縁部3/4	117	152	168
414	II区	SH20055	埋土	須恵器	杯蓋	(14.7)	(4.2)	–	口縁部1/6	118	152	169
415	II区	SH20055	埋土	須恵器	杯身	(10.6)	(3.75)	–	杯部1/4のみ	118	152	169
416	II区	SH20055	SK20049	土師器	高杯	–	(7.0)	(9.2)	底部3/5、脚部ほぼ完	118	152	169
417	II区	SH20055	埋土	土師器	高杯	–	(8.3)	9.9	底部8/9	118	152	169
418	II区	SH20055	竈	土師器	甕 G6	18.45	27.3	腹径27.5	口縁部5/6、体部2/3	118	152	169
419	II区	SH20055	埋土	土師器	甕 G7	(17.05)	(7.5)	–	口縁部～肩部のみ（口縁部端部3/4欠）	118	152	169
420	II区	SH20055	SK20049	土師器	甕 G7	(16.15)	(5.6)	–	口縁部1/4弱	118	152	169
421	II区	SH20055	竈	土師器	椀 B	(12.05)	5.45	–	口縁部若干、底部ほぼ完存	118	152	169
422	II区	SH20055	SK20049	土師器	甑	(25.6)	24.75	(10.6)	口縁部若干、体部1/3、底部若干	118	152	169
423	II区	SH20057	埋土	須恵器	杯蓋	(10.9)	(3.2)	–	1/7	118	153	169
424	II区	SH20057	埋土	土師器	甕 G5	(16.45)	(3.4)	–	口縁部1/4	118	153	169
425	II区	SH20057	竈	土師器	高杯 J	14.9	11.3	(10.2)	口縁部完存、底部1/3	118	153	169
426	II区	SH20057	竈	土師器	椀 B	(12.3)	6.1	–	口縁部3/4欠損、底部完	118	153	169
427	II区	SH20057	埋土	土師器	製塩土器	–	(2.8)	腹径(5.0)	体部のみ若干	118	153	169
428	II区	SH20059	床面	土師器	甕 E2	13.0	(16.2)	腹径18.6	口縁部2/3	118	153	170
429	II区	SH20059	床面	土師器	甕 H	12.8	(12.1)	–	口縁部～体部3/5	119	153	170
430	II区	SH20059	床面	土師器	高杯 J	(14.4)	11.85	10.1	口縁部1/4弱、底部3/4	119	153	170
431	II区	SH20059	床面	土師器	高杯	–	(6.3)	(10.0)	底部1/2、脚柱部完存	119	153	170
432	II区	SH20059	埋土	土師器	製塩土器	(5.0)	(3.9)	–	口縁部～体部1/8	119	153	170
433	II区	SH20060	埋土	土師器	甕 E2	(15.6)	(4.5)	–	口縁部1/4弱	119	153	170
434	II区	SH20061	埋土	須恵器	杯蓋					119		170
435	II区	SH20061	埋土	須恵器	杯蓋					119		170
436	II区	SH20062	埋土	土師器	製塩土器	(4.5)	(2.7)	–	1/9	119	153	170
437	II区	SH20060	埋土	土師器	甑					119		170
438	II区	SH24064	床面	須恵器	有蓋高杯	(11.3)	10.2	9.3	杯部1/2欠損	119	153	170
439	II区	SH24064	埋土	須恵器	甕	(32.0)	(4.0)	–	口縁部若干	119	153	170
440	II区	SH24064	埋土	土師器	甕 H	(17.2)	(5.6)	–	口縁部1/4弱	119	153	170
441	II区	SH24064	P25010	土師器	甕 H	(17.5)	(4.9)	–	口縁部1/8	119	153	170
442	II区	SH24064	埋土	土師器	甕 J	(17.7)	(5.0)	–	口縁部1/3	119	153	170
443	II区	SH24064	床面	土師器	高杯 E	(14.1)	(5.15)	–	口縁部2/5	119	153	171
444	II区	SH24064	床面	土師器	高杯 G	–	(9.3)	(10.2)	口縁部なし、底部1/6、杯部1/4	120	153	171
445	II区	SH24064	床面	土師器	高杯	–	(7.0)	(11.4)	脚部1/1、底部1/2	120	153	171
446	II区	SH24064	埋土	土師器	椀 B	(11.5)	5.3	–	口縁部1/2弱、体部～底部1/2強	120	153	171
447	II区	SH24064	埋土	土師器	製塩土器					120		171
448	II区	SH25063	埋土	須恵器	高杯	–	(6.0)	(13.0)	脚部～底部1/10	120	154	171
449	II区	SH25063	埋土	土師器	直口壺 B	8.8	(8.9)	腹径(14.5)	口縁部3/4、体部全周	120	154	171
450	II区	SH25063	埋土	土師器	高杯 J	–	9.6	10.2	脚部1/1、底部1/4、杯部1/4	120	154	171
451	II区	SH25063	埋土	土師器	高杯 J	(14.9)	(7.3)	–	口縁部1/5、脚部欠損	120	154	171
452	II区	SH25063	埋土	土師器	高杯	–	(8.8)	(12.1)	底部1/4、脚柱部完	120	154	171
453	II区	SH25063	埋土	土師器	台付鉢	–	(2.1)	(5.0)	底部1/3	120	154	171
454	II区	SH20065	埋土	土師器	小型器台 B	(12.25)	(3.9)	–	口縁部1/4、杯部1/3	120	154	171
455	II区	SH20065	埋土	土師器	器台	–	(4.0)	–	受部若干	120	154	171
456	II区	SH20065	埋土	土師器	高杯	–	(6.65)	–	脚柱のみ完存、杯底わずか	120	154	171
457	II区	SB20001	P20052	須恵器	杯身	–	(2.3)	–	受部1/16	121	154	172
458	II区	SB20004	P20222	土師器	甕 E2	(13.7)	(11.05)	腹径(14.2)	口縁部1/2弱、体部1/3	121	154	172
459	II区	SB20005	P20294	須恵器	高杯	–	(1.5)	(9.9)	底部若干	121	154	172

460	II区	SB20005	P20215	須恵器	甕	–	(3.8)	–	体部破片	121	154	172
461	II区	SB20005	P20295	土師器	高杯 H2	(14.05)	(6.8)	–	口縁部1/4、杯底1/2	121	154	172
462	II区	SB20005	P20295	土師器	直口壺 B	(9.4)	15.7	腹径14.0	口縁部1/6、体部1/1	121	154	172
463	II区	SB20006	P20426	土師器	甕 E	(20.0)	(2.2)	–	口縁部1/14	121	154	172
464	II区	SB20006	P20427	土師器	甕 G5	(18.1)	(2.1)	–	口縁部1/18	121	154	172
465	II区	SB20007	P20632	須恵器	杯蓋	(12.4)	(2.2)	–	口縁部1/5	121	154	172
466	II区	SB20007	P20635	土師器	甕	–	(11.5)	(6.4)	底部1/3、体部1/2弱	121	154	172
467	II区	SB20008	P20700	土師器	甕 G1	(16.4)	(4.45)	–	口縁部1/12	121	154	172
468	II区	SB20008	P20708 掘方	土師器	甕 E	(16.7)	(3.9)	–	口縁部1/6	122	154	172
469	II区	SB20012	P20611 掘方	土師器	甕 E	–	(2.1)	–	口縁部若干、(断面実測)	122	154	172
470	II区	SB20012	P21217	土師器	高杯	–	(2.15)	(13.95)	底部1/10	122	154	172
471	II区	SB20013	P20629	土師器	甕 C	(14.2)	(4.0)	–	口縁部1/3	122	154	172
472	II区	SB20013	P20629	土師器	高杯 I	(16.5)	(6.0)	–	口縁部1/2、杯部1/3	122	154	172
473	II区	SB20014	P20485	須恵器	杯蓋	(12.0)	(3.6)	–	口縁部若干	122	155	172
474	II区	SB20014	P20490	土師器	製塩土器	(4.5)	(2.4)	–	口縁部若干	122	155	172
475	II区	SB20016	P21907 上面	須恵器	無蓋高杯	–	(2.3)	–	杯部若干	122	155	172
476	II区	SB20016	P21905	土師器	高杯 H2	(15.1)	(5.6)	–	口縁部1/4、杯部5/6	122	155	172
477	II区	SB20016	P21905	土師器	高杯 J	14.58	(6.1)	–	口縁部1/6、体部8/9、脚部若干	122	155	172
478	II区	SB20020	P21802	須恵器	高杯	–	(3.2)	(8.3)	脚部1/8	122	155	172
479	II区	SB20022	P21457	土師器	甕 G5	(14.15)	(4.3)	–	口縁部1/12	122	155	172
480	II区	P20001	–	弥生土器	甕 A	(16.6)	(17.8)	腹径(23.2)	口縁部1/4、体部1/3	123	155	173
481	II区	P21050	–	縄文土器	深鉢	–	(2.6)	–	口縁部若干	123	155	173
482	II区	P21135	–	弥生土器	甕 F1	16.55	(11.4)	腹径(18.2)	体部上半～口縁部全周	123	155	173
483	II区	P21364	–	弥生土器	広口壺 A	(21.5)	(1.8)	–	口縁部1/12弱	123	155	173
484	II区	P21724	–	弥生土器	甕 A	(12.0)	(19.5)	(5.0)	口縁部1/6、体部上半1/6、底部1/2	123	155	173
485	II区	P22024	–	土師器	甑	–	(7.3)	腹径8.9	口縁部欠損、体部5/6	123	155	173
486	II区	P24014	–	土師器	甕	–	(2.35)	(3.05)	底部3/4	123	155	173
487	II区	P26007	–	須恵器	鉢	(32.6)	(4.3)	–	口縁部1/14	123	155	173
488	II区	P26027	–	土師器	ミニチュア土器	(4.6)	2.35	–	口縁部若干、体部1/3	123	155	173
489	II区	SK20010	–	弥生土器	甕 A	(16.4)	(16.5)	–	口縁部1/4弱、体部1/6	124	156	173
490	II区	SK20012	–	須恵器	器台	–	(4.65)	–	体部破片	124	156	173
491	II区	SK20012	–	土師器	高杯	–	(7.85)	9.8	底部3/4、脚柱部完	124	156	173
492	II区	SK20012	–	土師器	甕 C	(25.5)	(9.85)	–	口縁部1/3	124	156	173
493	II区	SK20012	–	土師器	甕 E2	(17.6)	(9.0)	–	口縁部1/2弱	124	156	173
494	II区	SK20012	–	土師器	甕 E2	(15.45)	(7.8)	–	口縁部1/2十1/4+1/16	124	156	173
495	II区	SK20016	–	弥生土器	甕 A	11.8	(19.1)	(4.8)	口縁部3/4、体部2/3、底部1/6	124	156	174
496	II区	SK20016	–	弥生土器	甕 A	(17.25)	(5.3)	–	口縁部1/6	124	156	174
497	II区	SK20017	–	須恵器	杯蓋	(12.45)	4.8	–	約1/4	124	156	174
498	II区	SK20026	–	弥生土器	二重口縁壺 A	(15.4)	(17.3)	–	口縁部1/3、体部1/8	124	156	174
499	II区	SK20026	–	弥生土器	壺	–	(17.8)	4.2	底部1/1、体部1/2強	124	156	174
500	II区	SK20026	–	弥生土器	二重口縁壺 A	(15.9)	(5.0)	–	口縁部1/2	124	156	174
501	II区	SK20026	–	弥生土器	甕 C	(13.8)	(7.8)	–	口縁部1/4弱	124	156	174
502	II区	SK20026	–	弥生土器	手焙形土器	16.55	18.95	15.9	完形	124	156	174
503	II区	SK20033	–	弥生土器	甕 D	(17.6)	(9.3)	–	口縁部1/4	125	157	175
504	II区	SK20033	–	弥生土器	甕	–	(2.43)	2.7	底部のみ完形	125	157	175
505	II区	SK20035	–	弥生土器	甕 E2	(18.9)	(19.8)	(25.7)	口縁部1/4、体部1/5	125	157	175
506	II区	SK20035	–	弥生土器	甕 E2	(16.7)	(5.2)	–	口縁部1/3	125	157	175
507	II区	SK20035	–	弥生土器	甕 F2	(14.15)	22.1	–	口縁部1/2、体部1/2強、底部1/1	125	157	175
508	II区	SK20035	–	弥生土器	甕 C	(19.6)	(7.1)	–	口縁部1/6	125	157	175
509	II区	SK20035	–	弥生土器	甕 C	(16.8)	(11.3)	–	口縁部1/2弱	125	157	175
510	II区	SK20035	–	弥生土器	甕 C	(19.8)	(6.6)	–	口縁部1/4	125	157	175
511	II区	SK20035	–	弥生土器	底部	–	(4.5)	11.5	底部1/1	125	157	175
512	II区	SK20035	–	弥生土器	高杯	–	(10.3)	(11.2)	底部若干、脚部2/3	125	157	175
513	II区	SK20035	–	弥生土器	台付鉢 C	–	(7.4)	7.7	底部完、体部2/3、口縁部なし	125	157	175
514	II区	SK20035	–	弥生土器	台付鉢 C	–	(6.8)	7.2	底部完、体部下半のみ、口縁部なし	125	157	175
515	II区	SK20035	–	弥生土器	有孔鉢					125		175
516	II区	SK20036	–	弥生土器	甕 C					125		176

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
517	II区	SK20037	–	弥生土器	甕 C					126		176
518	II区	SK20037	–	弥生土器	壺	頸径(10.2)	(22.8)	4.9	頸部1/3、体部下半完存	126	157	176
519	II区	SK20038	–	土師器	椀 B	11.9	5.2	丸底	口縁部1/3、体部3/4、底部完	126	158	176
520	II区	SK20038	–	土師器	ミニチュア土器	3.25	2.2	–	口縁端部 若干欠損	126	158	176
521	II区	SK20039	–	須恵器	高杯	(13.0)	(3.0)	–	口縁部1/8	126	158	176
522	II区	SD20001	–	弥生土器	広口壺 A	(18.9)	(6.55)	–	口縁部1/5	126	158	176
523	II区	SD20001	–	弥生土器	甕 A	(17.6)	(5.55)	–	口縁部1/4弱、体部若干	126	158	176
524	II区	SD20004	–	土師器	甕 E	(19.6)	(5.85)	–	口縁部1/4	126	158	176
525	II区	SD20005	–	弥生土器	甕	–	(9.0)	(8.8)	底部1/2弱、体部下半1/4	126	158	176
526	II区	SD20005	–	弥生土器	短頸壺 A	(17.25)	(25.3)	腹径(20.2)	口縁部1/3、体部1/4	126	158	176
527	II区	SD20006	–	弥生土器	甕 F	(14.7)	(9.5)	腹径(14.3)	口縁部4/5、体部若干	126	158	177
528	II区	SD20006	–	弥生土器	甕 F	(15.2)	(9.2)	腹径(14.0)	口縁部1/2、体部1/3	126	158	177
529	II区	SD20006	–	弥生土器	甕 E1	10.6	10.0	1.7	口縁部1/5、体部1/3、底部1/1	127	158	177
530	II区	SD20006	–	弥生土器	小型器台 A	(11.0)	7.0	(7.6)	口縁部若干、底部1/9	127	158	177
531	II区	SD20011	–	弥生土器	広口壺 A	(15.0)	(1.6)	–	口縁部1/8	127	158	177
532	II区	SD20011	–	弥生土器	広口壺	–	(4.25)	–	体部若干	127	158	177
533	II区	SD20011	–	弥生土器	甕 B	(17.7)	(3.05)	–	口縁部1/12	127	158	177
534	II区	SD20011	–	弥生土器	甕 B	(14.0)	(3.4)	–	口縁部1/4	127	158	177
535	II区	SD20011	–	土師器	甕 E2	(18.55)	(8.35)	–	口縁部1/4	127	158	177
536	II区	SD20011	–	弥生土器	底部	–	(8.8)	8.0	底部1/1	127	158	177
537	II区	SD20011	–	弥生土器	底部	–	(6.5)	10.0	底部2/3	127	158	177
538	II区	SD20011	–	弥生土器	脚	–	(8.2)	13.6	脚部のみ	127	158	177
539	II区	SD20011	–	弥生土器	脚	–	(6.6)	7.4	脚部1/1、底端部1/4欠損	127	158	177
540	II区	SD24001	–	弥生土器	甕 C	(17.0)	(5.0)	–	口縁部～頸部若干	127	159	177
541	II区	SD24001	–	弥生土器	甕 C	(16.0)	(4.15)	–	口縁部1/2	127	159	177
542	II区	SD24001	–	弥生土器	底部	–	(7.55)	(3.0)	体部下半1/4、底部若干	127	159	177
543	II区	SX20004	–	須恵器	杯身	(12.2)	5.4	3.1	口縁部1/4、体部3/5	127	159	177
544	II区	SX20004	–	土師器	甕 E2	(14.8)	(4.35)	–	口縁部1/8弱	127	159	177
545	II区	包含層	–	須恵器	杯蓋	14.6	4.4	–	口縁部1/3、体部4/5	127	159	178
546	II区	包含層	–	須恵器	杯身	(13.4)	(3.1)	–	口縁部若干	127	159	178
547	II区	包含層	–	須恵器	高杯	–	(5.7)	(10.4)	脚部1/4弱	127	159	178
548	II区	包含層	–	須恵器	直口壺	8.8	(3.75)	–	口縁若干	128	159	178
549	II区	包含層	–	須恵器	甕	(40.2)	(4.4)	–	口縁部1/9	128	159	178
550	II区	包含層	–	須恵器	器台	–	(3.4)	–	受部破片	128	159	178
551	II区	包含層	–	須恵器	器台	(41.8)	(3.4)	–	口縁部1/24	128	159	178
552	II区	包含層	–	弥生土器	甕 E1	13.5	(20.7)	腹径16.8	口縁部7/8、頸部1/1、体部1/3	128	159	178
553	II区	包含層	–	土師器	直口壺	11.0	(4.95)	–	口縁部のみ	128	159	178
554	II区	包含層	–	弥生土器	高杯 A	(20.9)	14.35	11.55	口縁部1/3、杯部4/5、底部～脚部ほぼ1/1	128	159	178
555	II区	包含層	–	土師器	器台 A	(15.0)	(8.25)	–	口縁部～受部1/2強	128	159	178
556	II区	包含層	–	土師器	小型器台 A	7.8	7.6	9.2	口縁部1/8+1/8、脚部1/8+1/8	128	159	178
557	II区	包含層	–	土師器	鉢	(18.75)	9.6	(7.45)	口縁部若干、底部1/6	128	160	178
558	II区	包含層	–	土師器	有孔鉢	(14.7)	11.8	0.9	口縁部1/8、体部1/8、底部1/1	128	160	178
559	II区	包含層	–	土師器	台付鉢 C	(10.5)	6.1	4.7	口縁部若干、体部8/9、底部1/1	128	160	179
560	II区	包含層	–	土師器	台付鉢 C	(9.95)	(5.3)	–	口縁部1/6、体部2/3	128	160	179
561	II区	包含層	–	土師器	蓋	–	(5.35)	–	つまみ部1/1、天井部若干	128	160	178
562	II区	包含層	–	土師器	竈	(26.5)	(11.65)	–	口縁部1/3	128	160	179
563	II区	包含層	–	土師器	有孔鉢					128		179
564	III区	SH30001	床面	土師器	甕 E2	15.1	24.9	腹径23.45	口縁部1/6欠損、体部1/5欠損	129	161	180
565	III区	SH30001	床面	土師器	甕 E2	17.0	(11.2)	–	口縁部4/5、体部1/5	129	161	180
566	III区	SH30001	床面	土師器	甕 E2	14.6	(9.1)	–	口縁部～体部上半	129	161	180
567	III区	SH30001	床面	土師器	甕 F2	(22.0)	(20.5)	腹径(23.0)	口縁部1/12、体部1/4	129	161	180
568	III区	SH30001	床面	土師器	甕 F1	(13.7)	12.3	7.8	口縁部1/3、体部1/2、底部1/1	129	161	180
569	III区	SH30001	床面	土師器	小型丸底壺	6.1	7.5	腹径6.95	ほぼ完形	129	161	180
570	III区	SH30001	竈	土師器	高杯 H2	14.8	(13.05)	–	杯部1/2、脚部2/3	129	161	180
571	III区	SH30001	竈	土師器	高杯 H2	15.3	(7.0)	–	杯部のみほぼ完	129	161	180
572	III区	SH30001	床面	土師器	高杯 H2	14.3	(5.1)	–	杯部4/5	129	161	180
573	III区	SH30001	床面	土師器	高杯 J	13.8	(5.55)	–	口縁部2/3	129	161	180
574	III区	SH30001	SK30035	土師器	高杯	–	(7.25)	7.6	底部1/2強、脚部1/1、体部若干	129	161	180
575	III区	SH30001	床面	土師器	高杯	–	(6.5)	(8.5)	脚部、底部のみ5/6	129	161	180

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
576	III区	SH30001	床面	土師器	鉢	(20.2)	9.4	8.6	口縁部～体部1/6、底部1/1	129	162	181
577	III区	SH30001	床面	土師器	鉢	(20.4)	7.6	13.3	口縁部1/4、底部1/1	129	162	181
578	III区	SH30001	SK30035	土師器	椀 A	(12.5)	5.4	(7.5)	口縁部1/10、底部1/3	129	162	181
579	III区	SH30001	床面	土師器	甑	27.1	(25.25)	–	口縁部・体部5/6、底部欠損	129	162	181
580	III区	SH30002	埋土	須恵器	壺					130		181
581	III区	SH30002	竈	須恵器	甕					130		181
582	III区	SH30002	埋土	土師器	甕 E2	(13.2)	(4.95)	–	口縁部1/4	130	162	181
583	III区	SH30002	床面	土師器	甕 G5	(16.55)	(4.2)	–	口縁部2/5	130	162	181
584	III区	SH30002	床面	土師器	台付鉢	–	(4.35)	(7.0)	底部2/5	130	162	181
585	III区	SH30002	床面	土師器	甑	(21.2)	(19.7)	–	口縁部～体部1/4	130	162	181
586	III区	SH30002	竈	土師器	製塩土器	(3.8)	(4.4)	–	口縁部若干、体部約1/5	130	162	181
587	III区	SH30002	竈	土師器	製塩土器	(4.4)	(3.6)	–	口縁部若干、体部約1/8	130	162	181
588	III区	SH30002	竈	土師器	製塩土器	(4.2)	(2.7)	–	口縁部若干	130	162	181
589	III区	SH30002	床面	土師器	製塩土器	–	(4.0)	腹径(4.0)	体部のみ若干	130	162	181
590	III区	SH30002	埋土	土師器	製塩土器	(4.0)	(1.8)	–	口縁部1/4	130	162	181
591	III区	SH30003	攪乱土	須恵器	杯身	(12.2)	(4.1)	–	口縁部～体部若干	130	163	182
592	III区	SH30003	床面	土師器	高杯 H2	(13.7)	(5.18)	–	口縁部1/18、体部1/4	130	163	182
593	III区	SH30003	床面	土師器	高杯 H2	(13.4)	11.9	(9.2)	口縁部若干、脚部・底部ほぼ完	130	163	182
594	III区	SH30003	床面	土師器	高杯 H2	14.55	(6.55)	–	口縁部3/4	130	163	182
595	III区	SH30003	床面	土師器	高杯 J	(15.4)	(9.25)	–	底部、脚部1/2欠損	130	163	182
596	III区	SH30003	床面	土師器	高杯 J	(15.3)	11.7	10.0	口縁部1/3、脚部2/3	130	163	182
597	III区	SH30003	床面	土師器	高杯	–	(7.5)	10.95	脚部のみ完存	130	163	182
598	III区	SH30003	床面	土師器	甑		(7.5)	–	体部9/10	130	163	182
599	III区	SH30003	床面	土師器	ミニチュア土器	4.5	2.55	–	3/4	130	163	182
600	III区	SH30003	床面	土師器	ミニチュア土器	(3.6)	2.6	–	口縁部1/3欠損	130	163	182
601	III区	SH30003	床面	土師器	ミニチュア土器	(3.55)	2.65	–	口縁部1/2弱欠損	130	163	182
602	III区	SH30003	床面	土師器	ミニチュア土器	(4.2)	2.8	–	口縁部若干、底部完	130	163	182
603	III区	SH30003	床面	土師器	ミニチュア土器	(4.5)	2.55	–	1/2弱	130	163	182
604	III区	SH30003	埋土	土師器	ミニチュア土器	2.5	1.95	–	完形	130	163	182
605	III区	SH30003	埋土	土師器	製塩土器	(3.6)	(3.9)	–	口縁部1/6、体部1/6	130	163	182
606	III区	SH30003	埋土	土師器	製塩土器	(2.8)	(3.0)	–	口縁部～体部1/8	130	163	182
607	III区	SH30003	埋土	土師器	製塩土器	(3.4)	(2.75)	–	口縁部～体部1/8	130	163	182
608	III区	SH30004	埋土	土師器	甕 E2	(13.8)	(2.95)	–	口縁部1/5	131	163	182
609	III区	SH30004	埋土	土師器	甕 G5	(15.8)	(3.9)	–	口縁部1/14	131	163	182
610	III区	SH30004	埋土	土師器	高杯 H2	(14.5)	(6.6)	–	口縁部1/4、体部1/5	131	163	182
611	III区	SH30025	埋土	須恵器	高杯					131		182
612	III区	SH30025	埋土	土師器	甕 H	(18.7)	(5.2)	–	口縁部若干	131	163	182
613	III区	SH30025	埋土	土師器	甕 E2	(14.2)	(4.1)	–	口縁部1/8	131	163	182
614	III区	SH30025	竈	土師器	高杯 E	15.8	(6.4)	–	杯部3/4	131	163	182
615	III区	SH30025	埋土	土師器	高杯 H2	13.7	(6.1)	–	杯部 口縁部若干欠損	131	163	183
616	III区	SH30025	埋土	土師器	高杯	–	(8.9)	–	脚柱部完、杯部1/6	131	163	183
617	III区	SH30025	埋土	土師器	高杯	–	(5.9)	10.0	脚部1/1、底部3/4	131	163	183
618	III区	SH30025	床面	土師器	椀 B	(12.35)	(5.5)	–	1/2弱	131	163	183
619	III区	SH30025	埋土	土師器	椀 B	(9.7)	(3.8)	–	1/2	131	163	183
620	III区	SH30025	埋土	土師器	椀 B	(13.2)	(3.9)	–	口縁部1/6	131	163	183
621	III区	SH30005	埋土	須恵器	杯蓋	(11.8)	(3.45)	–	口縁部1/12	132	164	183
622	III区	SH30005	埋土	須恵器	器台	–	(5.4)	–	頸部若干	132	164	183
623	III区	SH30005	埋土	須恵器	器台	–	(6.0)	–	受部・脚部若干	132	164	183
624	III区	SH30005	埋土	土師器	甕 E2	17.0	(22.1)	腹径(24.8)	口縁部～体部下半2/3	132	164	183
625	III区	SH30005	埋土	土師器	甕 E2	16.95	(13.0)	–	口縁部2/3、体部上半1/4	132	164	183
626	III区	SH30005	埋土	土師器	甕 H	15.85	(12.1)	–	口縁部9/10、体部上半1/2強	132	164	183
627	III区	SH30005	埋土	土師器	甕 E2	16.7	(12.6)	–	口縁部完、体部1/2	132	164	183
628	III区	SH30005	埋土	土師器	甕 E2	15.0	(10.5)	–	口縁部3/5、体部1/3	132	164	184
629	III区	SH30005	埋土	土師器	甕 H	13.3	(5.75)	–	口縁部3/4、体部若干	132	164	184
630	III区	SH30005	埋土	土師器	甕 E2	(11.9)	(3.3)	–	口縁部1/4	132	164	184
631	III区	SH30005	埋土	土師器	甕 J	(14.35)	(5.95)	–	口縁部1/4	132	164	184
632	III区	SH30005	埋土	土師器	二重口縁壺 B	(23.8)	(11.8)	–	口縁部若干、頸部1/4弱	132	164	184
633	III区	SH30005	埋土	土師器	二重口縁壺 A	12.0	(11.4)	腹径(16.1)	口縁部1/2、体部1/4	132	164	184
634	III区	SH30005	埋土	土師器	高杯 F	(23.65)	(10.5)	–	杯部1/4	132	165	184
635	III区	SH30005	埋土	土師器	高杯 J	(15.0)	(5.8)	–	杯部1/3	132	165	184

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
636	III区	SH30005	埋土	土師器	高杯 J	14.1	(6.45)	–	杯部3/5	132	165	184
637	III区	SH30005	埋土	土師器	高杯 J	14.2	12.7	10.2	ほぼ完形（口縁部若干欠損）	132	165	184
638	III区	SH30005	埋土	土師器	高杯 J	–	(11.3)	(10.6)	底部3/4、脚部1/1、杯部1/3	132	165	184
639	III区	SH30005	埋土	土師器	高杯	–	(8.25)	9.6	杯部若干、脚部3/4	133	165	184
640	III区	SH30005	埋土	土師器	高杯	–	(7.2)	14.6	脚部1/1、底部1/3	133	165	184
641	III区	SH30005	埋土	土師器	高杯	–	(6.7)	–	脚部1/2	133	165	184
642	III区	SH30005	埋土	土師器	甑	(24.7)	(20.9)	–	体部下半～底部完存	133	165	185
643	III区	SH30005	埋土	韓式土器	甕	–	(3.4)	(11.3)	底部若干	133	165	185
644	III区	SH30006	埋土	須恵器	器台	(33.6)	(5.9)	–	口縁部1/14	133	165	185
645	III区	SH30006	埋土	土師器	無頸壺	(4.0)	(5.9)	–	1/2	133	165	185
646	III区	SH30006	埋土	土師器	小型丸底壺	4.0	5.1	–	ほぼ完形	133	165	185
647	III区	SH30006	竈	土師器	高杯 H1	(15.75)	11.95	11.0	底部1/4、杯部1/2弱欠損	133	165	185
648	III区	SH30006	竈	土師器	高杯 H2	(12.9)	(5.6)	–	口縁部1/2、脚部・底部欠損	133	165	185
649	III区	SH30006	埋土	土師器	高杯 G	–	(8.8)	–	杯部1/2	133	165	185
650	III区	SH30006 カマド	竈	土師器	椀 B	(10.65)	4.85	–	1/2	133	165	185
651	III区	SH30006 カマド	竈	土師器	製塩土器	–	(2.4)	–	体部小片	133	165	185
652	III区	SH30007	埋土	土師器	甕 D	(24.05)	(5.2)	–	口縁部1/18	134	166	186
653	III区	SH30007	埋土	土師器	高杯 E	(14.7)	(4.9)	–	口縁部1/2弱	134	166	186
654	III区	SH30007	埋土	土師器	高杯	–	(6.9)	8.9	底部3/4、脚部1/1	134	166	186
655	III区	SH30007	埋土	土師器	鼓形器台 A	(10.7)	(3.4)	–	口縁部1/7	134	166	186
656	III区	SH30008	床面	土師器	甕 E2	(17.0)	(25.8)	腹径(20.95)	口縁部1/3、頸部1/3、体部3/4	134	166	186
657	III区	SH30008	床面	土師器	甕 G4	(14.0)	(12.6)	–	口縁部2/5、体部1/4	134	166	187
658	III区	SH30008	埋土	土師器	甕 G4	(14.1)	(5.1)	–	口縁部1/4、頸部1/4、肩部1/4	134	166	186
659	III区	SH30008	床面	土師器	甕 G2	(17.0)	(6.0)	–	口縁部1/5	134	166	186
660	III区	SH30008	床面	土師器	甕 E2	15.3	(10.0)	腹径16.0	口縁部3/4、体部上半3/4	134	166	186
661	III区	SH30008	埋土	土師器	甕 G2	(16.7)	(6.4)	–	口縁部1/4 頸部1/4、肩部若干	134	166	186
662	III区	SH30008	埋土	土師器	甕 G1	13.5	(12.5)	–	口縁部完、体部1/6	134	166	186
663	III区	SH30008	埋土	土師器	甕 G5	(12.25)	(3.6)	–	口縁部1/3	134	166	186
664	III区	SH30008	埋土	土師器	甕 D	(11.7)	(4.4)	–	口縁部3/4弱	134	166	187
665	III区	SH30008	埋土	土師器	二重口縁壺 B	(12.4)	(4.15)	–	口縁部若干	134	166	187
666	III区	SH30008	埋土	土師器	二重口縁壺 A	(15.45)	(7.05)	–	口縁部1/8	134	166	187
667	III区	SH30008	埋土	土師器	短頸壺	(8.1)	(9.2)	–	口縁部～体部3/4	135	166	187
668	III区	SH30008	床面	土師器	底部	–	(11.5)	4.45	底部のみ	135	166	187
669	III区	SH30008	埋土	土師器	高杯 C	(23.2)	(5.7)	–	口縁部1/3	135	166	187
670	III区	SH30008	床面	土師器	高杯 C	21.35	14.9	12.6	完形	135	166	187
671	III区	SH30008	床面	土師器	器台	–	(13.0)	(12.9)	底部1/2、脚部1/1、受部若干	135	166	187
672	III区	SH30008	埋土	土師器	小型器台 B	10.2	8.45	9.7	口縁部2/3残、脚部1/3欠損	135	166	187
673	III区	SH30008	埋土	土師器	台付鉢 C	(9.8)	6.15	5.0	口縁部1/3欠損	135	166	187
674	III区	SH30008	床面	土師器	椀 A	(8.6)	5.9	2.85	完形	135	166	187
675	III区	SH30008	埋土	土師器	小型丸底鉢 A	–	(6.05)	–	2/3（口縁端部は欠損）	135	166	187
676	III区	SH30008	埋土	土師器	ミニチュア土器	–	(3.1)	3.0	口縁端部欠損	135	166	187
677	III区	SH30008	埋土	土師器	ミニチュア土器	3.5	2.7	–	完形	135	166	187
678	III区	SH30009	埋土	須恵器	杯身	(12.4)	(3.5)	(7.9)	1/4弱	135	167	187
679	III区	SH30010	埋土	須恵器	杯蓋	(13.1)	(4.0)	–	1/4	135	167	188
680	III区	SH30010	埋土	須恵器	杯身	(11.5)	(4.3)	–	口縁部若干、受部1/8	135	167	188
681	III区	SH30010	埋土	須恵器	蓋	(13.8)	(2.5)	–	口縁部1/8	135	167	188
682	III区	SH30010	埋土	須恵器	甕	–	(3.1)	–	口縁部若干	135	167	188
683	III区	SH30010	埋土	土師器	甕 E2	(16.6)	(9.5)	–	口縁部1/4強	135	167	188
684	III区	SH30010	床面	土師器	甕 G5	19.45	(7.8)	–	口縁部3/4	135	167	188
685	III区	SH30010	床面	土師器	直口壺 C	–	(10.9)	–	頸部1/3、体部1/2強、底部ほぼ完存	135	167	188
686	III区	SH30010	SK30034	土師器	高杯 J	(14.5)	11.1	10.3	口縁部1/8、底部4/5	135	167	188
687	III区	SH30010	埋土	土師器	製塩土器	(11.8)	(3.4)	–	口縁部1/18	136	167	188
688	III区	SH30010	埋土	土師器	製塩土器	(5.2)	(2.7)	–	1/8	136	167	188
689	III区	SH30011	上層	土師器	甕 G2	(16.6)	(10.4)	–	1/4	136	167	188
690	III区	SH30011	–	土師器	甕 I	(12.9)	(5.7)	–	口縁部1/2	136	167	188
691	III区	SH30011	埋土	土師器	二重口縁壺 B	14.2	(5.45)	–	口縁部から頸部のみ	136	167	188
692	III区	SH30011	埋土	土師器	直口壺 C	8.65	13.85	腹径13.6	口縁部1/4欠損、体部ほぼ完	136	167	188
693	III区	SH30011	埋土	土師器	小型丸底壺	(8.0)	8.75	–	口縁部1/2欠損、体部完	136	167	189

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
694	III区	SH30011	埋土	土師器	小型丸底壺	6.8	8.4	腹径8.6	口縁部4/5、体部7/8、底部完	136	167	189
695	III区	SH30011	埋土	土師器	小型丸底壺	6.6	7.1	–	口縁部1/2強、体部若干欠損	136	167	189
696	III区	SH30011	床面	土師器	高杯 F	20.7	(7.3)	–	口縁部～杯部2/3	136	167	189
697	III区	SH30011	埋土	土師器	高杯	–	(6.5)	10.8	脚部1/1、底部4/5	136	167	189
698	III区	SH30011	埋土	土師器	高杯	–	(5.2)	(7.7)	脚部2/3	136	167	189
699	III区	SH30011	床面	土製品	紡錘車	長4.0	幅4.0	厚2.65	若干欠損	136	167	189
700	III区	SH30012	埋土	土師器	鉢	(19.6)	(5.6)	–	口縁部若干	136	168	189
701	III区	SH30012	埋土	土師器	甕 G5	(16.2)	(5.2)	–	口縁部1/8	136	168	189
702	III区	SH30012	埋土	土師器	二重口縁壺 A	(27.5)	(4.85)	–	口縁部若干	136	168	189
703	III区	SH30012	P30027	土師器	二重口縁壺 A	(24.6)	(4.15)	–	口縁部1/5	136	168	189
704	III区	SH30022	埋土	土師器	二重口縁壺 A	(16.6)	(6.5)	–	口縁部1/4	137	168	189
705	III区	SH30022	床面	土師器	甕 E2	(15.9)	(15.5)	–	口縁部1/3、体部上半1/2	137	168	189
706	III区	SH30022	床面	土師器	甕 H	(13.7)	(12.1)	腹径15.6	口縁部1/2、体部1/4	137	168	189
707	III区	SH30022	床面	土師器	台付鉢 C	–	(6.5)	–	口縁部・底部欠損	137	168	189
708	III区	SH30022	床面	土師器	小型丸底鉢 B	(8.3)	(4.1)	腹径6.9	口縁部欠損、体部完	137	168	189
709	III区	SH30022	床面	土師器	椀 A	10.8	3.6	6.4	口縁部若干欠損	137	168	189
710	III区	SH30022	埋土	土師器	山陰型甑	–	(7.65)	(13.8)	底部1/10	137	168	189
711	III区	SH30022	埋土	土師器	山陰型甑	–	(4.6)	–	体部（突帯部分） 若干	137	168	189
712	III区	SH30013	床面	土師器	椀 B	(13.6)	5.5	–	口縁部若干、体部1/2	137	168	190
713	III区	SH30014	竈	須恵器	杯蓋	(14.2)	(4.3)	–	口縁部1/9欠損	137	168	190
714	III区	SH30015	床面	須恵器	杯蓋	13.5	5.2	–	口縁部1/4欠損	137	168	190
715	III区	SH30016	埋土	須恵器	壺	(8.2)	(3.1)	–	口縁部1/4	137	168	190
716	III区	SH30016	床面	土師器	椀 B	10.2	(5.8)	腹径10.9	口縁部3/4、体部2/3	138	168	190
717	III区	SH30016	床面	土師器	高杯 J	(13.8)	(12.25)	9.95	口縁部1/2欠損	138	168	190
718	III区	SH30016	床面	土師器	高杯 G	(21.6)	(6.4)	–	口縁部1/4	138	168	190
719	III区	SH30016	埋土	土師質	不明品					138		190
720	III区	SH30017	SK30012	土師器	甕 E2	15.25	(26.5)	腹径(27.1)	体部1/3欠損	138	169	190
721	III区	SH30017	埋土	土師器	甕 C	(14.2)	(6.6)	腹径(13.8)	口縁部1/4	138	169	190
722	III区	SH30017	埋土	土師器	底部	–	(3.7)	4.65	底部1/1	138	169	190
723	III区	SH30017	床面	土師器	壺	–	(7.9)	腹径(10.6)	体部2/5	138	169	190
724	III区	SH30017	埋土	土師器	高杯 F	–	(2.3)	–	杯部下半1/2弱	138	169	190
725	III区	SH30017	SK30012	土師器	高杯	–	(5.8)	(11.0)	脚柱1/1、脚裾1/5	138	169	190
726	III区	SH30017	埋土	土師器	高杯	–	(5.8)	(12.0)	脚柱2/3、脚裾1/4	138	169	190
727	III区	SH30019	埋土	須恵器	杯身	(10.0)	(4.5)	–	口縁部1/4	138	169	191
728	III区	SH30019	埋土	須恵器	無蓋高杯	(15.7)	(3.75)	–	口縁部1/12	138	169	191
729	III区	SH30019	埋土	土師器	甕 I	(13.0)	(19.4)	–	口縁部若干、体部1/2弱、底部欠損	138	169	191
730	III区	SH30019	埋土	土師器	甕 G5	(18.1)	(5.4)	–		138	169	191
731	III区	SH30019	埋土	土師器	高杯	–	(5.3)	10.7	脚部1/1、底部2/3	139	169	191
732	III区	SH30019	埋土	土師器	椀 B	(12.3)	(4.3)	–	口縁部1/16、体部1/5	139	169	191
733	III区	SH30036	埋土	土師器	高杯 H2	14.5	12.0	(10.0)	杯部2/3弱、脚部1/1、裾部1/4	139	169	191
734	III区	SH30036	床面	土師器	高杯 H2	13.5	10.0	(9.1)	杯部1/7欠損、脚部裾1/8	139	169	191
735	III区	SH30036	床面	土師器	高杯 J	(14.7)	(6.15)	–	杯部のみ、口縁部若干、杯底部完	139	169	191
736	III区	SH30020	埋土	須恵器	杯蓋	(12.7)	(3.05)	–	口縁部1/18	139	170	191
737	III区	SH30020	埋土	須恵器	蓋	–	(1.55)	–	つまみのみ	139	170	191
738	III区	SH30020	埋土	須恵器	壺	(10.7)	(2.3)	–	口縁部小片	139	170	191
739	III区	SH30020	埋土	須恵器	甕	(19.8)	(6.3)	–	口縁部1/6	139	170	191
740	III区	SH30020	SK30015	土師器	直口壺 B	(7.7)	(14.75)	–	1/2	139	170	191
741	III区	SH30020	床面	土師器	甕 G5	(19.3)	(11.1)	–	口縁部1/2弱、頸部～体部上半1/6	139	170	192
742	III区	SH30020	SK30013	土師器	鉢	(29.5)	(10.45)	–	口縁部1/10、体部若干	139	170	192
743	III区	SH30020	SK30015	土師器	甕 G5	17.9	(14.5)	–	口縁部1/1、体部上半1/3	139	170	192
744	III区	SH30020	SK30013	土師器	甕 I	(14.1)	(4.35)	–	口縁部1/5、頸部1/8	139	170	192
745	III区	SH30020	SK30015	土師器	高杯 H2	(15.0)	11.0	(8.4)	口縁部若干、体部1/3、底部1/6	139	170	192
746	III区	SH30020	埋土	土師器	高杯 H2	(16.35)	10.95	(10.3)	口縁部1/5、底部5/6	139	170	192
747	III区	SH30020	床面	土師器	高杯 H2	(15.75)	(6.8)	–	口縁部1/3	139	170	192
748	III区	SH30020	床面	土師器	高杯	–	(7.1)	(8.6)	底部1/7、脚部1/2、杯部若干	139	170	192
749	III区	SH30020	床面	土師器	椀 B	12.7	4.3	–	口縁部1/5欠損	139	170	192
750	III区	SH30020	竈	土師器	甑	(21.6)	(17.3)	–	1/3	139	170	192
751	III区	SH30024	埋土	土師器	短頸壺	(16.2)	(8.6)	–	口縁部1/8強	140	170	192
752	III区	SH30026	埋土	土師器	甕 G5	16.45	(11.0)	–	口縁部1/3弱、体部若干	140	171	193
753	III区	SH30026	埋土	土師器	高杯 G	21.9	(8.5)	–	杯部のみ	140	171	193

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
754	III区	SH30026	床面	土師器	高杯 F	19.25	(6.05)	–	杯部・口縁部3/4	140	171	193
755	III区	SH30026	埋土	土師器	高杯 E	(16.2)	(6.45)	–	杯部・口縁部1/5	140	171	193
756	III区	SH30026	埋土	土師器	高杯	–	(7.1)	(9.9)	底部1/3	140	171	193
757	III区	SH30026	埋土	土師器	椀 A	(13.0)	5.5	5.2	口縁部若干、底部2/3	140	171	193
758	III区	SH30026	埋土	土師器	椀 A	(11.0)	6.1	(6.3)	口縁部1/8、底部1/2弱	140	171	193
759	III区	SH30027	床面	須恵器	杯身	(10.5)	4.85	–	口縁部1/3	140	171	193
760	III区	SH30027	埋土	須恵器	甕	(19.9)	(5.7)	–	口縁部1/12	140	171	193
761	III区	SH30027	SK30037	土師器	甕 G5	16.9	(25.5)	腹径27.15	口縁部3/1 、体部1/4欠損	140	171	193
762	III区	SH30027	SK30018	土師器	甕 E2	(18.9)	(6.9)	–	口縁部1/5	140	171	193
763	III区	SH30027	床面	土師器	高杯 H2	15.1	(5.85)	–	杯部1/3	140	171	193
764	III区	SH30027	埋土	土師器	高杯 J	(14.8)	(5.6)	–	杯部1/3	140	171	193
765	III区	SH30027	埋土	土師器	高杯	–	(7.45)	(10.6)	杯若干、脚部完、底部2cm	140	171	193
766	III区	SH30028	埋土	須恵器	杯蓋	(11.8)	(3.4)	–	口縁部若干	141	171	194
767	III区	SH30029	埋土	須恵器	甕					141		194
768	III区	SH30029	埋土	土師器	甕 I	(16.0)	(11.55)	–	口縁部1/6	141	172	194
769	III区	SH30029	床面	土師器	甕 G5	(18.3)	(6.35)	–	口縁部1/4	141	172	194
770	III区	SH30029	埋土	土師器	直口壺 B	(10.5)	(11.2)	–	口縁部3/4、体部上半1/3	141	172	194
771	III区	SH30029	埋土	土師器	高杯 H2	(14.35)	(6.2)	–	杯部1/2	141	172	194
772	III区	SH30029	埋土	土師器	高杯 J	(13.1)	(5.3)	–	口縁部若干、杯底部完	141	172	194
773	III区	SH30029	SK30017	土師器	高杯 J	13.35	10.95	10.05	杯部1/3欠損	141	172	194
774	III区	SH30031	床面	土師器	直口壺 B	(9.5)	(14.35)	腹径15.2	口縁部2/3、体部5/6	141	172	194
775	III区	SH30031	床面	土師器	高杯 G	22.35	(9.6)	–	杯部のみ1/2	141	172	194
776	III区	SH30031	床面	土師器	高杯 J	14.0	12.4	9.5	口縁部若干欠損	141	172	194
777	III区	SH30031	埋土	土師器	高杯 J	(14.5)	11.8	9.6	口縁部1/3、脚部2/3	141	172	194
778	III区	SH30031	床面	土師器	高杯 J	14.65	(5.4)	–	杯部のみほぼ完	142	172	194
779	III区	SH30032	埋土	須恵器	甕	(25.4)	(2.95)	–	口縁部1/12	142	172	195
780	III区	SH30032	床面	土師器	甕 J	16.4	(7.7)	–	口縁部1/4欠損	142	172	195
781	III区	SH30032	床面	土師器	甕 E2	16.9	(14.2)	–	口縁部2/3、体部上半のみ	142	172	195
782	III区	SH30032	床面	土師器	高杯 H1	13.85	(4.7)	–	口縁部1/4欠損	142	172	195
783	III区	SH30032	埋土	土師器	高杯	–	(5.5)	10.15	底部～脚部2/3	142	172	195
784	III区	SH30032	床面	土師器	高杯	–	(8.9)	12.1	脚底部完存	142	172	195
785	III区	SH30032	床面	土師器	椀 A	(14.45)	6.8	8.1	口縁部1/2欠損、底部完	142	172	195
786	III区	SH30033	埋土	須恵器	無蓋高杯	–	(5.0)	–	杯底部のみ1/5	142	173	195
787	III区	SH30033	SK30020	土師器	二重口縁壺 B	(15.5)	(4.35)	–	口縁部1/4	142	173	195
788	III区	SH30033	P30724	土師器	甕 E2	(16.4)	(9.65)	–	口縁部1/4	142	173	195
789	III区	SH30035	P30719	土師器	二重口縁壺 B	(26.6)	(14.0)	–	口縁部1/4	142	173	195
790	III区	SH30035	P30719	土師器	甕 E2	(14.9)	(3.5)	–	口縁部1/6	142	173	195
791	III区	SH30035	P30709	土師器	底部	–	(4.4)	4.3	体部3/5、底部完	143	173	195
792	III区	SH30035	SK30021	土師器	小型丸底鉢 A1	(12.0)	(4.75)	–	口縁部1/8	143	173	196
793	III区	SB30001	P30177	土師器	甕 E	(20.4)	(2.2)	–	口縁部1/12	143	173	196
794	III区	SB30006	P30387	土師器	高杯 H2	(13.2)	(4.85)	–	口縁部1/10、体部1/8	143	173	196
795	III区	P30185	–	土師器	ミニチュア土器	(3.4)	3.15	2.55	口縁部若干、体部1/4、底部完	143	173	196
796	III区	SK30001	–	須恵器	杯身	(11.0)	5.0	–	口縁部1/2、底部3/4	143	173	196
797	III区	SK30002	–	須恵器	杯蓋	(11.7)	(4.2)	–	口縁部1/4弱	143	173	196
798	III区	SK30002	–	須恵器	杯蓋	(12.0)	4.0	–	口縁部1/4弱、天井部1/2弱	143	173	196
799	III区	SK30002	–	土師器	甕 I	16.45	(8.65)	–	口縁部3/4、体部1/3	143	173	196
800	III区	SK30002	–	土師器	高杯 H2	(14.7)	(7.8)	–	口縁部1/2強、体部4/5、脚部欠損	143	173	196
801	III区	SD30001	中層	須恵器	杯蓋	(11.35)	(4.45)	–	1/2	143	174	196
802	III区	SD30001	–	須恵器	杯蓋	12.4	4.35	–	完形	143	174	196
803	III区	SD30001	上層	須恵器	杯身	(10.2)	4.6	–	口縁部1/7、杯部1/5	143	174	196
804	III区	SD30001	下層	須恵器	杯身	(10.7)	5.28	–	口縁部1/4、体部4/5	143	174	196
805	III区	SD30001	–	須恵器	杯身	11.4	5.4	–	ほぼ完形	143	174	196
806	III区	SD30001	–	須恵器	杯身	12.1	4.75	–	口縁部1/4欠損	143	174	196
807	III区	SD30001	下層	須恵器	杯身	(11.65)	5.4	–	口縁部2/5、杯部3/5	143	174	196
808	III区	SD30001	下層	須恵器	杯身	(13.4)	3.45	–	口縁端部若干、体部～底部1/2	143	174	196
809	III区	SD30001	–	須恵器	杯身	12.2	4.55	–	口縁部1/12欠損、体部完	143	174	196
810	III区	SD30001	–	須恵器	杯	9.15	3.5	(5.2)	3/5	143	174	196
811	III区	SD30001	上層	須恵器	杯 B 蓋	(14.5)	2.4	–	口縁部1/8、天井部3/4	143	174	196
812	III区	SD30001	–	須恵器	高杯	–	(12.9)	(12.6)	底部1/3、脚柱部全周	144	174	196
813	III区	SD30001	–	須恵器	𤭯	–	(12.7)	腹径(15.5)	頸部1/3、体部～底部1/2強	144	174	197

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
814	III区	SD30001	–	須恵器	甕	12.1	15.5	腹径10.4	口縁部1/4欠損	144	174	197
815	III区	SD30001	–	須恵器	甕	–	(10.65)	腹径9.2	口縁部1/2（端部は欠損）、体部3/4	144	174	197
816	III区	SD30001	上層	須恵器	甕	–	(8.5)	–	口縁部若干	144	174	197
817	III区	SD30001	–	須恵器	甕	(18.95)	(3.15)	–	口縁部1/12	144	174	197
818	III区	SD30001	下層	須恵器	甕	(17.7)	(4.8)	–	口縁部1/5	144	174	197
819	III区	SD30001	中層	須恵器	甕	(25.9)	(6.5)	–	口縁部1/8	144	174	197
820	III区	SD30001	下層	須恵器	甕	20.2	(8.4)	–	口縁部3/5、体部若干	144	174	197
821	III区	SD30001	–	須恵器	甕	(25.0)	(10.7)	–	口縁部1/2、体部若干	144	174	197
822	III区	SD30001	–	須恵器	甕	–	(11.9)	–	体部若干	144	174	197
823	III区	SD30001	最下層	弥生土器	広口壺 A	(29.1)	(5.6)	–	口縁部1/6	144	175	198
824	III区	SD30001	–	土師器	二重口縁壺 A	22.0	(12.35)	–	口縁部全周	144	175	198
825	III区	SD30001	–	土師器	壺	–	(6.5)	–	頸部2/3、肩部2/3	144	175	198
826	III区	SD30001	–	土師器	壺	–	(5.0)	–	肩部破片	144	175	198
827	III区	SD30001	–	土師器	直口壺 B2	(8.8)	15.65	腹径15.0	口縁部1/3、頸部1/2、体部9/10	144	175	198
828	III区	SD30001	–	土師器	小型丸底壺	(7.8)	8.7	腹径8.6	口縁部1/4、体部3/5	144	175	198
829	III区	SD30001	下層	土師器	小型丸底壺	(8.9)	(5.6)	腹径(8.6)	口縁部1/3、体部上半1/3	144	175	198
830	III区	SD30001	–	土師器	小型丸底壺	(9.4)	(6.3)	–	口縁部2/3、体部上半3/4	144	175	198
831	III区	SD30001	中層	土師器	小型丸底壺	(10.65)	(6.3)	腹径(10.5)	口縁部1/5、体部1/4	144	175	198
832	III区	SD30001	最下層	土師器	甕 E2	(16.1)	(19.1)	腹径26.9	口縁部3/4、体部1/3	144	175	198
833	III区	SD30001	–	土師器	甕 E2	17.0	(18.1)	(24.0)	口縁部1/2、体部1/3	144	175	198
834	III区	SD30001	下層	土師器	甕 E2	14.15	(9.1)	–	口縁部全周、体部1/4	144	175	198
835	III区	SD30001	–	土師器	甕 G5	14.3	(12.0)	–	口縁部1/2、体部上半1/2	144	175	198
836	III区	SD30001	下層	土師器	甕 E2	13.3	(10.7)	–	口縁部3/4強、体部上半1/2	144	176	199
837	III区	SD30001	–	土師器	甕 H	15.0	(11.1)	–	口縁部2/3、体部上半1/2	145	176	199
838	III区	SD30001	–	土師器	甕 G7	16.7	(13.75)	–	口縁部ほぼ完、体部1/4	145	176	199
839	III区	SD30001	下層	土師器	甕 G7	15.4	(7.6)	–	口縁部2/3、頸部2/3、体部若干	145	176	199
840	III区	SD30001	上層	土師器	甕 E2	(11.5)	8.1	0.8	口縁部1/3、体部1/2、底部1/1	145	176	199
841	III区	SD30001	下層	土師器	甕 G5	19.1	(6.15)	–	口縁部4/5、体部若干	145	176	199
842	III区	SD30001	–	土師器	甕 E2	(15.9)	28.1	腹径(25.4)	口縁部1/6弱、体部1/3	145	176	199
843	III区	SD30001	–	土師器	甕 G4	14.3	(18.8)	–	口縁部3/4、体部2/3	145	176	199
844	III区	SD30001	–	土師器	甕 G5	(14.7)	(8.1)	–	口縁部1/3、頸部1/3、肩部若干	145	176	199
845	III区	SD30001	–	土師器	甕 G3	(13.2)	(13.5)	腹径(19.05)	口縁部～体部1/4弱	145	176	199
846	III区	SD30001	–	土師器	甕 G4	(14.4)	(7.3)	–	口縁部1/3 他に同一個体の口縁あり	145	176	199
847	III区	SD30001	–	土師器	甕 D	(23.7)	(17.65)	腹径(27.05)	口縁部1/4、体部1/5	145	177	200
848	III区	SD30001	–	土師器	甕 D	(27.75)	(16.9)	腹径(29.1)	口縁部1/4、体部1/3	145	177	200
849	III区	SD30001	–	土師器	甕 D	26.0	(15.1)	–	口縁部～体部上半3/4	145	177	200
850	III区	SD30001	–	土師器	甕 C	(14.0)	(10.5)	腹径(14.0)	口縁部1/4、体部上半1/2	145	177	200
851	III区	SD30001	最下層	土師器	甕	–	(13.1)	4.8	底部1/1、体部下半のみ	145	177	200
852	III区	SD30001	–	土師器	高杯 F	(20.2)	15.1	13.35	口縁部・底部1/5、脚部7/8	145	177	200
853	III区	SD30001	–	土師器	高杯	(12.65)	(4.85)	–	杯部のみ完	146	177	200
854	III区	SD30001	–	土師器	高杯 E	18.7	(5.1)	–	杯部3/4	146	177	200
855	III区	SD30001	中層	土師器	高杯 E	(17.8)	(11.45)	(11.2)	杯部1/3、脚部2/3	146	177	200
856	III区	SD30001	–	土師器	高杯 E	(15.8)	11.3	(9.8)	口縁部1/2弱、体部～脚部4/5	146	177	200
857	III区	SD30001	中層	土師器	高杯 J	(13.15)	10.75	8.5	脚部・底部完、口縁部1/4	146	177	201
858	III区	SD30001	下層	土師器	高杯 J	(13.4)	11.7	(9.9)	口縁部若干、底部2/3	146	177	201
859	III区	SD30001	–	土師器	高杯 J	(14.8)	(10.8)	(9.1)	口縁部1/2弱、杯部1/3、脚部3/4、底部1/2	146	177	201
860	III区	SD30001	下層	土師器	高杯	–	(11.65)	(10.1)	口縁部欠損、底部1/9、脚部1/3強	146	177	201
861	III区	SD30001	中層	土師器	高杯	–	(8.2)	10.3	底部3/4、脚部1/1、杯部若干	146	177	201
862	III区	SD30001	下層	土師器	器台 B	(18.5)	16.05	(13.0)	2/3	146	178	201
863	III区	SD30001	–	土師器	器台 B	(18.4)	(12.5)	–	受部2/3、脚部3/4、口縁部若干	146	178	201
864	III区	SD30001	–	土師器	小型器台 A	9.7	8.8	(10.4)	口縁部3/4、底部1/2	146	178	201
865	III区	SD30001	上層	土師器	小型器台 B	(7.05)	(2.5)	–	受部のみほぼ完存	146	178	201
866	III区	SD30001	最下層	弥生土器	不明	(29.7)	(3.1)	–	口縁部1/9	146	178	201
867	III区	SD30001	最下層	土師器	鉢	16.0	9.8	–	口縁部1/5、体部～底部5/6	146	178	201
868	III区	SD30001	–	土師器	椀 B	9.15	4.7	–	完形	147	178	202
869	III区	SD30001	下層	土師器	椀 A	10.7	(6.15)	–	口縁部1/4、底部若干	147	178	202
870	III区	SD30001	上層	土師器	椀 B	12.2	6.15	–	口縁部若干欠損	147	178	202
871	III区	SD30001	–	土師器	小型丸底壷 B	12.95	5.25	–	3/4	147	178	202

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
872	III区	SD30001	上層	土師器	甕C	(13.8)	(11.6)	腹径(11.8)	口縁部・体部1/4	147	178	202
873	III区	SD30001	中層	土師器	台付鉢C	(7.7)	4.3	(3.8)	口縁部1/10、底部2/3、杯部1/4	147	178	202
874	III区	SD30001	下層	土師器	ミニチュア土器	(4.1)	3.0	2.48	口縁部若干、体部5/6、底部完	147	178	202
875	III区	SD30001	下層	土師器	ミニチュア土器	(4.5)	2.85	3.2	口縁部3/4欠損	147	178	202
876	III区	SD30004	–	弥生土器	広口壺A	(15.8)	(7.0)	–	口縁部1/4	147	178	202
877	III区	SD30004	–	弥生土器	短頸壺B	(10.4)	(5.9)	–	口縁部1/4弱、体部上半1/3弱	147	178	202
878	III区	SD30004	–	弥生土器	広口壺B	(11.9)	20.75	3.6	口縁部1/4、体部3/4、底部1/1	147	178	202
879	III区	SD30004	–	弥生土器	長頸壺	(13.6)	(19.55)	腹径(16.1)	口縁部1/12、体部1/4	147	178	202
880	III区	SD30004	–	弥生土器	長頸壺	14.55	31.1	21.2	口縁部1/3強、体部～底部若干欠損	147	178	202
881	III区	SD30004	下層	弥生土器	長頸壺	–	(6.3)	–	頸部～胴部1/4弱	147	179	203
882	III区	SD30004	–	弥生土器	短頸壺A	(9.6)	(10.7)	–	口縁部～胴部1/4	147	179	203
883	III区	SD30004	–	弥生土器	短頸壺A	(7.8)	(15.3)	–	（口縁部1/4・体部1/3）＋（口縁部1/4・体部1/3）接合せず	147	179	203
884	III区	SD30004	–	弥生土器	甕B1	(30.6)	(11.1)	–	口縁部1/4弱、体部若干	148	179	203
885	III区	SD30004	中層	弥生土器	甕B1	(18.5)	(7.9)	腹径(17.5)	口縁部1/5	148	179	203
886	III区	SD30004	–	弥生土器	甕B1	(15.1)	(5.7)	–	口縁部全周	148	179	203
887	III区	SD30004	–	弥生土器	甕B1	(15.1)	(5.6)	–	口縁部1/7	148	179	203
888	III区	SD30004	–	弥生土器	甕B2	(12.9)	(5.7)	腹径(13.0)	口縁部1/5	148	179	203
889	III区	SD30004	–	弥生土器	甕B2	(14.0)	(5.95)	腹径(11.9)	口縁部2/5、体部上半1/4	148	179	203
890	III区	SD30004	–	弥生土器	甕E	(14.4)	(3.4)	–	口縁部1/2、体部若干	148	179	203
891	III区	SD30004	–	弥生土器	鉢	(31.7)	(12.3)	腹径(35.65)	口縁部1/9	148	179	203
892	III区	SD30004	–	弥生土器	甕E1	(15.5)	26.0	(4.0)	口縁部1/4、体部1/6、底部1/2弱	148	179	203
893	III区	SD30004	–	弥生土器	甕E	(11.4)	(6.35)	–	口縁部1/6、体部若干	148	179	203
894	III区	SD30004	–	弥生土器	甕C	(20.4)	(15.85)	腹径(26.4)	口縁部1/10弱、体部1/6	148	179	203
895	III区	SD30004	–	弥生土器	甕C	(15.6)	(14.4)	–	口縁部～体部1/4	148	179	203
896	III区	SD30004	–	弥生土器	甕C	(17.8)	(7.1)	–	口縁部1/6(1/12+1/12)、体部若干	148	179	203
897	III区	SD30004	上層	弥生土器	甕C	(17.4)	(5.9)	–	口縁部1/12、体部若干	148	179	203
898	III区	SD30004	–	弥生土器	把手	–	(6.45)	–	体部のみ若干	148	180	204
899	III区	SD30004	–	弥生土器	底部	–	(6.3)	7.0	底部1/1、体部若干	148	180	204
900	III区	SD30004	中層	弥生土器	底部	–	(9.35)	(7.2)	底部1/2強、体部下半1/3	148	180	204
901	III区	SD30004	–	弥生土器	底部	–	(9.7)	3.3	底部1/1、体部若干	148	180	204
902	III区	SD30004	–	弥生土器	底部	–	(8.0)	3.2	底部1/1、体部若干	148	180	204
903	III区	SD30004	–	弥生土器	底部	–	(8.25)	2.3	底部1/1、体部若干	148	180	204
904	III区	SD30004	–	弥生土器	高杯	–	(18.0)	–	杯部1/4、脚柱部完、両端部欠損	149	180	204
905	III区	SD30004	–	弥生土器	高杯	–	(13.1)	(17.5)	底部3/4	149	180	204
906	III区	SD30004	–	弥生土器	高杯	–	(5.8)	16.2	底部3/4、脚部2/3	149	180	204
907	III区	SD30004	–	弥生土器	高杯A	(16.9)	10.4	(9.9)	口縁部1/3（端部若干）、杯部ほぼ1/1、底部1/3（端部若干）	149	180	204
908	III区	SD30004	–	弥生土器	器台	–	(14.6)	(14.0)	受部若干、脚部ほぼ1/1、底部1/4	149	180	204
909	III区	SD30004	–	弥生土器	器台	–	(11.2)	(13.3)	底部・脚部のみ3/5	149	180	204
910	III区	SD30004	–	弥生土器	台付鉢A	(9.55)	9.85	(4.7)	口縁部1/6、体部1/4、底部1/2	149	180	205
911	III区	SD30004	–	弥生土器	台付鉢B	(11.4)	(8.45)	腹径(13.6)	口縁部1/6（端部若干）、体部1/4	149	180	205
912	III区	SD30004	–	弥生土器	台付鉢	–	(6.6)	(6.6)	底部1/5、脚部完	149	180	205
913	III区	SD30004	–	弥生土器	台付鉢	–	(4.4)	(6.9)	杯部1/6、底部4/5	149	180	205
914	III区	SD30004	–	弥生土器	台付鉢	–	(3.8)	10.2	脚部のみ完存	149	180	205
915	III区	SD30004	–	弥生土器	鉢	(18.6)	(13.9)	–	口縁部～体部1/5弱	149	180	205
916	III区	SD30004	–	弥生土器	有孔鉢	–	(6.4)	(4.4)	体部1/2弱、底部ほぼ1/1	149	180	205
917	III区	SD30004	–	弥生土器	有孔鉢	–	(5.2)	0.8	底部のみ若干	149	180	205
918	III区	SD30004	–	弥生土器	蓋	(13.4)	7.2	–	口縁部若干、天井部1/3、つまみ1/2強	149	180	205
919	III区	包含層	–	須恵器	杯	(9.2)	3.05	(4.6)	1/3強	149	180	205
920	III区	包含層	–	須恵器	甕					149		205
921	III区	包含層	–	須恵器	甕	(46.0)	(5.2)	–	口縁部若干	149	180	205
922	IV区	SH40001	埋土	須恵器	無蓋高杯	13.2	(4.95)	–	口縁部3/4	150	181	206
923	IV区	SH40003	埋土	須恵器	杯	(9.05)	(3.9)	(7.3)	口縁部1/4弱	150	181	206
924	IV区	SH40004	埋土	須恵器	杯身	(12.1)	(2.95)	–	口縁部1/5	150	181	206
925	IV区	SH40004	埋土	須恵器	杯身	(11.6)	(2.5)	–	口縁部～体部若干	150	181	206
926	IV区	SH40004	埋土	韓式土器	体部	–	(3.5)	–	体部破片のみ	150	181	206
927	IV区	SH40005	竈	土師器	甕H	(15.5)	(9.6)	–	口縁部1/4強	150	181	206

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
928	Ⅳ区	SH40006	竈	土師器	高杯 J	13.8	(5.45)	–	杯部のみ	150	181	206
929	Ⅳ区	SH40007	主柱穴	須恵器	杯蓋	(12.6)	4.4	–	口縁部1/7	150	181	206
930	Ⅳ区	SH40007	埋土	須恵器	杯身	(11.0)	(3.1)	–	口縁部1/7	150	181	206
931	Ⅳ区	SH40007	埋土	須恵器	杯 A	(12.3)	4.4	–	口縁部若干、天井部ほぼ完	150	181	206
932	Ⅳ区	SH40007	埋土	土師器	甕 E2	(16.2)	(4.2)	–	口縁部1/8	150	181	206
933	Ⅳ区	SH40007	埋土	土師器	椀 B	(13.6)	(3.5)	–	口縁部1/4	150	181	206
934	Ⅳ区	SH40007	埋土	土師器	竈	–	(13.4)	–	下部若干	150	181	206
935	Ⅳ区	SH40009	埋土	須恵器	杯蓋	(10.9)	(4.45)	–	口縁部1/3	151	181	206
936	Ⅳ区	SH40009	SK40001	土師器	甕 J	(19.4)	(4.6)	–	口縁部1/4弱	151	181	206
937	Ⅳ区	SH40009	埋土	土師器	甕 G5	(18.6)	(4.3)	–	口縁部1/3	151	181	206
938	Ⅳ区	SH40009	–	土師器	甕 E2	(12.8)	(13.75)	腹径(18.8)	口縁部1/6	151	181	206
939	Ⅳ区	SH40009	竈	土師器	高杯 H2	13.9	11.0	10.15	裾部3/5欠損	151	181	207
940	Ⅳ区	SH40009	SK40001	土師器	高杯	–	(7.35)	10.05	裾部3/5	151	181	207
941	Ⅳ区	SH40009	SK40005	土師器	製塩土器	(4.5)	(2.6)	–	口縁部1/8	151	181	207
942	Ⅳ区	SH40010	床面	須恵器	有蓋高杯	(10.1)	(9.2)	9.35	口縁部3/4欠損	151	182	207
943	Ⅳ区	SH40010	竈	土師器	甕 G5	14.9	(9.0)	–	口縁部7/8	151	182	207
944	Ⅳ区	SH40010	竈	土師器	甕 G5	(16.4)	(5.7)	–	口縁部1/3	151	182	207
945	Ⅳ区	SH40010	埋土	土師器	甕 G5	(17.3)	(4.75)	–	口縁部若干、頸部1/4	151	182	207
946	Ⅳ区	SH40010	竈	土師器	高杯 I	(15.1)	11.75	(10.25)	口縁部1/4欠損、裾部3/4欠損	151	182	207
947	Ⅳ区	SH40010	床面	土師器	高杯 H2	(15.35)	11.8	9.8	口縁部2/3欠損	151	182	207
948	Ⅳ区	SH40010	竈	土師器	高杯 H2	13.15	(9.0)	–	裾部欠損	151	182	207
949	Ⅳ区	SH40010	埋土	土師器	製塩土器	(5.2)	(2.35)		口縁部若干	151	182	207
950	Ⅳ区	SH40010	埋土	土師器	製塩土器	–	(2.45)	–	体部若干	151	182	207
951	Ⅳ区	SH40011	床面	須恵器	杯蓋	(12.8)	4.3	–	口縁部1/3	152	182	208
952	Ⅳ区	SH40011	貼り床、竈	土師器	高杯 J	(15.25)	(6.8)	–	杯部のみ4/5	152	182	208
953	Ⅳ区	SH40011～SH40013	埋土	須恵器	杯身	(10.8)	5.1	–	口縁部1/4	152	182	208
954	Ⅳ区	SH40013	中央炉	須恵器	杯身	(12.2)	(2.3)	–	口縁部1/4	152	182	208
955	Ⅳ区	SH40013	埋土	須恵器	杯身	–	(1.8)	–	底部1/5	152	182	208
956	Ⅳ区	SH40013	埋土	土師器	甕 G6	(18.0)	(6.6)	–	口縁部1/4	152	182	208
957	Ⅳ区	SH40013	中央炉	土師器	甑	(24.95)	(19.45)	–	口縁部1/12	152	182	208
958	Ⅳ区	SH40014	床面	土師器	高杯 H2	(14.7)	12.8	(10.6)	口縁部3/5欠損	152	182	208
959	Ⅳ区	SH40014	床面	土師器	高杯 J	13.5	(5.75)	–	杯部のみ	152	182	208
960	Ⅳ区	SH40015	竈	土師器	甕	頸径15.3	(28.5)	腹径(29.2)	口縁部なし、体部2/3	152	183	208
961	Ⅳ区	SH40015	埋土	土師器	高杯 F	21.3	14.5	12.55	口縁部1/2欠損	152	183	209
962	Ⅳ区	SH40016	埋土	土師器	高杯 J	14.1	(5.5)	–	口縁部8/9残、脚部欠損	152	183	209
963	Ⅳ区	SH40016	SK40006	土師器	高杯 I	(13.6)	11.9	(9.5)	口縁部1/6、裾部1/7	153	183	209
964	Ⅳ区	SH40017	埋土	土師器	甕 E2	(16.5)	(7.0)	–	口縁部1/4	153	183	209
965	Ⅳ区	SH40017	埋土	土師器	甕 E2	(19.2)	(5.6)	–	口縁部1/7	153	183	209
966	Ⅳ区	SH40017	埋土	土師器	高杯 H1	(15.2)	(6.0)	–	口縁部1/2	153	183	209
967	Ⅳ区	SH40017	埋土	土師器	椀 B	(11.9)	(6.05)	–	口縁部1/3	153	183	209
968	Ⅳ区	SH40018	埋土	土師器	甕 G5	17.85	(5.7)	–	口縁部のみ	153	183	209
969	Ⅳ区	SH40018	埋土	土師器	甑	(20.1)	(9.25)	–	口縁部1/6	153	183	209
970	Ⅳ区	SH40018	床面	土師器	高杯 H2	14.1	(4.7)	–	杯部のみ	153	183	209
971	Ⅳ区	SH40018	竈	土師器	高杯 J	14.3	12.1	(9.2)	底部1/2欠損	153	183	209
972	Ⅳ区	SH40025	上層	須恵器	無蓋高杯	13.35	6.8	9.3	口縁端部1/2欠損	153	183	209
973	Ⅳ区	SD40001	–	須恵器	杯蓋	(14.0)	(2.5)	–	口縁部1/8、天井部1/2弱(つまみ欠損)	153	184	209

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
974	Ⅳ区	SD40002	－	土師器	甕Ｊ	(19.5)	(7.2)	－	口縁部1/6	153	184	209
975	Ⅳ区	SD40004	－	須恵器	杯身	9.95	5.15	－	口縁部若干欠損	154	184	209
976	Ⅳ区	SD40004	－	土師器	甕	－	(6.6)	－	頸部2/3、体部若干（端部欠損）	154	184	209
977	Ⅳ区	SD40004	－	土師器	高杯	－	(7.7)	(8.1)	底部1/9、脚部7/8	154	184	209
978	Ⅳ区	包含層	包含層	須恵器	甕	(45.9)	(13.7)	－	口縁部若干十頸部若干	154	184	209
979	Ⅳ区	包含層	包含層	須恵器	樽形𤭯	－	(15.9) 復元(20.1)	腹径(15.6)	体部1/6	154	184	209

木製品

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	樹種	厚さ（cm）	参照先		
								本文頁	図版	写真
W1	Ⅰ区	SD10001B	上層	食事具	ヘラ状木製品	スギ	1.1	154	185	210
W2	Ⅰ区	SD10001A	－	食事具	ヘラ状木製品	スギ	1.4	154	185	210
W3	Ⅰ区	SD10001A	－	食事具	ヘラ状木製品	スギ	1.05	154	185	210
W4	Ⅰ区	SD10001A	下層	食事具	ヘラ状木製品	スギ	1.15	154	185	210
W5	Ⅰ区	SD10001A	中層	食事具	ヘラ状木製品	スギ	0.95	154	185	210
W6	Ⅰ区	SD10001A		食事具	ヘラ状木製品	スギ	1.3	154	185	210
W7	Ⅰ区	SD10001A	－	食事具	ヘラ状木製品	スギ	1.5	154	185	210
W8	Ⅰ区	SD10001A	－	食事具	ヘラ状木製品	スギ	0.8	154	185	210
W9	Ⅰ区	SD10001B	－	食事具	ヘラ状木製品	スギ	1.35	154	185	210
W10	Ⅰ区	SD10001A	－	容器	槽	ヒノキ	5.6	154	186	210
W11	Ⅰ区	SD10001	－	容器	槽	スギ	6.5	154	186	210
W12	Ⅰ区	SD10001A	－	容器	箱？	スギ	0.6	154	186	210
W13	Ⅰ区	SD10001A	－	雑具	腰掛	スギ	2.2	154	187	211
W14	Ⅰ区	SD10001A	－	雑具	腰掛	スギ	2.1	154	187	211
W15	Ⅰ区	SD10001A	－		火鑽臼	スギ	1.55	154	187	211
W16	Ⅰ区	SD10001	－	容器	栓	スギ	2.4	154	187	211
W17	Ⅰ区	SD10001	－	容器	栓	スギ	1.7	154	187	211
W18	Ⅰ区	SD10001A	上層	部材	部材	スギ	3.7	154	188	211
W19	Ⅰ区	SD10001A	－	部材	部材	スギ	2.0	154	188	211
W20	Ⅰ区	SD10001A	下層	部材	部材	スギ	0.8	154	188	211
W21	Ⅰ区	SD10001	－	部材	部材	スギ	1.05	154	188	211
W22	Ⅰ区	SD10001・ SD10002	－	部材	部材	スギ	2.8	154	188	211
W23	Ⅰ区	SD10003	－	部材	部材	スギ	3.2	154	188	211
W24	Ⅰ区	SD10001A	－	部材	部材	スギ	2.45	155	188	211
W25	Ⅰ区	SD10001	－	部材	部材	トネリコ属	2.2	155	188	211
W26	Ⅰ区	SD10001A	－	部材	部材	スギ	4.35	155	188	211
W27	Ⅰ区	SD10001A	－	部材	部材	スギ	2.1	155	188	211
W28	Ⅰ区	SD10001	－	部材	部材	スギ	2.6	155	189	212
W29	Ⅰ区	SD10001	－	部材	部材	スギ	2.5	155	189	212
W30	Ⅰ区	SD10001	－	部材	部材	スギ	1.9	155	189	212
W31	Ⅰ区	SD10001B	－	部材	部材	スギ	2.9	155	190	212
W32	Ⅰ区	SD10001A	下層	部材	部材	スギ	2.4	155	190	212
W33	Ⅰ区	SD10001	－	部材	部材	スギ	0.6	155	190	212
W34	Ⅰ区	SD10001A	－	建築部材	梯子	ヒノキ	5.6	155	191	213
W35	Ⅰ区	SD10001A	－	建築部材	柱材	トチノキ	11.8	155	191	213
W36	Ⅰ区	SD10001A	－	建築部材	部材	スギ	6.2	155	191	213
W37	Ⅰ区	SD10001A	－	建築部材	杭	スギ	2.4	155	192	213
W38	Ⅰ区	SD10001	－	建築部材	杭		2.5	155	192	213
W39	Ⅰ区	SD10001A		建築部材	杭	スギ	3.2	155	192	214
W40	Ⅰ区	SD10001A	－	建築部材	杭	スギ	2.7	155	192	214
W41	Ⅰ区	SD10001	－	建築部材	杭	スギ	3.8	155	193	214
W42	Ⅰ区	SD10001	－	建築部材	杭	スギ	3.3	155	193	214
W43	Ⅰ区	SD10001A		建築部材	杭	スギ	3.0	155	193	214
W44	Ⅰ区	SD10001A	－	建築部材	杭	スギ	4.18	155	193	214
W45	Ⅰ区	SD10001	－	部材	板材	スギ	2.6	155	194	214
W46	Ⅰ区	SD10001A	－	部材	板材	スギ	1.6	155	194	215
W47	Ⅰ区	SD10001	－	部材	板材	スギ	1.6	155	194	215
W48	Ⅰ区	SD10001A	－	部材	板材	スギ	1.5	155		215

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			残存状況	参照先		
						口径	器高	底径		本文頁	図版	写真
W49	Ⅰ区	SD10001	－	部材	板材		スギ		3.5	155		216
W50	Ⅰ区	SD10001A	－	部材	板材		スギ		3.0	155		216
W51	Ⅰ区	SD10001A	－	部材	板材		スギ		1.5	155		216

石製品

遺物番号	地区	出土遺構		層位	器種	石材	法量（cm）		残存状況	参照先		
							長さ	幅		本文頁	図版	写真
S1	Ⅳ区	包含層		－	石核	安山岩	16.15	12.28		155	195	217
S2	Ⅱ区	包含層		－	削器	安山岩	11.18	3.90	端部片側欠損	155	195	217
S3	Ⅱ区	SH20027		埋土	打製石斧	安山岩	8.23	3.67		155	195	217
S4	Ⅲ区	SH30006		埋土	磨石	凝灰岩	11.2	8.95	ほぼ完形	155	195	217
S5	Ⅱ区	SH20022		床面	砥石		11.9	3.9		155	196	218
S6	Ⅳ区	SH40010		床面	砥石	砂岩	9.65	4.7	両端部欠損	155	196	218
S7	Ⅲ区	SH30003		床面	砥石	砂岩	22.6	7.1	端部一部欠損　片面一部欠損	156	196	218
S8	Ⅱ区	包含層		－	砥石	珪化木	9.45	5.95	使用面2面以外は剥離	156	196	218
S9	Ⅲ区	SD30001		上面	勾玉	滑石	4.15	2.75	片面先端部一部欠損	156	197	218
S10	Ⅰ区	SD10001		－	臼玉	滑石	厚み1.25mm	4.0mm	完形	156	197	218
S11	Ⅲ区	SD30001		－	不明		25.05	24.55	側面全周が残存	156	197	218

金属製品

遺物番号	地区	出土遺構	層位	種類	器種	法量（cm）			参照先		
						長さ	幅	厚さ	本文頁	図版	写真
M1	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	刀	33.45	2.7	0.75	156	198	219
M2	Ⅱ区	確認トレンチ	－	鉄製品	刀子	9.85	2.3	0.55	156	198	219
M3	Ⅳ区	SH40007	埋土	鉄製品	刀子	5.5	1.5	1.25	156	198	219
M4	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	刀子	4.4	1.05	0.3	156	198	219
M5	Ⅲ区	SH30014	埋土	鉄製品	刀子	2.53	0.9	0.4	156	198	219
M6	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	鉄鏃	10.65	3.15	0.35	156	198	219
M7	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	鉄鏃	6.95	2.2	0.35	156	198	219
M8	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	鉄鏃	5.9	0.65	0.4	156	198	219
M9	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	鉄鏃	5.55	0.75	0.48	156	198	219
M10	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	鉄鏃	4.85	0.7	0.45	156	198	219
M11	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	不明	5.0	2.2	0.3	156	198	219
M12	Ⅱ区	SH20001	埋土	鉄製品	不明	6.05	2.0	0.2	156	198	219
M13	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	不明	4.25	2.2	0.35	156	198	219
M14	Ⅲ区	SD30001	－	鉄製品	不明	3.85	1.85	0.25	156	198	219
M15	Ⅱ区	SH20011	埋土	鉄製品	不明	6.65	1.5	1.4	156	198	219
M16	Ⅲ区	SH30006	埋土	鉄滓	椀形滓	4.3	3.6	1.6	156	198	219

報告書抄録

ふりがな	かきつぼいせき
書名	柿坪遺跡
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第336冊
編著者名	吉識雅仁　池田征宏
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500番地　TEL　079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番1号　TEL　078-341-7711
発行年月日	2008年（平成20年）3月10日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
柿坪遺跡	兵庫県朝来市山東町大月	28225	19990005 19990216 2000241 2002124 2002219	35度18分20秒	134度53分7秒	平成11年５月21日～平成15年１月23日	14,236㎡	一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物	特記事項
柿坪遺跡	居館・集落遺跡	古墳時代	大型掘立柱建物跡・掘立柱建物・竪穴住居跡・土壙・溝・柱穴	土師器・須恵器・金属製品・石製品・木製品	古墳時代全般を中心とする大規模な集落遺跡であり、その内には、古墳時代中期前半から中半にかけての大型掘立柱建物で構成される首長居館の一画が形成されていた。

兵庫県文化財調査報告　第 336 冊

柿 坪 遺 跡

—本 文 編—

一般国道 483 号北近畿自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 20 年 3 月 10 日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中 500
TEL　079-437-5589
発　行　兵庫県教育委員会
〒 650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目 10 番１号
印　刷　交友印刷株式会社
〒 650-0047　神戸市中央区港島南町５丁目 4－5